一般国道10号

宇佐道路埋蔵文化財発掘調査報告書(3)

横　山　遺　跡

尾　畑　遺　跡

１９９５年

大分県教育委員会

序

大分県教育委員会では、昭和61年から国道10号線宇佐道路建設に伴う埋蔵文化財の調査を実施してきましたが、当該路線内に所在する埋蔵文化財は、考古学上重要なものが多く、国民の共有財産として十分に保護措置が図られるべきものであります。

このような観点から道路建設の計画段階から協議を重ね、できる限り遺跡保存の方向をとってきましたが、路線内にかかる遺跡については、やむを得ず発掘調査を実施してきたところであります。

発掘調査の結果につきましては、埋蔵文化財の記録保存のため、順次報告書を刊行しております。

今年度は報告書刊行の３年目にあたり、横山遺跡・尾畑遺跡について報告します。本報告では、縄文時代の住居跡、遺物包含層、弥生時代の集落、奈良時代の建物群などの遺構、縄文時代の土偶や奈良時代の和同開寳などを含む各時代の貴重な遺物を掲載しております。これらは、当時の生活や社会の背景を知る上で重要な資料となるものであり、本書が歴史遺産に対する理解を深める資料としてはもとより、学術資料として広く活用されることを望む次第です。

最後に、発掘調査から報告書刊行にいたるまでご指導いただきました方々をはじめ、調査にご協力いただきました関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成７年３月

大分県教育委員会
教育長　帯　刀　将　人

例　　言

1　本書は一般国道10号宇佐道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、建設省九州地方建設局大分工事事務所の委託事業として大分県教育委員会が実施した。

3　本書の執筆者は次のとおりである。

第1、2、4章、第3章第1節・第2節1、2、3、4、6	小林　昭彦
第3章第2節	
2　南Ⅰ区の調査	
縄文時代の遺構と遺物	坂本嘉弘・牧尾義則
5　北Ⅱ区の調査	
縄文時代の包含層と遺物	
土　器	宮内　克己
土　偶	〃
西部包含層出土土器	坂本　嘉弘
石　器	牧尾　義則
奈良時代の遺構と遺物	小林　昭彦

4　遺物の実測、トレース、写真撮影などの作業は、牧尾・坂本・宮内・小林ほかが行った。ただ北地区包含層（西部包含層を除く）出土縄文土器については後藤晃一ほかが実測を行い、これを宮内が補足・編集した。

5　本書の編集は、小林が行った。また弥生土器の観察・所見については高橋　徹氏の指導と協力を受け、近世土器については小柳和宏氏の教示を得た。

目　　次

第１章　調査の概要 …… 1

1　調査に至る経過 …… 1

2　調査の組織 …… 1

3　調査の経過 …… 3

第２章　調査遺跡の立地と歴史的環境 …… 4

第３章　各遺跡の調査 …… 7

第１節　横山遺跡 …… 7

1　調査の概要 …… 7

2　南地区の調査 …… 7

遺構と遺物 …… 7

3　北地区の調査 …… 11

遺構と遺物 …… 11

第２節　尾畑遺跡 …… 19

1　調査の概要 …… 19

2　南Ⅰ区の調査 …… 19

縄文時代の遺構と遺物 …… 21

弥生時代の遺構と遺物 …… 53

奈良時代の遺構と遺物 …… 79

3　南Ⅱ区の調査 …… 92

4　北Ⅰ区の調査 …… 102

5　北Ⅱ区の調査 …… 107

縄文時代の包含層と遺物 …… 109

奈良時代の遺構と遺物 …… 225

6　北Ⅲ区の調査 …… 229

第４章　ま　と　め …… 247

尾畑遺跡の掘立柱建物群について …… 247

挿図目次

第１図　宇佐道路路線内遺跡分布図 …… 5
第２図　宇佐道路周辺遺跡分布図 …… 6
第３図　横山遺跡・尾畑遺跡位置図 …… 8
第４図　横山遺跡南地区遺構分布図 …… 9
第５図　横山遺跡南地区遺構実測図（１） …… 10
第６図　横山遺跡南地区遺構実測図（２） …… 11
第７図　横山遺跡北地区遺構分布図 …… 13
第８図　横山遺跡北地区１号竪穴実測図 …… 14
第９図　横山遺跡北地区２号竪穴実測図 …… 15
第10図　横山遺跡北地区貯蔵穴１、２実測図 …… 16
第11図　横山遺跡北地区土坑実測図 …… 17
第12図　横山遺跡出土遺物実測図 …… 18
第13図　尾畑遺跡南Ｉ区遺構分布図・土層断面図 …… 20
第14図　尾畑遺跡南Ｉ区１号竪穴実測図 …… 21
第15図　尾畑遺跡南Ｉ区１号竪穴出土同推協実測図 …… 23
第16図　尾畑遺跡南Ｉ区包含層出土縄文土器実測図（１） …… 32
第17図　尾畑遺跡南Ｉ区包含層出土縄文土器実測図（２） …… 33
第18図　尾畑遺跡南Ｉ区包含層出土縄文土器実測図（３） …… 34
第19図　尾畑遺跡南Ｉ区包含層出土縄文土器実測図（４） …… 35
第20図　尾畑遺跡南Ｉ区包含層出土縄文土器実測図（５） …… 36
第21図　尾畑遺跡南Ｉ区包含層出土縄文土器実測図（６） …… 37
第22図　尾畑遺跡南Ｉ区包含層出土縄文土器実測図（７） …… 38
第23図　尾畑遺跡南Ｉ区包含層出土縄文土器実測図（８） …… 39
第24図　尾畑遺跡南Ｉ区包含層出土縄文土器実測図（９） …… 40
第25図　尾畑遺跡南Ｉ区包含層出土縄文土器実測図（10） …… 41
第26図　尾畑遺跡南Ｉ区包含層出土縄文土器実測図（11） …… 42
第27図　尾畑遺跡南Ｉ区包含層出土縄文土器実測図（12） …… 43
第28図　尾畑遺跡南Ｉ区包含層出土縄文土器実測図（13） …… 44
第29図　尾畑遺跡南Ｉ区包含層出土縄文土器実測図（14） …… 45
第30図　尾畑遺跡南Ｉ区包含層出土縄文土器実測図（15） …… 46

第31図　尾畑遺跡南Ⅰ区包含層出土縄文土器実測図（16）…… 47
第32図　尾畑遺跡南Ⅰ区６号竪穴出土土磨製石包丁実測図 …… 48
第33図　尾畑遺跡南Ⅰ区出土石器実測図（１）…… 48
第34図　尾畑遺跡南Ⅰ区出土石器実測図（２）…… 49
第35図　尾畑遺跡南Ⅰ区出土石器実測図（３）…… 50
第36図　尾畑遺跡南Ⅰ区出土石器実測図（４）…… 51
第37図　尾畑遺跡南Ⅰ区２号竪穴実測図（１）…… 54
第38図　尾畑遺跡南Ⅰ区２号竪穴実測図（２）…… 55
第39図　尾畑遺跡南Ⅰ区２号竪穴出土遺物実測図 …… 56
第40図　尾畑遺跡南Ⅰ区３号竪穴実測図 …… 58
第41図　尾畑遺跡南Ⅰ区４号竪穴実測図 …… 60
第42図　尾畑遺跡南Ⅰ区５号竪穴出土遺物実測図 …… 61
第43図　尾畑遺跡南Ⅰ区３、４、５号竪穴実測図 …… 62
第44図　尾畑遺跡南Ⅰ区６号竪穴実測図 …… 65
第45図　尾畑遺跡南Ⅰ区３６竪穴出土遺物実測図（１）…… 66
第46図　尾畑遺跡南Ⅰ区３６竪穴出土遺物実測図（２）…… 67
第47図　尾畑遺跡南Ⅰ区土坑実測図（１）…… 72
第48図　尾畑遺跡南Ⅰ区土坑実測図（２）…… 73
第49図　尾畑遺跡南Ⅰ区土坑実測図（３）…… 74
第50図　尾畑遺跡南Ⅰ区土坑実測図（４）…… 75
第51図　尾畑遺跡南Ⅰ区土坑出土遺物実測図（１）…… 76
第52図　尾畑遺跡南Ⅰ区土坑出土遺物実測図（２）…… 77
第53図　尾畑遺跡南Ⅰ区出土遺物土製品実測図 …… 78
第54図　尾畑遺跡南Ⅰ区建物実測図（１） …… 83
第55図　尾畑遺跡南Ⅰ区建物実測図（２）…… 84
第56図　尾畑遺跡南Ⅰ区建物実測図（３）…… 85
第57図　尾畑遺跡南Ⅰ区建物実測図（４）…… 86
第58図　尾畑遺跡南Ⅰ区建物実測図（５）…… 87
第59図　尾畑遺跡南Ⅰ区建物実測図（６）…… 88
第60図　尾畑遺跡南Ⅰ区建物実測図（７）…… 89
第61図　尾畑遺跡南Ⅰ区建物実測図（８）…… 90
第62図　尾畑遺跡南Ⅱ区遺構分布図、建物１実測図 …… 91
第63図　尾畑遺跡南Ⅰ区出土須恵器実測図（１） …… 94

第64図　尾畑遺跡南Ⅰ区出土須恵器実測図（２）…… 95
第65図　尾畑遺跡南Ⅰ区出土須恵器実測図（３）…… 96
第66図　尾畑遺跡南Ⅰ区出土土師器実測図（１）…… 100
第67図　尾畑遺跡南Ⅰ区出土土師器実測図（２）…… 101
第68図　尾畑遺跡北Ⅰ区遺構分布図…… 103
第69図　尾畑遺跡北Ⅰ区土坑実測図（１）…… 104
第70図　尾畑遺跡北Ⅰ区土坑実測図（２）…… 105
第71図　尾畑遺跡北Ⅱ区土層１、２…… 107
第72図　尾畑遺跡北Ⅱ区遺構分布図…… 108
第73図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土精製土器分類図…… 111
第74図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土出土粗製土器分類図…… 115
第75図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（１）…… 117
第76図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（２）…… 118
第77図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（３）…… 119
第78図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（４）…… 120
第79図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（５）…… 121
第80図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（６）…… 122
第81図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（７）…… 123
第82図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（８）…… 124
第83図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（９）…… 125
第84図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（10）…… 126
第85図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（11）…… 127
第86図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（12）…… 128
第87図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（13）…… 129
第88図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（14）…… 130
第89図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（15）…… 131
第90図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（16）…… 132
第91図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（17）…… 133
第92図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（18）…… 134
第93図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（19）…… 135
第94図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（20）…… 136
第95図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（21）…… 137
第96図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（22）…… 138

第97図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（23）…… 139
第98図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（24）…… 140
第99図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（25）…… 141
第100図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（26）…… 142
第101図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（27）…… 143
第102図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（28）…… 144
第103図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（29）…… 145
第104図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（30）…… 146
第105図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（31）…… 147
第106図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（32）…… 148
第107図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（33）…… 149
第108図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（34）…… 147
第109図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（35）…… 151
第110図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（36）…… 153
第111図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（37）…… 154
第112図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（38）…… 15
第113図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（39）…… 156
第114図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（40）…… 157
第115図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（41）…… 158
第116図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（42）…… 159
第117図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（43）…… 161
第118図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土土偶分布図 …… 163
第119図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土土偶実測図（１）…… 164
第120図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土土偶実測図（２）…… 165
第121図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土土偶実測図（３）…… 166
第122図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土土偶実測図（４）…… 167
第123図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土土偶・土製品実測図 …… 168
第124図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土土製品実測図 …… 169
第125図　尾畑遺跡北Ⅱ区西部包含層出土縄文土器実測図（１）…… 172
第126図　尾畑遺跡北Ⅱ区西部包含層出土縄文土器実測図（２）…… 173
第127図　尾畑遺跡北Ⅱ区西部包含層出土縄文土器実測図（３）…… 174
第128図　姫島産黒曜石石刻出土分布図 …… 176
第129図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土磨製石斧出土分布状況 …… 176

第130図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土扁平打製石斧出土分布状況 …… 176
第131図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土円形石器出土分布状況 …… 176
第132図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土石鏃分類図 …… 177
第133図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土扁平打製石器分類図 …… 180
第134図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土石鏃（その１） …… 181
第135図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土石鏃（その２） …… 182
第136図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土石鏃（その３） …… 183
第137図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土尖頭状石器（その１） …… 184
第138図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土尖頭状石器（その２） …… 185
第139図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土石錐・異形石器・掻器等 …… 186
第140図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土掻器・石匙等 …… 187
第141図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土掻器・二次加工・剥片等 …… 188
第142図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土石刻（その１） …… 189
第143図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土石刻（その２） …… 190
第144図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土磨製石斧（その１） …… 191
第145図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土磨製石斧（その２） …… 192
第146図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土磨製石斧（その３） …… 193
第147図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土片平打製石斧（その１） …… 194
第148図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土片平打製石斧（その２） …… 195
第149図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土片平打製石斧（その３） …… 196
第150図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土片平打製石斧（その４） …… 197
第151図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土片平打製石斧（その５） …… 198
第152図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土片平打製石斧（その６） …… 199
第153図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土片平打製石斧（その７） …… 200
第154図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土片平打製石斧（その８） …… 201
第155図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土円形石器（その１） …… 202
第156図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土円形石器（その２） …… 203
第157図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土円形石器・不明石器 …… 204
第158図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土砥石（その１） …… 205
第159図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土砥石（その２） …… 206
第160図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土磨石 …… 207
第161図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土敲石・凹石 …… 208
第162図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土磨石・敲石・凹石 …… 209

第163図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土礫石錘（その１）…… 210
第164図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土礫石錘（その２）…… 211
第165図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土礫石錘（その３）…… 212
第166図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土礫石錘（その４）…… 213
第167図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土石錘出土分布状況 …… 214
第168図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土十字形石器実測図 …… 215
第169図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土石刀・石棒実測図 …… 215
第170図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土玉類実測図 …… 216
第171図　県内縄文時代後期・晩期扁平打製石斧変遷図 …… 223
第172図　縄文時代後期前葉～中葉に特徴的な石斧類 …… 224
第173図　尾畑遺跡北Ⅱ区溝土層断面図 …… 226
第174図　尾畑遺跡北Ⅱ区溝4遺物出土状態実測図 …… 226
第175図　尾畑遺跡北Ⅱ区土坑実測図 …… 228
第176図　尾畑遺跡北Ⅲ区遺構分布図 …… 230
第177図　尾畑遺跡北Ⅲ区土坑実測図（１）…… 231
第178図　尾畑遺跡北Ⅲ区土坑実測図（２）…… 232
第179図　尾畑遺跡北Ⅲ区溝土層断面図 …… 233
第180図　尾畑遺跡北Ⅱ、Ⅲ区溝相関図 …… 234
第181図　尾畑遺跡北Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ区出土遺物実測図 …… 237
第182図　尾畑遺跡北Ⅲ区土坑３出土遺物実測図 …… 238
第183図　尾畑遺跡北Ⅲ区土坑５出土遺物実測図 …… 239
第184図　尾畑遺跡南Ⅰ区掘立柱建物群変遷図 …… 248
第185図　尾畑遺跡南Ⅰ区掘立柱建物主軸方位図 …… 249

写真図版

図版１　横山遺跡全景（カラー）
図版２　尾畑遺跡南地区遠景（カラー）
図版３　尾畑遺跡北地区遠景（カラー）
図版４　尾畑遺跡北地区（カラー）
図版５　土偶１（カラー）
図版６　土偶２（カラー）
図版７　土偶・土版（カラー）
図版８　尾畑遺跡南・北地区出土遺物（カラー）
図版９　横山遺跡（１）
図版10　横山遺跡（２）
図版11　横山遺跡（３）
図版12　横山遺跡（４）
図版13　尾畑遺跡南Ⅰ区（１）
図版14　尾畑遺跡南Ⅰ区（２）
図版15　尾畑遺跡南Ⅰ区（３）
図版16　尾畑遺跡南Ⅰ区（４）
図版17　尾畑遺跡南Ⅰ区（５）
図版18　尾畑遺跡南Ⅰ区（６）
図版19　尾畑遺跡南Ⅰ区（７）
図版20　尾畑遺跡南Ⅰ区（８）
図版21　尾畑遺跡北Ⅰ区（１）
図版22　尾畑遺跡北Ⅰ区（２）
図版23　尾畑遺跡北Ⅱ区（１）
図版24　尾畑遺跡北Ⅱ区（２）
図版25　尾畑遺跡北Ⅱ区（３）
図版26　尾畑遺跡北Ⅱ区（４）
図版27　尾畑遺跡北Ⅱ区（５）
図版28　尾畑遺跡北Ⅱ区（６）

図版29　尾畑遺跡北Ⅲ区（１）
図版30　尾畑遺跡北Ⅲ区（２）
図版31　尾畑遺跡北Ⅲ区（３）
図版32　尾畑遺跡北Ⅲ区（４）
図版33　横山遺跡出土遺物
図版34　尾畑遺跡南Ⅰ区出土遺物（１）
図版35　尾畑遺跡南Ⅰ区出土遺物（２）
図版36　尾畑遺跡南Ⅰ区出土遺物（３）
図版37　尾畑遺跡南Ⅰ区出土遺物（４）
図版38　尾畑遺跡南Ⅰ区出土遺物（５）
図版39　尾畑遺跡南Ⅰ区出土遺物（６）
図版40　尾畑遺跡南Ⅰ区出土遺物（７）
図版41　尾畑遺跡南Ⅰ区出土遺物（８）
図版42　尾畑遺跡南Ⅰ区出土遺物（９）
図版43　尾畑遺跡南Ⅰ区出土遺物（10）
図版44　尾畑遺跡南Ⅰ区出土遺物（11）
図版45　尾畑遺跡南Ⅰ区出土遺物（12）
図版46　尾畑遺跡南Ⅰ区出土遺物（13）
図版47　尾畑遺跡南Ⅰ区出土遺物（14）
図版48　尾畑遺跡南Ⅰ区出土遺物（15）
図版49　尾畑遺跡南Ⅰ区出土遺物（16）
図版50　尾畑遺跡南Ⅰ区出土遺物（17）
図版51　尾畑遺跡南Ⅰ区出土遺物（18）
図版52　尾畑遺跡北Ⅱ区出土遺物（１）
図版53　尾畑遺跡北Ⅱ区出土遺物（２）
図版54　尾畑遺跡北Ⅱ区出土遺物（３）
図版55　尾畑遺跡北Ⅱ区出土遺物（４）
図版56　尾畑遺跡北Ⅱ区出土遺物（５）
図版57　尾畑遺跡北Ⅱ区出土遺物（６）
図版58　尾畑遺跡北Ⅱ区出土遺物（７）
図版59　尾畑遺跡北Ⅱ区出土遺物（８）
図版60　尾畑遺跡北Ⅱ区出土遺物（９）
図版61　尾畑遺跡北Ⅱ区出土遺物（10）

図版62　尾畑遺跡北Ⅱ区出土遺物（11）
図版63　尾畑遺跡北Ⅱ区出土遺物（12）
図版64　尾畑遺跡北Ⅱ区出土遺物（13）
図版65　尾畑遺跡北Ⅱ区出土遺物（14）
図版66　尾畑遺跡北Ⅱ区出土遺物（15）
図版67　尾畑遺跡北Ⅱ区出土遺物（16）
図版68　尾畑遺跡北Ⅱ区出土遺物（17）
図版69　尾畑遺跡北Ⅱ区出土遺物（18）
図版70　尾畑遺跡北Ⅱ区出土遺物（19）
図版71　尾畑遺跡北Ⅱ区出土遺物（20）
図版72　尾畑遺跡北Ⅱ区出土遺物（21）
図版73　尾畑遺跡北Ⅱ区出土遺物（22）
図版74　尾畑遺跡北Ⅱ区出土遺物（23）
図版75　尾畑遺跡北Ⅱ区出土遺物（24）
図版76　尾畑遺跡北Ⅱ区出土遺物（25）
図版77　尾畑遺跡北Ⅱ区出土遺物（26）
図版78　尾畑遺跡北地区出土遺物

表　目　次

表１　尾畑遺跡南Ⅰ区出土石器観察表 …… 52
表２　石刻重量分布 …… 178
表３　磨製石斧残存状況 …… 178
表４　打製石斧残存状況 …… 178
表５　石錘重量分布 …… 214
表６　尾畑遺跡北Ⅱ区出土石錘観察表 …… 214
表７　尾畑遺跡北Ⅱ区玉類観察表 …… 216
表８　尾畑遺跡北Ⅱ区出土石器観察表 …… 217
表９　尾畑遺跡出土須恵器観察表 …… 240
表10　尾畑遺跡出土土師器観察表 …… 244
表11　尾畑遺跡南Ⅰ区掘立柱建物一覧表 …… 249

第 1 章　調 査 の 概 要

1　調査に至る経過

宇佐道路建設に伴う埋蔵文化財の調査は、北九州市から大分市に至る北大バイパス路線のうち宇佐市笠松から宇佐市山本までの間を対象としたものである。宇佐道路は中津バイパスから続く高規格道路で、さらに宇佐別府道路と接続し九州横断自動車道と合流する。宇佐道路建設に伴う調査は、昭和62年度から開始し、平成５年度にすべてを終了した。

本報告の横山遺跡・尾畑遺跡の調査は、昭和62年度～平成元年度の３ヵ年にわたり実施したものである。

遺跡の分布状況については、市域に濃密な広がりをみることが従来より良く知られている。地形的には駅館川流域の河岸段丘、市南部の丘陵、平野部の微高地など特定の立地条件を限定しない。様々な地形に展開された生活の営みは、集落、窯業生産跡、墓地、水利関連施設など具体的な内容を伴って多く発見されている。このように宇佐市は県内有数の遺跡集中地域であることが周知されていた。「宇佐道路」の建設予定地内における事前の遺跡分布調査では路線全長５㎞間に11遺跡（のちに10遺跡に統合）が確認され、当初よりその十全な対応が望まれていた。

2　調査の組織

昭和62年度

調査委員　賀川　光夫（大分県文化財保護審議会委員・別府大学教授）
小田富士雄（大分県文化財保護審議会委員・福岡大学教授）
石野　博信（奈良県立橿原考古学研究所副所長）
時枝　克安（島根大学助教授）
三辻　利一（奈良教育大学教授）
後藤　昭六（大分県教育庁文化課長）
後藤　宗俊（　同　主幹）

調査主任　渋谷　忠章（文化課埋蔵文化財第２係長）

調　査　員　西　哲弘（県文化課主任）、小林　昭彦（同　主事）、松本　康弘（同　主事）、友岡　信彦（同　嘱託）、後藤　晃一（同　嘱託）、永松みゆき（同

嘱託)、吉武　牧子（同　嘱託)、小倉　正五（宇佐市教育委員会社会教育課文化財係技師)、乙咩　政巳（同　主事)、林　一也（同技師)、佐藤良二郎（同技師）

昭和63年度

調査委員　賀川　光夫（大分県文化財保護審議会委員・別府大学教授）
小田富士雄（大分県文化財保護審議会委員・福岡大学教授）
三辻　利一（奈良教育大学教授）
橘　　昌信（別府大学教授）
小代　基雍（大分県教育庁管理部文化課長）
後藤　宗俊（　同　課長補佐）

調査主任　渋谷　忠章（文化課埋蔵文化財第2係長）

調　査　員　高橋　徹（埋蔵文化財第2係主査)、村上　久和（同　主任)、西　哲弘（同主任)、小林　昭彦（同　主任)、友岡　信彦（同　主事)、吉田　寛（同主事)、後藤　晃一（同　主事)、山田　拓伸（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館)、永松みゆき（同　嘱託)、吉武　牧子（同　嘱託)、小倉　正五（宇佐市教育委員会社会教育課文化財係技師)、乙咩　政巳（同　主事)、林　一也（同技師)、佐藤良二郎（同技師）

平成元年度

調査委員　賀川　光夫（県文化財保護審議会委員・別府大学教授）
小田富士雄（北九州市立考古博物館長・福岡大学教授）
潮見　　浩（広島大学教授）
水野　正好（奈良大学教授）
後藤　正二（大分県教育庁管理部文化課長）
後藤　宗俊（同　課長補佐）

調査主任　渋谷　忠章（文化課埋蔵文化財第2係長）

調　査　員　高橋　徹（埋蔵文化財第2係主査)、村上　久和（同　主任)、西　哲弘（同主任)、小林　昭彦（同　主任)、友岡　信彦（同　主事)、松本　康弘（同主事)、吉田　寛（同　主事)、後藤　晃一（同　主事)、永松みゆき（同嘱託)、吉武　牧子（同　嘱託)、今泉　正子（同　嘱託）

上記の他に、次の方々には現地指導及び有益なご助言をいただいた。記して謝意を表したい。
池上　悟（立正大学)、佐藤　興治（元　大分市立歴史資料館長)、玉永　光洋（元　大分市

立歴史資料館学芸係長、現　大分県教育庁文化課主査)、甲斐　忠彦（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館学芸課長)、真野　和夫（同　調査課長)、後藤　一重（同研究員）

（敬称略）

3　調査の経過

発掘調査は既述の調査組織の編成下で行った。以下、年次ごとに該当遺跡の調査経過を示す。

昭和62年度調査

尾畑遺跡では試掘調査を実施し、南地区、北Ⅰ地区の一部について本調査を行った。南地区では、縄文後期の竪穴住居跡、弥生前期の土坑、後期後半〜終末期の竪穴住居跡、奈良時代の建物群を検出した。

昭和63年度調査

本年は尾畑遺跡南地区の継続調査、北Ⅰ・Ⅱ地区の本調査を実施した。南地区では西部整地層の調査・除去後、多くの掘立柱建物跡、土坑、溝などを検出できた。北Ⅰ・Ⅱ地区には縄文後期〜晩期の遺物包含層が濃密に広がっており、この範囲の調査を実施した。これ以外に弥生時代の土坑、奈良時代の溝などを検出した。

平成元年度

本年度は横山遺跡の調査を開始し、尾畑遺跡北Ⅱ区の継続調査、北Ⅲ区の調査を行った。横山遺跡の立地する丘陵は伊呂波川に開析され独立丘陵状となっている。調査は丘陵上部（北地区）と南部低地（南地区）に分けて行った。北地区では、弥生前期の竪穴住居跡、貯蔵穴、ピットや中世の溝などであった。南地区では近世の掘立柱建物跡、井戸、火葬墓、ピットなどを検出した。

調査は共に本年度で終了した。

第 2 章　調査遺跡の立地と歴史的環境

遺跡の所在する宇佐市は、東を豊後高田市・山香町、西を中津市・三光村、南を院内町・安心院町に囲まれ、北は周防灘に面している。海岸部より広大な沖積平野が広がり、丘陵は耶馬渓溶岩流で形成された山系の一部をなす。この山系から派生する多くの河川が地形をつくりながら海へ注ぐ。主要な河川は市東部の駅館川でこれに次ぐものとして西部の伊呂波川がある。調査を実施した横山遺跡、尾畑遺跡は伊呂波川中流、左岸の段丘、低丘陵に位置する。

この周辺の遺跡について時代別に概観したい。

旧石器時代では、既報告の桐ヶ迫遺跡や峯添遺跡など丘陵上に旧石器の散布、同時期の遺構が僅少ながら認められる。また同一丘陵上に位置する正布ヶ迫遺跡において旧石器の散布が確認されている。周辺では、南部の小倉池や小菊池周辺に石器の散布がみられ、四日市台地上に旧石器の遺跡が広がっているものと考えられる。

縄文時代の遺跡は、本報告の尾畑遺跡に後期の竪穴住居跡、後期〜晩期の遺物包含層の形成がみられる。調査によって当該期の多量な土器、石器類、土偶などが検出されている。近辺では、西部の五十石川右岸に後期初頭の良好な資料が検出された西和田貝塚がある。

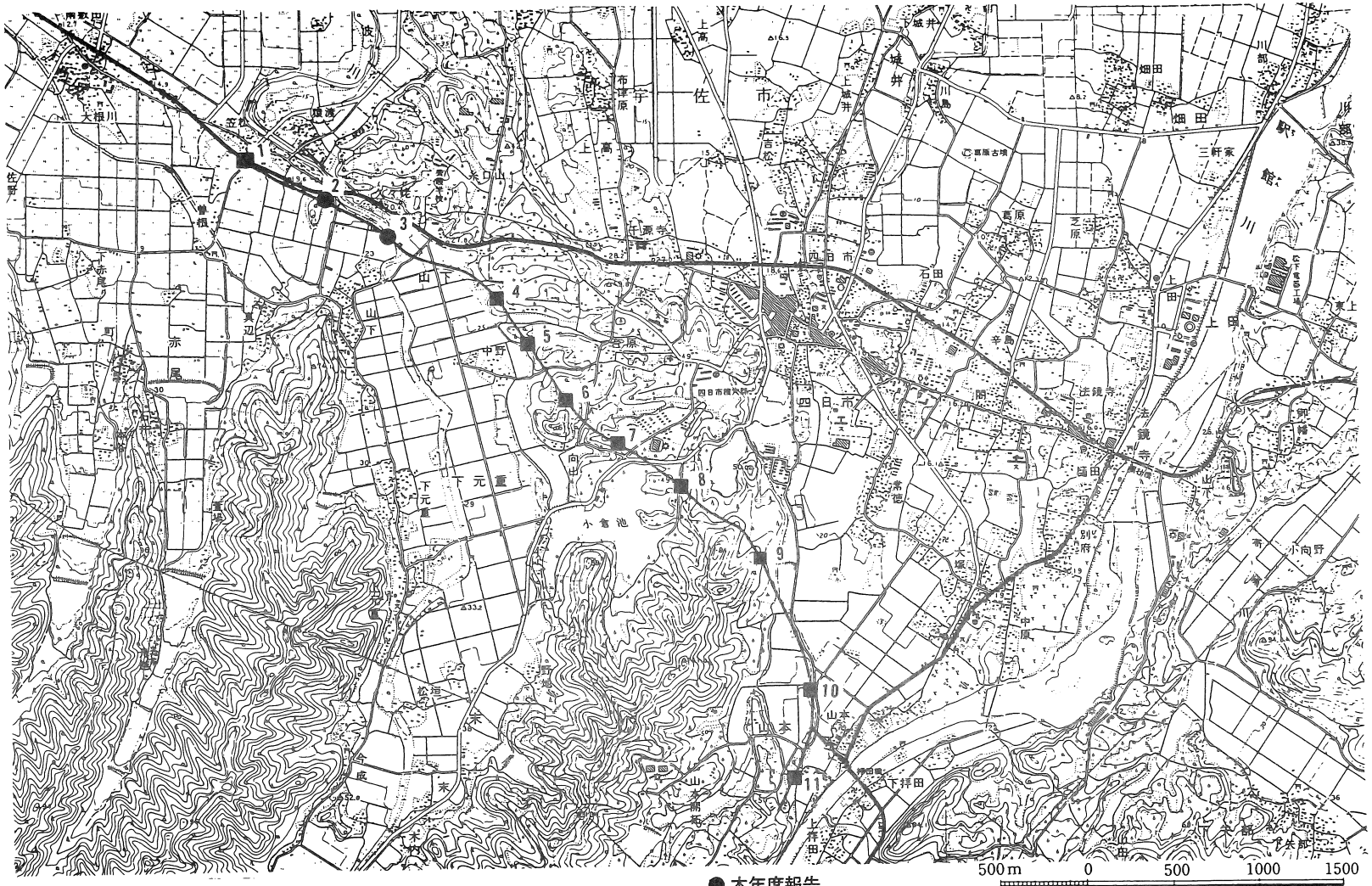
弥生時代の遺跡としては、本報告の尾畑遺跡で前期の土坑、後期および終末期の竪穴住居跡が調査された。四日市台地の北端部に台ノ原遺跡があり、6次にわたる調査で前期〜後期の遺構が検出された。前期では袋状土坑、中期では初頭から中葉におよぶ集落が明らかにされた。また中期前半〜後半の壺棺、箱式石棺など墓地の形成も確認されている。駅館川の段丘上、微高地には東上田遺跡、野口遺跡、川部遺跡、別府遺跡など前期末から後期後半に形成された遺跡の存在が知られている。

古墳時代の遺跡としては、峯添遺跡の集落がある。また平野を望む丘陵先端付近には古墳が分布しており、桐ヶ迫遺跡、向山古墳群、久々姥古墳群などが所在する。四日市台地とその周辺には多くの円墳が分布しており、川部・高森地区の赤塚古墳、葛原古墳、鶴見古墳など首長墳の造営された地域とは異なる墓形成の展開が窺われる。生産遺跡では、桐ヶ迫遺跡に須恵器窯跡の一部とその灰原を確認しており、散在的な窯業の痕跡を知ることができる。

古代の遺跡としては、尾畑遺跡が挙げられる。ここでは奈良時代の建物群が検出され、多くの土器と共に「和同開寳」が出土しており、官衙的な性格をもつ遺跡として注目された。

中世には既報告の笠松遺跡の火葬墓群が近隣に所在する。

近世の遺跡については、桐ヶ迫遺跡・峯添遺跡に墓地がみられた。



1 笠松遺跡　2 横山遺跡　3 尾畑遺跡　4 桐ヶ迫遺跡
5 峯添遺跡　6 正布迫遺跡　7 柳沢遺跡　8 松ヶ平遺跡
9 向山遺跡　10 下林遺跡　11 浄円寺遺跡

● 本年度報告

第1図　宇佐道路路線内遺跡分布図

（本図は国土地理院「宇佐」（2万5千分の1）地形図を使用した）

1．笠松遺跡
2．横山遺跡
3．尾畑遺跡
4．桐ヶ迫遺跡
5．峯添遺跡
6．正布迫遺跡
7．柳沢遺跡
8．松ヶ平遺跡
9．向山遺跡
10．下山遺跡
11．浄円寺遺跡
12．上山田横穴古墳群
13．尾僧石棺
14．城 遺 跡
15．城八幡宮石棺群
16．今仁古池遺跡
17．産山横穴群
18．草場谷横穴群
19．三ツ谷横穴
20．台 遺 跡
21．妙見平横穴群
22．少林横穴群
23．貴船平・下の裏山横穴群
24．池田古墳
25．元教覚寺跡
26．吉松甕棺群
27．切寄横穴群
28．石和田横穴群
29．池ノ下遺跡
30．鶴先遺跡
31．糸口山遺跡
32．針山古墳
33．前台古墳
34．西光寺山古墳
35．西光寺横穴群
36．久々姥石棺群
37．久々姥１号墳
38．久々姥２号墳
39．高林塚遺跡
40．高林塚古墳群
41．稲丸遺跡
42．本丸遺跡
43．上立石棺群
44．下田遺跡
45．大森遺跡
46．世々野遺跡
47．辛川遺跡
48．一本松遺跡
49．扇塚古墳
50．四日市廃寺遺跡
51．台ノ原遺跡
52．向山遺跡
53．池ノ奥古墳
54．一鬼手横穴群
55．加賀山横穴群
56．小菊古墳群
57．宮山古墳
58．小菊池遺跡
59．響山古墳
60．向山古墳群
61．小倉池廃寺後
62．小倉池遺跡
63．落ヶ迫横穴群
64．観音山横穴群
65．松垣遺跡
66．熊 遺 跡
67．原山遺跡
68．宮山横穴群
69．屋敷甕棺群
70．小金遺跡
71．精進畑かめ棺群
72．乙咩神社石垣
73．鬼塚石棺
74．小部遺跡
75．小部貝塚
76．御塚古墳
77．中園古墳
78．赤塚古墳
79．京塚古墳
80．恵良野古墳
81．鶴見古墳
82．一盃山遺跡
83．樋尻道遺跡
84．平堤遺跡
85．化粧井戸
86．青空寺遺跡
87．字土ノ上古墳
88．御幡遺跡
89．ホキノ本遺跡
90．西ノ宮遺跡
91．貴船神社遺跡
92．貴船神社南遺跡
93．幡柱古墳
94．古稲荷古墳
95．上ノ原遺跡
96．下辻遺跡
97．鳥越隧道古墳群
98．姪子原古墳群
99．恵古ノ上古墳群
100．別府遺跡
101．法鏡寺廃寺後
102．法鏡寺遺跡
103．上平古墳群
104．井原古墳群
105．大塚古墳
106．稲荷山古墳
107．山ノ下横穴群
108．小路迫横穴群
109．後山横穴群
110．土祖神元横穴群
111．小路迫古墳
112．井手ノ上古墳
113．柳橋横穴群
114．水原古墳
115．凶首塚古墳
116．高森遺跡
117．瀬割古墳
118．大善寺後
119．大善寺横穴
120．牛房横穴群
121．百穴横穴群
122．逆師甕棺群
123．矢部橋遺跡
124．屋敷横穴群
125．蓮福寺跡
126．京徳遺跡
127．西和田貝塚
128．桐ヶ迫古墳
129．時枝遺跡
130．宇佐大宮司館跡
131．敷田遺跡
132．藤田遺跡
133．六十塚古墳
134．吉久遺跡
135．台ノ原遺跡
136．台ノ原集団墓
137．上浦遺跡
138．別府遺跡縄文包含僧
139．別府古墳群
140．高居遺跡
141．四日市横穴群
142．虚空蔵寺瓦窯跡
143．虚空蔵寺跡
144．切寄瓦窯跡
145．吉松遺跡

（本図は国土地理院「宇佐」、「豊後高田」（2万5千分の1）地形図を使用した。）

第２図　宇佐道路周辺遺跡分布図

第 3 章　各遺跡の調査

第1節　横山遺跡

1　調査の概要（第3図）

調査は、伊呂波川左岸に位置する標高約30mの低丘陵とその南部の低地を合わせた6,400㎡の範囲を対象とした。遺跡の立地する丘陵部は西方向へ伸びた舌状台地となっている。この丘陵は東側の糸口丘陵と連続していたものと思われるが、現在は伊呂波川に開析され独立丘陵となっている。

遺構は、弥生時代前期後半の竪穴住居跡、貯蔵穴、ピット、溝などであった。遺構の分布は丘陵の上部平坦面およびその周辺に集中ものであった。

竪穴住居跡は2基検出され、一辺が3m～4mの不整方形を呈していた。貯蔵穴は竪穴住居跡に伴う位置関係にあった。形態は袋状をなし、内部から土器、礫が出土した。溝は丘陵の稜線に沿って伸び、弥生時代の住居跡を切断していた。隣接する溝から14世紀後半の瓦器が出土しており、これと近い時期が考えられる。西接する範囲については宇佐市教育委員会が調査を実施した。この結果、弥生時代前期末～中期初頭頃の竪穴住居跡、貯蔵穴、中期後半～末の環状の溝、竪穴住居跡などが検出されている。

丘陵東側の低地は削平を受けており、表土の下は基盤の砂礫層となっていた。遺構は土坑、近世の掘立柱建物群、井戸、溝、土坑などであった。

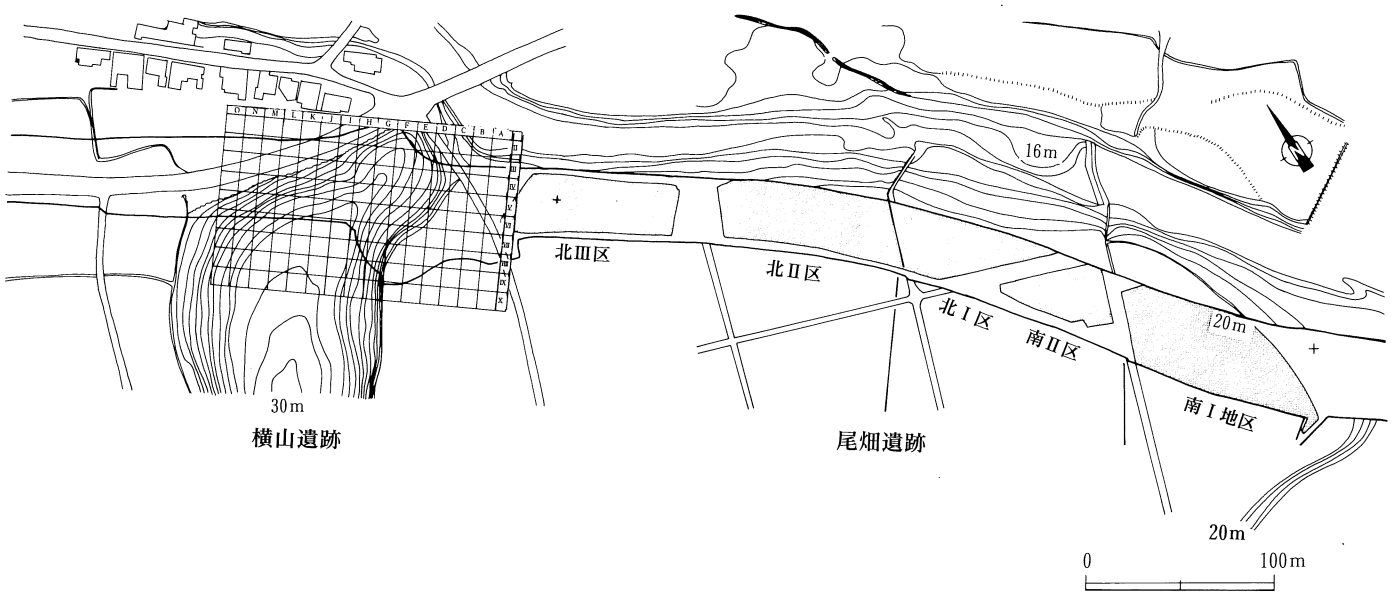
2　南地区の調査

遺構と遺物（第4図～第6図、第12図）

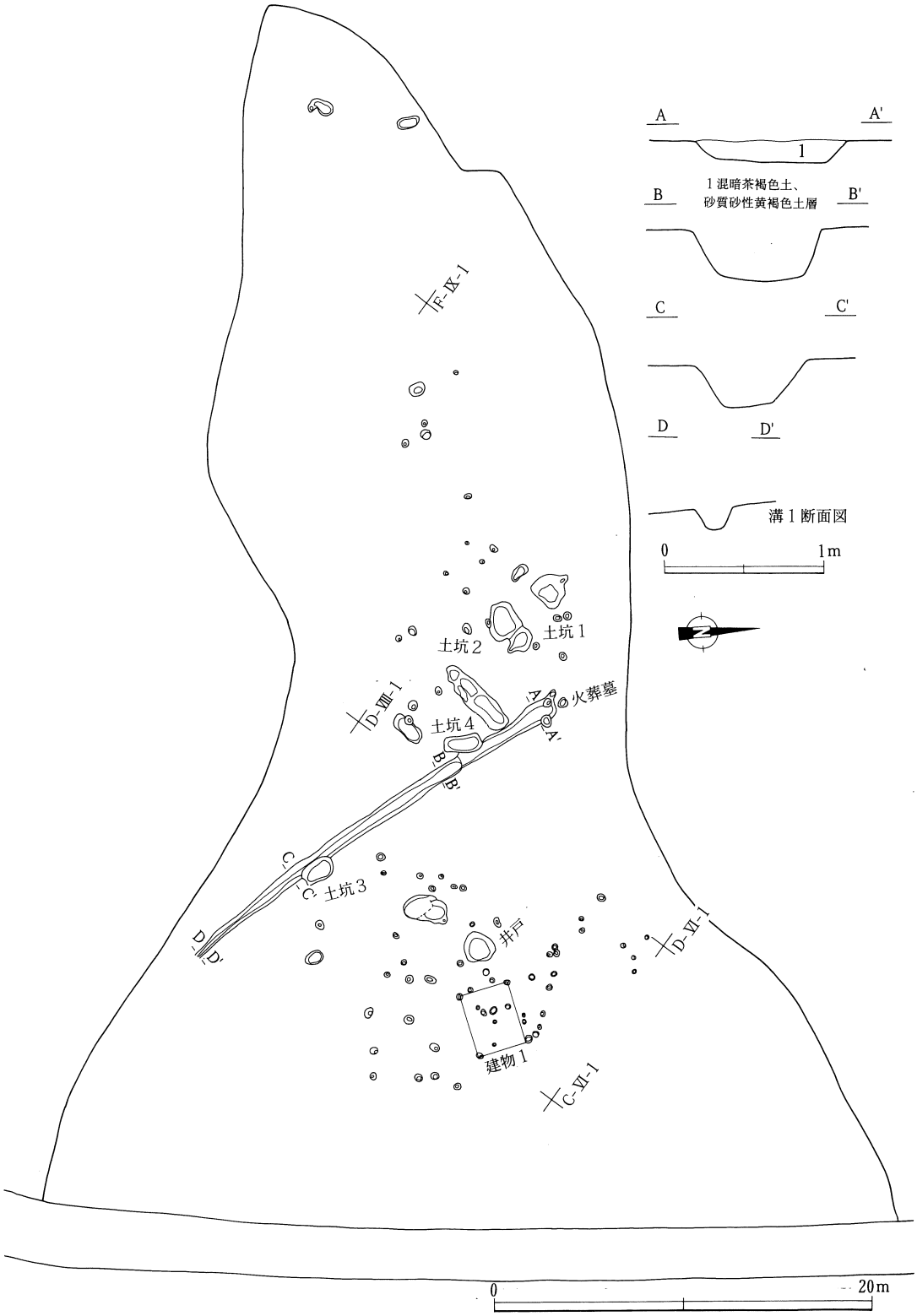
1号建物　掘立柱建物跡である。調査区の東部に位置する1棟を確認した。規模は1間×1間、東西3.4m、南北2.7mである。主軸方位は北15度西を指向する。

井戸　掘立柱建物跡の西辺近くに位置する。平面形は円形を呈する。規模は径1.5m～1.6m、深さは1.6m以上ある。井戸内部の堆積土は上から混粘質土、円礫主体層（0.8m）、黄褐色砂層（0.4m）、小礫層（0.4m）となっている。

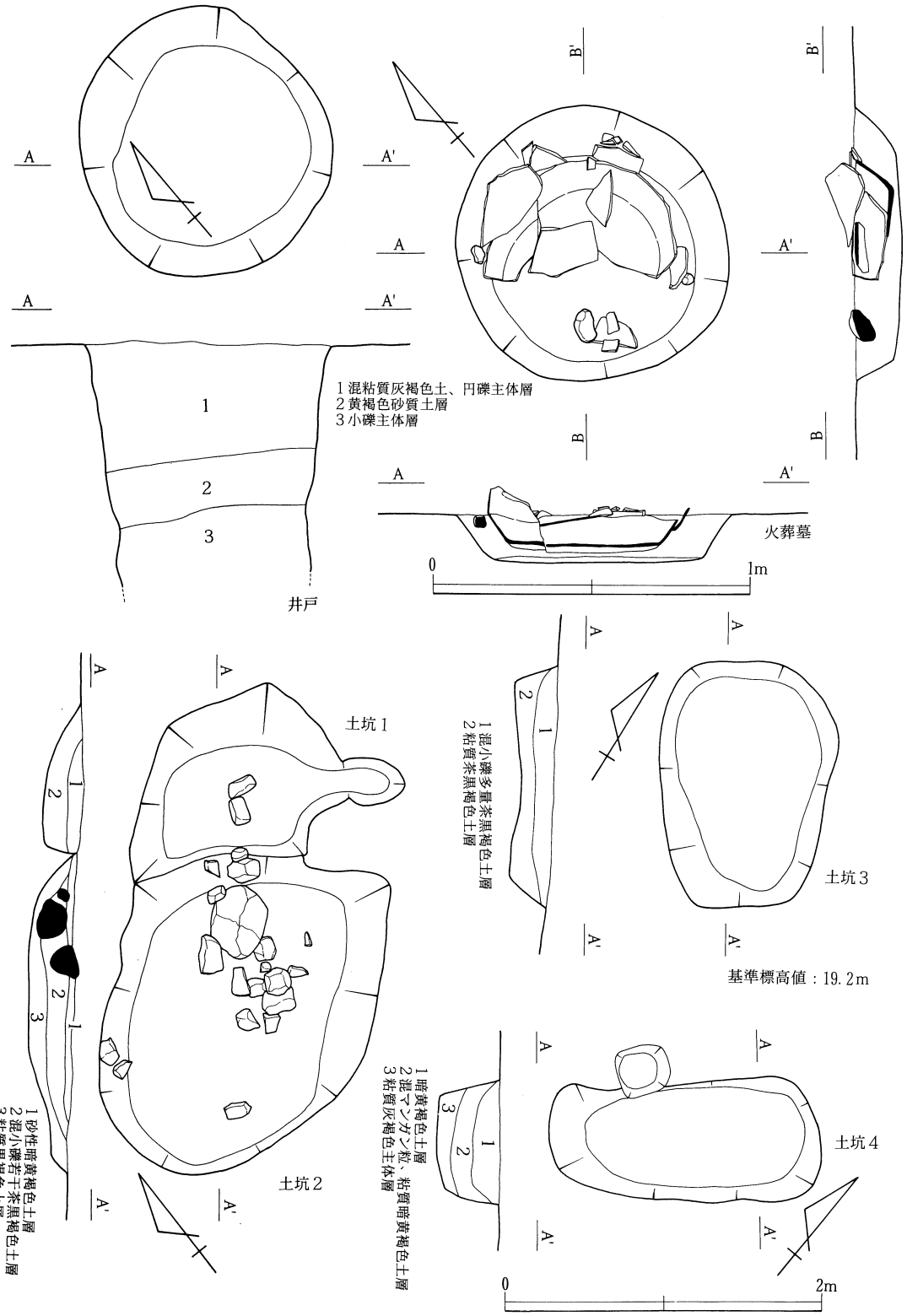
墓　径1.75m、深さ0.3mの墓坑に鉢を用いた棺が確認されたが遺存状態は良くない。棺内に骨片を含む黒黄褐色土が残り、墓坑内の埋土は暗灰褐色土である。棺は安定させるため底部に小円礫が配置されている。容器の鉢（第12図の21）は上半部を欠失しているが、上げ底風の平坦な底部をもつ。下半部の内外面には指押さえ後、ナデ調整がみられる。時期は明確ではないが、近世前半期のものと思われる。



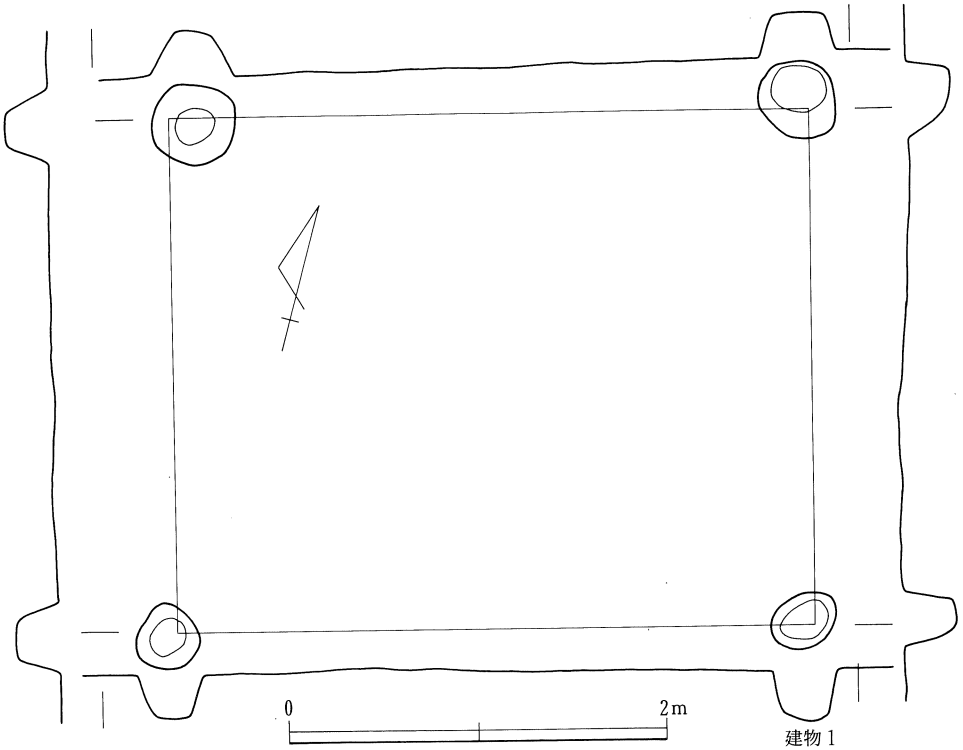
第３図　横山遺跡・尾畑遺跡位置図



第 4 図　横山遺跡南地区遺構分布図



第5図　横山遺跡南地区遺構実測図(1)



基準標高値：19.2m

第6図　横山遺跡南地区遺構実測図(2)

溝　調査区のほぼ中央部に北西方向から南東方向に伸びる長さ27mの溝を検出した。南東端部は消失している。

土坑　土坑は10ほど確認されている。土坑1は径1.3m～2.3mの不整円形を呈し、深さ0.3mである。土坑2は1.7m×1mの不整形を呈し、深さ0.25mである。土坑1は2を切断している。土坑3は1.5m×1.1mの不整方形を呈し、深さ0.25mである。土坑4は1.7m×0.8mの不整方形を呈し、深さ0.4mである。土坑の時期は出土遺物がないため不明である。

3　北地区の調査

遺構と遺物（第7図～第12図）

調査で確認した遺構のうち竪穴、貯蔵穴は弥生前期後半に属する。土坑や溝は不明確であるが、溝は少量の出土遺物から中世に構築されたものと推定される。

1号竪穴は溝に切断されている。竪穴は地山の礫層を掘り込んで構築されている。規模は5.3m×2.8m～3.2m、壁は0.15mほど残る。平面形は不整長方形を呈する。主軸方位は北17度西を指向する。主柱穴は炉跡を挟んで2つある。炉跡は竪穴中央部に位置し、長径0.7m、短径0.55

m、深さ0.07mの皿状の形態を呈する。炉底面は被熱赤変している。竪穴の覆土中から弥生土器が出土している。

2号竪穴は4.5m×2.2mの長方形を呈する。深さは0.5mほどである。主軸方位は北85度西を指向する。主柱は2本あったと思われるが、柱穴の1は土坑に切られ不明である。覆土中から弥生土器が若干出土している。

貯蔵穴1、2は2号竪穴の南に近接して構築されている。貯蔵穴1の規模は上縁径1.1m、底径1.7m、深さ0.9mである。断面形は上に向かい窄まる袋状となっている。覆土中から弥生土器、礫が出土している。

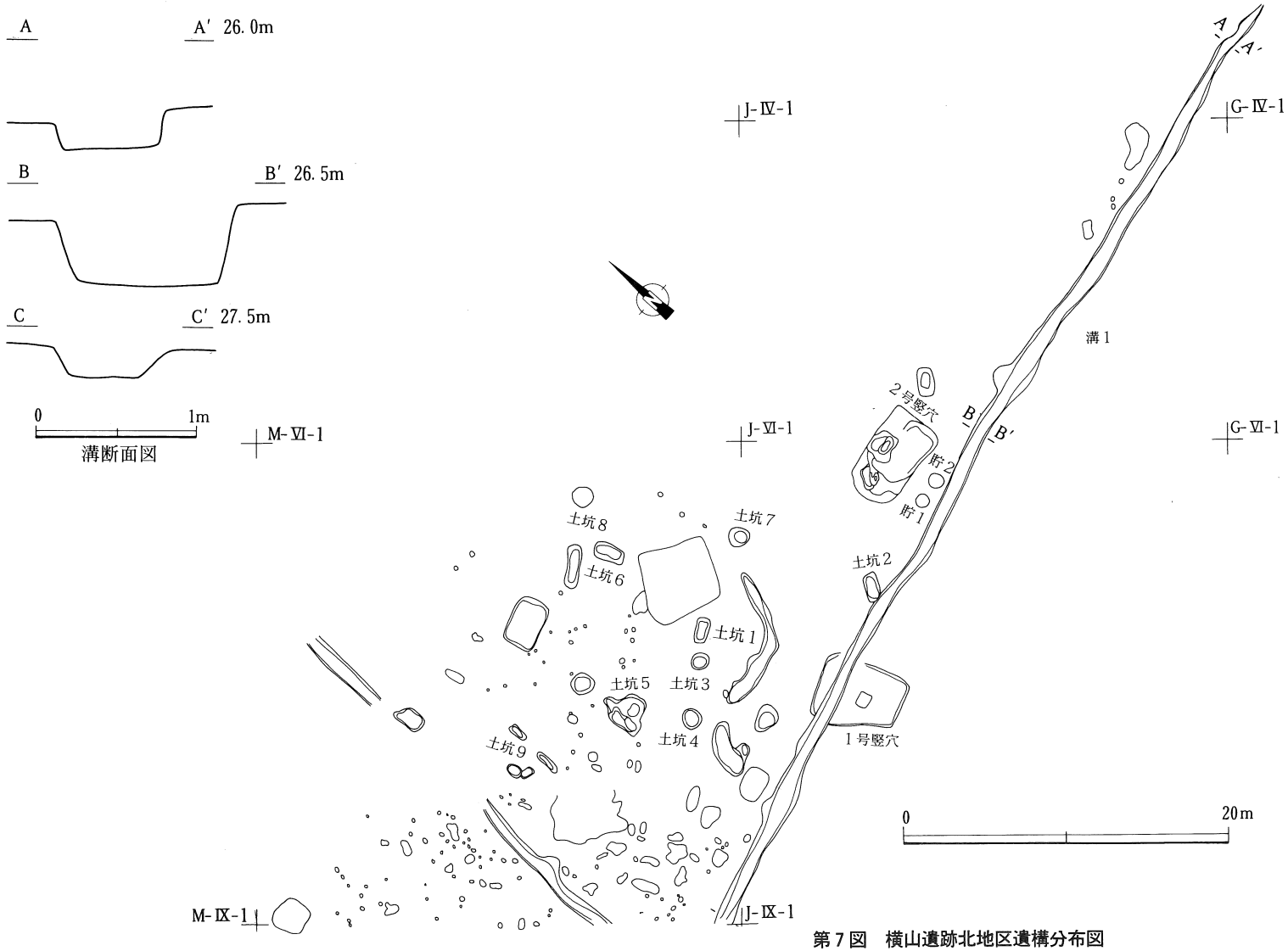
貯蔵穴2は上縁径、底径共に1.1mで、深さ0.7mの規模をもつ。壁は上に向かい窄まる袋状になるものと思われる。覆土中から弥生土器、礫が出土している。土坑は約30ほど検出された。土坑1は1.5m×0.9mの不整方形を呈し、深さは0.15mである。土坑2は1.75m×0.85mの不整方形を呈し、深さは0.15mである。土坑3は径1.1mの円形を呈し、深さは0.15mである。土坑4は長径1.4m、短径1.1mの楕円形を呈し、深さは0.4mである。土坑5は数個の土坑が連接した不整形を呈し、3.5m×2.5m、深さ1mの規模をもつ。土坑6は攪乱を受けているが、2m×1mの不整方形を呈し、深さは0.5mである。土坑7は径1.2m～1.4mの不整円形を呈し、深さは0.7mである。土坑8は径1.4mの不整円形を呈し、深さは0.3mである。土坑9は1.4m×1mの不整形を呈し、深さは0.4mである。

土坑から出土遺物がほとんど得られていないので、時期は明確でない。

溝は丘陵の南辺縁を西から東に向かい約70mを確認できた。幅は0.6m～1.1mである。

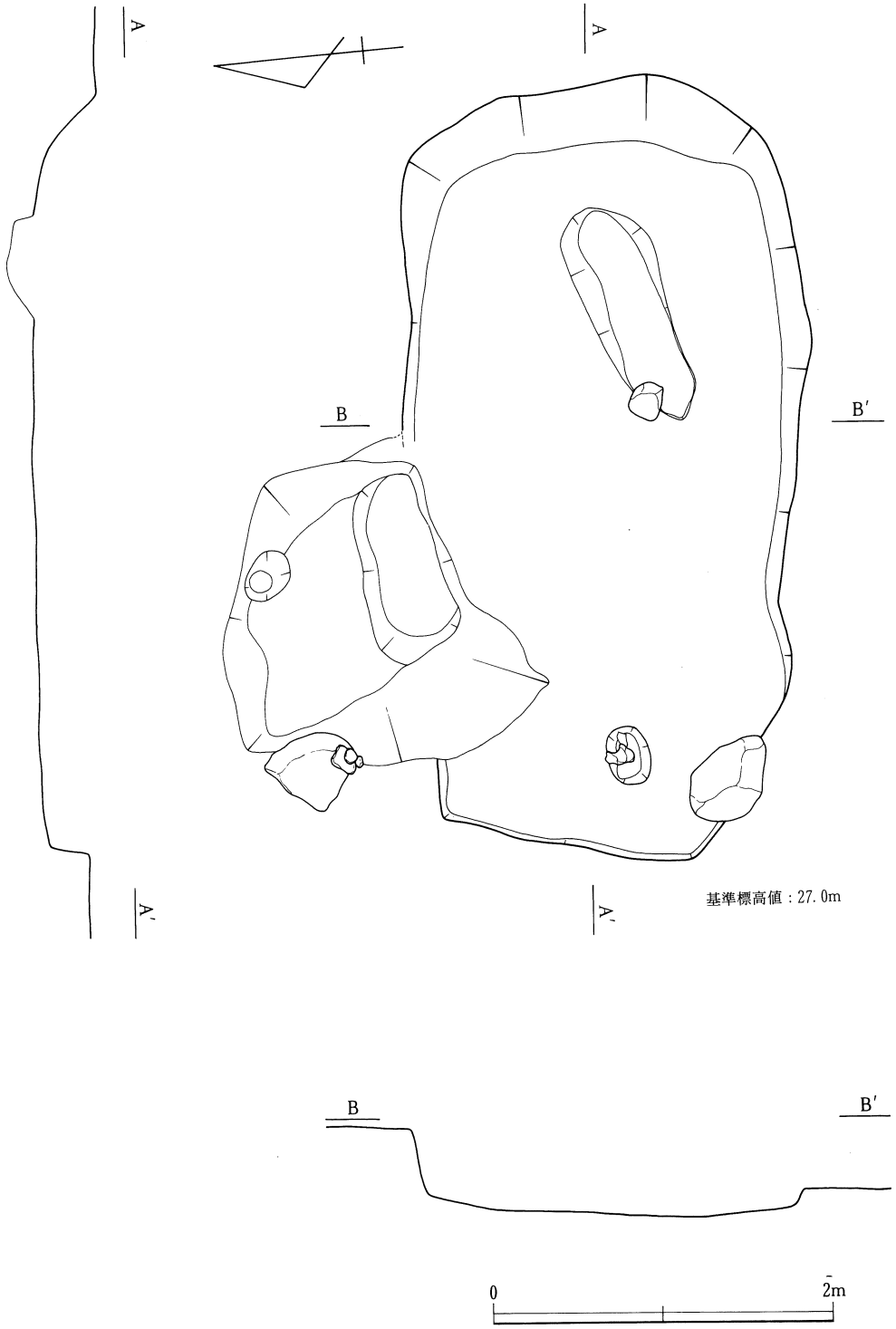
出土遺物（第12図1～20）

1～12は1号竪穴、13～17は2号竪穴、18は貯蔵穴2、19・20は貯蔵穴1から出土した。1は下城式甕形土器である。口縁部は内湾し、外面に突帯が巡る。突帯は貼り付けではなく、器面から引き伸ばしたもので低い。復元口径は28.5cmである。器面は摩滅し調整を観察できない。胎土は角閃石・長石などの砂粒を多く含む。焼成は通有で、黄褐色を呈する。2～7、12～14は壺の底部である。底部は平底をなし、胴部に向かい大きく膨らんで立ち上がると思われる。2は外面を縦方向のハケ目で調整した後、ヘラミガキが施されている。内面にはナデが施される。他の例についても外面ハケ目、内面にナデの調整はみられるが器面が摩滅し調整の不明のものが多い。10、11、15～18、20は甕の底部である。器厚は厚く、膨らみをもたずに立ち上がるものと思われる。18は底部に焼成前の穿孔が2つある。径0.8cm程の大きさで、1つは貫通せず中途で止まっている。器面の調整は摩滅が著しく不明である。胎土は角閃石などの砂粒を含み、焼成はほぼ良好で黄褐色を呈する。19は壺の口縁部破片である。先細りの頸部をもち上部に緩い段が付く。器面の摩滅が著しく調整不明である。胎土に角閃石・白色砂粒を多く含む。焼成はやや脆弱で黄褐色～赤褐色を呈する。出土土器の時期は、器形特徴などから弥生前期後半と考えられる。

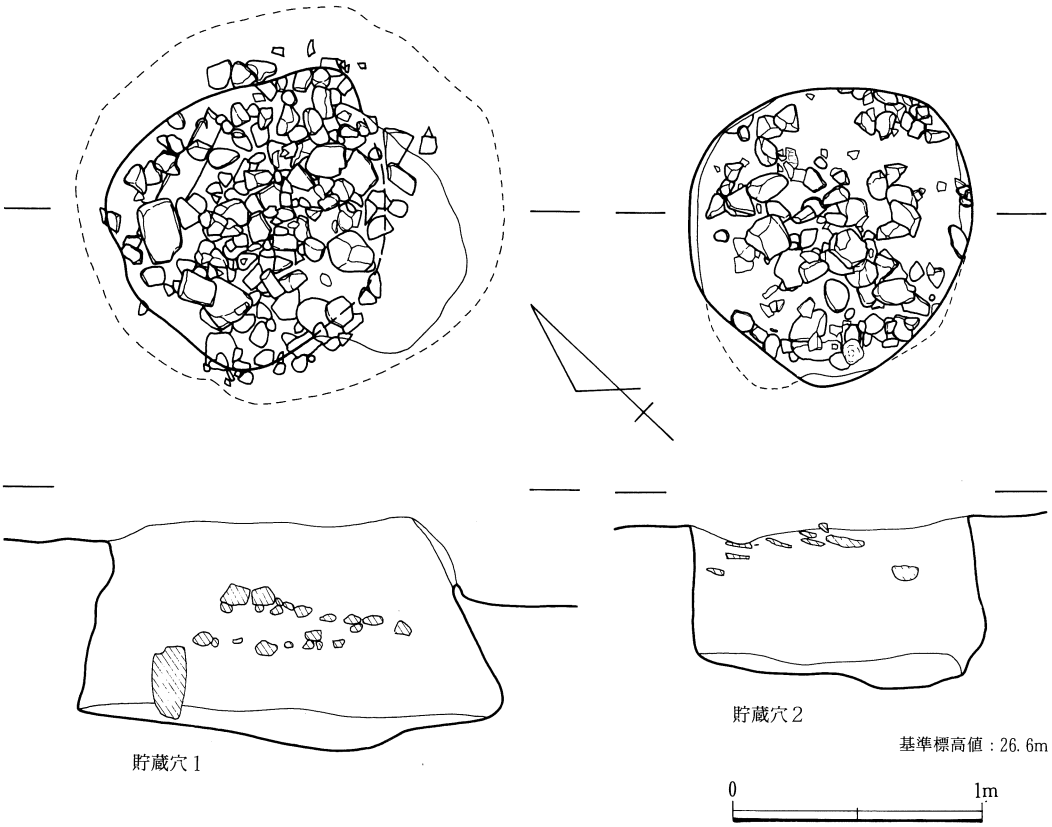


第7図　横山遺跡北地区遺構分布図

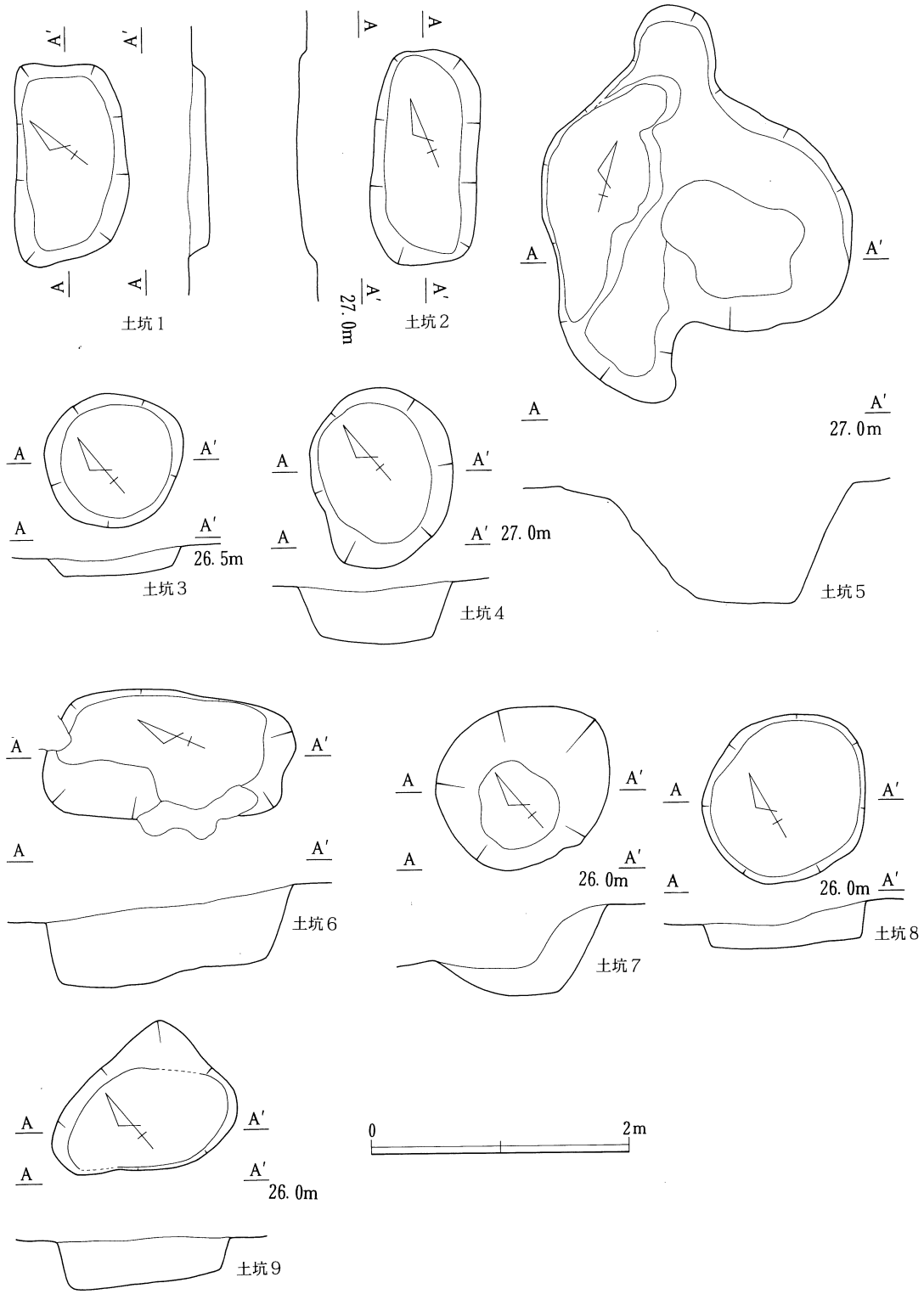
第8図　横山遺跡北地区1号竪穴実測図



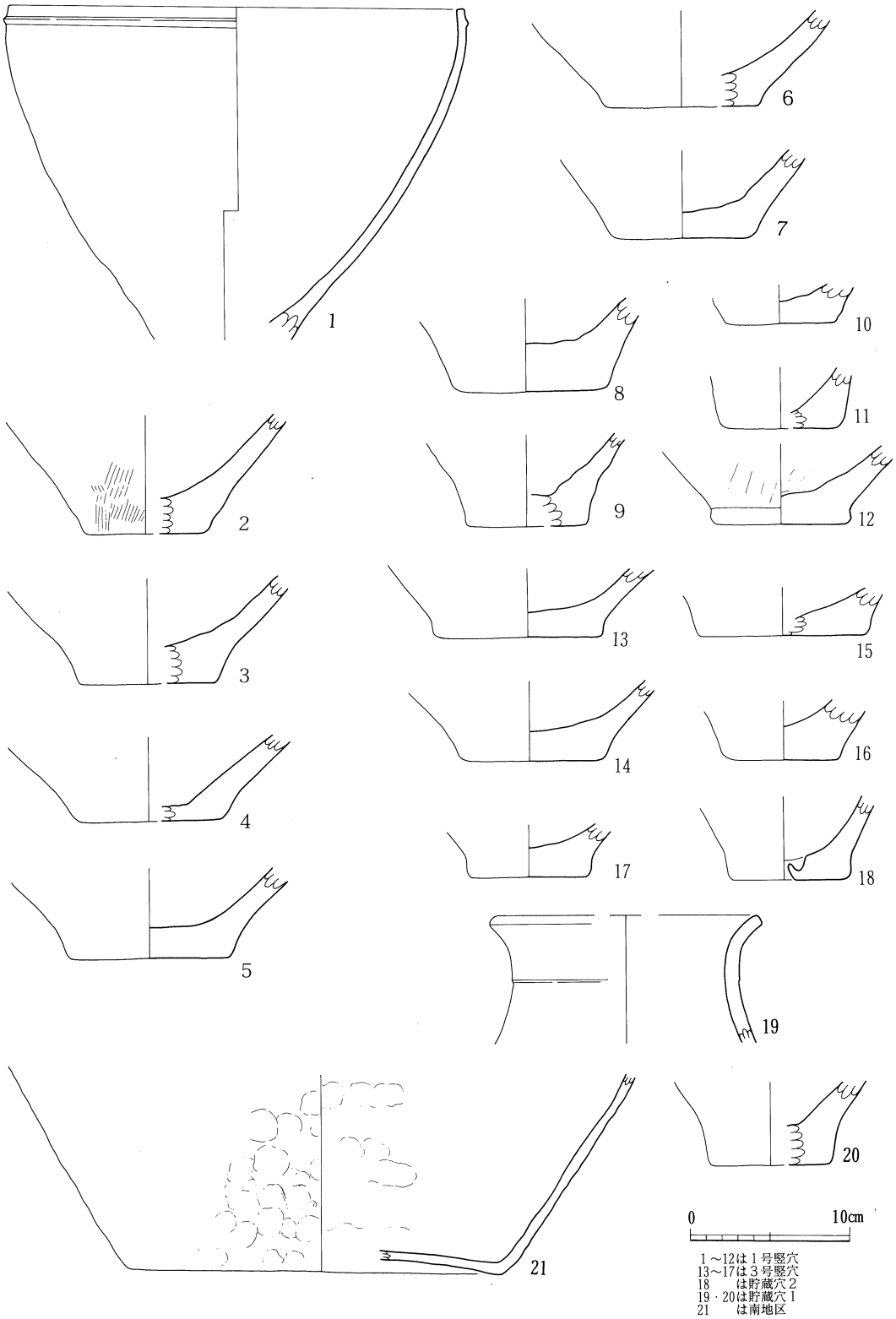
第9図　横山遺跡北地区2号竪穴実測図



第10図　横山遺跡北地区貯蔵穴実測図



第11図　横山遺跡北地区土坑実測図



第12図　横山遺跡出土遺物実測図

第２節　尾畑遺跡

1　調査の概要

尾畑遺跡は横山遺跡の東側に接する伊呂波川左岸段丘上に広がる。伊呂波川はほぼ北流し、南区の東端で北西に湾曲、さらに横山遺跡付近で東へ蛇行する。調査対象地となった段丘は、すでに昭和40年代に圃場整備が実施されており、地形の改変が予想されていた。しかし工事に伴う堆積土の掘削は浅く、遺構の残存状態は比較的良好であった。調査範囲は長さ450ｍにおよんだため、南東部約⅓を南地区、北西部を北地区と分け、さらに南地区をⅠ、Ⅱの２区、北地区をⅠ、Ⅱ、Ⅲの３区に小区分した。

尾畑遺跡は南東方向から北西方向へほぼ40ｍ幅で段丘縁辺に沿った同様の地形上にあるが、確認した遺構にはそれぞれ異なった様相がみられた。

南地区では、奈良時代の建物群に特徴がある。22棟で構成された建物群はほぼ同一方位を指向し、重複の少ない単一時期の構築と考えられた。これに伴う整地層から供膳形態の土器、焼塩壺や「和同開賓」が出土していることから、この建物群は官衙的な性格をもつものと想定される。他の遺構として縄文後期の竪穴１基、弥生後期～終末の竪穴６基が散在的に分布する状況がみられた。

北地区では南東からⅠ、Ⅱ、Ⅲの３区に分けて調査を実施したが掘立柱建物は確認していない。南区に近いⅠ区では、奈良時代の土師器４点、須恵器１点がほぼ完形に近い状態で出土した土坑を確認しており、建物群周辺の遺構の状況が注意された。

北Ⅱ区には縄文時代の遺物包含層が広い範囲に形成されていた。この包含層は段丘縁辺部に残っていたもので、多量の縄文後期～晩期の土器、石器や土偶、玉類が出土した。

北Ⅲ区は弥生前期の土坑が主な遺構であった。

北Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区では、複数の溝を確認している。溝は段丘縁辺部に川の流れに沿って掘削されており、その起点は恐らく南Ⅰ区の南東端部付近と想定される。出土遺物からみて南Ⅰ区の掘立柱建物群と同時期の水路と考えられる。

2　南Ⅰ区の調査（第13図）

南Ⅰ区では、調査区北東部に縄文時代の竪穴１基、南半部を中心に弥生時代の竪穴６基を検出した。奈良時代の掘立柱建物22棟が段丘縁辺よりやや内側の全域に広がっていた。これらの建物群に伴う整地層が調査区西南部に形成されていた。この他の遺構としては、土坑、ピットなどがある。

調査区の層序（第13図）は西辺部において、上層から耕作土が10㎝～20㎝、砂質黒褐色土層（整地層）が10㎝～30㎝、砂質黒黄褐色土層（縄文包含層）が10㎝～30㎝堆積し、地山は暗黄褐色砂層となっている。

土層説明
0 耕作土
1 混焼土粒、黒褐色土層（8世紀遺物包含）
2 砂質黒黄褐色土層（縄文包含層）
3 暗黄褐色砂層（地山）

第13図　尾畑遺跡南Ⅰ区遺構分布図・土層断面図

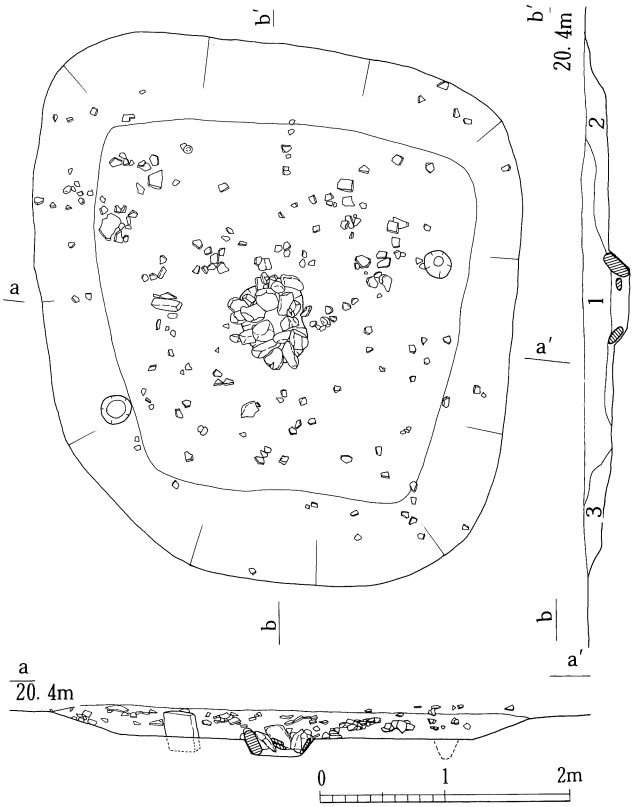
縄文時代の遺構と遺物

1号竪穴（第14図）

尾畑遺跡から出土した縄文時代の遺物は縄文後期初頭から晩期末に及ぶ。しかし、検出された遺構は、1号竪穴の1基のみである。この遺構は、調査区の東辺部中央付近で検出されたもので、周辺の地形の中で見ると、宇佐平野の南にある山塊を源とし、北流する伊呂波川の川畔に位置し、遺跡の北側には、標高30mの糸口山丘陵があり、南側には、南から延びる尾根筋が迫っている。すなわち、宇佐平野を北に向けて貫流する伊呂波川が形成する谷底平野と宇佐平野の接点にあたる。

竪穴遺構の形態は、全体的には平面形が角丸状の方形になる。しかし、南東隅が不整形である。規模は、上面が東西4.2m、南北3.8mであるが、壁は緩く傾斜しており、検出面から約20cmで床の平坦部になる。その傾斜は、45cmから50cmで20cm下がる緩やかなものである。床面の規模は中央部で東西2.9m、南北2.8mであるが、西壁沿いが3mあるのに対し、東壁沿いは2mで台形になっている。このため、床の面積はほぼ6㎡となる。

床面からは、直径20cm、深さ17cmの先細りになる掘り込みを検出したが、上屋を支えるような柱穴を見出すことはできなかった。また、床面中央では石囲炉が検出された。この遺構は、まず床面を東西66cm、南北50cmの楕円形で、深さ15cm掘り窪め、底面を平坦に仕上げている。そして、長さ20cm前後の川原石を19個、掘り込みの壁に立て掛けるようにして並べており、底の部分には敷石は無い。この他、床面で観察できる遺構としては、立石がある。これは、石囲炉と南側の壁の中間で検出されたもので、20cm×30cmで厚さ5cmの長方形の川原石を約10cm床面に埋め込んでいる。その方向は、南壁に直角で石囲炉の中央を向いている。



第14図　尾畑遺跡南Ⅰ区1号竪穴実測図

出土遺物（第15図～第31図）

1号竪穴から出土した遺物は、すべて二次的に堆積したものである。つまり、この遺構が埋まって行く段階で、人為的に投棄あるいは自然に流れ込んだものと言える。このため、土器につ

いては床面に貼りついた状態で出土する完形品はなく、すべて、床面から離れて出土する破片である。

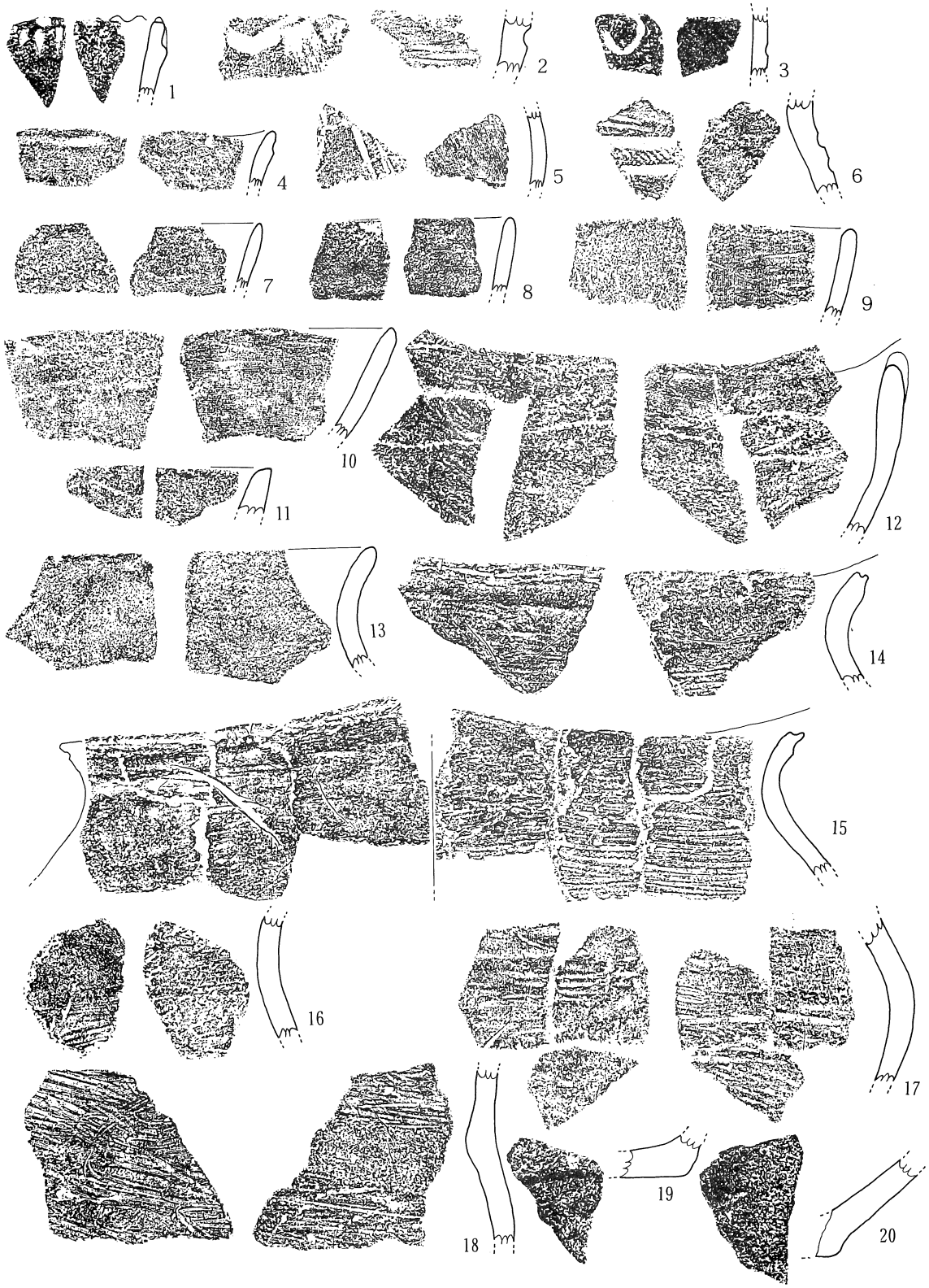
第15図に図示した土器の実測図は、1号竪穴から出土した土器のうち、文様のあるものや、口縁部・頸部・胴部・底部など時期や器形を知る手がかりになるものである。1は口縁部に太い刻目が連続して加えられ、肥厚気味の口縁部外面には縦長の連続凹点が施文されている。器面はナデ仕上げで、色調は茶褐色である。2は太い沈線のある胴部の破片である。器面は条痕のあとナデ仕上げで、色調は茶褐色である。3は縄文の地文の上に渦巻き文が施文されている。内面はナデ仕上げである。4は口縁部がやや肥厚し、外面に凹線が生じている。器面は摩滅しており、色調は内面が黒褐色で外面は茶褐色である。5は細い沈線による幅の狭い磨消縄文が施文されている。磨消部は丁寧な研磨で、精製土器である。色調は内面が黒褐色で、外面は茶褐色である。胎土には1～4は角閃石・斜長石が認められるが、5はこれに加え金色の雲母も混ざっている。6は太い沈線による磨消縄文土器の肩部の破片である。外面は条痕のあと縄文、そして沈線、さらにナデで仕上げられているが、内面は条痕のあとナデである。色調は明褐色で、胎土には角閃石と斜長石を含む。

7～18は無文土器であるが、口縁部の形態で二つのタイプがある。7～12は口縁部が直線的に延びるのであるが、器形としては口縁部が大きく外反する深鉢形土器か、直線的に底部につながる鉢形土器と考えられる。7～9の口縁部はナデ仕上げであるが、摩滅している。色調は7が黒褐色であるが、8・9は黄褐色で、胎土はいずれも角閃石・斜長石を含む。10は口縁部の形態から皿状の浅鉢と考えられる。外面は横ナデ、内面は横方向のヘラミガキで仕上げている。内面は茶褐色、外面は赤褐色である。11は口縁部の小さな破片である。茶褐色でナデ仕上げである。12は、口縁部がわずかに屈曲し直立し、口唇部の一部が山状に突起する。内面は横ナデで茶黒色、外面は条痕のあと横方向のヘラミガキで黒褐色である。11～12とも胎土に角閃石・斜長石を含む。

13～15は口縁部が外反する深鉢形土器である。13は横ナデ仕上げと思われるが摩滅している。胎土には角閃石・斜長石・石英を含み、色調は黄褐色である。14と15は同一個体と考えられる。外反する口縁部はやや肥厚しており、口唇部を平坦にしている。器面は、内外面とも横方向に巻貝条痕で調整し、外面はナデとヘラミガキ、内面はナデで仕上げているが、内面には条痕が残る。

16～18は頸部・胴部の破片である。いずれも巻貝条痕のあと粗いナデで仕上げているため、条痕が残る。色調は16・18が茶褐色、17は赤茶色で、胎土には角閃石・斜長石を含む。19・20は底部の資料である。2点とも横ナデ仕上げで、色調は19が茶褐色、20が黄褐色であり、胎土には角閃石・斜長石を含む。

以上が1号竪穴の主な出土土器であるが、2・3・6の資料の文様は小池原上層式土器であり、13～15の比較的大きな無文土器の資料も、小池原上層式土器の器形に類似している。こうしたことから、1号竪穴遺構の時期は、縄文後期前葉に属するものと考えられる。



第15図　尾畑遺跡南Ⅰ区１号竪穴出土土器実測図

包含層出土土器

尾畑遺跡は、調査区の北側に沿って流れる伊呂波川への斜面が厚い遺物包含層を形成している。この包含層以外にも調査区内からは、縄文時代後・晩期の遺物が出土している。この項では、南Ⅰ区の包含層から出土した縄文土器を報告する。

第16～31図まで縄文後期前半を主体とした土器を図示したものである。

第16図１はキャリパー状の口縁部の外面と内面上部に縄文の地文を施文し、外面はその上から半裁竹管状の施文具による押し引き文を口縁部に平行に施文している。茶褐色で角閃石と斜長石を含む。この土器は縄文中期の瀬戸内系土器である。

２・４は波状口縁の深鉢形土器で、波状頂部の口唇部には刻目が加えられる。胴部の文様は凹線で曲線文が施文されている。３は緩い波状口縁の土器で、口唇部に太い刻目が加えられている。器面は摩滅しているが、沈線による入組み文が施文されている。３点とも茶褐色で、胎土に角閃石と斜長石を含む。これらの土器のうち、２・４は中津式土器の影響を受けた土器と考えられる。

５～15は口唇部に太い刻目（５～12）か、口縁部外面に凹線文が施文された土器（13～15）である。５～12は口唇部に太い刻目がある土器である。しかし、胴部の文様は６の外面には凹線も認められる以外は施文されていない。器面調整は、条痕のあと横ナデで仕上げているが、12の胴部下位には斜め方向の条痕が残る。口径が復元できるのは10と12で、10が19.6㎝、12が23.2㎝である。色調は明褐色や黄褐色で、胎土に角閃石や斜長石を含む。13・14は口唇部に刻目はないが、器形は５～11と同様に、頸部のない寸胴型になる深鉢形土器である。文様帯は口縁部に平行にあり、外面に凹線や太い沈線で、直線的な文様が描かれている。15もこうした土器片と考えられる。器面調整は文様施文後にナデで仕上げられている。色調は13・15が黄褐色、14は白茶色で、胎土に角閃石や斜長石を含むが、14には赤色粒が目立つ。

以上の５～15の土器は、九州の縄文中期の阿高式土器の影響を受けた東九州の土器である西和田式土器の範疇に含まれるものである。しかし、外面の文様の喪失や、口唇部の刻目の省略など、退化的要素が認められる。それでも２・４など中津式土器も認められることから、これらと合わせて縄文後期初頭の土器群と理解できる。

第16図16～21と第17～20図の土器は、磨消縄文が施文されている。

第16図16～21は頸部のくびれが無く、底部から直線的に口縁部に達する鉢形土器である。16は、口縁端部を欠くが、外面に沈線施文後に縄文が施文されている。内面にも渦巻文があり、その下位は横方向にヘラミガキされている。内外面とも茶黒色で、胎土に角閃石と斜長石を含むが、後者の量が目立つ。17の口縁部は縄文のあと沈線が施文され、内面は巻貝条痕のあとヘラミガキされている。18の外面は縄文施文後に沈線が加えられ、さらに赤色顔料が塗られている。この部分以外と内面は横方向のヘラミガキである。19も縄文施文後に沈線が加えられ、内面は横ナデされている。20と21は、縄文は見られないが、文様構成は磨消縄文と同じである。20は、口縁部に

平行に沈線が巡り、21は口唇部の一部に刻目があり、胴部に沈線で文様が描かれている。これらの土器の色調は、19が赤褐色以外は茶褐色で、胎土には角閃石と斜長石を含む。

第17・18図は磨消縄文の施文された深鉢形土器の口縁部である。第17図の1は緩い波状口縁の頂部で、内面まで縄文施文後の沈線による磨消縄文が見られる。その部分以外は横方向のヘラミガキである。2の磨消縄文は沈線施文後に縄文が施されており、その下位と内面は横方向のヘラミガキである。3は縄文施文のあとに沈線が加えられ、さらにナデられている。内面は、縦方向の削り状の調整痕が認められる。いずれも茶褐色で、胎土に角閃石と斜長石を含む。4・5・14と第18図1は出土状態や文様の胎土や色調から同一個体と考える。これらの土器は、縄文施文後に沈線が加えられ、他の部分は横方向のヘラミガキをされている。また内面は条痕のあと、ヘラミガキで仕上げている。色調は内面が赤褐色、外面が茶褐色で、胎土に角閃石と斜長石以外に石英も含む。

6は摩滅しているが、縄文のあと沈線が施文され、口縁部に直角に沈線が施文された頸部の文様もある。7は巻貝による疑似縄文のあと、沈線が施文され、それ以外の部分はヘラミガキされている。8は摩滅が著しいが、口縁部に平行に磨消縄文が施文されており、内面は条痕のあとヘラミガキされている。9・10は肥厚した口縁部に平行に沈線が巡り、内面はヘラミガキされているが、摩滅が著しく文様の状態は分からない。6～10の色調は、8が赤褐色である以外は茶褐色で、胎土に角閃石と斜長石を含む。

11は口縁部に巻貝による疑似縄文が施文され、その下位はヘラミガキである。内面は巻貝条痕のあと横ナデで器面調整されている。12は口縁部と頸部に文様を施文後に縄文が加えられ、横ナデされている。内面は巻貝条痕のあと横ナデで器面調整されている。13は縄文施文後に沈線が加えられ、さらに赤色顔料を塗布している。その部分以外は横ナデで、内面は横方向のヘラミガキで器面調整している。11～13までの色調は茶褐色で、胎土には角閃石と斜長石を含むが、13には石英も含まれる。

15は沈線施文後に縄文を加えている。器面調整は外面が横ナデ、内面が横方向のヘラミガキされている。16・17は緩い波条口縁の頂部の資料である。文様は縄文施文後に沈線を加えている。17は頂部の下に列点文が施文されている。内側の器面調整は横方向の条痕のあとヘラミガキである。18も縄文施文後に沈線を加え、その下位は横ナデ、内面はヘラミガキで器面調整している。19の外面は縄文施文後に沈線を加え、ヘラミガキしている。内面は横方向のヘラミガキで器面調整されている。20の外面は沈線のあと縄文を加え、その下位は横ナデしている。内面は巻貝条痕のあと横ナデしている。21の外面は縄文のあと沈線を加え、他の部分は横ナデで、内面は条痕のあとヘラミガキで器面調整されている。15～21の色調は茶褐色で、胎土には角閃石と斜長石を含む。

第18図2は口径34.6cmの緩く波状になる口縁部である。外面は縄文を施文したあと沈線を加えている。その文様は、口縁部は頂部を中心にし、頸部は頂部の下に垂直に3本の沈線を施文し、

胴部文様に繋げている。内面は巻貝条痕のあと横方向のヘラミガキで器面調整されている。３も口径30.2cmの緩く波状になる口縁部である。外面は巻貝条痕のあと縄文を施文し、沈線を加え、ヘラミガキしている。内面は条痕のあとヘラミガキで器面調整されている。４は口径35cmで、器形が２・３と同じである。外面は沈線を施文後に縄文を加え、ヘラミガキしている。内面は、条痕のあと横方向のヘラミガキである。３点とも色調は茶褐色や暗茶褐色で、胎土には角閃石や斜長石を含む。５の器形は頸部のくびれが少なく、寸胴形である。外面は巻貝条痕のあと疑似縄文を施文し、沈線を加え、横ナデしている。内面は巻貝条痕のあと横ナデで器面調整している。茶褐色で胎土に角閃石と斜長石を含む。

第19図と第20図１～５は磨消縄文の胴部の資料である。第19図１の外面は巻貝による疑似縄文のあと沈線、内面は条痕のあとナデ調整している。２の外面は縄文施文のあと沈線、そしてナデが行なわれ、内面は条痕のあとヘラミガキである。３も縄文施文後に沈線が加えられている。内面は横ナデ調整である。４は胴部下位にあたり、縄文施文後に沈線を加え、ヘラミガキしている。内面はヘラミガキである。５は胴部上位で、縄文施文後に沈線を加え、丁寧なヘラミガキを行なっている。内面も横方向のヘラミガキである。６も胴部上位で、沈線・縄文・ヘラミガキの順で文様が施文されている。内面は、横方向の巻貝条痕である。以上の１～６の土器の色調は６が黄褐色以外は茶褐色である。またいずれの胎土にも角閃石や斜長石を含む。

７は、縄文施文後に沈線・ヘラミガキの順で磨消縄文を作り出している。内面は横方向のヘラミガキである。８の外面には縄文しか見られないが、磨消縄文の一部と考える。内面は横ナデで調整されている。９は胴部最大経の部分で、入り組文が施文されている。文様は縄文施文後に沈線が加えられ、横ナデで仕上げられている。内面は横方向のヘラミガキである。10の外面は縄文施文後に沈線が加えられ、ナデで調整されている。内面は横方向のヘラミガキである。11の外面は、縄文施文後に沈線を加え、ナデで器面を調整している。内面は巻貝条痕のあとヘラミガキをしている。12の外面は縄文のあと沈線を加えている。内面は横方向のヘラミガキである。７～12の色調は11が赤褐色である以外は茶褐色である。またいずれの胎土も角閃石や斜長石を含むが、11には石英も多く含まれる。

13の外面は縄文施文後に沈線、そして横ナデの順で文様が施文されている。内面は巻貝条痕のあとヘラミガキである。14の外面は縄文施文後に沈線が加えられている。内面は巻貝条痕のあと横方向のヘラミガキである。15の外面は縄文施文後に沈線が加えられ、ナデやヘラミガキで仕上げられている。内面は横方向のヘラミガキである。16は胴部の渦巻き文の部分である。文様は疑似縄文施文後に沈線が加えられ、ヘラミガキで仕上げられている。内面は条痕のあと横方向にヘラミガキである。13～16の色調は茶褐色で、胎土には角閃石や斜長石を含む。

17は頸部の破片であるが、肩部には縄文のみが施文されている。内面は横方向のナデである。18は摩滅しているが、縄文施文後に沈線を加え、ナデで仕上げている。内面は横方向のナデや

ヘラミガキである。19の外面は縄文施文後に沈線が加えられ、ヘラミガキで調整されている。内面は、ナデとヘラミガキが認められる。20の外面は縄文施文後に沈線が加えられている。内面は巻貝条痕のあと横ナデで器面調整されている。17〜20の色調は茶褐色で、胎土には角閃石や斜長石を含む。

第20図の1は「く」の字状に屈曲する胴部の資料である。文様は、屈曲部より上位に施文されており、縄文施文のあと沈線を加えている。内面は巻貝条痕のあとヘラミガキである。2は、摩滅が著しいが細かい縄文を施文後に沈線を加えている。内面は横方向のヘラミガキで器面調整している。3の外面は縄文を施文後に太い沈線を加え、横ナデで磨消縄文を作り出している。内面は削り状であるが、摩滅している。4は沈線で文様を描いた後に、縄文を施文している。内面はナデ仕上げである。5は縄文施文後に沈線を加え、ヘラミガキしている。内面は条痕のあとにヘラミガキで仕上げている。以上の5点の色調は茶褐色で、胎土には角閃石や斜長石を含む。

第20図6〜17と第21〜24図は、文様構成がこれまで述べてきた資料と同じであるが、縄文が施文されない土器である。第20図6は口縁の外端部を肥厚させ、その部分に連続刺突文を加えている。器面は内外面ともに巻貝条痕施文のあとナデで器面調整している。7は口唇部に刻目を加え、肥厚した口縁部外面に太い刺突文を描いている。内面は条痕のあとナデで器面調整をしている。8は摩滅しているが、外面は太い沈線のあとにナデ、内面は横方向のヘラミガキの器面調整である。9は肥厚した口縁部の文様帯に沈線で文様を描き、口唇部にも浅い刻目が認められる。内面はナデ調整である。10も口縁部外面を肥厚し文様帯を作り、縦長の連続刺突文を施文している。内面は横ナデである。6〜10の土器の色調は、茶褐色や暗褐色で、胎土には角閃石や斜長石を含む。

11は口縁の外端部を肥厚させ、横方向の条痕で器面調整し、連続刺突文を施文している。12は外反し、緩やかに波状になる口縁部の外面に、沈線が1条めぐる。器面はナデ調整である。13も緩やかに波状になる口縁部が外反し、口縁部に刺突文、頸部にも沈線文が施文されている。内面は横方向のヘラミガキである。14は外反する口縁端部が肥厚し、沈線文と刺突文が施文されている。器面は内外面とも横方向のヘラミガキである。15は緩やかに波状になる口縁部である。文様は肥厚した口縁部とその下位の頸部に施文されており、内外面ともにヘラミガキで仕上げられている。16は口縁端部を緩く屈曲し、外面を文様帯とし、沈線文を施文している。器面は外面が横ナデ、内面は横ナデとヘラミガキである。17は緩やかに波状になる口縁部の頂部である。外面には刺突文と沈線文があり、内面には巻貝条痕が残されている。11〜17の色調は15が黄褐色、17が赤褐色である以外は茶褐色である。またいずれの土器の胎土にも角閃石や斜長石が含まれる。

第21図の1は緩やかな波状口縁になる口縁部の頂部で、口縁部外面から内面までと、頸部に

文様が描かれている。また竹管状の施文具による刺突も見られる。器面は横方向のヘラミガキである。2は外反し、緩く波状になる口縁部で、口唇部には連続した刻目が加えられ、外面には沈線文が施文されている。内面は巻貝条痕のあとナデで器面調整されている。3も緩く波状になる口縁部の頂部である。口唇部には頂部のみ刻目が加えられ、外面には沈線文が描かれている。器面は内外面とも横方向のナデ仕上げである。4は外反する口縁部の外面と頸部に沈線が巡り、その間は横ナデで、内面は条痕のあと横ナデである。5は緩い波状口縁の頂部近くの口縁部である。外面は巻貝条痕のあと横ナデされ、沈線文が描かれている。内面は横方向の巻貝条痕である。6も外反する口縁部で、外面には太い沈線で直線的な文様が描かれている。器面は内外面ともに横方向のヘラミガキである。1～6の色調は4と5が明茶褐色である以外は茶褐色である。胎土にはいずれも角閃石と斜長石を含む。

7は、外面の摩滅が著しいが、口縁部に平行に2条の沈線が廻っている。内面は巻貝条痕で器面調整されている。8も外反する口縁部に沿って2条の沈線が廻る。器面調整は、外面が横ナデで、内面は条痕のあと横ナデである。9は摩滅が著しい。外反する緩やかな波状口縁で、外面には口縁部に平行に沈線が巡り、頂部には弧文が施文されている。10は口縁部から胴部上位にかけての資料であるが、胴部に文様はなく、口縁部に平行に沈線が1条巡るのみである。また頸部には焼成後の穿孔がみられる。器面調整は内外面とも条痕のあとナデである。11も摩滅しているが、波状になる口縁部の内外面に刺突文と沈線文が描かれている。12は外反する口縁部で、口縁部に平行に沈線が巡り、途中に刺突文が施文されている。器面はナデとヘラミガキで調整されている。13は頸部から口縁部の資料である。外面は沈線文のあと丁寧なナデ、内面は巻貝条痕のあとナデで、器面調整されている。7～13の色調は10が赤褐色、11・13が黄褐色で、それ以外は茶褐色である。胎土には7点とも角閃石や斜長石が認められる。

第22図1は波状口縁の頂部の資料である。頂部には刻目があり、外面にも太い沈線で文様が描かれている。器面調整は内外面とも横ナデである。2は頸部から口縁部にかけての資料である。文様は頸部以下に施文され、口縁部にはない。器面は内外面とも横方向のヘラミガキで調整されている。3は波状口縁の頂部の資料で、頂部に刻目があり、外面には太い沈線で文様が描かれている。器面は巻貝条痕で粗く調整されており、さらに軽く横ナデで仕上げられている。4も頂部のみに刻目のある波状口縁の資料である。外面の文様は口縁部と頸部以下に施文されている。器面は外面が横ナデ、内面は巻貝条痕のあとナデで調整されている。5は口径が50cm以上になる胴部上位から口縁部にかけての資料である。外面の文様は口縁部に平行沈線、胴部に入り組文が太い沈線で描かれている。器面は内外面とも巻貝条痕のあと横ナデで調整されている。以上の土器の色調は4が黄褐色である以外は茶褐色で、胎土にはいずれも角閃石や斜長石が認められる。

6は頸部から口縁部にかけての資料で、文様は口縁部と頸部に直線的な沈線が施文されている。また、内面にも集中的に連続した刺突文が見られる。器面は内外面とも横ナデで調整されている。

7は胴部上位から口縁部の資料であるが、文様は胴部上位に平行に直線的な太い沈線文が施文されている。器面は内外面ともナデで調整されている。8は胴部から口縁部にかけての資料であるが、摩滅が著しく、口縁端部を欠く。文様は胴部の最大径部に渦巻文のみが描かれている。器面は外面が横ナデ、内面が横方向のヘラミガキで調整されている。9は口縁端部を丸く肥厚させ、その部分に文様を描いている。内外面とも横ナデで器面調整されている。以上の4点の色調は茶褐色で、胎土に角閃石や斜長石を含む。

第23図の1は口縁部から底部近くまである良好な資料である。口径は26.8cmで、器高は約28cmが推測できる。文様は外反し端部を肥厚した口縁部外面のみに施文され、それ以外には認められない。器面調整は内外面とも巻貝条痕で、そのあとナデである。色調は茶褐色で、胎土に角閃石や斜長石を含む。

2の外面は沈線のあとヘラミガキで、内面も横方向の丁寧なヘラミガキである。3は胴部上位の資料である。外面は沈線施文のあと横ナデ、内面は条痕のあとナデで器面調整されている。4は屈曲する頸部の資料で、胴部の上位に沈線で描いた文様があり、ナデ調整されている。内面は条痕のあとナデである。5は胴部上位から頸部の資料で、外面には頸部を廻る沈線と曲線文が巻貝条痕のあと描かれ、ナデられている。内面は巻貝条痕のあとナデである。6は胴部上位の資料で、渦巻き状の沈線文のあとナデで調整され、内面は条痕である。7も胴部上位の資料で、外面に沈線文が描かれているが、内外面とも摩滅のため器面調整は観察できない。8は胴部中位の資料で、沈線による入り組文が施文されている。内面は巻貝条痕のあとナデで器面調整されている。9は胴部中位から下位の資料で外面に太い沈線による入り組文が施文され、内面に条痕が観察できるが、摩滅が著しい。2～9資料の色調は、2・4が赤褐色で5・7が黄褐色である以外は茶褐色である。またいずれの資料の胎土にも角閃石や斜長石が含まれるが、7には石英も認められる。

第24図1は頸部で、外面に胴部とつながる頸部文様が沈線で施文されている。器面調整は内外面とも横ナデである。2は胴部上位の部位と考える。外面の文様はナデのあと施文されている。内面は条痕のあと横ナデである。3は胴部で、巻貝条痕のあと沈線文が施文され、ナデ消されている。内面は巻貝条痕のあとナデている。4は頸部と考える。文様は巻貝条痕のあと施文され、ナデられている。内面も巻貝条痕のあとナデである。5は胴部上位の資料で、外面は条痕のあと平滑にナデられ、沈線文を施文している。また内面は巻貝条痕のあと横ナデで器面調整されている。6は胴部中位から頸部にかけての資料で、最大径は32cmである。外面は文様施文後にナデられ、内面は条痕の後横ナデで器面調整されている。7の外面は条痕のあとナデられ、沈線文が施文されている。内面は条痕のあと横ナデで器面調整されている。1～7の土器の色調は6が赤褐色、7が黄褐色である以外は茶褐色である。また胎土には7点とも角閃石や斜長石が含まれる。

第25図1～4は口縁部の外端部や、胴部の上位に縄文や疑似縄文を施文した土器である。1は緩い波状口縁の外面に疑似縄文が施文されている。器面は内外面ともナデで調整されている。2も

1と同じ器形になると考えるが、波頂部の端部が内湾しない。文様は口縁外端部に疑似縄文が施文されている。器面は内外面ともにナデで調整されている。3は直線的に延びる口縁部の外端部に縄文が施文されている。器面は内面が横ナデ、外面が横方向の丁寧なヘラミガキで調整されている。4は胴部上位の資料であるが、外面は頸部を横ナデ、肩部と胴部最大径部に疑似縄文を施文し、その間は条痕が残されている。内面は横ナデで器面調整されている。これら4点の色調は4が暗茶褐色で、それ以外は茶褐色である。胎土はいずれも角閃石や斜長石を含むが、4には金色の雲母が多く含まれる。

第25図5～9と第26・27図は無文又は条痕文土器である。第25図5～9は口縁部が内湾または直線的なもので、鉢形土器と考える。5は内外面横ナデで器面調整されている。6は内外面横方向の条痕のあと、横ナデで器面調整している。7は内面が横ナデやヘラミガキであるが、外面は横ナデである。8は内外面とも横ナデで器面調整しているが、摩滅している。9は破片の下端が屈曲しており、浅い鉢形土器の可能性がある。器面は外面を横ナデ、内面は横方向のヘラミガキで調整している。5～9の資料の色調は5・9が茶褐色、6・7が赤褐色、8が黄褐色で、胎土には角閃石や斜長石を含むが、5・8には角閃石が多く認められる。

第26図の1～6は口縁部の形態や色調・焼成から同一個体と考えられる。外反する口縁部の外端部が肥厚し、断面三角形に形成されている。器面は内外面とも横方向のヘラミガキで、色調は茶褐色で、胎土に角閃石と斜長石を含む。7は内外面とも横方向の巻貝条痕のあとナデである。8・10は内外面ともナデで、器面調整している。9は内外面とも条痕のあと横ナデである。11は胴部から口縁部の資料である。外面は巻貝条痕のあとナデ、内面は横方向のヘラミガキで器面調整されている。12は頸部から口縁部の資料で、内外面横ナデである。13は緩い波状口縁で、器面は内外面とも巻貝条痕のあとナデで調整されている。14は、外面が横ナデ、内面が横方向のヘラミガキで器面調整されている。15は口縁端部のみ横ナデで、他は内外面とも横方向のヘラミガキである。16は口径30.8cmの土器で、器面は内外面ともに、条痕のあとナデで調整している。以上7～16の色調は7・14が明褐色、11が黄褐色である以外は茶褐色である。いずれも胎土には角閃石や斜長石を含むが、10には金色の雲母も認められる。

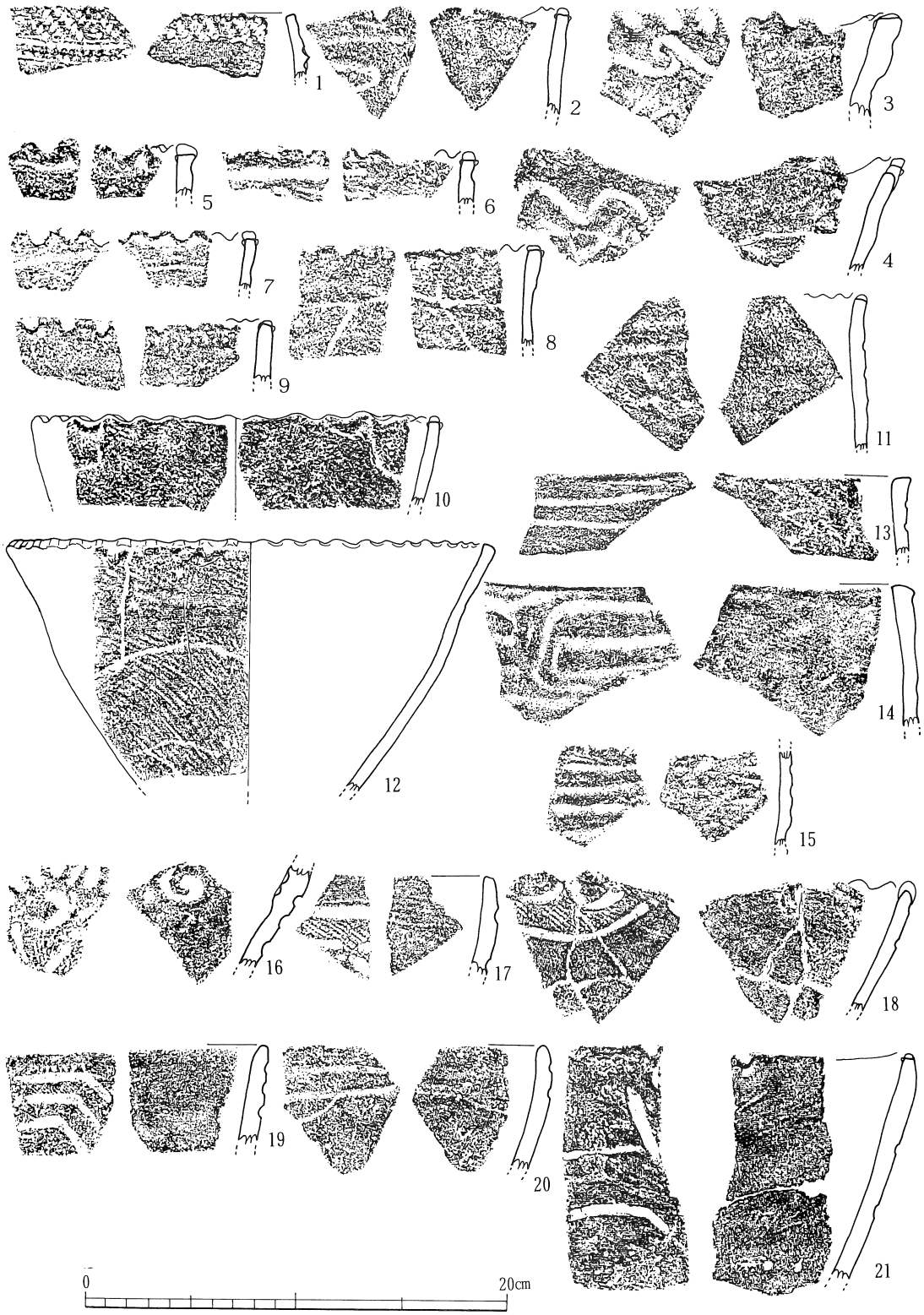
第27図1は口縁部の一部が突起する。内外面横ナデの器面調整である。2は内外面とも横方向のナデやヘラミガキで、器面調整されている。3は口縁端部を折返し成形している。器面は内外面ともナデである。4の器面は内外面とも巻貝条痕で、内面はさらにナデている。頸部には焼成後の穿孔があるが貫通していない。5は口径36cmの深鉢である。器面は内外面とも横ナデで調整されている。6は口径22.3cmの深鉢で、器面は内外面ともヘラミガキで調整されている。7は摩滅のため器面調整は不明である。8は緩やかな波状口縁で、器面は内外とも巻貝条痕のあとナデである。9は胴部の資料であるが、器面は内外面とも横ナデで調整されている。これら9点の資料の色調は茶褐色で、胎土に角閃石や斜長石を含む。特に9には角閃石が目立つ。

以上の土器は、第16図16〜21・第17〜27図の土器は文様や器形から小池原上層式土器の鉢形土器と深鉢形土器、そしてそれに伴う無文土器と考える。ただ、中には第22図6・8・9のように、小池原上層式土器に後続する鐘崎式土器も含まれている。また、無文土器の中の第27図6も鐘崎式土器に伴う可能性が強い。

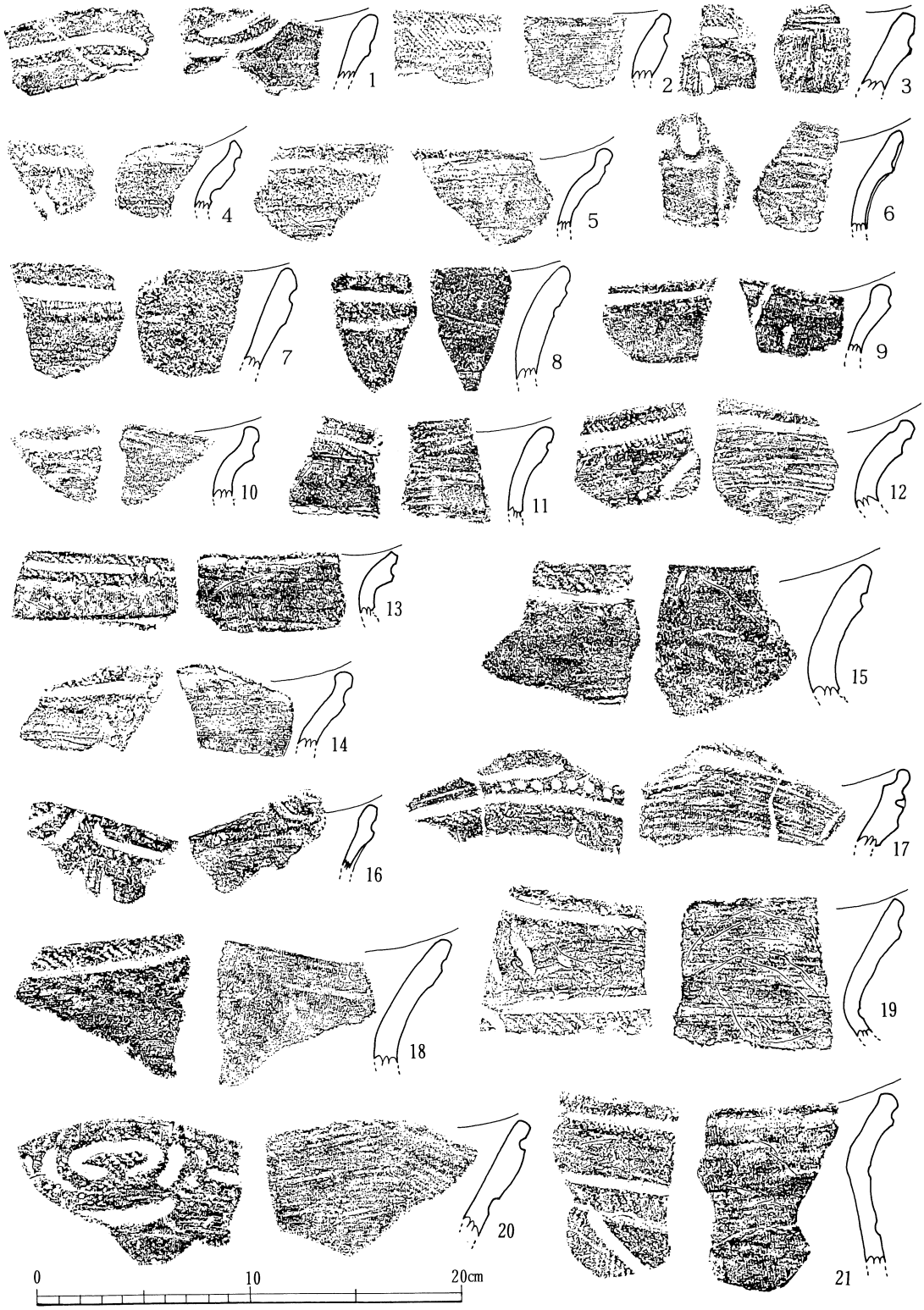
第28図1は頸部で、くびれ部には連続刺突文がある。2の外面は縄文施文後に沈線を加えヘラミガキしている。内面は横ナデである。3は摩滅が著しく、沈線文のみ観察できる。4の外面は巻貝条痕のあと疑似縄文を施文し、沈線を加えている。内面は横ナデで器面調整している。5の胴部最大径は28.6cmで、外面は縄文のあと沈線が加えられ、ヘラミガキされている。内面は横ナデやヘラミガキで器面調整されている。6には文様がなく、内外面ともヘラミガキである。以上6点の色調は茶褐色で、胎土に角閃石や斜長石を含む。これらは、縄文後期中葉の西平式土器とそれに伴う土器である。7は緩く波状になる口縁部で、内面に2条、外面に一条の沈線がめぐる。器面は内面が横方向のヘラミガキ、外面は横ナデである。8は胴部が屈曲する資料で、外面には横ナデのあと細い沈線文が施文され、内面は横ナデである。9は胴部が鋭く屈曲し、外面には段が生じている。外面は横方向のヘラミガキ、内面はナデである。10が胴部が「く」の字状に屈曲し、外面には2条の細い沈線がめぐる。内外面ともにナデで器面調整されている。11の胴部も鋭く屈曲する。外面は内外面ともに条痕で器面調整され、さらに外面の屈曲部上位は横ナデしている。12の胴部の径は30.8cmで、「く」の字状に屈曲する。外面は屈曲部の上位に細い沈線で弧文と直線文が施文され、その下位には小さい段が付いている。器面は外面が条痕のあと、屈曲部下位は横ナデで、内面は横ナデである。以上6点の色調は茶褐色で、胎土には角閃石や斜長石を含む。第29図は、口径45cmで、胴部の屈曲部上位に段が生じている。器面は外面は屈曲部から上位が条痕で下位はナデである。内面は底部に近いほうに条痕が認められるが、大部分は横方向のヘラミガキである。色調は茶褐色で、胎土に角閃石や斜長石を含む。

2〜4は前述の小池原上層式土器に伴う無文度器の可能性もある。いずれも内外面ともに、巻貝条痕で器面調整され、2・4は横方向のヘラミガキで仕上げられている。色調は、2が黄褐色、3が明褐色、4が暗茶褐色で、胎土に角閃石や斜長石を含む。

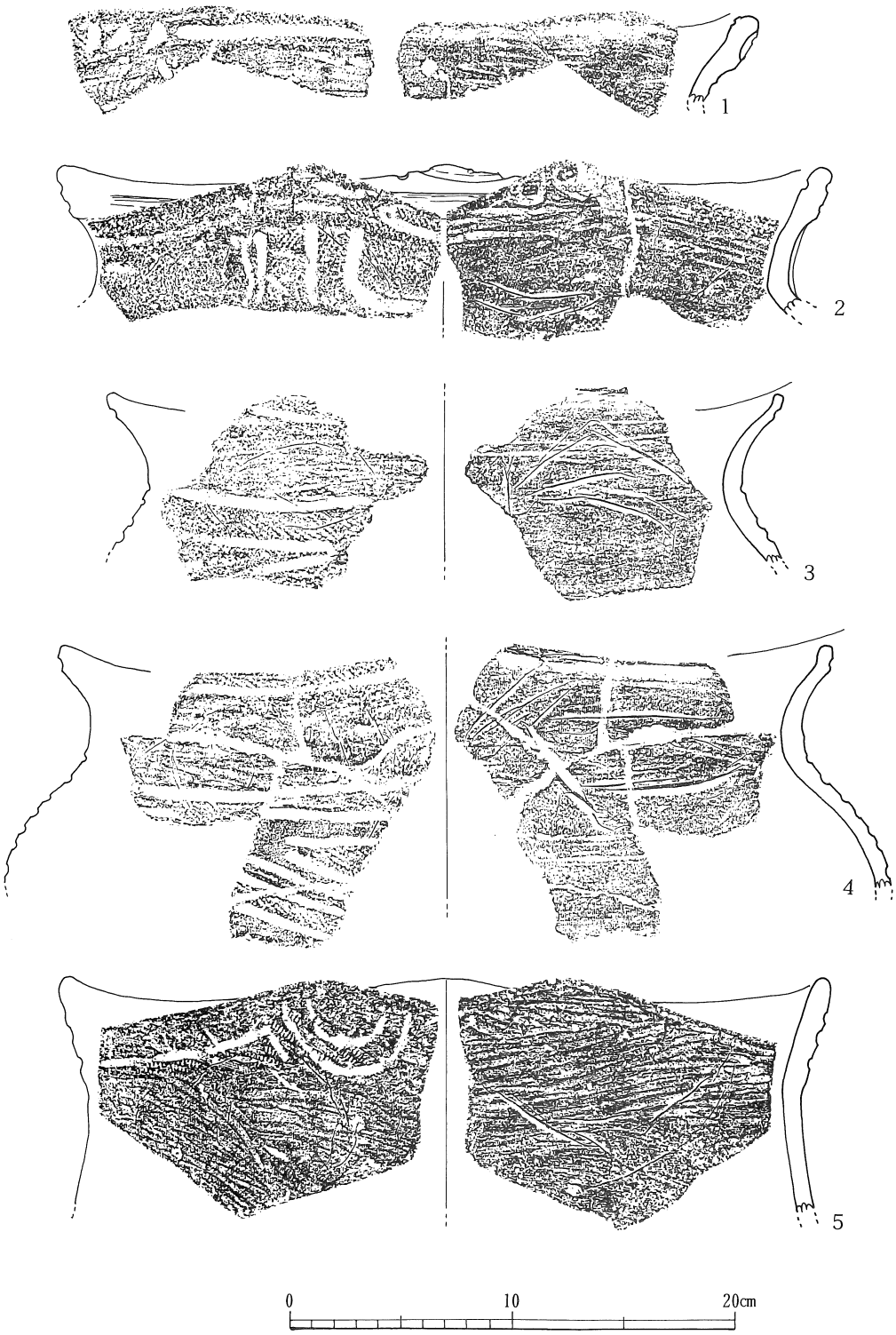
5〜7は口縁部外面に突帯が1条めぐる土器である。5・6は内傾する口縁部外面に断面が三角形の突帯がめぐる。器面は内外面ともにナデで調整されているが、6の内面には条痕が残る。7は摩滅が著しく、器面の観察はできないが、外傾する口縁部に沿って突帯が1条めぐっている。これらの土器の色調は、5が黒褐色、6・7は茶褐色であり、胎土に角閃石や斜長石を含む。8〜16は、口縁部外面に刻目突帯が一条めぐる土器である。8〜10は内傾する口縁部の先端がやや外反する。器面は刻目突帯部が横ナデされているが、8・10の外面、8・9の内面には条痕の痕跡が残る。11・12も内傾する口縁部に刻目突帯が施文されているが、11の刻目突帯は小さい。器面は11が内外面とも条痕のあとナデ、12はナデで調整されている。13は大き



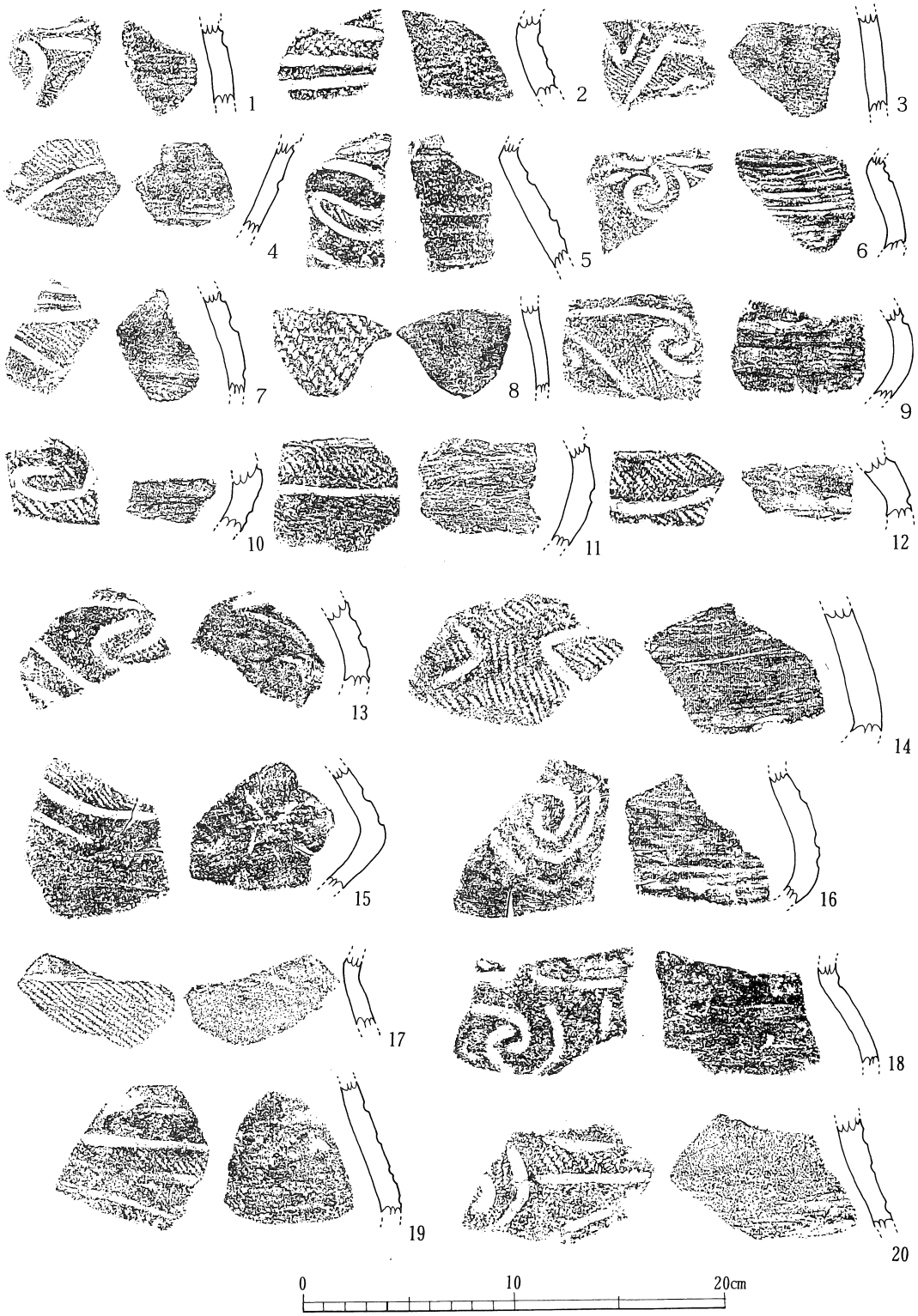
第16図　尾畑遺跡南Ⅰ区包含層出土縄文土器実測図(1)



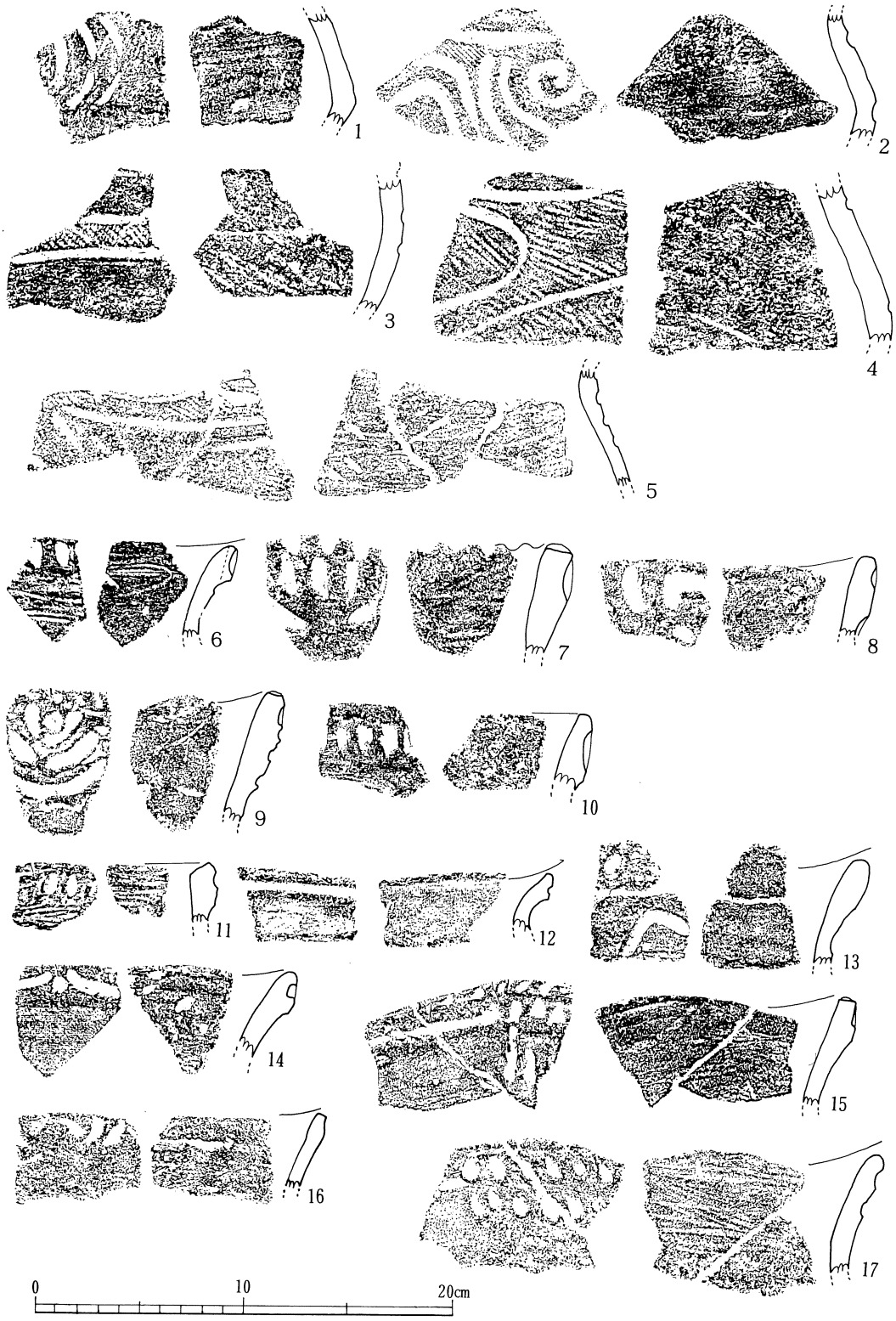
第17図　尾畑遺跡南Ⅰ区包含層出土縄文土器実測図(2)



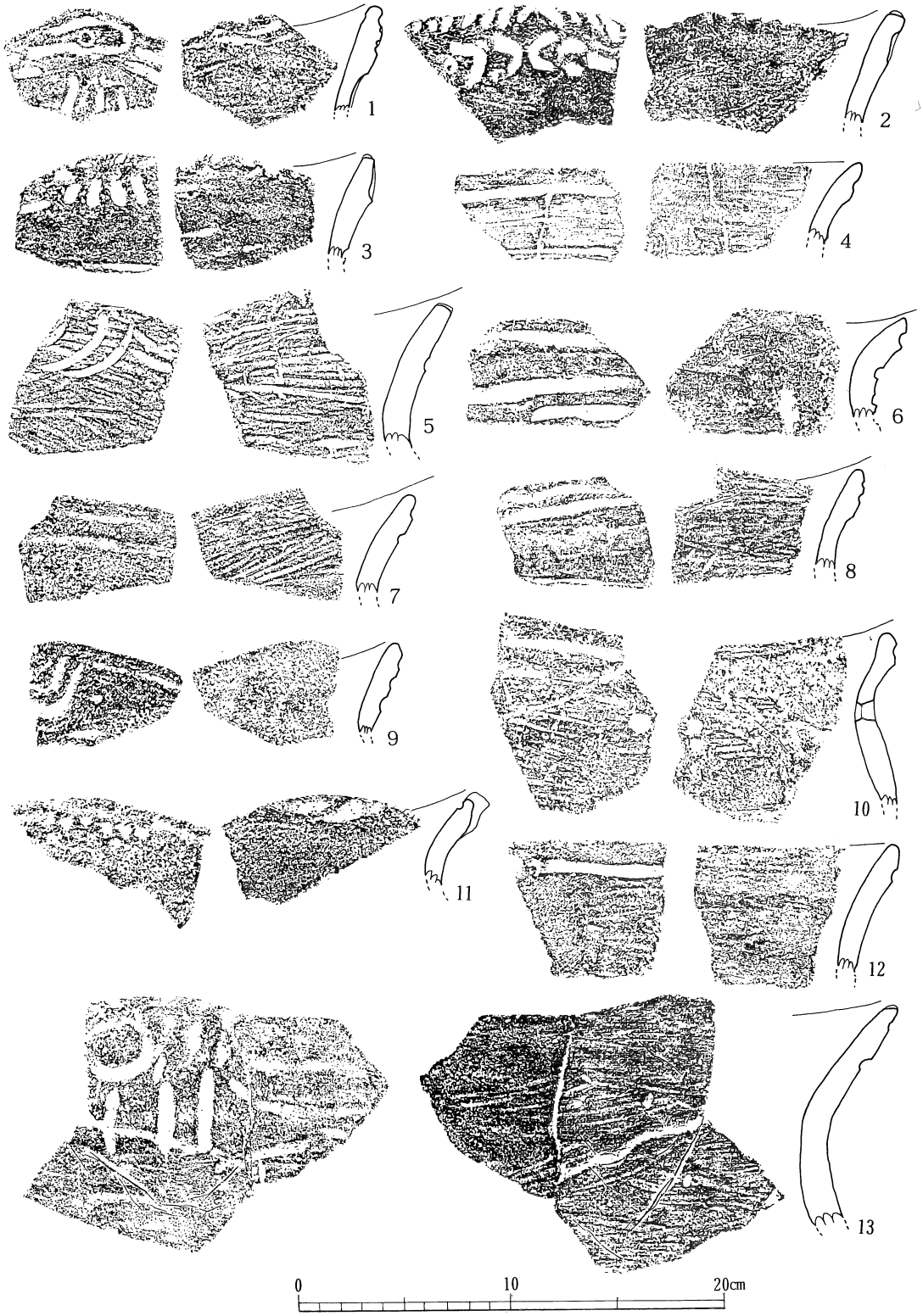
第18図　尾畑遺跡南Ⅰ区包含層出土縄文土器実測図(3)



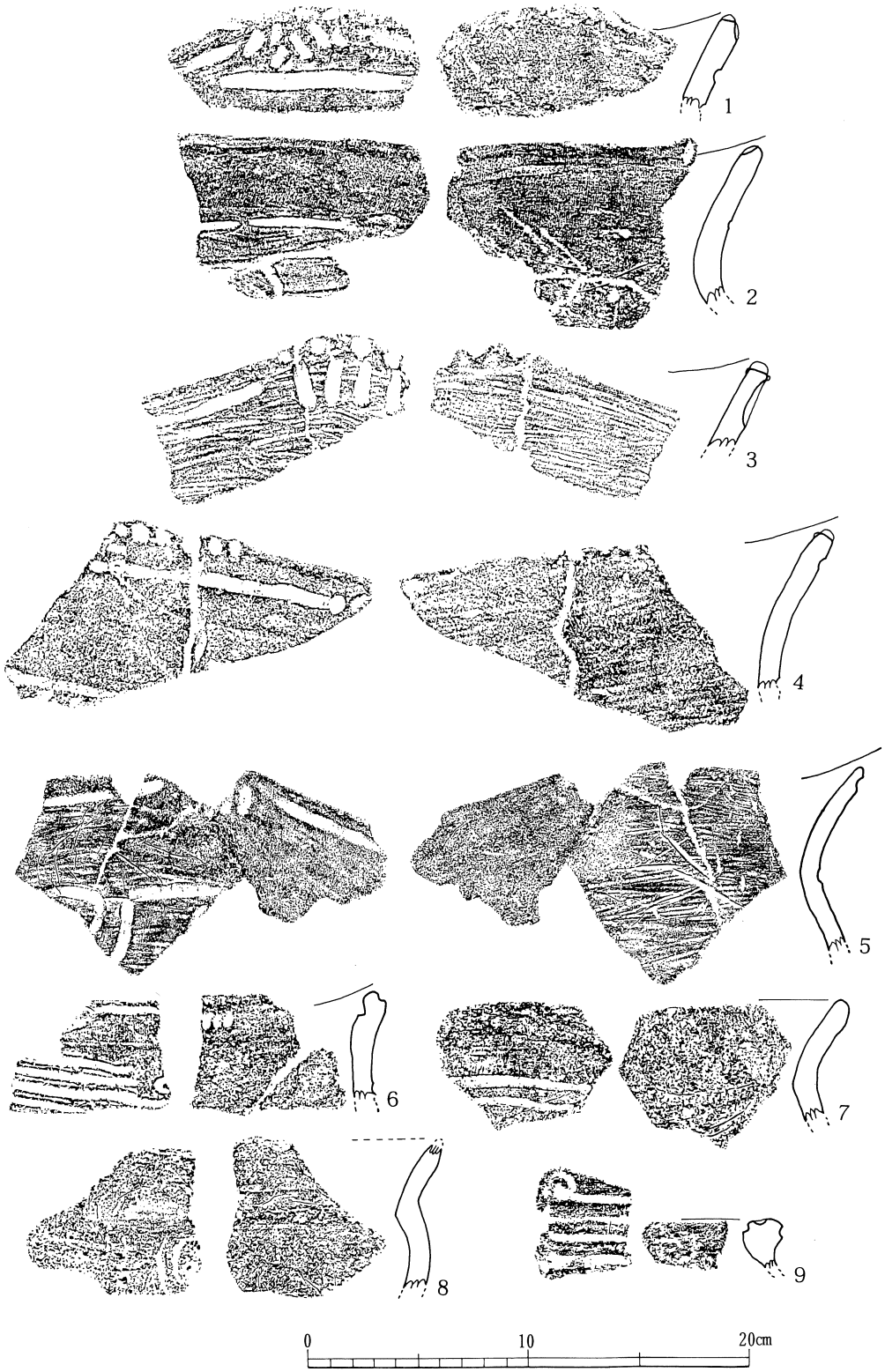
第19図　尾畑遺跡南Ⅰ区包含層出土縄文土器実測図(4)



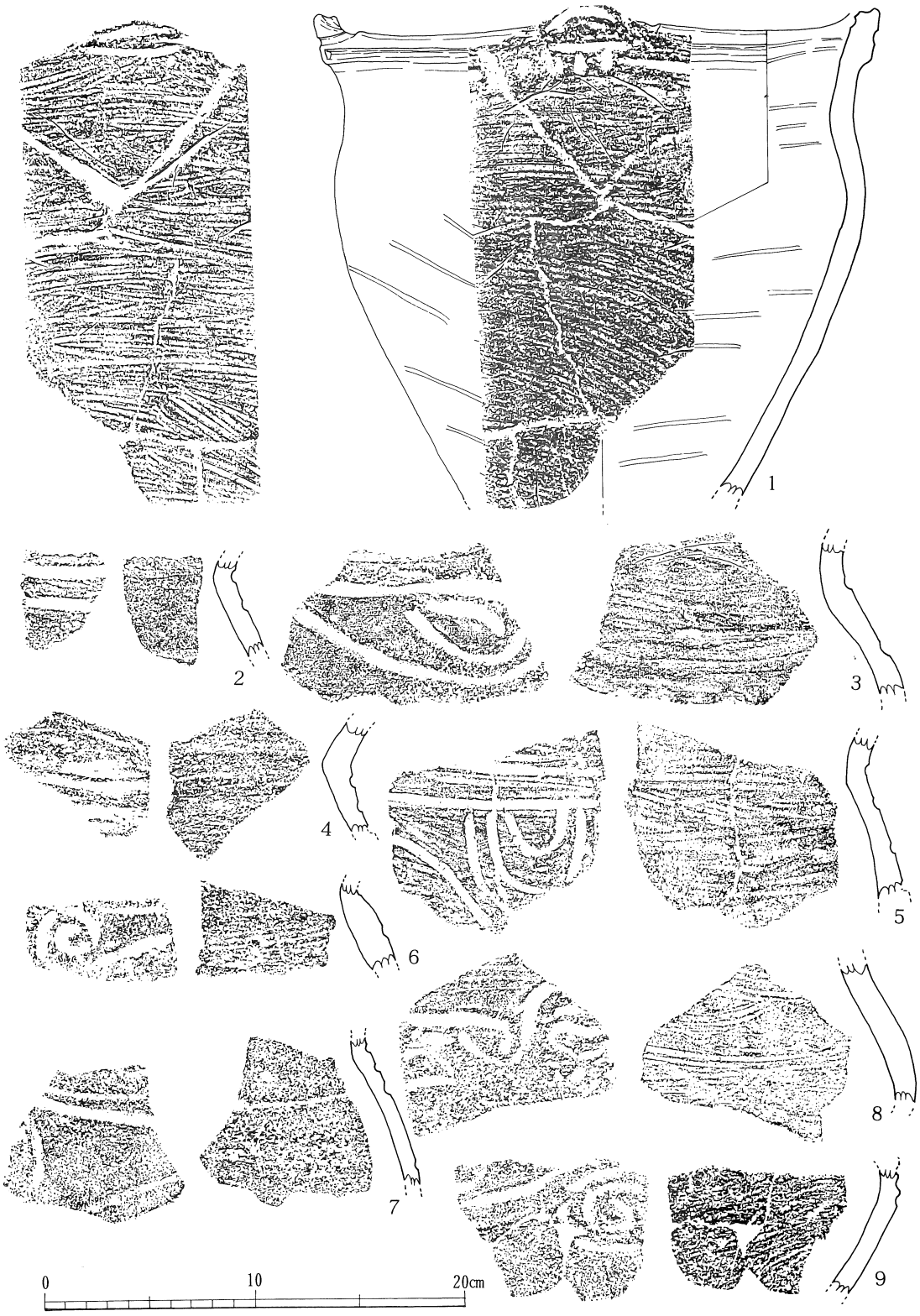
第20図　尾畑遺跡南Ⅰ区包含層出土縄文土器実測図(5)



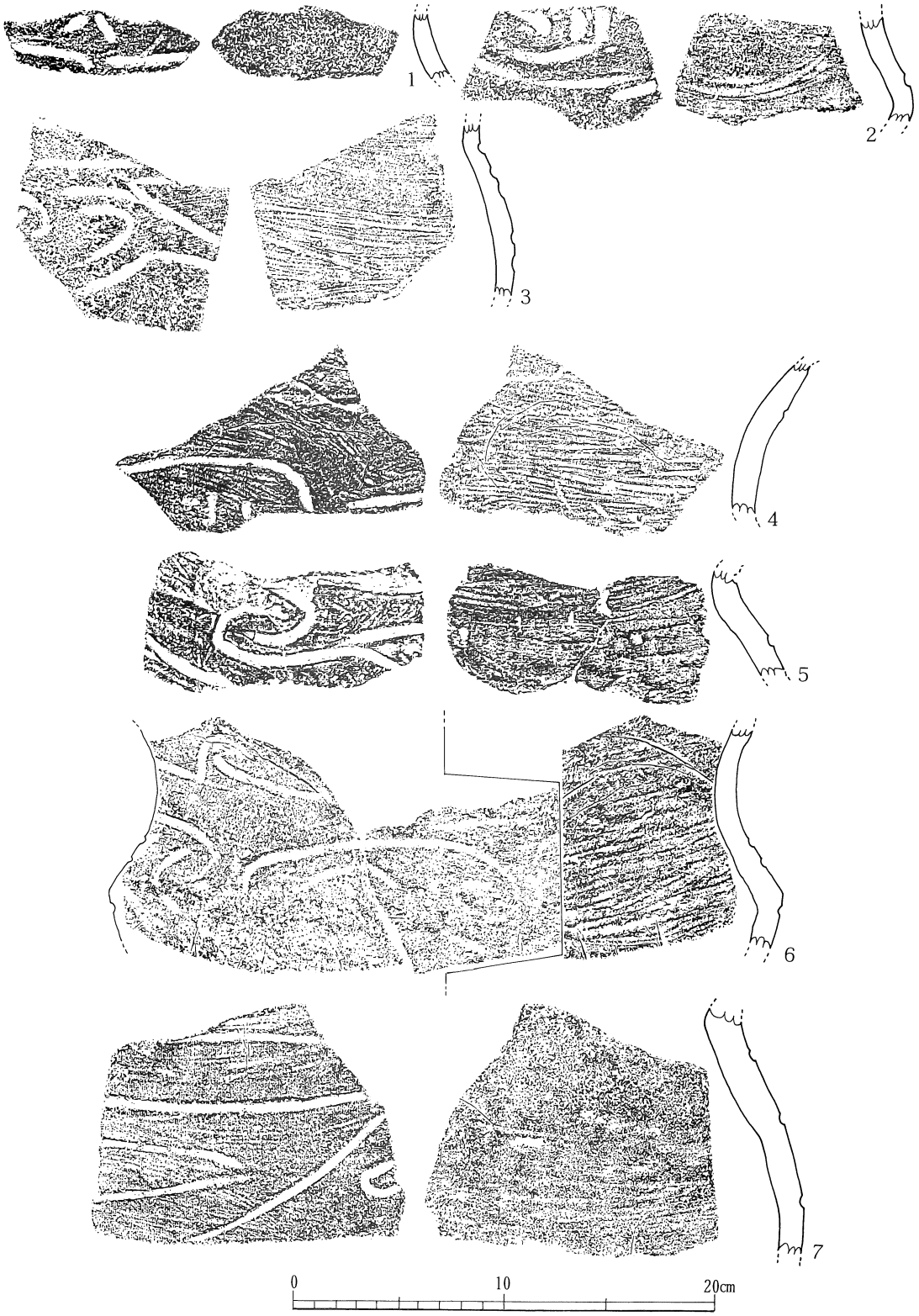
第21図　尾畑遺跡南Ⅰ区包含層出土縄文土器実測図(6)



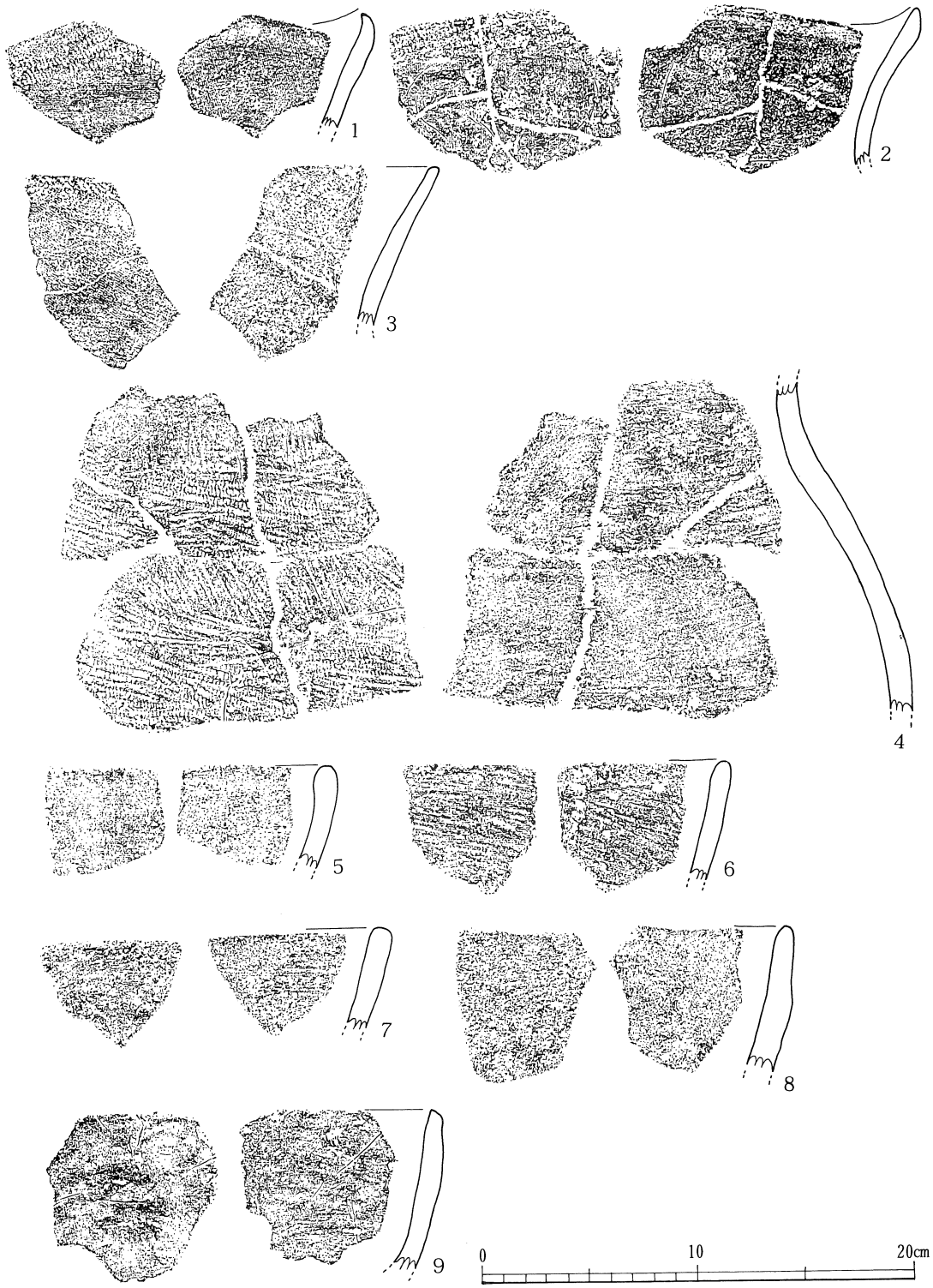
第22図　尾畑遺跡南Ⅰ区包含層出土縄文土器実測図(7)



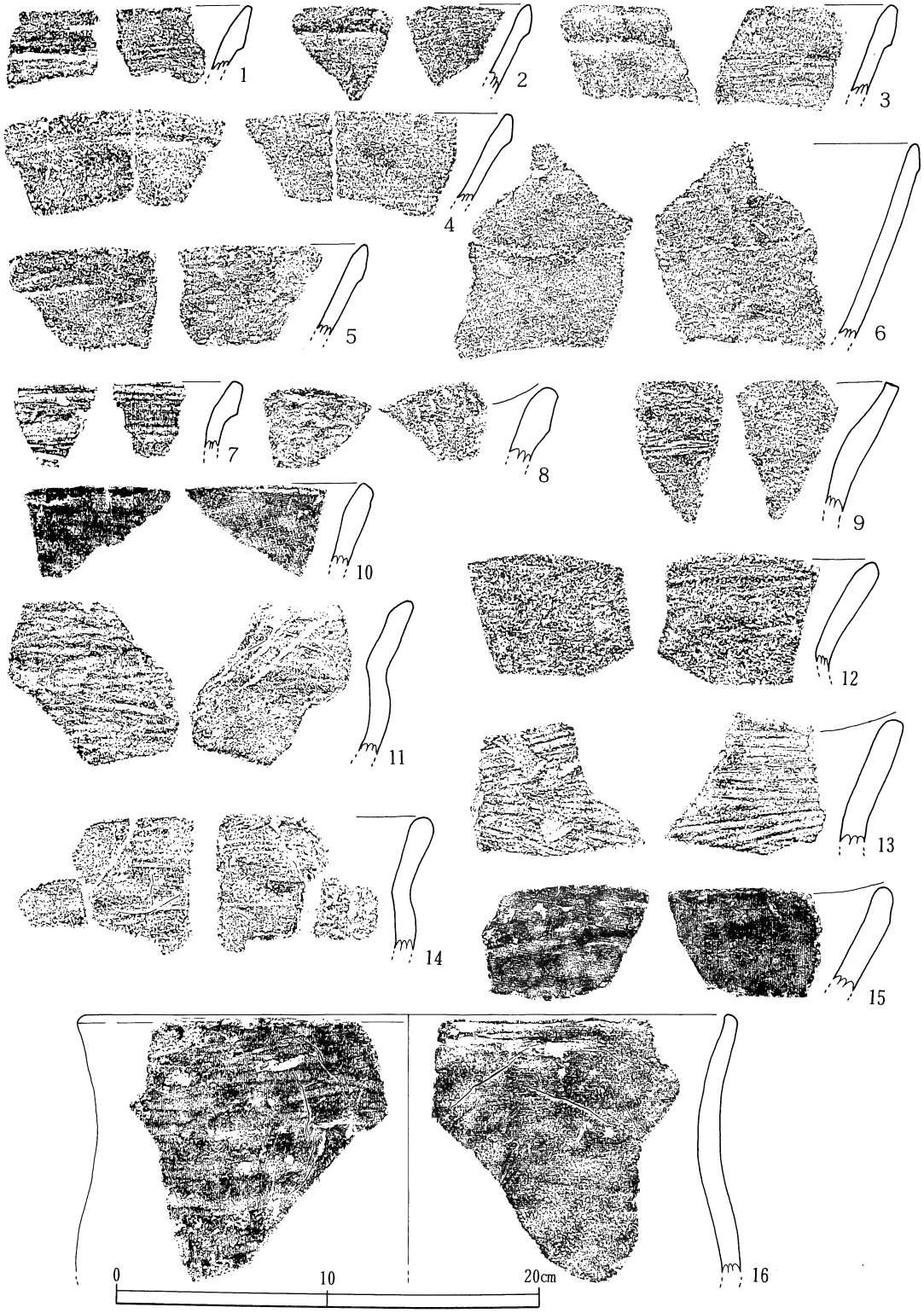
第23図　尾畑遺跡南Ⅰ区包含層出土縄文土器実測図(8)



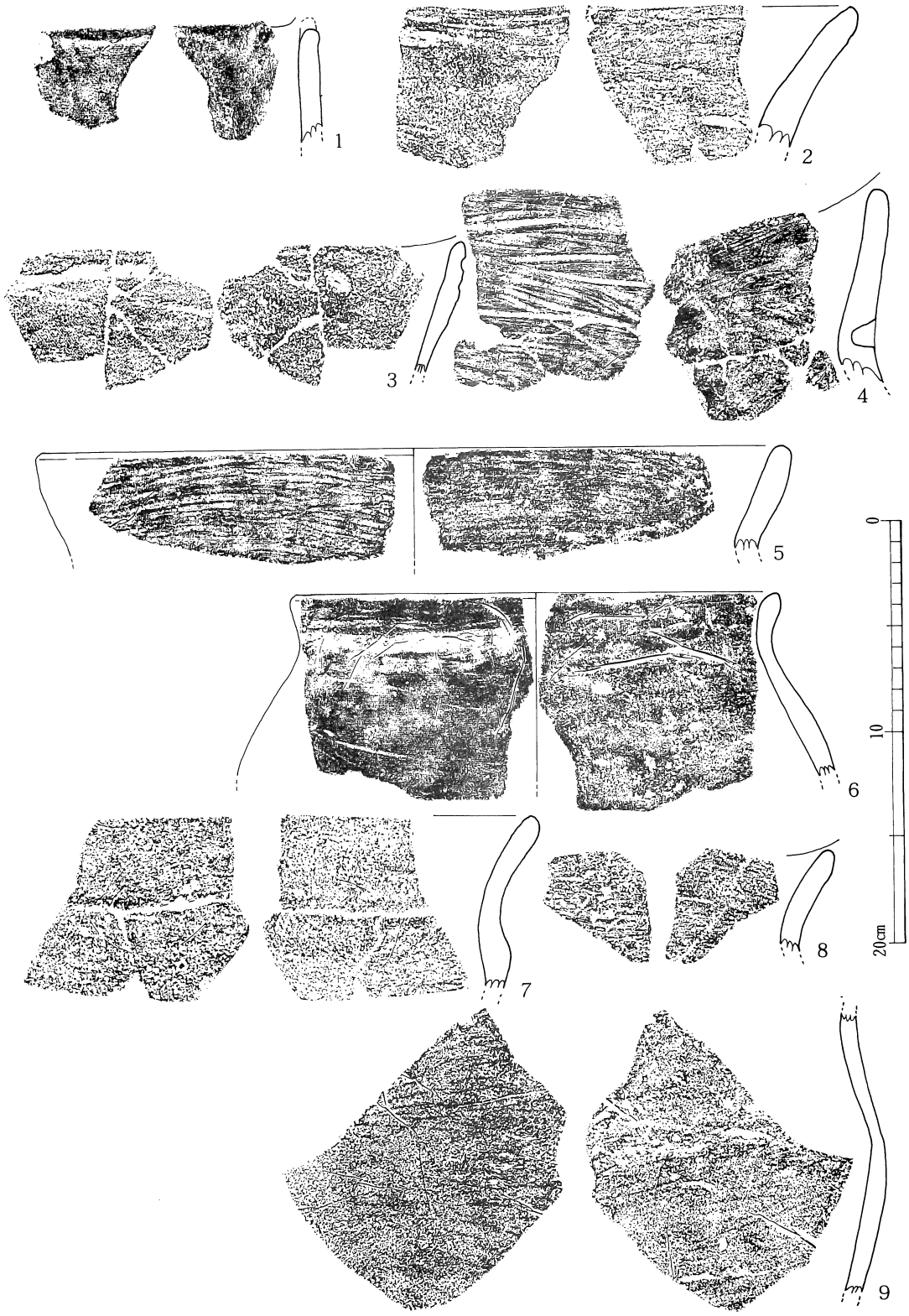
第24図　尾畑遺跡南Ⅰ区包含層出土縄文土器実測図(9)



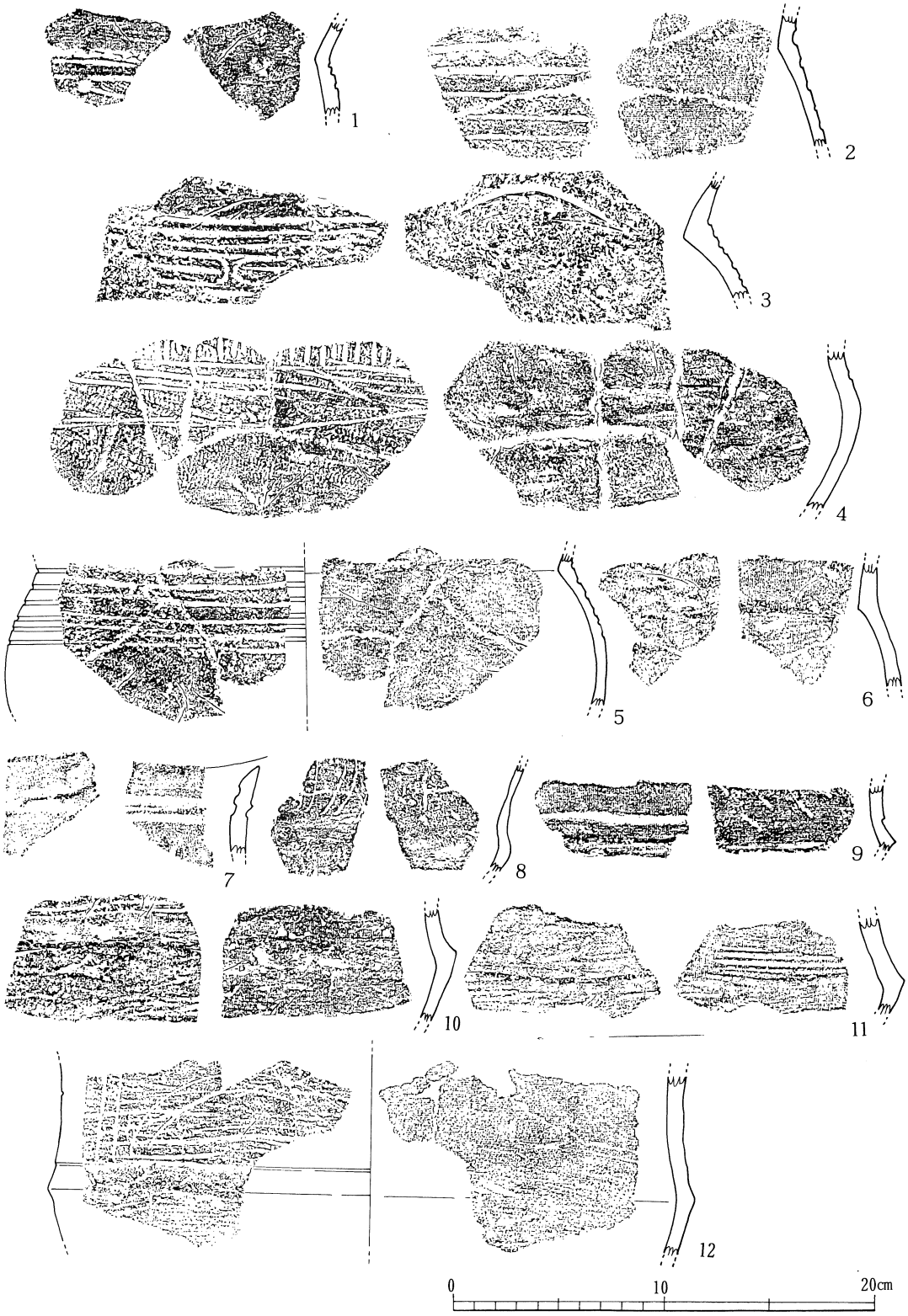
第25図　尾畑遺跡南Ⅰ区包含層出土縄文土器実測図(10)



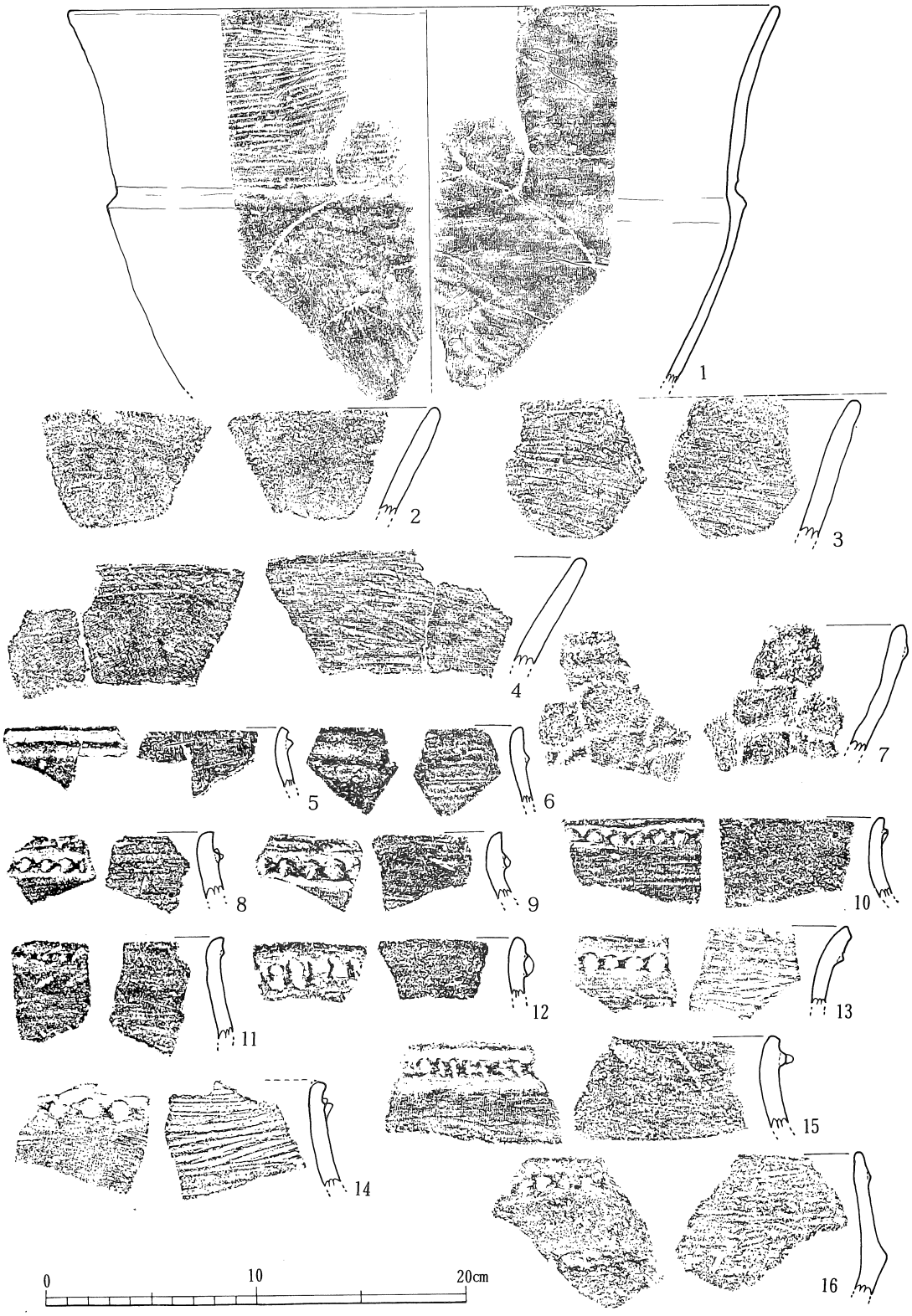
第26図　尾畑遺跡南Ⅰ区包含層出土縄文土器実測図(11)



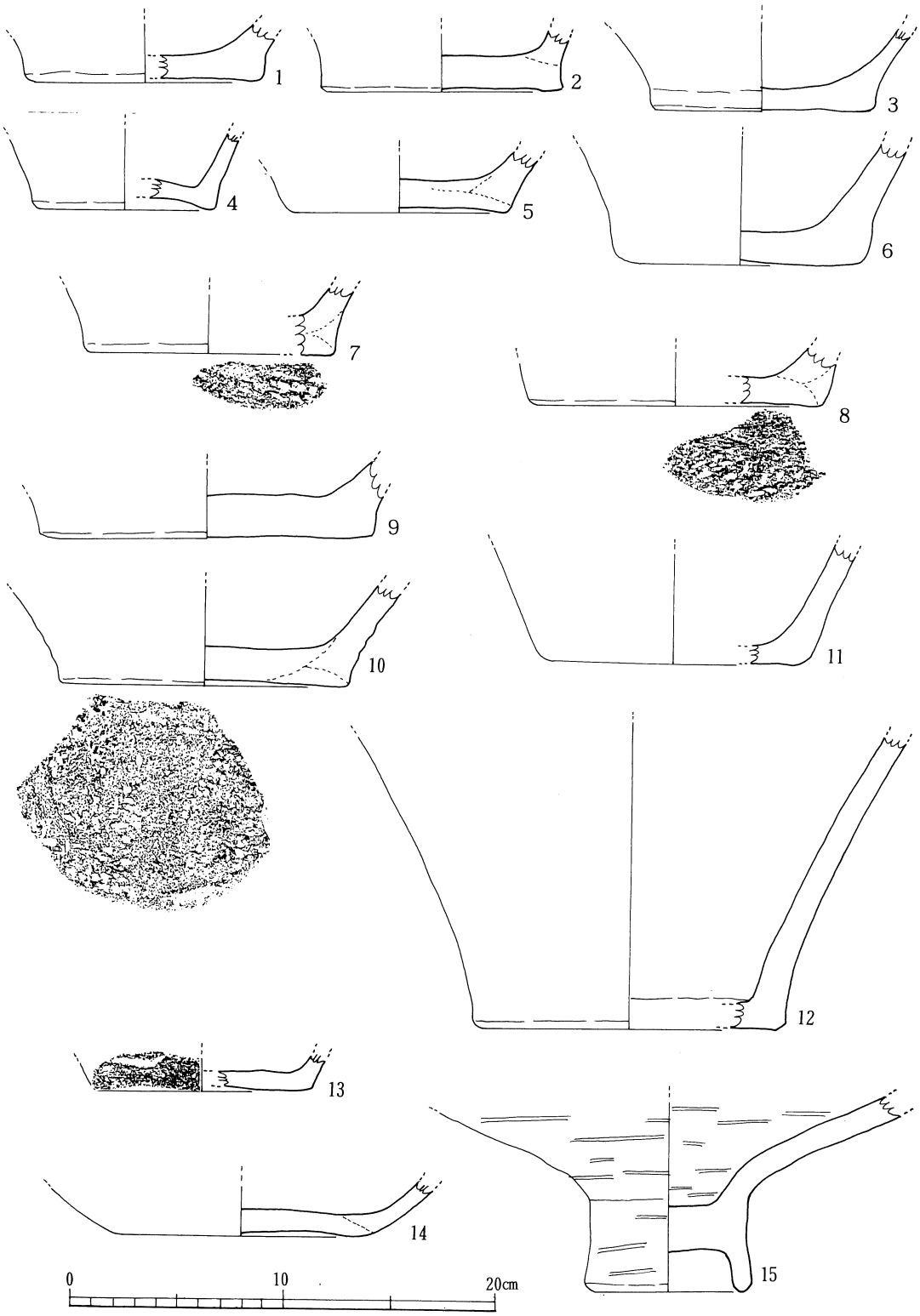
第27図　尾畑遺跡南Ⅰ区包含層出土縄文土器実測図(12)



第28図　尾畑遺跡南Ⅰ区包含層出土縄文土器実測図(13)



第29図　尾畑遺跡南Ⅰ区包含層出土縄文土器実測図(14)

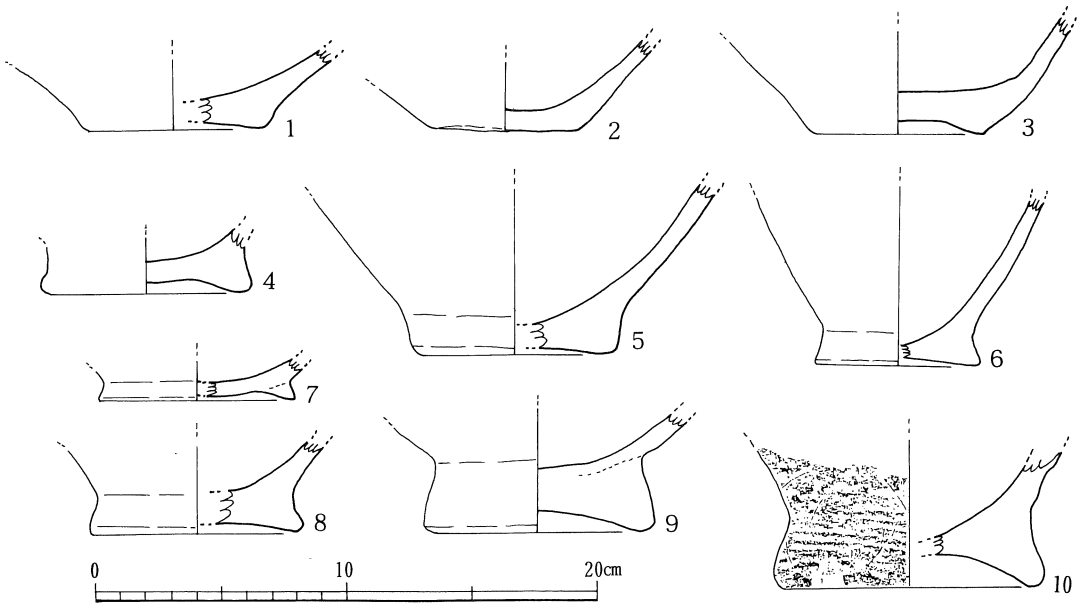


第30図　尾畑遺跡南Ⅰ区包含層出土縄文土器実測図(15)

く外反する口縁部で、刻目突帯周辺はナデであるが、それ以外は内面は条痕が残されている。14の器面は外面が横ナデであるが、内面は条痕のあと軽くナデて調整している。15の外面は条痕のあとナデているが、内面はナデだけで器面調整されている。16は胴部の屈曲部から口縁部の資料である。胴部の屈曲部には刻目はない。器面は、外面が横ナデで、内面は条痕のあとナデで調整されている。8～16の土器の色調は9が黒褐色、11・12が灰黒色、13が赤褐色である以外は茶褐色で、胎土にはいずれも角閃石や斜長石を含む。

以上の第28図7～12と第29図の土器は縄文晩期後半に属し、特に刻目突帯文の深鉢形土器は縄文晩期末である。第30・31図は底部である。第30図の1～13は4のような上げ底気味のものもあるが、ほとんどが接地部分の広い平底である。器面調整はいずれも条痕のあと外面は横方向のナデ、内面はヘラミガキで行われているが、ただ、7・8・10の接地部には縄目の圧痕が観察できる。また、13の外面には沈線文が施文されている。14は丁寧に内外面をヘラミガキした土器である。15は脚付きの皿状土器と考えられる。器面は内外面とも条痕のあとナデ調整である。これらの底部の色調は茶褐や暗褐色で、胎土に角閃石や斜長石を含むが、14には石英も認められる。以上の底部は縄文後期前半の土器と考える。第31図の1・3の底部はレンズ状の上げ底になり、内外面ともヘラミガキされている。色調は茶褐色で、胎土に角閃石や斜長石を含む。これら西平式土器の底部と考える。

4～10は底部の端部が外側に張り出す形態である。器面は内外面とも横ナデで調整されているが、10には条痕が残る。色調は明褐色や茶褐色・黄褐色である。胎土には角閃石や斜長石を含むが、8には角閃石が多く認められる。これらの底部は刻目突帯のものと考える。



第31図　尾畑遺跡南Ⅰ区包含層出土縄文土器実測図(16)

南Ⅰ区出土石器（第33図～第36図、表１）

南地区は北Ⅱ区に比べると稀薄な包含状況であるが、各種の石器が出土している。石器は縄文時代を中心とし、粘板岩を素材とした磨製石包丁など弥生時代石器も若干出土している。

第32図の石包丁は６号竪穴からの出土で、穿孔部からの欠損品である。

縄文時代石器は第33図～第36図のとおり、その器種は打製石鏃、尖頭状石器、磨製石斧、扁平打製石斧、砥石、磨石、敲打石などである。

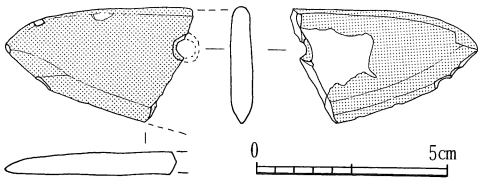
縄文時代石器の大部分は後期に属するものと考えられるが、石鏃の一部に鍬形鏃や比較的抉の深い長二等辺三角形の形態をもつ物があり、これらは早期あるいは前期の所産と思われる。

また、第33図７、８はいわゆる有肩の五角形状を呈する駒形鏃であり、縄文時代後期以降の遺物として把握できる物である。

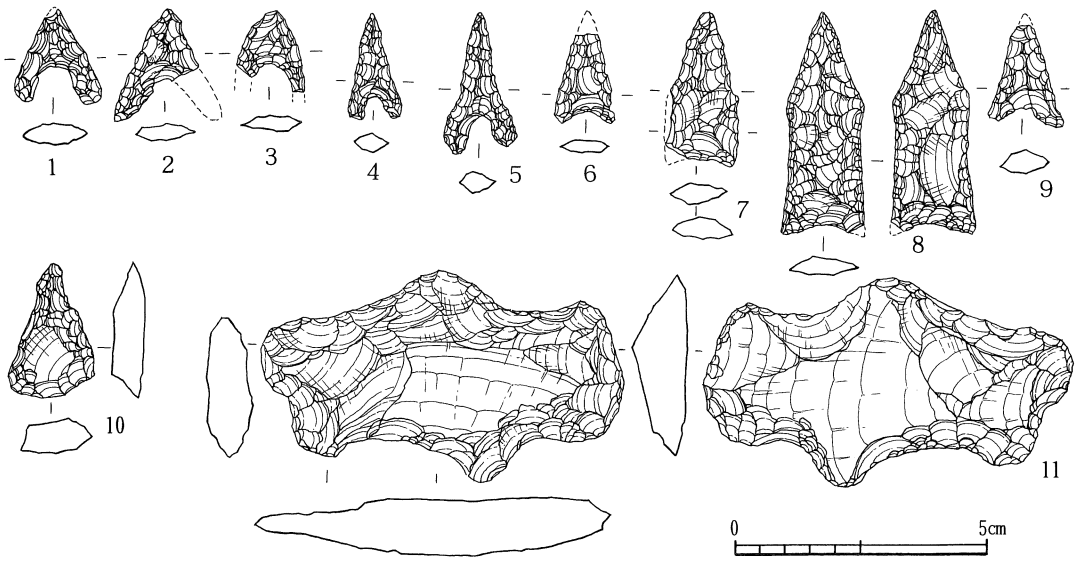
磨製石斧は定角式石斧や敲打整形の後にミガキした柱状石斧など多様である。第36図16はいわゆる分銅型石斧と見られるが、第35図26の大型品とは明らかに違った用途を考えなければならない。この形態の石斧は県内では後期あるいは晩期遺跡から若干出土しているが、非常に扁平な断面を持ち、部分的にミガキするといった特徴は類似するものの、当遺物のような糸巻状の形態は皆無である。

第34・35図17～27は扁平打製石斧である。細身の物から刃部幅広さらに鋤型の大型石斧と様々な形態が出土しており、用途によって使い分けられたものと考えられる。

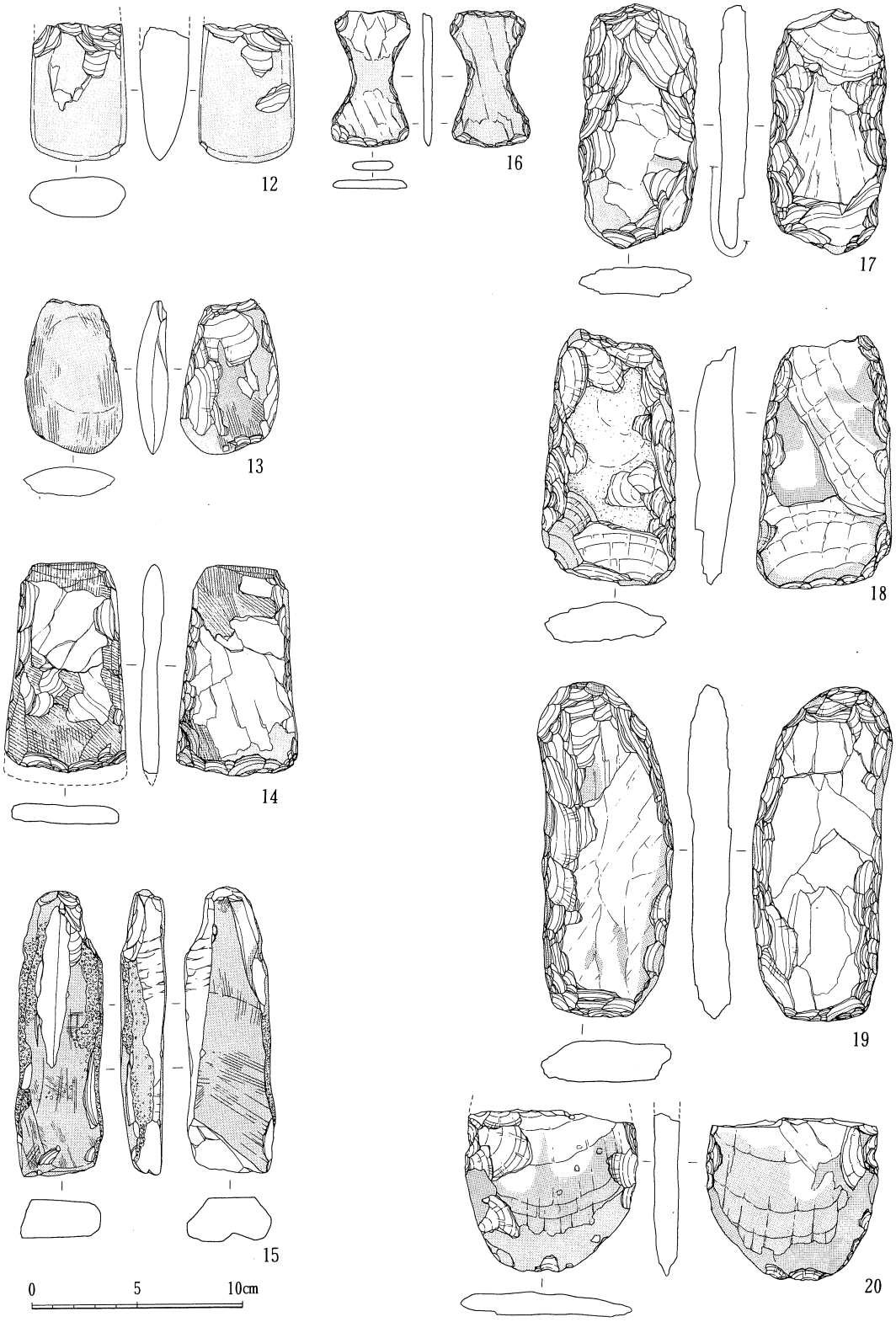
中でも第35図25・26は前述のように後期前半～中頃にのみ散見される特徴的な石斧である。刃部に明確に使用による摩滅痕が残る。



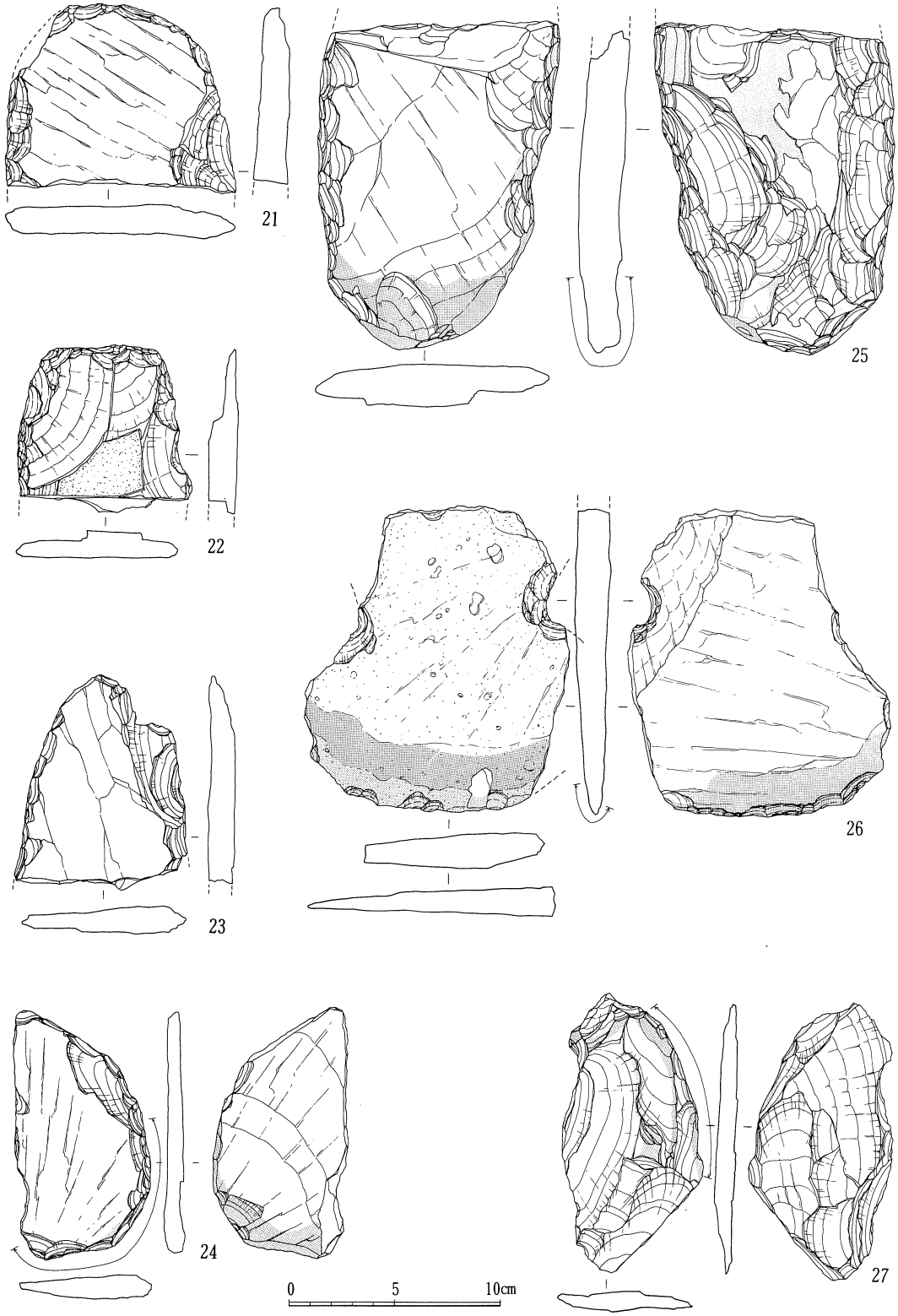
第32図　尾畑遺跡南Ⅰ区６号竪穴出土磨製石包丁



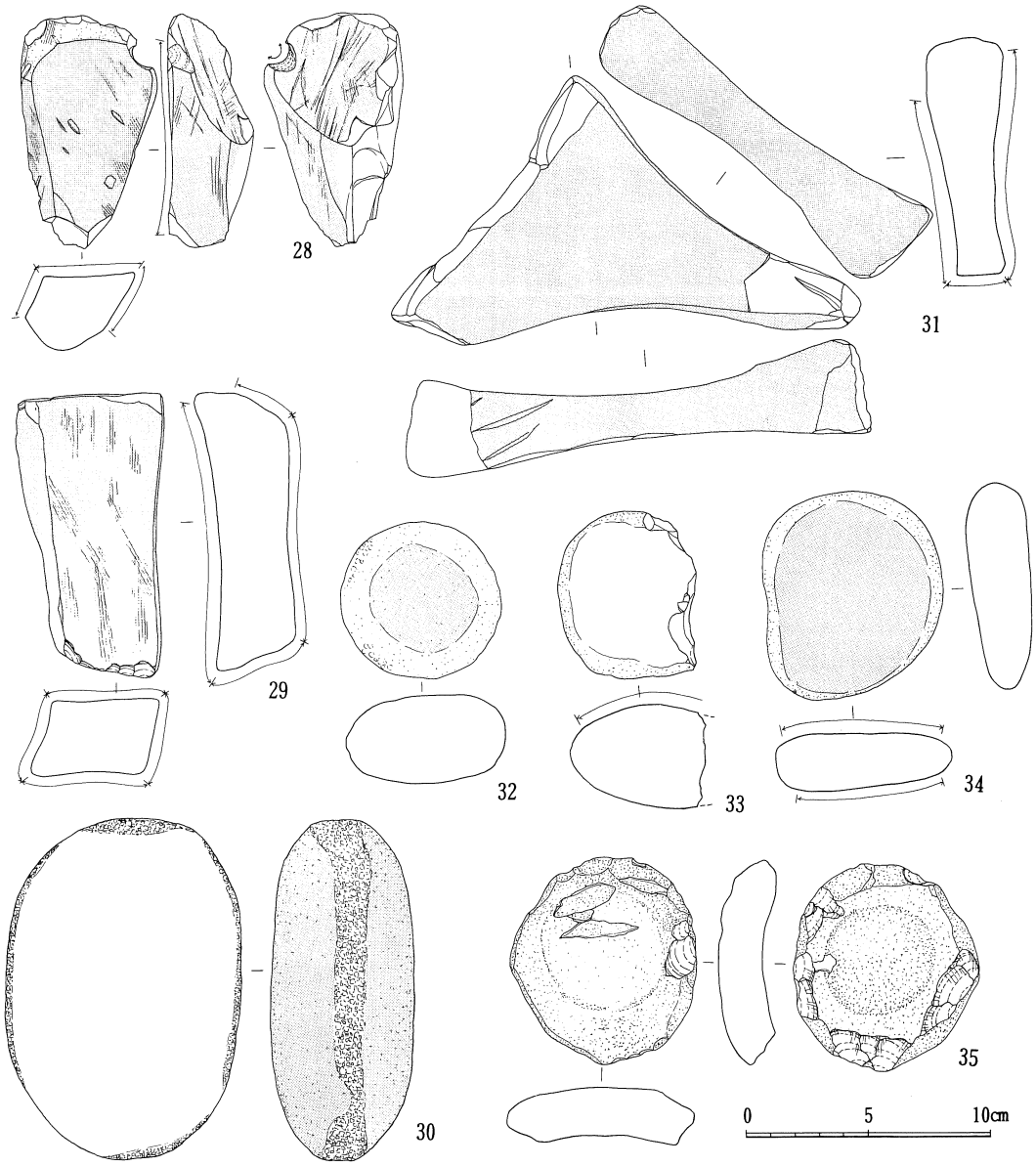
第33図　尾畑遺跡南Ⅰ区出土石器(1)



第34図　尾畑遺跡南Ⅰ区出土石器(2)



第35図　尾畑遺跡南Ⅰ区出土石器(3)



第36図　尾畑遺跡南Ⅰ区出土石器(4)

その他、第35図24、27のように横長剥辺の一側辺を弧状に加工し、刃部として使用した横刃形石器として把握できる。

第36図は砥石・磨石・敲石で30は表裏面が非常に摩滅した磨石であり、その周縁部は敲打痕が残っている。また、35は安山岩の周辺部に整形加工を施し円形にしたもので、円形石器（円盤状石器）として把握できる。

No.	器　　種	縦長（cm）	横長（cm）	厚さ（cm）	重　量（g）	石　　材
1	石　　鏃	1.9	1.8	0.4	0.9	姫島産黒曜石
2	〃	2.2	(1.7)	(0.3)	(0.7)	姫島産黒曜石
3	〃	(1.6)	(1.3)	(0.3)	(0.4)	姫島産黒曜石
4	〃	2.1	1.2	0.3	0.5	姫島産黒曜石
5	〃	2.8	1.4	0.4	0.8	姫島産黒曜石
6	〃	(1.7)	1.2	0.2	0.5	姫島産黒曜石
7	〃	3.0	(1.4)	0.4	2.6	姫島産黒曜石
8	〃	4.3	1.5	0.3	2.8	サヌカイト
9	〃	(1.8)	1.4	0.4	0.9	姫島産黒曜石
10	尖頭状石器	2.6	1.8	0.5	2.6	姫島産黒曜石
11	異形石器	7.2	4.2	1.1	30.4	サヌカイト
12	磨製石斧	(6.2)	4.6	2.0	100.9	結晶片岩
13	〃	7.2	4.3	1.4	70.3	結晶片岩
14	〃	9.9	5.1	0.9	99.9	蛇紋岩
15	〃	13.4	3.8	1.8	171.5	?
16	〃	6.3	3.5	0.4	16.5	結晶片岩
17	扁平打製石斧	11.5	5.3	1.3	137.0	結晶片岩
18	〃	11.3	5.7	1.8	209.4	結晶片岩
19	〃	15.6	6.7	2.0	340.7	結晶片岩
20	〃	(7.6)	8.1	1.2	106.1	輝　岩
21	〃	(8.3)	(10.8)	1.4	154.8	安山岩
22	〃	(7.7)	(7.7)	1.3	92.8	玢　岩
23	〃	(9.7)	(7.7)	1.3	13.6	結晶片岩
24	〃	(15.5)	11.0	2.0	549.1	結晶片岩
25	〃	(14.3)	11.7	1.6	332.3	結晶片岩
26	横刃形石器	11.3	6.3	1.1	111.6	結晶片岩
27	〃	12.7	6.4	0.9	91.3	結晶片岩
28	砥　　石	9.5	5.6	3.3	134.0	頁　岩
29	〃	11.2	5.2	3.1	380.7	流紋岩
30	〃	18.9	9.6	4.1	317.9	軽　石
31	磨　　石	6.3	6.5	3.6	156.7	安山岩
32	〃	6.8	(5.6)	4.3	187.2	安山岩
33	〃	8.3	7.2	2.3	252.8	安山岩
34	敲・磨　石	13.7	9.1	5.9	1,119.3	安山岩
35	円形石器？	8.3	7.6	2.0	171.1	安山岩

表1　尾畑遺跡南Ⅰ区出土石器観察表

弥生時代の遺構と遺物

遺構

2号竪穴（第37、38図）

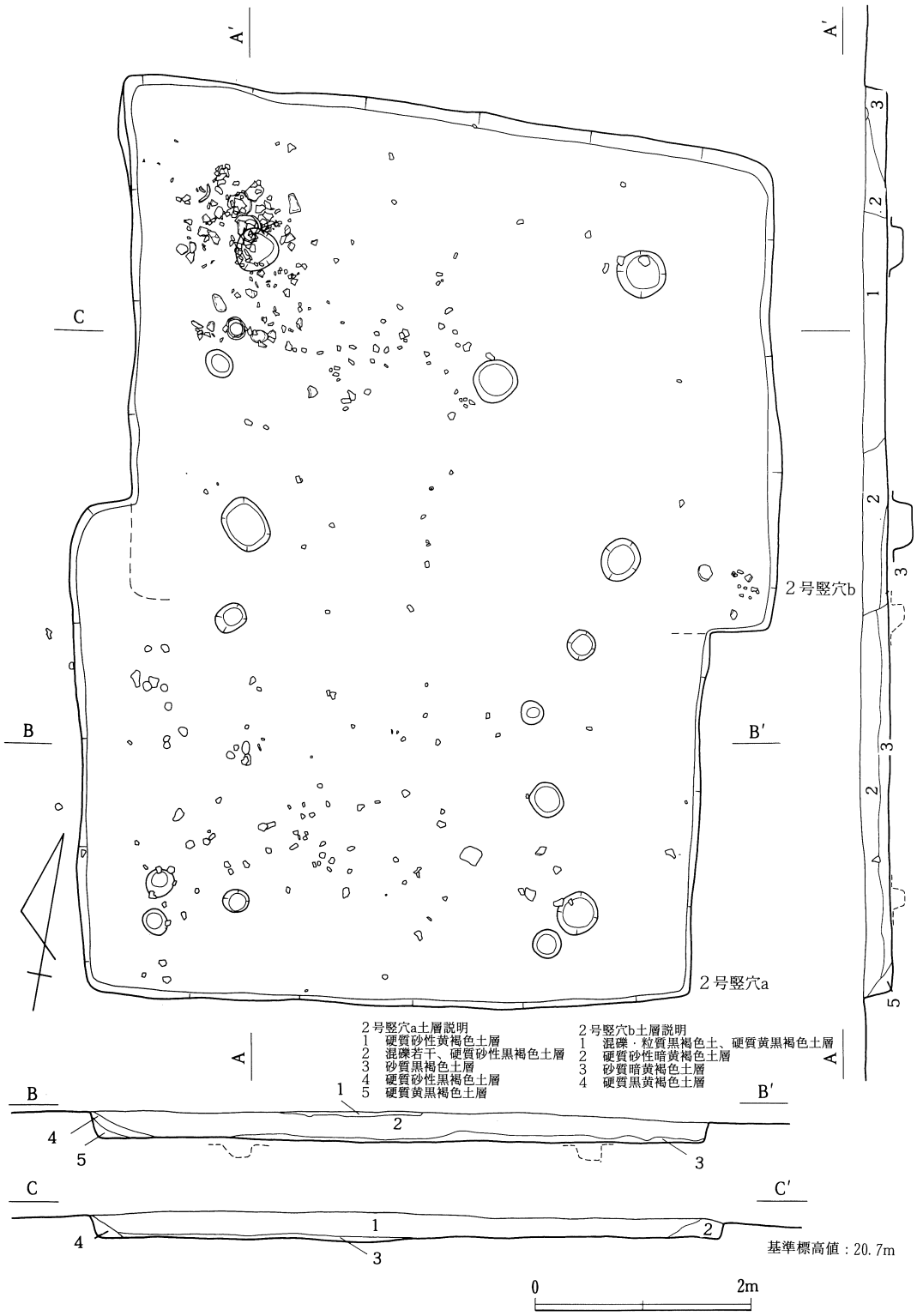
調査区北辺のほぼ中央に位置する。竪穴は2基が重複していた。2号竪穴（a）は北壁を2号竪穴（b）に切られている。平面形は長方形を呈し、南辺5.6m、西辺4.5m、壁残存高0.3mの規模をもつ。長軸方位は北96度西を指向する。床面には柱穴が4個あり、0.25m～0.4mの大きさであった。また炉跡は確認されていない。竪穴内の覆土は上層から、1層硬質砂性黄褐色土層、2層混礫若干、硬質砂性黒褐色土層、3層砂質黒褐色土層、4層硬質砂性黒黄褐色土層、5層砂質黄黒褐色土層であった。遺物は土器が床面中央部付近から出土したが、細片がほとんである。

2号竪穴（b）は規模は東辺4.3m、北辺6.1m、西辺、南辺はそれぞれ4.8m、5.9mと推定できる。壁の残存高は0.25mほどである。2号竪穴（a）と同様に東西に長い方形を呈する。長軸方位は北99度西を指向する。床面には柱穴が4個確認でき、径0.35m～0.5mの大きさであった。炉の痕跡はみられない。竪穴内の覆土は上層から、1層混礫若干・粘質黒褐色土、硬質黄黒褐色土層、2層硬質砂性暗黄褐色土層、3層砂質暗黄褐色土層、4層砂質黒黄褐色土層であった。遺物としては土器が床面中央部から北西隅の範囲に出土した。特に北西隅付近からは器形の明らかな土器が数個体出土した。

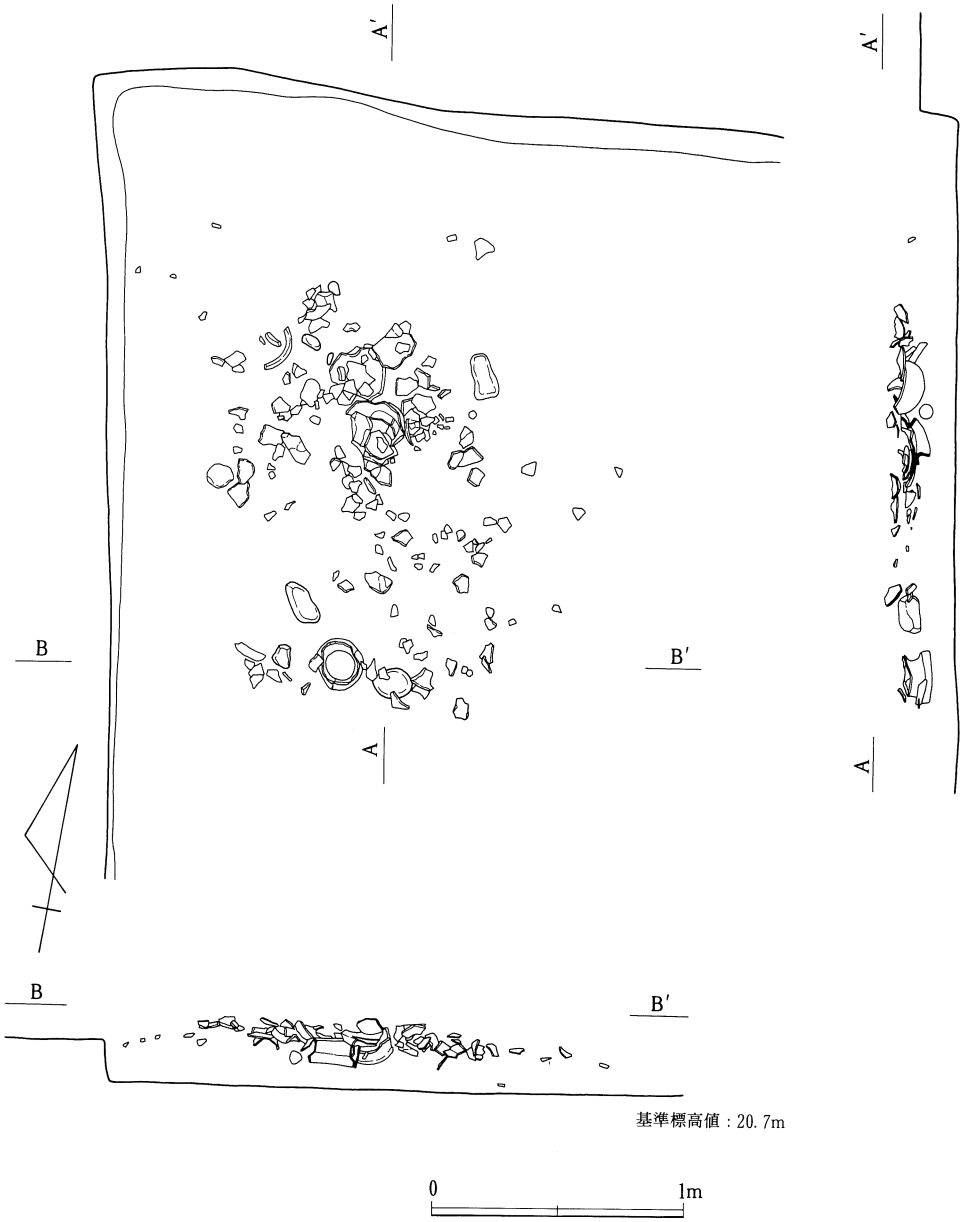
出土遺物（第39図）

2・4・5・15は2号竪穴（a）、他は2号竪穴（b）から出土したものである。

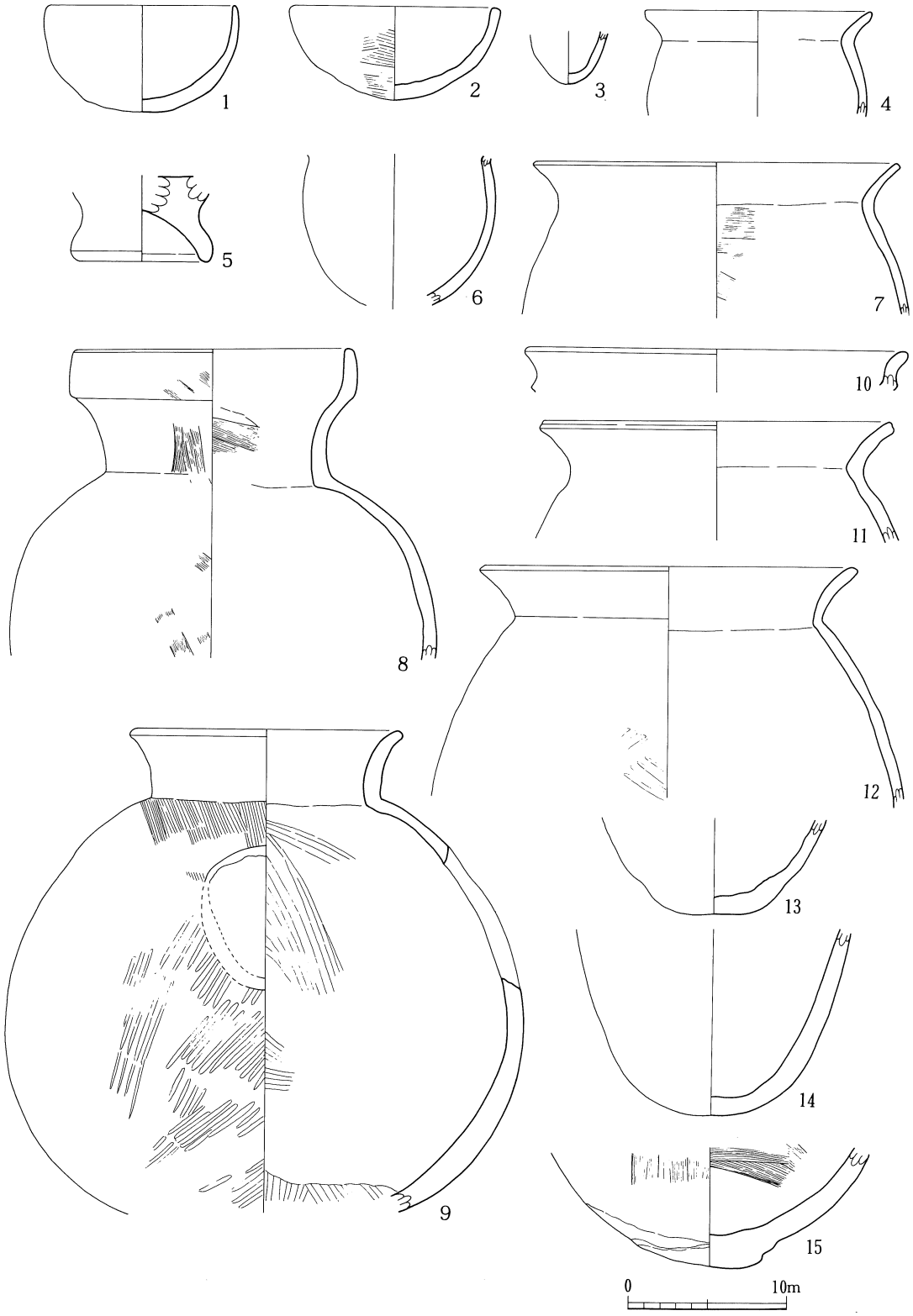
1・2は埦である。共に内湾して立ち上がる。1は底部が緩い丸底状をなすが、平底風に整形されている。大きさは口径5.1cm、器高6.7cmである。調整は内外面共に平滑なナデ仕上げである。胎土に雲母・角閃石・長石が若干含まれる。焼成は良好であり、暗黄褐色を呈する。2は丸底をなす。大きさは口径13.3cm、器高6cmである。外面にハケ目調整後、ナデが施される。内面はナデ調整である。胎土に角閃石・長石など砂粒を多く含む。焼成は通有で暗黄褐色を呈する。3は口縁部を欠くミニチュア土器である。尖り気味の底部をもつ。内外面共にナデ仕上げである。胎土に角閃石・長石など砂粒を含む。焼成は良好であり、暗黄褐色を呈する。4は小型甕の上半部破片である。口縁部はくの字状に屈曲し、やや上向きに伸びる。口径14.4cmである。胴部外面は平滑なナデ仕上げである。内面にはハケ目が残る。胎土には角閃石・長石が若干含まれ、焼成は良好で暗赤褐色を呈する。5は脚部の残欠である。復元底径8cmである。調整は器面の摩滅のため不明である。胎土には角閃石・長石・白色砂粒が多量に含まれ、焼成は通有で暗赤褐色を呈する。6は小型甕の胴部破片である。器面は内外面にナデ調整が施されている。胎土は角閃石・長石がやや多量に含まれ、焼成は堅緻で、暗赤褐色を呈する。7は甕上半部破片である。口縁部は屈曲し、やや長く伸びる。口径は23cmである。調整は外面が細か



第37図　尾畑遺跡南Ⅰ区2号竪穴実測図(1)



第38図　尾畑遺跡南Ⅰ区２号竪穴実測図(2)



第39図　尾畑遺跡南Ⅰ区２号竪穴出土遺物実測図

いハケ目調整後、ナデで平滑に仕上げられている。内面にはハケ目が残る。胎土には角閃石・長石・雲母など砂粒がやや多く含まれている。焼成は通有で暗茶褐色を呈する。8は北九州系の二重口縁壺である。口縁部は頸部から屈曲して立ち上がる。口径17.4cmである。口縁部外面に斜方向、頸部に縦方向、胴部に斜方向の細かいハケ目調整、ナデが施されている。内面では頸部に横方向のハケ目、胴部上端ケズリ、胴上部に粗いハケ目が施されている。9は直口壺である。球体状に張る胴部をもつ。胴部には焼成後に穿孔された径8cm程の円孔がみられる。口径は16.5cm、最大径は胴部中位やや下にもち32.8cmである。調整は口縁部内外面に横方向のナデ、胴部では外面の上端部に粗い縦方向のハケ目調整、斜方向のタタキがみられる。内面には縦および斜方向の粗いハケ目・ナデ調整が行われている。胎土に角閃石・長石・雲母などの砂粒が多量に含まれ、焼成は良好で、暗黄褐色を呈する。10は二重口縁壺の口縁部の残欠である。口径は24cmである。胎土に角閃石・長石を含み、焼成良好で、黄褐色を呈する。11は甕の口縁部破片である。くの字状にやや長く伸びる口縁部をもつ。口径は22.2cmである。内外面共にナデ調整で仕上げられている。胎土に角閃石・長石を含み、焼成良好であり、色調は黄褐色を呈する。12は口縁部〜胴部上半が残る。口縁部は屈曲し、やや外反気味に伸びる。口径23.8cmである。調整は口縁部内外面に横方向のナデ、胴部外面の上端付近では横方向、他は斜方向の粗いハケ目調整が行われている。胴部内面はナデ調整である。胎土に角閃石・長石を多く含む。焼成は良好であり、色調は暗黄褐色を呈する。13〜15は甕の底部で、丸底をなす。調整は外面にハケ目後、ナデ調整、内面にナデ調整が施されている。このうち15は内外面にハケ目が顕著に残っている。胎土に角閃石・長石を含み、焼成良好であり、色調は淡赤褐色〜黄褐色である。

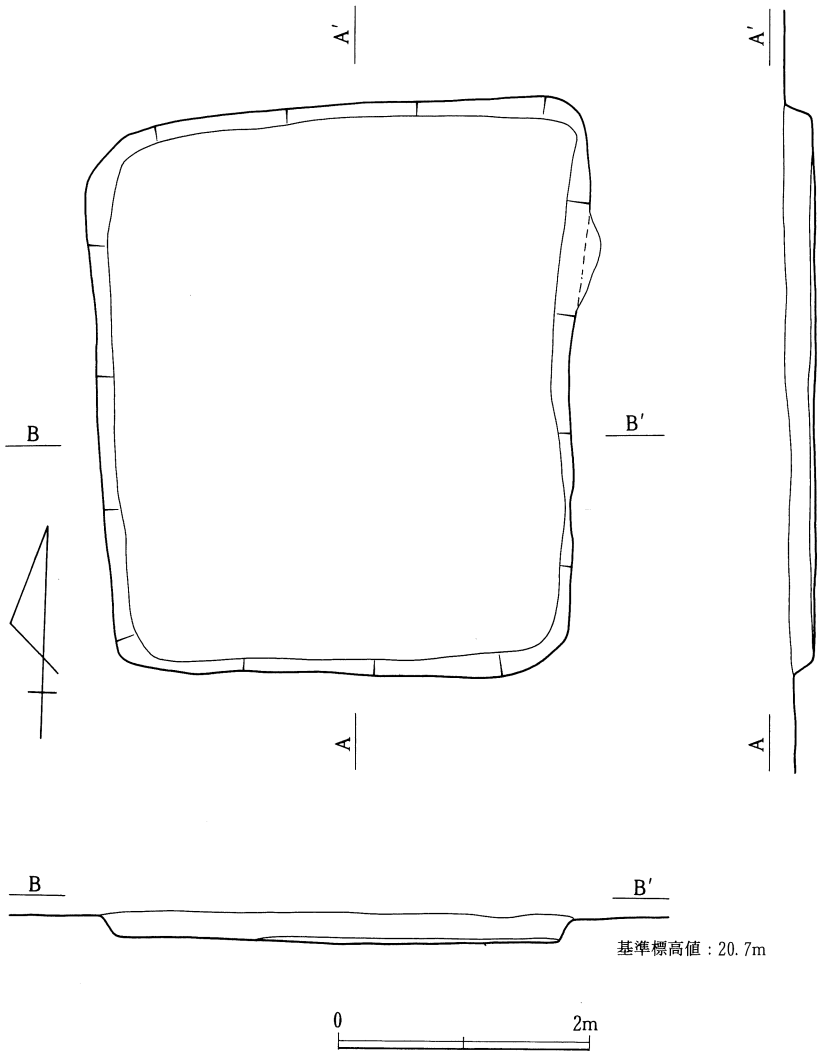
出土土器の示す時期は弥生時代終末期である。

3号竪穴（第40図）

遺構は調査区のほぼ中央に位置する不整方形の竪穴状遺構である。規模は南辺3.5m、北辺4m、東辺4.4m、西辺4m、壁残存高0.3mを確認できた。長軸方位は北7度西を指向する。床面には柱穴、炉跡が確認されていない。覆土内から土器の破片が若干出土している。

出土遺物（第43図1〜4）

1は埦である。体部は丸く湾曲して立ち上がり、底部は平底風の丸底をなす。口径11cm、器高6.2cmの大きさをもつ。調整は内外面共にナデ仕上げである。胎土に角閃石・石英を含む。焼成良好であり、赤褐色を呈する。2は鉢形土器と思われる。底部〜体部下半が残存する。底部は下端でやや肥厚し平底をなす。外面は粗く整形され凹凸を生じている。内面は平滑なナデ調整が施されている。胎土には若干の砂粒が含まれる。焼成は良好で堅緻であり、黄褐色を呈する。3は壺の口縁部〜胴部下半が残る。口縁部は緩く外反し、端部は細く仕上げられている。口径11cmである。外面は下から上方向への粗いヘラナデがみられる。内面には平滑なナデ調整が施されている。胎土に角閃石・長石を多く含む。焼成は良好であり、色調は暗赤褐色を呈す



第40図　尾畑遺跡南Ⅰ区3号竪穴実測図

る。4は甕胴部の破片である。外面に縦方向のハケ目・ナデ調整、内面に斜方向のハケ目・ナデ調整が施されている。胎土に角閃石・長石を含む。焼成は良好であり、色調は明赤褐色を呈する。

出土土器は器形の特徴などから弥生時代終末期と考えられる。

4号竪穴（第41図）

調査区北西部に他の竪穴とは離れて位置する。竪穴は南辺6.3m、北辺6.6m、東辺5.5m、西辺5.5mの長方形を呈し、壁残存高0.3mと遺存状態の良好な例である。長軸方位は北51度東を指向する。床面中央に炉跡があり、これを挟む位置に柱穴が2個確認されている。また壁溝が四辺に巡る。炉跡は皿状の浅い掘り込みをもつ地床炉で、底面が被熱赤変している。

出土遺物（第43図5）

出土遺物は少なく、砲弾状の形態をもつ小形土器を図示した。口径6㎝、器高8.2㎝の大きさである。器面は摩滅し調整の状況は明らかでない。胎土に角閃石・長石をやや多く含む。焼成は通有であり、色調は黄褐色を呈する。土器は弥生時代終末期を示す。

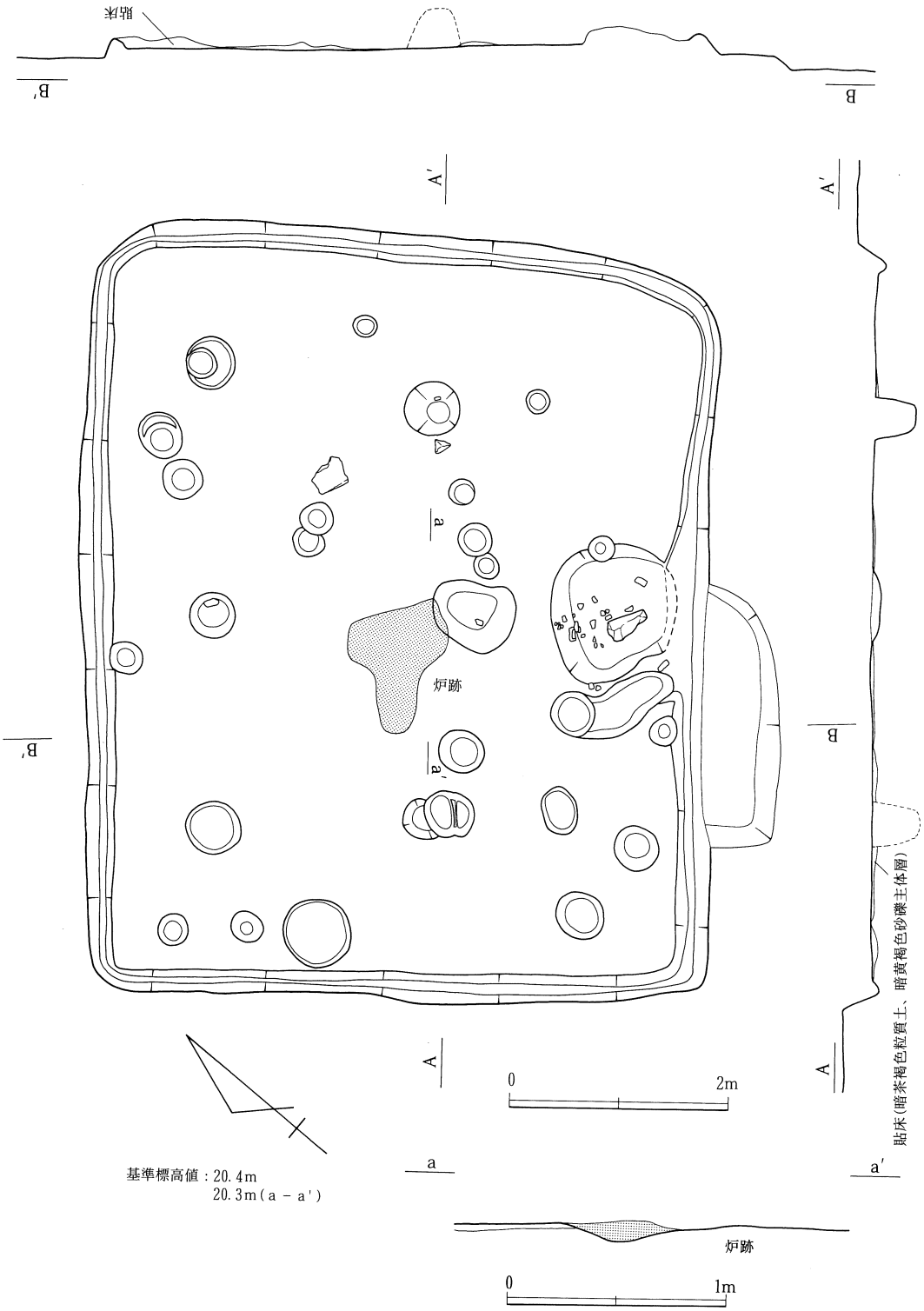
5号竪穴（第42図）

調査区南部に位置する。竪穴は北壁の一部と西壁の⅔を土坑で切断され、後世の削平を受けているが規模や床面の状況は確認できる。平面形は長方形で、南辺4m、北辺3.4m、東辺4.5m、西辺4.3m、壁の残存高は0.15m程度である。長軸方位は北16度東を指向する。床面中央には炉跡があり、これを挟む位置に径0.3m～0.4mの柱穴が2個配されていた。炉跡は楕円形を呈し、規模は1.2m×0.65m、深さ0.12m程度の皿状に浅く掘り込まれた地床炉である。炉内には焼土・炭灰が堆積し、壁面は被熱赤変している。竪穴に属する施設として2基の土坑がある。1つは南壁際の不定形土坑である。規模は1.11m×0.75m、深さ0.3mである。底面には径0.1m～0.2mの小ピットが2個ある。さらに不定形土坑と南壁との間に1.1m×0.35m、深さ0.2mの細長い土坑が掘られている。これは位置関係からみて入口の施設と想定される。

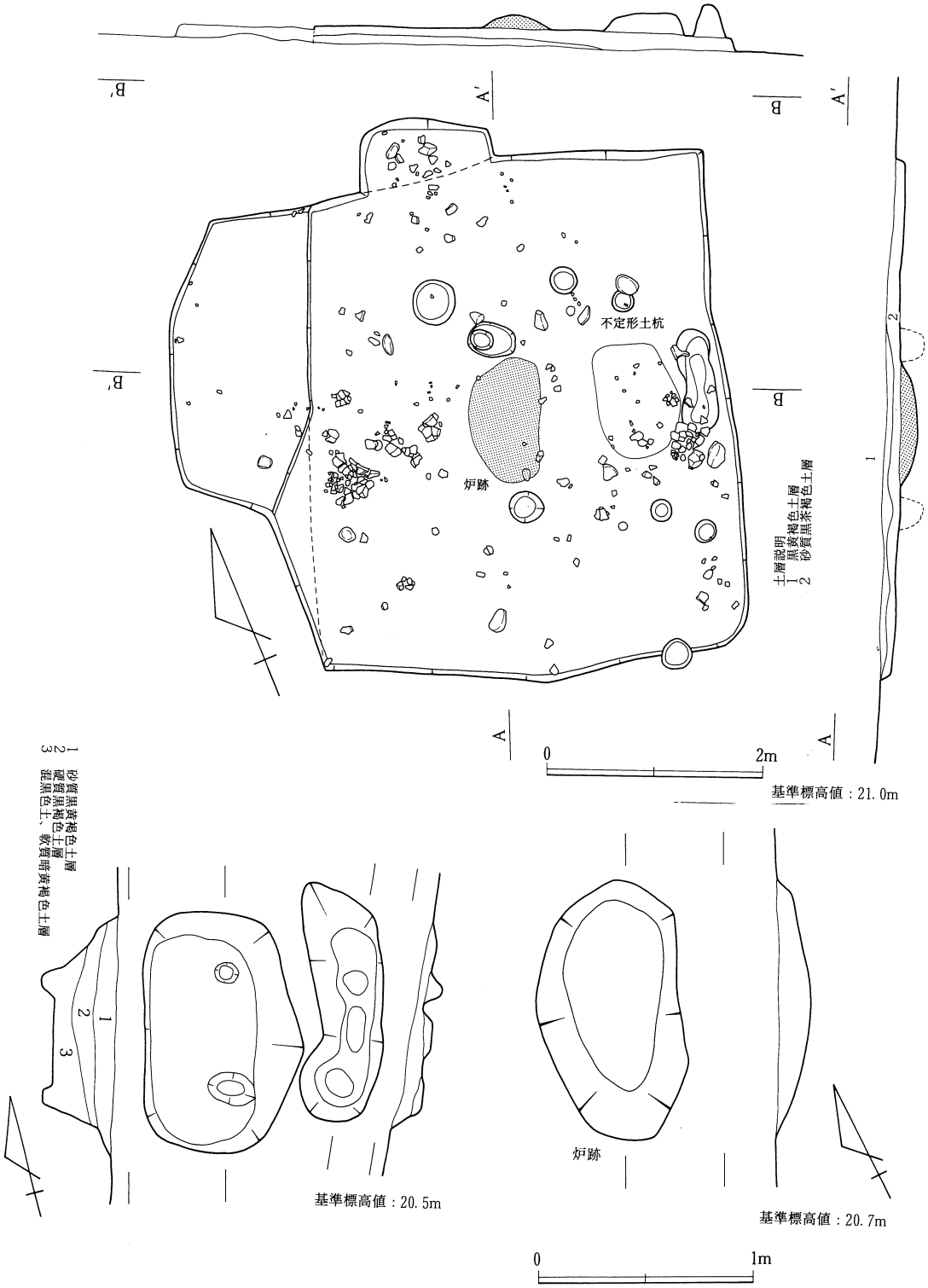
覆土内から出土した遺物はすべて土器の破片であり、東西壁際にややまとまってみられるがほぼ床全体にひろがっていた。

出土遺物（第43図6～9）

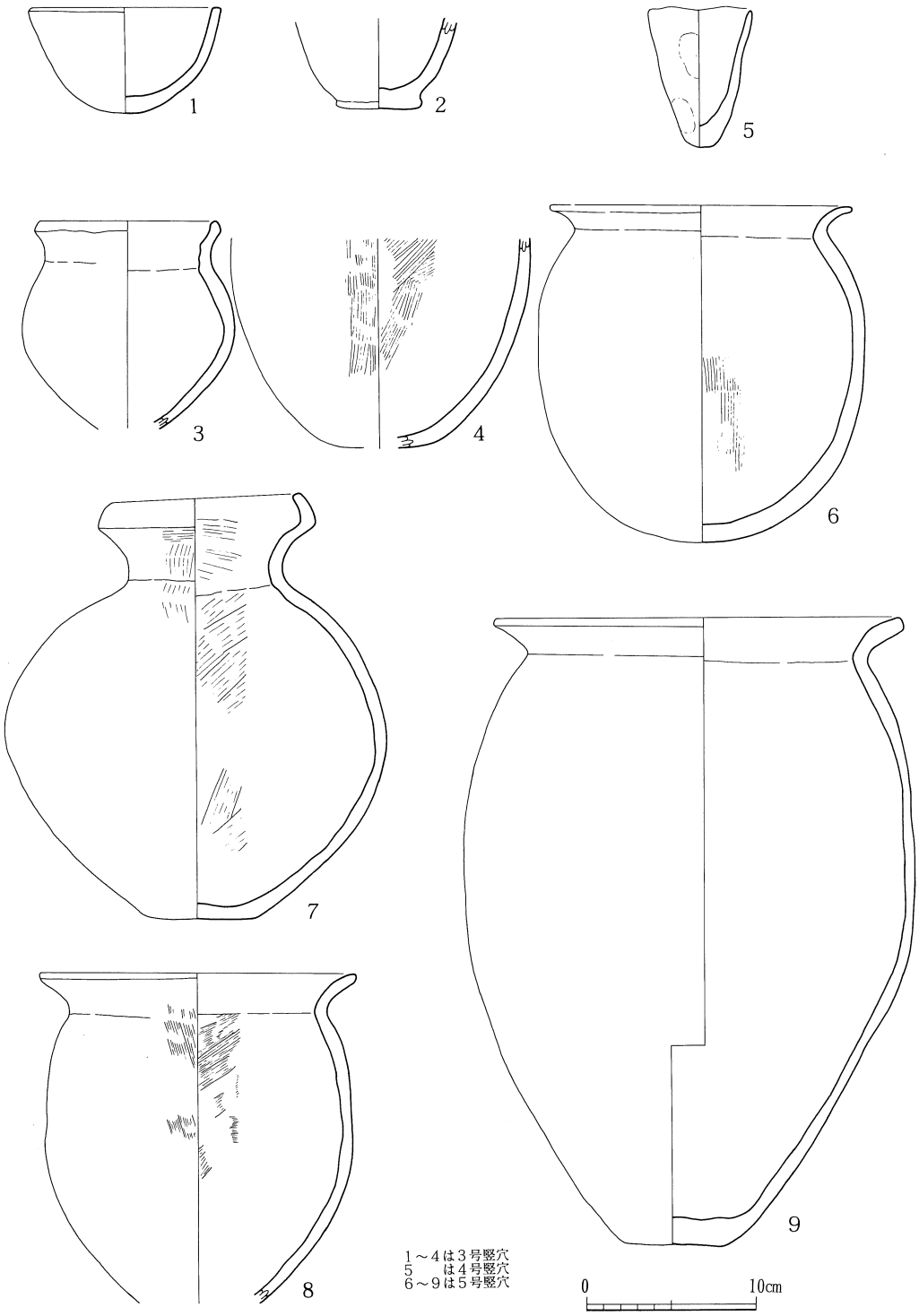
6は甕であり、口縁部の大半を欠く。口縁部は大きく外反して伸びる。胴部は緩い球体をなす。底部は平坦に近い丸底状となっている。大きさは口径17.8㎝、19.8㎝である。器面の調整は摩滅が著しく不明である。胎土には角閃石・長石を含む。焼成は良好であり、黄褐色を呈する。7は二重口縁壺である。口縁部は袋状の形態を残す。胴部は張り、底部は平底が残る。調整は口縁部内外面に横方向のナデ、頸部～胴部は縦方向のハケ目調整後、ナデを施し平滑に仕上げられている。内面には粗いハケ目、ナデがみられる。大きさは口径11㎝、器高25㎝、最大径を胴部中位にもち22.5㎝である。胎土に角閃石・長石を多量に含む。焼成は通有であり、黄



第41図　尾畑遺跡南Ⅰ区4号竪穴実測図



第42図　尾畑遺跡南Ⅰ区5号竪穴実測図



第43図　尾畑遺跡南Ⅰ区3・4・5号竪穴出土遺物実測図

褐色を呈する。8は底部付近を欠く甕½個体である。口縁部は大きく外反する。胴部はやや長い。口径は18.7㎝である。器面の調整は口縁部内外面に横方向のナデ調整、胴部は外面に縦方向のハケ目後、平滑なナデ調整が施されている。内面は縦、斜方向の粗いハケ目・ナデ調整がみられる。胎土に角閃石・長石をやや多く含む。焼成は良好であり、色調は黄褐色を基調とする。9はほぼ完形の甕である。口縁部はくの字状に屈曲し、胴部は長胴形である。底部は平底を残す。大きさは口径24.2㎝、器高36.6㎝である。調整は器面が摩滅しており分明でないが、口縁部内外面に横方向のナデ調整、胴部は内外面共にハケ目調整後、これをナデ消し平滑に仕上げられている。胎土には角閃石・長石を多量に含む。焼成は通有であり、色調は黄褐色を基調とする。

時期は弥生時代後期後半と考えられる。

6号竪穴（第44図）

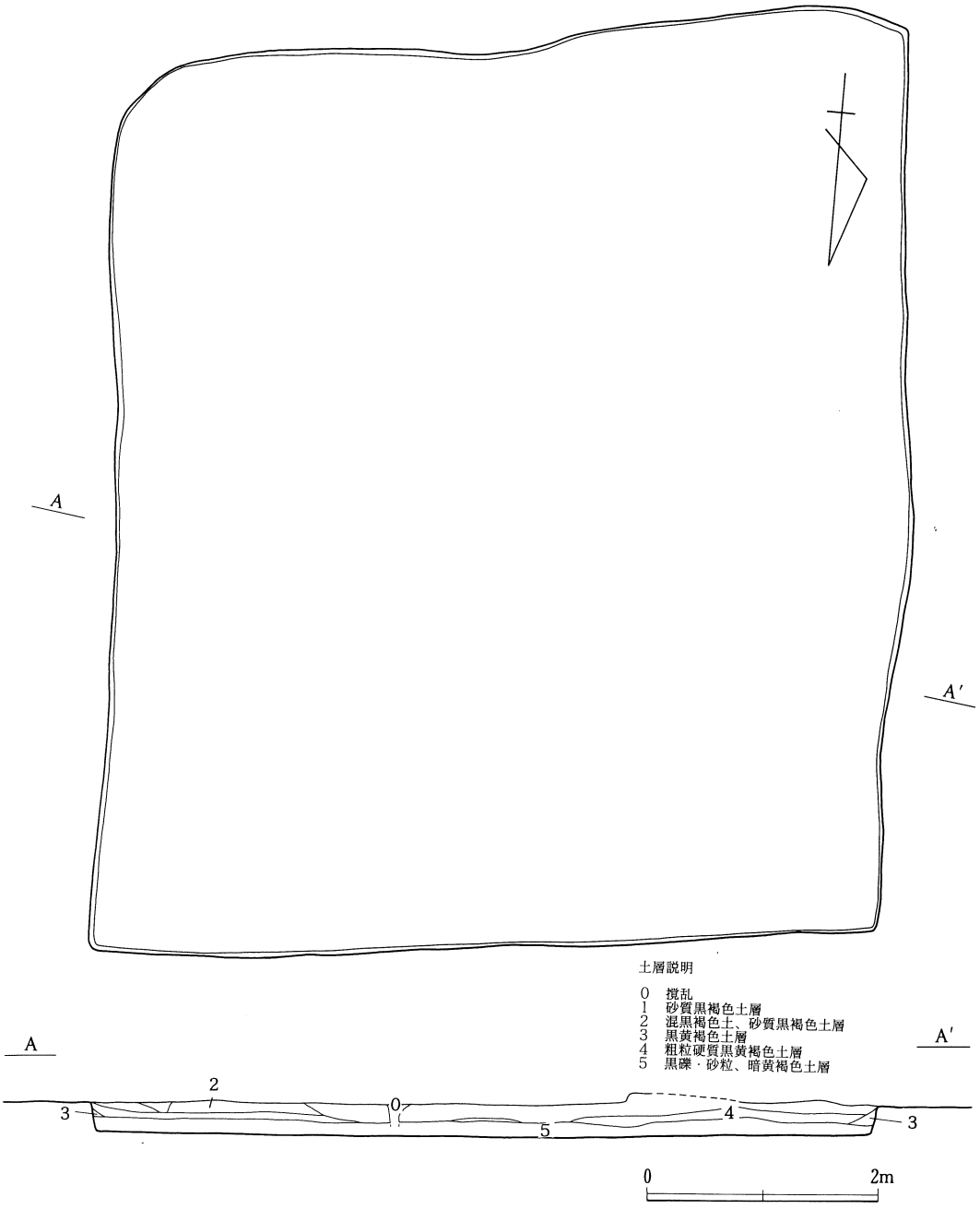
調査区の西辺中央部に位置する。竪穴は炉跡や柱穴をもたない竪穴状遺構である。平面形は長方形を呈し、南辺6.6m、北辺6.8m、東辺7.4m、西辺7.7mの規模をもち、壁の残存高は0.25m程度である。長軸方位は北3度西を指向する。竪穴内の覆土は、上層から1層砂質黒褐色土、2層混黒褐色土、砂質黒黄褐色土層、3層粗粒硬質黒黄褐色土層、4層混礫・砂粒、暗黄褐色土層であった。覆土内から弥生土器のほか奈良時代の土器などが出土している。

出土遺物（第45図、第46図）

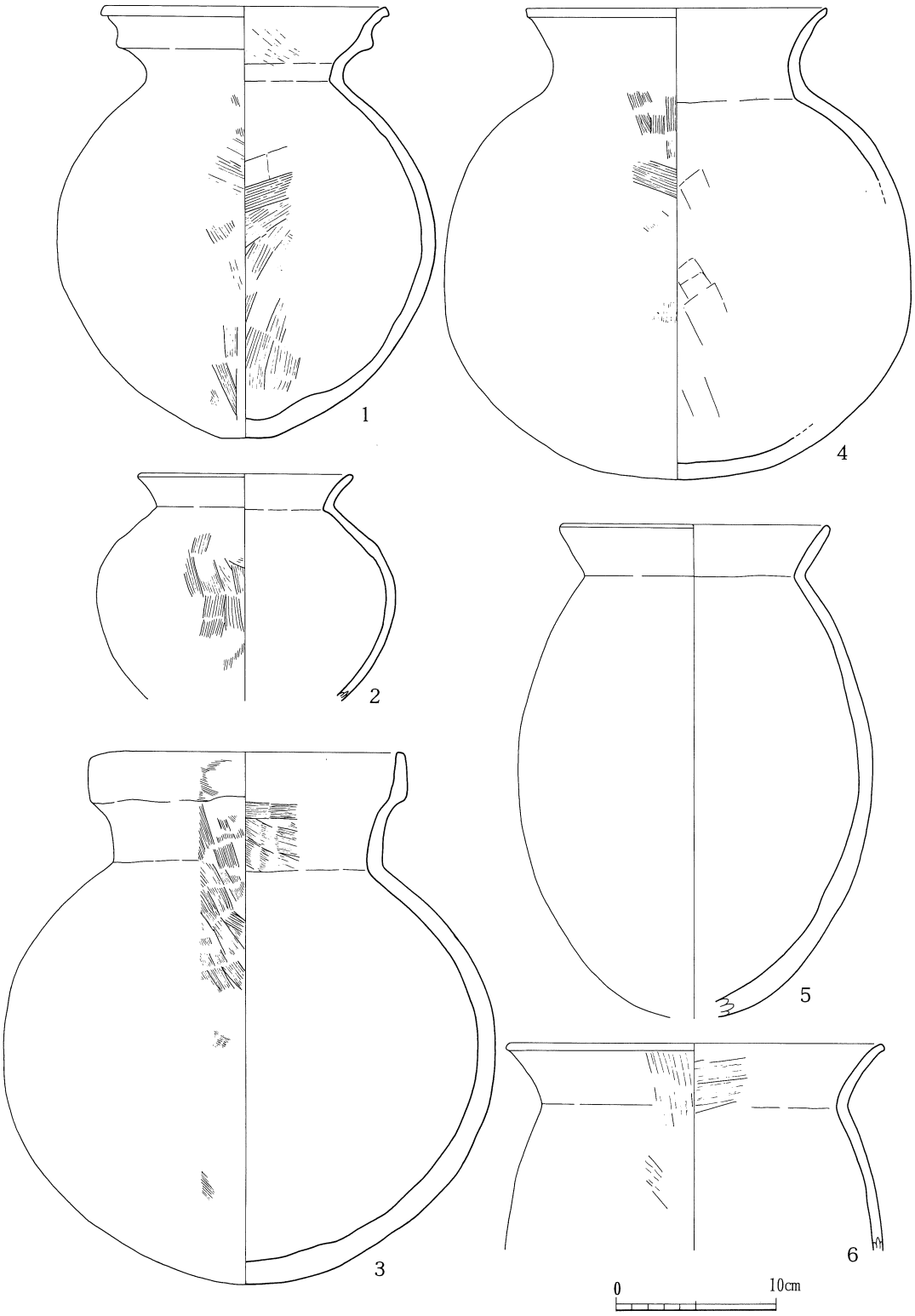
第46図1は二重口縁壺である。底部は小さい平底をなす。大きさは口径17.8㎝、26.7㎝、最大径は胴部中位にもち23.4㎝である。調整はハケ目以後、ナデで平滑に仕上げている。胎土には角閃石・石英を含む。焼成は良好であり、色調は黄褐色を基調とする。2は胴部下半〜底部を欠く甕である。くの字状に屈曲する口縁部はやや上を向いて伸びる。口径12.8㎝である。口縁部は横方向のナデ、胴部は外面に縦方向のハケ目、ナデが施され、内面に粗いヘラナデがみられる。胎土には角閃石・長石を含む。焼成は良好であり、色調は黄褐色を基調とする。3は北部九州系の二重口縁壺である。口縁部は緩く外傾気味の頸部から直立する。胴部は球体状をなし、底部は緩い丸底を呈す。大きさは口径20㎝、器高33㎝、最大径を胴部中位にもち30.7㎝である。調整は口縁部内外面にハケ目、ナデ調整、胴部外面は細かいハケ目調整後、ナデで平滑に仕上げられている。内面は指頭による整形、ナデ調整が行われている。胎土には角閃石・長石を多く含む。焼成は良好であり、色調は黄褐色を基調とする。4は直口壺で球体をなす胴部をもつ。大きさは口径18.7㎝、器高29㎝、最大径を胴部中位にもち29㎝である。調整は口縁部内外面に横方向のナデを施し、胴部では外面に斜・縦方向の細かいハケ目調整後、ヘラミガキでハケ目を消している。内面には粗いハケ目調整がみられる。胎土には角閃石・長石・石英を含む。焼成は良好であり、色調は黄褐色を基調とする。5は甕である。口縁部は屈曲するが、上向きに伸びる。底部を欠くが恐らく丸底と考えられる。大きさは口径16.8㎝、器高は26㎝程

と思われる。口縁部は横方向のナデが施される。胴部は外面をタタキ後、ナデで平滑に仕上げられている。内面にはナデ調整がみられる。胎土には角閃石・長石などの砂粒を多く含む。焼成は良好であり、黄褐色を呈する。6は甕の口縁部〜胴部破片である。口縁部は屈曲が緩く、上方へ長く伸びる。口径23.4cmである。調整ではハケ目、ナデがみられる。胎土には角閃石・石英を含む。焼成は良好であり、黄褐色を呈する。第46図1は甕の口縁部〜胴部上半の破片である。口縁部は上方へ長く伸び、屈曲は緩い。口径20.4cmである。口縁部は横方向のナデが施されている。胴部は外面に細かい縦・斜方向のハケ目調を施した整後、ナデ調整が行われている。内面は斜方向の粗いハケ目調整、ナデがみられる。胎土には角閃石・長石などの砂粒を多く含む。焼成は良好であり、淡黄褐色を呈する。2は甕である。口縁部はくの字状に屈曲し、胴部は最大径をやや上位にもつ。底部は小さな平底を呈する。口径17cm、器高23.3cmの大きさである。調整は口縁部に横方向のナデ、胴部に斜方向のハケ目調整をし、これをナデで消し平滑に仕上げている。胎土には角閃石・石英を含む。焼成は良好であり、明黄褐色を呈する。3・4は土師器、5〜9は須恵器である。3は皿で口縁部から底部付近の破片である。体部は直線的に伸びて口縁部に至る。調整は器面の摩滅が著しく判然としないが、内外面に横方向のヘラミガキがみられる。胎土には角閃石・長石を含む。焼成は通有であり、赤褐色を呈する。4は坏である。体部は丸く立ち上がり、口縁部は緩く外反する。大きさは口径12.8cm、器高4cmである。調整は器面の摩滅が著しく不明である。胎土には角閃石・長石・白色砂粒を含む。焼成は良好であり、赤褐色を呈する。5は底部を欠く坏である。丸い体部下端から外反して立ち上がる。口径は13.6cmである。調整は横ナデがみられる。胎土には角閃石・長石・白色砂粒を含む。焼成は不良であり、淡灰褐色を呈する。6は蓋坏の蓋である。平坦な天井部から緩い曲線を描いて口縁部に至る。口径14cm、器高4cm程度と思われる。調整は横ナデを施し、天井部には回転ヘラ削り後、ナデが施される。胎土には角閃石・長石・白色砂粒を含む。焼成は良好であり、暗灰褐色を呈する。7は天井頂部・つまみを欠く蓋である。低平な形状を呈し、口縁部は屈曲して垂下する。口径は18.2cmである。内外面に横ナデが施されている。胎土には石英・長石・白色砂粒を若干含む。焼成は良好であり、黒灰褐色を呈する。8は高台付坏で底部の大半を欠く。体部は直線的に立ち上がる。高台は下端が細く内傾し、底部のやや内側に付けられている。調整は体部に横ナデが施されている。大きさは口径13cm、器高5.1cmである。胎土には石英・白色砂粒を若干含む。焼成は通有であり、灰褐色を呈する。9は埦である。体部は丸く内湾して立ち上がる。底部は緩い平底をなす。大きさは口径11.7cm、器高5.3cmである。整形・調整は体部にロクロ整形痕が顕著にみられ、底部は一方向のヘラ削り、体部下端に回転ヘラ削りがみられる。胎土には角閃石・長石を若干含む。焼成は良好であり、黒灰褐色を呈する。

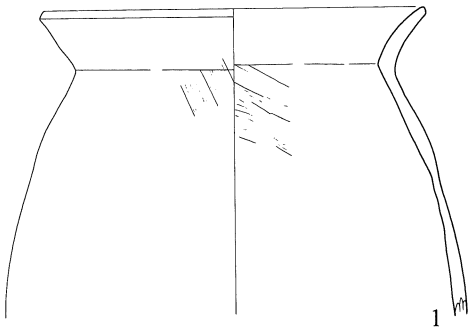
このように、6号竪穴から弥生土器、土師器、須恵器と各種の土器が出土している。このうち、弥生土器は後期後半（第46図2）〜終末のものである。須恵器は第46図6が6世紀後半、

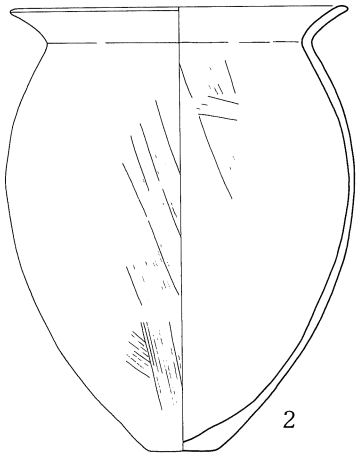


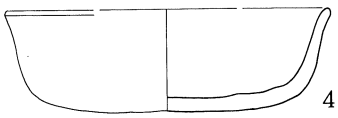
第44図　尾畑遺跡南Ⅰ区6号竪穴実測図

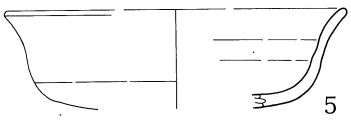


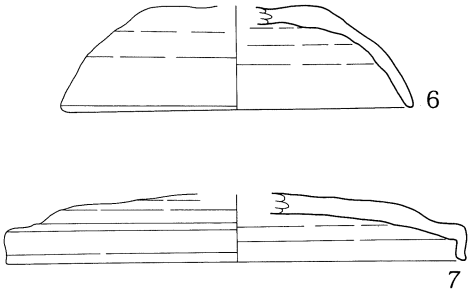
第45図　尾畑遺跡南Ⅰ区6号竪穴出土遺物実測図(1)

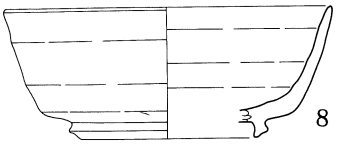


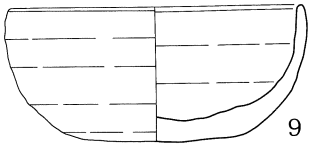


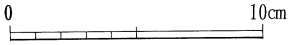












3～9は混入品

第46図　尾畑遺跡南Ⅰ区6号竪穴出土遺物実測図(2)

他の須恵器および土師器は８世紀中頃〜後半と考えられる。

土坑（第47図、第48図）

検出した16基の土坑すべてに遺物が伴うわけではないため、時期を特定できる例は少ない。時期不明のものもここで取り上げる。

土坑１は調査区北部に位置する。土坑は長方形の平面形を呈し、長辺1.22ｍ×短辺0.84ｍ、深さ0.26ｍの規模をもつ。長軸方位は北30度東を指向する。壁は緩く傾斜し底面に至る。覆土は上層から１層硬質黒褐色土層、２層軟質黒褐色土層であり、壁際に砂質黄黒褐色土層が堆積していた。遺物は覆土内から若干の土器片が出土している。

出土遺物（第51図１〜３）

１は壺の口縁部〜胴上部の破片である。細く締まる頸部から外へ屈曲する口縁部をもつ。口縁部は断面矩形を呈し、両端部に刻目をもつ。頸部には沈線が巡る。調整は口縁部〜頸部の外面に縦方向、内面に横方向の細かいハケ目が残る。胴部は外面に斜・縦方向のハケ目調整をした後にヘラミガキが施されている。内面にも入念なヘラミガキがみられる。胎土には石英を多く含む。焼成は良好であり、黄褐色を呈する。２は甕の口縁部破片である。口縁部はやや外傾し直下に突帯が巡る。調整は器面が摩滅しており不明である。胎土には角閃石・石英を含む。焼成は脆弱で不良、色調は黄褐色を呈する。３は壺の底部である。胴部下端から大きく広がる。底部の器厚は厚い。器面の調整は摩滅のため明確でないが、外面に縦方向の粗いハケ目調整がみられる。胎土には角閃石を多く含む。焼成はやや不良で、色調は黄褐色を呈する。時期は器形の特徴などから弥生時代前期後半とできる。

土坑２は土坑１の東５ｍに位置する。平面形は長方形を呈し、長辺1.1ｍ×短辺0.9ｍ、深さ0.4ｍの規模をもつ。長軸方位は北60度西を指向する。壁は緩く立ち上がり、底面は平坦である。覆土は上層から１層混礫多量、硬質黒褐色土層、２層黒褐色土層を確認した。

土坑３は土坑２の南東５ｍに位置する。平面形は方形を呈し、１ｍ×１ｍ、深さ0.15ｍの規模をもつ。長軸方位は北20度東を指向する。底面は平坦である。覆土は黒褐色土層を主体とする。

土坑４は調査区西部の建物９と重なる位置にある。平面形は円形を呈し、径0.85ｍ〜0.95ｍ、深さ0.17ｍの規模をもつ。底面は平坦である。覆土中から弥生土器片が出土している。

出土遺物（第51図４〜７、第52図１・２）

４は甕である。口縁部は大きく外反し、胴部は最大径を上位にもつ。底部はやや丸みをもった平底状をなす。大きさは口径16㎝、器高17.2㎝、胴部最大径19.3㎝である。器面の調整は摩滅のため明確でないが、ハケ目調整、平滑なナデ仕上げがみられる。胎土には角閃石・石英を含む。焼成は良好で、黄褐色を呈する。５は胴部〜底部を欠く甕である。口縁部は外反する。口径は19.4㎝である。調整は口縁部内外面に横方向のナデが施されている。胴部は外面に縦方

向のハケ目をナデで消し平滑にしている。内面には斜方向のハケ目の上にナデ調整を施している。胎土には角閃石・石英を含む。焼成は良好で、明黄褐色を呈する。6は口縁部〜胴部上半部の残欠である。口縁部はやや歪んでいるが強く外反する。口径18.8㎝である。調整は口縁部内外面に横方向のナデ、胴部は外面に縦・斜方向のハケ目後、ナデで消し平滑にしている。内面にはナデ調整を施している。胎土には角閃石・石英を含む。焼成は良好で、黄褐色を呈する。7は口縁部〜胴部上半部破片である。口縁部は緩く屈曲して上へ伸びる。口径16.2㎝である。調整は口縁部内外面に横方向のナデ、胴部は平滑なナデ仕上げである。胎土には角閃石・長石・石英を含む。焼成は良好で、黄褐色を呈する。第52図1は胴部下半〜底部を欠く甕である。口縁部はくの字状に屈曲する。口径24.9㎝である。調整は口縁部内外面に横方向のナデ、胴部は外面に細かいハケ目調整後、平滑なナデで仕上げている。胎土には角閃石・石英を含む。焼成は良好で、淡黄褐色を呈する。2は甕の底部である。底部はやや丸みをもった平底をなす。器面にナデが施されている。胎土には角閃石・長石を含む。焼成は良好で、赤褐色を呈する。出土土器は弥生時代後期後半の特徴を示す。

土坑5は土坑3の南東11mに位置する。平面形は楕円形を呈し、長径0.92m、短径0.7m、深さ0.1mの規模をもつ。長軸方位は北9度西を指向する。壁の立ち上がりは緩やかで底面は平坦である。壁と底面は被熱・赤変している。出土遺物はない。

土坑6は調査区北東部の4号竪穴に近い位置にある。平面形は楕円形を呈し、長径1.15m、短径1m、深さ0.1mの規模をもつ。長軸方位は北46度東を指向する。壁の立ち上がりは直立気味で、底面は平坦である。

土坑7は調査区西辺のやや北寄りに位置する。平面形は不整円形を呈し、長径3m、短径2.3m、深さ0.15mと浅い形状である。長軸方位は北43度西を指向する。壁の立ち上がりは皿状に緩やかな立ち上がりを示す。覆土は上層から1層黒黄褐色粘質土層、2層黄褐色土層、3層暗褐色粘質土層となっている。

土坑8は土坑6の16m南東に位置する。平面形は径2.2m円形を呈す。深さ0.12mと浅い形状である。壁の立ち上がりは緩やかである。覆土は混礫、黄黒褐色土層である。

土坑9は土坑7の南東13mに位置する。平面形は不整円形を呈すると思われるが、南半部を欠くため不明である。壁の立ち上がりは緩やかで、底面は平坦である。土坑内には混焼土・白色砂粒、粘質黒褐色土層が堆積していた。

土坑10は土坑9の西3mに位置する。平面形は円形を呈すると思われるが、東半部を欠くため不明である。壁の立ち上がりは緩やかで、底面は平坦である。土坑内には混焼土・白色砂粒、粘質茶黒褐色土層が堆積していた。

土坑11は土坑9の南東3mに位置する。平面形は楕円形を呈し、長径2m、短径1.4m、深さ0.5mの規模である。この土坑の東端に0.8m程度の浅い土坑が連接する。壁の立ち上がりは

緩やかで、底面は平坦である。

土坑12は土坑９の南1.2mに位置する。北辺部を欠くが、平面形は径2.6m～2.8m程度の円形を呈すると思われる。壁は底面から皿状に極めて緩やかに立ち上がる。覆土から若干の弥生土器片が出土している。

出土遺物（第52図５）

底部を欠く甕である。口縁部は緩く屈曲して伸びる。口径24cmである。調整は器面の摩滅のため明確でないが、口縁部内外面に横方向のナデ、胴部にナデ仕上げがみられる。胎土には角閃石・長石を含む。焼成は良好で、淡赤褐色を呈する。時期は弥生時代終末と考えられる。

土坑13は調査区南部に位置する。平面形は径２m～2.4m程度の円形を呈する。底面から極めて緩やかに立ち上がる。

土坑14は調査区南部の建物18の東に位置する。平面形は円形を呈し、径1.3m、深さ0.4mの規模である。土坑中央からの鉢の完形品が伏せた形態で出土している。

出土遺物（第52図３）

鉢の完形品である。口縁部は大きく外反し、胴部は球体状をなす。口径19.4cm、器高10.7cmの大きさをもつ。調整は口縁部にハケ目調整後、横方向のナデ、胴部は外面に斜方向のハケ目調整が残り、内面にはナデ仕上げがみられる。胎土に角閃石・長石を含む。焼成は良好で、黄褐色を呈する。

土坑15は調査区西辺部中央付近に位置する。平面形は不整円形を呈し、長径1.9m、短径1.7m、深さ0.25mの規模である。

土坑16は土坑15の北東３mに位置する。平面形は卵形を呈し、長径2.2m、短径1.7m、深さ0.85mの規模である。底面に小ピットが伴う。弥生土器が出土している。

出土遺物（第52図４）

深めの鉢である。口縁部は端部で外へ短く屈曲する。底部は厚く平底状をなす。口径14cm、器高15.9cmの大きさをもつ。調整は外面に斜方向のタタキ後、ナデを施し、内面には削り風のヘラナデがみられる。胎土に角閃石・石英を含む。焼成はやや良好で、色調は茶褐色を基調とする。時期は弥生時代終末である。

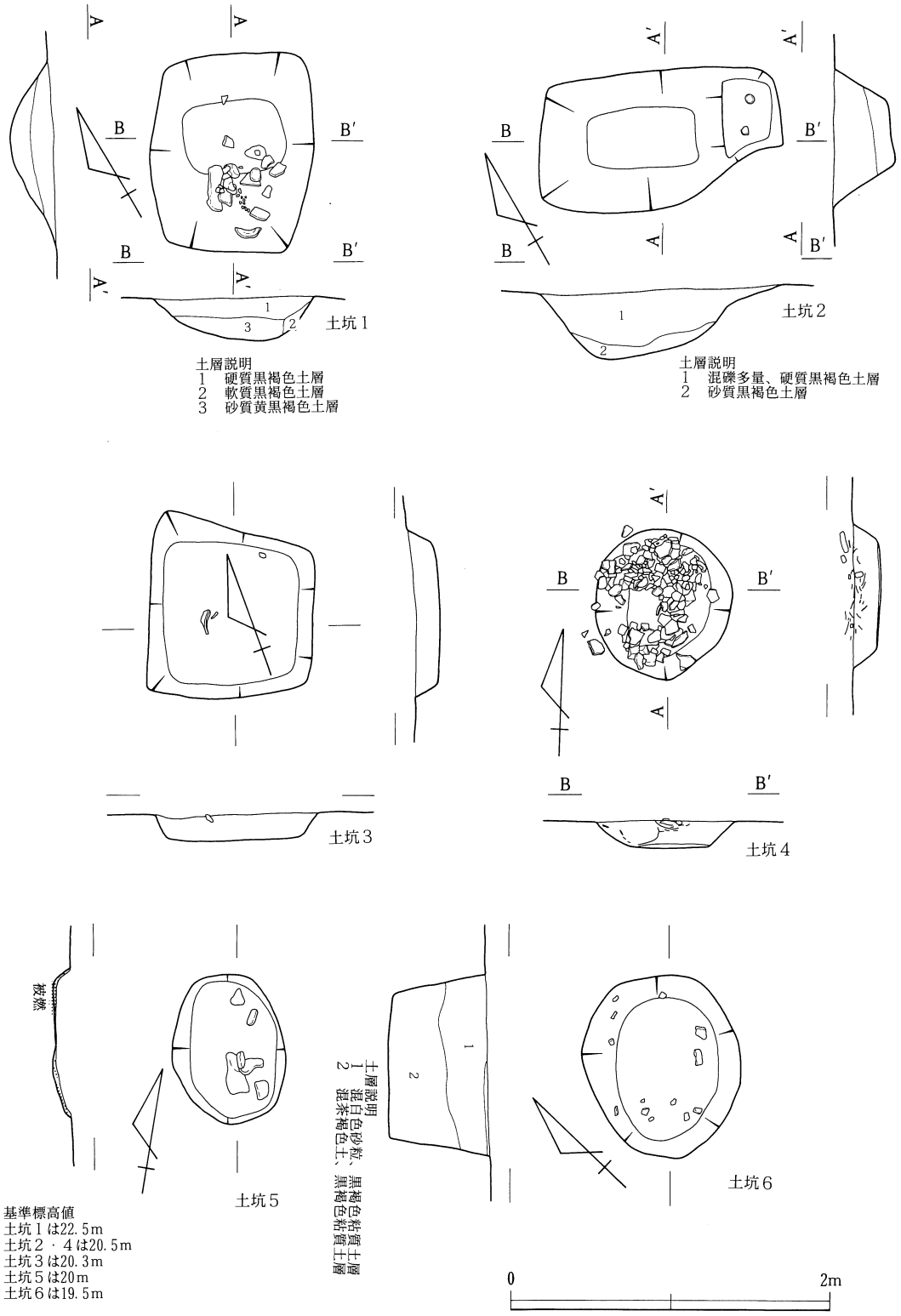
その他の出土遺物（第53図）

土錘、紡錘車、円形土製品がある。

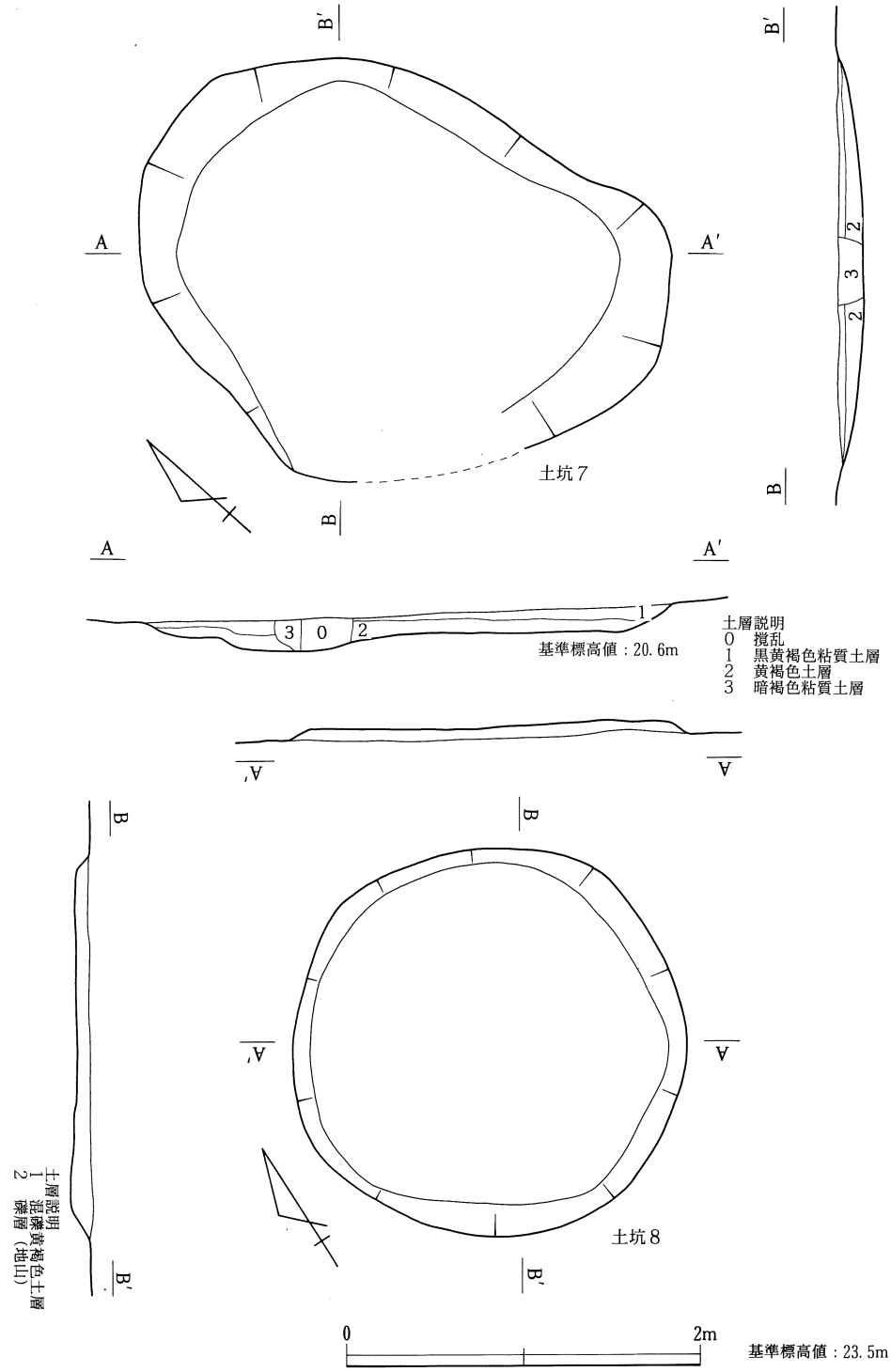
遺物の出土位置は７・13が２号竪穴、17は６号竪穴から出土し、他は表採である。

土錘は12点を図示できた。すべて管状のものであるが、円柱タイプ（１・２・12）と長楕円タイプ（３～11）の２種類がある。大きさは長さ４cm～７cm、幅1.2cm～2.6cm、孔径0.3cm～0.6cmの範囲にある。胎土には角閃石・長石・石英を含む。焼成は概ね良好であり、色調は黄褐色を基調とする。紡錘車は13・14の２点である。13は径3.2cmの円形を呈し、厚さ0.8cm、孔径0.4

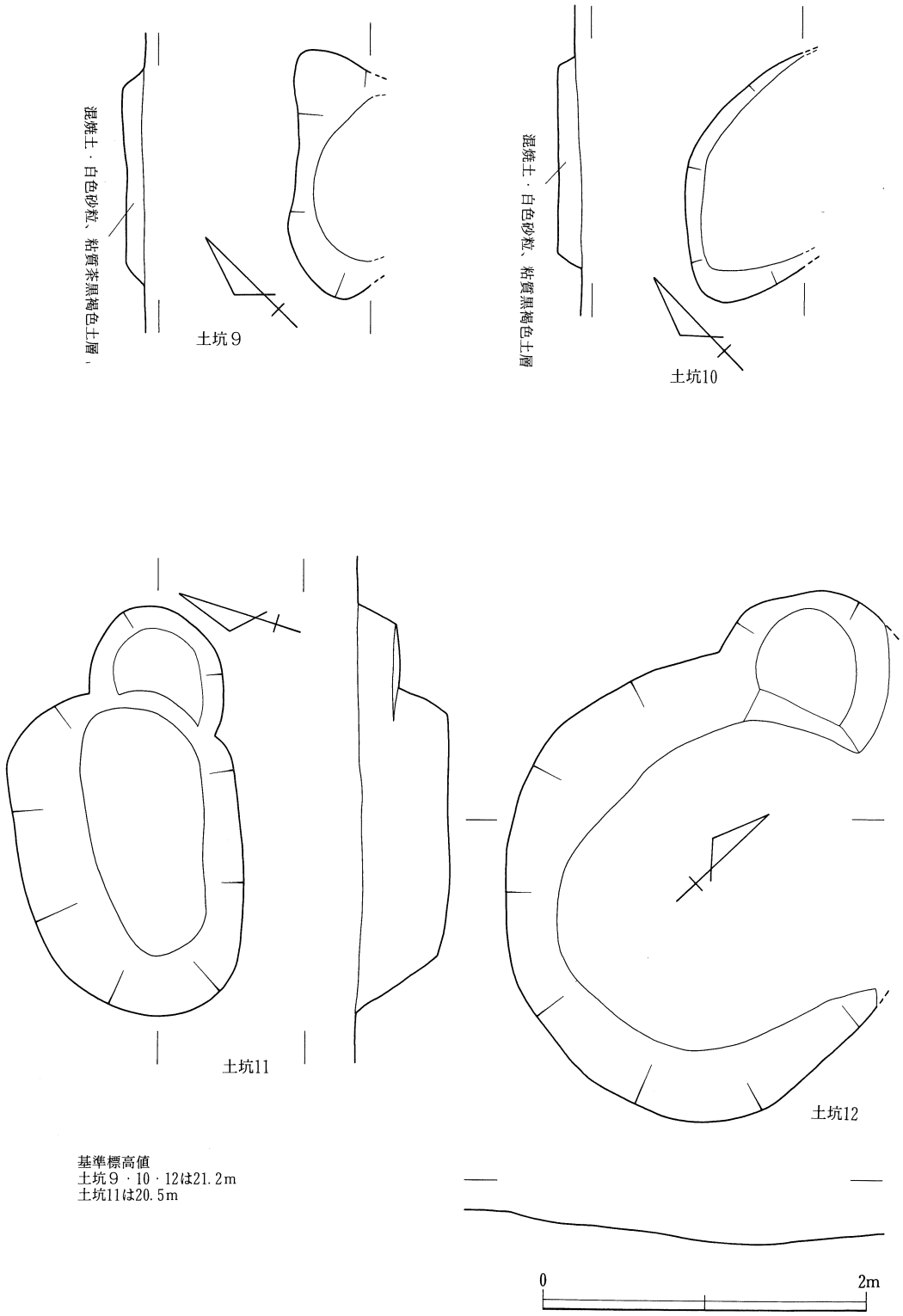
cmである。器面はミガキされている。14は径4.6cmのやや歪な円形を呈し、厚さ1.2cm、孔径0.5cmである。胎土は精良で角閃石・長石・雲母を若干含む。焼成は良好であり、色調は黄褐色を基調とする。円形土製品は15〜17の3点を図示した。14は弥生土器、15・16は縄文土器の破片を利用したものであり、周縁部の⅓が加工されて丸くなっている。大きさは5.4cm〜6.4cm×5.4cm、厚さ1cm程度である。



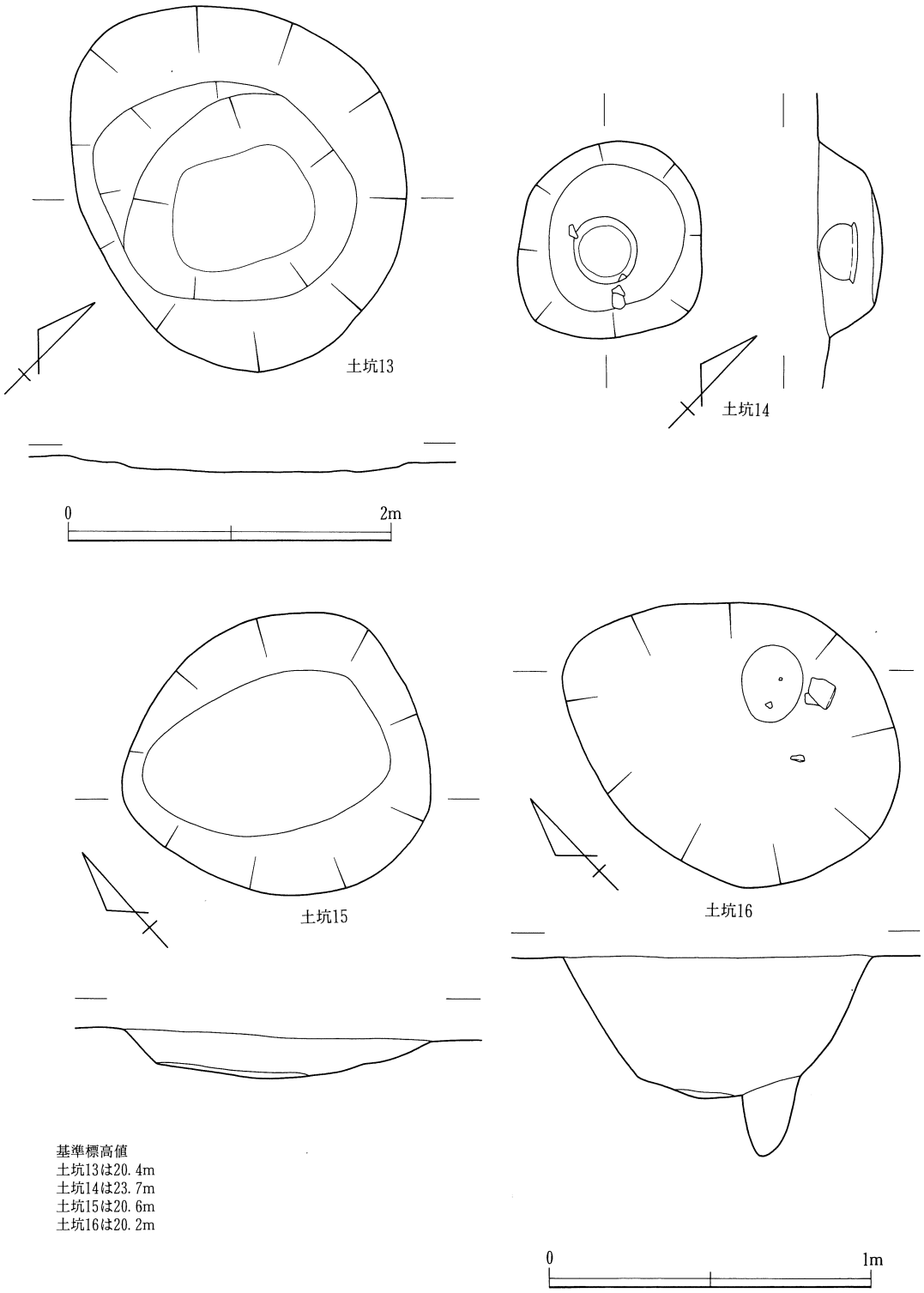
第47図　尾畑遺跡南Ⅰ区土坑実測図(1)



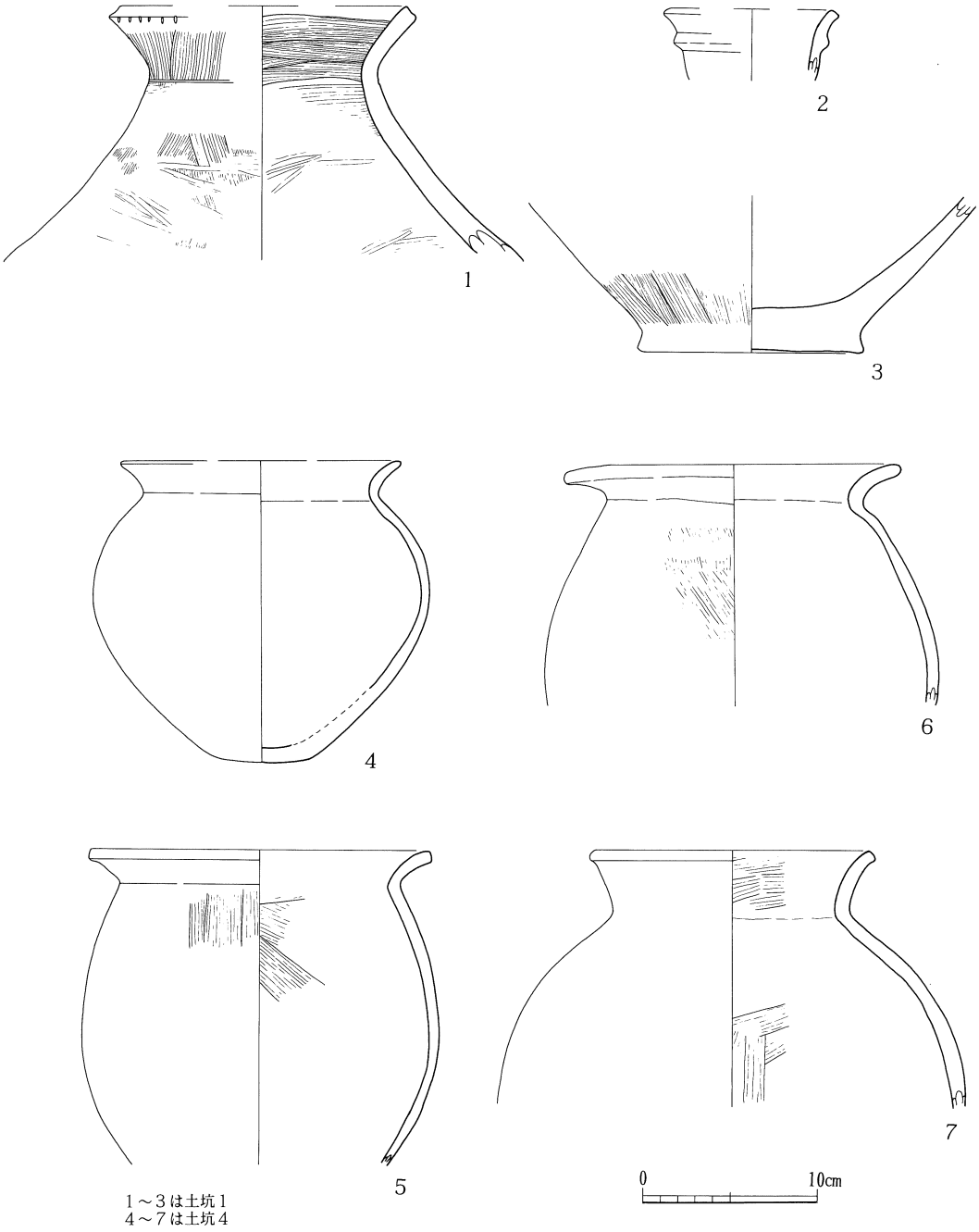
第48図　尾畑遺跡南Ⅰ区土坑実測図(2)



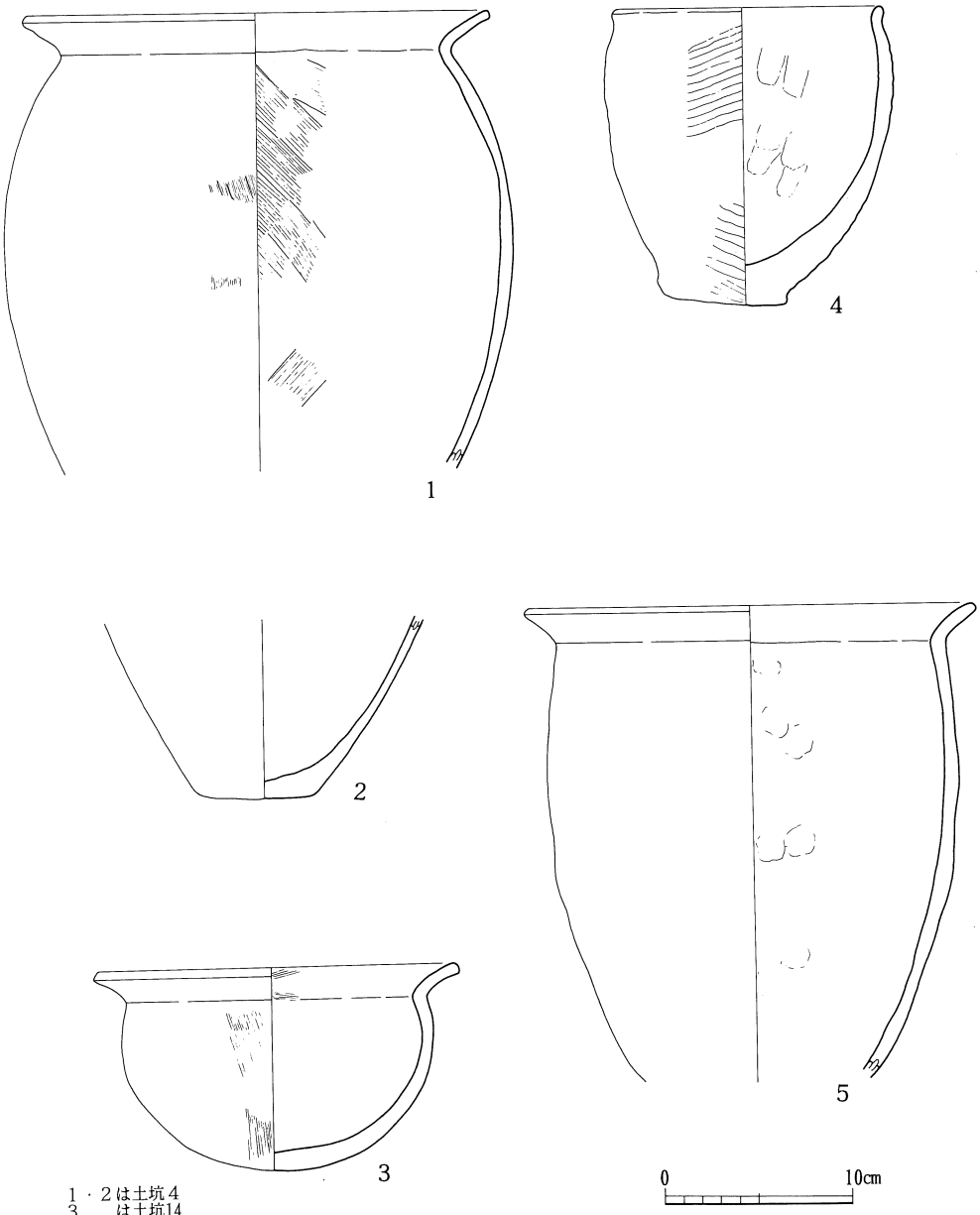
第49図　尾畑遺跡南Ⅰ区土坑実測図(3)



第50図　尾畑遺跡南Ⅰ区土坑実測図(4)

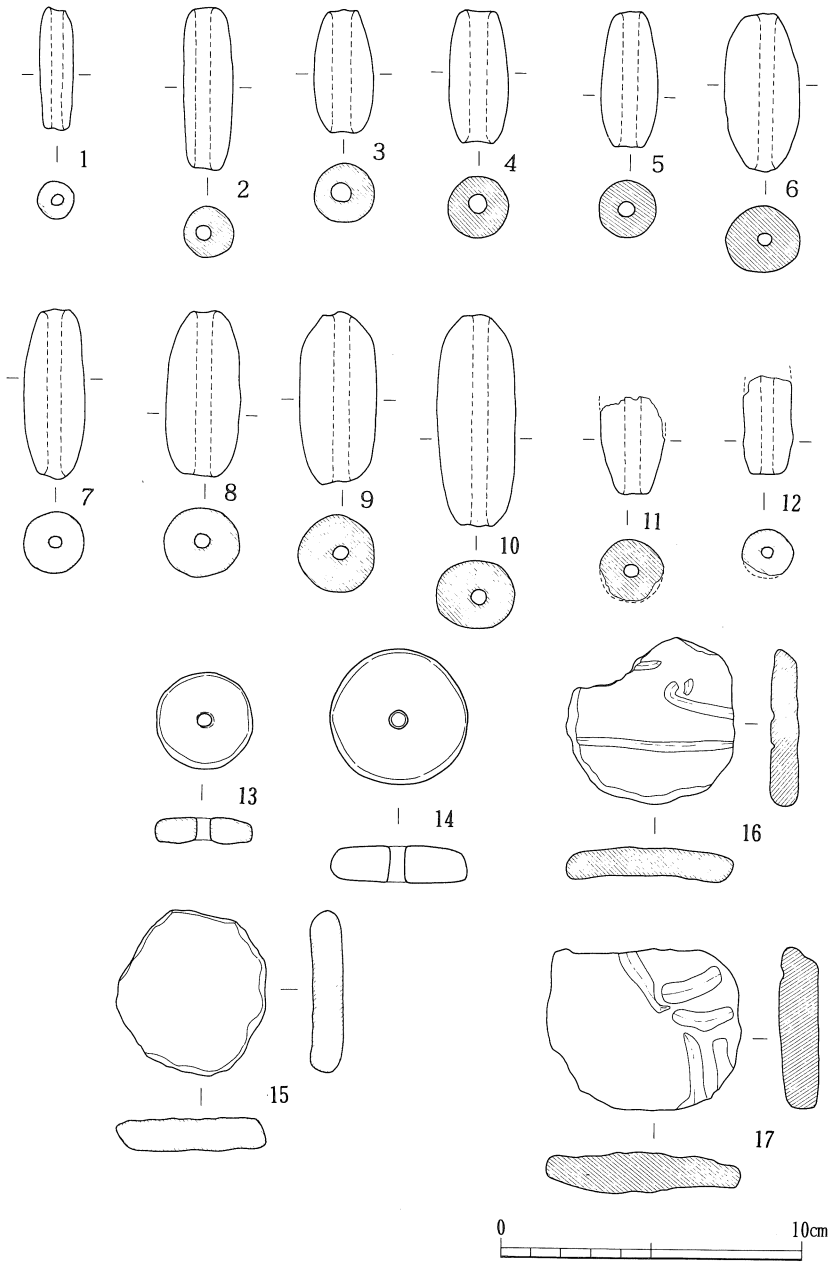


第51図　尾畑遺跡南Ⅰ区土坑出土遺物実測図(1)



1・2は土坑4
3　　は土坑14
4　　は土坑16
5　　は土坑12

第52図　尾畑遺跡南Ⅰ区土坑出土遺物実測図(2)



第53図　尾畑遺跡南Ⅰ区土坑出土製品実測図

奈良時代の遺構と遺物

調査区全域に広がる22棟の掘立柱建物群がこの時期の遺構である。建物配置は大きく北、中央、南に纏まりみられ、南北棟を基本とする。

建物１（第54図）

調査区北端部に位置する。桁行３間、梁行２間の南北棟の総柱建物である。主軸方位は北５度西を指向する。規模は北辺両隅および南東隅の柱穴を欠くが、桁間4.78m、梁間4.72ｍと想定した。柱間は桁行で1.6m、梁行で2.5ｍほどと思われる。柱の掘形は円形を呈し、径0.4m～0.6ｍの大きさをもつ。確認面からの深さは0.2m～0.4ｍである。

建物２（第54図）

建物１の７ｍ南に位置する。建物は桁間５間、梁行３間の南北棟であり、主軸方位は北７度西を指向する。柱穴は西柱列第１、２柱が確認されていない。規模は桁間10ｍ、梁間5.5ｍである。柱間は桁行で1.8m、梁行で２ｍほどと思われる。

柱の掘形は円形を呈し、径0.4m～0.6ｍの大きさをもつ。確認面からの深さは0.4ｍ～0.6ｍである。

建物３（第54図）

建物２と重複する。桁行５間、梁行３間の南北棟の建物である。主軸方位は北１度西を指向する。建物は西柱列第２～５柱および北柱列第３柱を欠くが、桁間10ｍ～梁間６ｍである。柱間は桁行・梁行とも２ｍほどである。柱の掘形は円形を呈し、径0.4m～0.6ｍの大きさをもつ。確認面からの深さは0.3m～0.5ｍである。

建物４（第55図）

建物２の南４ｍにこれと柱筋を揃えて位置し、建替え（建物４－ａ→建物４－ｂ）が確認できた。ともに桁行６間、梁行３間の南北棟の建物である。

建物４－ａは主軸方位は北６度西を指向する。建物は東柱列第３、５、６柱を欠くが、桁間10.6m、梁間5.4ｍである。柱間は桁行・梁行ともにほぼ1.8ｍである。柱の掘形は円形を呈し、径0.5m～0.7ｍの大きさをもつ。確認面からの深さは0.2m～0.5ｍである。

建物４－ｂは主軸方位は北６度西を指向する。建物は東柱列第３、４、６柱を欠くが、桁間10.2m、梁間5.2ｍである。柱間は桁行で1.6m～1.9m、梁行は1.6m～2.1ｍである。柱の掘形は円形を呈し、径0.3m～0.6ｍの大きさをもつ。確認面からの深さは0.1ｍ～0.3ｍである。建替えの状況については、建物４－ｂが北柱列のうち第２、３柱において建物４－ａの柱掘形を踏襲し、北柱列第１、３柱では建物４－ａの柱掘形を切って設けられていることを確認した。建物の位置は僅かに東へずれる程度である。

建物５（第56図）

建物３の東３ｍに位置する。桁行５間、梁行３間の南北棟の建物である。主軸方位は北８度

西を指向する。建物は東柱列第１柱を欠くが他の柱穴は全て確認できた。規模は桁間8.9ｍ、梁間５ｍである。柱間は桁行で1.7ｍ～1.8ｍ、梁行では1.6ｍ～1.7ｍほどである。柱の掘形は円形を呈し、径0.4ｍ～0.7ｍの大きさをもつ。確認面からの深さは0.3ｍ～0.5ｍである。

建物６（第56図）

建物３、５との間に位置する総柱建物である。桁行、梁行ともに２間で、3.4ｍ×3.4ｍの規模をもつ。主軸方位は北14度西を指向する。柱間は1.6ｍ程度である。柱の掘形は円形を呈し、径0.6ｍ～0.8ｍの大きさをもつ。確認面からの深さは0.3ｍ～0.7ｍである。

建物７（第56図）

建物６と同様に建物３、５との間に位置する建物である。柱掘形は北西、南西、南東隅の３か所においてのみ検出した。4.1ｍ×3.6ｍの規模をもつ。主軸方位は北４度西を指向する。柱の掘形は円形を呈し、径0.5ｍ×0.6ｍ程度の大きさをもつ。確認面からの深さは0.3ｍ～0.7ｍである。

建物８（第55図）

建物４と北辺が重複する。桁行５間、梁行４間と考えられる南北棟の建物である。主軸方位は北６度西を指向する。建物は北柱列第４柱、東西柱列第２柱を欠く。規模は桁間6.9ｍ、梁間5.2ｍである。柱間は桁行で1.4ｍ、梁行では1.3ｍほどである。柱の掘形は円形を呈し、径0.4ｍ～0.6ｍ程度である。

建物９（第57図）

建物４の西にこれと並行して配されている。桁行３間、梁行２間と考えられる南北棟の建物である。主軸方位は北８度西を指向する。建物は東柱列第１～３柱、西柱列第２柱を欠く。規模は桁間3.4ｍ、梁間2.6ｍである。柱間は桁行で1.2ｍ、梁行では1.3ｍほどである。柱の掘形は円形を呈し、径0.4ｍ～0.6ｍの大きさをもつ。確認面からの深さは0.4ｍ～0.6ｍ程度である。

建物10（第57図）

他の建物群とはやや離れた調査区東辺やや北寄りに位置する。桁行３間、梁行２間の南北棟の建物である。主軸方位は北７度西を指向する。建物は東柱列第１柱を欠く。規模は桁間6.3ｍ、梁間4.2ｍである。柱間は梁行2.1ｍである。桁行では、第２柱と第３柱間が2.8ｍであり、ほかの東西柱列の柱間距離が1.7ｍであるのに対し、幅が広くなっている。第２柱と第３柱間に柱穴が１個配されていた可能性もある。柱の掘形は円形を呈し、径0.3ｍ～0.6ｍの大きさをもつ。確認面からの深さは0.2ｍ～0.4ｍ程度である。

建物11（第57図）

調査区中央部に位置する。桁行５間、梁行３間の南北棟建物である。主軸方位は北７度西を指向する。規模は桁間8.6ｍ、梁間５ｍである。柱間は桁行で1.7ｍ～1.8ｍ、梁行では1.6ｍ～1.9ｍでやや不均一である。柱の掘形は円形を呈し、径0.3ｍ～0.7ｍの大きさをもつ。確認面か

らの深さは0.2m～0.4m程度である。

建物12（第58図）

建物11の西７ｍに位置する。建物は桁行５間、梁行３間の南北棟建物である。主軸方位は北４度西を指向する。規模は桁間8.6m、梁間５ｍである。柱間は桁行、梁行ともに1.7ｍを平均値とする。柱の掘形は円形を呈し、径0.3m～0.5mの大きさをもつ。確認面からの深さは平均0.5m程度であるが、西柱列の両端は0.8mと深い。

建物13（第58図）

調査区西辺中央部に位置する。建物の西、南辺部が調査区外になるため、北柱列と東柱列の柱穴を検出したにとどまる。桁行４間、梁行２間の南北棟建物と想定した。主軸方位は北12度西を指向する。規模は柱間８ｍ、梁間5.8mである。柱間は桁行で２ｍ、梁行ともに2.9ｍである。柱の掘形は円形を呈し、径0.3m～0.5mの大きさをもつ。確認面からの深さは0.2m～0.7ｍである。

建物14（第59図）

建物11の南にほぼ接する位置にある。建物は桁行２間、梁行２間の総柱建物である。主軸方位は北23度西を指向する。規模は桁間、梁間ともに３ｍである。柱間は1.5ｍである。柱の掘形は円形を呈し、径0.5m～0.7mの大きさをもつ。確認面からの深さは0.3m～0.6mである。

建物15（第59図）

建物14の南に位置する。建物は桁行３間、梁行２間の南北棟建物である。主軸方位は北８度西を指向する。規模は桁間4.6m、梁間3.2mである。柱間は桁行で1.5m平均であり、梁行では1.7mである。柱の掘形は円形を呈し、径0.3m～0.5mの大きさをもつ。確認面からの深さは0.3ｍ～0.4mである。

建物16（第59図）

調査区南部に集中する建物群の１つで、２間×２間の東西棟建物である。主軸方位は北５度西を指向する。規模は3.8m×3.5mである。柱間は1.7m～1.9mである。柱の掘形は円形を呈し、径0.4m～0.5mの大きさをもつ。確認面からの深さは0.2m～0.5mである。

建物17（第59図）

調査区南部に集中する建物群の１つであり、建物16の西に並行して設けられている。２間×２間の総柱建物である。主軸方位は北４度西を指向する。規模は3.4m×3.2mである。柱間はほぼ1.6mである。柱の掘形は円形を呈し、径0.3m～0.5mの大きさをもつ。確認面からの深さは0.2m～0.5mである。

建物18（第60図）

建物17の南３ｍに位置する２間×２間の総柱建物である。主軸方位は北５度西を指向する。規模は3.8m×3.7mである。柱間は1.3m～1.6mである。柱の掘形は円形を呈し、径0.3m～0.5

mの大きさをもつ。確認面からの深さは0.3m～0.6mである。

建物19（第60図）

建物18の南３mに位置する４間×４間の大型の総柱建物である。主軸方位は北４度西を指向する。規模は6.6m×6.2mである。柱間は1.2m～1.8mである。柱の掘形は円形を呈し、径0.3m～0.7mの大きさをもつ。確認面からの深さは0.3m～0.5mである。

建物20（第61図）

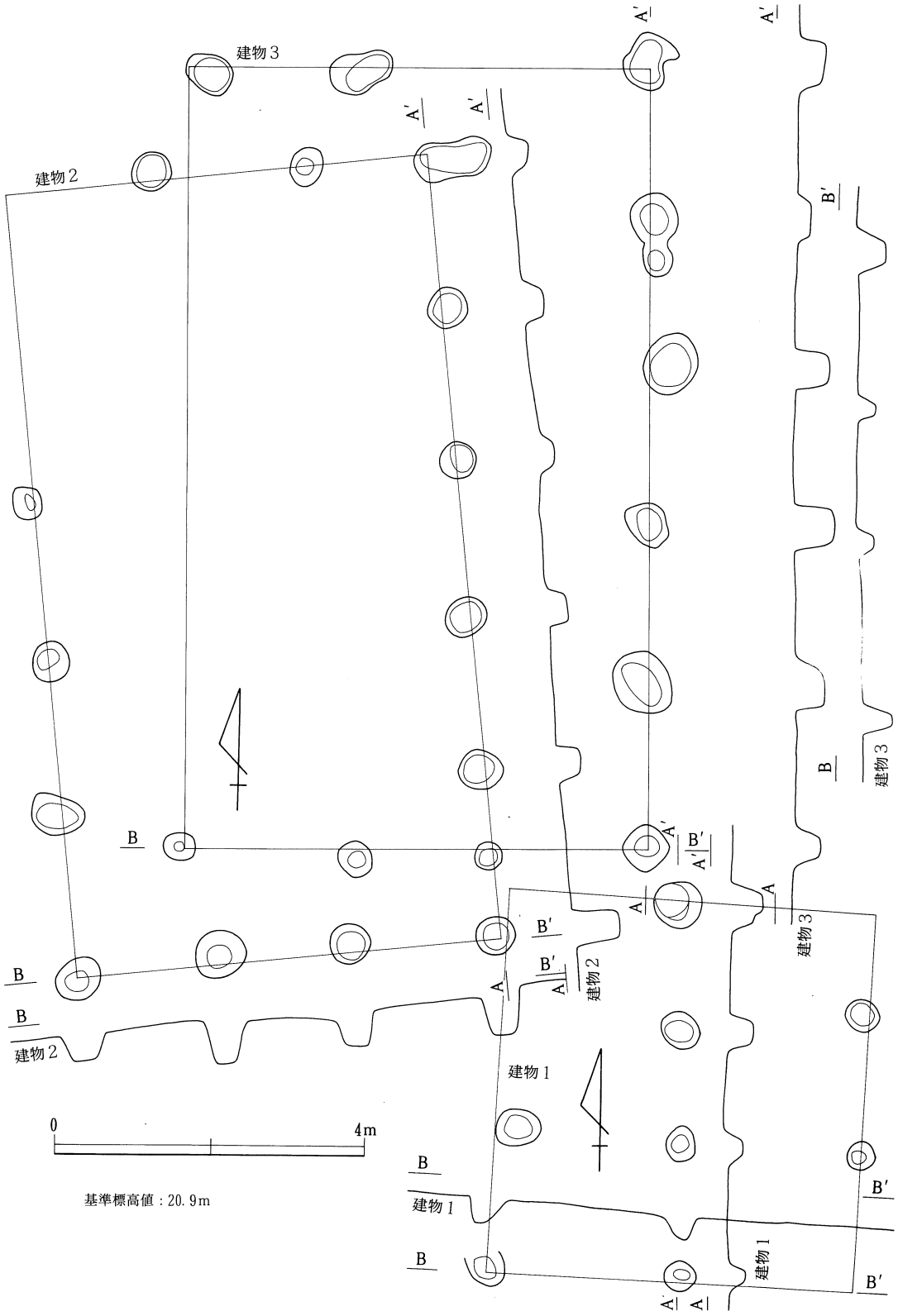
調査区西辺中央部付近に位置する建物は桁行５間、梁行３間の南北棟建物である。主軸方位は北２度西を指向する。北柱列の第１、３柱を欠くが、規模は桁間8.2m、梁間4.8mである。柱間は桁行で1.4m～1.8mであり、梁行では1.5m～1.8mであり、梁行では1.5m～1.9mである。柱の掘形は円形を呈し、径0.3m～0.7mの大きさをもつ。確認面からの深さは0.2m～0.6mである。

建物21（第61図）

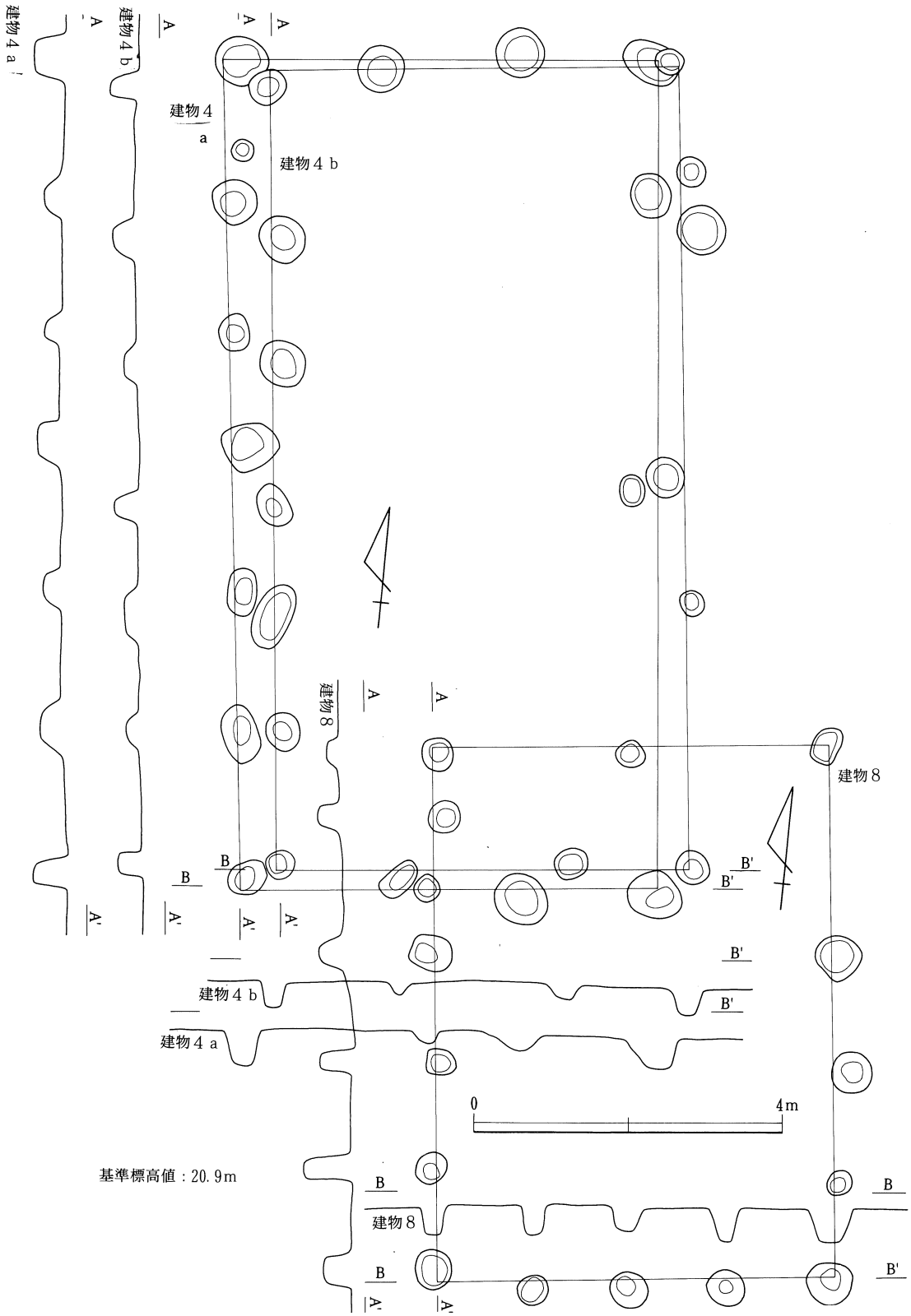
建物20と切り合う、桁行３間、梁行２間の南北棟建物である。主軸方位は北４度西を指向する。規模は桁間5.9m、梁間4.3mである。柱間は桁行で1.6m～2.6mであり、東西柱列第２、３柱間の距離が長い。梁行では1.9m～2.4mである。柱の掘形は円形を呈し、径0.3m～0.4m程度の大きさをもつ。確認面からの深さは0.2m～0.4mである。

建物22（第61図）

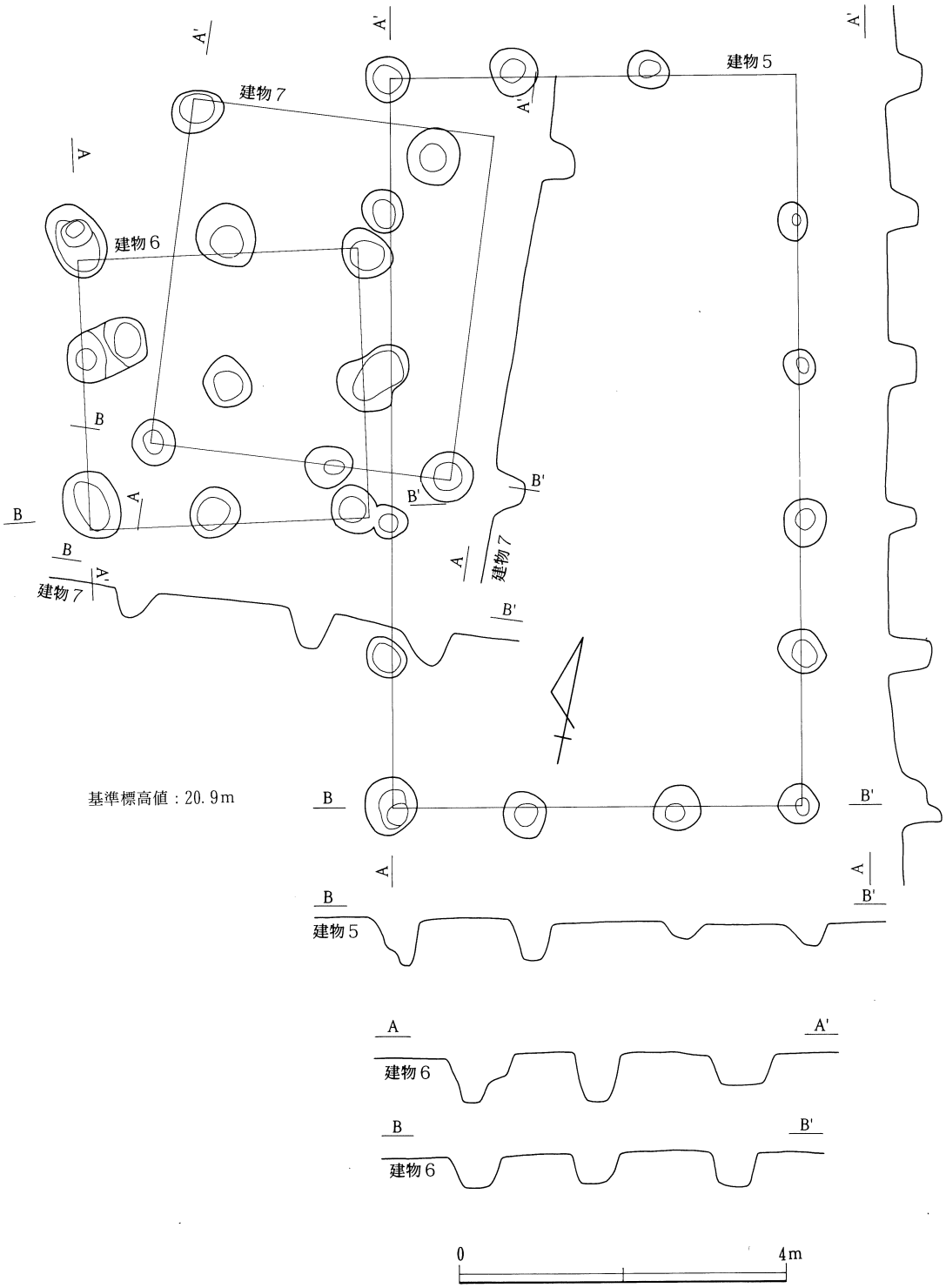
建物21と重なる１間×１間の建物である。主軸方位は北５度西を指向する。規模は2.2m×2.2mである。柱の掘形は円形を呈し、径0.3m～0.5m程度の大きさをもつ。確認面からの深さは0.3m～0.4mである。



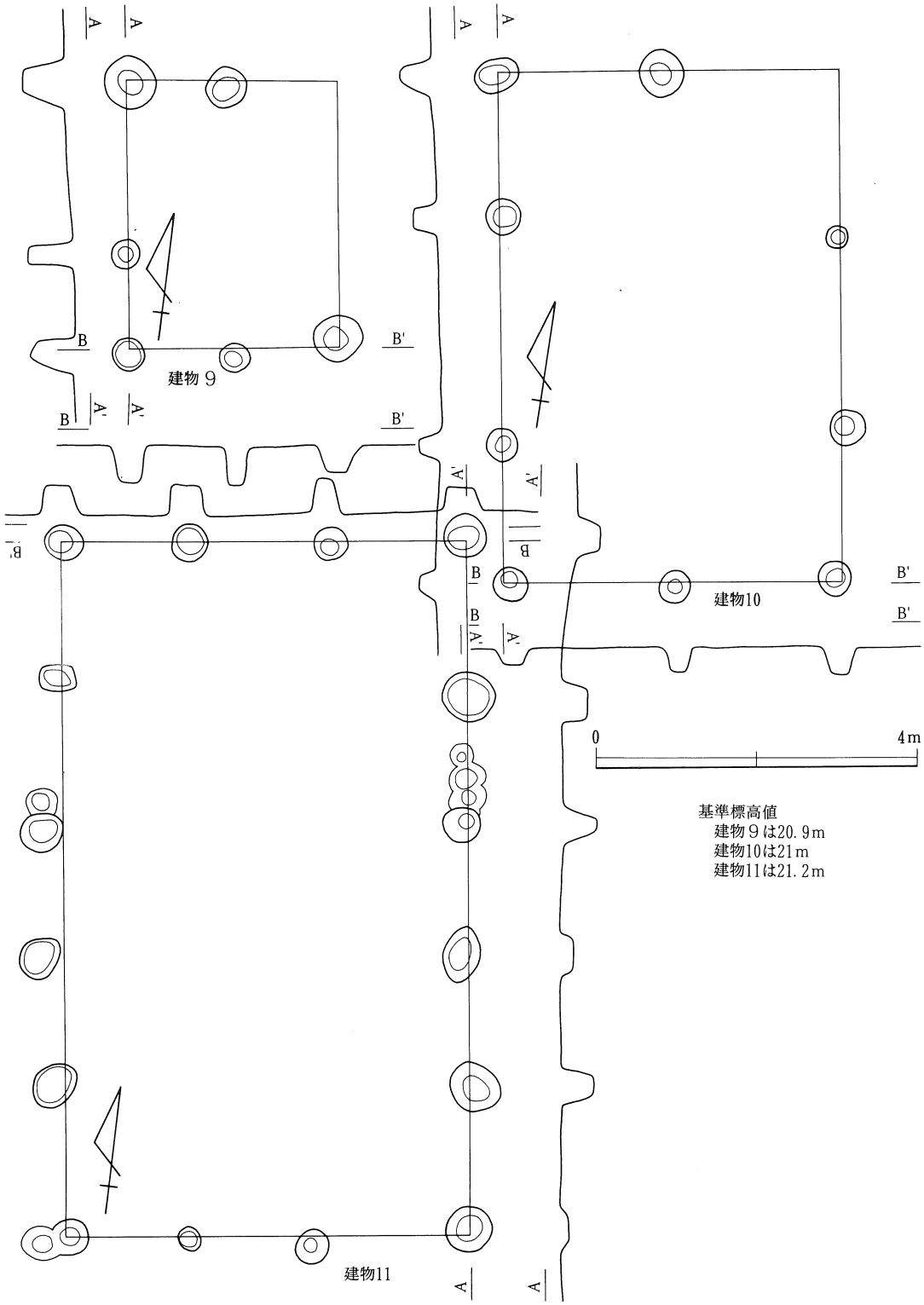
第54図　尾畑遺跡南Ⅰ区建物実測図(1)



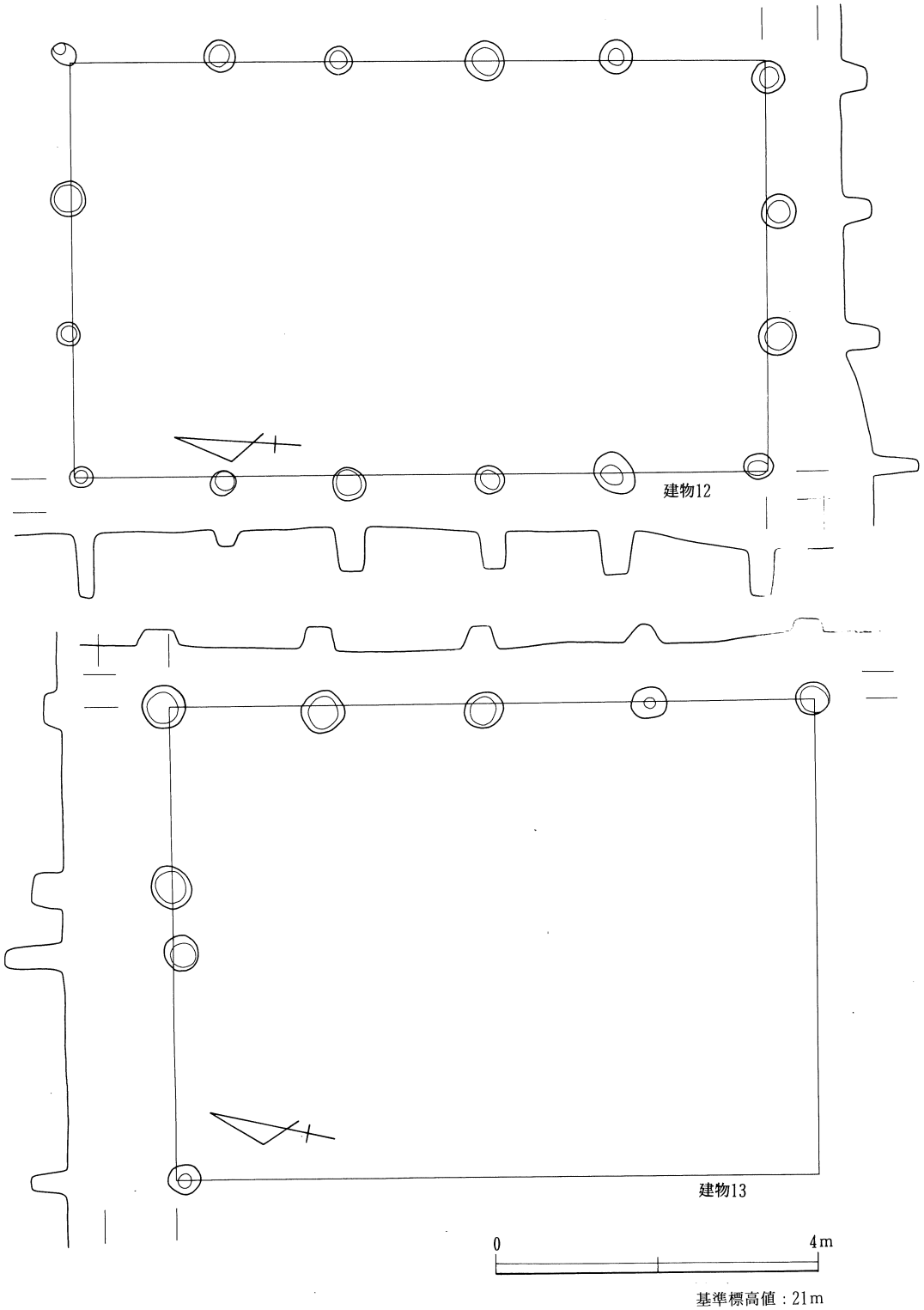
第55図　尾畑遺跡南Ⅰ区建物実測図(2)



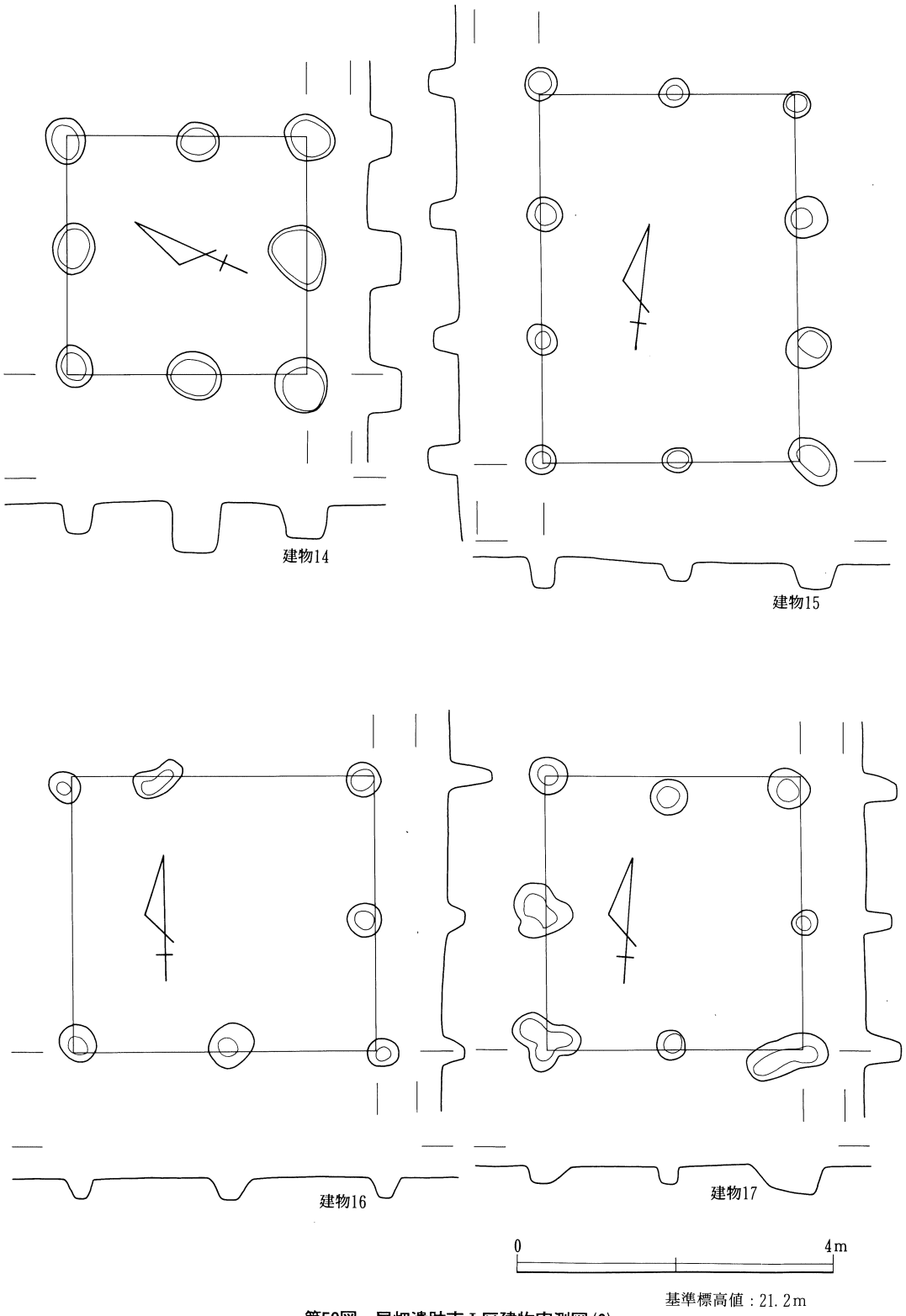
第56図　尾畑遺跡南Ⅰ区建物実測図(3)



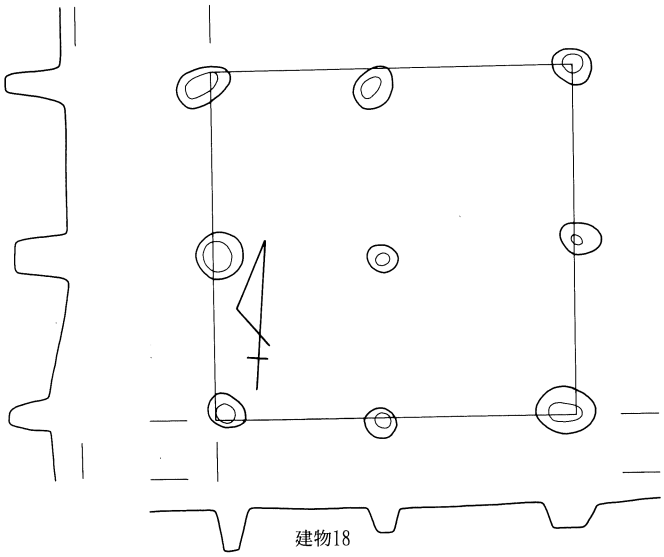
第57図　尾畑遺跡南Ⅰ区建物実測図(4)



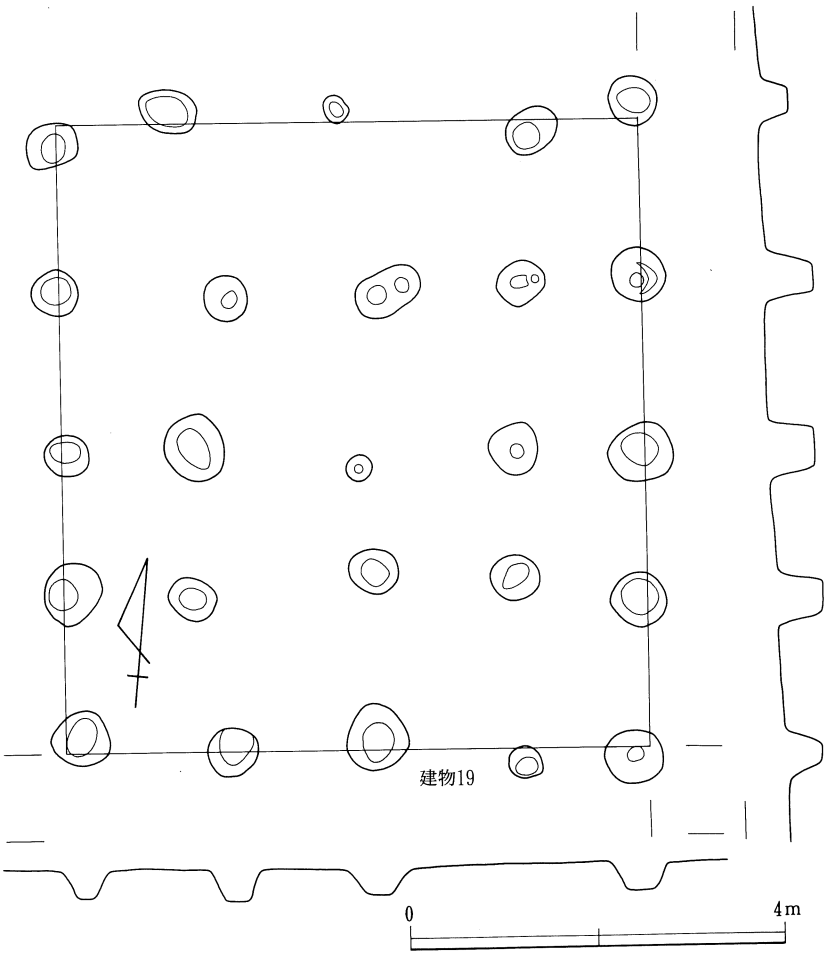
第58図　尾畑遺跡南Ⅰ区建物実測図(5)



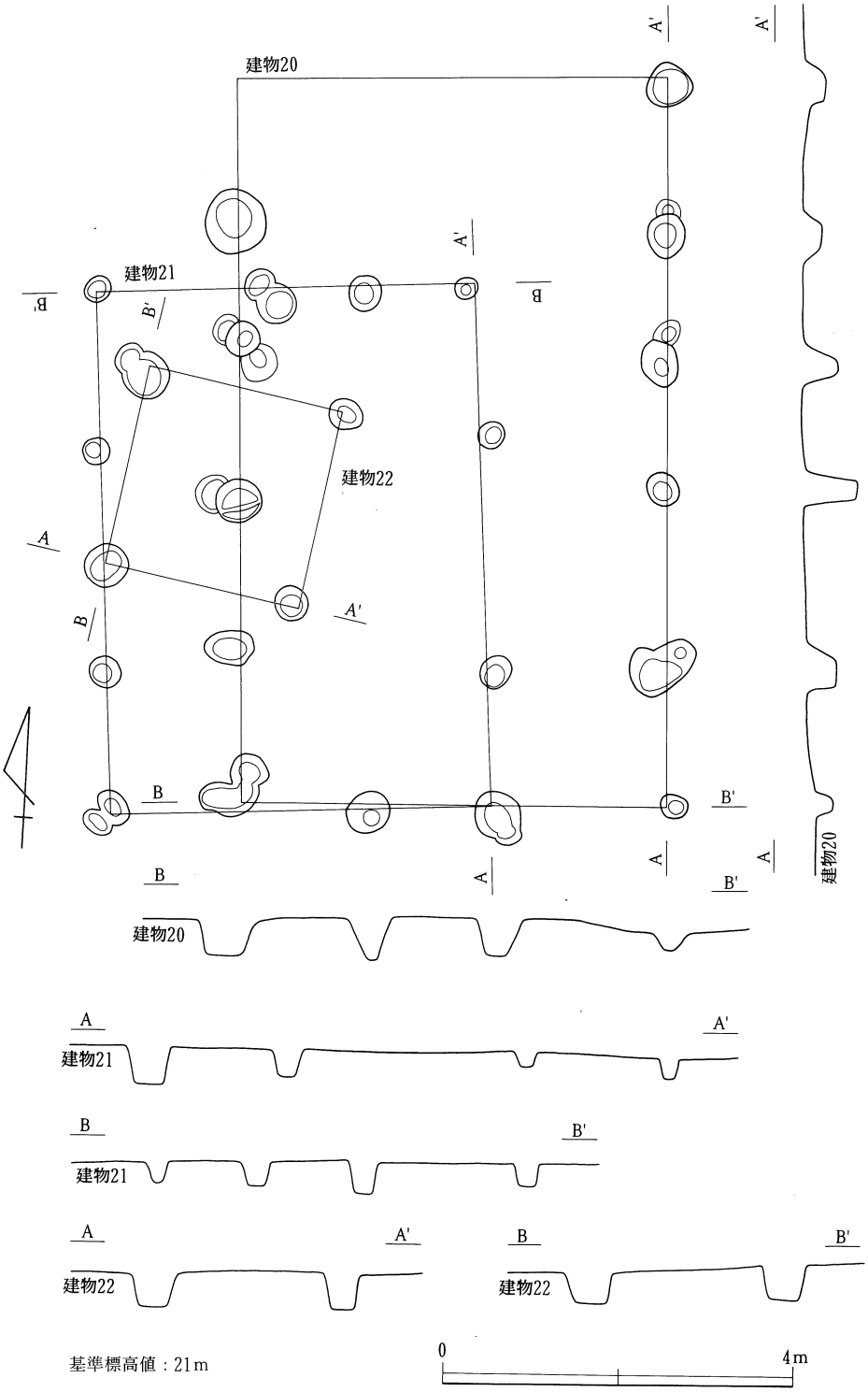
第59図　尾畑遺跡南Ⅰ区建物実測図(6)



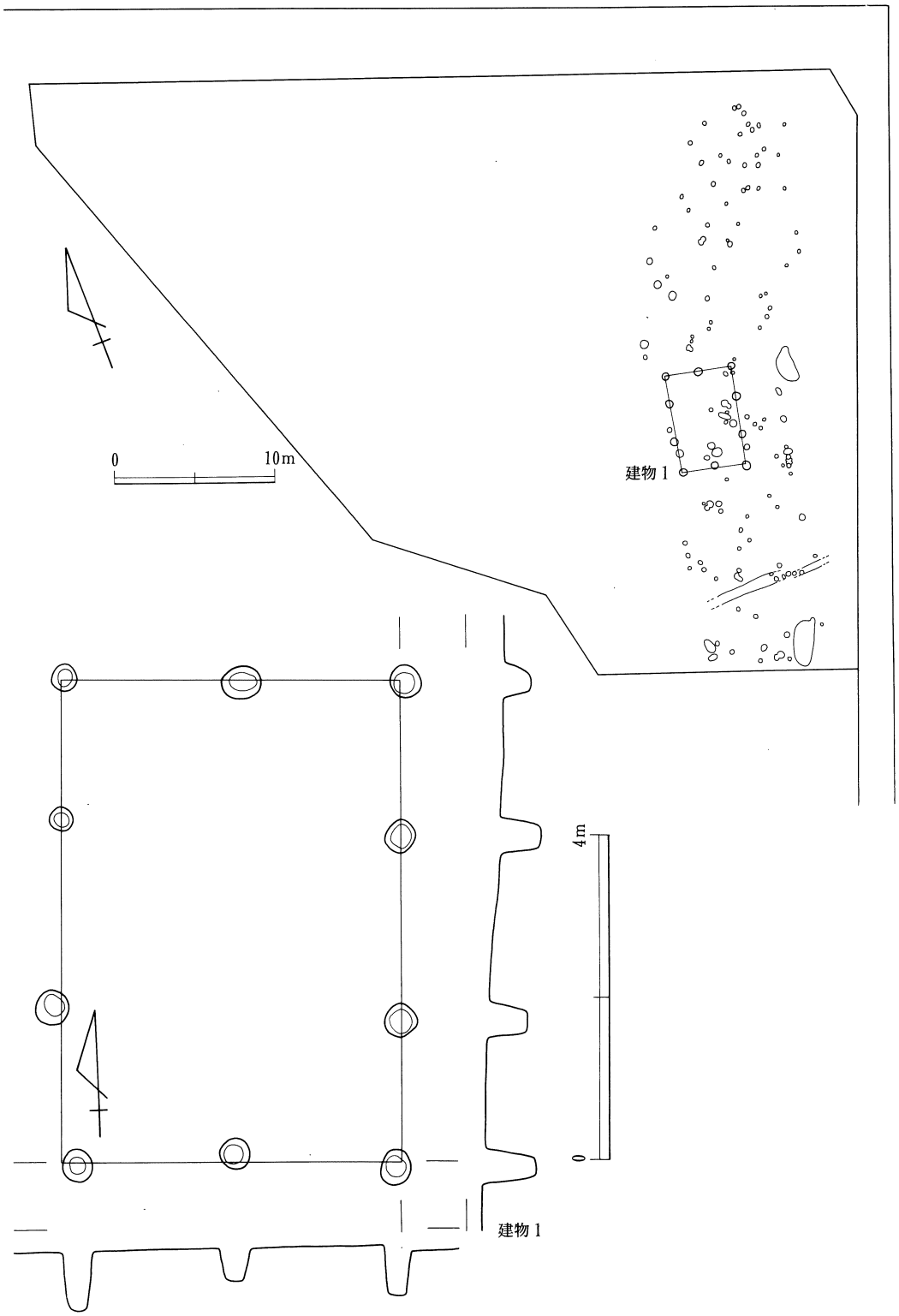
基準標高値：21.2m



第60図　尾畑遺跡南Ⅰ区建物実測図(7)



第61図　尾畑遺跡南Ⅰ区建物実測図(8)



第62図　尾畑遺跡南Ⅱ区遺構分布図、建物実測図

3　南Ⅱ区の調査（第62図）

南Ⅰ区の北西部に接する調査区である。約2000㎡の範囲において多数のピットを検出したが、明確な遺構としては掘立柱建物１棟のみである。また調査区西半部には遺構がなかった。

建物１は桁行３間、梁行２間の南北棟建物である。主軸方位は北３度東を指向する。規模は桁間６ｍ、梁間4.2ｍである。柱間は桁行で1.8ｍ～2.2ｍであるが、建物11・21と同様に東西柱列第２、３柱間の距離が長い。梁行はほぼ２ｍである。柱の掘形は円形を呈し、径0.3ｍ～0.4ｍ程度大きさをもつ。確認面からの深さは0.3ｍ～0.7ｍである。南Ⅰ区の建物群に同一の主軸方位をもつ例がなく、別の群構成をなすものと考えられる。

南Ⅰ区整地層出土遺物（第63図～第67図）

南Ⅰ区の整地層からは８世紀中頃～後半代の須恵器・土師器が多く出土している。これらの遺物には７世紀や９世紀など前後する時期のものが含まれておらず、掘立柱建物の時期を示すものと思われる。

出土須恵器（第63図～第65図）

須恵器には蓋、坏、埦、皿の器種がある。

蓋（第63図）

つまみの形態によって大きく４分類できる。１～４のつまみは擬宝珠の偏平化し、頂部が周縁よりも突出するタイプである。このうち１～３は平坦な天井部から緩いＺ字状をなして口縁部に至る。口縁端部は共に強く屈曲する。４は平坦な天井部から丸みを帯びて口縁部に伸び緩く屈曲する。

５～８はつまみが擬宝珠状をなさず、ボタン状を呈するタイプである。５は平坦な天井部から直線的に口縁部に至る。端部は明瞭な屈曲を示さない。６は平坦な天井部からＺ字状の曲線を描き、口縁端部で垂下する。７は狭い天井部から口縁部に向かって長く伸びる。口縁端部は上下に細く仕上げられている。８は天井から口縁部にかけて６と同様にＺ字状の曲線を描いて伸びる。

９、10のつまみは周縁が高いタイプである。９は中央部が平坦で、10はやや尖り気味となる。共に口縁端部は強く屈曲する。

17は輪状のつまみをもつ。天井部から口縁部の形態はＺ字状の曲線を呈する。

11～16はつまみを欠き、天井部から口縁部へは緩やかに移行する。11～13は口縁端部が細く垂下する。14、15は口縁端部がやや丸みをもつ。16は口縁部が緩く屈曲する。

18～25はつまみを欠くが、天井から口縁部にかけてＺ字状の形態を示す。

26はつまみを欠く。平坦な天井部をもち口縁部との境で丸みを帯びる。口縁部はやや内傾し端部では外反する。27はつまみを欠くがその痕跡は残る。天井部は丸みを帯び、口縁部との境に沈線が巡る。口縁部はやや外傾であるが、直線的に伸びる。器厚は天井部に比較して口縁部

では薄くなっている。26・27ともに器高の高い形態を示している。

蓋は焼成がほぼ良好であり、胎土に角閃石・長石などを含み、色調は灰褐色を基調としている。調整では天井部に回転ヘラ削り後、横ナデが施されている。ただ2・9は天井部の中心側½に回転ヘラ削りが残り、つまみ周辺部にナデが施される。大きさは口径12.8cm～20.1cm、器高15cm～2.8cmであり、形態の差に反映されている。これらの蓋と組み合う器種は1～25が坏・埦類、26、27は壺類と考えられる。

坏（第64、第65図）

高台付坏と高台をもたない坏の2種類がある。

高台付坏（第64図1～13）

器形の形態によって分類できる。まず体部から口縁部にかけての形態では、①直線的に立ち上がる（1・3・9・14）、②丸く湾曲する（8・10・12）、③丸みを帯びて立ち上がるが、体部中位で外反する（5・6・7・13）、④口縁部が短く外反するもの（2・4・11）の4種類である。体部下端の形態は、①直線的なもの（9、10）、②稜をもつ（1・3・8・11）、③緩い曲線をなす（2・4・5・7・12）、④丸く仕上げられているもの（6・13）の4種類である。高台は形状、接合する底部の位置、傾きに差がある。まず高台の形状では、①やや長いもので、端部が細まる（1・2・5）、②やや長い台形状のもの（8・11）、③短い台形状のもの（3）、④やや短く丸みをもつ（6・7）、⑤端部がやや肥厚する（4・10・13）、⑥端部が鋭角に細まり外面に稜をもつもの（9・12）の6種類がある。高台の位置では、底部外端に付くもの（1・2・3・5・8・9・11・12）と底部のやや内側に付く（4・6・7・10・13）の2種類がある。また高台の傾きでは4・11・12がほぼ直立し、他はやや外傾する。調整は体部～口縁部に横ナデ、底部外面に回転ヘラ切り後、ナデが施されているものが大半である。

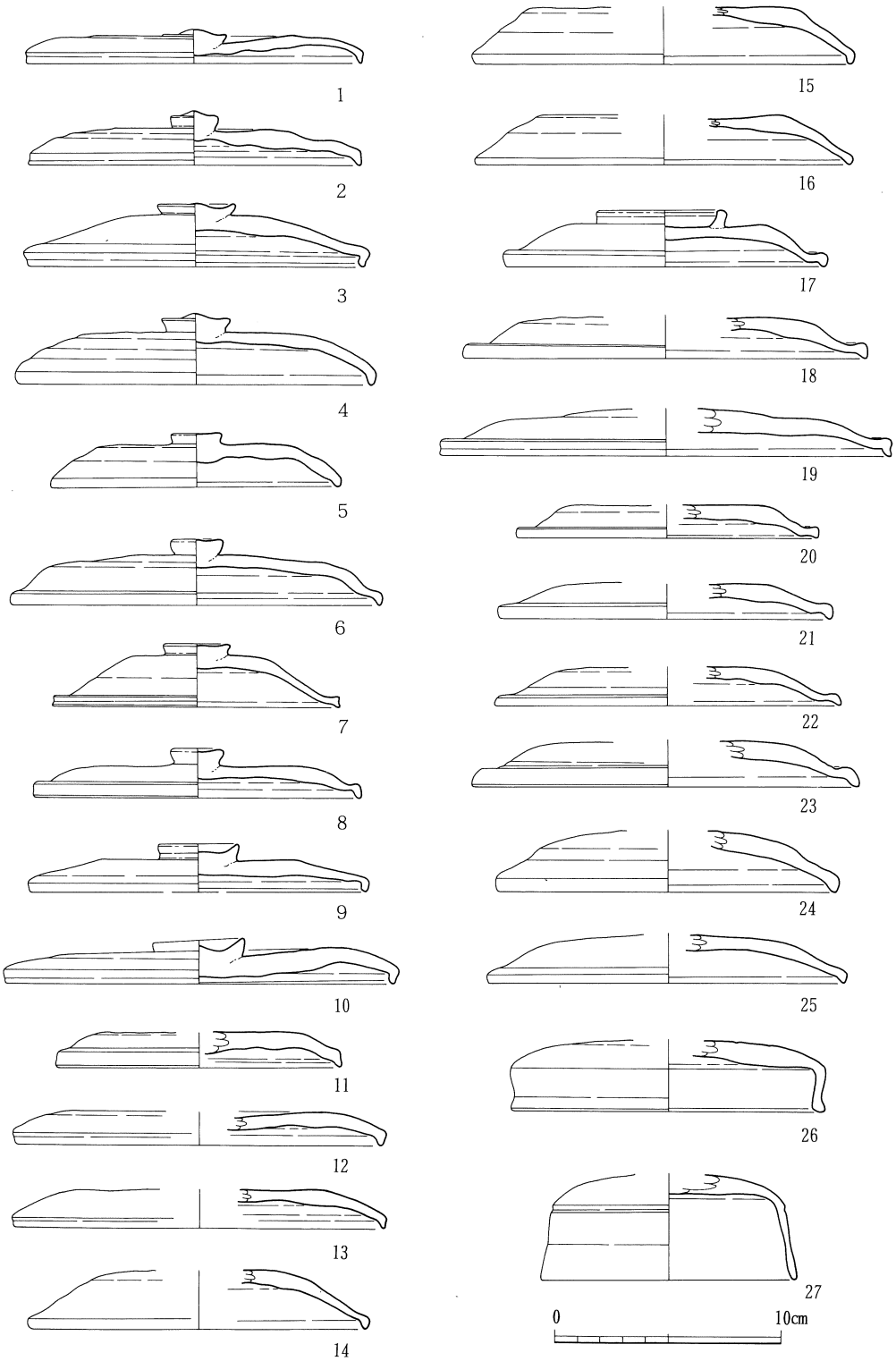
坏（第64図15～第65図8）

高台付坏と同様に器形の特徴によって分類できる。体部～口縁部の形状では直線的に立ち上がるもの（第64図15・16・18～20）、内湾気味（第65図2・5・6）、体部上半部から口縁部にかけてやや外反するもの（第64図17、第65図4・7・8）、外反気味（第65図1・3）の4種類がある。底部には平底と丸みをもつ2種類がある。大きさは口径12.3cm～14.2cm、器高2.9cm～4.5cmと幅がある。したがって器形には、深い形状や浅いものなどが混在する。調整は体部に横ナデ、底部には回転ヘラ切り後、ナデが施されている。

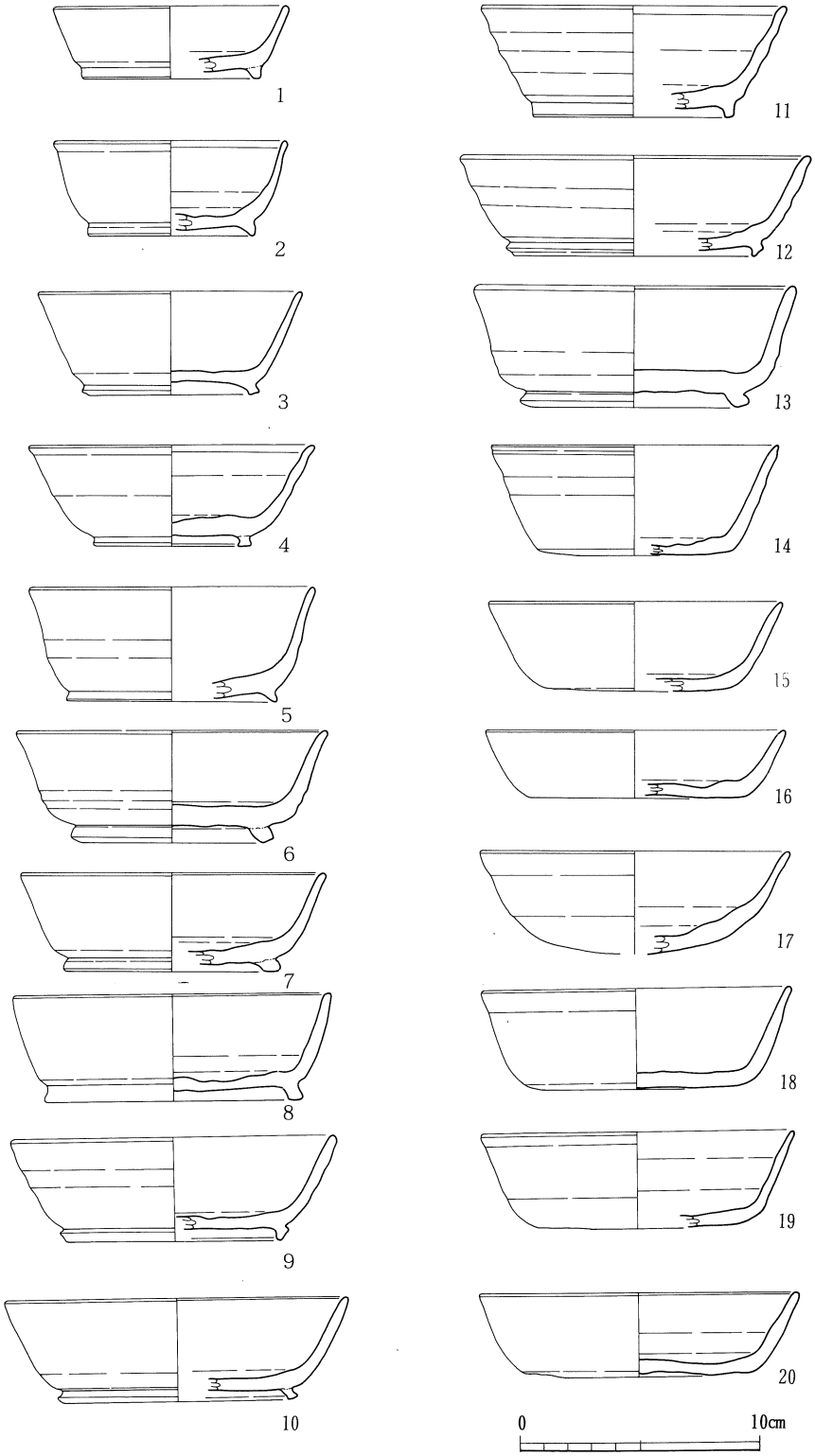
坏の胎土は角閃石・白色砂粒を含む。焼成は通有で灰色を基調とするものが高台付坏に多く、高台をもたない坏には淡灰色を呈する焼成の不良なものが多い。

埦（第65図9～14）

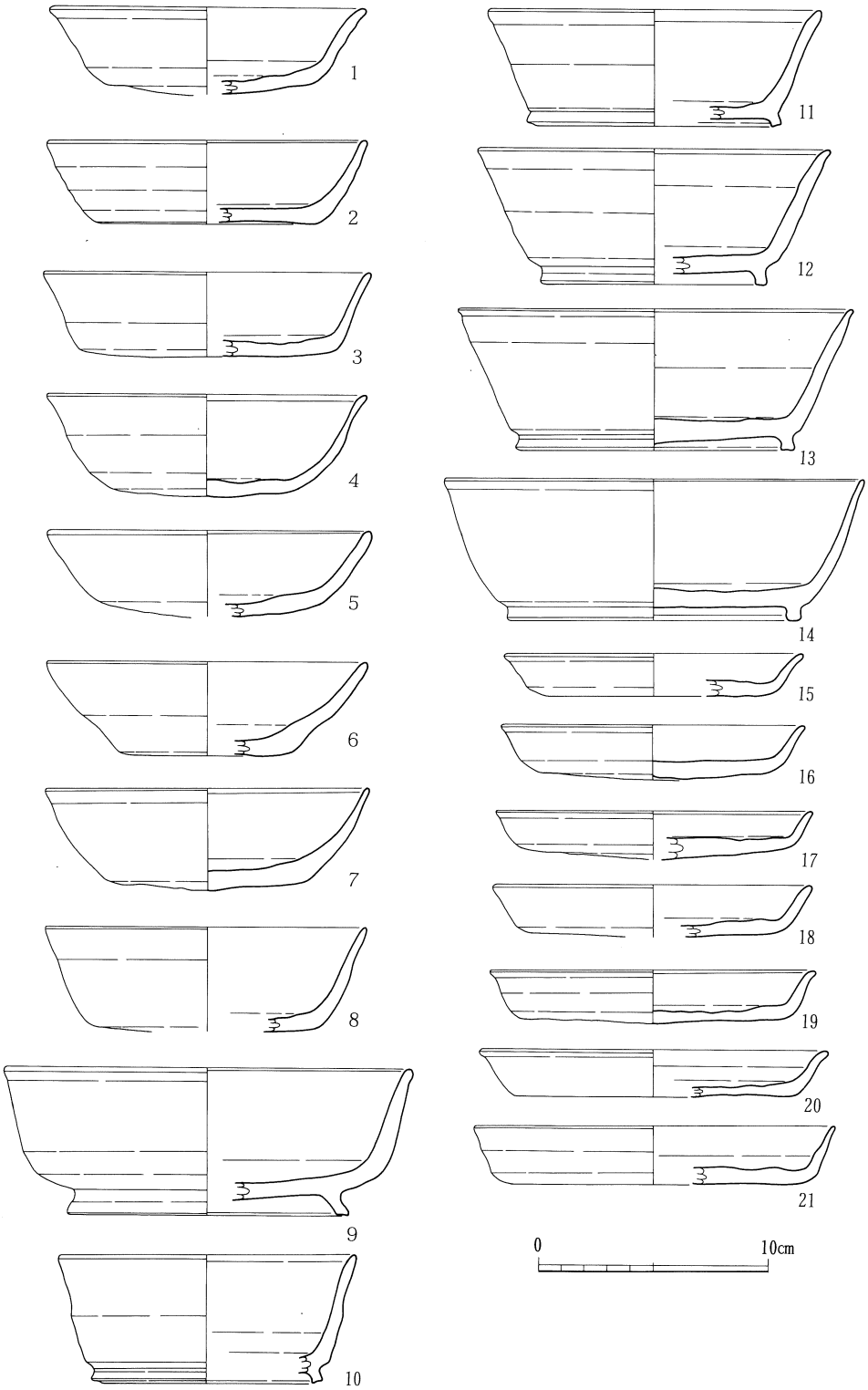
坏に比較して深い形状をなし、大形のものを埦とした。この中で9は最も大きく、口径17.4cm、器高6.3cmである。体部は下端が丸く、口縁部に至って僅かに外反する。高台は長く伸び、



第63図　尾畑遺跡南Ⅰ区出土須恵器実測図(1)



第64図　尾畑遺跡南Ⅰ区出土須恵器実測図(2)



第65図　尾畑遺跡南Ⅰ区出土須恵器実測図(3)

外傾する。10〜13は体部が直線的に立ち上がる。10は口径13cmと小形であるが、器形は深い形状をなす。11は口縁部がやや内湾する。12・13は口縁端部が短く外へ屈曲する。14は体部下端が緩い丸みをもち、体部の器厚が薄い。高台の形状は9を除くと、いずれも低い矩形をなす。このうち10・11では高台がやや外傾して付けられているが、12〜14はほぼ直立する。大きさは口径13cm〜17.4cm、器高5cm〜6.3cmである。埦の胎土は良好であり、白色細砂・角閃石を若干含む。焼成は不良なものもあるが、ほぼ通有で暗灰色を呈する。調整は体部に横ナデを施す。底部は回転ヘラ切り後、丁寧な円方向のナデが施される。

皿（第65図15〜21）

皿は体部の立ち上がりが低く、器厚は薄い。体部下端は丸みをもつ。口縁部は体部から直線的に伸びるもの（18・21）、外反するもの（15・16・19・20）の2種類がある。底部は平底になると思われるもの（20・21）と中央が緩く突出するもの（16〜20）がある。大きさは口径13cm〜15.5cm、器高1.8cm〜2.5cmである。胎土には角閃石・白色細砂を含む。色調は灰色、淡茶褐色を呈するものがあり、焼成良好・不良が混在する。調整は体部に横ナデがみられる。底部は回転ヘラ切り後、丁寧な円方向のナデが確認できる。

出土土師器（第66図・第67図）

蓋（第66図1〜9）

つまみの形態には、擬宝珠状をなすもの（1・2）、低平な擬宝珠状（4）、低平なボタン状（3）、柱状をなすもの（5）の4種類がある。6はつまみを欠いており、その痕跡が残る。7は器面が摩滅しており、つまみの接合痕は明確には認められないが、恐らくつまみが欠落したものと考えられる。天井部から口縁部にかけての形状は、平坦な天井部から口縁部に向かい緩く屈曲（2・7〜9）、天井部が低く、口縁部に向かい直線的、あるいはやや丸みをもって伸びる（1・3〜6）などがある。口縁部の形状では、端部で細まり内面に沈線が巡る（2・8）、屈曲せずに直線的に伸びる（6・7）、僅かに屈曲する（1・5・9）、短く屈曲、垂下する（4）ものがある。大きさは口径12.7cm〜18.6cm、器高2.5cm〜3.1cmと幅がある。調整については天井部に回転ヘラ削り後、ナデを施す。4・6では内外面のヘラミガキが顕著である。ただ器面の荒れているものがかなり多く、十分に観察できなかった。胎土・焼成・色調の観察では、胎土に角閃石、長石、石英などの砂粒を多く含み、焼成には良・不良の差があった。色調は赤褐色を基調としていた。

坏（第66図、第67図）

須恵器と同様に高台付と無高台の2種類がある。

高台付坏（第66図10〜14）

器形の特徴には3種類ある。10〜12は体部下端から丸みを帯びて立ち上がり口縁部で緩く外反し、高台は体部下端に付き外に開く。13は口縁部は外反し、体部は下端に稜をもつ。高台は

矩形をなし、やや外開きに付く。14は口径に対し器高の低い形態である。体部下半は丸く、口縁部はやや外反する。高台は底部縁辺よりもやや内側に付く。

坏（第66図15～22、第67図１～８）

無高台の坏は体部の形態によって４つに分類できる。①直線的に伸びる（15・20）、②丸く立ち上がる（16～19、第67図１～３・６）、③口縁部が外反する（第67図４）、④浅い形状を呈し、口縁部が緩く外反する（21・22、第67図５）などである。大きさは口径13.4cm～17.4cm、器高3.3cm～５cmである。小形品として口径１２cm前後、器高2.5cm程度の低平な形態を示す例がある（第67図７・８）。 坏の調整は体部内外面をナデ・ヘラミガキ、底部は回転ヘラ切り後にナデで仕上げことが基本と思われる。特徴的な例としては第67図５の底部に２方向の荒いヘラ調整を示すことができる。坏の大半は器面が荒れており、調整を確認できない例が多かった。坏の胎土・焼成・色調は、胎土に角閃石、長石、石英などの砂粒を多く含み、焼成はほぼ通有であり、黄褐色～赤褐色を呈していた。

皿（第67図９～12）

内湾気味に立ち上がり外へ傾く。調整は内外面をヘラミガキで仕上げ、底部は回転ヘラ切り後、ナデ・ヘラミガキが施される。大きさは口径16.7cm～19.2cm、器高は1.9cm～3.2cmであるが10の3.2cmを除くと、２cm前後である。胎土・焼成・色調では、胎土に角閃石がやや多く含まれる傾向はあるが良好といえる。焼成も良好であり、黄・赤褐色を呈する。

盤（第67図13）

体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部へ伸びる。高台は長い矩形を呈し、八の字状に付く。調整は器面が荒れており明確でないが、横ナデが施されていると思われる。口径19.6cm、器高4.4cmである。胎土には角閃石・長石を含み、焼成は良好で赤褐色を呈す。

鉢（第67図14・15）

14は底部を欠くが、体部が緩く内湾する形態を呈す。調整は器面の荒れのため不明である。大きさは口径18cm、器高5.3cmである。15は片口の鉢である。体部下半を欠く。体部上半部は直立気味に立ち上がり、口縁部でやや内傾する。注口部は大きく外へ開く。器面にはナデが施されている。口径21.2cmである。胎土に角閃石・長石を含み、焼成は良好で赤褐色を呈す。

高坏（第67図16）

坏部の上半部を欠く。脚部は上半部が円筒状をなし、下半部は脚端部に向かって広がる。調整は脚部に横ナデが施されている。脚部径12cmである。胎土には角閃石・石英を含む。焼成は良好で明赤褐色～黄褐色を呈する。

埦（第67図17）

口縁部は端部に向かい細く、やや外反する。体部は横ナデで調整され、底部は回転ヘラ切りで切り離されている。大きさは口径7.8cm、器高4.8cmと小型である。

焼塩壷（第67図18）

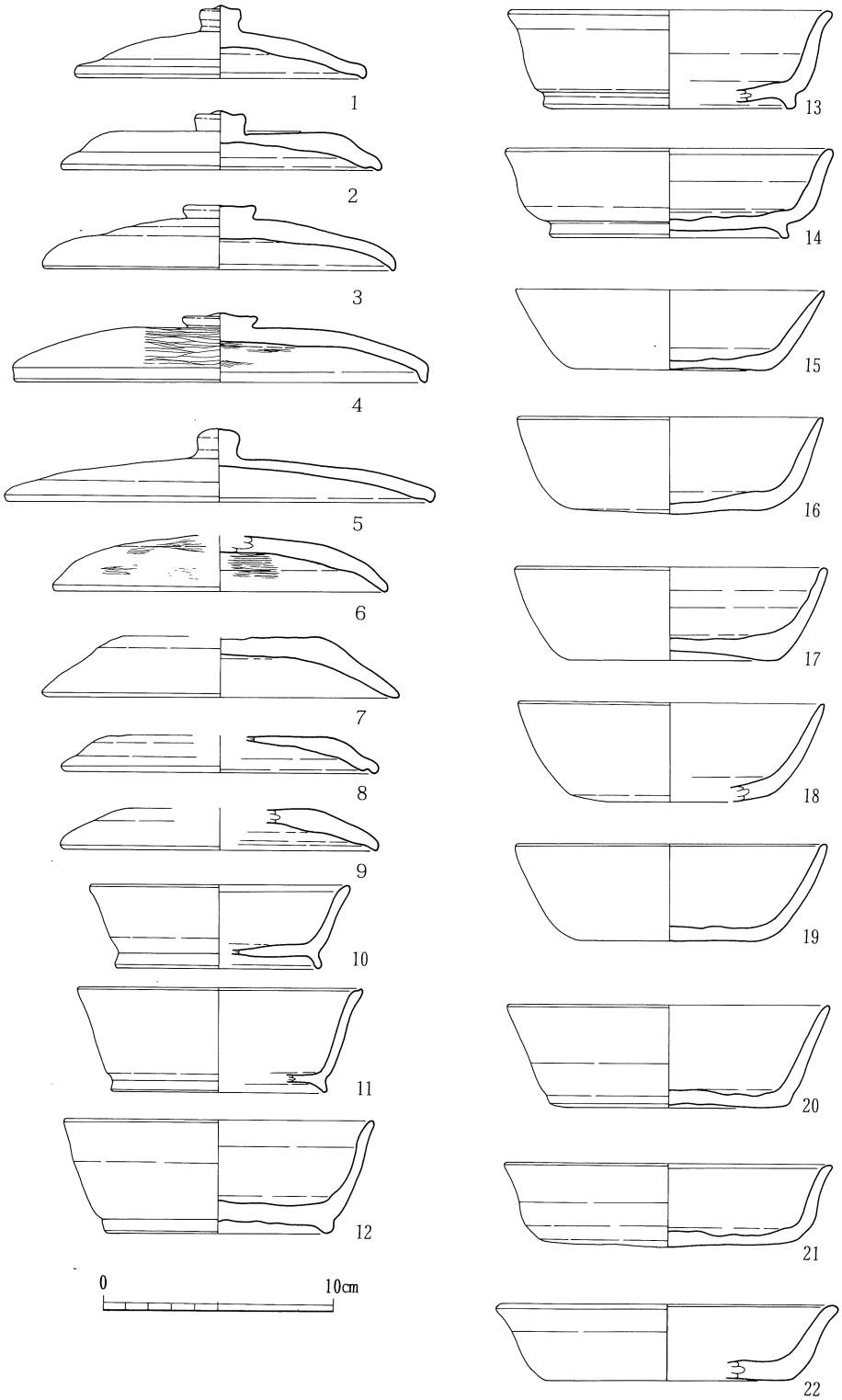
円筒形を呈す。底部を欠くが、丸底と思われる。口縁部外面は面取りされている。器面は荒れており整形・調整の状況は明らかではないが、外面は指頭で整形され、内面には僅かに布目痕が残る。口径8.5cmの小型品である。胎土には砂粒を多く含む。焼成は本来的には良好と思われる。茶褐色を呈する。

甕（第67図19）

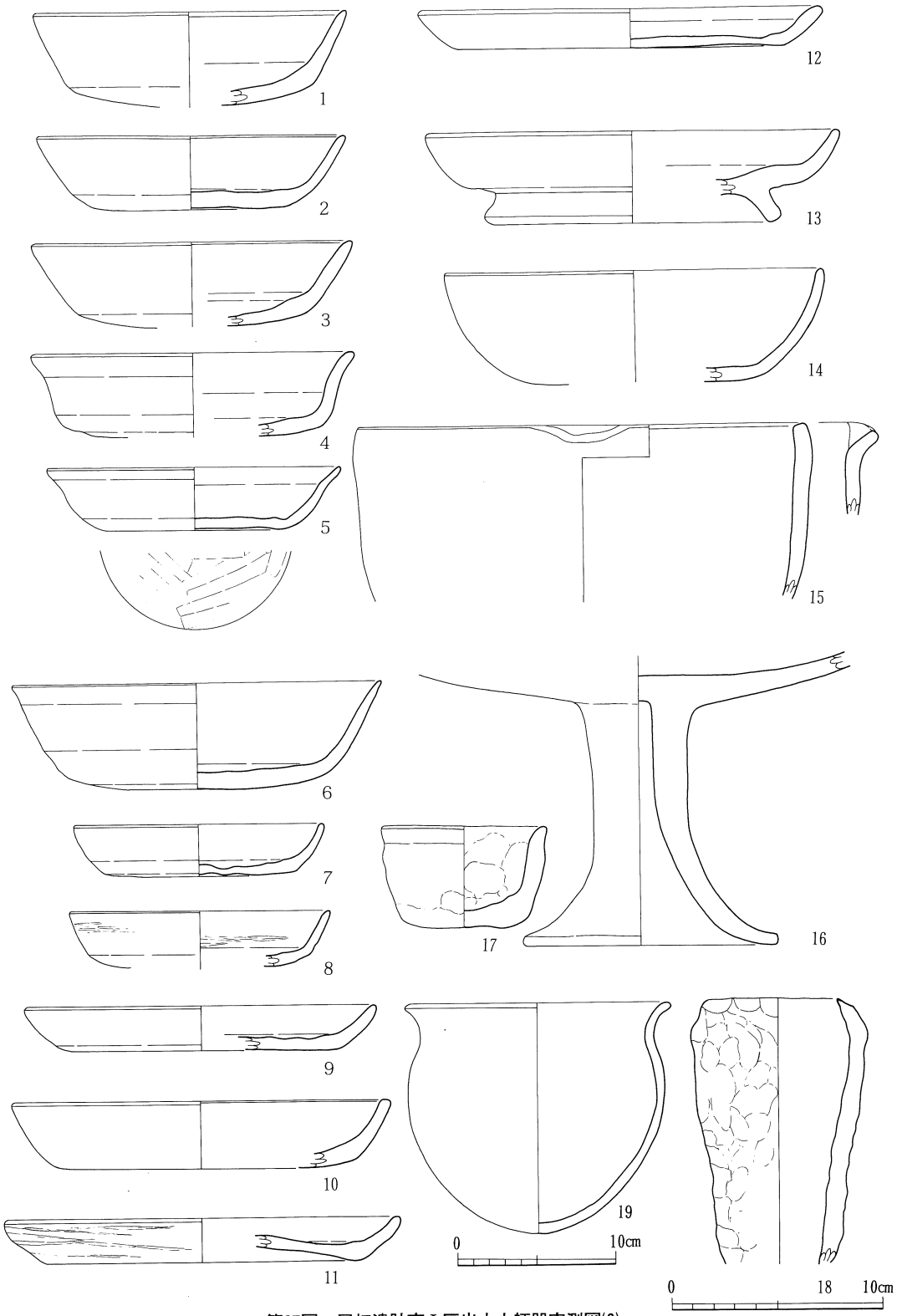
球体状の丸い胴部をもち、口縁部は丸く外反、底部は丸底をなす。口縁部付近は横ナデ、内面に指頭痕が残っている。大きさは口径14.4cm、器高16.8cmである。胎土には角閃石・石英・長石を含む。焼成は良好で淡赤褐色を呈する。

出土銭貨（図版８）

和同開寳が調査区西部の整地層（Ｇ－Ⅶ－４）から須恵器の蓋と密着した状態で出土した。全体に脆弱で破損しており、錆化が進み保存状態はよくない。



第66図　尾畑遺跡南Ⅰ区出土土師器実測図(1)



第67図　尾畑遺跡南Ⅰ区出土土師器実測図(2)

4　北Ⅰ区の調査

河岸段丘の縁辺部に位置する範囲である。遺構としてはピットと調査区西半部にまとまる土坑11基がある。また調査区西辺には溝があり、北Ⅱ・Ⅲ区に連続するものと考えられる。

遺構

土坑１は調査区南部中央に位置する。平面形は南北方向に長い不整形を呈する。規模は1.4ｍ×３ｍである。この土坑には２つの土坑が重なっており、１つは中央に1.1ｍ×1.4ｍの土坑、さらに南端に0.5ｍ×0.8ｍの円形土坑が掘られている。３基の先後関係は中央の土坑が最も古く、南端の土坑が最も新しい。深さは中央部の土坑が深く遺構確認面から0.6ｍである。中央の土坑から土師器甕片が出土している。

土坑２は土坑３の北に位置する。平面形は東西方向に主軸をもつ長方形を呈する。規模は3.3ｍ×1.2ｍ、深さ0.2ｍである。平坦な底部から緩く立ち上がる壁に至る。

土坑３は土坑２の北側に位置する。やや歪な方形を呈し、1.9ｍ×２ｍ、深さ0.25ｍの規模をもつ。覆土は１層灰褐色土層、２層硬質暗黄褐色砂質土層、３層混炭化物多量、砂質土層の順で堆積していた。土坑内の状況では、中央に0.25ｍ×0.7ｍの礫が置かれ、周辺には焼土塊・炭化物がやや集中してみられた。注意すべき点は遺物の出土状況である。つまり南壁に沿って土師器４点、須恵器１点が出土し、このうち南西隅の土師器３点はほぼ完形品であった。出土土器の時期はすべて８世紀中頃を示していた。出土遺物に火葬骨はないが、墓地の可能性もある。南Ⅰ区建物群と同時期である点も注意したい。

土坑４は土坑３の西15ｍに位置する。平面形は円形を呈し、長径1.4ｍ、短径1.1ｍ、深さ0.06ｍの規模をもつ。

土坑５は土坑４の北にほぼ接して位置する。平面形は歪な円形を呈し、長径1.3ｍ、短径１ｍ、深さ0.1ｍの規模をもつ。

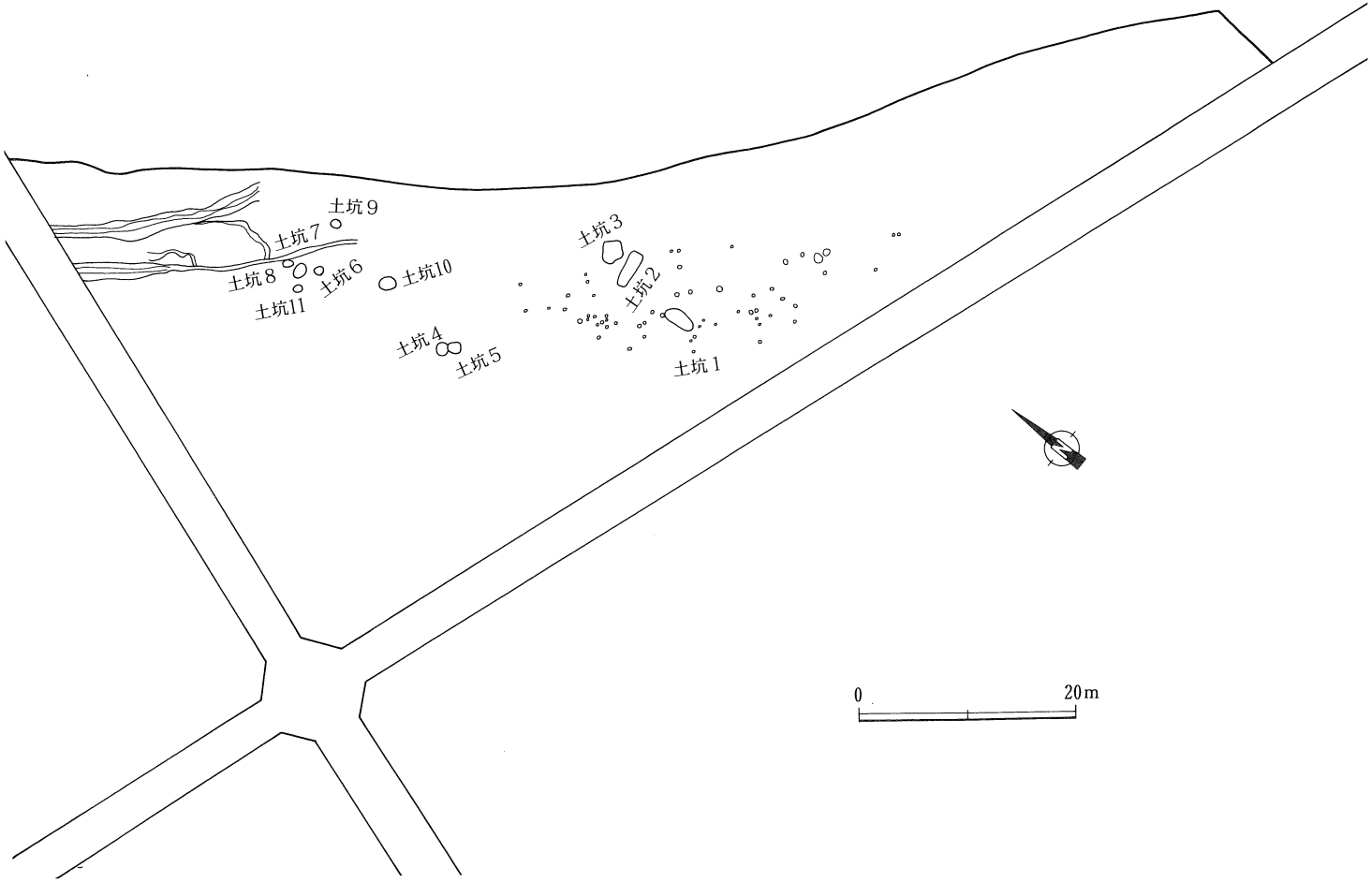
土坑６は土坑４の北13ｍに位置する。平面形は径0.8ｍ〜0.9ｍの円形を呈し、深さは0.1ｍ程度である。

土坑７は土坑６の北西に位置する。平面形は楕円形を呈し、長径1.45ｍ、短径1.15ｍである。深さは0.1ｍ程度と浅い。

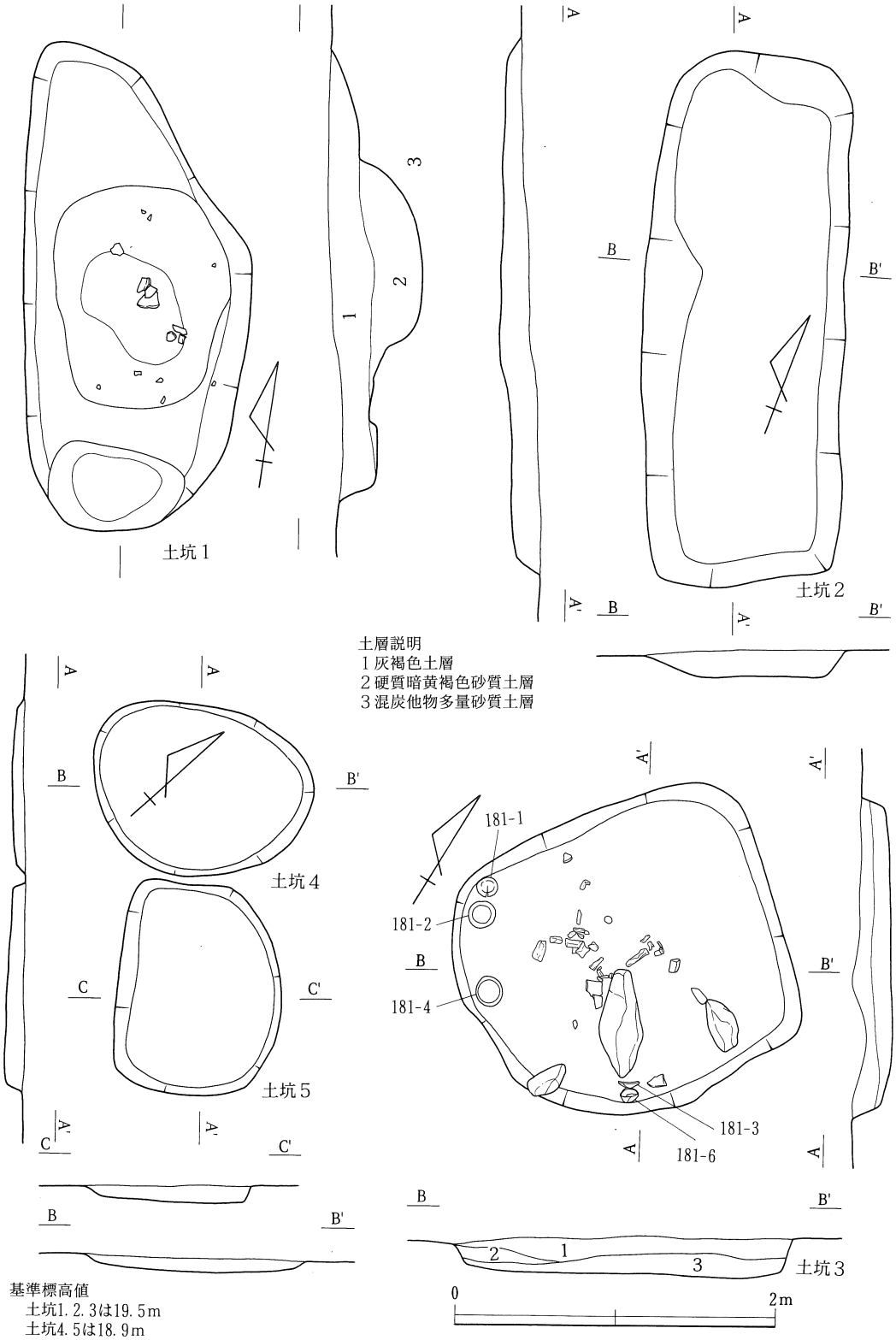
土坑８は土坑７の北側に位置する。トレンチで西部の大半を欠くが、平面形は楕円形を呈するものであろう。規模は長径0.96ｍ、短形0.7ｍ、深さ0.25ｍである。

土坑９は土坑８の東５ｍに位置する。平面形は0.9ｍの円形を呈し、深さは0.15ｍ程度である。

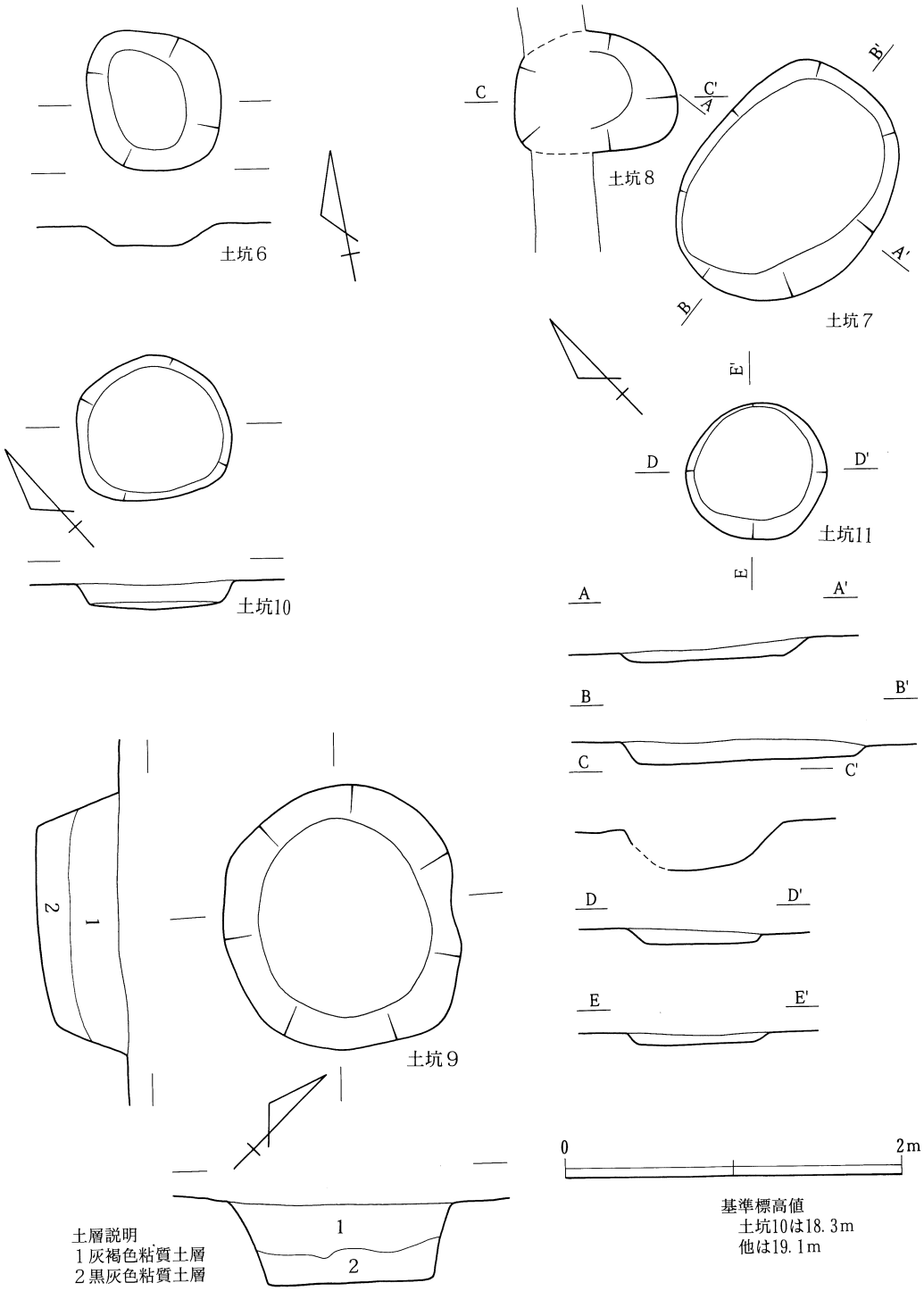
土坑10は土坑９の南６ｍに位置する。平面形は径1.4ｍ〜1.6ｍの円形を呈し、深さは0.5ｍ程度である。覆土は１層灰褐色粘質土層、２層黒灰粘質土の順で堆積していた。



第68図　尾畑遺跡北Ⅰ区遺構分布図



第69図　尾畑遺跡北Ⅰ区土坑実測図(1)



第70図　尾畑遺跡北Ⅰ区土坑実測図(2)

土坑11は土坑７の南西に位置する。平面形は径0.8ｍの円形を呈し、深さは0.1ｍ程度と浅い。

北Ⅰ区出土遺物（第181図１～６）

１～４、６は土坑３、５は土坑１から出土した。

１・２は土師器の坏である。１は体部が下端に丸みをもち、口縁部に向かって直線的に伸びる。口径13cm、器高4.7cmの大きさである。調整は内外面に横ナデ後、ヘラミガキ、底部は回転ヘラ切り後、ナデが施されている。胎土には長石・角閃石を含み、焼成は良好で赤褐色を呈する。２は体部下端から緩い屈曲を呈しながら立ち上がる。口縁部は細くやや外反する。大きさは口径7.8cm、器高4.8cmである。胎土は角閃石・細砂を含み、焼成は良好であり、赤褐色を呈する。

３・４は土師器の皿である。３は体部が丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は外反する。調整は器面の荒れのため、不明確である。胎土には長石・角閃石を含む。焼成は良好で明茶褐色を呈する。４は完形品で内湾気味に立ち上がり、器高の低い形態をもつ。調整は丁寧であり、体部外面にヘラミガキ、底部は回転ヘラ切り後、ヘラミガキが施されている。内面は回転ヘラミガキがみられる。大きさは口径18.2cm、器高２cmである。胎土は石英・角閃石を含むが精良であり、焼成も良好で赤褐色を呈する。

５は土師器甕である。器形は胴部下端～底部を欠くなど残存度が低いため不明確であるが、卵形状の胴部をもつと思われる。口縁部は外反する。器面は荒れており調整の状況は明らかでないが、胴部外面に縦方向のハケ目が残る。大きさは口径16cmである。胎土には角閃石・石英・長石など砂粒を多く含むが、焼成は良好で暗黄褐色を呈する。

６は須恵器の短頸壺である。器形的に整ったものであり、口縁部の一部を欠くがほぼ完形品である。口頸部は短く直立する。肩部は鋭角に張り、体部は直線的に伸び下端に高台が付く。高台は矩形を呈し、下端がやや肥厚する。調整は口縁部～体部に丁寧な横ナデを施し、体部下辺にヘラ削りが残る。底部はナデ調整が施されている。高台もナデ調整で仕上げられている。大きさは口径7.7cm、器高7.3cm、高台径5.7cm、最大径は肩部にもち11cmである。胎土は雲母など細砂を若干含むが良好である。焼成は良好で灰色を呈する。類例として、和泉陶邑窯跡群中のTG214窯出土品を示すことができる。

5　北Ⅱ区の調査

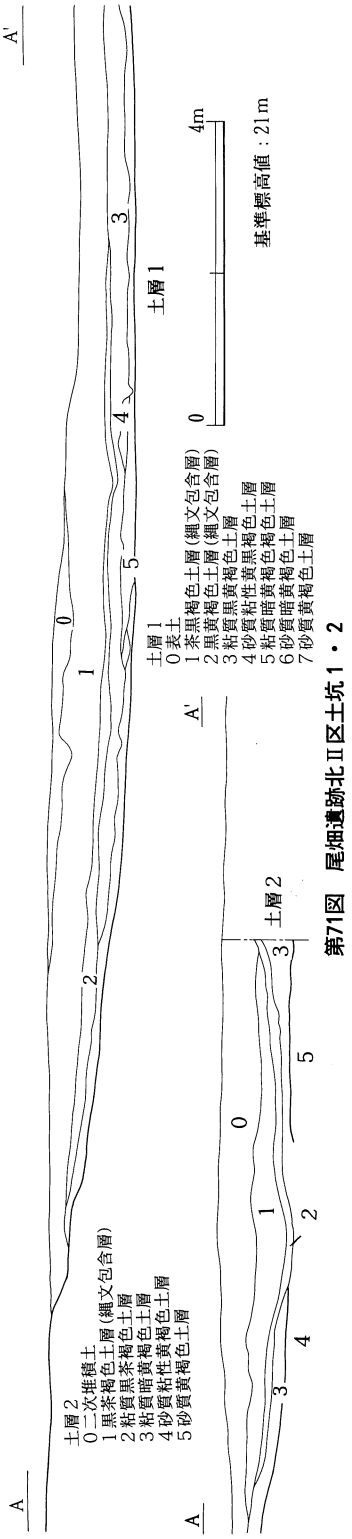
北Ⅰ区と同様に河岸段丘の縁辺部が調査の対象地となっている。ここで注目されるのは縄文時代後期～晩期の遺物包含層である。多量の土器、石器や土偶、玉類が出土した。

縄文時代の包含層

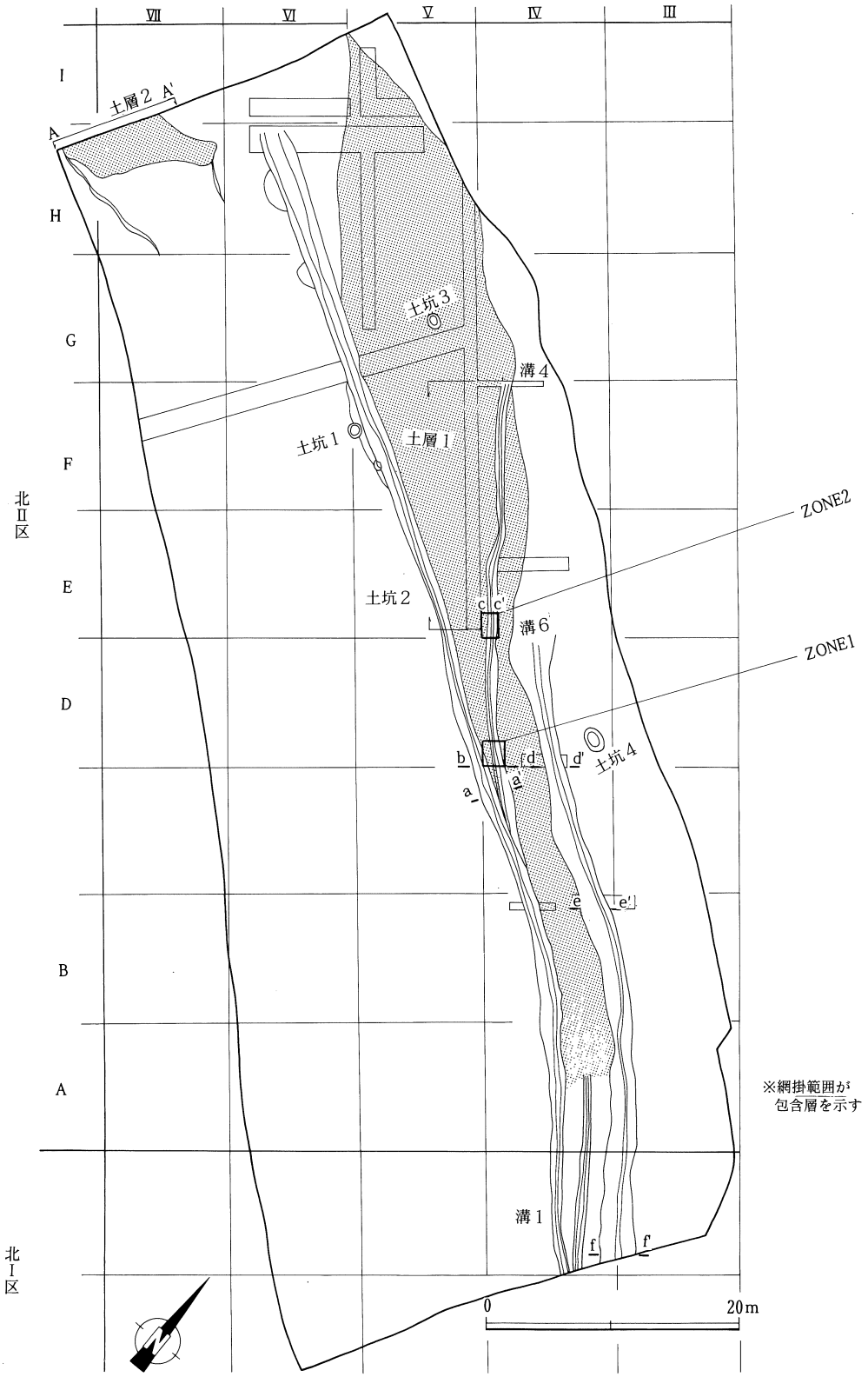
調査区の内、北西から南東にかけての½は削平されており遺構は確認されなかったが、伊呂波川寄りの範囲に包含層が残っていた。ただこの範囲においても段丘縁辺は削平を受けていた。したがって包含層の範囲は南北方向でA～Ⅰ区の約90m、東西方向は最も広いところで約20mあった。包含層の厚さは地区によって差があり、E～G－Ⅳ・Ⅴ区が最も厚い。この付近が浅い谷状の地形になっていたためと考えられる。一方北部や南部では包含層は稀薄となっている。

層序は包含層の最も残っているE－V－1～G－V－1（土層1）において観察した。最上層は二次堆積土、1層は0.5mと厚い堆積の茶黒黄色土層、2層は黒黄褐色土層、3層は粘質黄黒褐色土層、4層は砂質粘性黒黄褐色土層、5層は粘質暗黄褐色土層、6層は砂質暗褐色土層、7層は砂質黄褐色土層となっていた。このうち1・2層に遺物の包含が顕著であり、3層では遺物の包含が僅少となる。4層以下は自然堆積の無遺物層となっており、7層は基盤層である。

また、調査区西端部（西部包含層）に12m×3.5mの小範囲に遺物包含層を確認している。層序は調査区H－Ⅶ・Ⅷ、Ⅰ－Ⅶ区（土層2）において観察した。最上層には0.5m程の盛土があり、1・2層は黒茶褐色土を主体とする遺物包含層、3・4は黄褐色土層を主体とする自然堆積土層、5・6層は砂質黄褐色土で基盤層となっている。



第71図　尾畑遺跡北Ⅱ区土坑1・2



第72図　尾畑遺跡北Ⅱ区遺構分布図

北Ⅱ区包含層出土土器

北Ⅱ区の伊呂波川に面した河岸段丘の斜面からは、夥しい量の縄文時代後～晩期の遺物が出土した。土器は、一部を除き後期後半から晩期中頃にかけ各時期の型式がほぼ途切れなく認められる。これらは、今まで資料に乏しく実態に不明な点の多かった沿岸部地域の編年においてこれを解消する重要な材料となるものである。しかし、1～3層に分けられた包含層は、そのまま出土土器の時期とは対応しない。従って、ここでは器種分類を行ったのち、時期判定可能な有文土器を中心にその概要を述べることとする。

出土土器の分類

有文の精製土器と無文の粗製土器に大別し、精製土器から浅鉢・注口土器・深鉢の順に細分することとする。

精製浅鉢A　わずかに内湾しながら外に開く口縁部からそのまま上底と思われる底部に至る器形を呈するもの。口縁部外面に2～3条の沈線・凹線を巡らし、四方に凹点文を施すものや細線分を加えるものもある。第75図1～5のほかにやや器形がことなるが第76図14～16も一応ここに含めておく。

同　B　口縁部が屈曲して直立またはやや外に開くもの。口縁部以下は直線的かやや反転しながらすぼまり底部にいたる。口縁部外側に1～3条の凹線を巡らすが、その数は2条となるものが大半である。また、四方に凹点文を施すものも多い。第75図6～14、第76図1、2のように口縁部が次第に開くものが新しい。

同　C　やや外に開く口縁部から反転しながらすぼまり胴部に続くが中程で屈曲し底部に至るもの。口縁部に2～3条、胴部に1～2条の凹線と凹点による文様帯をもち、凹点は巻貝によるものもある。口縁部の四方に山形隆起を付すものも少なくない。第76図3～10。

同　D　やや外反気味に外に開く口縁部から底部近くで屈曲する胴部に続き、底部は丸底または平底となるもの。出土数は少なく代表例として示したものは屈曲部に2条の凹線と凹点による文様を施すが、他遺跡では口縁部周辺に凹線文を施すものも存在する。第77図1～10。

同　E　外反しながらやや大きく外に開く口縁部から屈曲し底部に続くもの。屈曲部に2条の凹線と凹点による文様帯を施すものが多いが、全く文様のないものも少数認められる。また、約半数は口縁部内側に凹線を一条巡らす。第76図11～13。

同　F　ほぼ直線的に外に開く口縁部からそのまま底部に至るもので、底部は上底または平底となる。口縁部の内外に凹線を入れ、波頂部外面に凹点文を施すが、本類も点数は非常に少なく、第76図17は緩い波状口縁となるが他では平縁も知ら

れる。

同　G　A類と類似するが、屈曲して短く外に口縁部の開きがやや強いもの。口縁部の下半に2条前後の凹線や沈線を巡らすものが多い。第84図2～8。

同　H　C類と器形的には類似するが、口縁部の立ち上がりは短く頸部も短い。施文も沈線文が主となり本数も2または1条と少なくなる。また、山形隆起や凹点文をもつものも存在する。第84図9～15。第85図1～4。

同　I　H類の口縁部がさらに短くなり沈線は1条に限られ、凹点文は消失し胴部の沈線も施されないものが多くなる。第85図5～8。

同　J　H類から変化したもので、口縁部の立ち上がりはさらに短くなりその直下で屈曲し、緩いカーブを描きながらすぼまり底部に至る。口縁部の沈線は1条かまたは全く施されなくなり、屈曲部の文様も消失する。第86図1、2。

同　K　短く外に開く口縁部の端部付近がやや丸く肥厚し、その下で屈曲し底部に続くもの。第86図3～11に示すように文様はほとんど施されないが、口縁部の四方が低く隆起するものもある。

同　L　外にやや大きく開く口縁部の四方が低く隆起し、胴部中程で屈曲し円盤上げ底の底部に続く。屈曲部の上に横位のリボン状の貼付文を付すほかに文様はない。本類も非常に少ないが第87図2はこれの祖形となるもの。

同　M　短く直立する口縁部に直線的に屈曲する頸部が続き、胴部はやや大きく外に張るも。口縁部に1状の沈線を巡らすとともに低いリボン状突起を付す。出土数は少なく第87図5のほかにはあまり認められない。

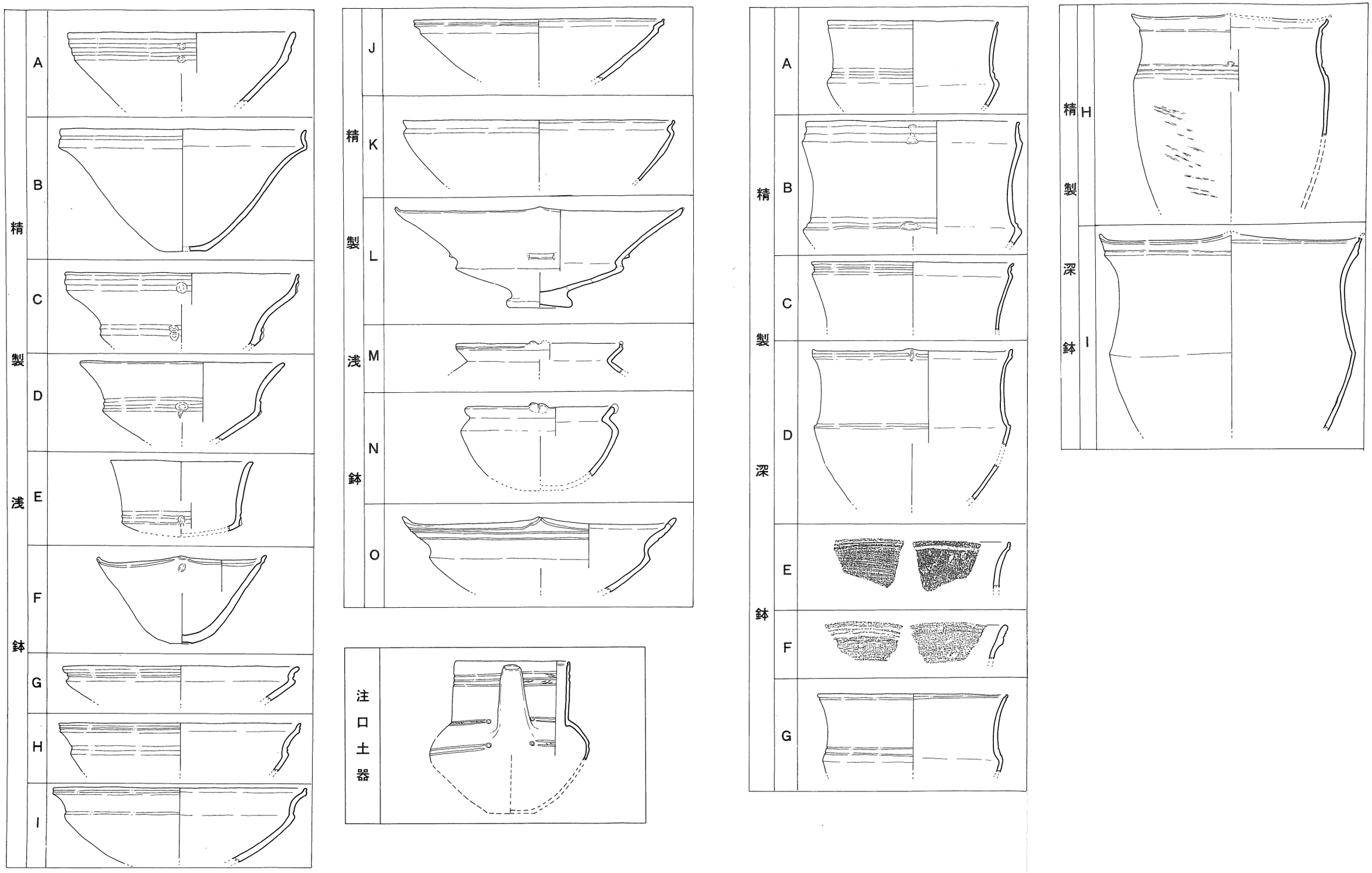
同　N　外に開く口縁部から屈曲し編球状にやや大きく張り出す胴部に続き、底部は丸底と思われる。口縁部に低いリボン状の突起を付すものも多い。第87図4、6～8

同　O　外に開く口縁部は緩い波状をなし、胴部出屈曲し底部に続く滋賀里式系の浅鉢。口縁部内側が丸く肥厚または肥厚帯を形成し、外面に2条単位を基本とした沈線文を巡らす。また、波頂部の下位には凹点文を施すものや屈曲部に刻目を加えるものもある。第89図1～9。

注口土器　口縁部はほぼ直立し胴部との境で屈曲し、偏球状に張り出した胴部の上半に注ぎ口を設ける。口縁部内側に1状の沈線ほか外側と胴部に2～3の沈線と細線による文様を施す。第83図1～10。

脚付鉢　脚部のみの出土で全形は不明であるが、第83図11に示すようにやや外に開く。

精製深鉢A　やや外に開く口縁部からあまりすぼまらないまま緩く屈曲する胴部にいたるもの。第79図1～4のように口縁部の内や外に1状の凹線を、屈曲部の上位に2条あまりの凹線を巡らす。



第73図　尾畑遺跡北Ⅱ区精製土器分類図

同　B　屈曲して立ち上がる口縁部から反転しながら外に張り出す頸部に続き、胴部最大径の所で屈曲し上底または平底の底部に至る。口縁部と胴部に２～３条の凹線と凹点による文様帯をもち、口縁部の四方に山形隆起部を設けるものも少なくない。第79図５・６、第80～82図に示すように、口縁部が内傾するものがより古く、開くものは新しく置かれる。

同　C　深鉢Ｂ類と器形的には類似するが、第90図のように口縁部が外反しながら開くものや、直線的に開くものを本類とする。

同　D　短くほぼ直立する口縁部から屈曲し緩く締まる頸部に続き、胴部最大径の所で折れ曲がり底部にいたるもの。第95図のように口縁部に１条、胴部に１～２条の凹線を巡らし、低い山形隆起をもつものの下位には凹点を加えるものもある。

同　E　Ｄ類と器形的には同様であるが、第92図１のように沈線による施文となるもので出土点数は少ない。外面の調整が巻貝等の条痕によるものが出現する。

同　F　屈曲して外に開く口縁部は肥厚しやや長く伸びる。第92図２・３のように外面に２～３条の沈線をやや雑に巡らす。出土数は少なく、条痕調整を主とする。

同　G　口縁部は外反しながら開き、胴部でやや緩く屈曲し底部に続く。胴部に１～２状の凹線を入れるが、第91図１のように口縁部の内外にやや太い沈線を巡らすものは非常に少なく、２～９に示したように内側に１条施すものや、全く施されないもの（第93・94図)が多い。調整はナデ、ミガキと条痕の二者がある。

同　H　屈曲し外に開く口縁部から外反しながらゆるく締まる頸部に続き、やや肩の張る胴部は丸みを帯ながら底部に至る。第96図２と第97図２を本類とするが、前者はより古く置かれるもので、いずれも西瀬戸内系の深鉢である。

同　I　外に開く口縁部がやや肥厚し、頸部はやや長く延び胴部は屈曲するものと膨らみをもつものがある。第96図１や第97図１、３・４などが本類に含まれ、在地系と西瀬戸系の折衷形態か。

粗製浅鉢Ａ　屈曲して立ち上がる口縁部からそのまますぼまるが、胴部で折れ曲がる。精製浅鉢Ｃを粗製化したもの。第88図１が代表例であるが出土数は少ない。

同　B　屈曲してやや大きく外に開く口縁部から反転しながら底部に続くもの。これも出土数が少なく、第88図５に示した以外にはあまり認められない。

同　C　外反しながら外に開く口縁部が屈曲しやや丸みをもちながら底部に続くもの。口径は約10～50㎝を測るように大小の幅がある。第88図２～４、同６～８、及び第116図８～12。

同　D　やや外に開く口縁部からそのまま丸みをもちすぼまる底部に至るもの。第116図１、同３～７。

同　E　外に開く口縁部から直線的にすぼまり底部に続く。第88図11、第116図２、13。

粗製深鉢A　ほぼ平底の底部から反転しながら開く胴部に至り、口縁部はやや大きく開く波状口縁を呈する。第109図５には代表例を示したが点数は少ない。

同　B　本類もやや緩やかな波状口縁を呈するが頸部の締まりは弱く、胴部の中程で屈曲する。第102図４・５を代表とするが数は少なく、５には格子状の沈線文が認められる。

同　C　屈曲して立ち上がる口縁部は内傾し、緩く締まる頸部に続く。胴部は屈曲してやや張るものとあまり張らないものがある。第98図、第99図１～４。

同　D　C類と似るが口縁部が外反ぎみに外に開くもの。第99図５、第100図２～５。

同　E　D類と器形的に似るが、口縁部が肥厚するもの。第100図１の他は少ない。

同　F　ほぼ直線的に開く口縁部からそのまま胴部以下に続くもの。口縁部の外側が短く肥厚、第102図１・２の他は少ない。

同　G　やや外に開く口縁部から緩く締まる頸部に続き、胴部の中位で弱く折れ曲がり底部に至るもの。

同　H　G類と類似するが頸部が短く、胴部の屈曲もやや強い。本類はG類とともに多数を占め、器形的にもバリエーションが認められる。

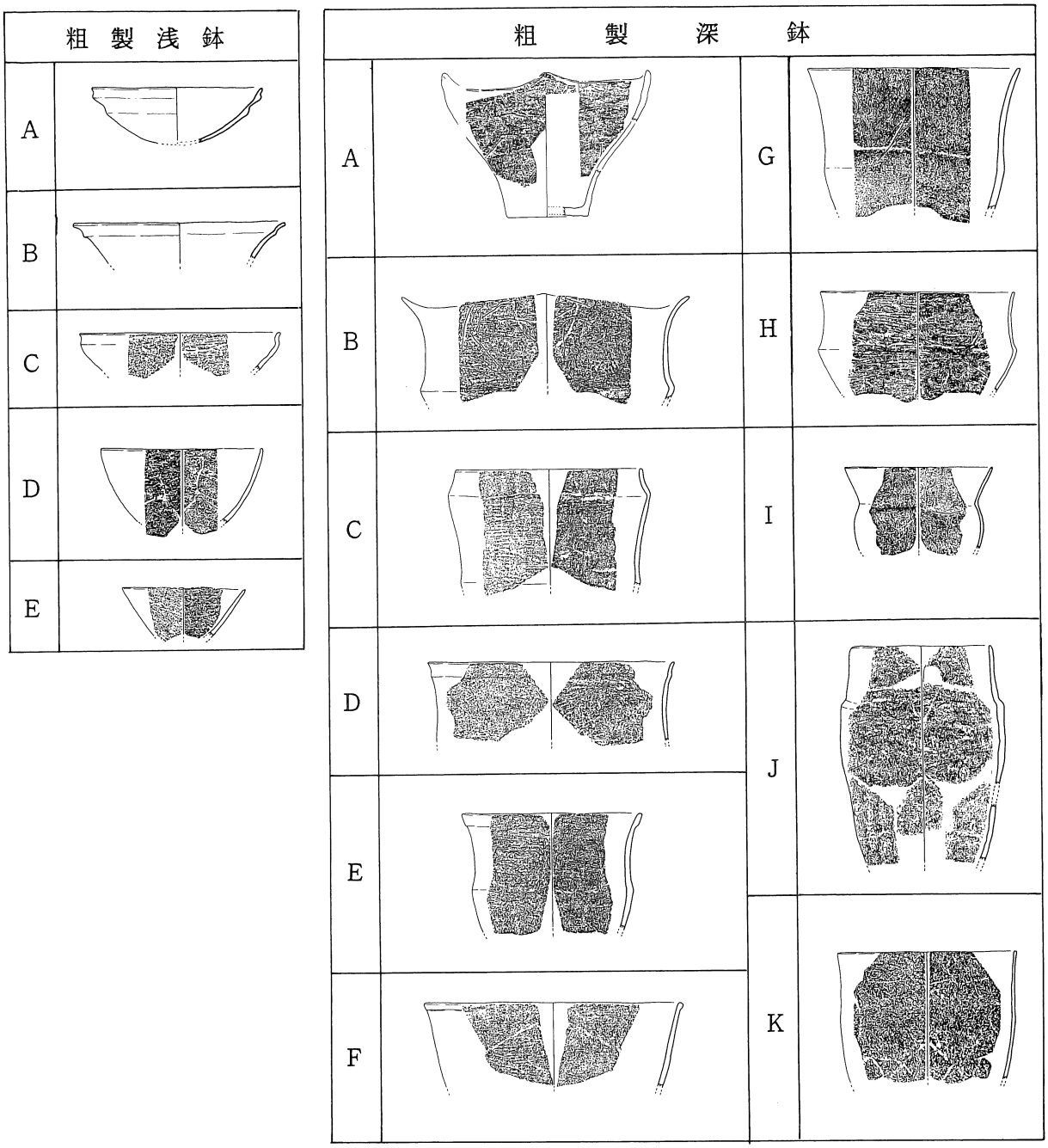
同　I　口縁部は直線的に斜めに開き、胴部との境で屈曲し丸く張る胴部に続く。第105図５の他は少ない。

同　J　わずかに内傾する口縁部から屈曲して外に張る肩部に続き、胴部は緩く締まりながら底部に至る。これも類例が少なく、第105図６の他はあまりない。

同　K　ほぼ直口する口縁部からそのままわずかに丸みをもつ胴部に至るもの。これも類例は少なく、第105図７を代表とする。

以上の分類は資料の制約もあって厳密なものでなく、さらに細分可能なものも含まれる。また時期的にも幅が認められるが、セットとして抽出できるものを時期ごとに設定していくこととする。

縄文時代以後後期の凹線土器群は、精製浅鉢A・B・C・D類、精製深鉢A・B類を中心とし、これに精製浅鉢E・F類の一部から構成される。また、粗製浅鉢・B類や粗製深鉢A・B・C類、同G・H・I類の大半もこれに伴うものと考えられる。



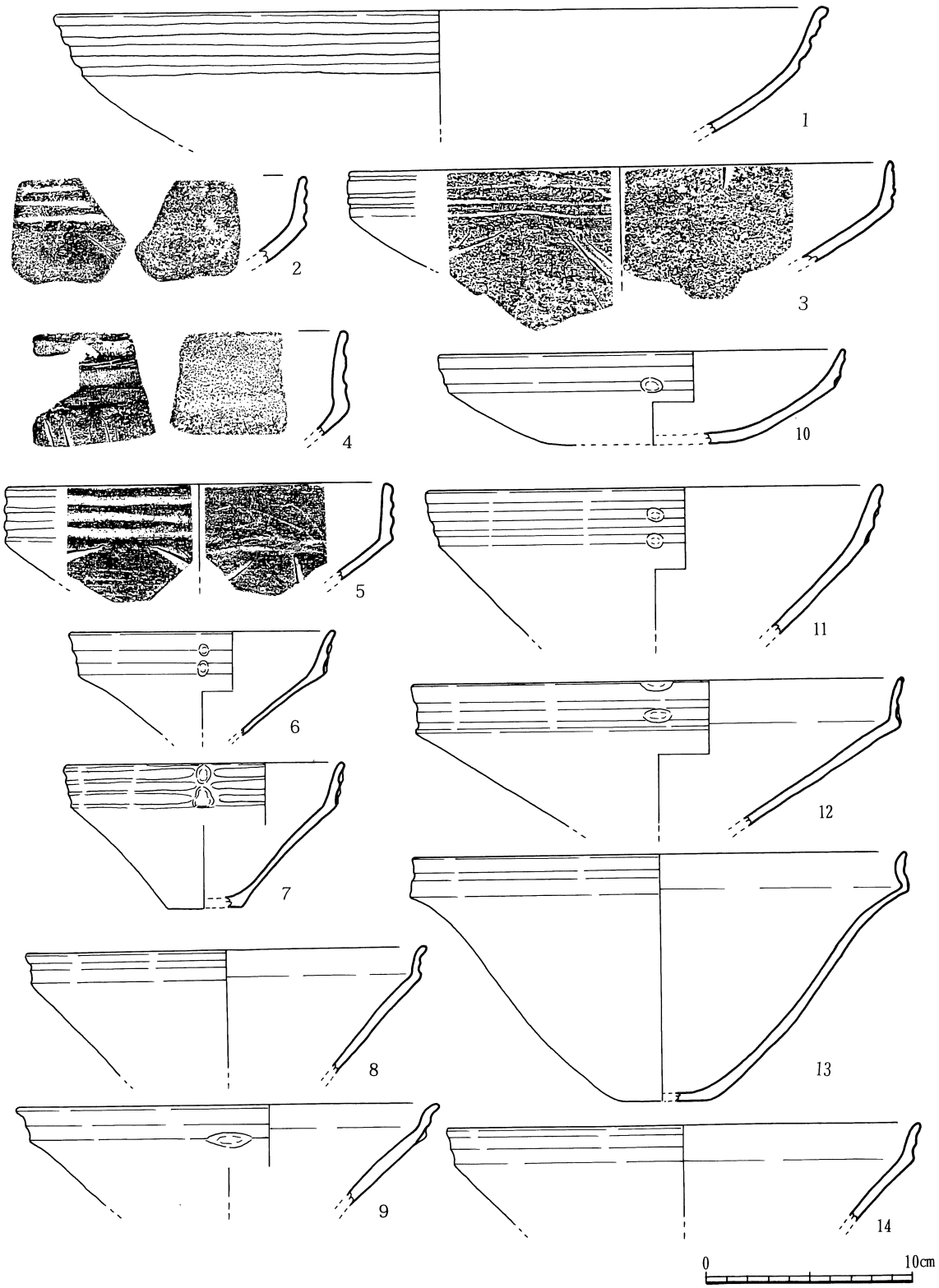
第74図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土粗製土器分類図

第75図に示した精製浅鉢A・B類の中で、沈線文や細線（羽状）文による文様を施すものは少なく、その大部分は凹線文と凹点文による施文である。これは精製浅鉢C～F類や精製深鉢A・B類についても同様であり、これらをもって当地域における三万田Ⅲ式土器並行の東式土器に比定して大過ないと言えよう。杵築市東貝塚出土の資料には精製浅鉢E・F類が欠落していたが、本遺跡や国東町陽弓遺跡などで明らかとなったように少数ではあるが東式の精製浅鉢の一角を占めることは疑いない。注口土器など細線文を施すものは凹線文土器群の前に置かれるが、当地域においてこの時期のまとまった資料は非常に少なく、この一部は凹線文土器期に残存することも考えられる。また、西瀬戸内系の精製深鉢Hもこの時期に伴うものと思われる。この凹線文土器群はある程度まとまって出土しており、遺跡の大規模化もここから始まり晩期前葉まで継続し、中頃の時期に衰退に向かうようである。

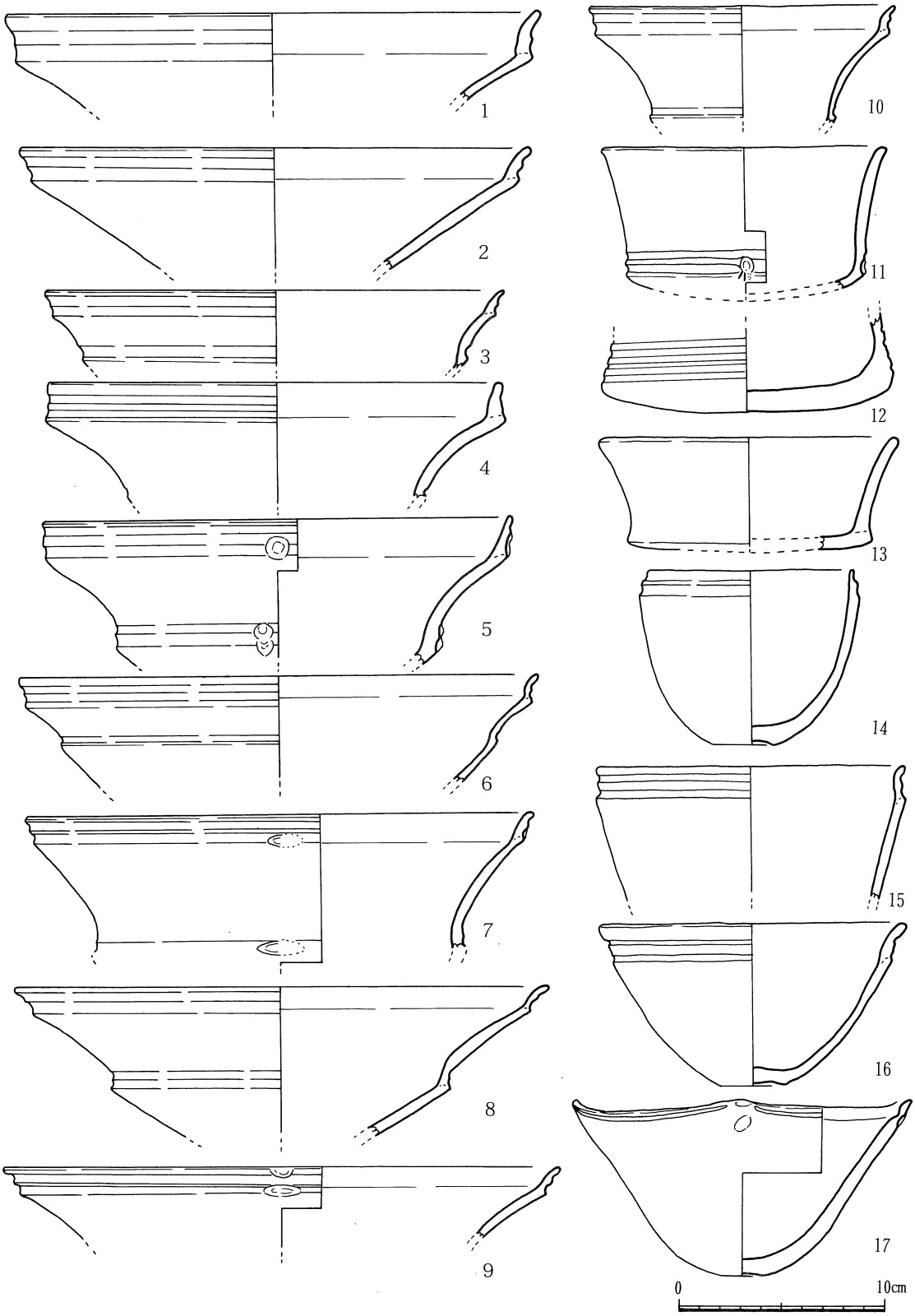
次に置かれる土器群は、精製浅鉢G類と精製深鉢C類に代表される一群である。これに精製浅鉢Cの一部（第76図8・9）や精製深鉢B・Dの一部（第81図4・5、第82図1・3）なども含まれると考えられる。この時期の特長は、文様では沈線文の出現や凹線文の幅が狭くなり、凹点文も横長に変化することなどであり、器形では浅鉢・深鉢ともに口縁部が外反して開くものや立ち上がりが短くなることなどが指摘される。これに加え精製深鉢の中に条痕調整によるものが表れるようである。これらの土器群は御領式土器に並行するものと考えられるが、より強い地域性が認められることから将来的には別の型式名を冠するべきであろう。

これに継続すると考えられるものが精製浅鉢H類と精製深鉢E・I類であり、これに精製深鉢D類とG類の一部も含まれよう。また、精製浅鉢G類に含まれるものがこの段階まで存するか否かや、精製浅鉢J類が出現しているかなどについては明らかにし難い。器形的には在来系土器の口縁部の縮小化がさらに進み、深鉢の条痕も一層顕著となる。さらに西瀬戸内系の精製深鉢I類が増加することも指摘される。以上の土器群は、晩期前葉に編年されている内陸部の大石式に並行するものと考えられるが、沿岸部の地域性をより強く帯びる。

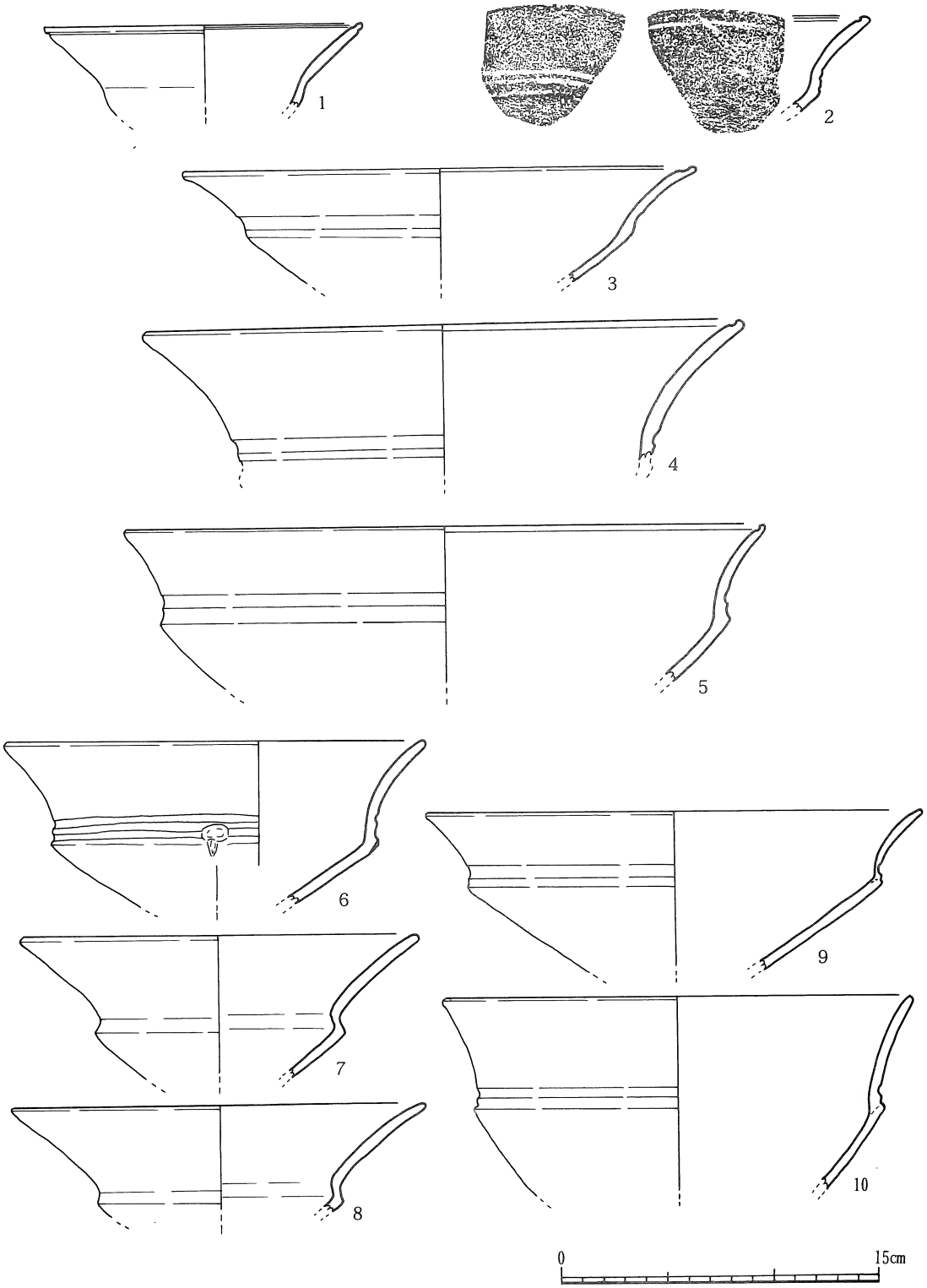
次に精製深鉢I・K・L・M・N・O類に代表される一群が置かれる。これに伴うと考えられる精製深鉢はF類のみで、他は粗製深鉢D・E・F類などに置き変わるようである。精製浅鉢K・M・N類はこの時期になり新しく出現したもので、滋賀里系の浅鉢O類の一部は前段階から既に出現している可能性がある。こられは晩期中頃の浦久保式に並行する土器群と考えられる。



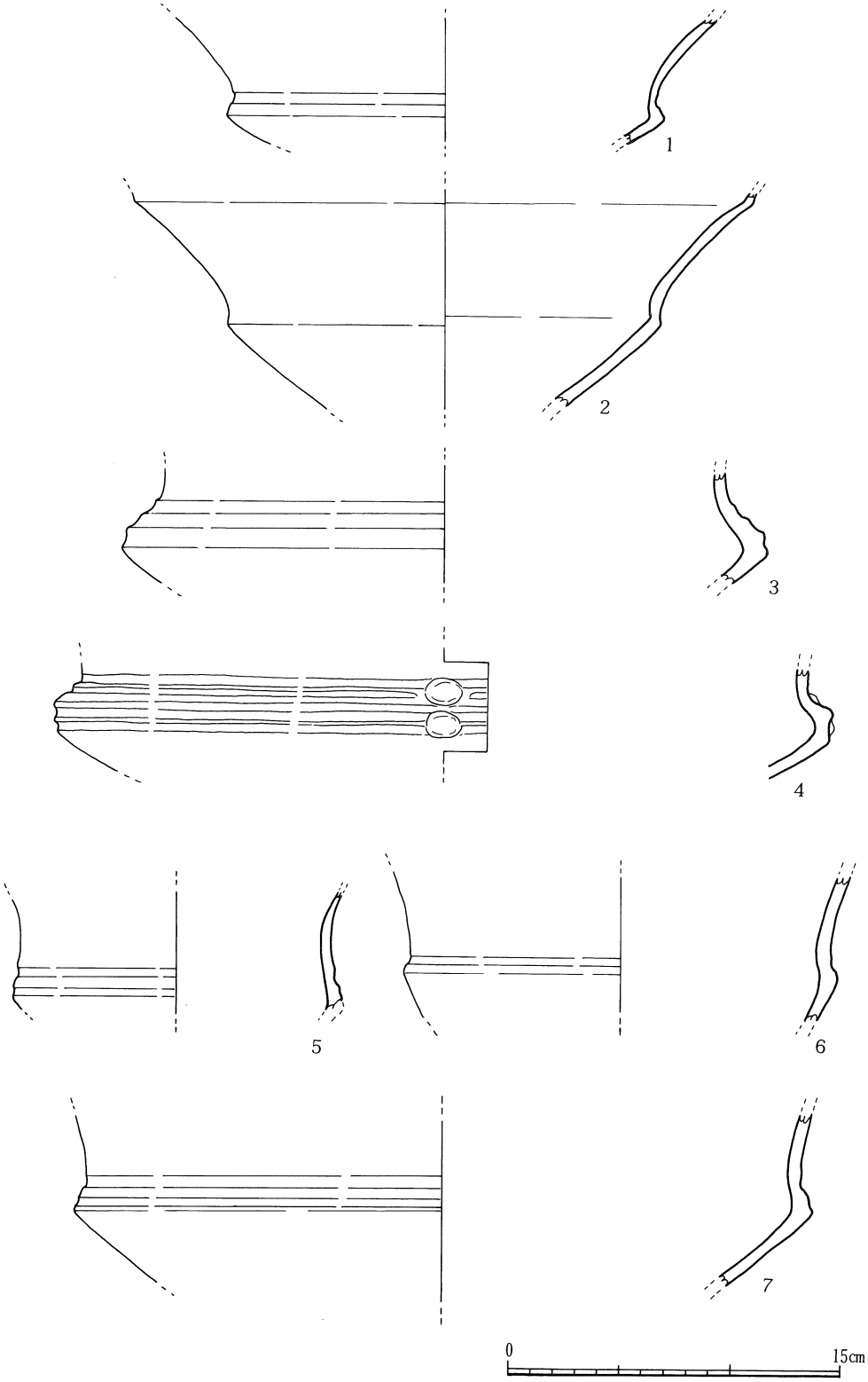
第75図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図(1)



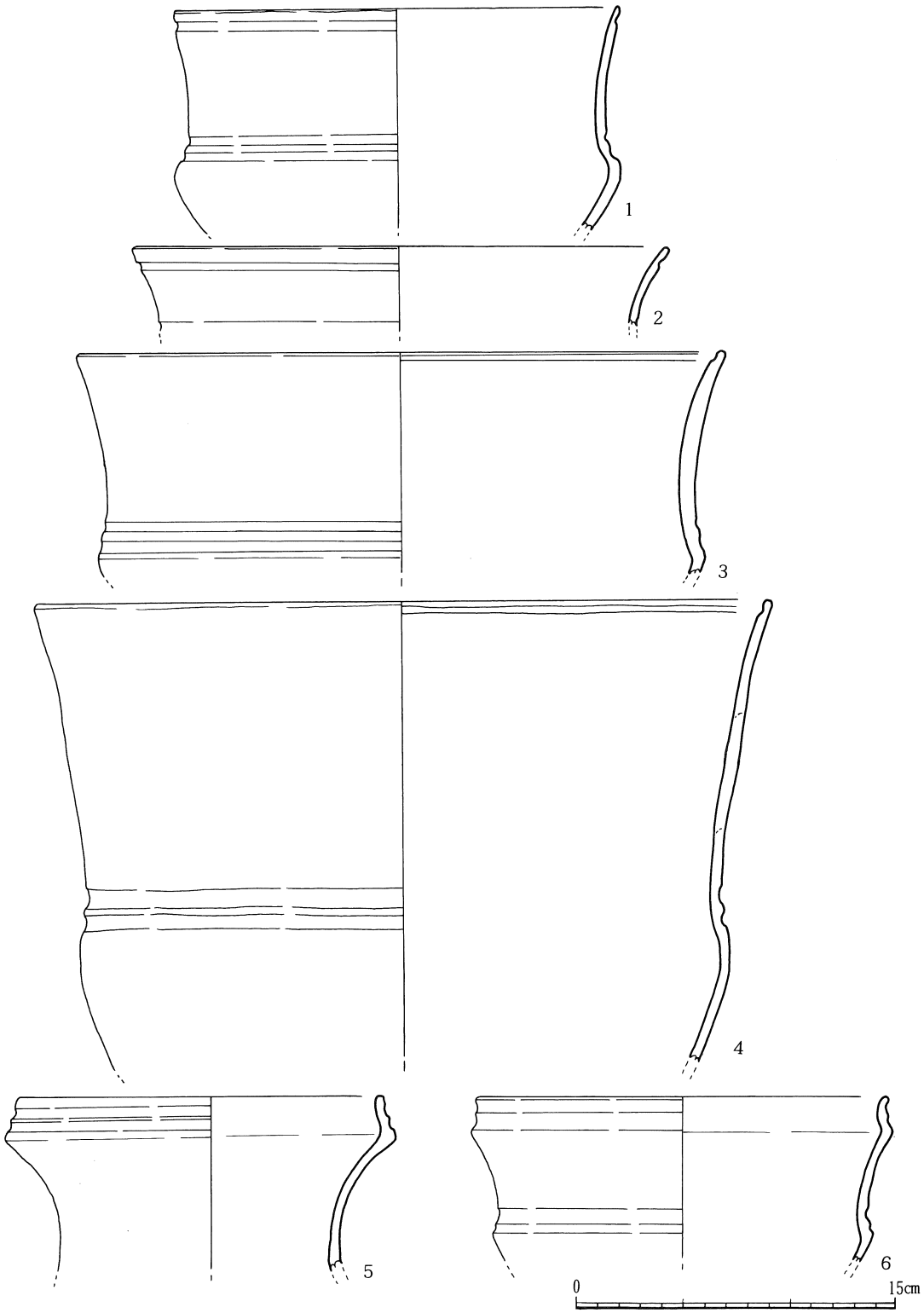
第76図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図(2)



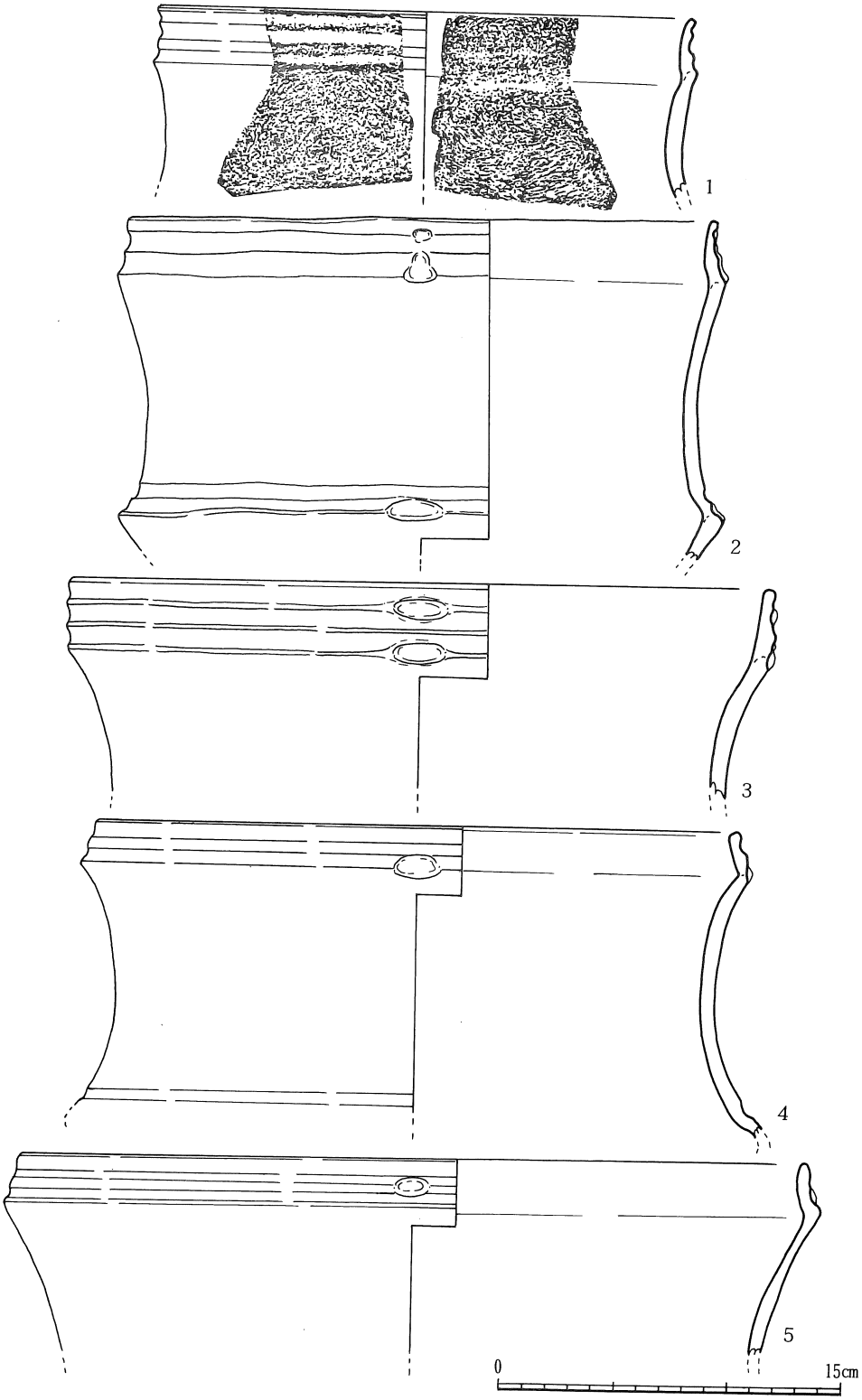
第77図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図(3)



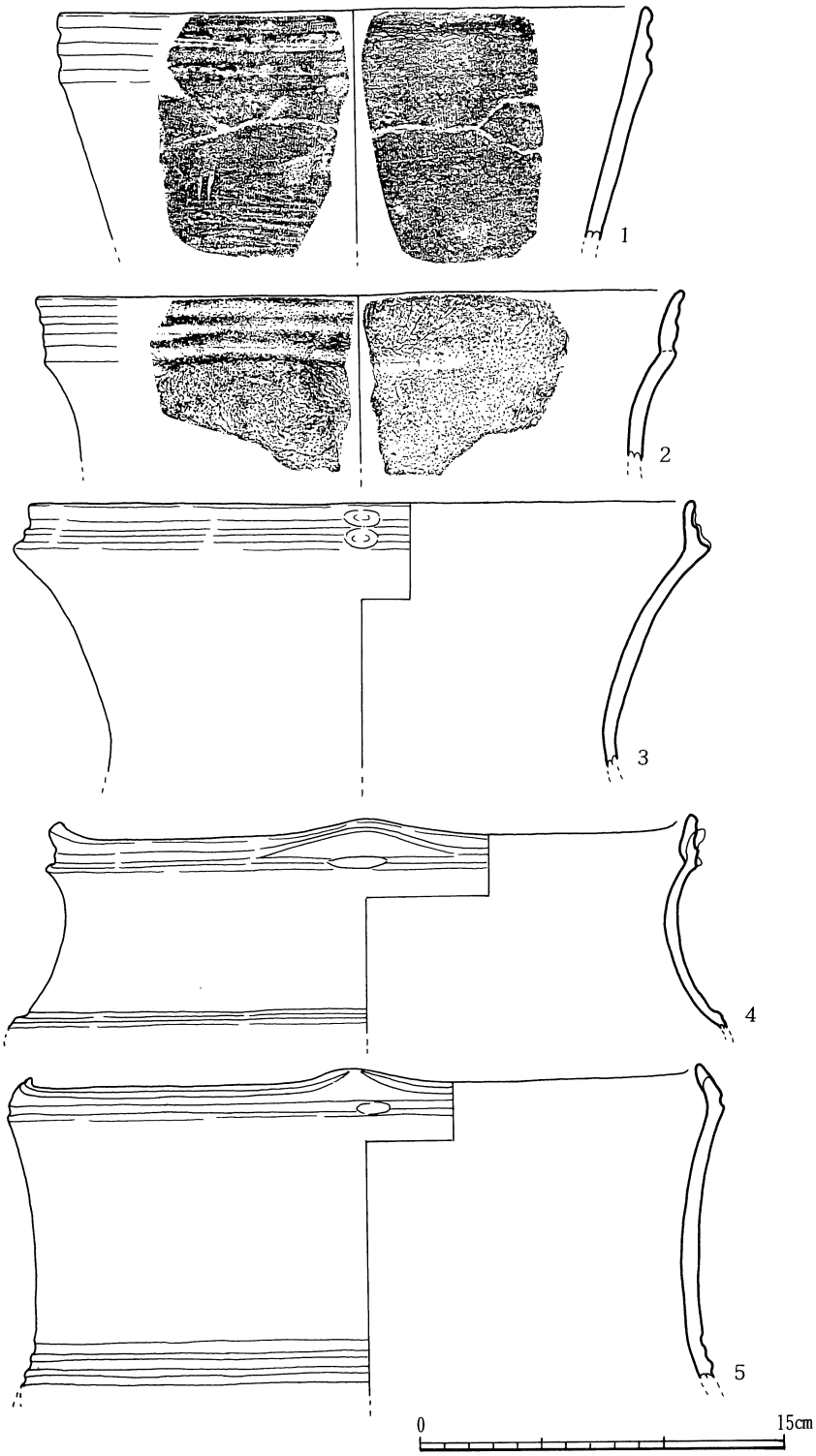
第78図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図(4)



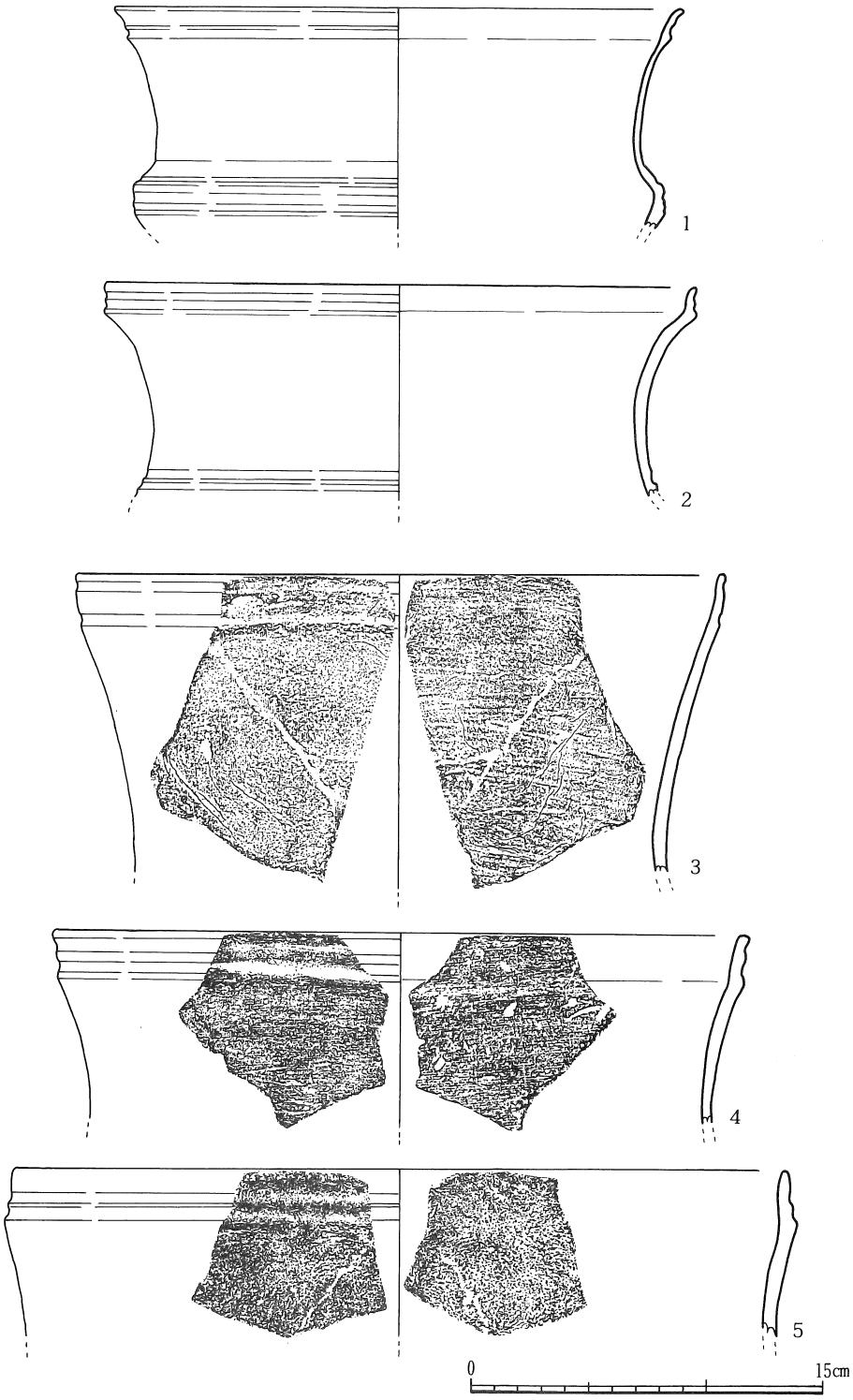
第79図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図(5)



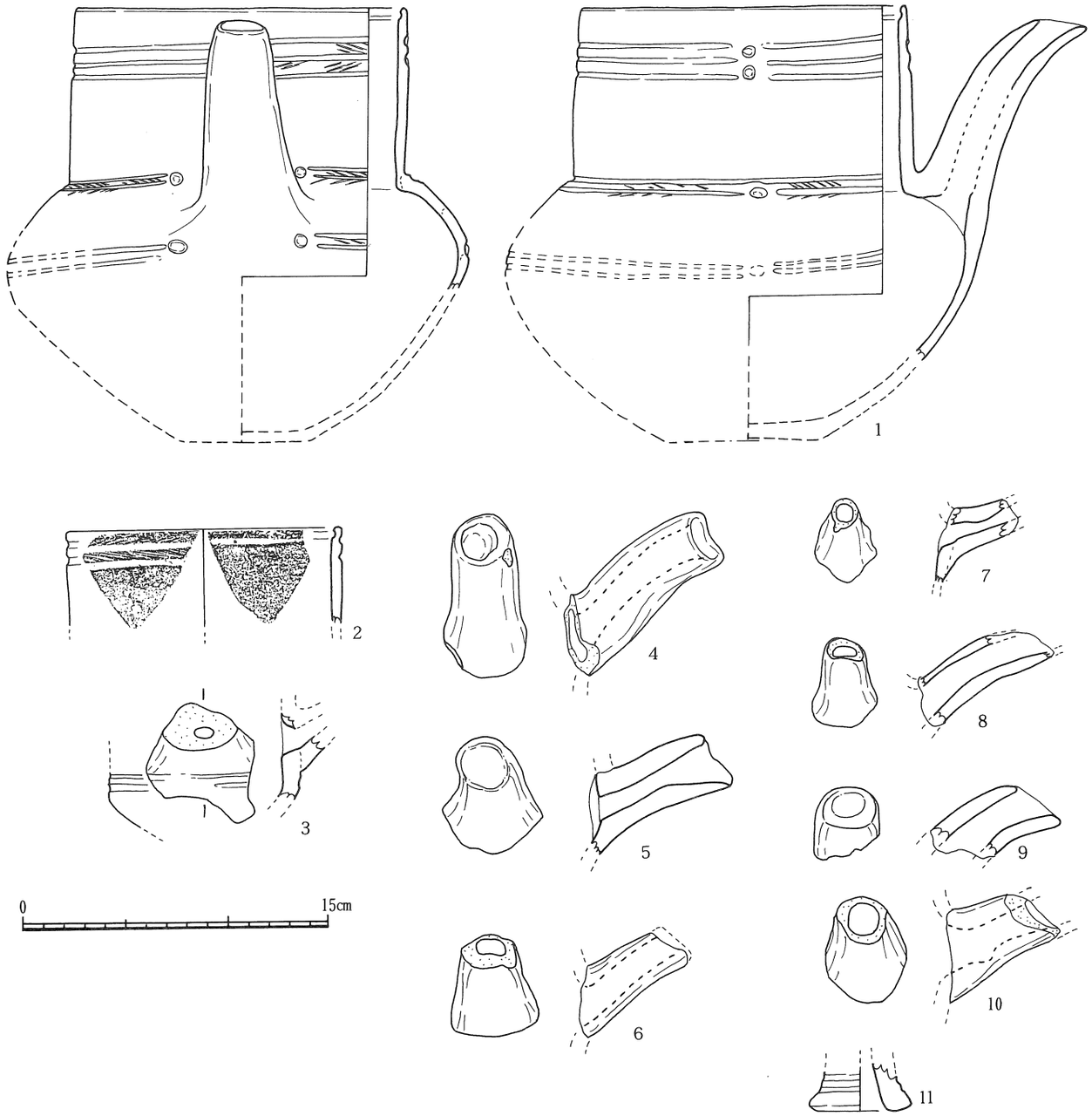
第80図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図(6)



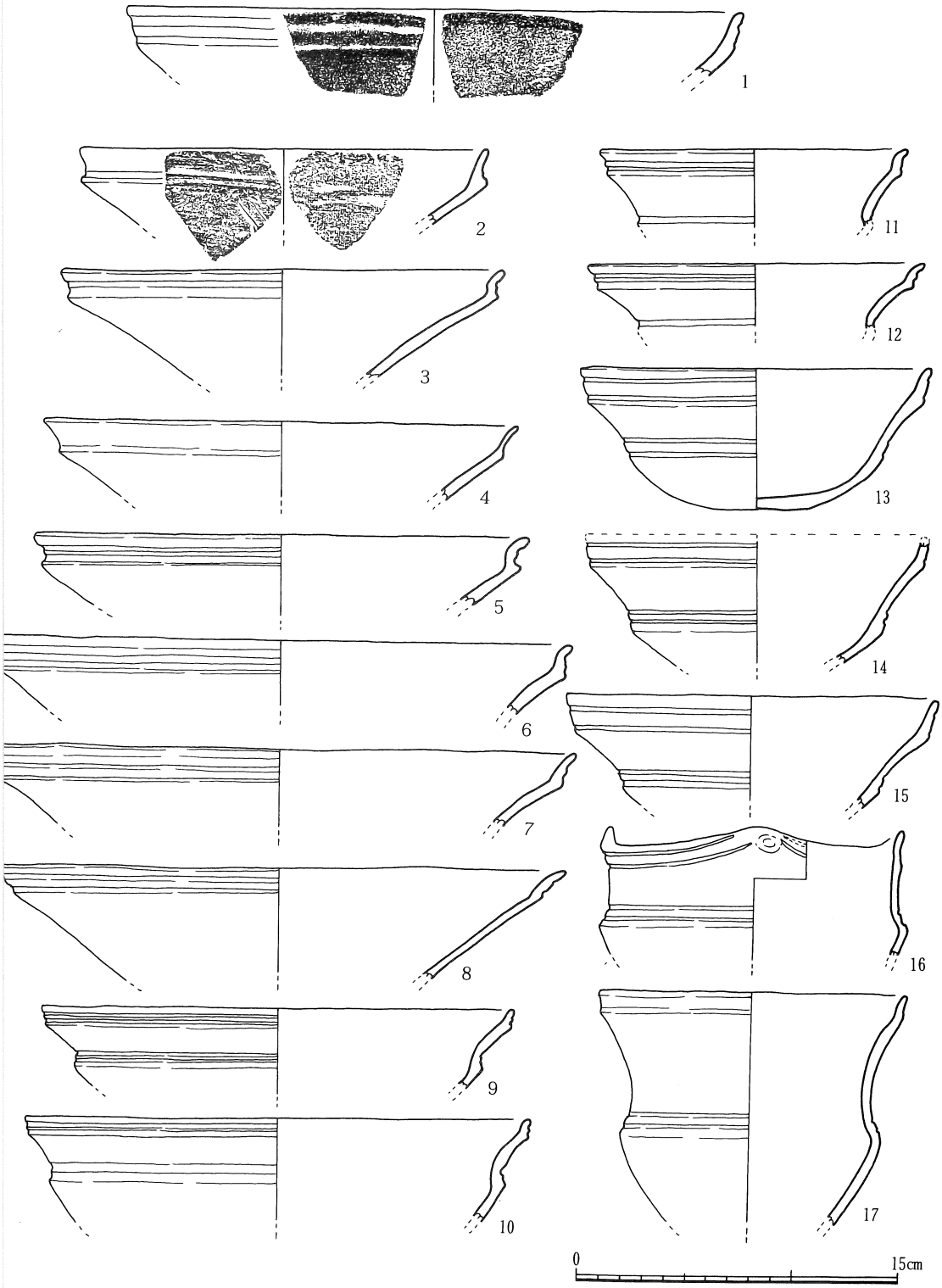
第81図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図(7)



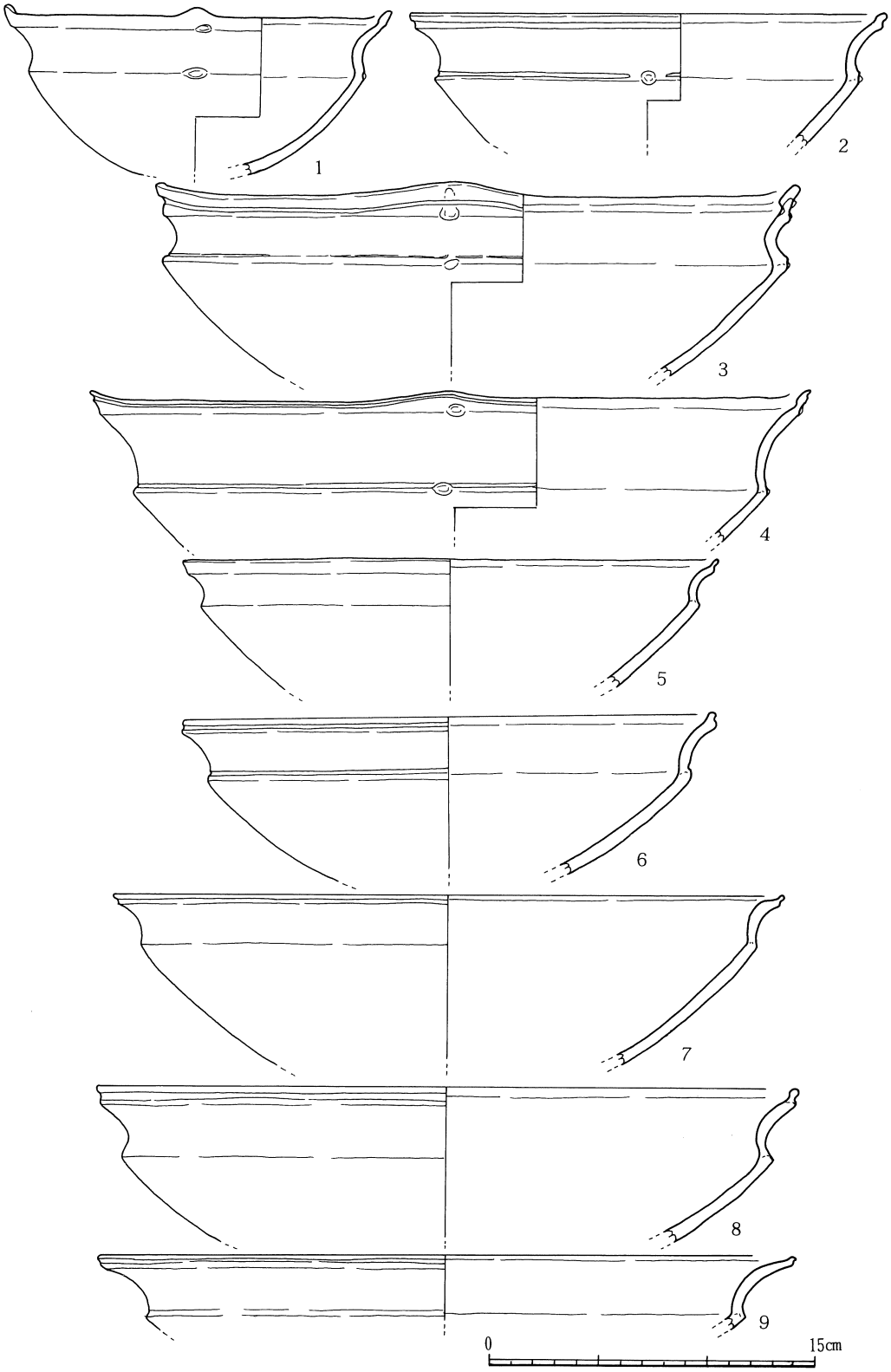
第82図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図(8)



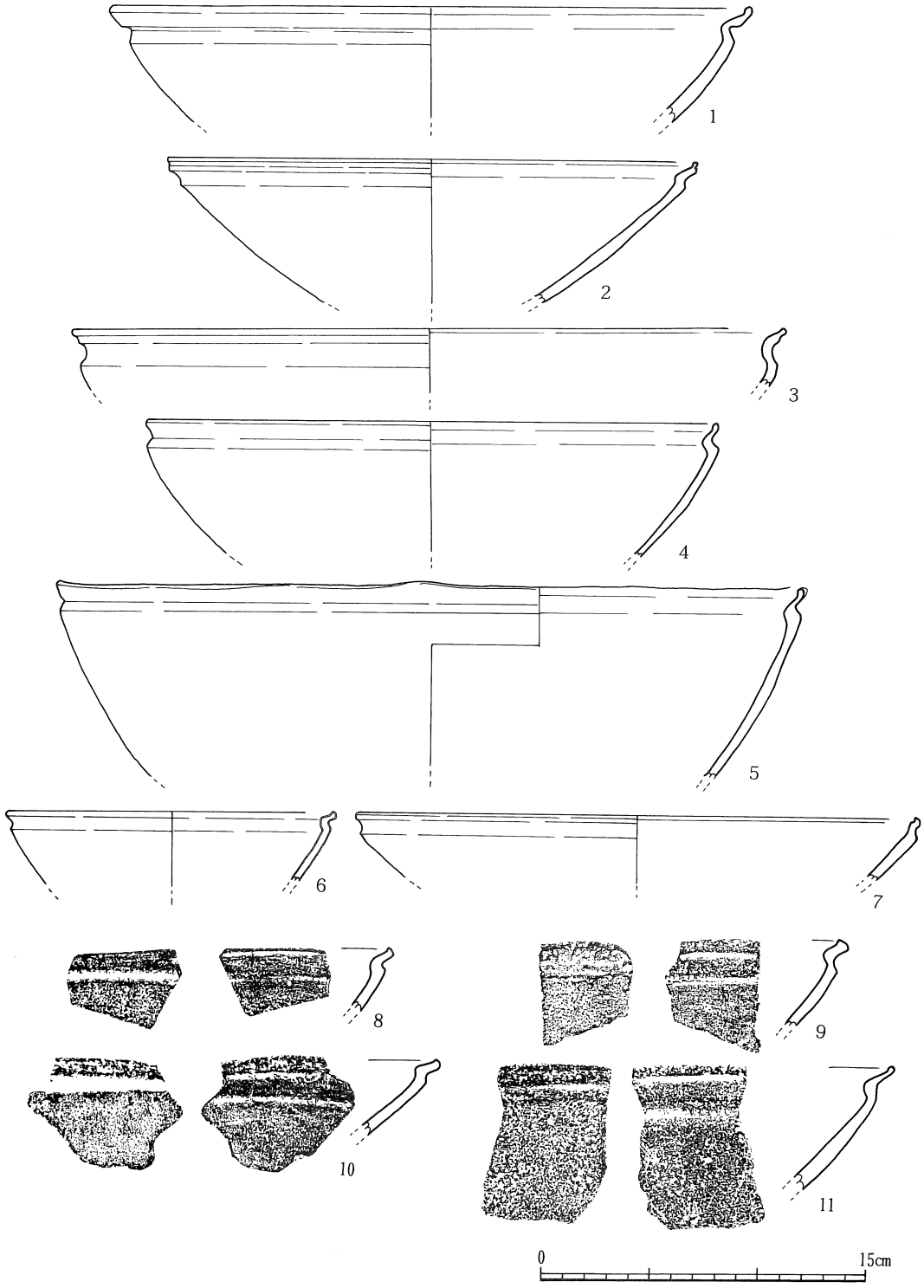
第83図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図(9)



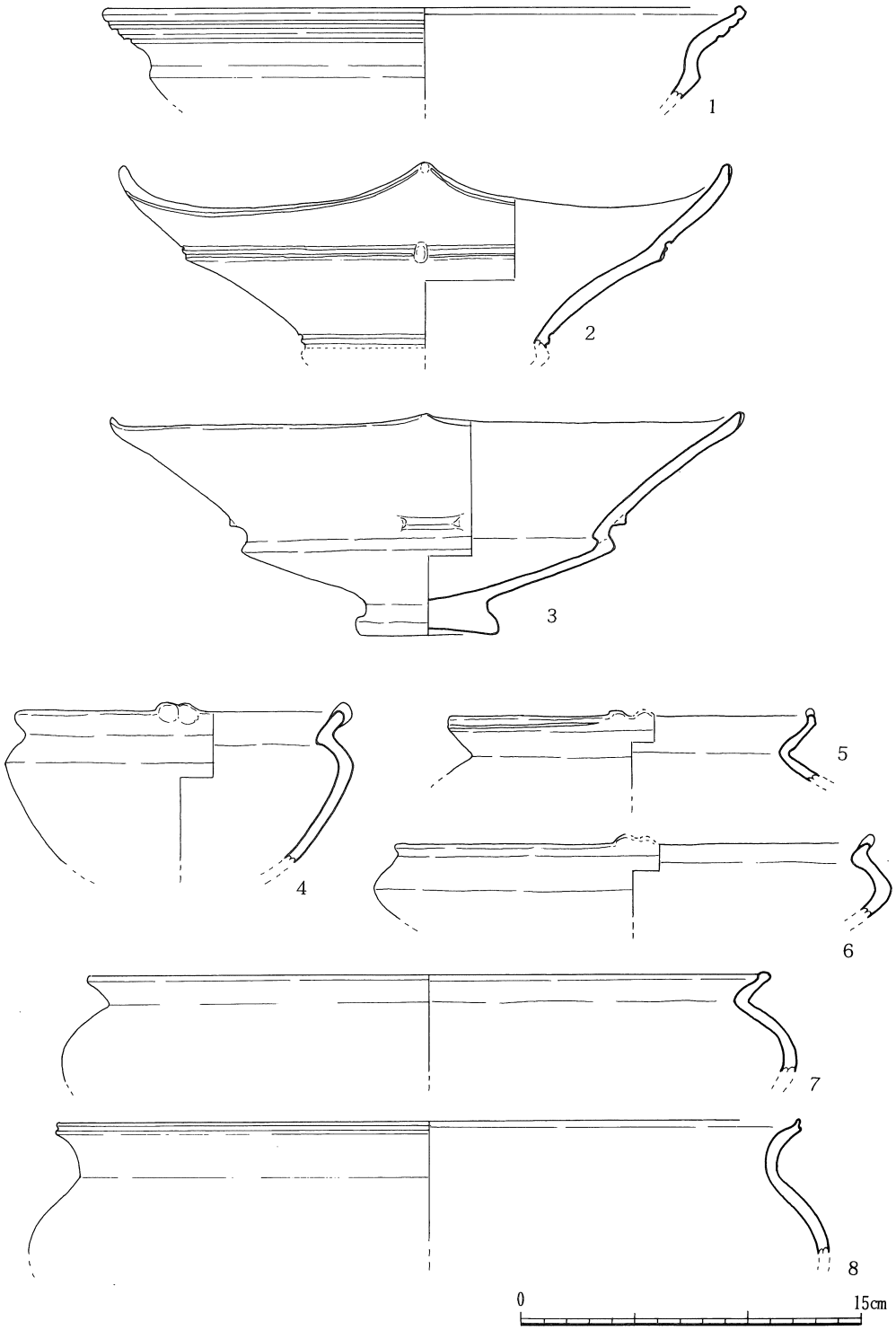
第84図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図(10)



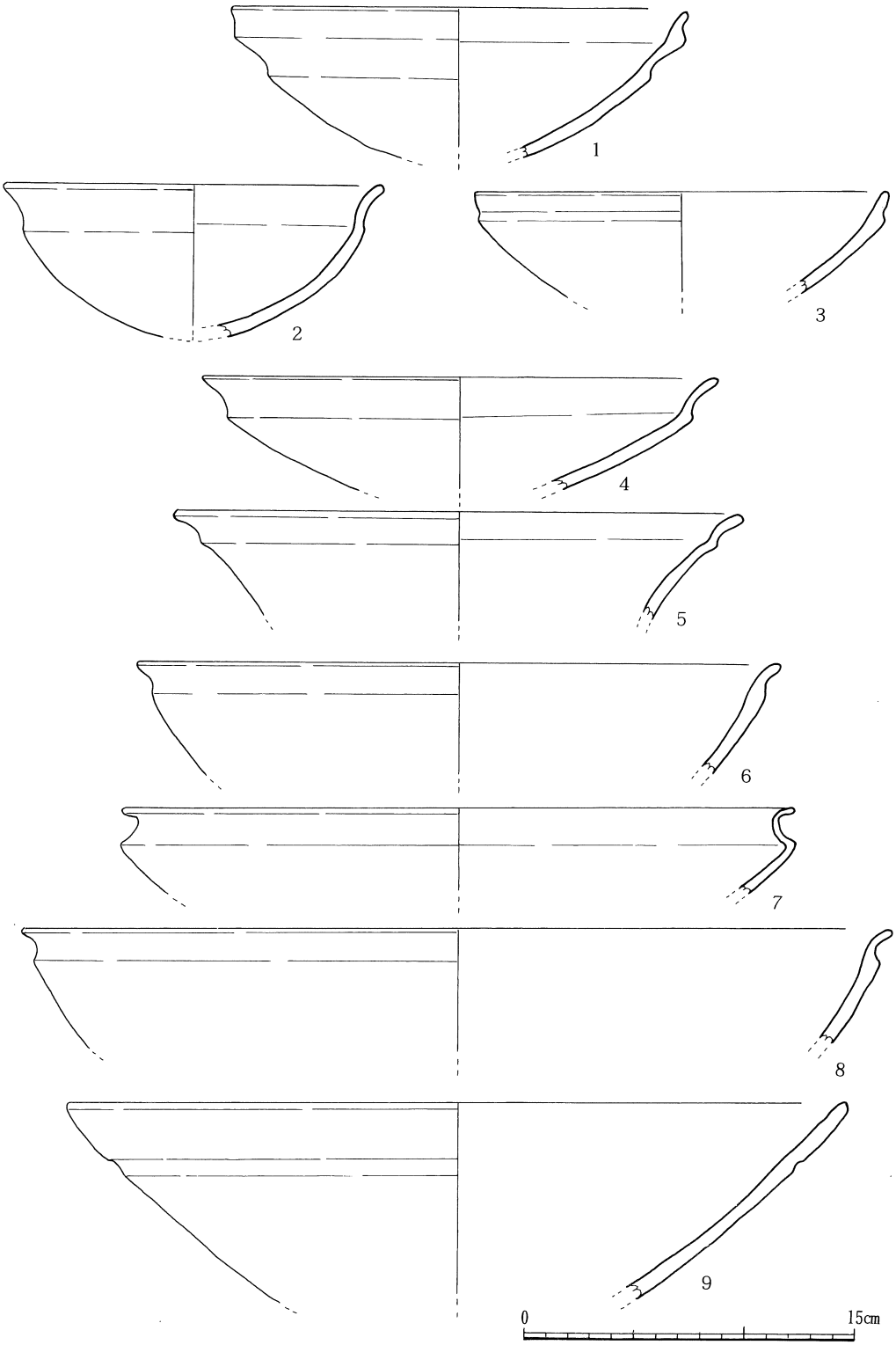
第85図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図(11)



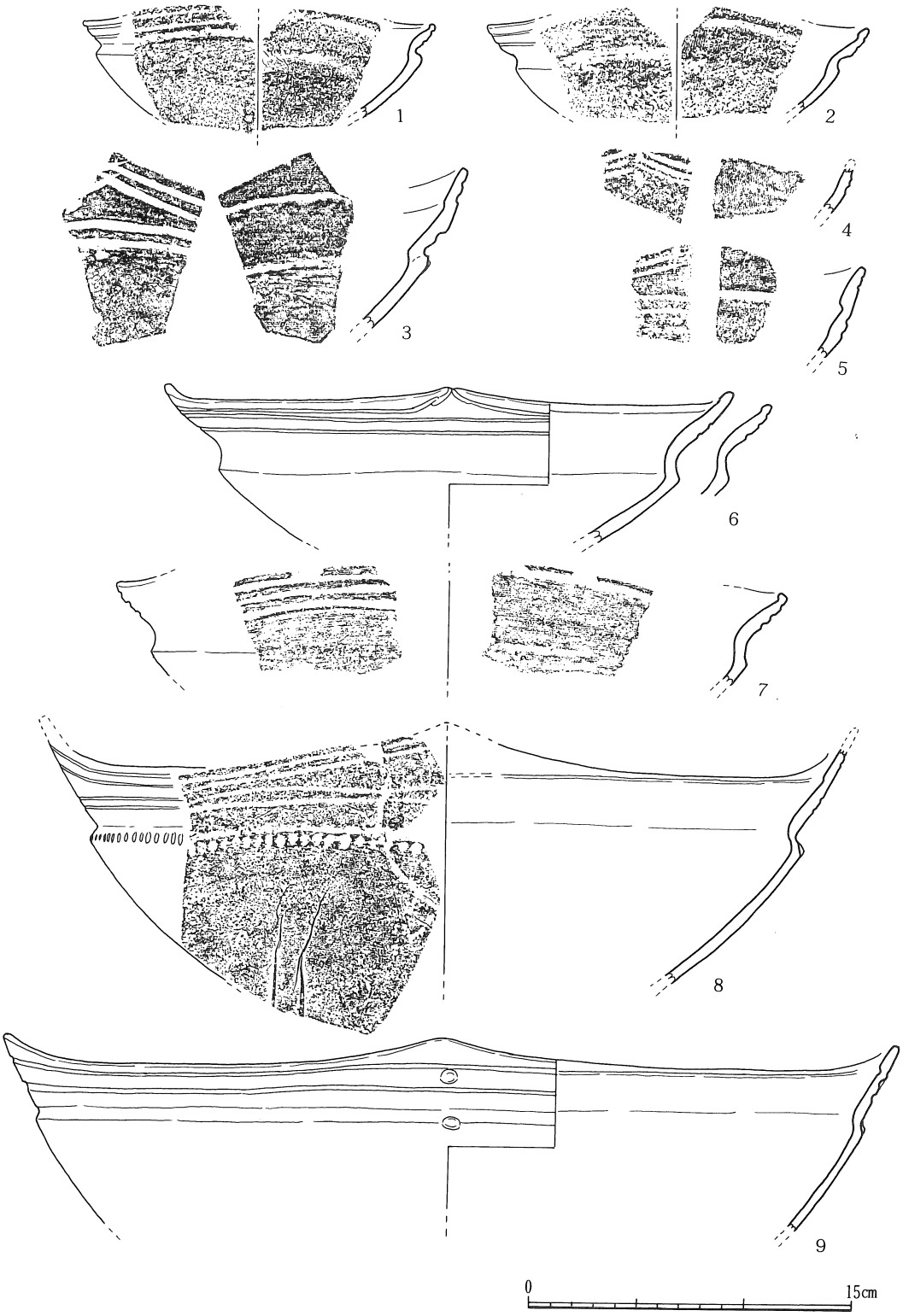
第86図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図(12)



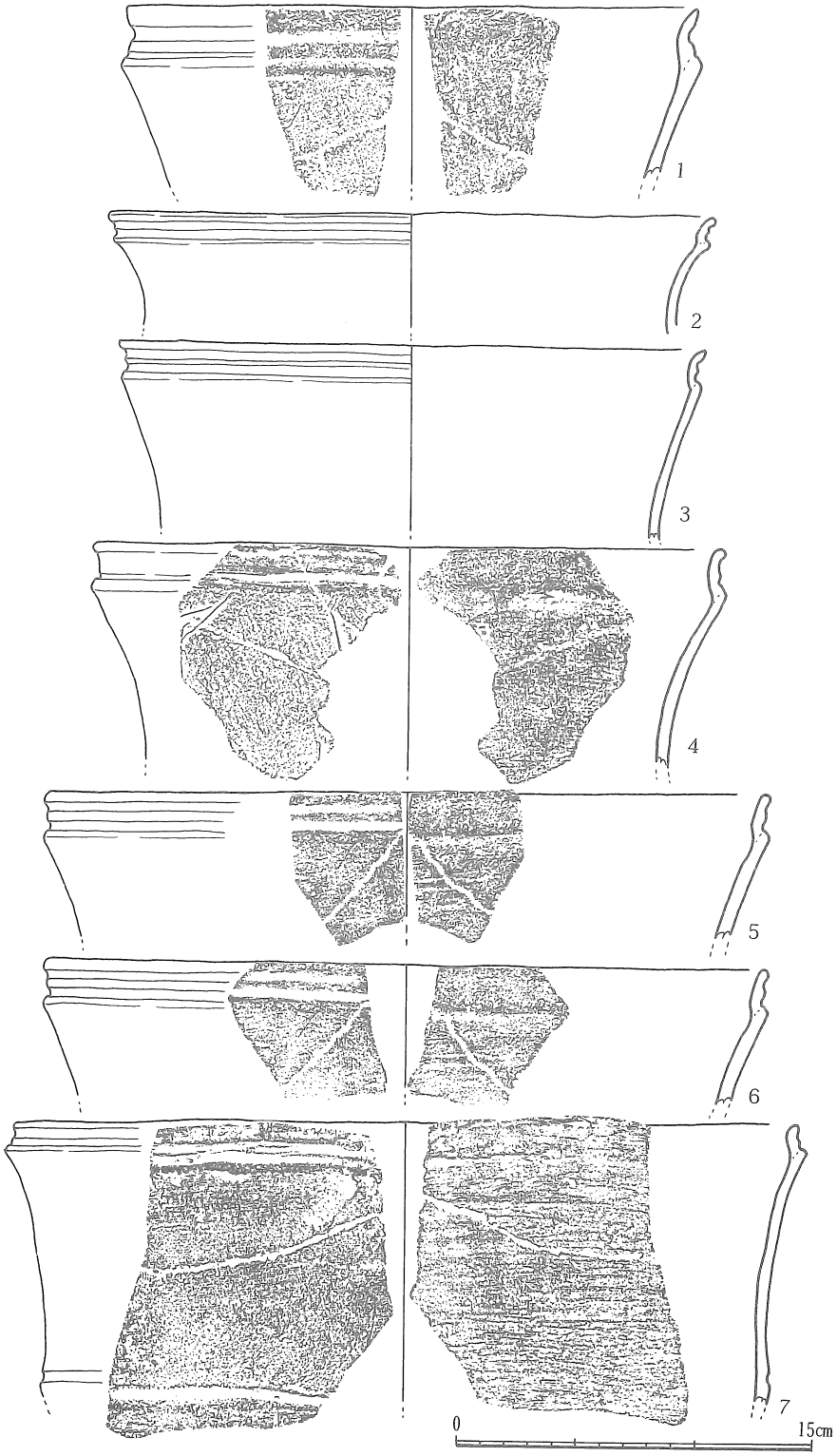
第87図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図(13)



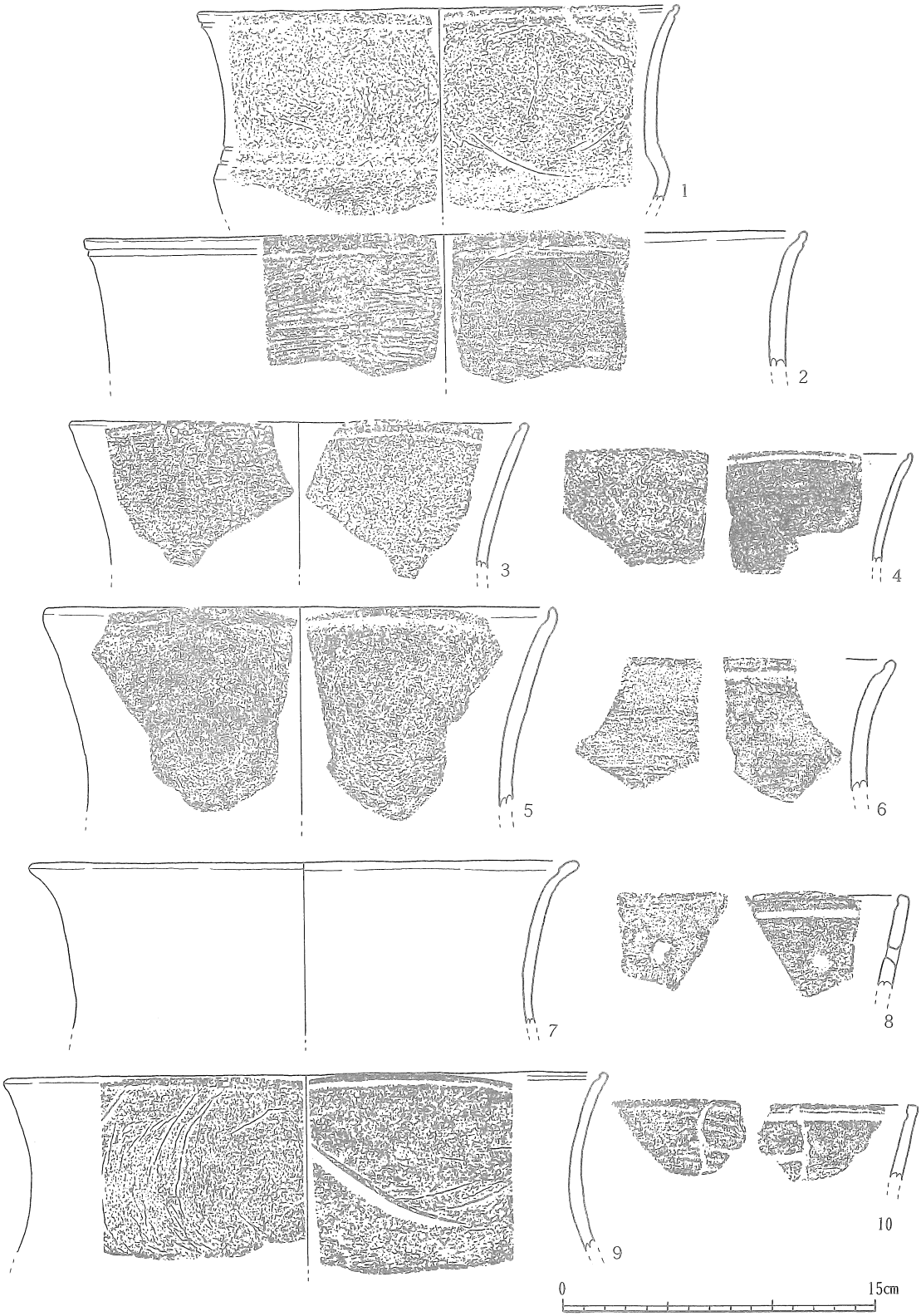
第88図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図(14)



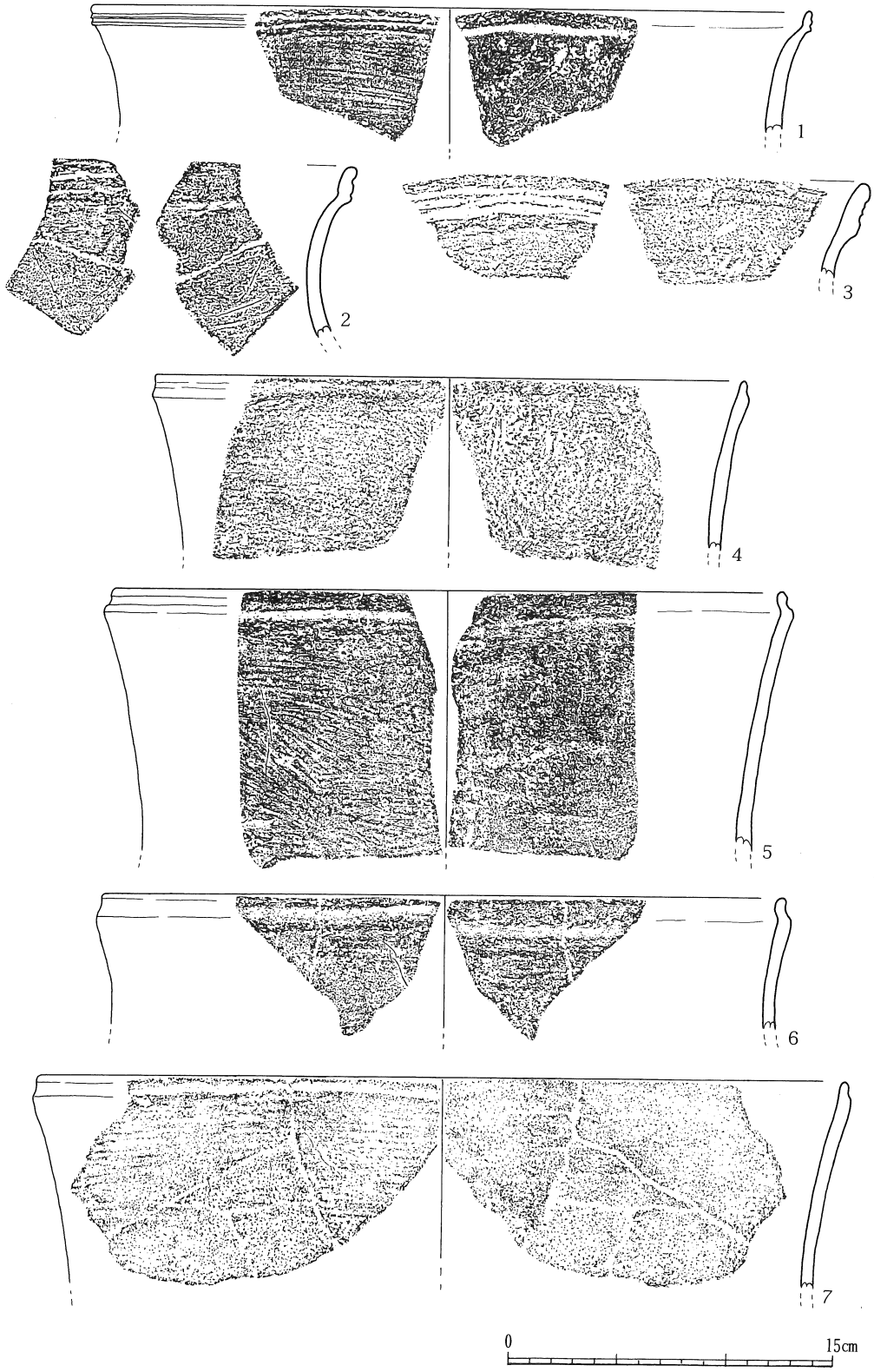
第89図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図(15)



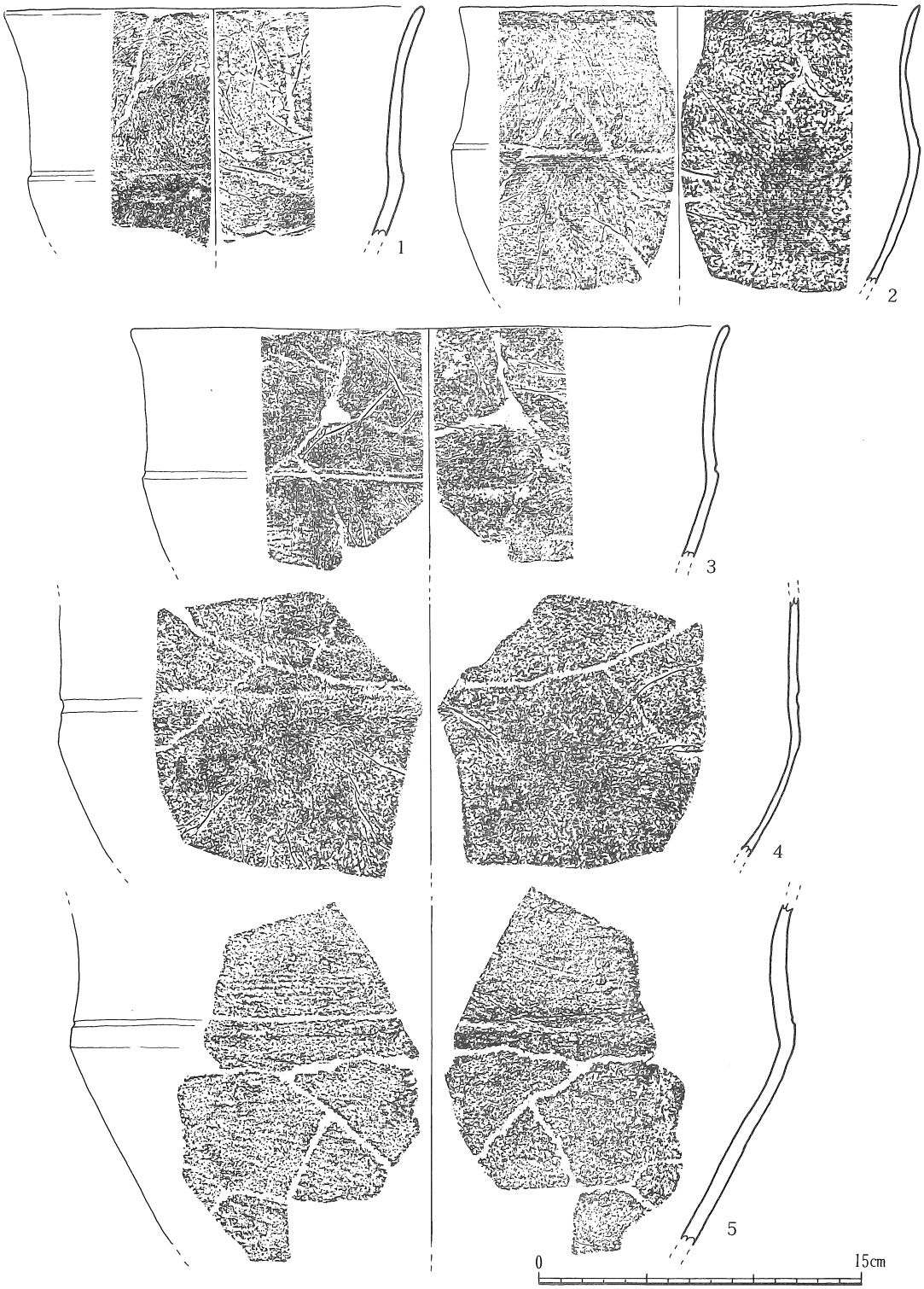
第90図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図(16)



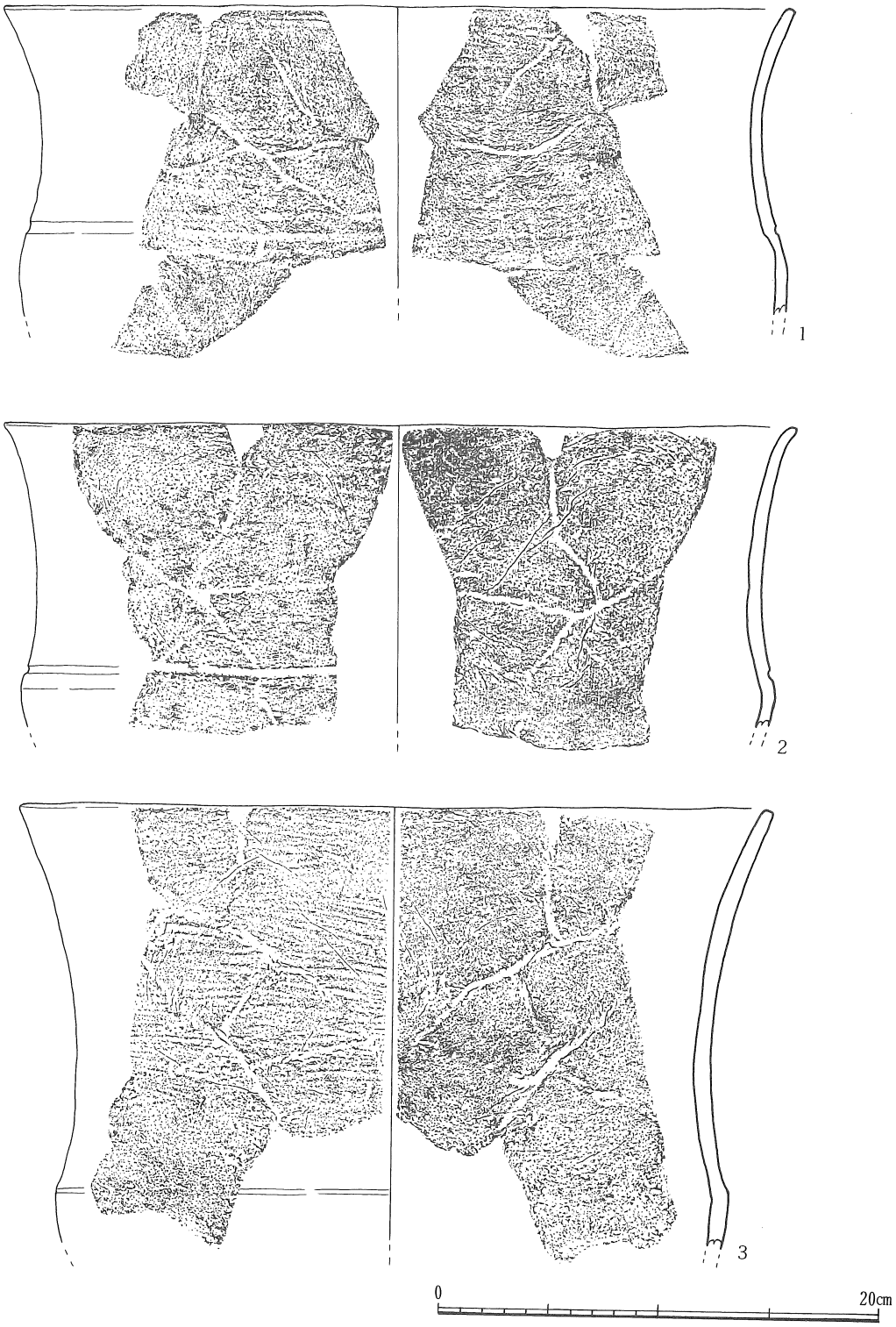
第91図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図(17)



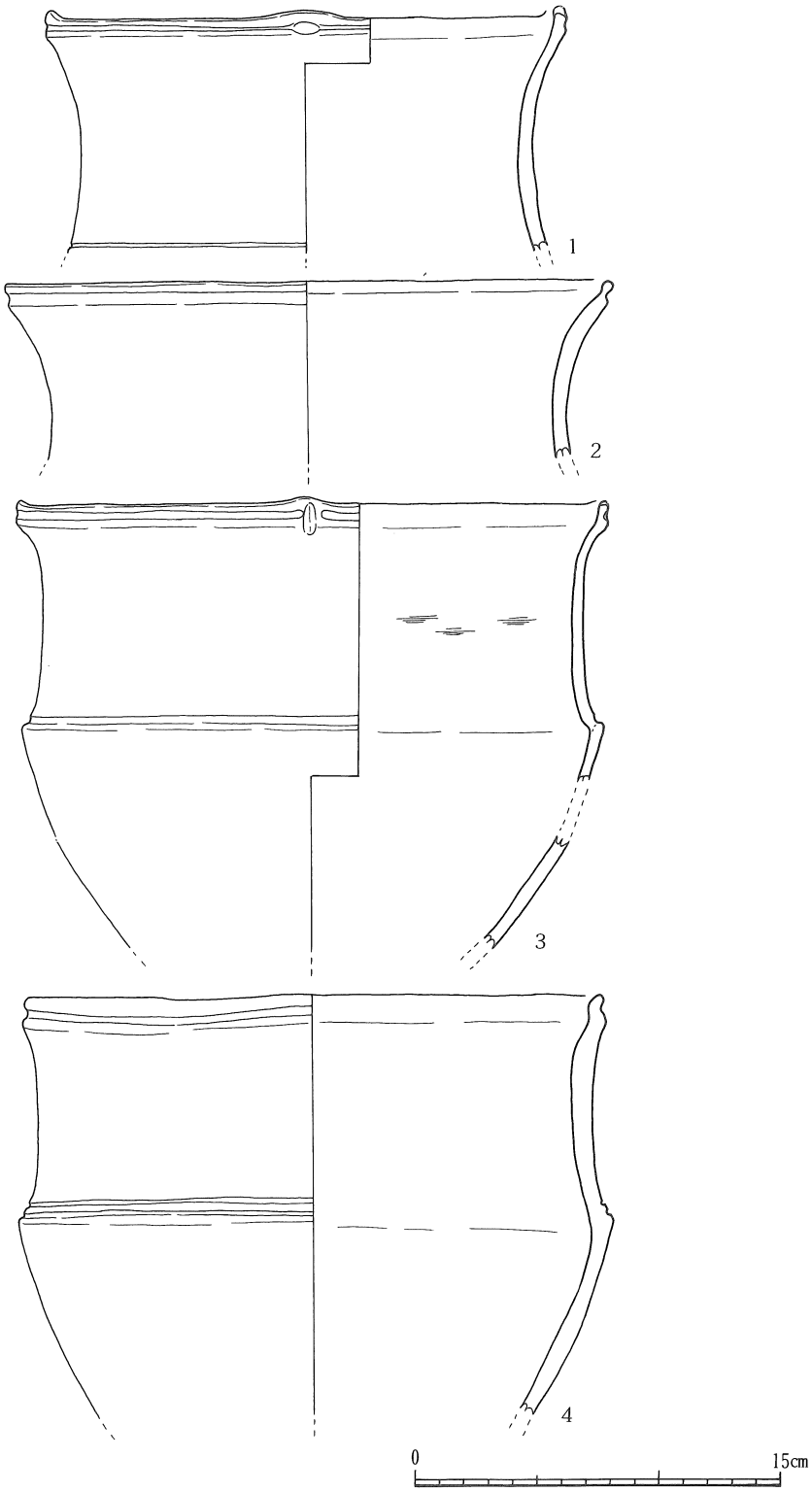
第92図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図(18)



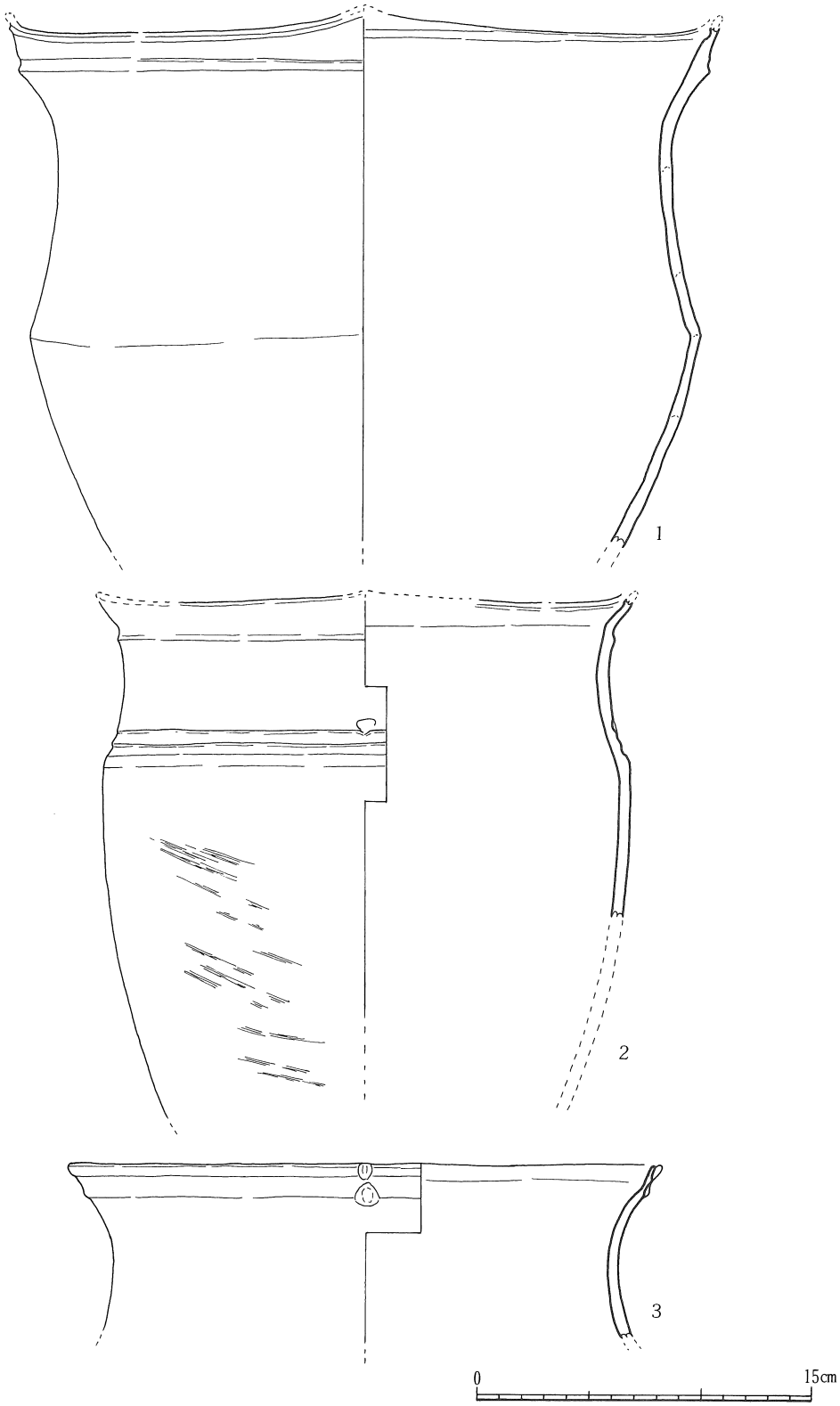
第93図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図(19)



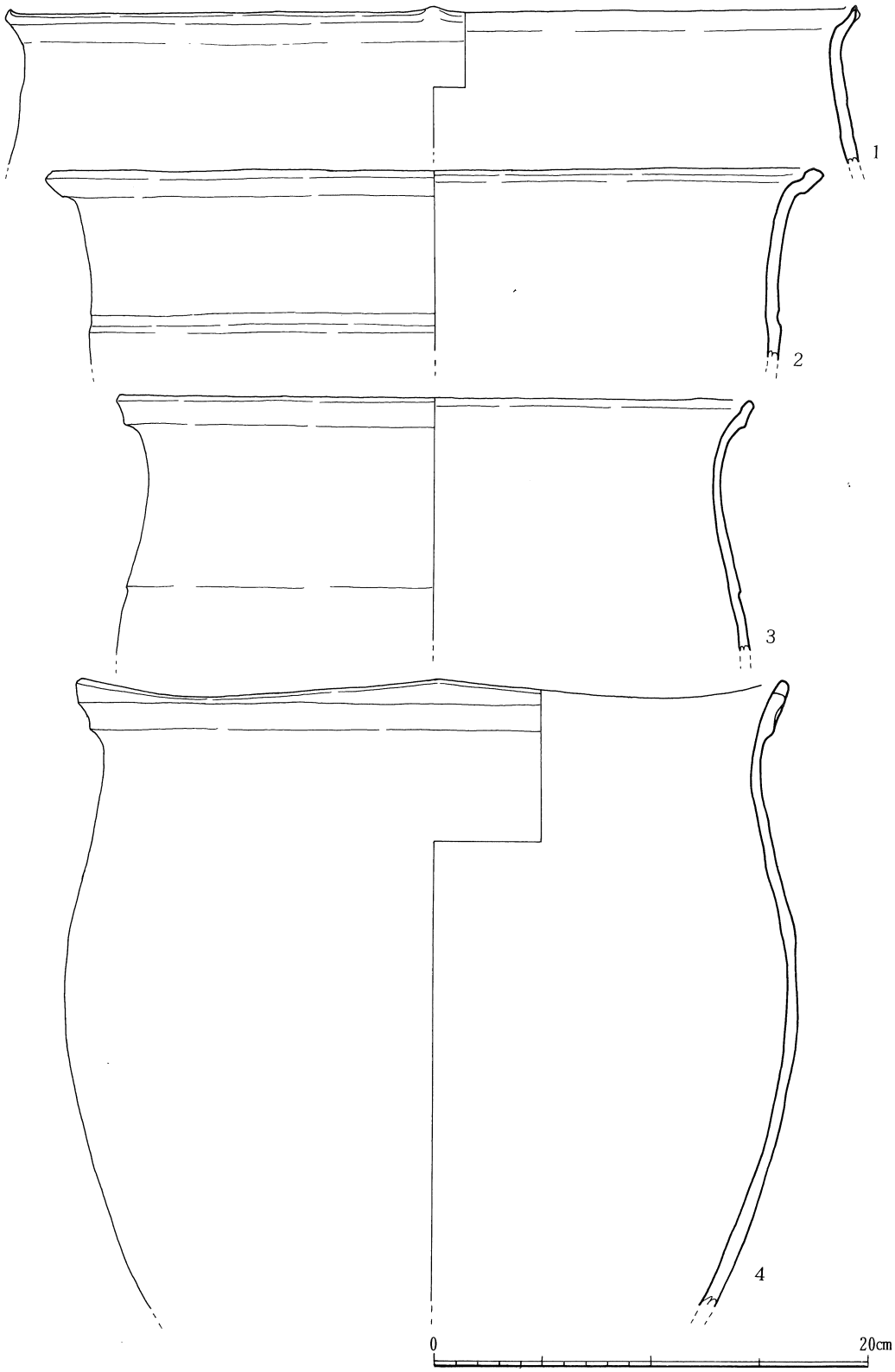
第94図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図(20)



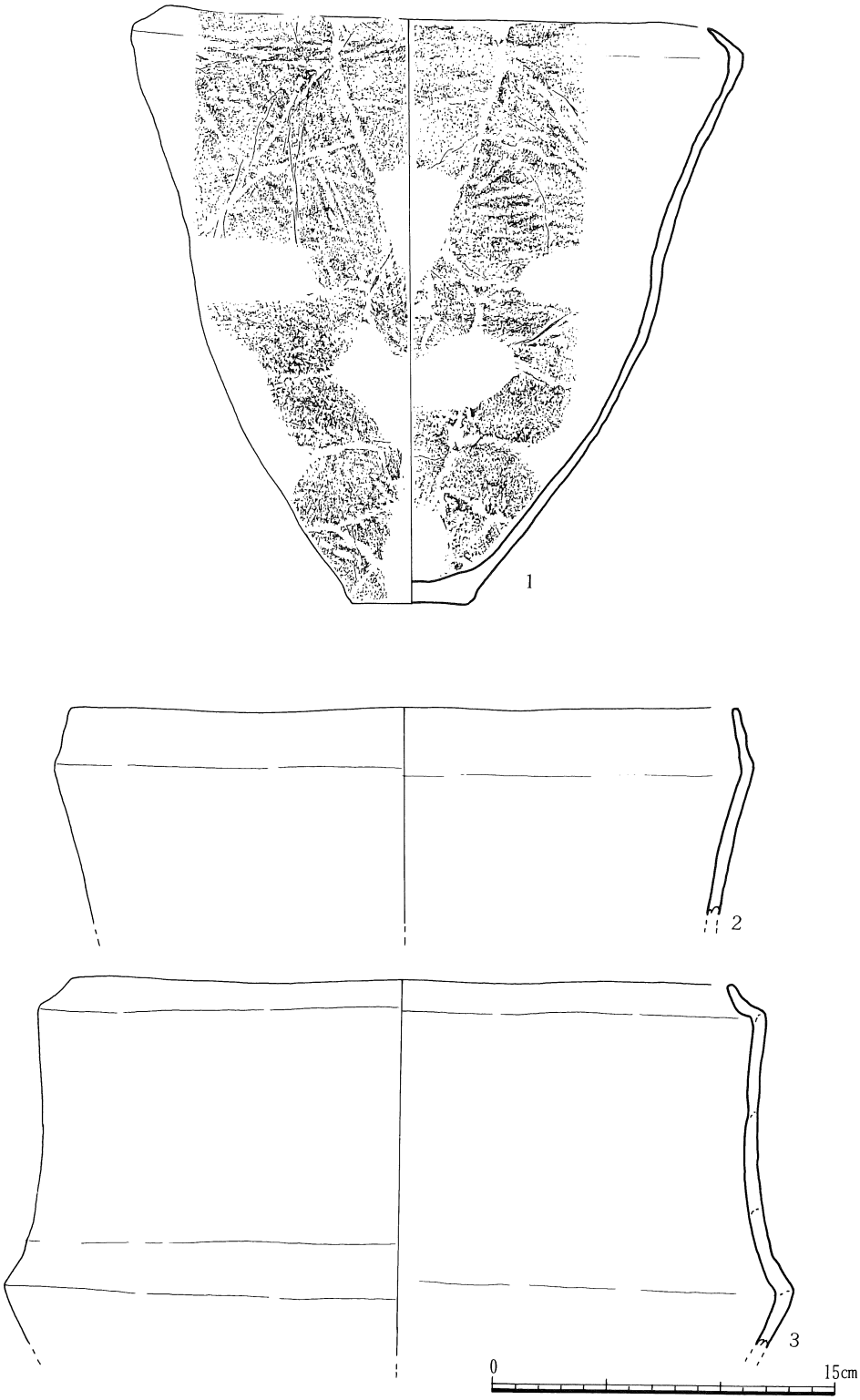
第95図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（21）



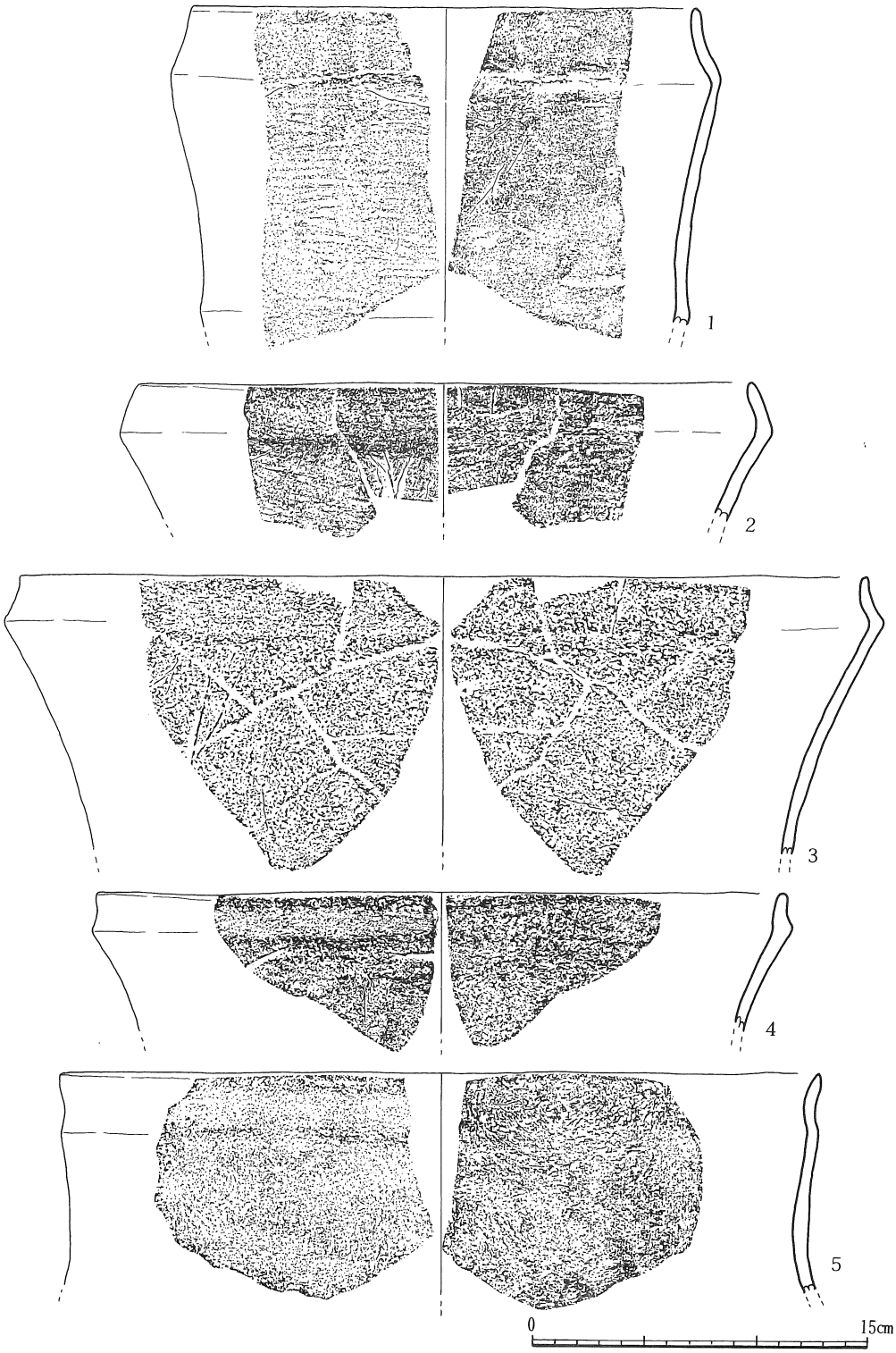
第96図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（22）



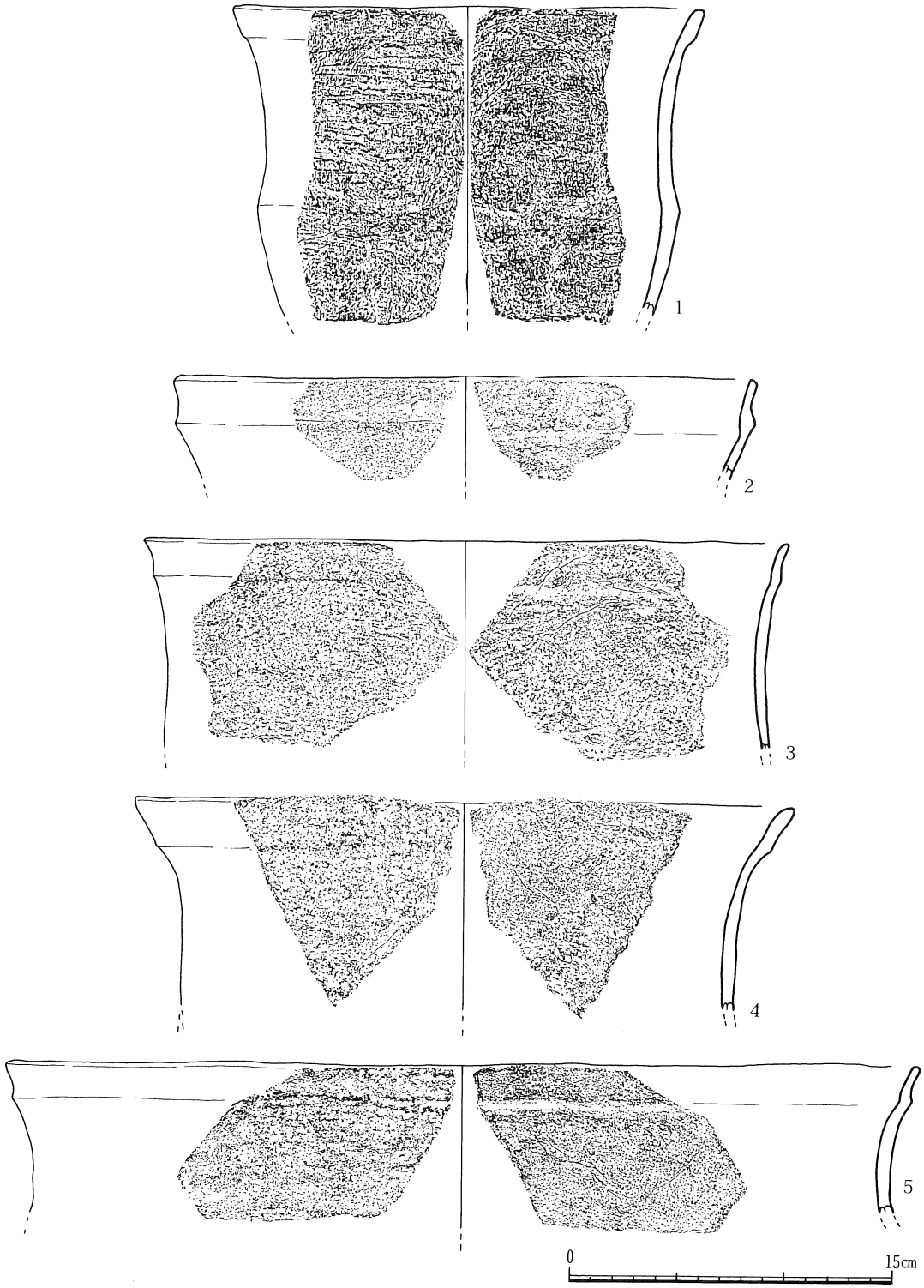
第97図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（23）



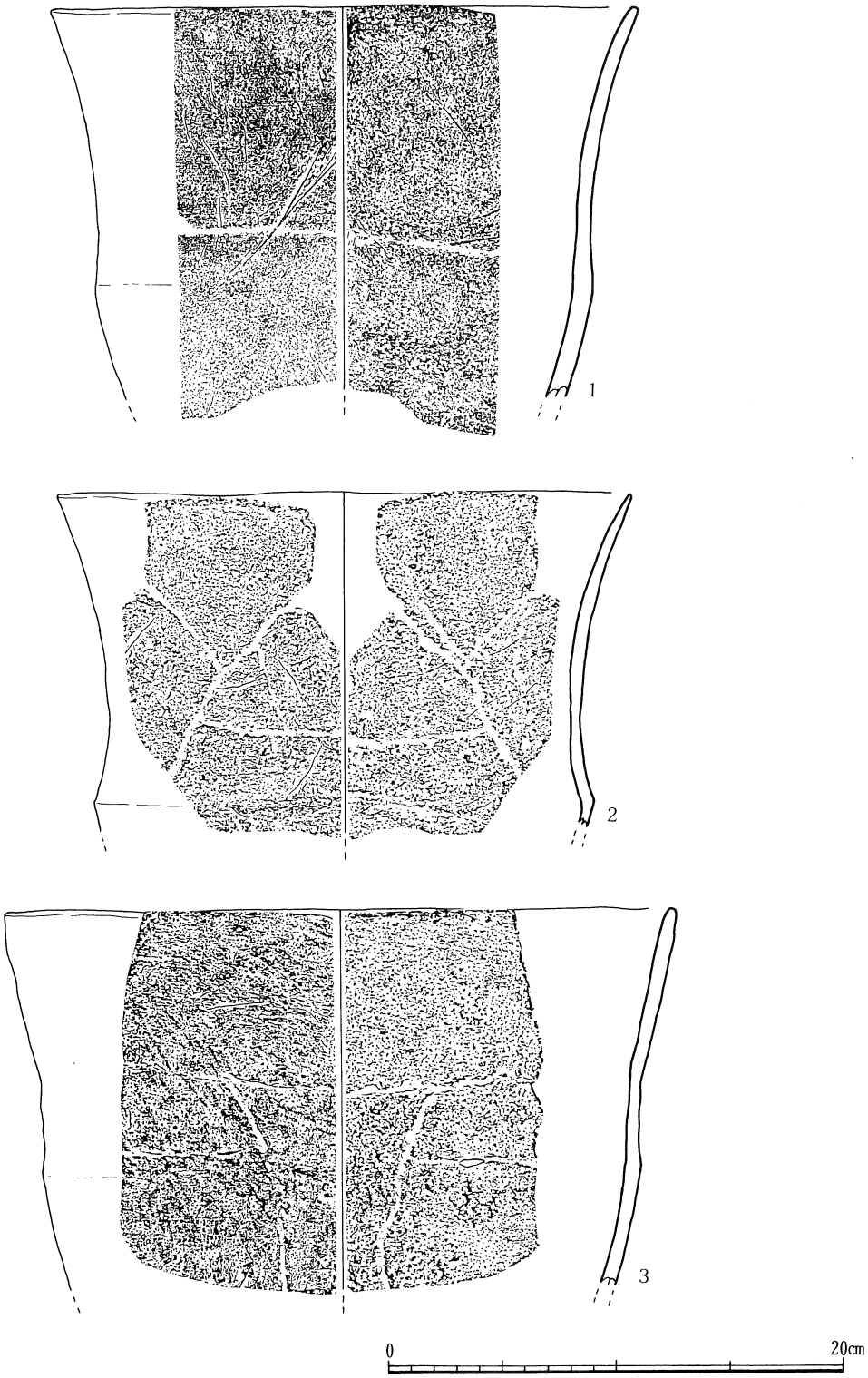
第98図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器 実測図（24）



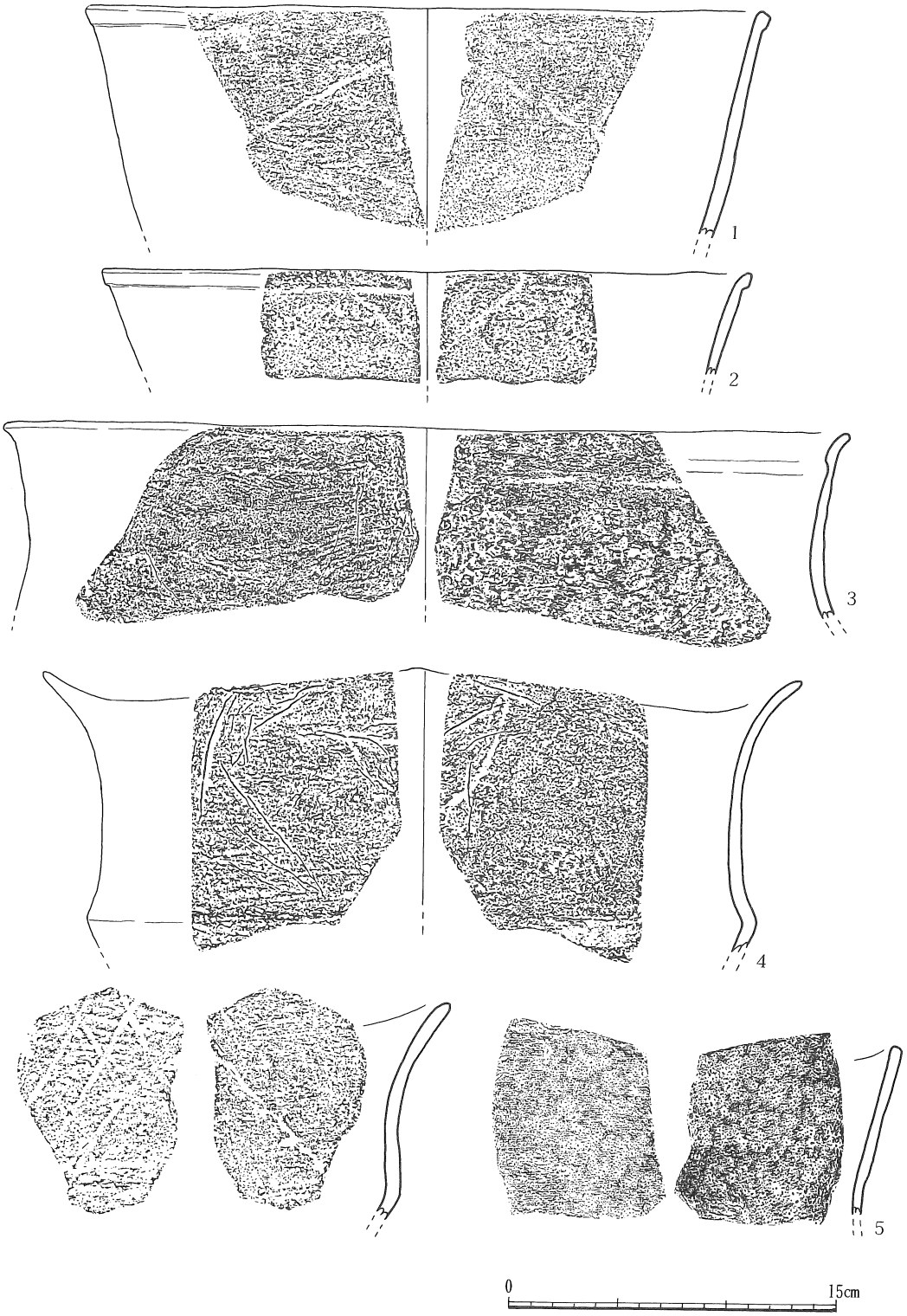
第99図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（25）



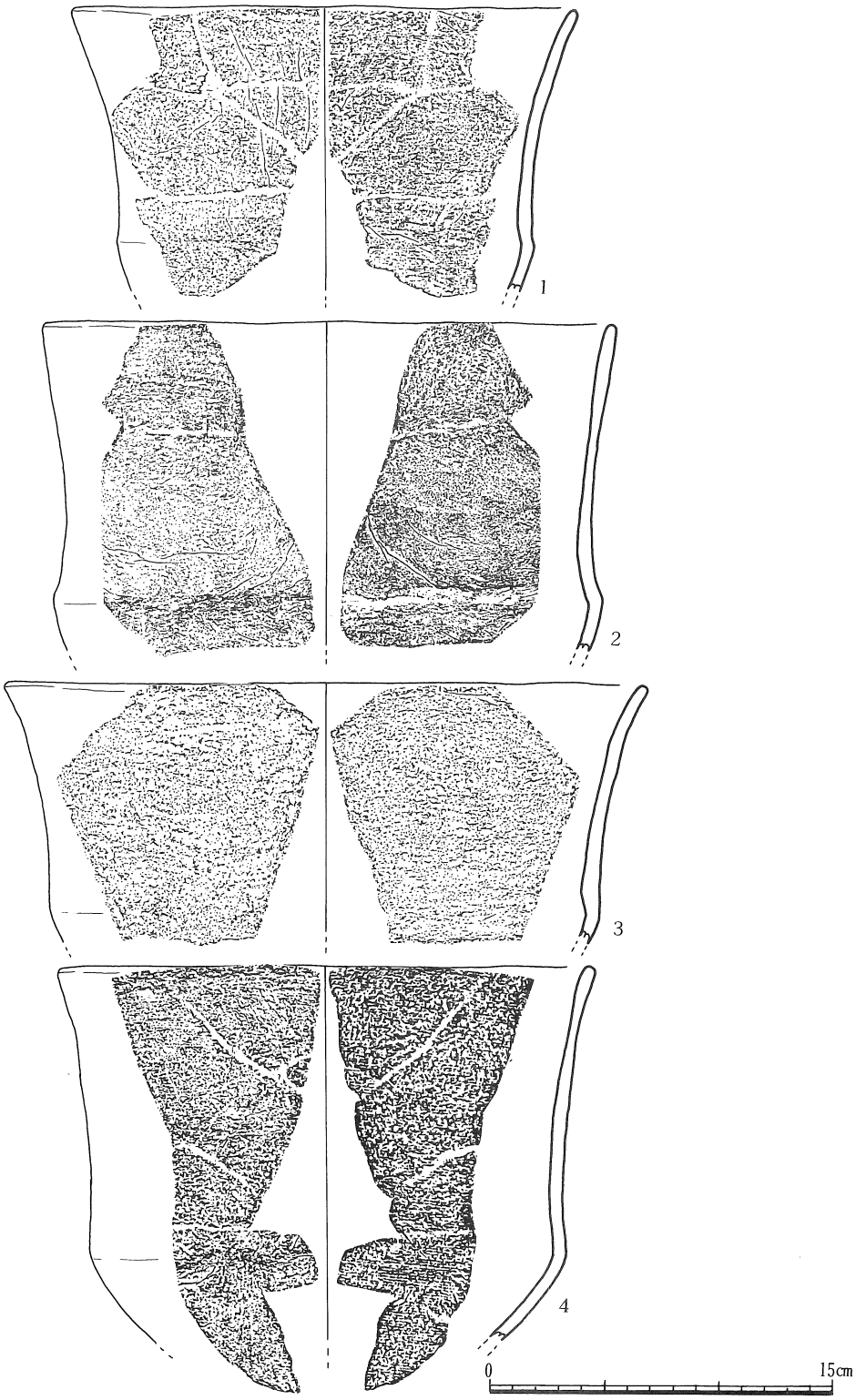
第100図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（26）



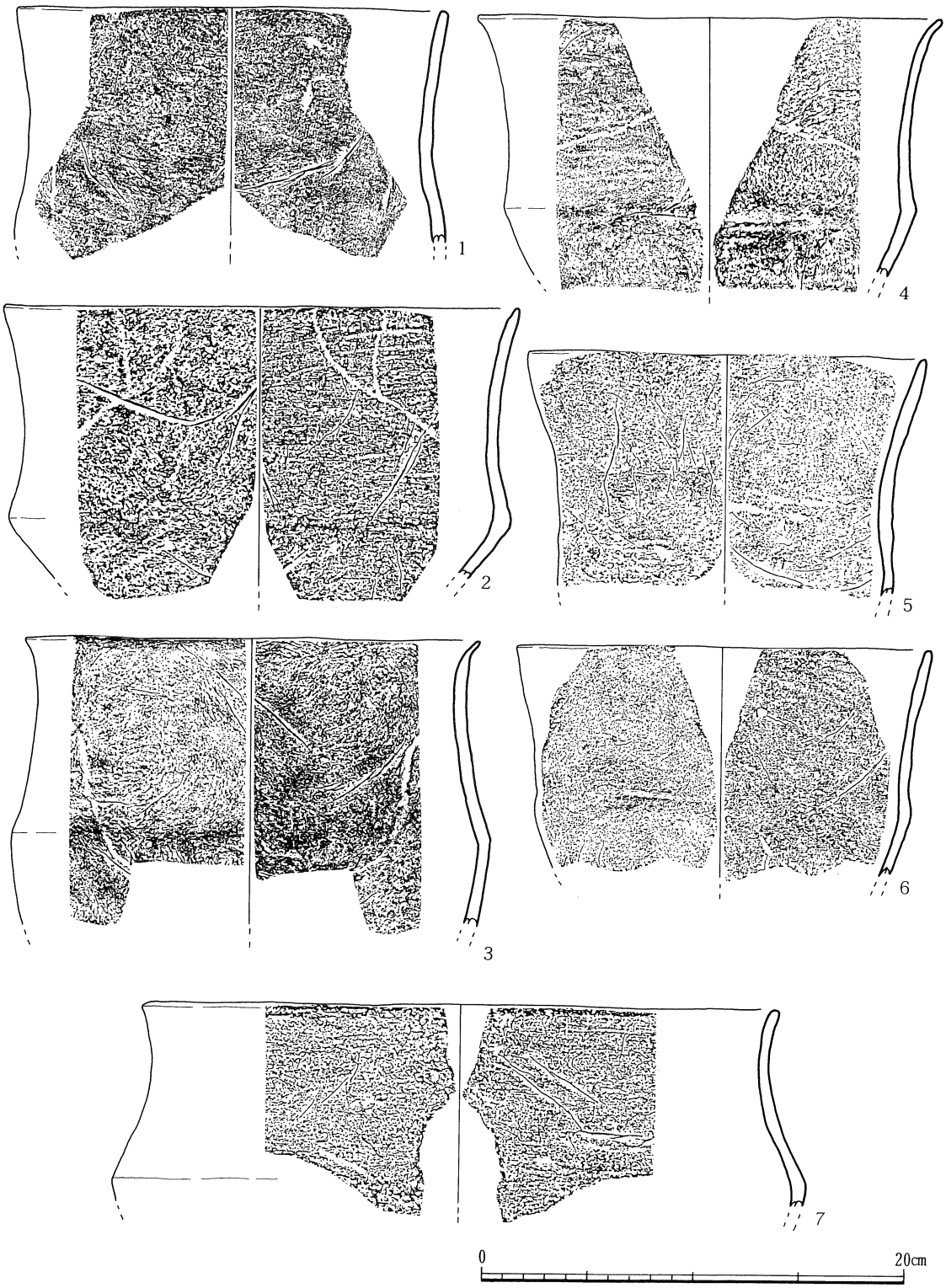
第101図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（27）



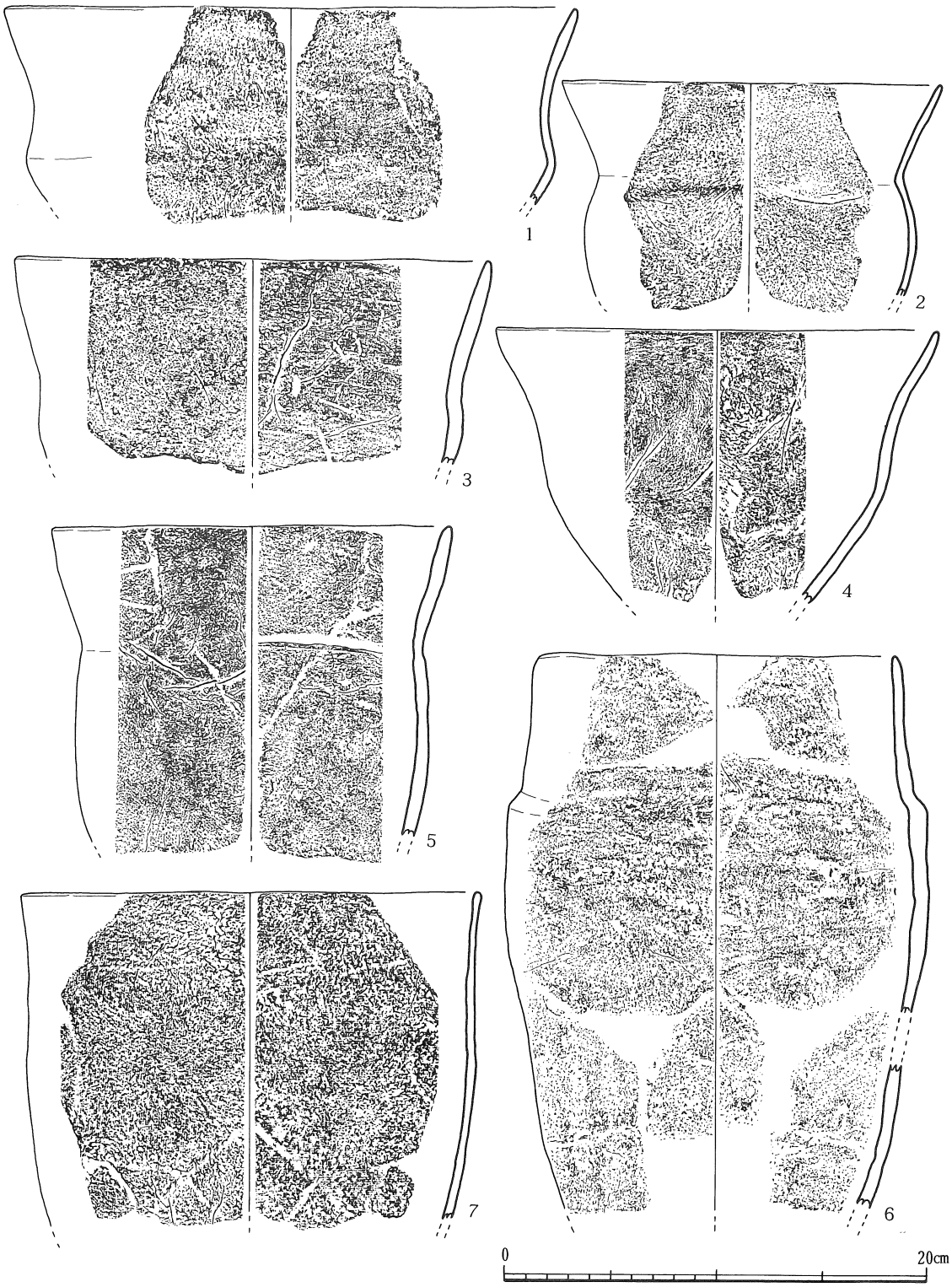
第102図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（28）



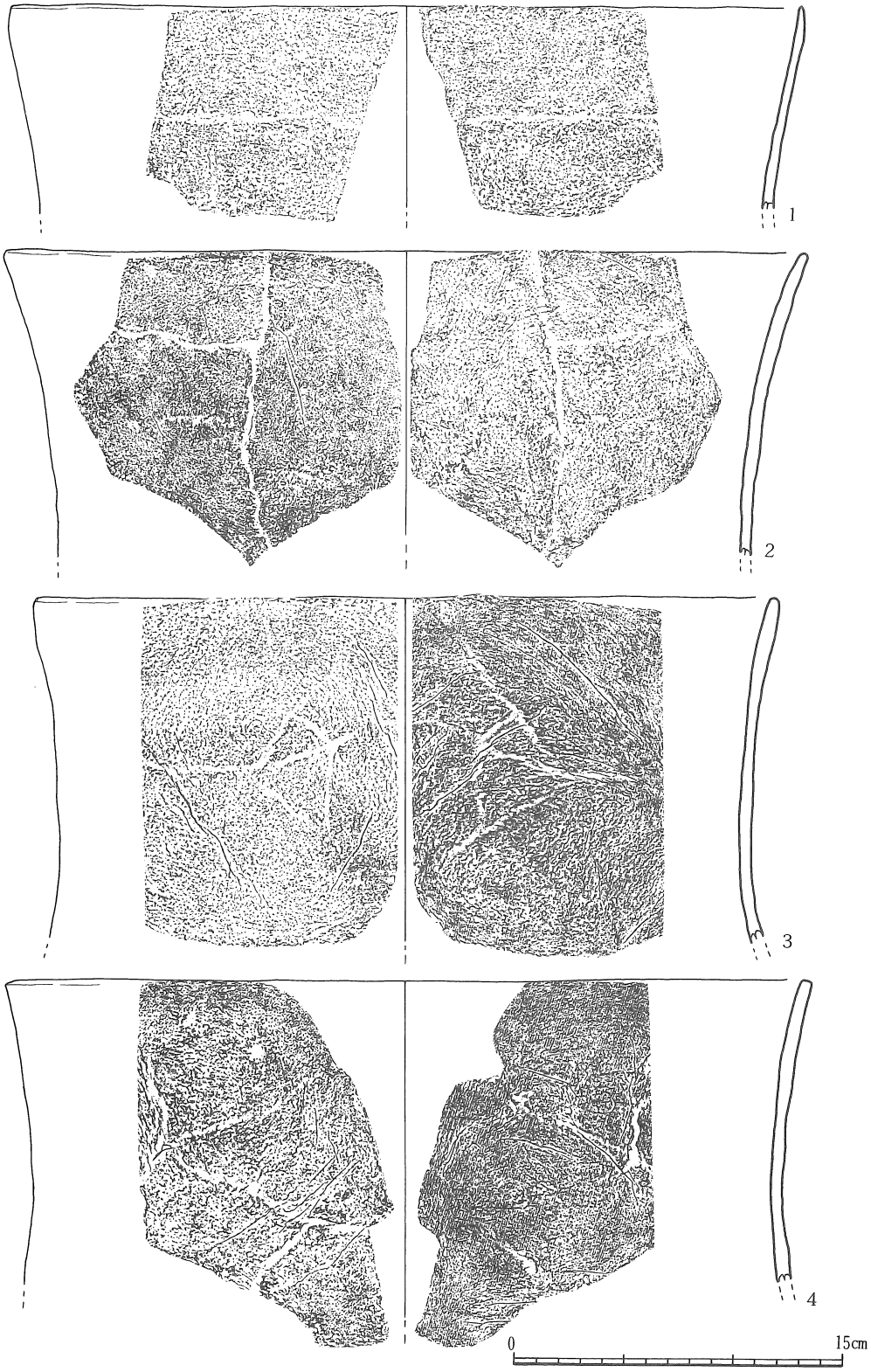
第103図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（29）



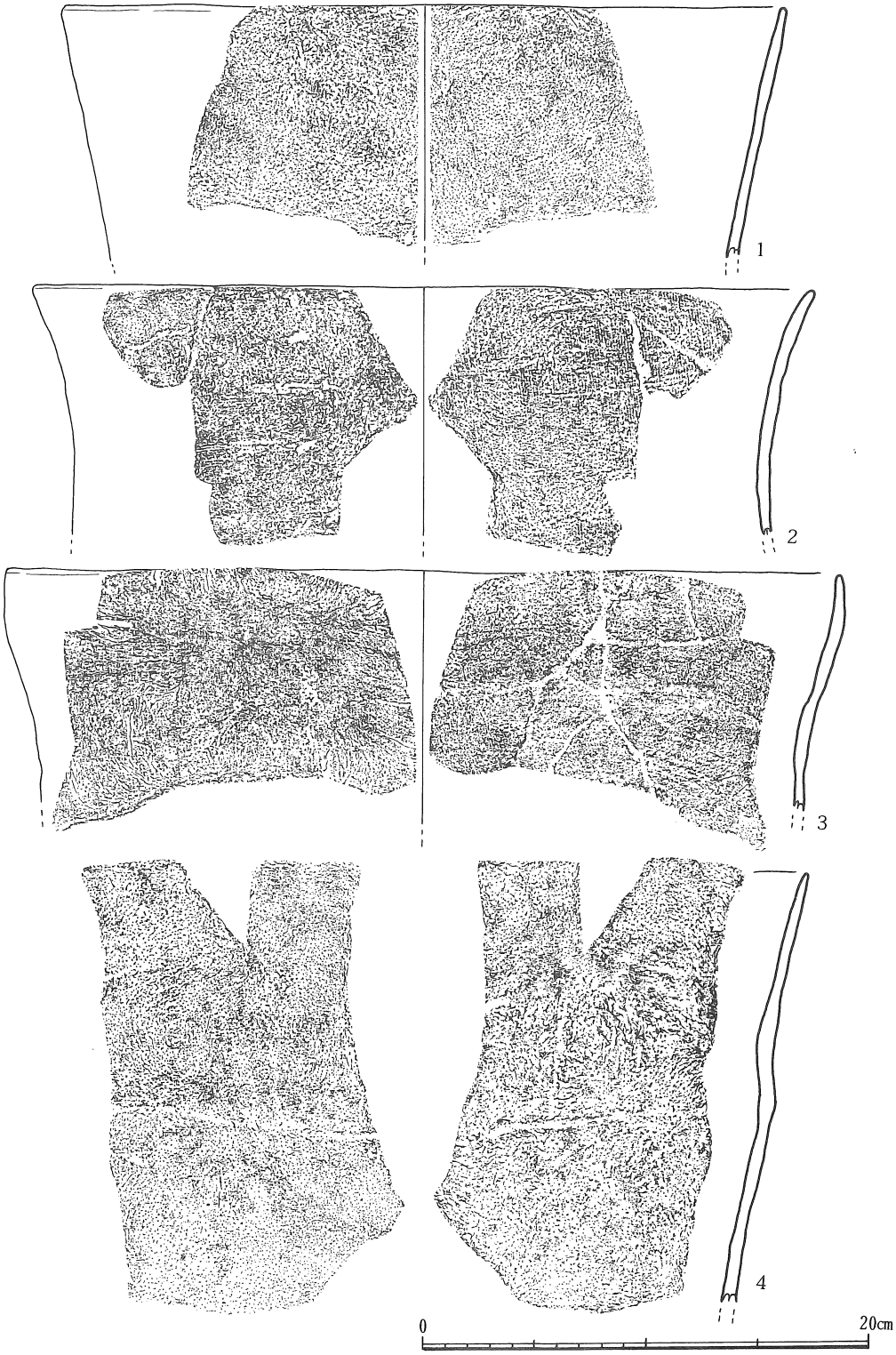
第104図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（30）



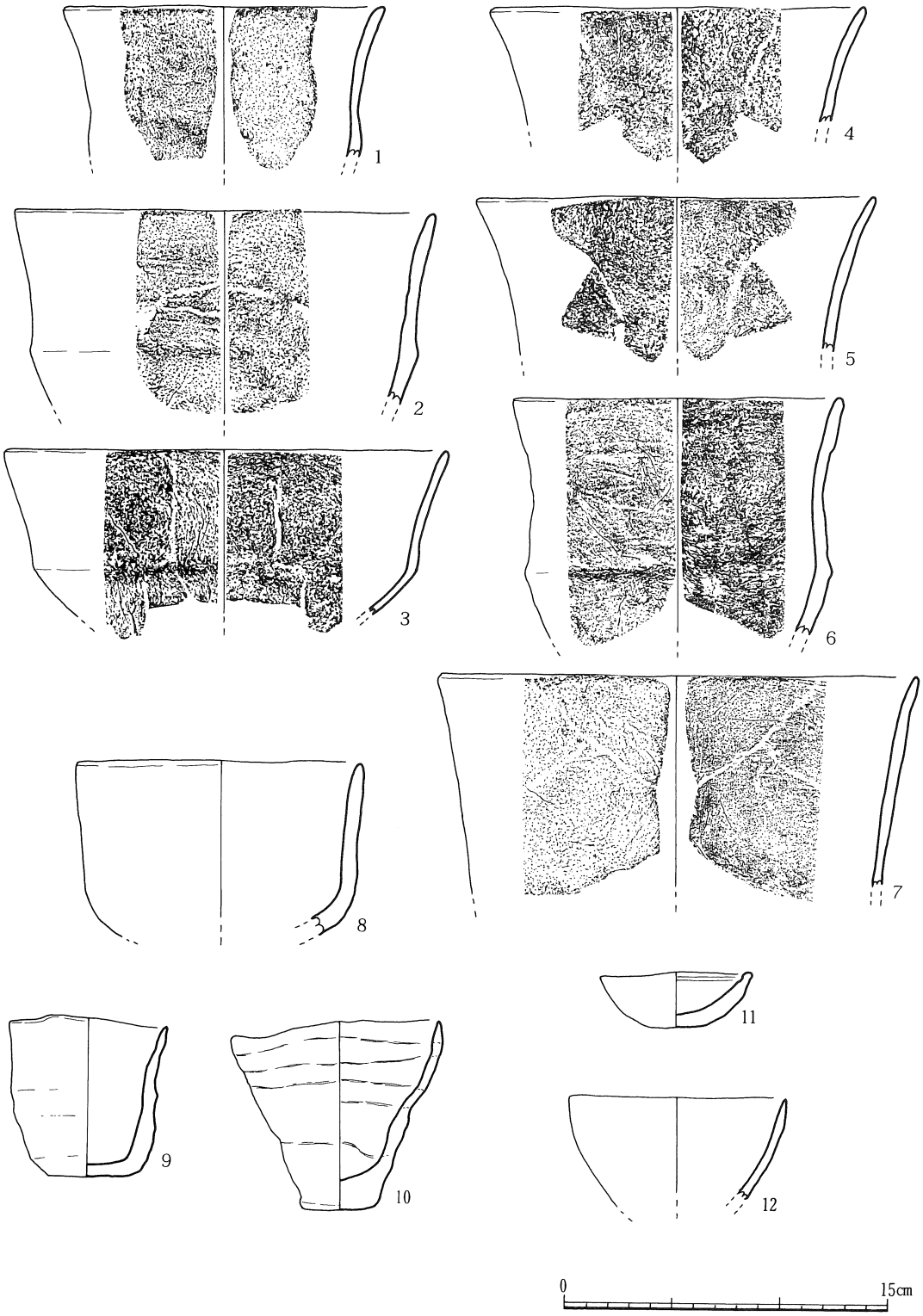
第105図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（31）



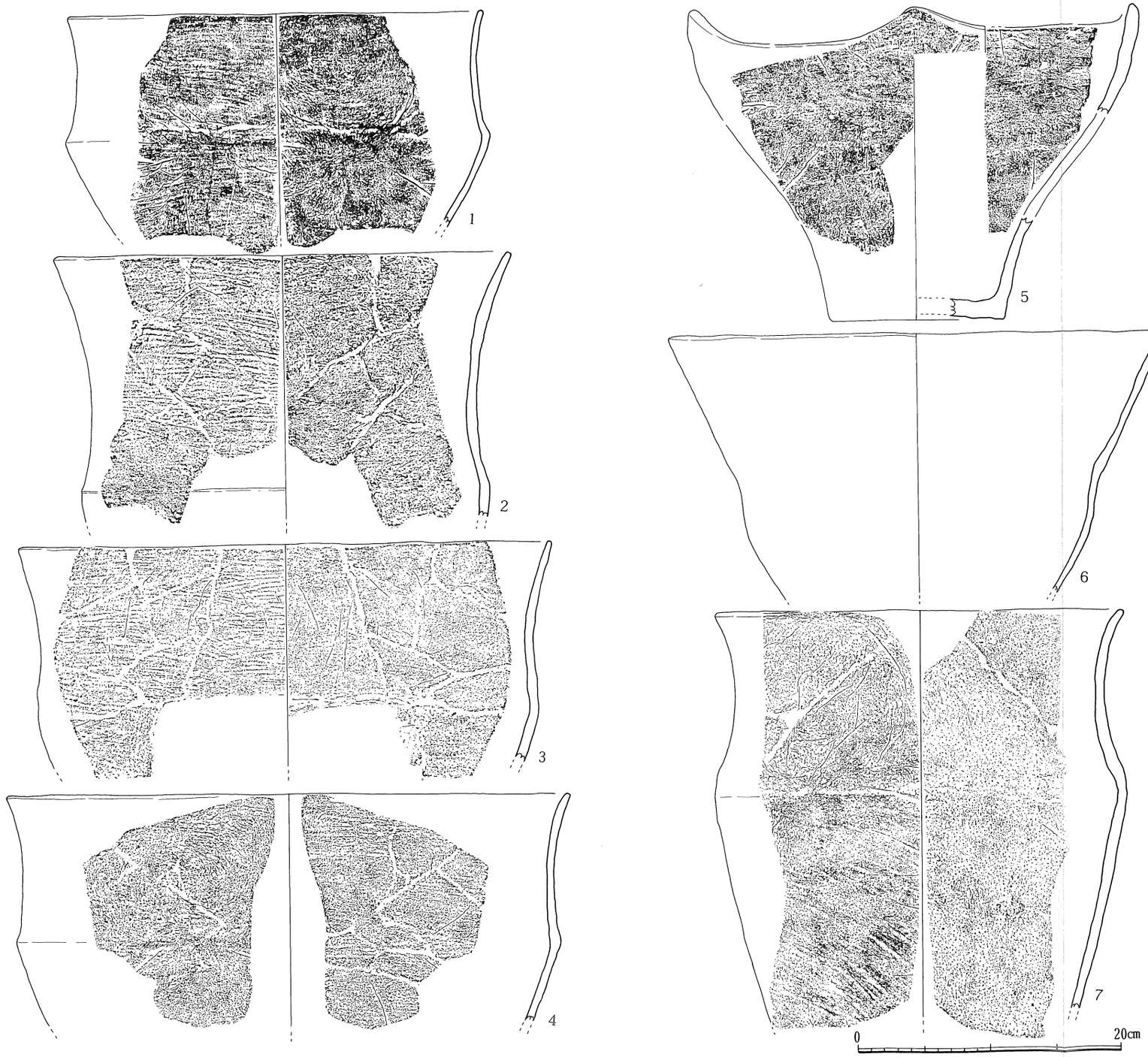
第106図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（32）



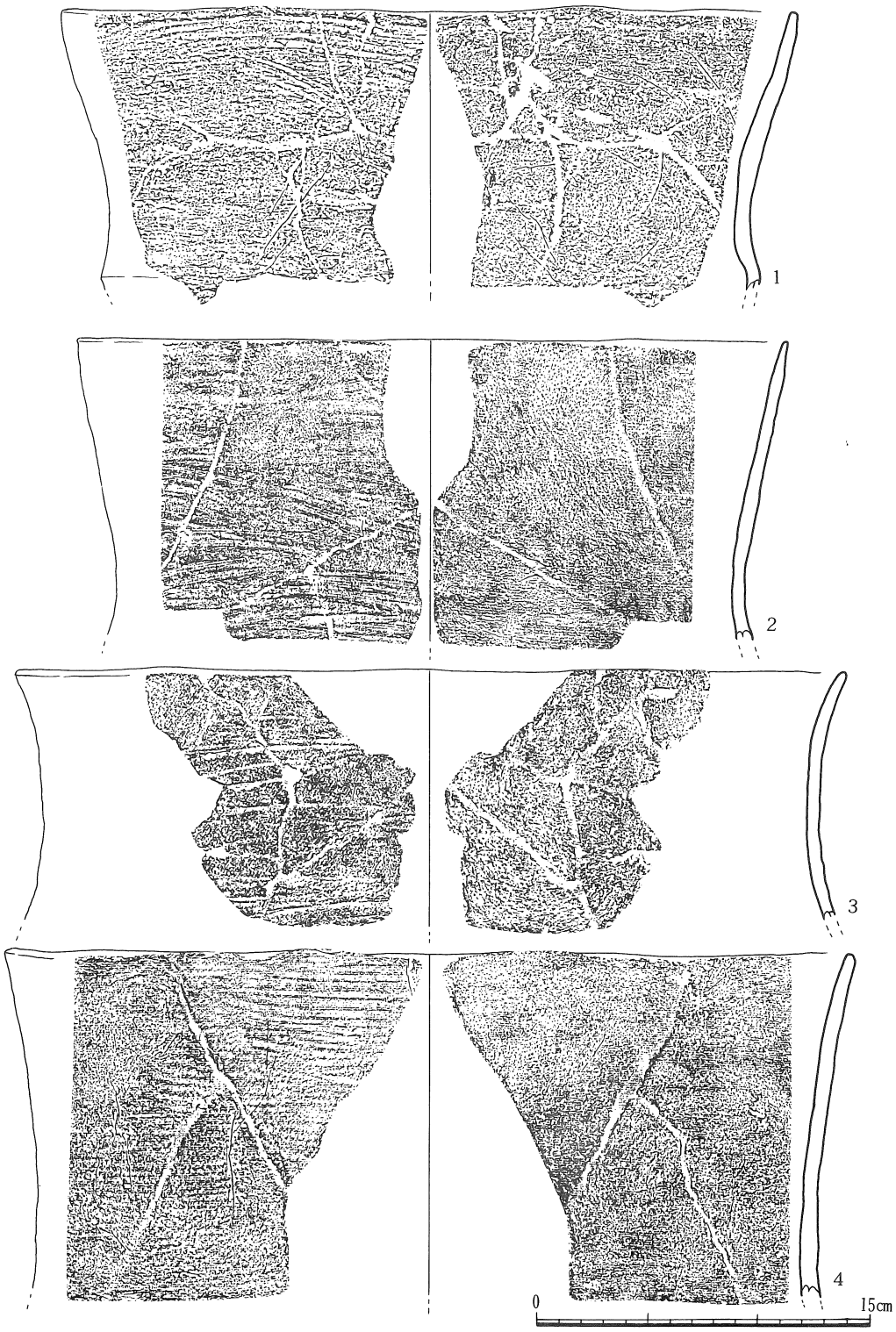
第107図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（33）



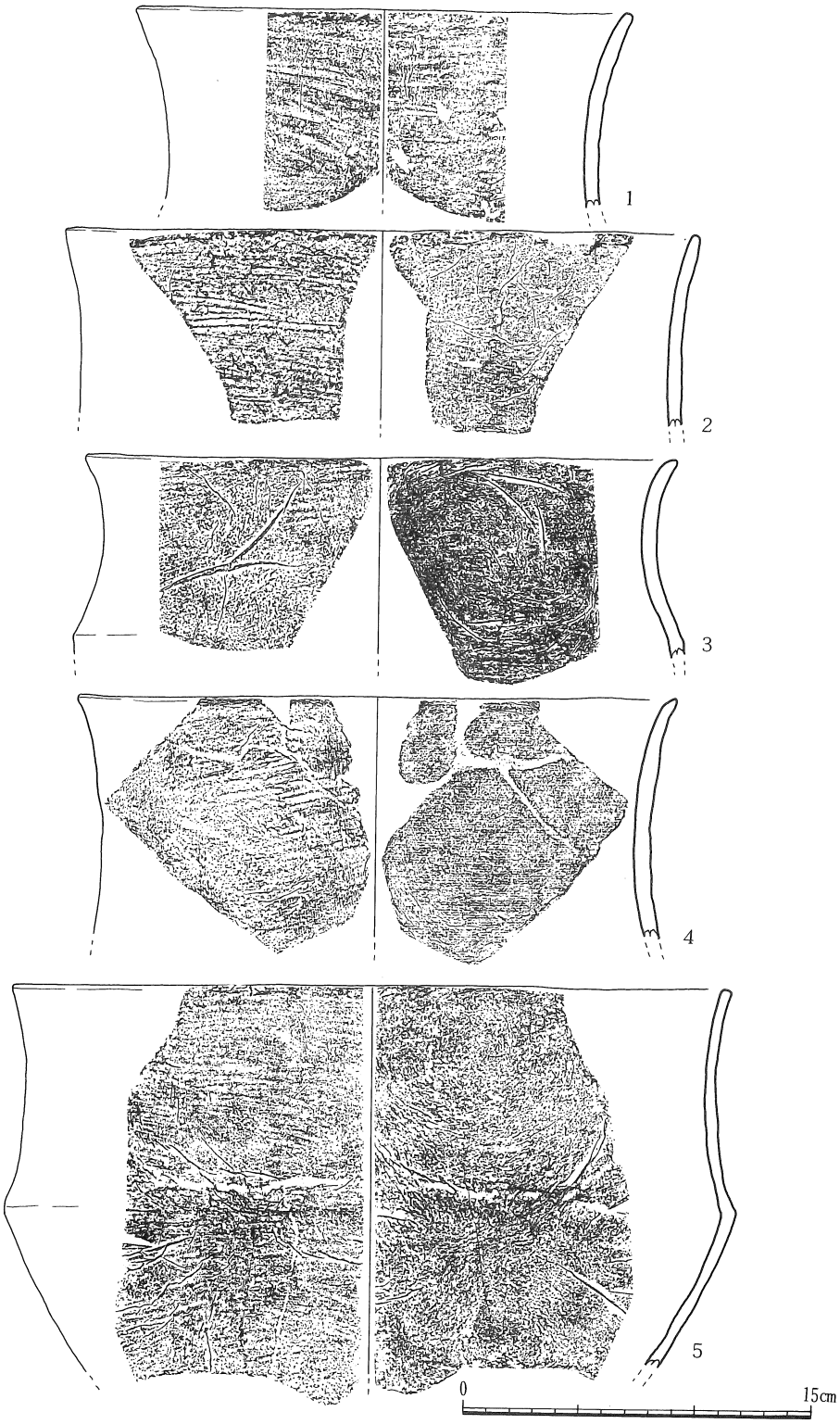
第108図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（34）



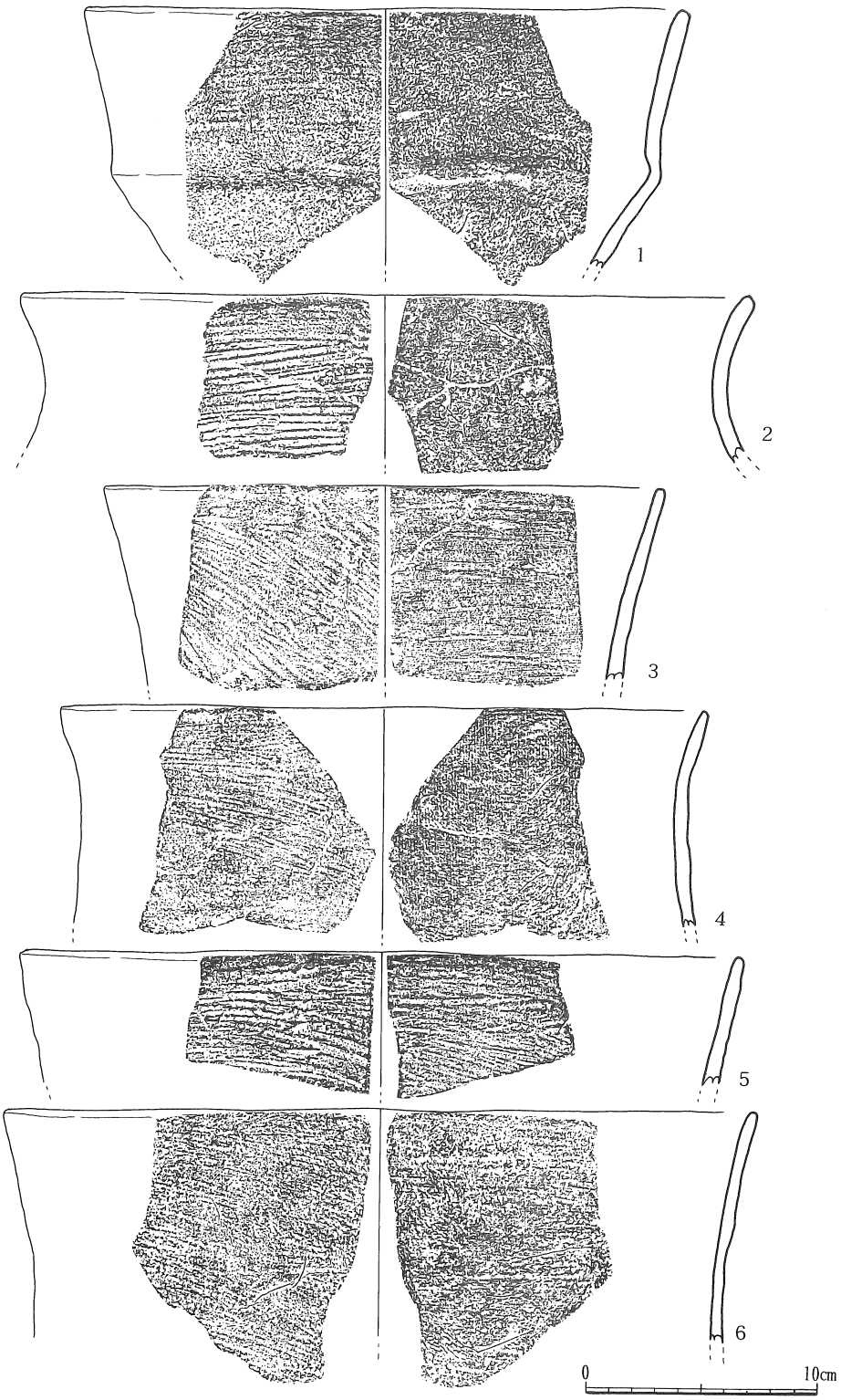
第109図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（35）



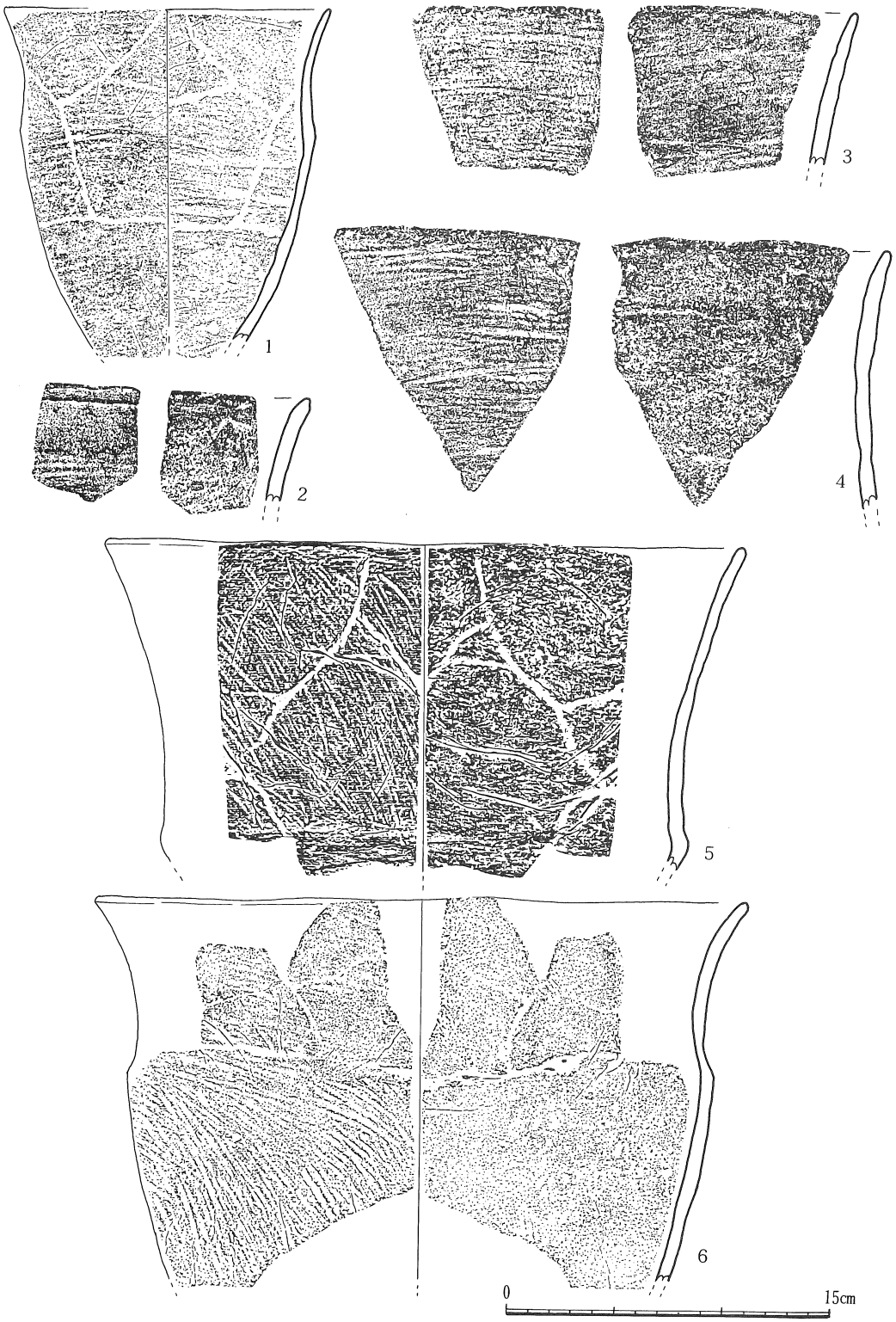
第110図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（36）



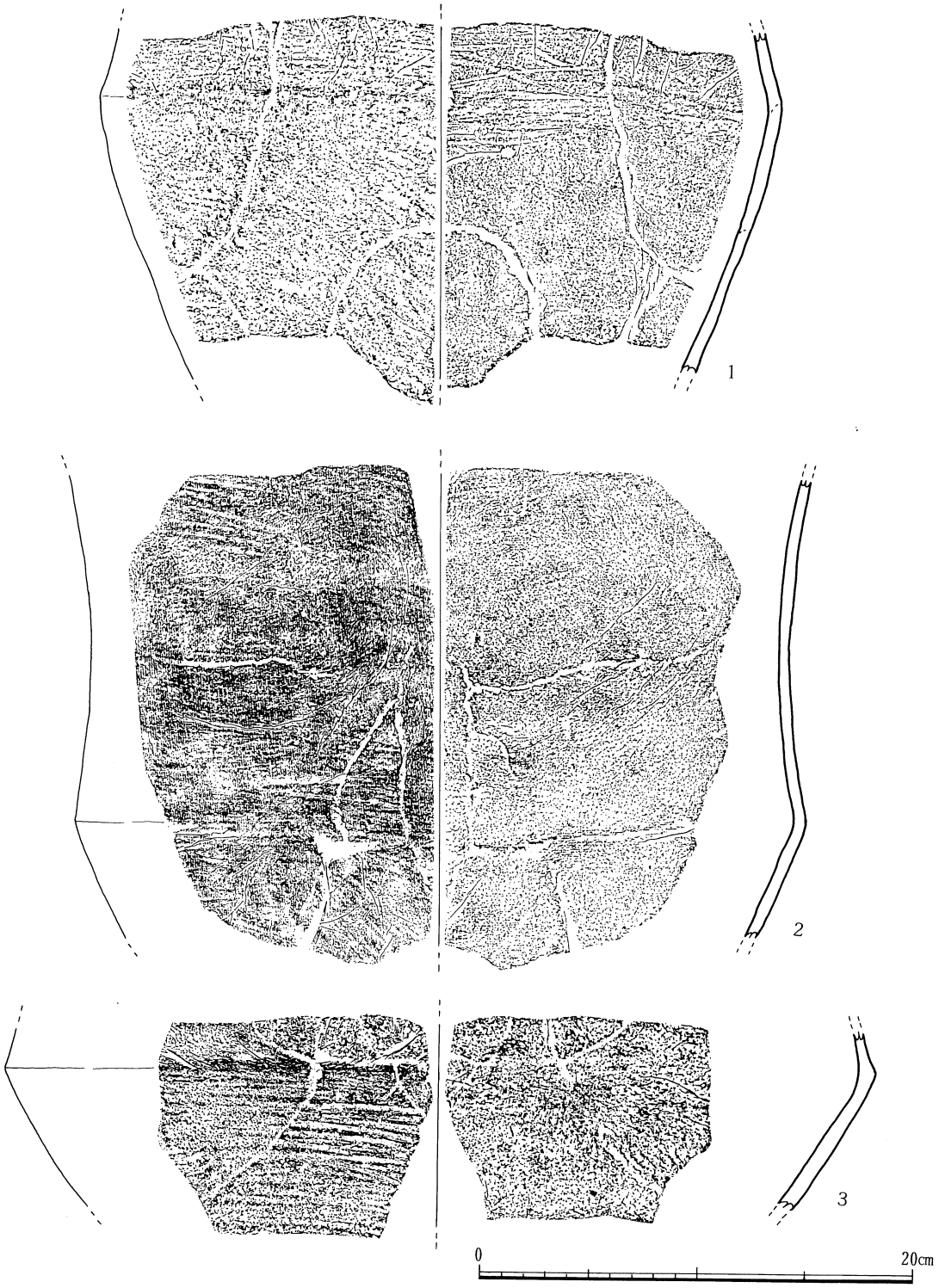
第111図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器 実測図（37）



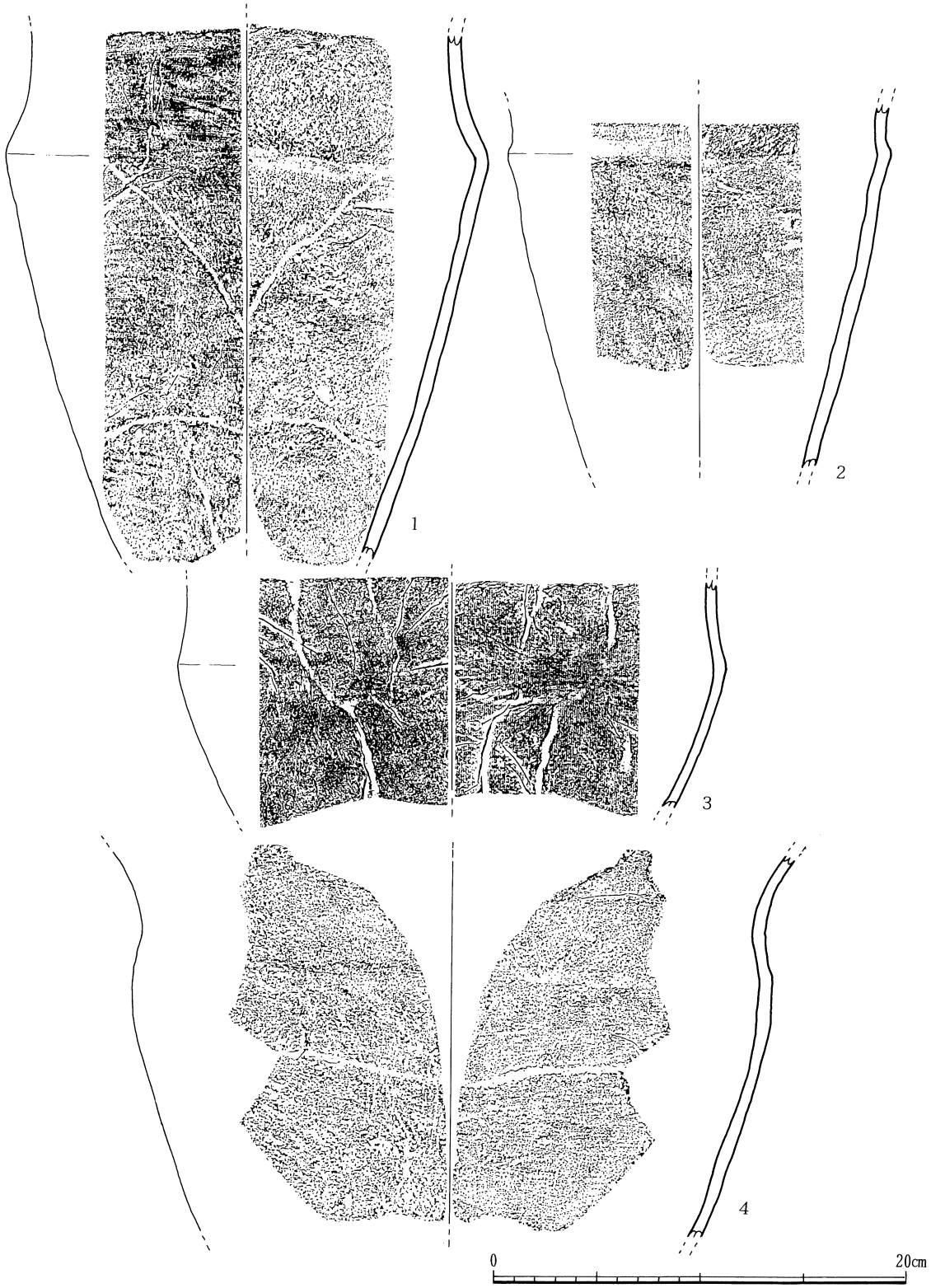
第112図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（38）



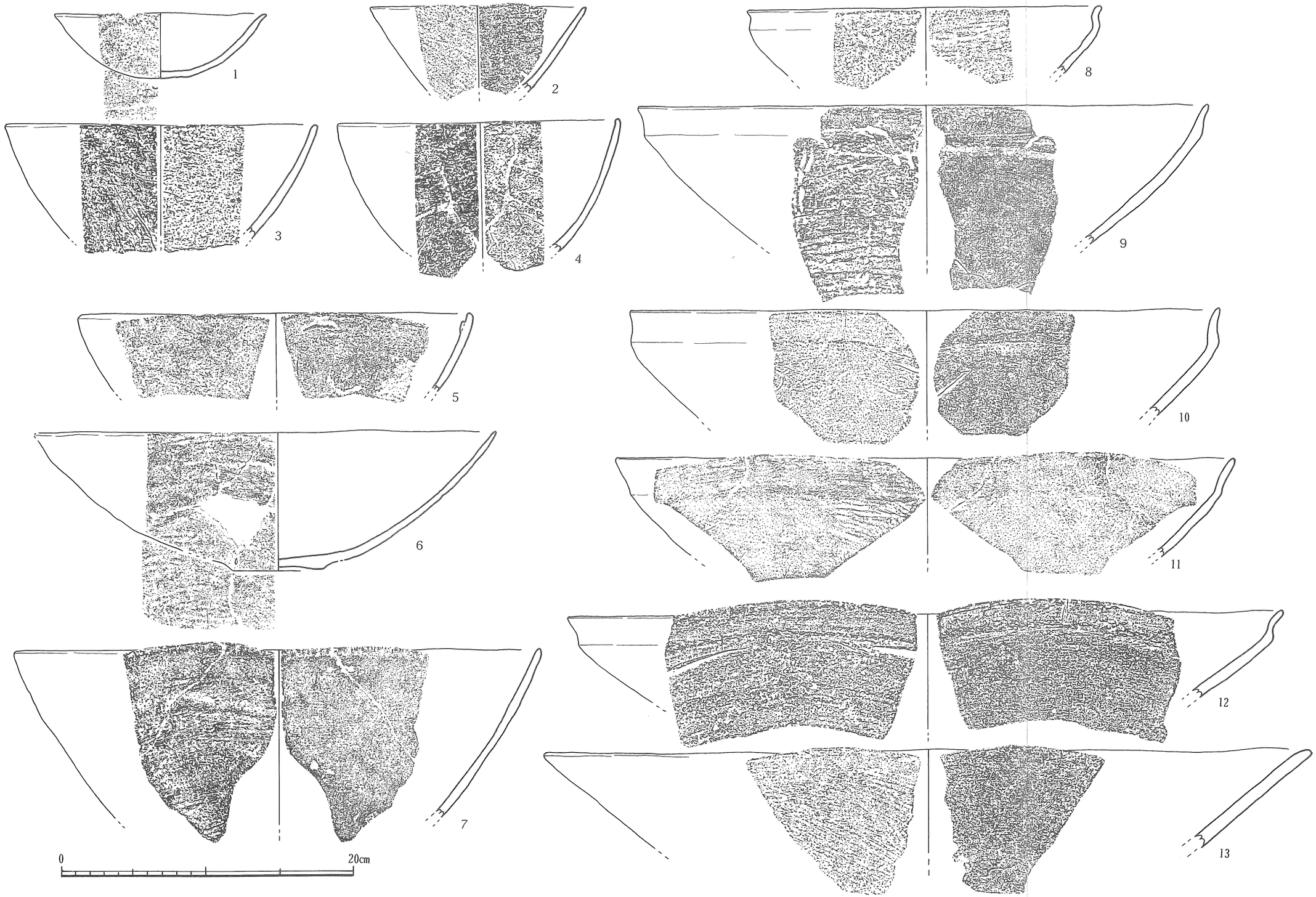
第113図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（39）



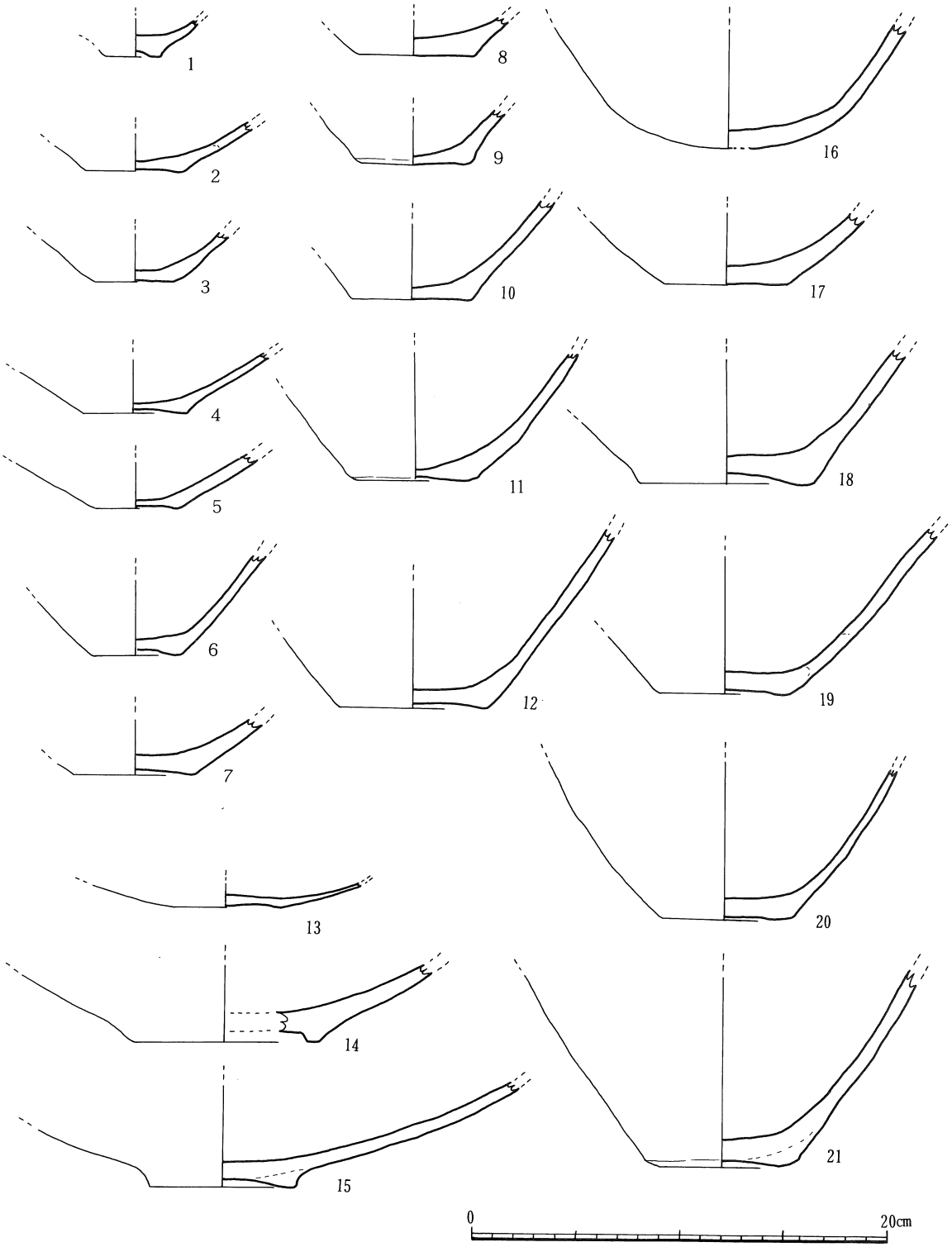
第114図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（40）



第115図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（41）



第116図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（42）



第117図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土縄文土器実測図（43）（精製土器底部）

北Ⅱ区包含層出土土器製品

土偶28点と土製品６点が出土しているが、これは県下最多であり玉類等も併せ本遺跡が沿岸部における拠点的存在のひとつであったことを示すものと言えよう。土偶は北Ⅱ区のＣ～Ｈ区の広い範囲にわたり分布するが、その中でもＥ～Ｆ区からは17点が出土し注目される。また、出土位置を異にした２点が接合したものが一例認められる。表面の仕上げはミガキによると思われるが、土器と同様に遺存状況が不良でありはっきりしないものが多い。

土偶（第119～123図）

第119図１・２は頭部で顔面も完全に残る。１は両目を長楕円状につまみ上げ、口は直径３㎜余りの小さな刺突による表現でほかに文様などは加えない。直径約５㎝のほぼ丸顔で中心部の厚さ1.9㎝と全体にやや薄く断面は偏平に近い形態をなす。２は顔の幅6.7㎝、長さ４㎝と楕円形に近い平面形を呈し、やや上位に細線文により眉を表し、下端に直径６㎜余りの凹部を設け口とする。１と異なり断面は三角形に近く、最も肥厚する所は3.5㎝を測る。

３は頭部と腕・足の片方を欠くが最も遺存状態の良好なもので、現存長8.5㎝、、張り出した腹部の厚さ3.2㎝を測る。両乳部は比較的偏平で下端がやや膨らみ、両腕は「ハ」字状に外に開くがやや短い。脚部の長さは約２㎝と短く、ふくらはぎが盛り上がる。足の裏は斜面をなし土偶自体の直立は不可能である。背中から腰にかけて中心部が窪み、臀部の左右端が肥厚する。腹部の中心に凹点を設けるが、文様等は施されない。欠損部の状況から四肢と胴部・頭部を分割し成型したものと思われる。胎土に白色・茶色粒、石英、角閃石、雲母等をやや多く含み、茶褐色から黒褐色を呈する。

第120図１は左半身の腕を欠くが、現存長11.3㎝とやや大きいものである。脚部は直径３～3.5㎝の棒状をなし直立するものと思われ、腰は外にやや張り出す。腹部は欠損するため肥厚状況は不明であるが、背中は両端部がやや膨らむ。本例は胴部も左右で分割したものを成型したものと思われる。また、腰から上と下は約数ｍ離れ別々に出土したものが接合した。２は腹部片で、腰は左右にやや大きく張り出し、腹部は横長に肥厚する。両足の接合部で欠損することから四肢は分割成型と考えられる。３は胸部から上を欠き、丸く張り出した下腹部と左右に大きく張る腰部の下にやや短い脚部を付す。臀部は左右と下側に肥厚帯が巡り中央部が窪む。脚部は直立せず左右もややアンバランスである。

第121図１～３は胴体の各部分で、１は現存長約６㎝で乳部から腹部を欠損し、２の背部には横長の肥厚帯が造られる。３は左側腰部の破片と思われるもの等また、第121図４・５と第122図1～7は腕の破片で、胴部との接合部付近で欠落したものが多い。これらは腕先が直線的に開くものと先端部が内側に湾曲してすぼまるものの二類に分けられるが、前者が多数を占める。第121図４の裏面と第122図１の表には文様が加えられるがその他は施されない。左側が３点、右側が６点の出土で、中央部付近の直径１～1.5㎝前後の棒状粘土により成型したものと思われる。

第122図８～10は腰部から脚部の破片で、８は脚部が棒状をなし、９は脚部の裏側が肥厚し足首に沈線を加える。９は下腹部が横に膨らみ、腰部は左右に丸みをもちなが張り、その裏面に３条の浅い沈線による孤状の文様を描く。第123図１～６は脚部の破片で、ほぼ棒状の１・６のほかは裏側が肥厚するものが多く、５は膝部分もやや張り出す。１・２の足首部分には沈線が巡る他は文様等は施されない。１は中央付近の直径1.4cmと最も小さく、６は3.1cmの大型の脚部である。

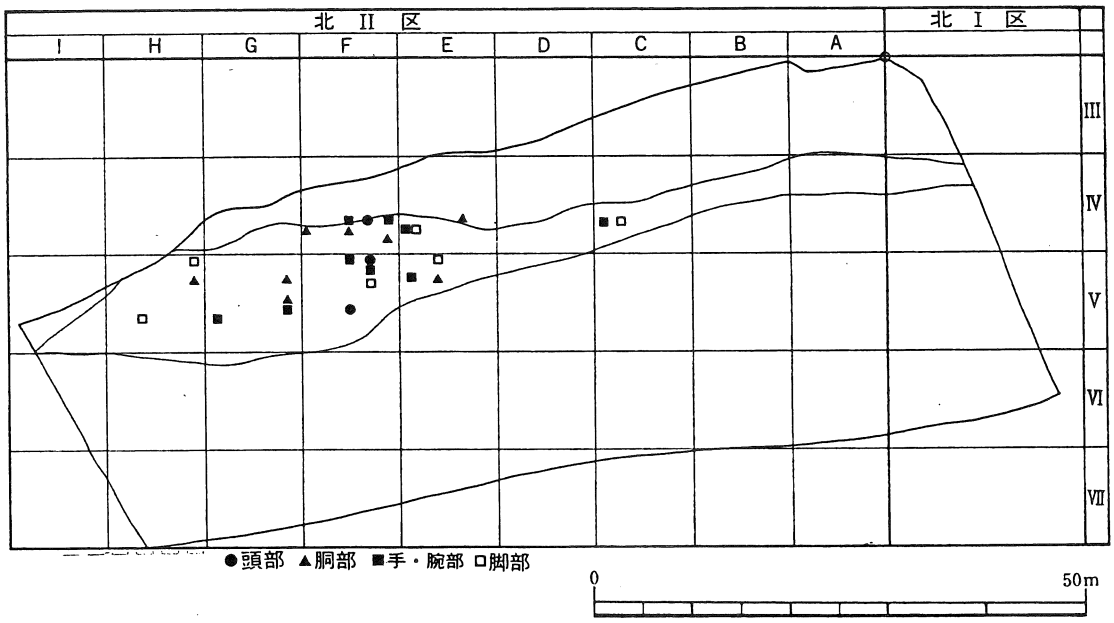
十字形土製品（第123図７～９）

７は厚さ５mmほどの精製土器の破片を直径約５cmの円形に加工した後、四方に方形の抉込みを設けたものである。周縁は丁寧な磨切により整形する。８は直径３cm余りの円形の土器片にＶ字状の抉込みを四方に入れたもので、器面が磨耗しているため精製土器を再利用したものか否かは不明である。９は概報の段階では土偶（脚部）に含めていたものであるが、全体に偏平で丸みがないことや端部の処理など土偶とは異なる形態をなすことから十字形土製品として報告することとする。現存長5.9cm、中央部の幅と厚さは3.6cmと2.3cmを測る。

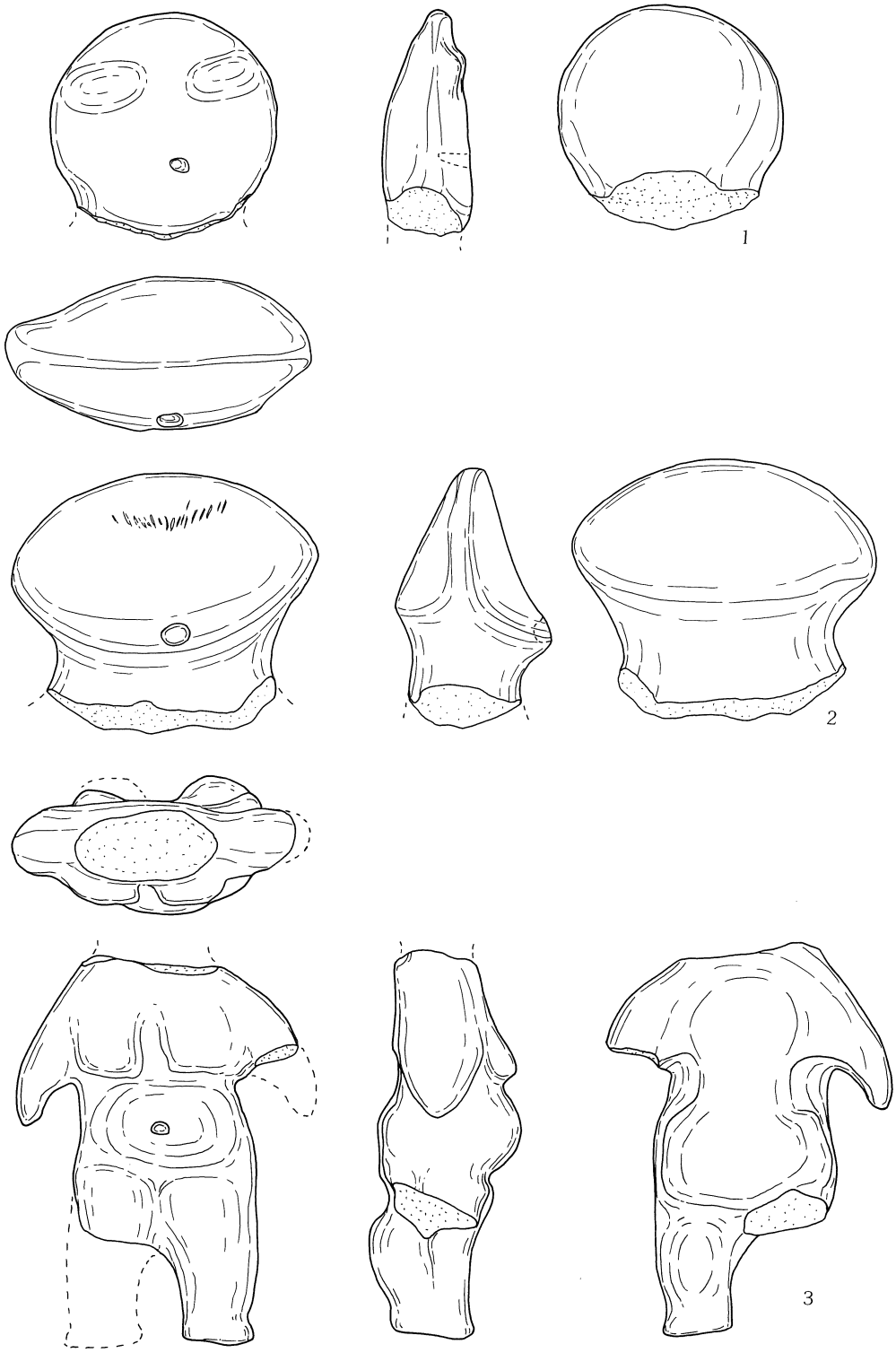
円盤状土製品（第124図）

１は表裏とも沈線による文様を施すが約４割ほどの部分片であるため全体の文様構成は明らかにし得ない。中心部の厚さ1.1cmとやや薄く、復元直径は８cmのほぼ円形を成すものと考えられ、表裏ともに直線と曲線による文様を描くが同様の文様は土器にも認められないが、土偶の頭部文様、また、側縁部にもやや浅い沈線を巡らすが中央部に穿孔はないようである。

２は直径5.4cm、中央部の厚さ1.5cmの円盤状土製品で、側縁部にやや浅い沈線が施され中央部に焼成前の穿孔がある。この孔に向かって側縁部から非常に浅い沈線が十字に施されるが、不明瞭となる点が多い。３も中心部の焼成前の孔が穿たれるが、他に文様等は施されない。直径5.7cm、中央部の厚さ1.6cmを測る。

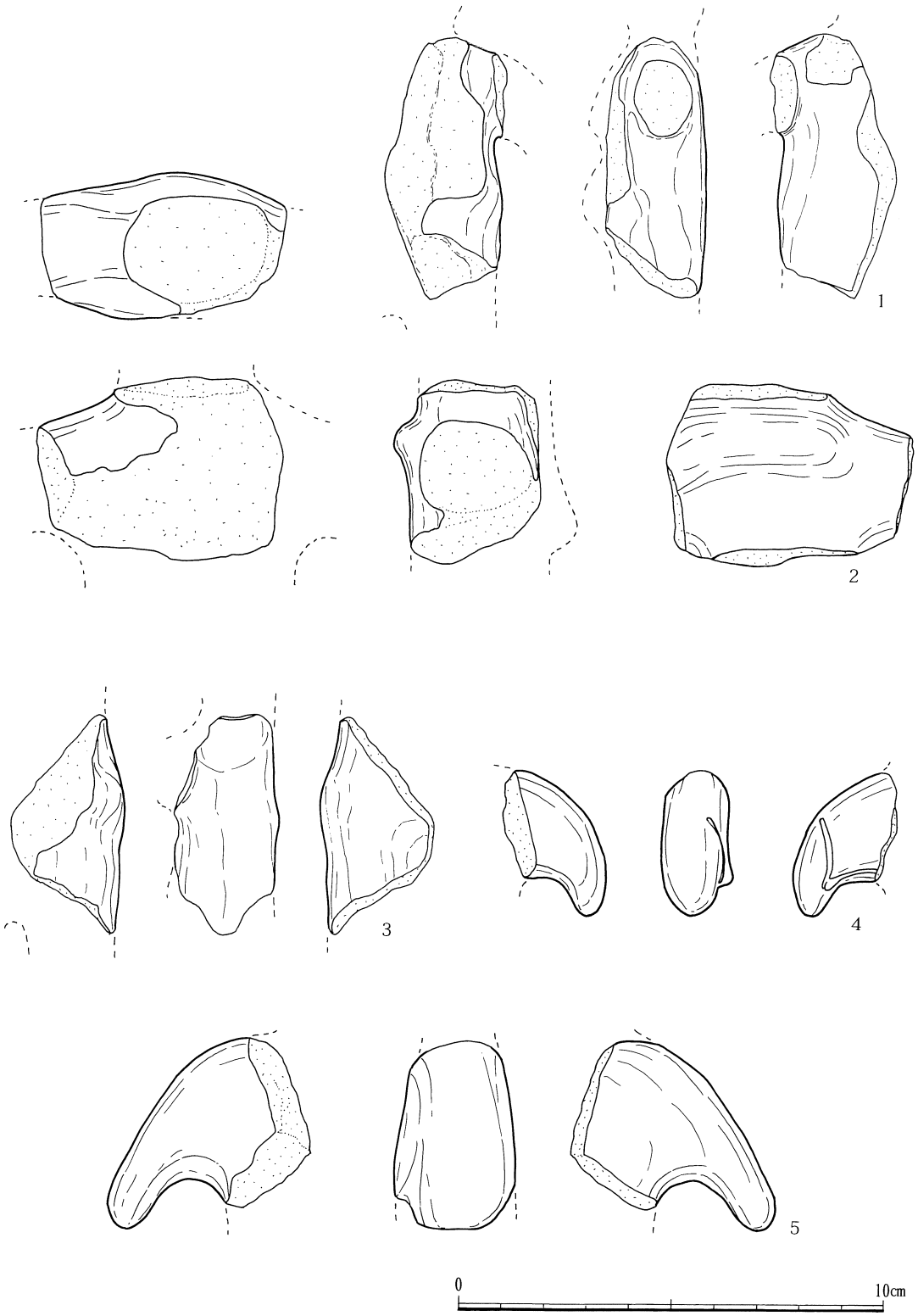


第118図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土土偶分布図

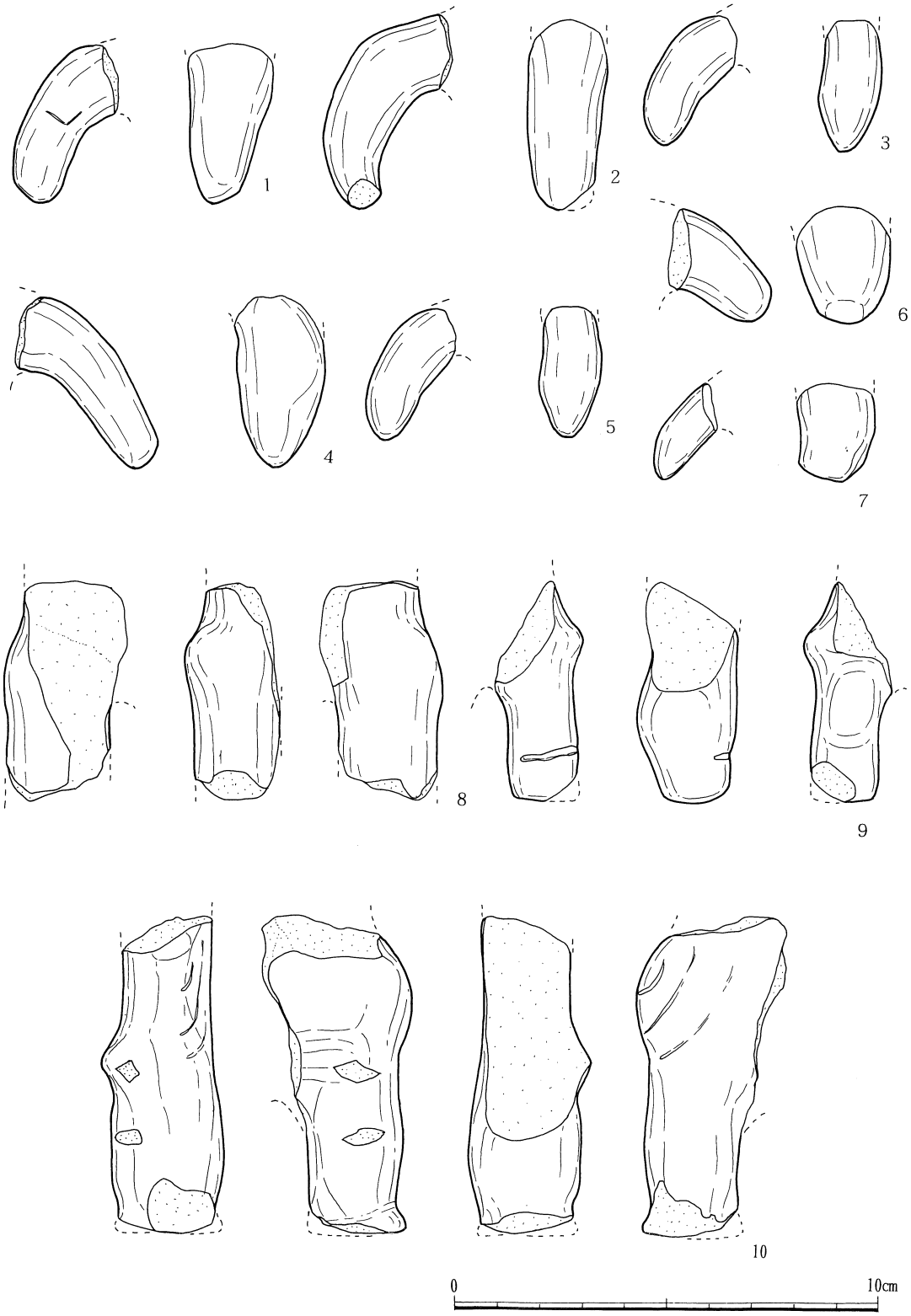


第119図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土土偶実測図(1)

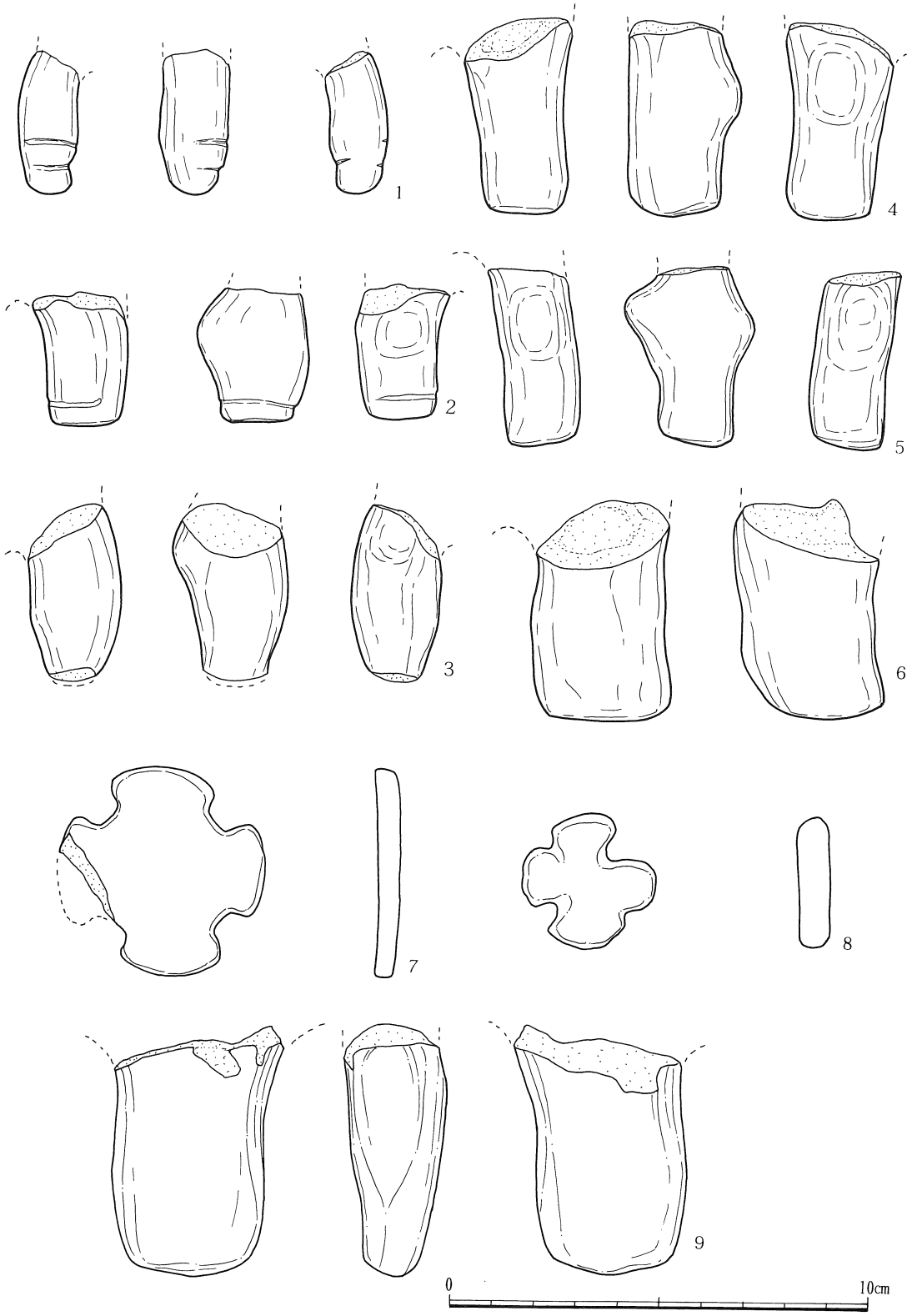
第120図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土土偶実測図(2)



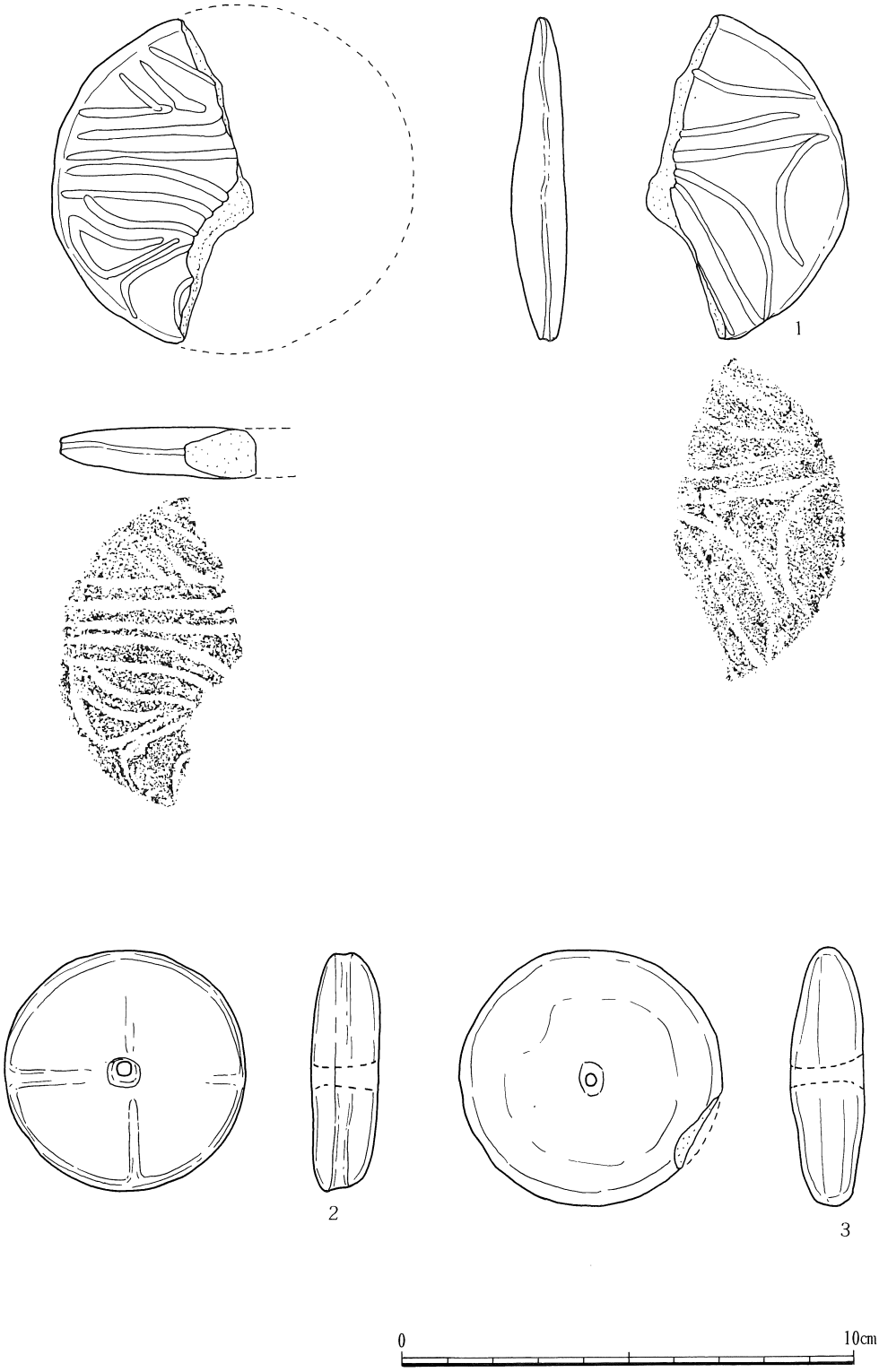
第121図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土土偶実測図(3)



第122図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土土偶実測図(4)



第123図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土土偶・土製品実測図



第124図　尾畑遺跡北Ⅱ区包含層出土土製品実測図

北Ⅱ区西部包含層出土土器

北Ⅱ区の西隅で縄文土器が集中的に出土する部分を検出した。第125～127図がその代表的な資料である。第125図１～８は口縁部を肥厚させ断面が三角形に仕上げ、その外面と胴部の上位に文様帯を設けている。

１は口縁部の上端の一部が突起している。口縁部の傾斜はやや内湾気味で、浅鉢形土器の可能性がある。内外面横ヘラ研磨で色調は茶褐色である。２は外面に３条の沈線がめぐり、３・４は細かい縄文のあと細い沈線を巡らせる磨消縄文を旋文する。２～４ともに色調は茶褐色である。５・６は摩滅が著しく器面調整はわからないが口縁部には２条の沈線が巡る。器形は、５は平坦口縁であるが、６は波状口縁の可能性が強い。この２点の色調は茶褐色である。１～６の胎土には角閃石・斜長石を含むが、３には金色の雲母も認められる。

７は、波状口縁の破片である。口縁部の沈線は２条で、それは細かい縄文施文後に加えられヘラミガキで仕上げている。他の部分の器面は横方向のヘラミガキである。色調は茶褐色で、胎土の角閃石・斜長石を含む。８は口径が55cmの精製の深鉢形土器である。器形は先端が内側に屈曲する口縁部が平坦で、頸部屈曲部の内側には稜が生じている。文様は屈曲した口縁部の外面に２条の沈線が巡り、胴部の文様は、縄文施文のあとに沈線を加え、他の部位と同様のヘラミガキで仕上げている。胴部の文様は、平行沈線を基本としながら、屈曲部には斜めの連続刻目、沈線間には蛇行沈線を加えている。色調は内外面とも明褐色で、胎土には角閃石と斜長石が認められる。

９～11は口縁部の形態や頸部の屈曲状況から、１～８に伴う無文土器と考えられる。９は外傾する口縁部の先端を内側に屈曲し、平坦口縁を形成している。10は外傾する口縁部の先端を肥厚させ、断面三角形の平坦口縁を形成している。また、11の頸部の資料は、屈曲する内側に稜が生じている。これらの３点は内外面ともにヘラミガキで仕上げられており、色調は茶褐色で、胎土に角閃石・斜長石を含む。

以上の第２図１～11は文様や形態の特徴などから、縄文後期中葉の西平式土器の一群と考える。

第126・127図は同じ西部包含層からの出土であるが、第125図とは時期的に異なる土器群である。器種は明確に浅鉢形土器に別れる。

第126図１～13は浅鉢形土器である。１は外傾する口縁部の端部に粘土を廻し、外側に屈曲する口縁部を形成している。その外面の屈曲部には沈線が１条巡る。２も同様な形態の口縁部であるが、緩い波状口縁になる。外面に巡る沈線は、外面の屈曲部のものは１周廻り、それ以外にも波状口縁部にも部分的に沈線が施文されている。３は口径24.4cmの小型の浅鉢形土器である。口縁部は小さく屈曲し、端部は尖って立つ。外面の沈線は認められない。これらの３点の器面は横方向のナデやヘラミガキで仕上げられており、色調は１・２が明茶色で、３は黒褐

色である。また、胎土には角閃石・斜長石を含む。

第126図４～13と第127図は深鉢形土器である。４は外傾する口縁部の内側に粘土を貼りつけ、外面に段が生じる形態を作り出している。５は外傾する口縁部の先端に粘土を廻らせ、屈曲した形態を作り出し、波状口縁になる。外面には２条の凹線が廻る。６も同様の作り方であるが、屈曲部の内面には段が生じ、外面には沈線が２条廻っている。器面調整は、３点とも口縁端部は横ナデであるが、５・６の内面はヘラミガキ、６の外面は条痕が認められる。色調はいずれも茶褐色で、胎土には角閃石・斜長石を含み、６には角閃石が多く認められる。７は胴部最大径が28.2cmの小型の深鉢形土器である。「く」の字に屈曲する胴部外面には沈線が２条巡る。器面調整は外面が条痕のあと横方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキとナデで仕上げている。色調は茶褐色で、胎土には角閃石と斜長石を含む。

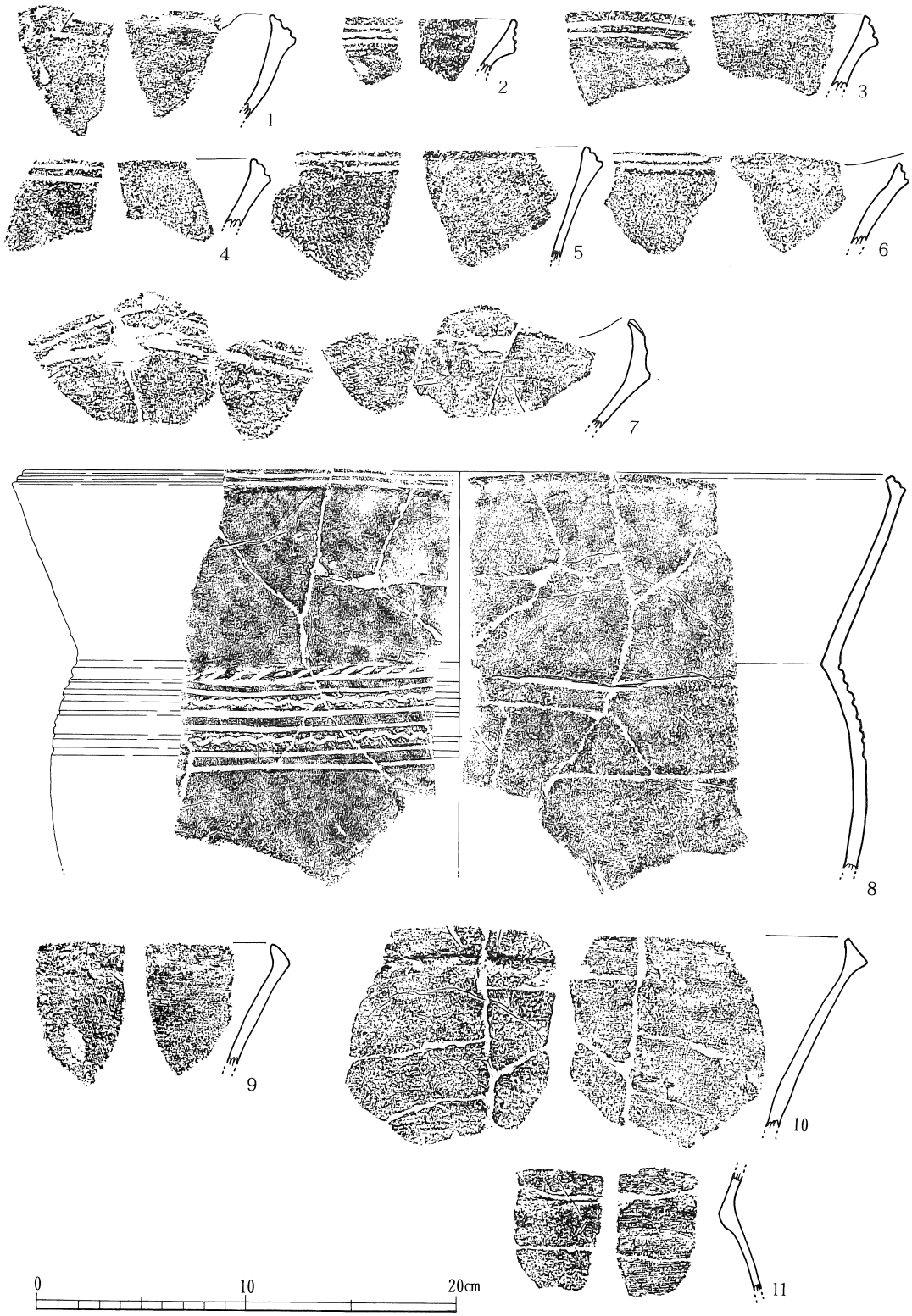
以上の４点は、口縁部が屈曲するタイプの深鉢形土器であるが、以下述べる８～13は口縁部が緩く外反するタイプの深鉢形土器である。８は口縁部の先端を尖らせ、外面に幅の狭い平面を作り出している。９は頸部から直線的に外傾する口縁部で、器壁が薄い。10・11は外傾する口縁部の先端がやや外反する。器面調整は、８が内外面とも横方向のナデ仕上げであるが、９～11はナデのあと横方向のヘラミガキを内外面に行っている。色調は、いずれも茶褐色で、胎土に角閃石・斜長石を含む。

12は口径24.2cmで、口縁部は直立気味である。器面は摩滅しており調整の観察はできない。茶褐色で角閃石・斜長石を含む。13は、外反する口縁部で口径は24cm、胴部は「く」の字状に屈曲する。器面は内面はナデであるが、外面は巻貝条痕のあとナデ仕上げである。色調は茶褐色で胎土に角閃石と斜長石を含む。

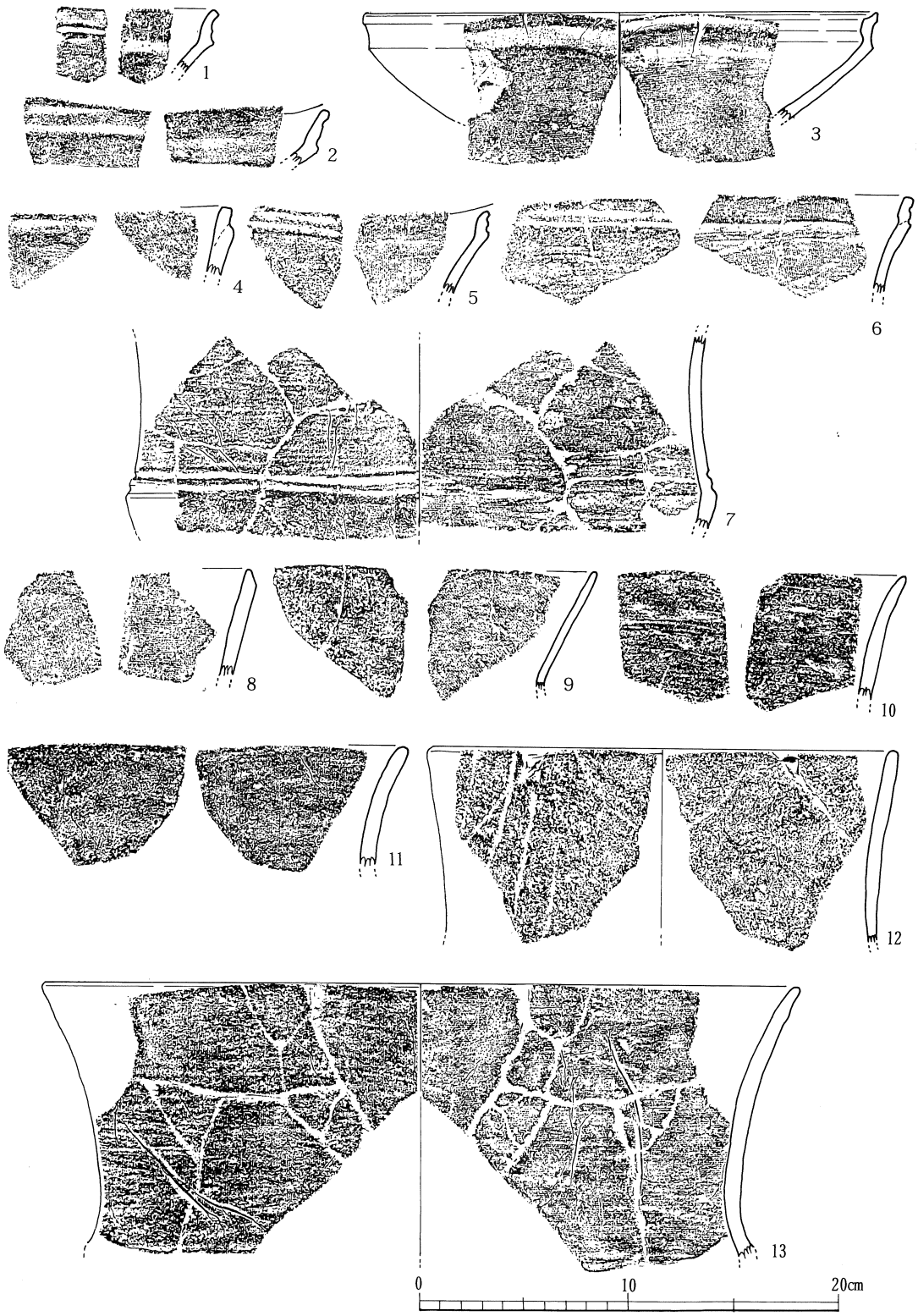
第127図は胴部と底部の資料である。１の胴部の屈曲部の径は、41cmあり「く」の字状に屈曲する。器面は摩滅しているが、外面は口縁部近くは横ナデ、屈曲部下位はヘラミガキされ、内面はナデ仕上げである。色調は茶褐色で、胎土には角閃石・斜長石が含まれる。２も摩滅しているが、器面調整は外面が条痕のあと横ナデ、内面は横ナデが認められる。色調は黄褐色で、胎土に角閃石と斜長石を含む。

３～７の底部のうち、４以外は共通する形態である。すなわち、凸レンズ状の上底になり、接地部が小さい。３は横方向のヘラミガキ、５は巻貝条痕のあとナデ、６・７は横ナデであるが、内面はいずれも横方向のヘラミガキである。色調は３・５・７が茶褐色、８が赤褐色で、胎土に角閃石・斜長石を含む。４は分厚い底部である。器面はナデ仕上げで、器形は浅鉢や深鉢とは異なるものが考えられる。黄褐色で胎土に角閃石・斜長石を含む。

以上、126・127図の資料は、浅鉢形土器の形態や深鉢形土器の口縁部形態から縄文時代後期後半から晩期初頭に属するものと考えられる。浅鉢形土器では１・２は後期後半の三万田式土器に属すると思われるが、３は晩期の可能性が強い。また深鉢形土器では、５～７は口縁部の

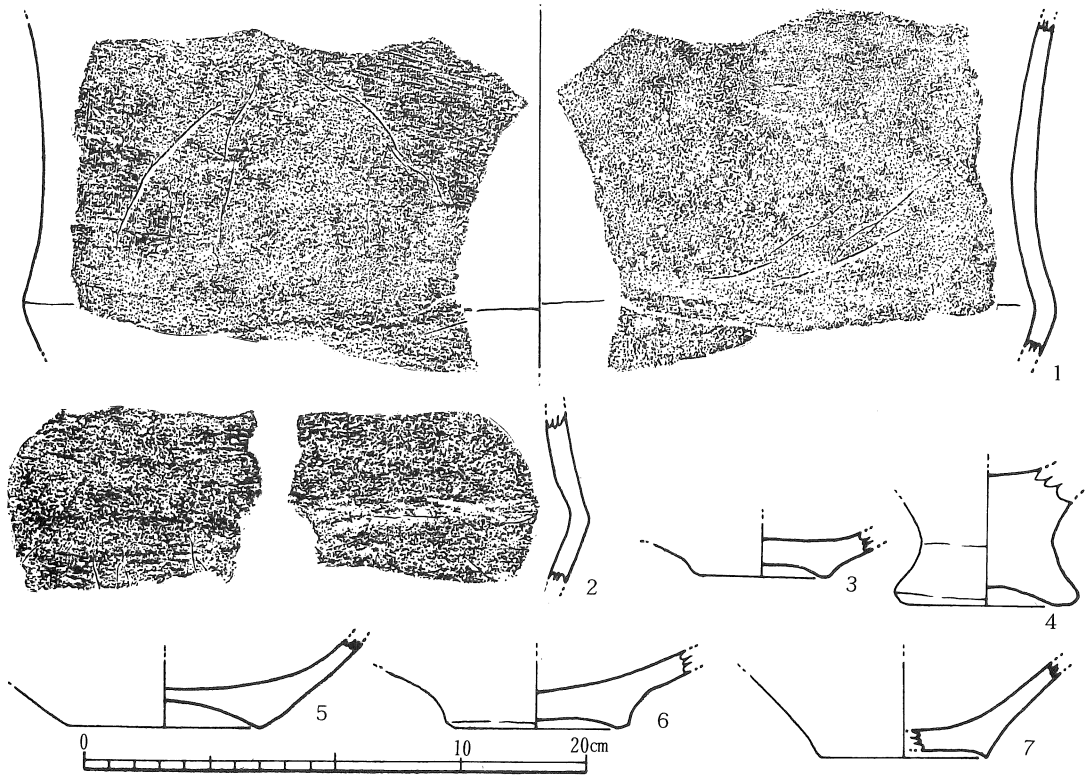


第125図　北Ⅱ区西部包含層出土縄文土器実測図(1)



第126図　北Ⅱ区西部包含層出土縄文土器実測図(2)

形態や胴部の文様から浅鉢形土器の１・２と同様、三万田式土器の新式に属すると考えられる。さらに、第126図８～13と第127図の１・２はこうした、三万田式土器に伴う可能性も強いが、類似する形態の土器は晩期にもあり、一部はこの時期まで下ることも考えられる。底部の４以外は、西平式土器から晩期初頭にかけて見られる特徴を持っており、いずれの土器型式に属するかは判断できない。



第127図　北Ⅱ区西部包含層出土縄文土器実測図(3)

北Ⅱ区出土石器

北Ⅱ区からは大量の縄文時代の土器石器が出土しているが、これらは遺物が伴うものではなく、全て包含層中からである。この包含層の時期については、前述の出土土器から縄文時代後期前葉から晩期にかかる時期が想定されている。このことは石器の組成あるいは形態から見ても大きく異なることはないが、石鏃の一部あるいは尖頭状石器が比較的多く出土していること、さらに剥片を素材とした非常に華奢な作りの石錐から見て、縄文時代早期〜前期の存在も考えられたが、同時期の土器の出土は確認されていない。

石器の種類は、石鏃・尖頭状石器・石錐・掻器・石匙・磨製石斧・円形石器・十字形石器・石刀・砥石・磨石・敲石・凹石・石錘のほか、姫島産黒曜石の剥片や石核など多種多様である。この石器組成や姫島黒曜石を素材とする剥片石器類や石核などからは、安定した大規模な石器製作あるいは消費集団の存在を想定させる。

これらの石器出土分布状況は、第128図〜第131図の各器種別出土分布図で示す通り、各器種ともD・E・F－Ⅳ・V・Ⅵグリッドを中心とした範囲に集中しており、この傾向は土器も同様である。従ってこの分布状況からは意図的な背景を見出すことはできないが、当時の一括廃棄あるいは後世の開発時に廃棄された可能性もある。

石器の素材となる石材を見ると、石鏃を始めとする剥片石器には姫島産黒曜石が9割以上使用されており、僅かにサヌカイト（金山産？）と産地不明の漆黒色黒曜石が見られる。また、扁平打製石器類を中心とした礫石器は、結晶片岩・輝石安山岩・ヒン岩と言ったような板状に剥離し、加工しやすい石材が中心に選材されている。これらは主として量産を目的としたものであり、また、破損しやすい状況があったことも考えられる。

これらの石材は近接した院内町周辺で産出される石材であり、容易に入手できたと考えられ、安心院町に所在する飯田二反田遺跡（縄文時代後期）でも同様な石器石材が頻繁に使用されている。

打製石鏃　（第134図〜第136図）

総数で150点以上が出土しているが、表採遺物を除くと包含層中からは107点の出土である。第132図の出土石鏃分類図に示す通り、石鏃はその形態からA〜Kの11種に分類できる。大きくは基部の抉りの深い鍬形から長二等辺三角形・五角形状の駒形鏃であるが、C・D類とした抉りのやや深い長二等辺三角形状の石鏃が主体をしめる。全体的に片面に主要剥離面を残す剥片鏃も多いことも特徴としてあげられる。

尖頭状石器　（第137図〜第138図）

県内では当石器は縄文時代早期から前期遺跡で出土することが多く、使用される石材は、遺跡の所在する場所で異なるものの、その大部分は黒曜石かチャート製である。

	Q	P	O	N	M	L	K	J	I	H	G	F	E	D	C	B	A	
																		Ⅲ
											3		24	102				Ⅳ
												69						Ⅴ
										26	11							Ⅵ
									4		3							

第128図　姫島産黒曜石石核出土分布図

	Q	P	O	N	M	L	K	J	I	H	G	F	E	D	C	B	A	
																		Ⅲ
													3		1	3	1	Ⅳ
										1	1	5	1					Ⅴ
																		Ⅵ

第129図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土磨製石斧出土分布状況

	Q	P	O	N	M	L	K	J	I	H	G	F	E	D	C	B	A	
																		Ⅲ
					1						9	7			8	1		Ⅳ
									1	1	20	1						Ⅴ
											3	9						Ⅵ

第130図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土扁平打製石斧出土分布状況

	Q	P	O	N	M	L	K	J	I	H	G	F	E	D	C	B	A	
																		Ⅲ
												5	9	1	4			Ⅳ
										1	1	5	6					Ⅴ
																		Ⅵ

第131図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土円形石器出土分布状況

しかし、この石器は縄文時代晩期まで残っていくことが黒曜石の産地である姫島村に所在する**姫島用作遺跡**でも確認されている。

ただし、チャート製の尖頭状石器は前期までで消滅し、以後は大部分姫島黒曜石が主体を占めるようになる。

形態的には時期による差異は特に認められないが、縄文時代早期遺跡から出土するチャート製にやや大型品が見られることもある。

石鏃に比べ、非常に厚い断面を有する特徴を持つ。

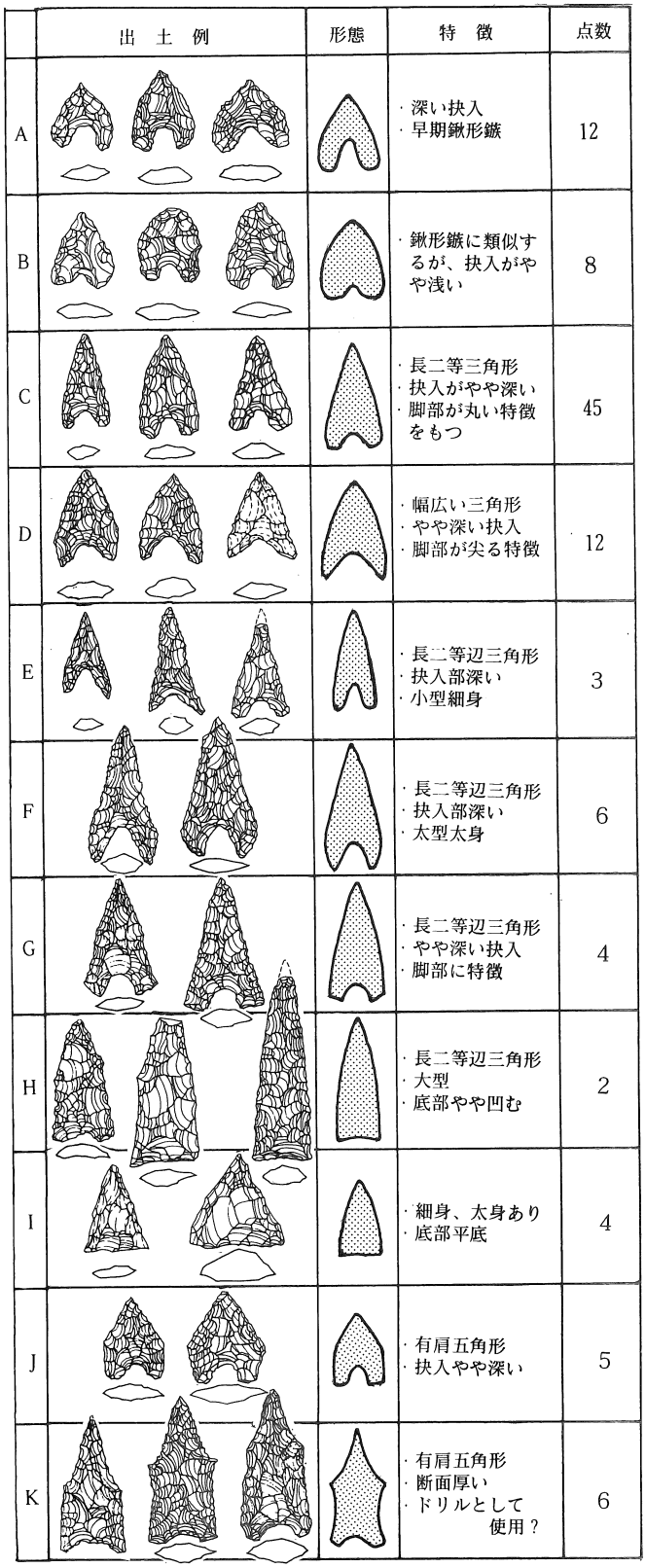
石錐（第139図197～202）

縦長の剥片の末端部に錐を作り出し、後は若干二次加工により整形しただけのものが多く、このため錐部は非常に脆弱なものとなっている。これに類似する石錐は縄文時代前期の**羽田遺跡**（国東町所在）でも確認されている。

異形石器（第139図203～209）

長さ5㎝程度の細長い形状に加工された石器で、県内の出土例は数点あるがその詳細は不明である。

断面は菱形を呈するが、形態的に先端部が鋭利に尖る物ではなく柳葉形鏃や石錐とは明らかに異なる。当遺跡からは7点が出土しているが、その形態は若干異なり、206を最終形態とすれば207、208等は製作過程にある未製品とも考



第132図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土石鏃分類図

えられる。形態や大きさから見ても単独で使用されたとは考えにくく、組み合わせて初めて機能した可能性もある。

掻器（第139図・第140図）

剥片の縁辺部を二次加工により鋭利な刃部を作出したもので、サヌカイト製が多い。

石匙（第140図216、217）

217はサヌカイト製縦匙。216は加工の状況や形態から、縦匙あるいは無柄石匙の可能性もある。サヌカイト製。

剥片・石核（第141図～第143図）

遺跡から出土した剥片や石核の大部分が姫島黒曜石であることは前述のとおりであり、その分布状態は第128図に示すように他の石器と特に変わる事はない。全体的には剥片は小片が多く、このことは第2表の石核重量分布にも見られるように、石核の9割が50g以下に集中し、しかも20g以下が大半である事とも関連している。県内ではkg単位の大型の石核が遺跡に搬入されるのは縄文時代早期・前期頃までで、以降は小さく加工された石核や剥片が多くなるといった傾向があることはかなり明確になっており、その要因として、需要の低下、産地からの距離、社会的変化等が考えられている。具体的には原産地である姫島からの原石持ち出しの規制が強化されるようになったといったことが要因の一つとして考えられ、これには専業集団の出現とも大きく関わると思われる。

磨製石斧（第144図～第146図）

磨製石斧は棒状斧を始めとし、整形加工痕あるいは敲打による調整痕が残る荒い作りのものが多く、やや厚めの扁平打製石斧の表裏面を研磨した例も見られる。

欠損品を含めて出土総数277点。石材は結晶片岩・蛇紋岩といった比較的柔らかく粘質の強い石材が使用される。また、243・244は石ノミである。

出土した277点の残存状況については、表3で示すようにA～Hの8種といずれにも該当しないもの

重　量(g)	個数
0～ 10	147
11～ 20	70
21～ 30	18
31～ 40	15
41～ 50	11
51～ 60	4
61～ 70	5
71～ 80	3
81～ 90	1
91～100	1
104	1
105	1
143	1
152	1
190	1
総　数	280

表2　石核重量分布

表3　磨製石斧

	残存部	数	%
A		71	26
B		24	9
C		13	5
D		18	6
E		32	11
F		35	13
G		8	3
H		34	12

表4　扁平打製石斧

	残存部	数	%
A		225	21
B		110	10
C		47	4
D		47	4
E		32	11
F		160	15
G		7	1
H		132	12

の９種に別けた。これは後述の扁平打製石斧とも共通する分類であり、各々の特徴は、**Ａ．完形品、Ｂ．ほぼ中間で折れた下半部残存、Ｃ．ほぼ中間で折れた上半部残存、Ｄ．刃部のみ欠損、Ｅ．刃部のみ残存、Ｆ．基部のみ欠損、Ｇ．基部のみ残存、Ｈ．胴部のみ残存**である。これにこの分類に該当しないものが入る。

これによると、完形品は全体の26％にあたる71点のみで、残りの74％にあたる206点が部分的に欠損したものであり、これが使用により欠損したものか、あるいは製作中に欠損したものかは不明であるが、出土数量の多さや完形品と欠損品が混在することを考えると、製作中に欠損、廃棄された可能性が強い。

扁平打製石器（第147図～第156図、第169図）

扁平打製石器の中には、扁平打製石斧・円形石器・十字形石器がある。各器種ともこれまで県内で調査された遺跡から見ると圧倒的な出土量であると言える。

扁平打製石斧（第147図～第154図）

完形品と欠損品の総数1,072点と県内では最多出土量である。完形品は全体の21％にあたる225点で、残りの79％が欠損品である。この比率は磨製石斧と類似する。

石材は圧倒的に結晶片岩が多く、安山岩、ヒン岩、溶結凝灰岩が若干混入する。

完形品から扁平打製石斧の形態を分類すると、第133図のとおり、大きくＡ～Ｐの16種に分類できる。大きくは短冊型と撥型であるが、身幅や大きさあるいは抉入部を有するもの等により細分することが可能であり、用途に応じた使い分けが行われたことを示唆している。

円形石器（第155図～第157図）

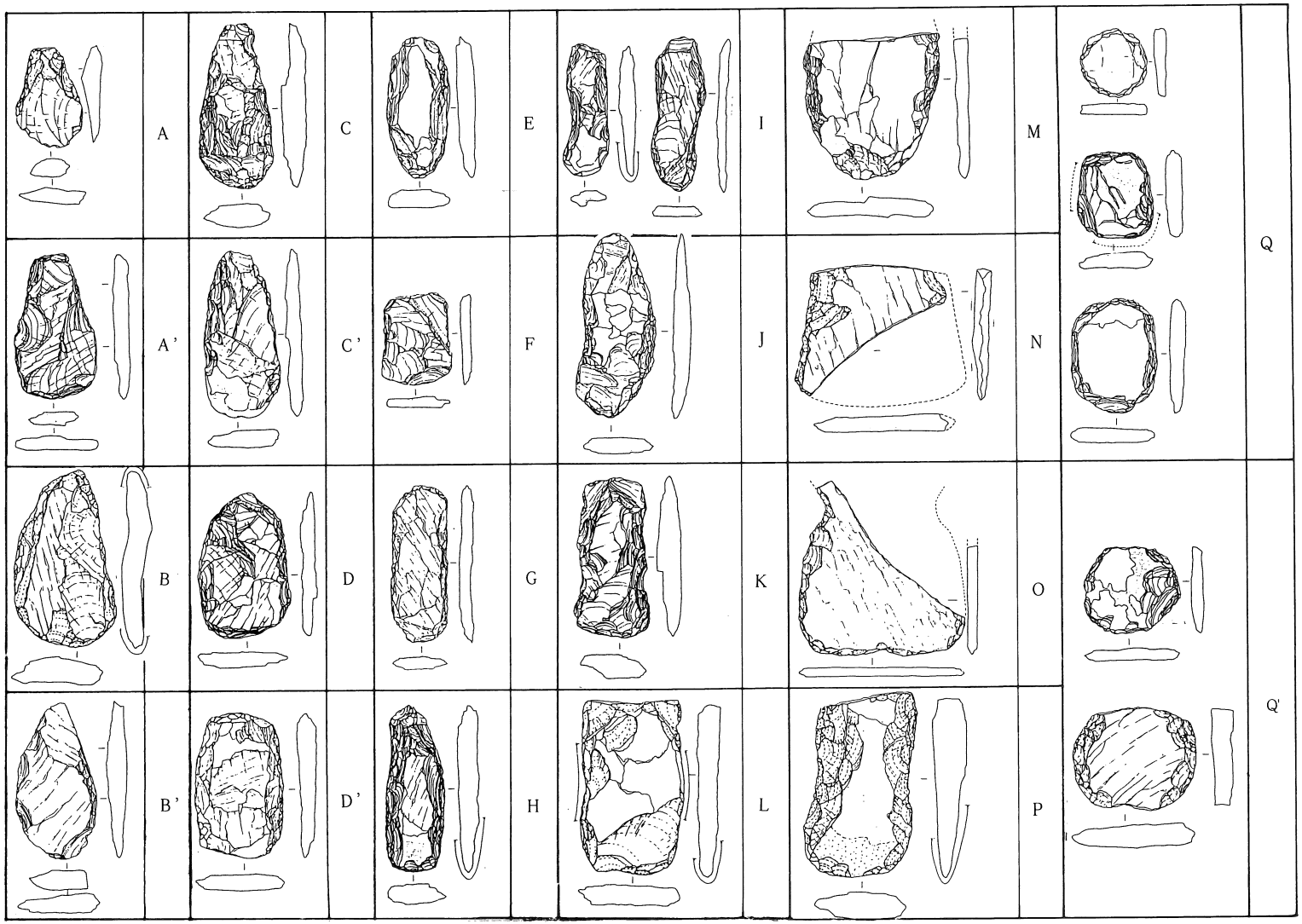
完形品33点、欠損品26点が出土している。使用された石材は扁平打製石斧と同様に結晶片岩を主体とし、ヒン岩等が若干入る。

形態は円形を基調としているが、楕円形のものやさらに細かく見ると、一部分が研磨されたものや円周の一部分は未加工のままで意図的に残されたものもある。この未加工の部分を有するものについては、手で直接握って使用するためか、この部分に着柄を考えたものであろう。

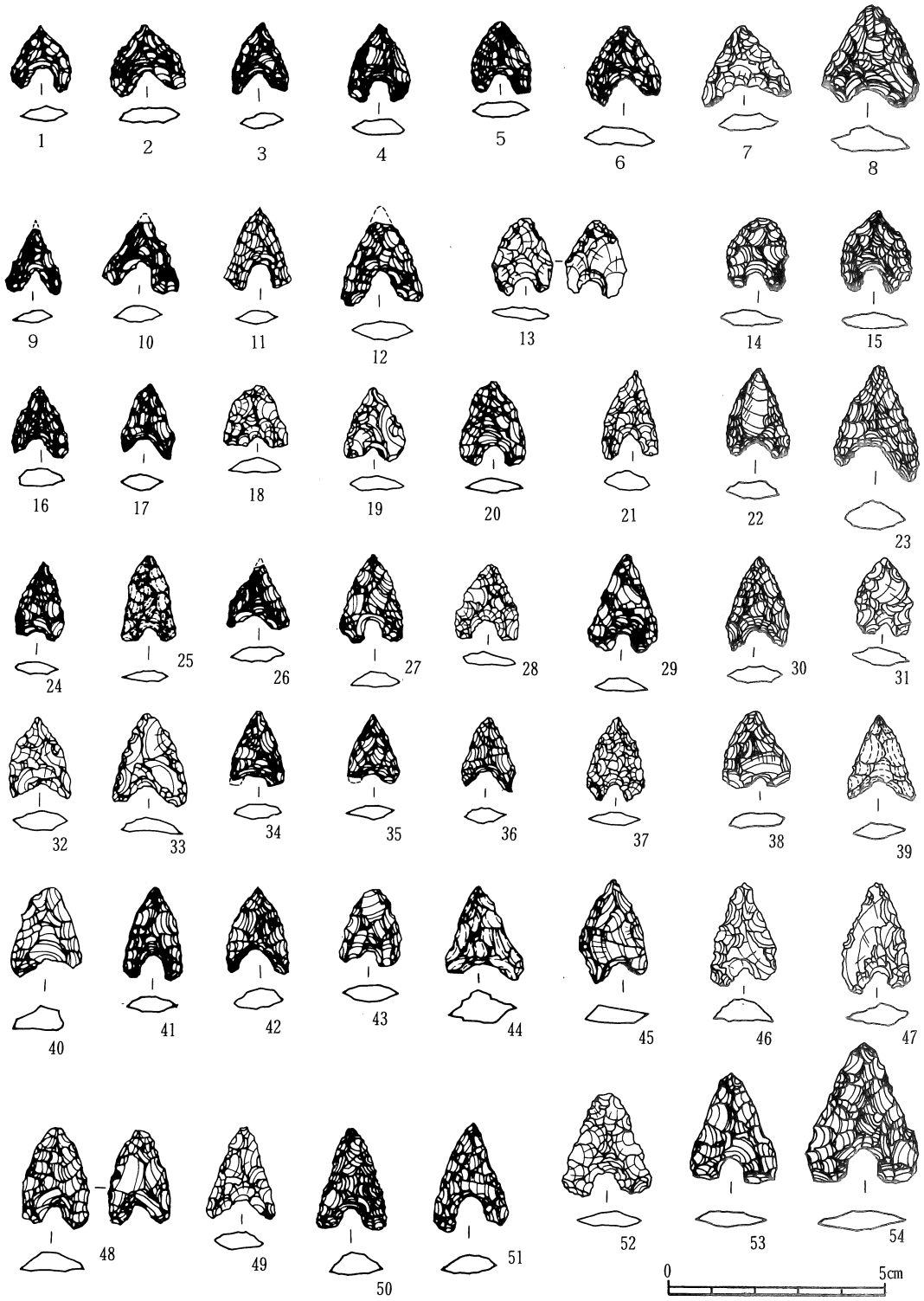
いずれにせよ円形石器はこれまでの調査遺跡で数点のみしか出土しておらず、何か特別の意味を持つものとして考えられていたが、59点といった量的なことや着柄が考えられることから、扁平打製石斧の範疇でとらえる道具として把握できる可能性がある。

第157図383は自然面が残る安山岩の礫を加工して円形に仕上げたものであるが、他に比べると非常に大きく、その表面あるいは表裏面が摩滅している。このことから見ると、この２点は石皿として使用されたものと考えられる。

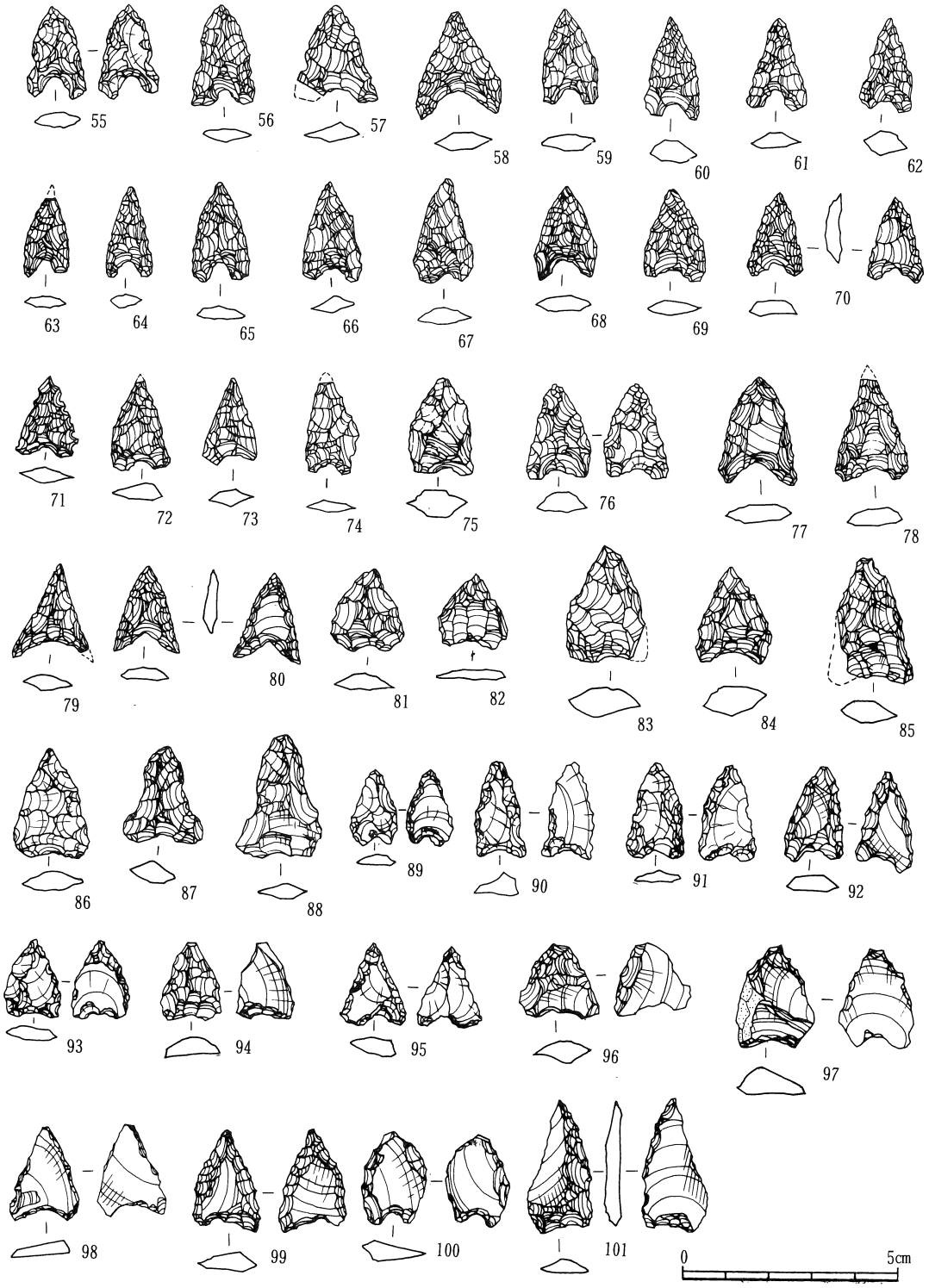
385は円周の一部分を除き、細かい整形加工に仕上げられた大型品である。刃部と思われる部分は使用により摩滅している。



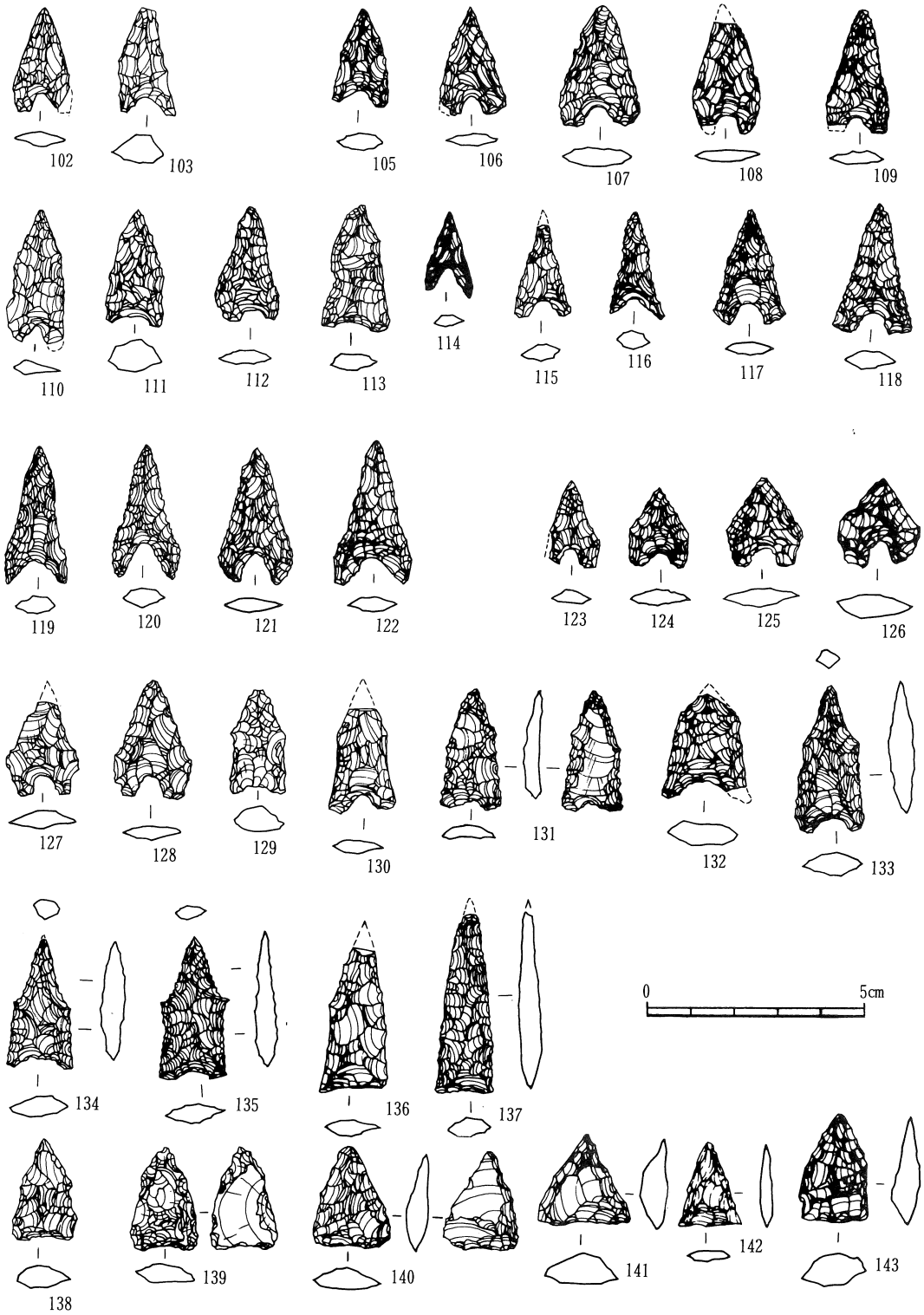
第133図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土扁平打製石器分類図



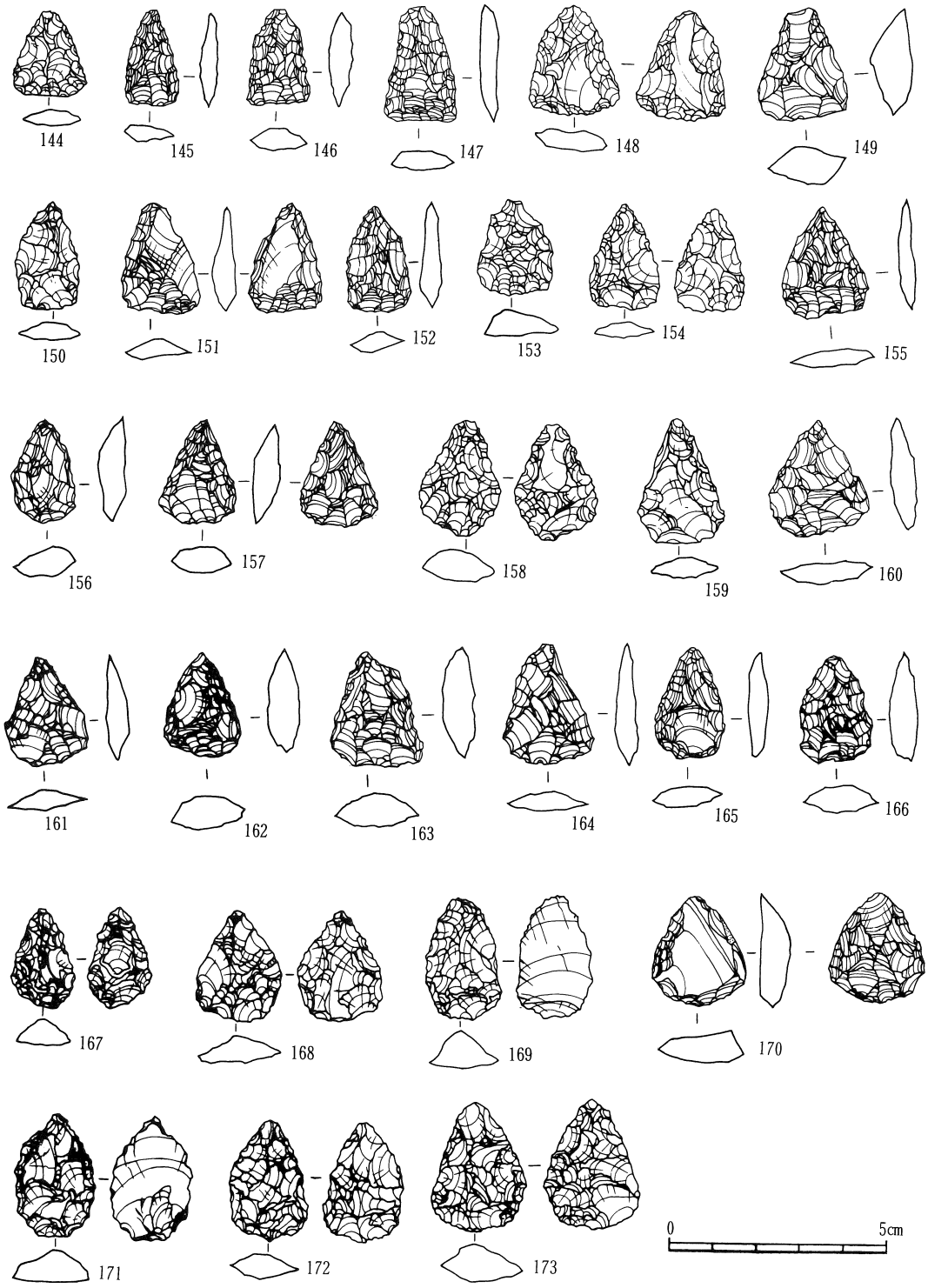
第134図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土石鏃（その１）



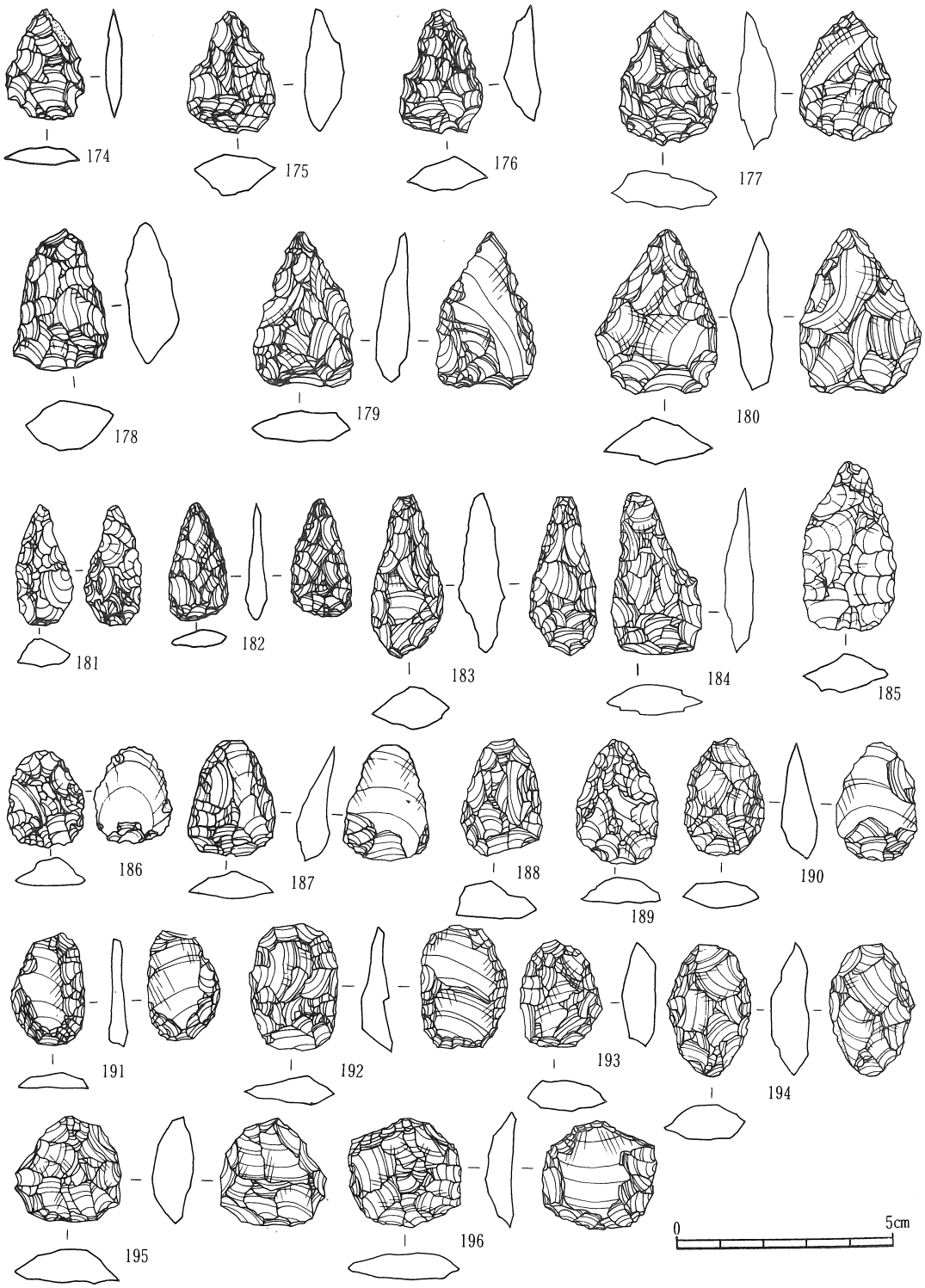
第135図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土石鏃（その２）



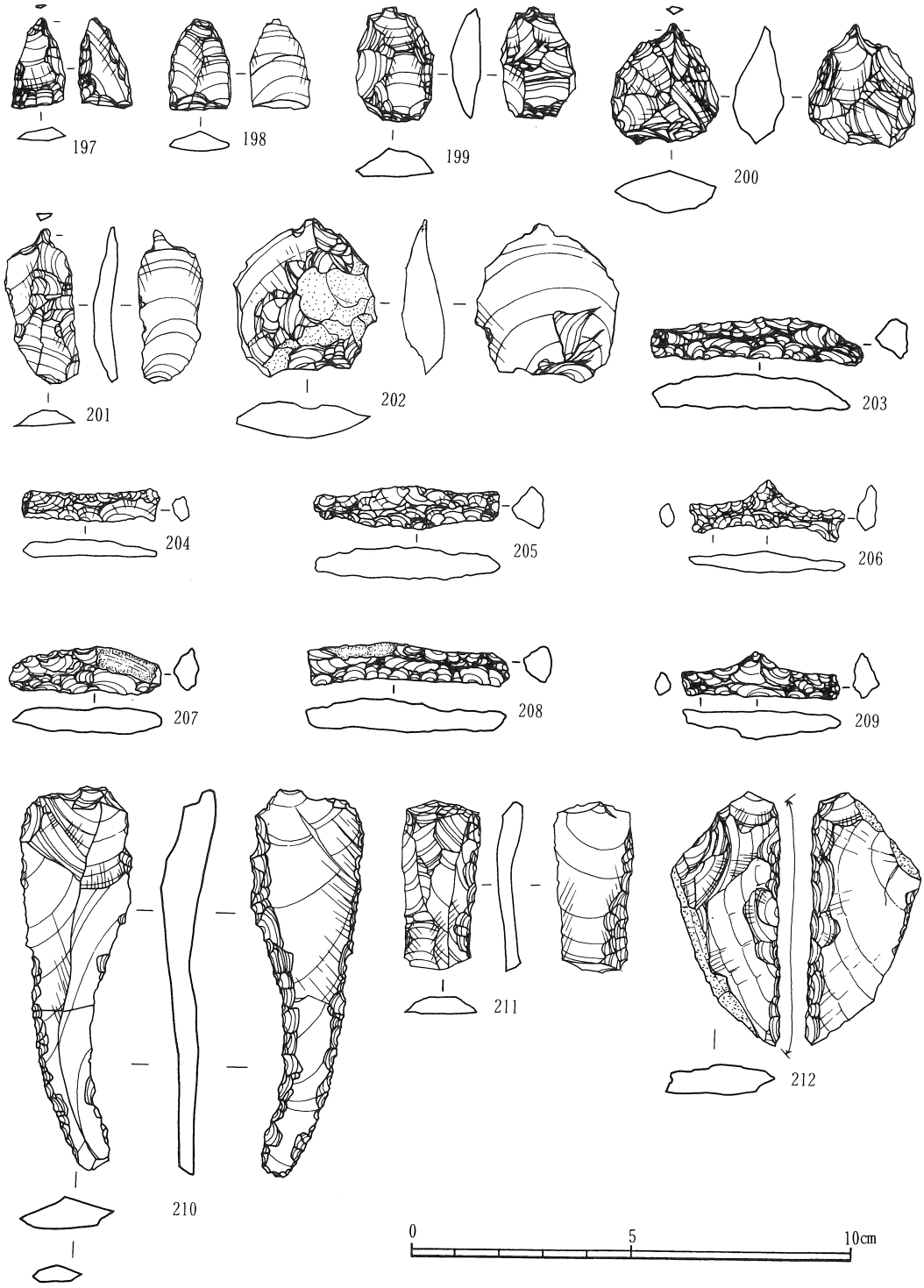
第136図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土石鏃（その３）



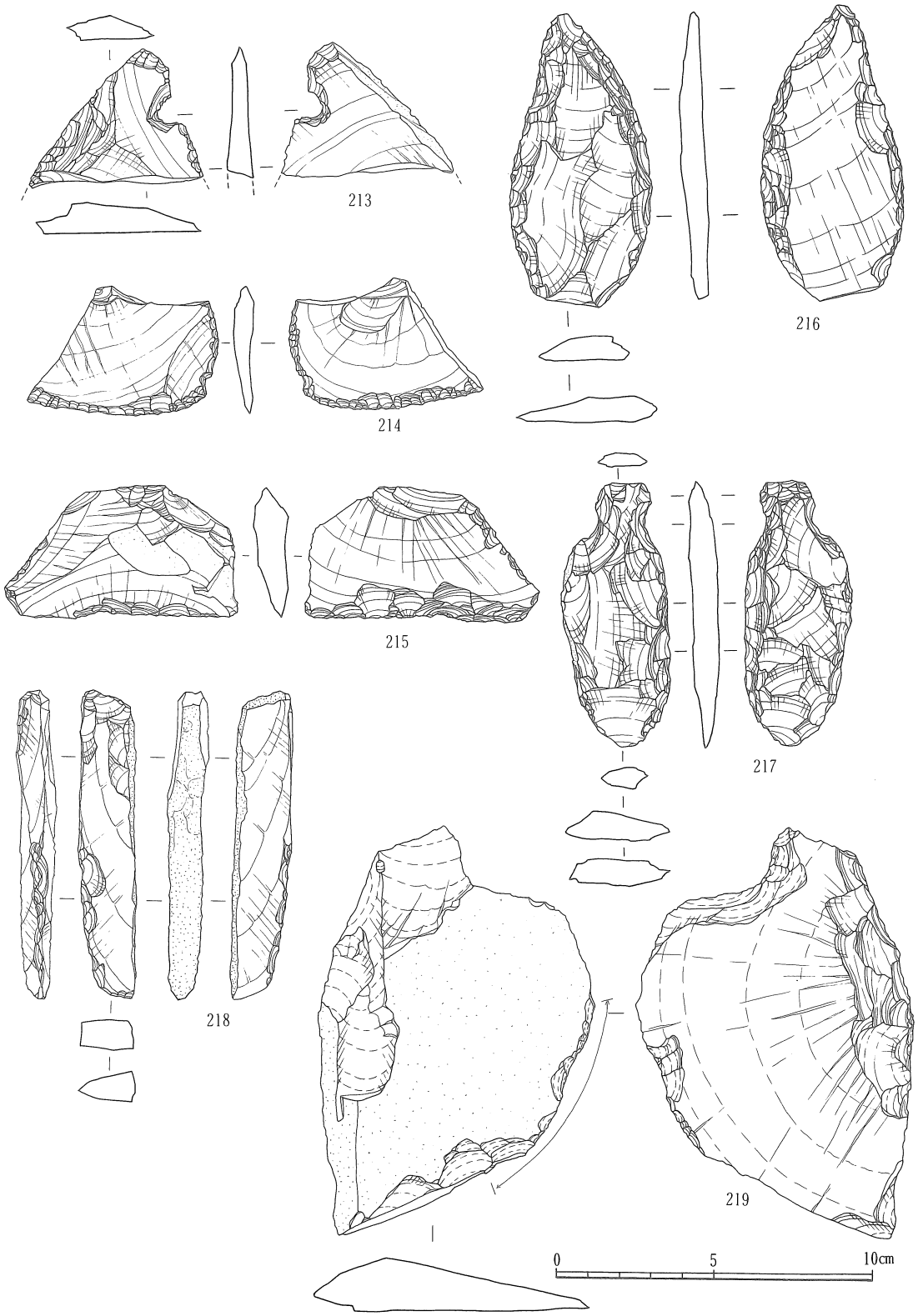
第137図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土尖頭状石器（その１）



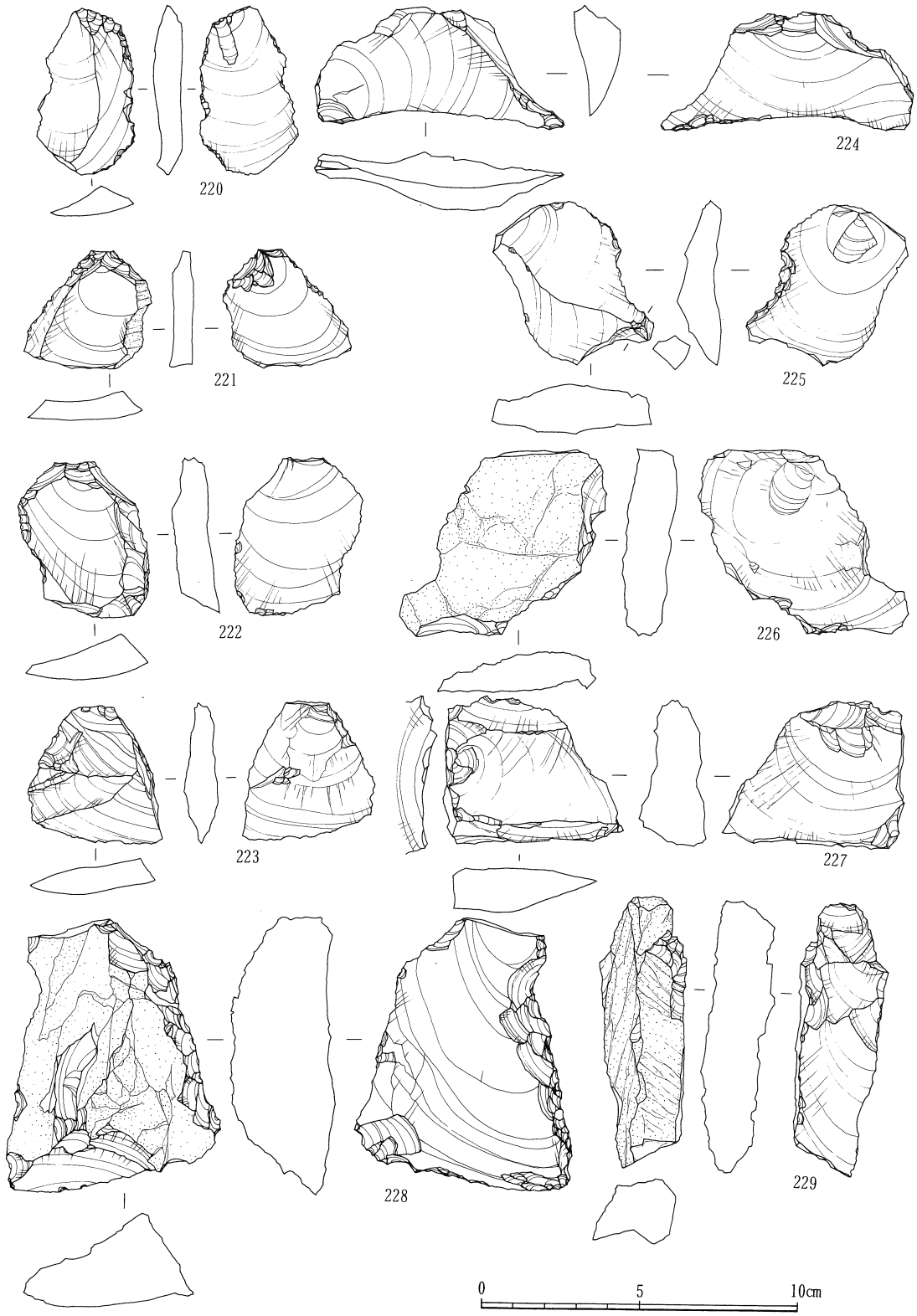
第138図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土尖頭状石器（その２）



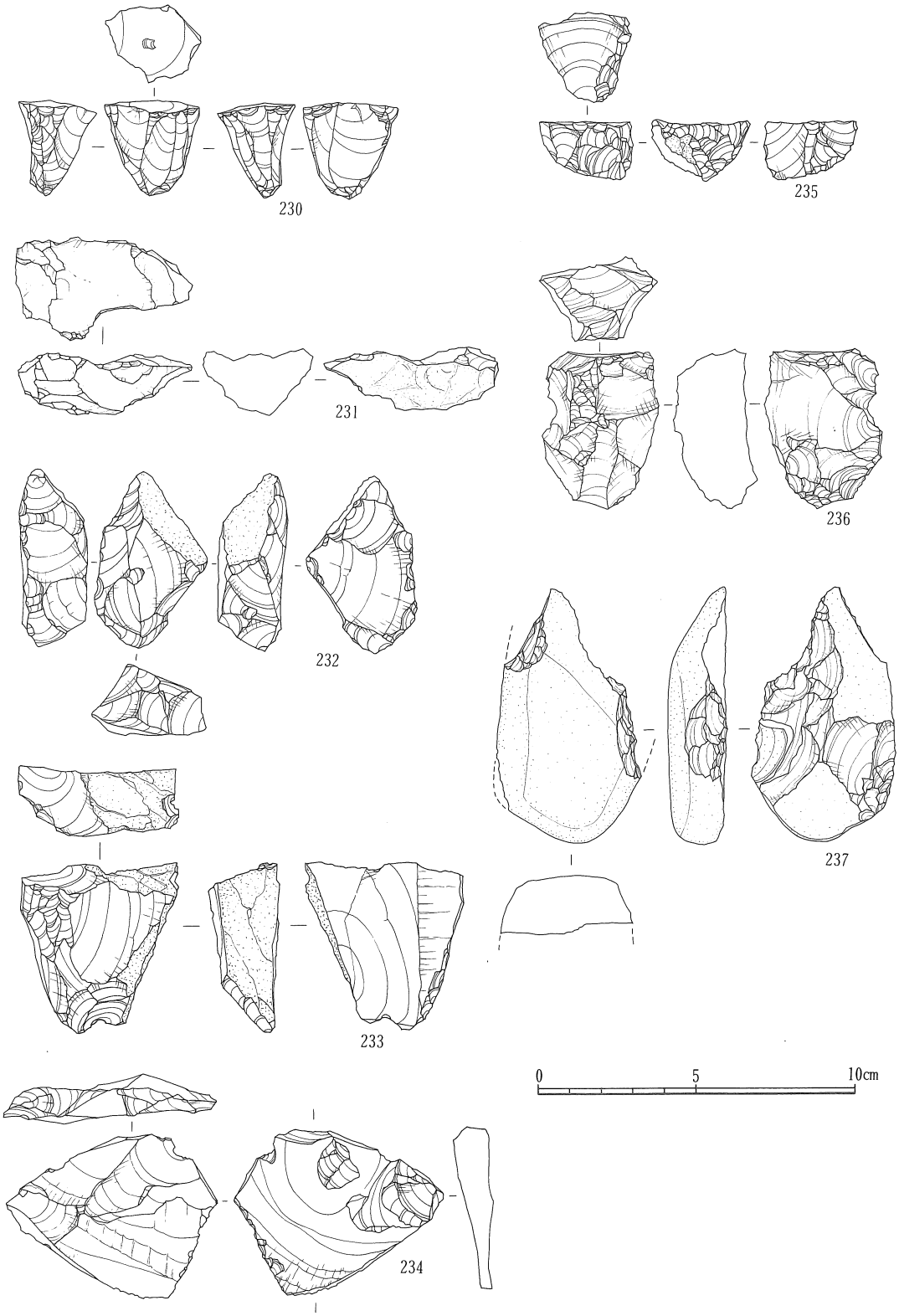
第139図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土石錐・異形石器・掻器等



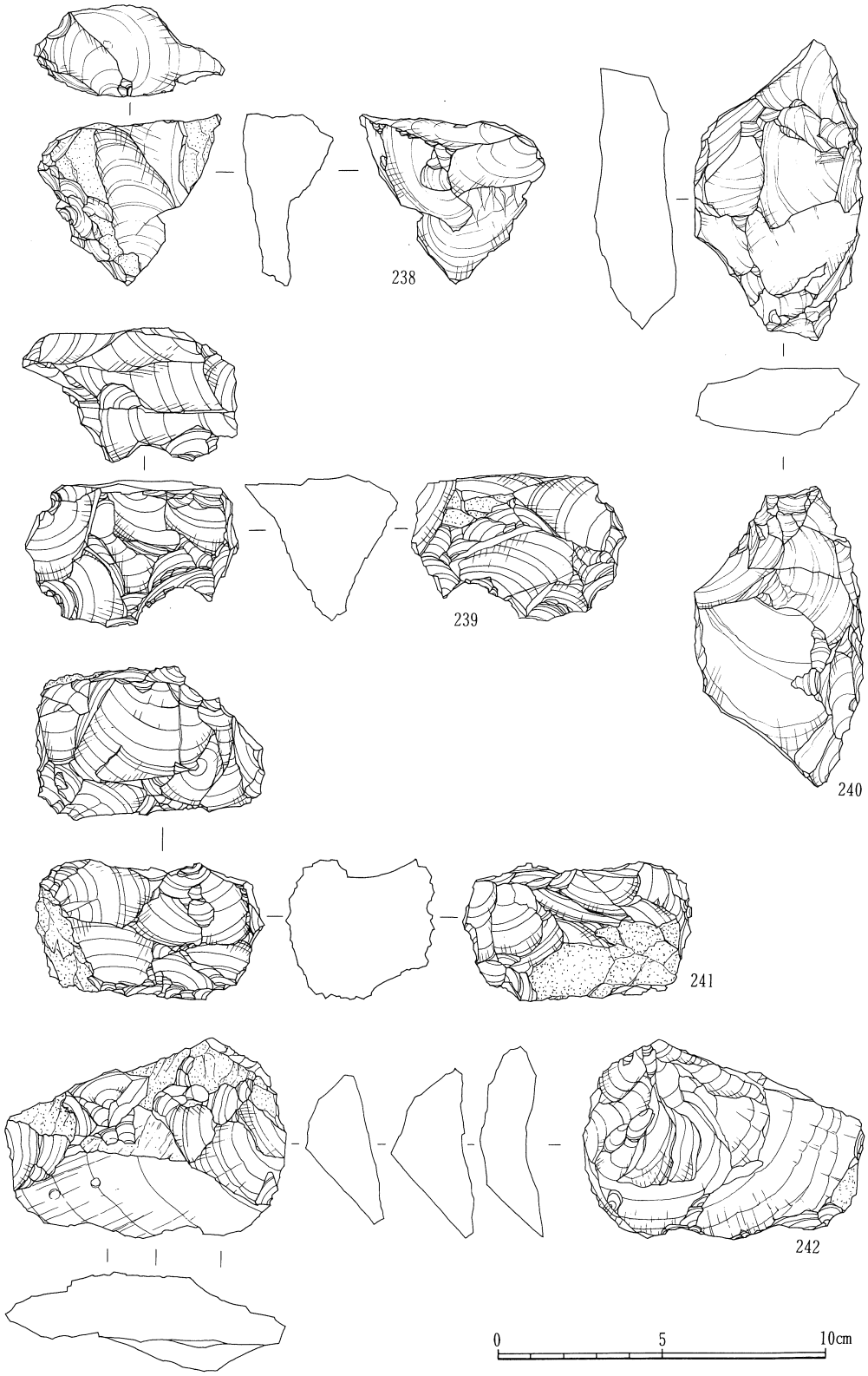
第140図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土掻器・石匙等



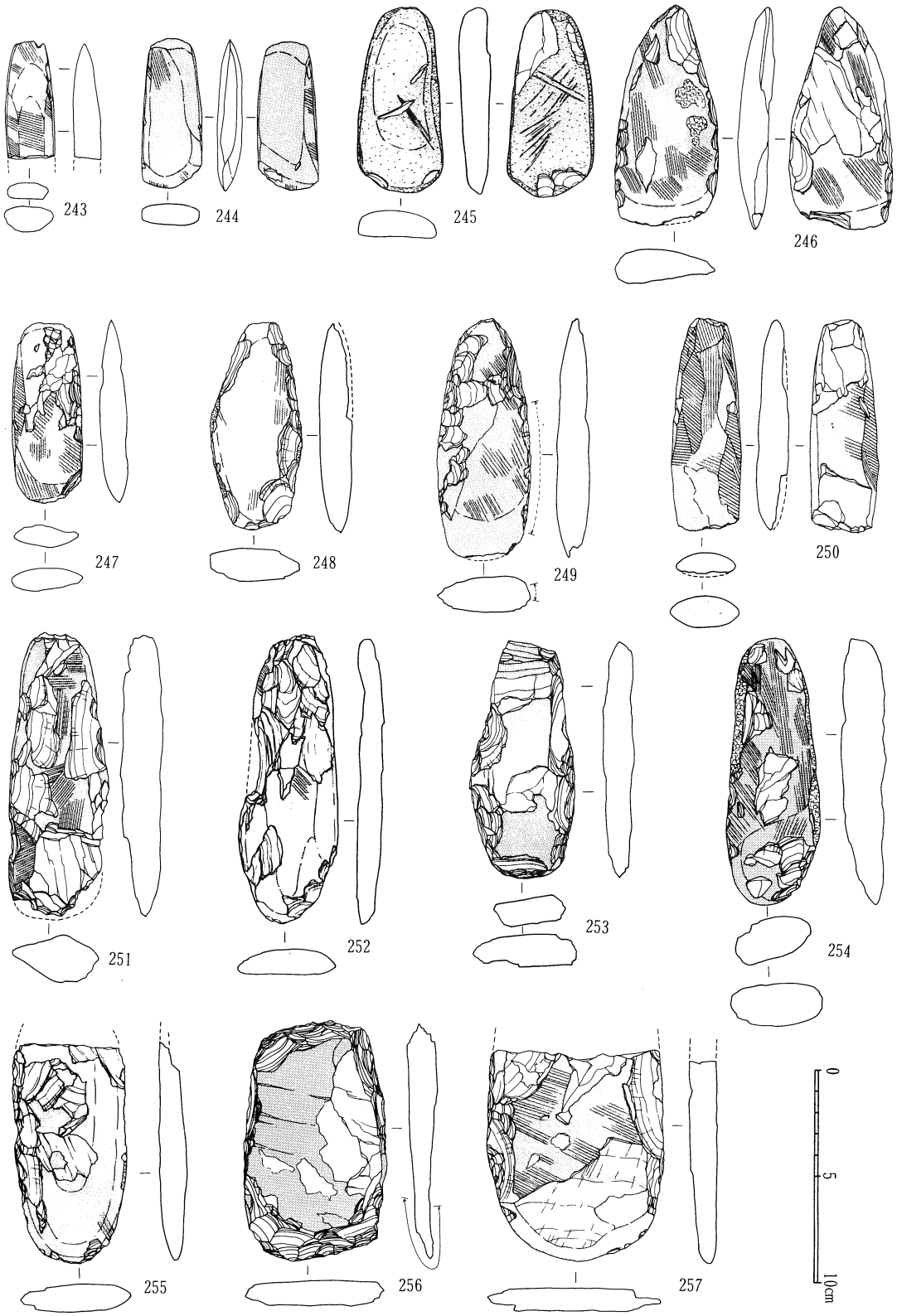
第141図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土掻器・二次加工・剥片等



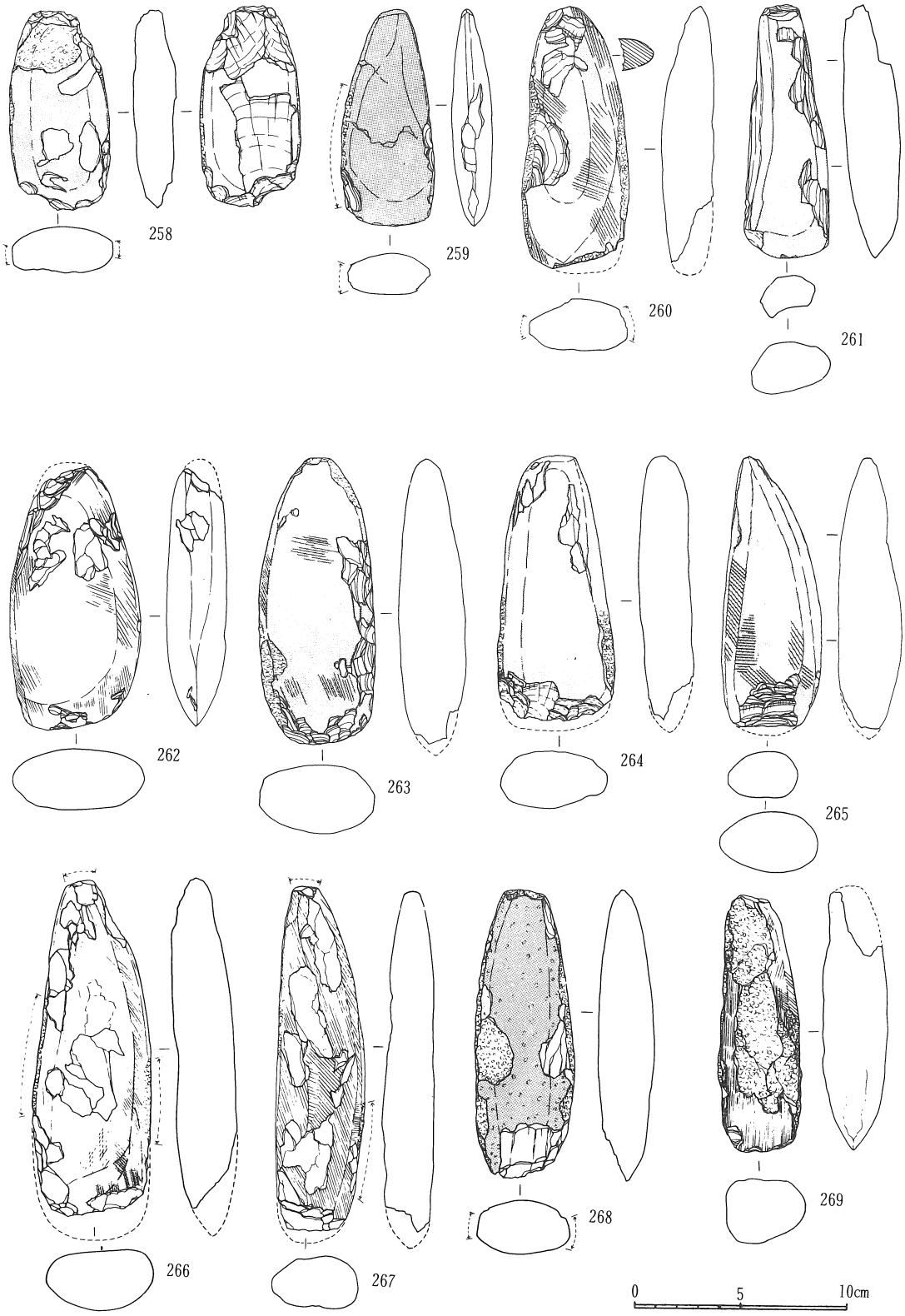
第142図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土石核（その１）



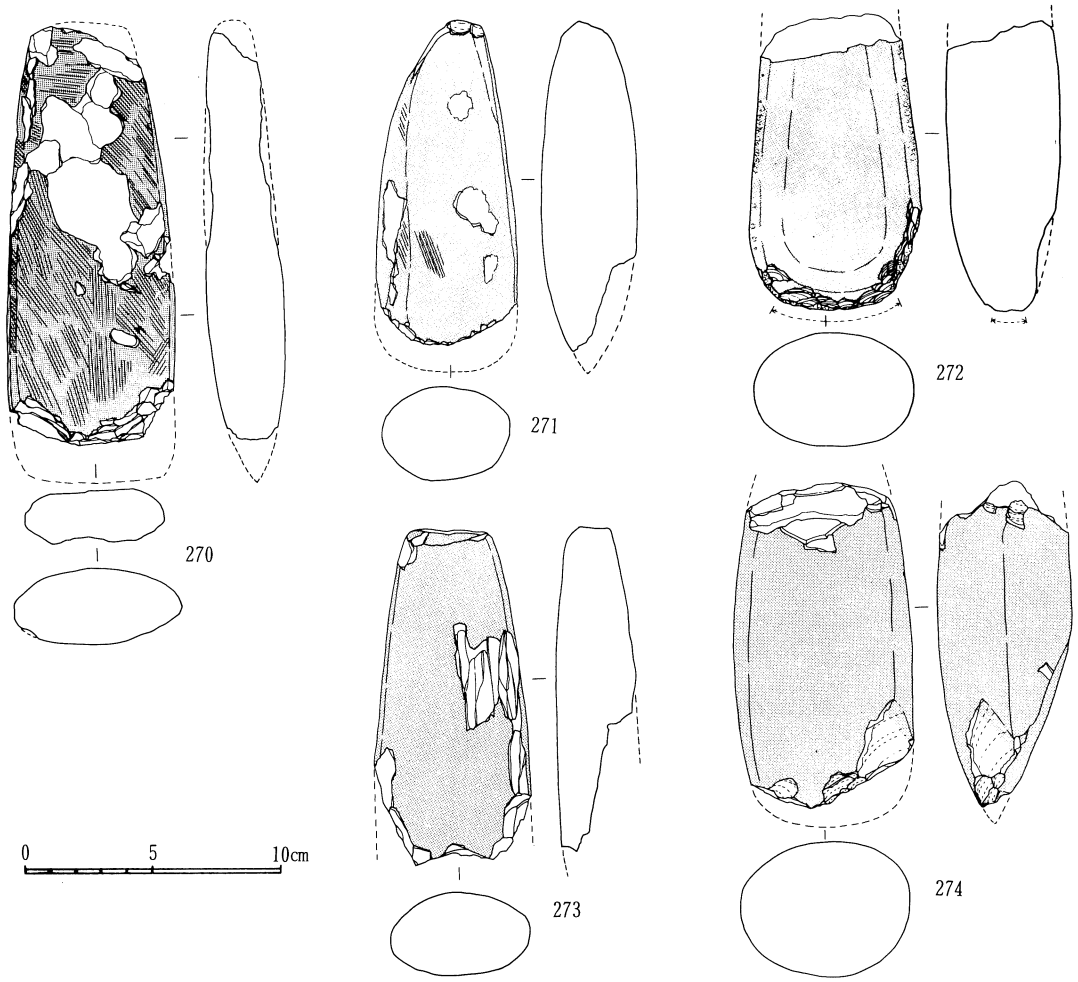
第143図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土石核（その２）



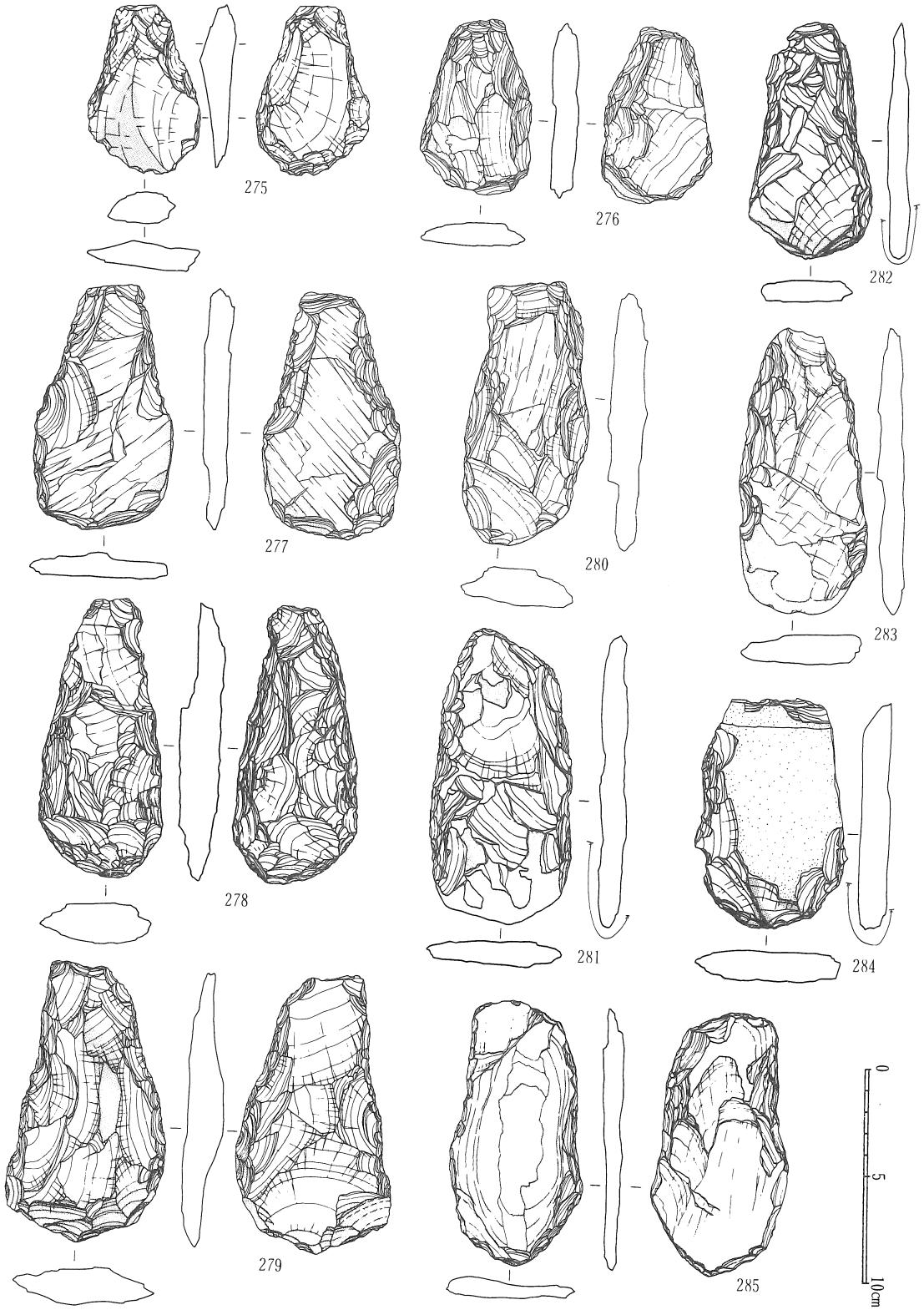
第144図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土磨製石斧（その１）



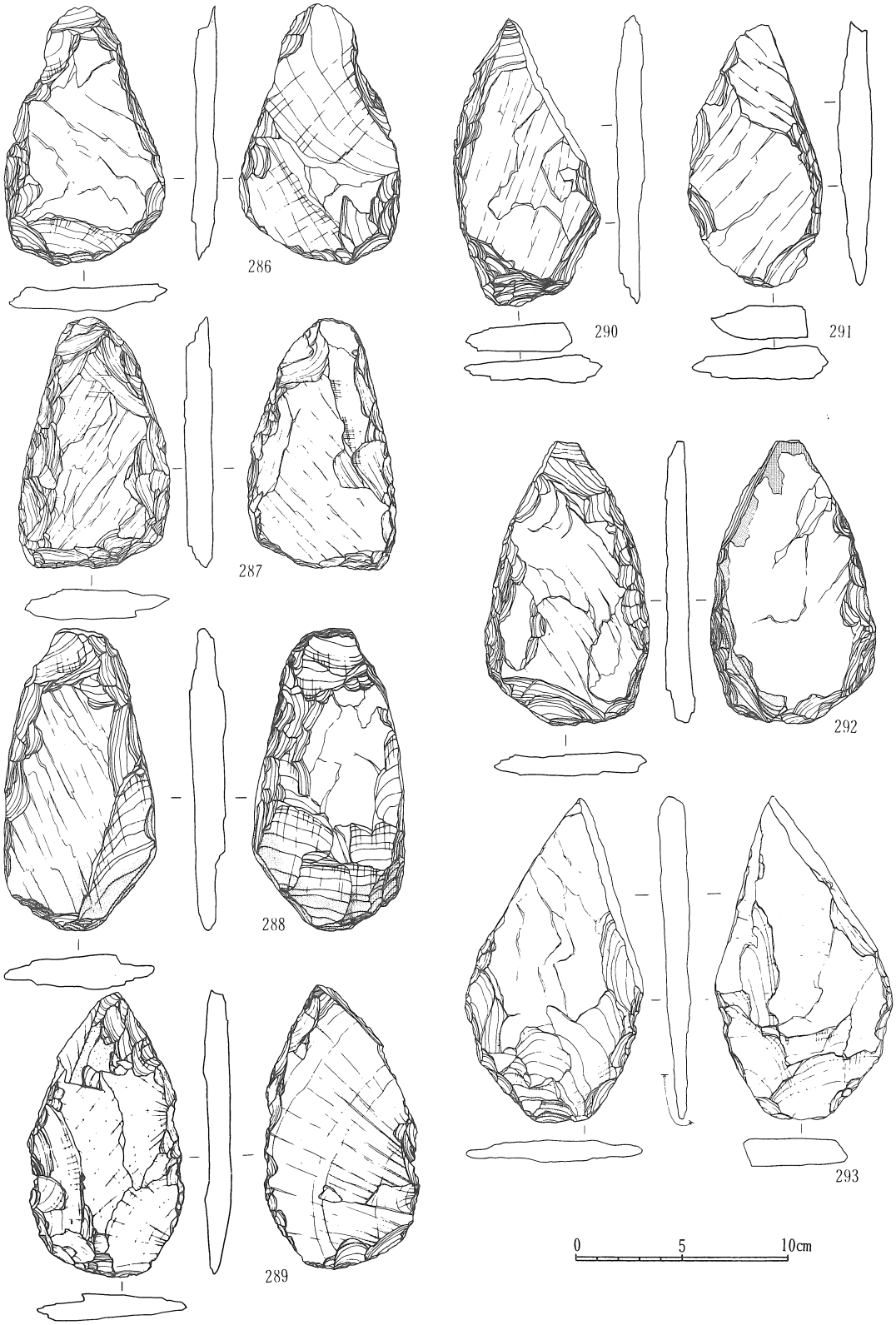
第145図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土磨製石斧（その２）



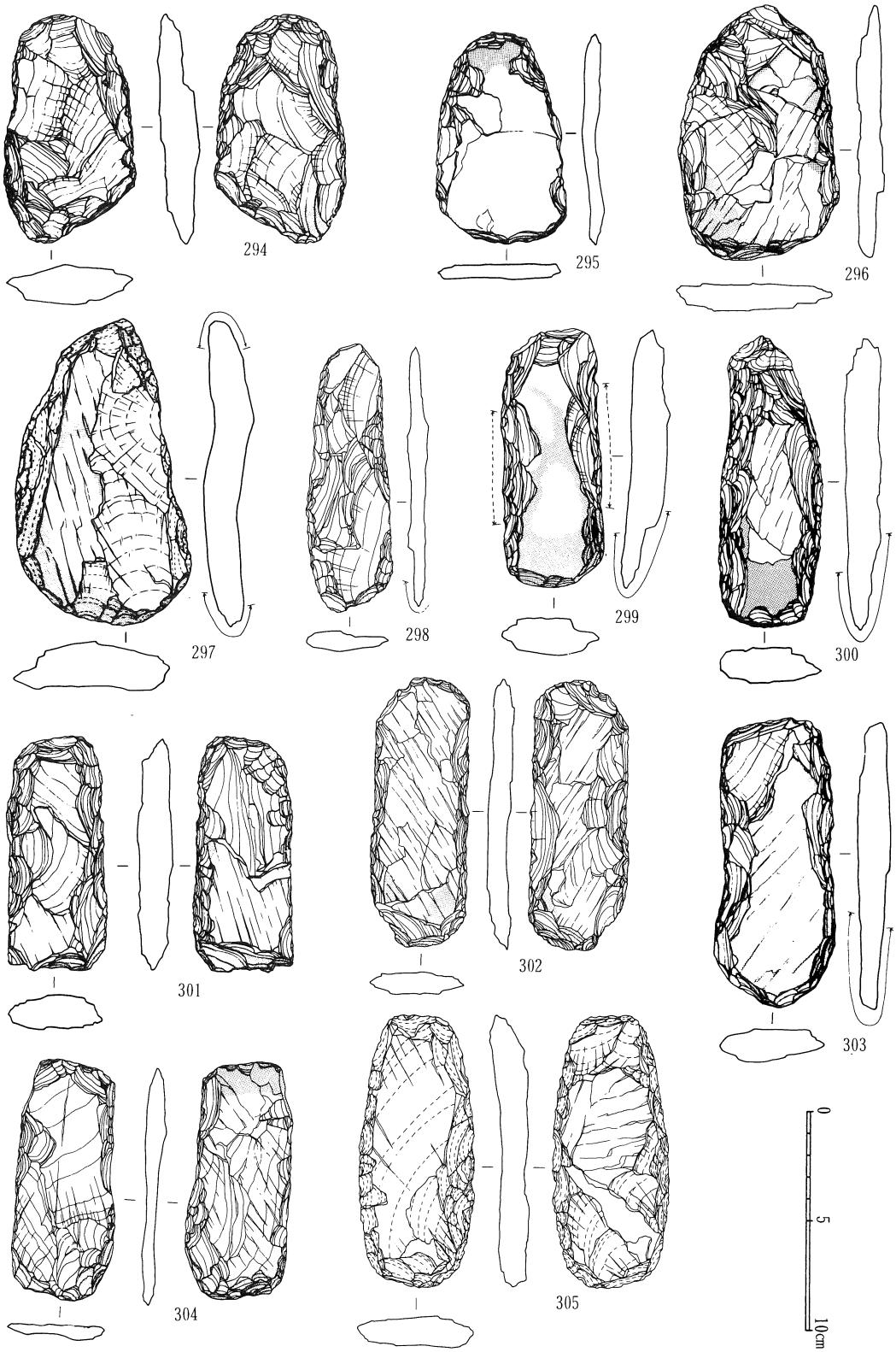
第146図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土磨製石斧（その３）



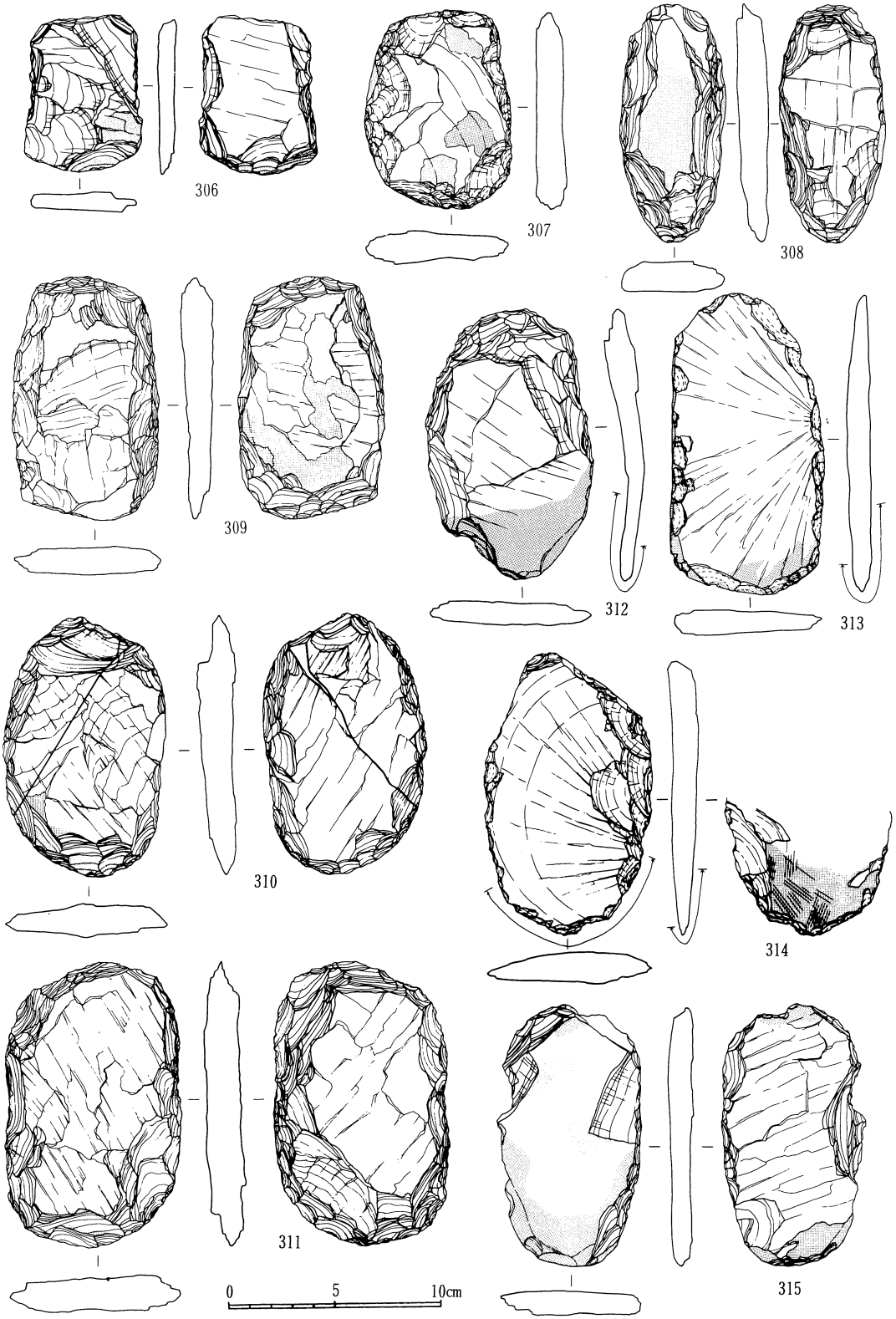
第147図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土扁平打製石斧（その１）



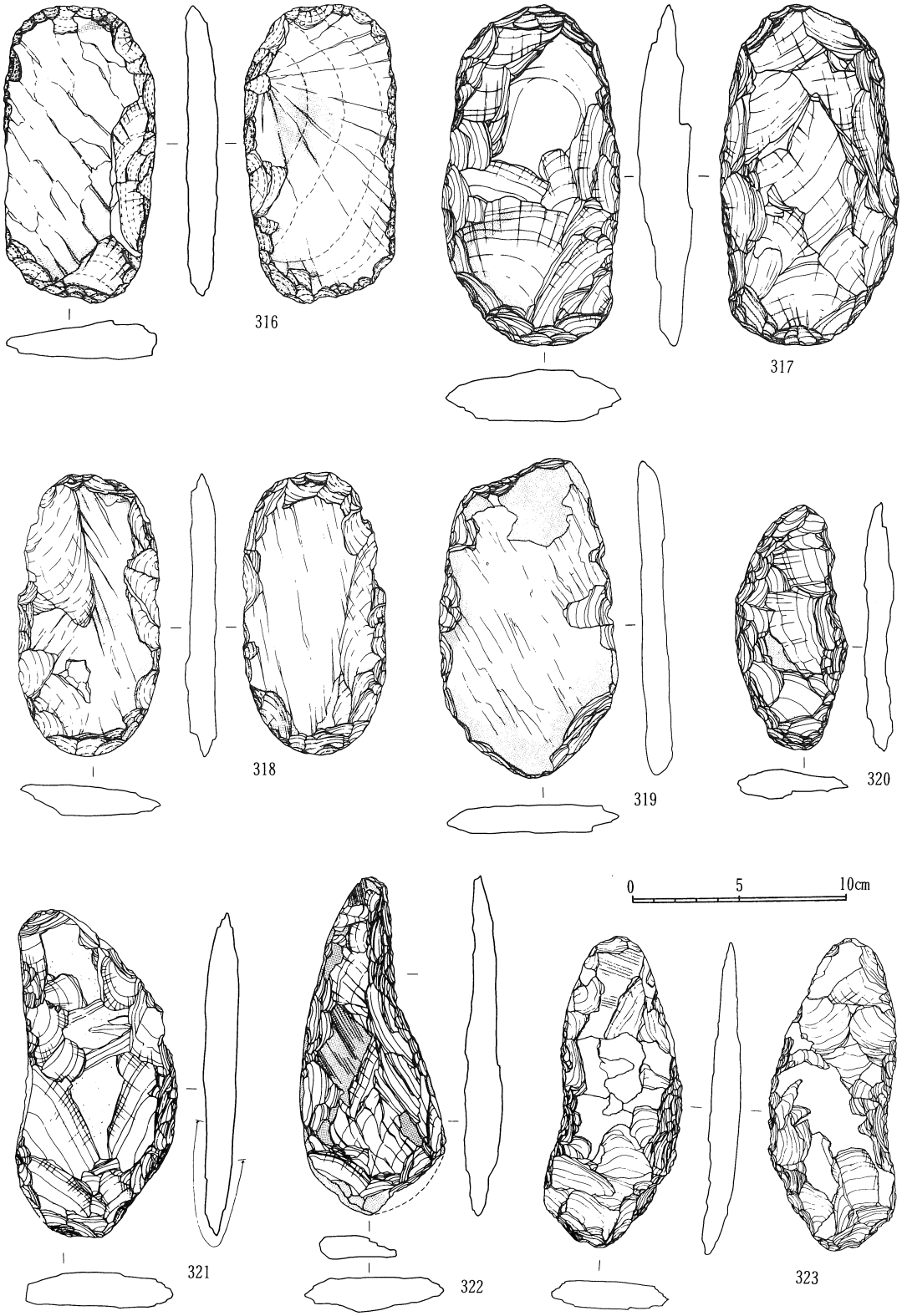
第148図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土扁平打製石斧（その２）



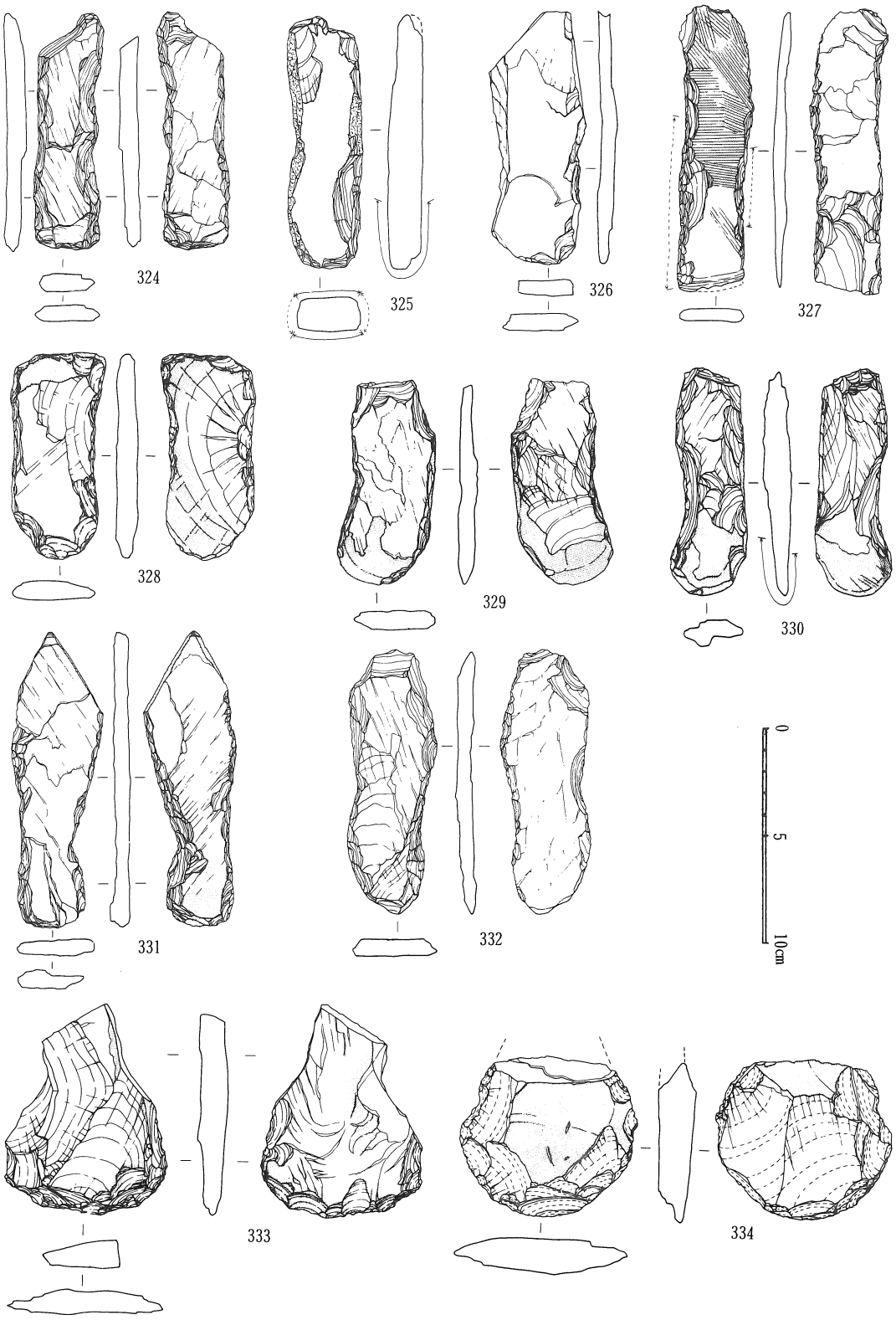
第149図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土扁平打製石斧（その３）



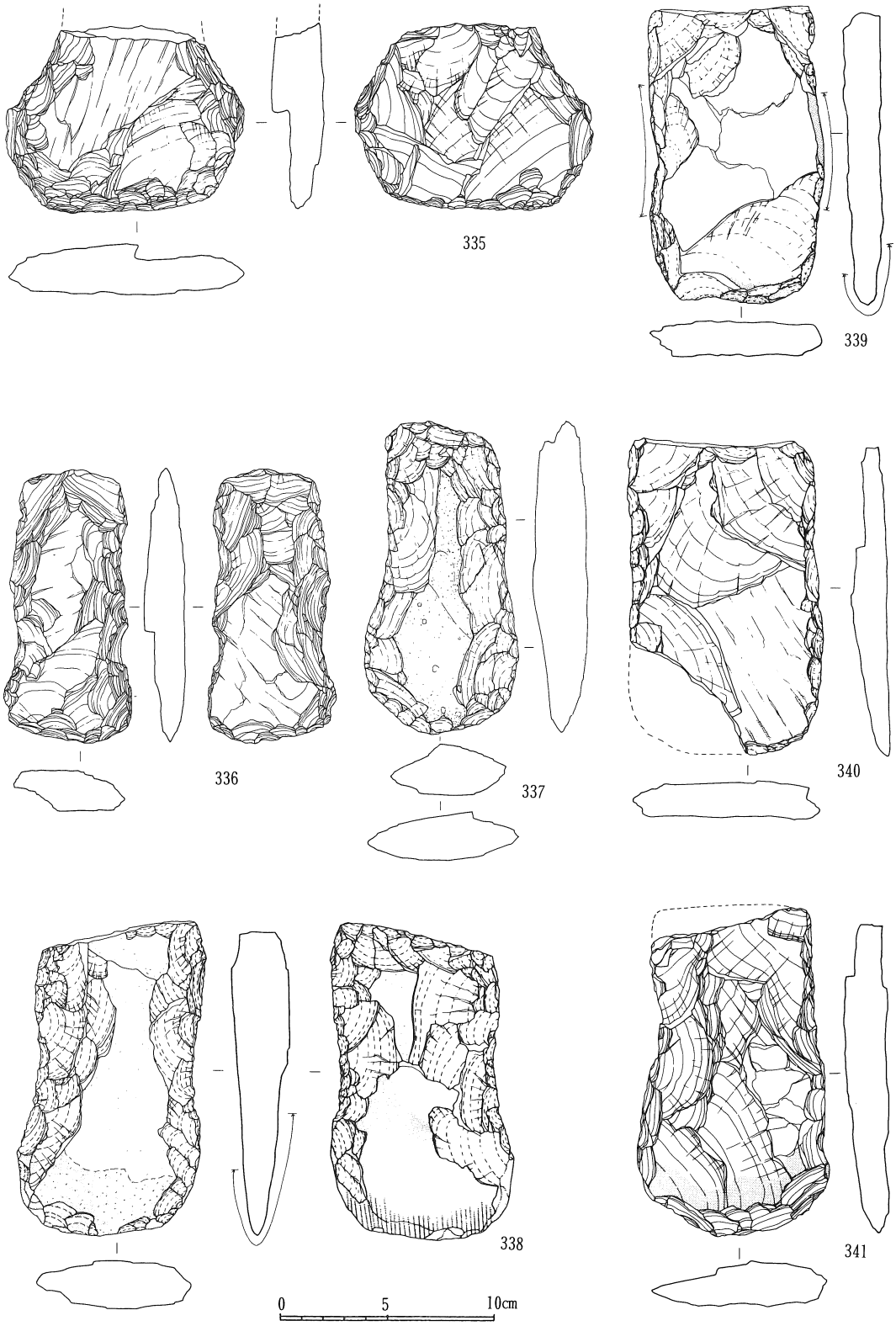
第150図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土扁平打製石斧（その４）



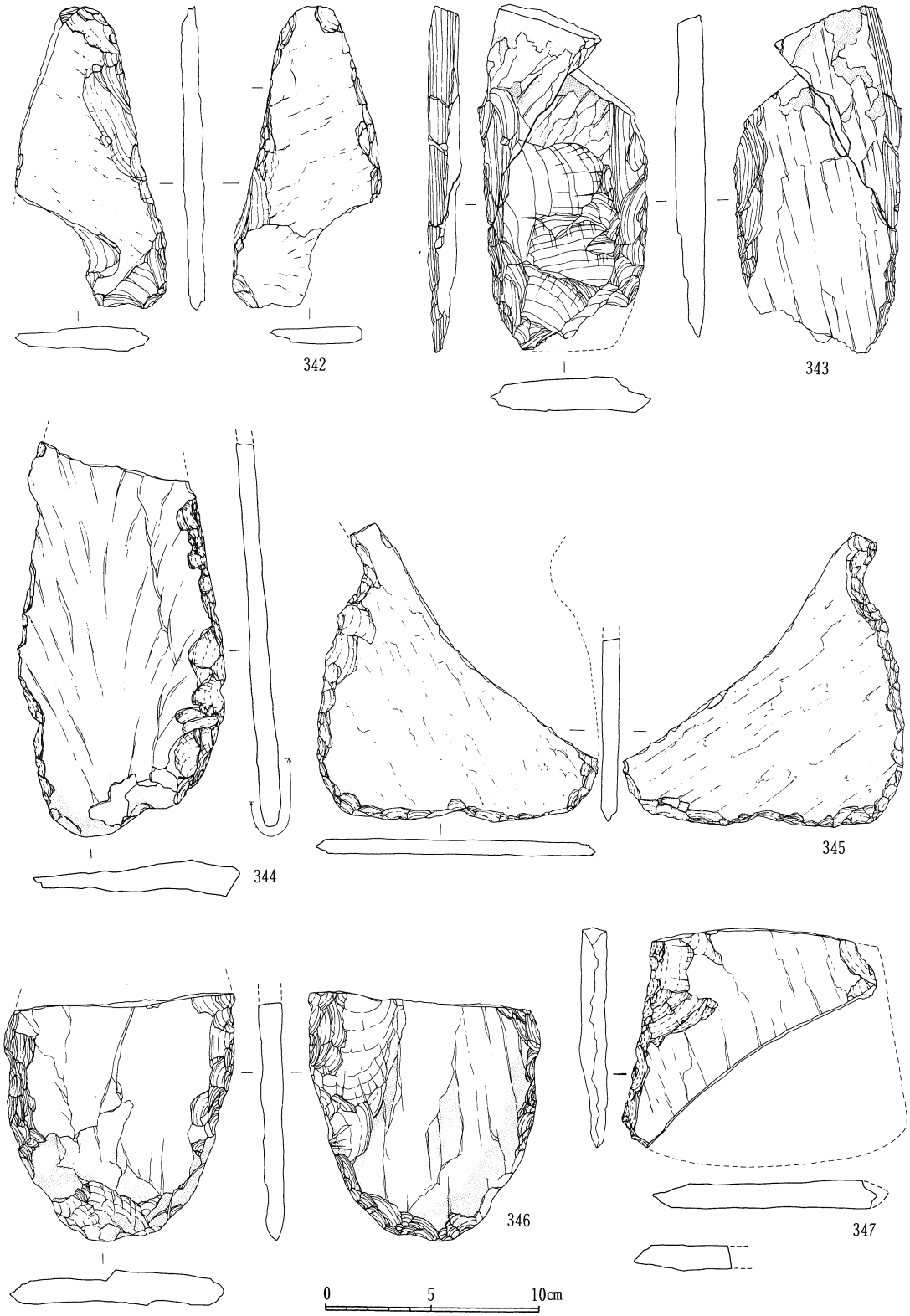
第151図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土扁平打製石斧（その５）



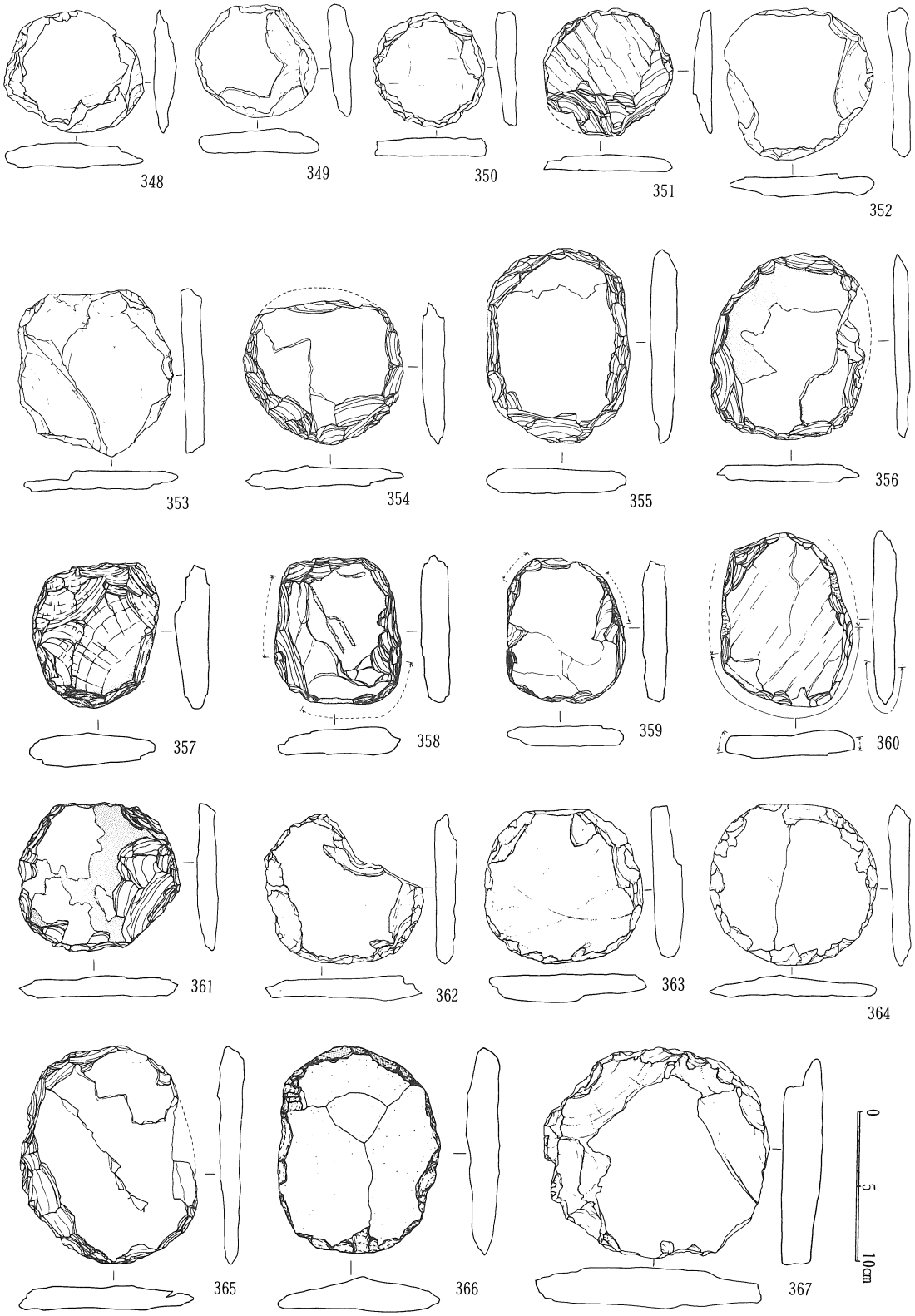
第152図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土扁平打製石斧（その６）



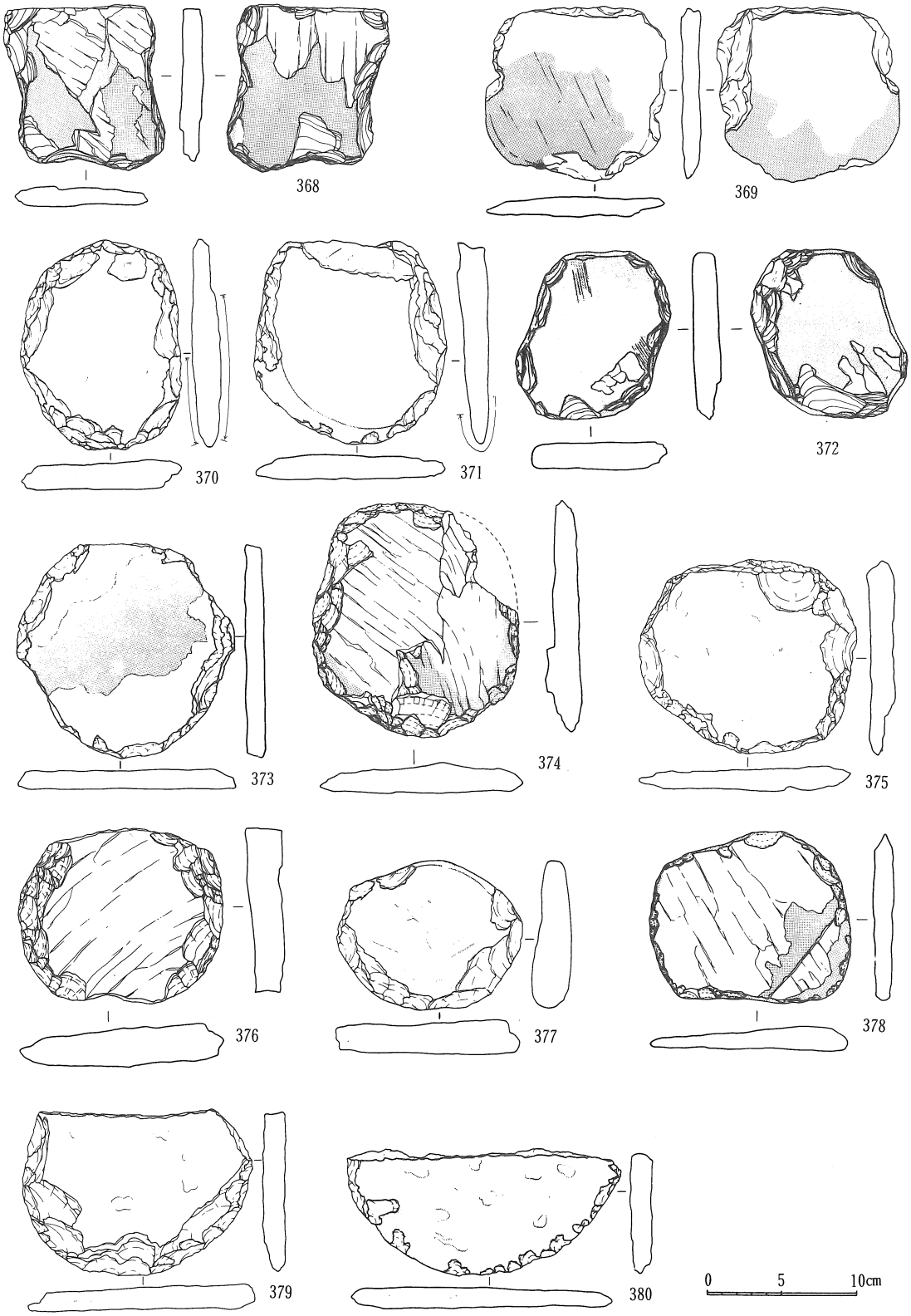
第153図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土扁平打製石斧（その７）



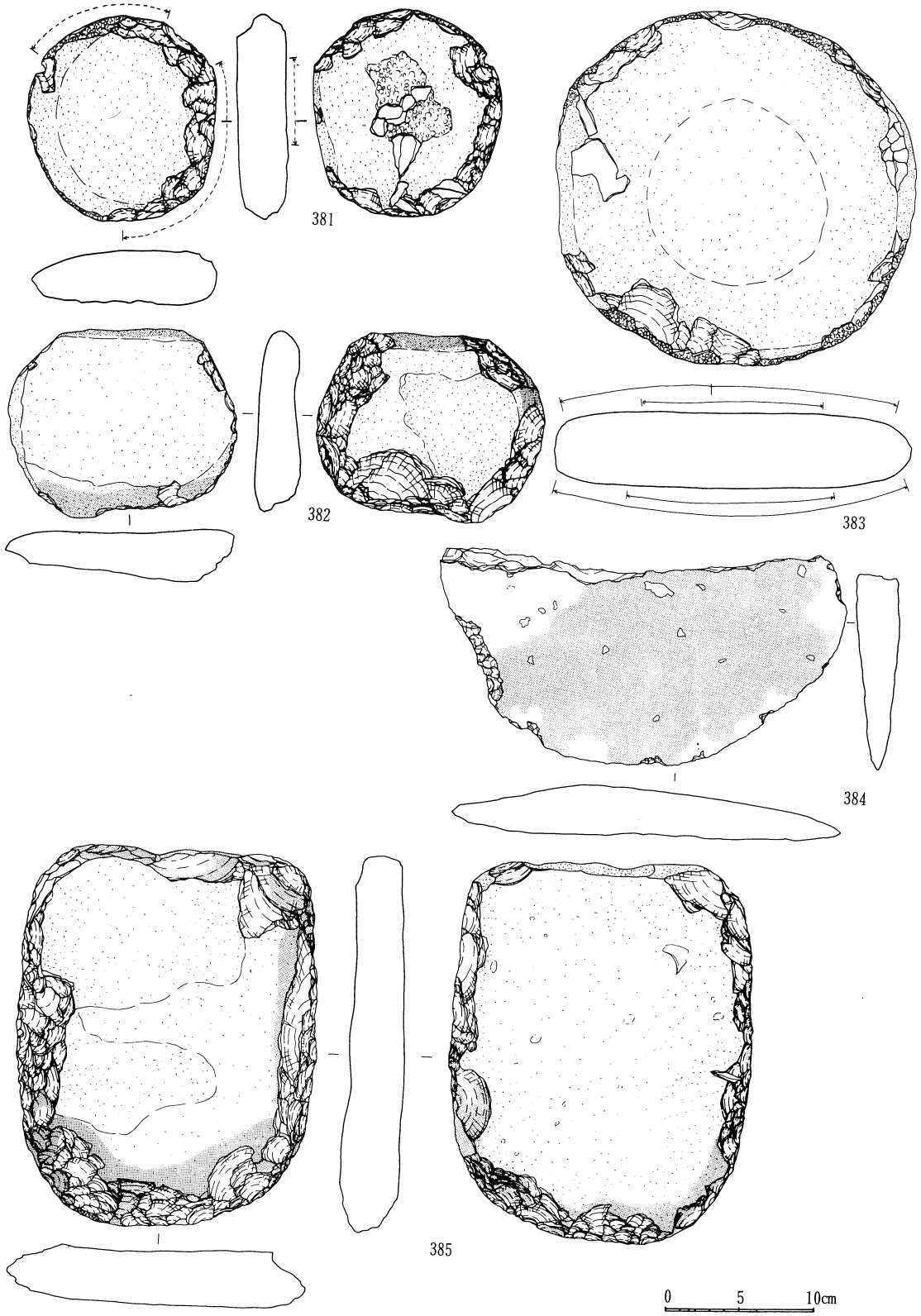
第154図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土扁平打製石斧（その８）



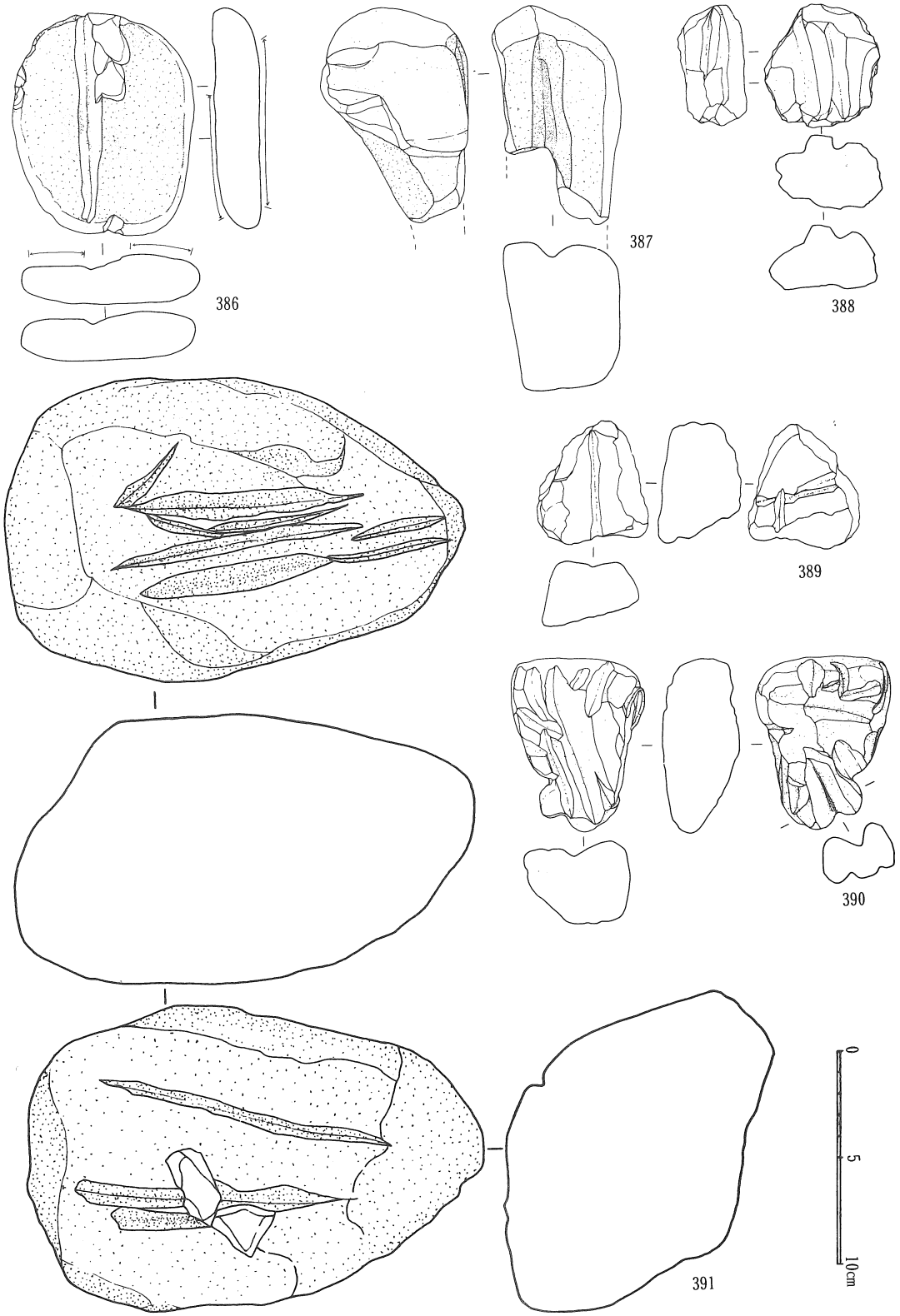
第155図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土円形石器（その１）



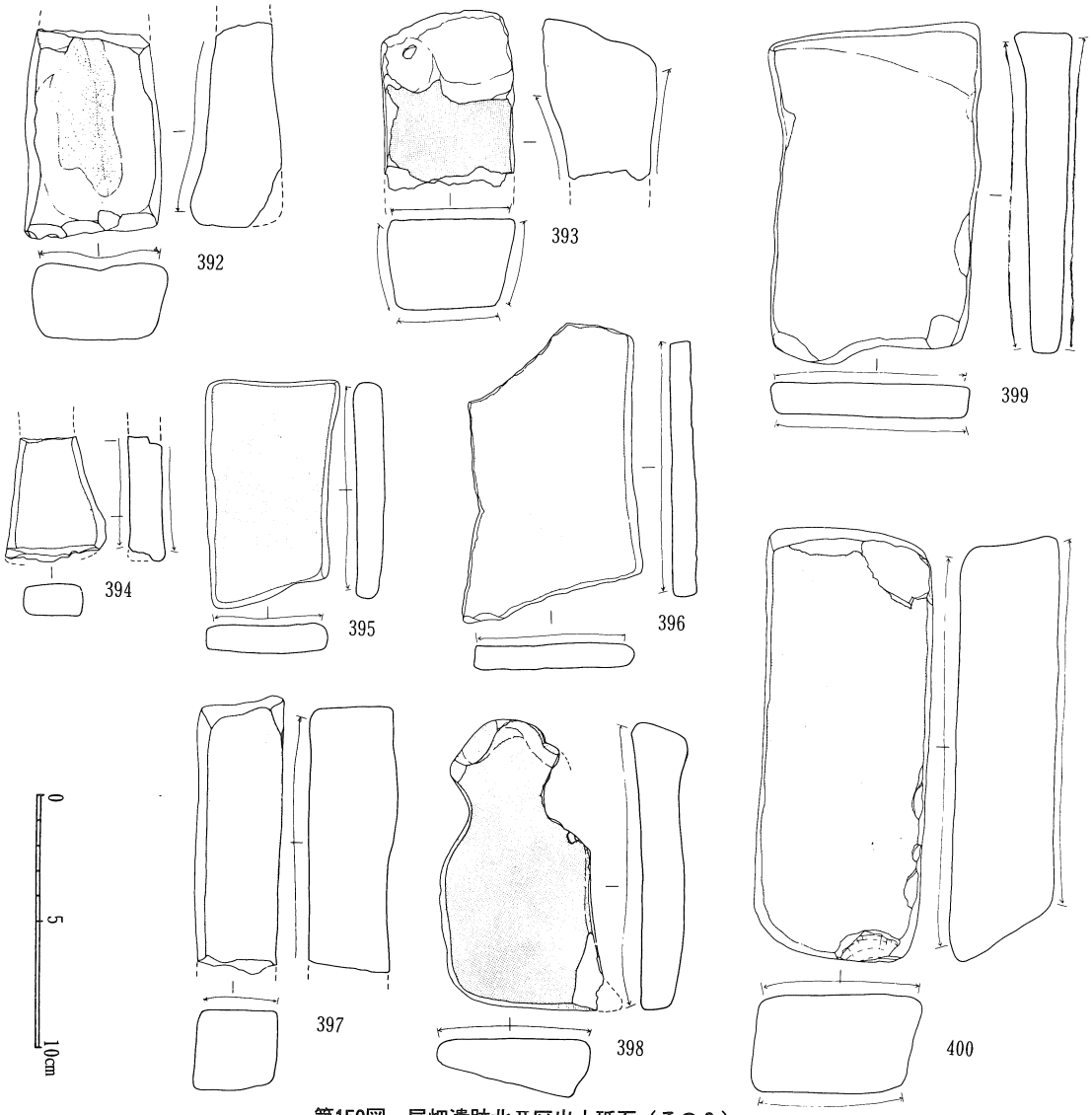
第156図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土円形石器（その２）



第157図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土円形石器・不明石器



第158図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土刀砥石（その１）



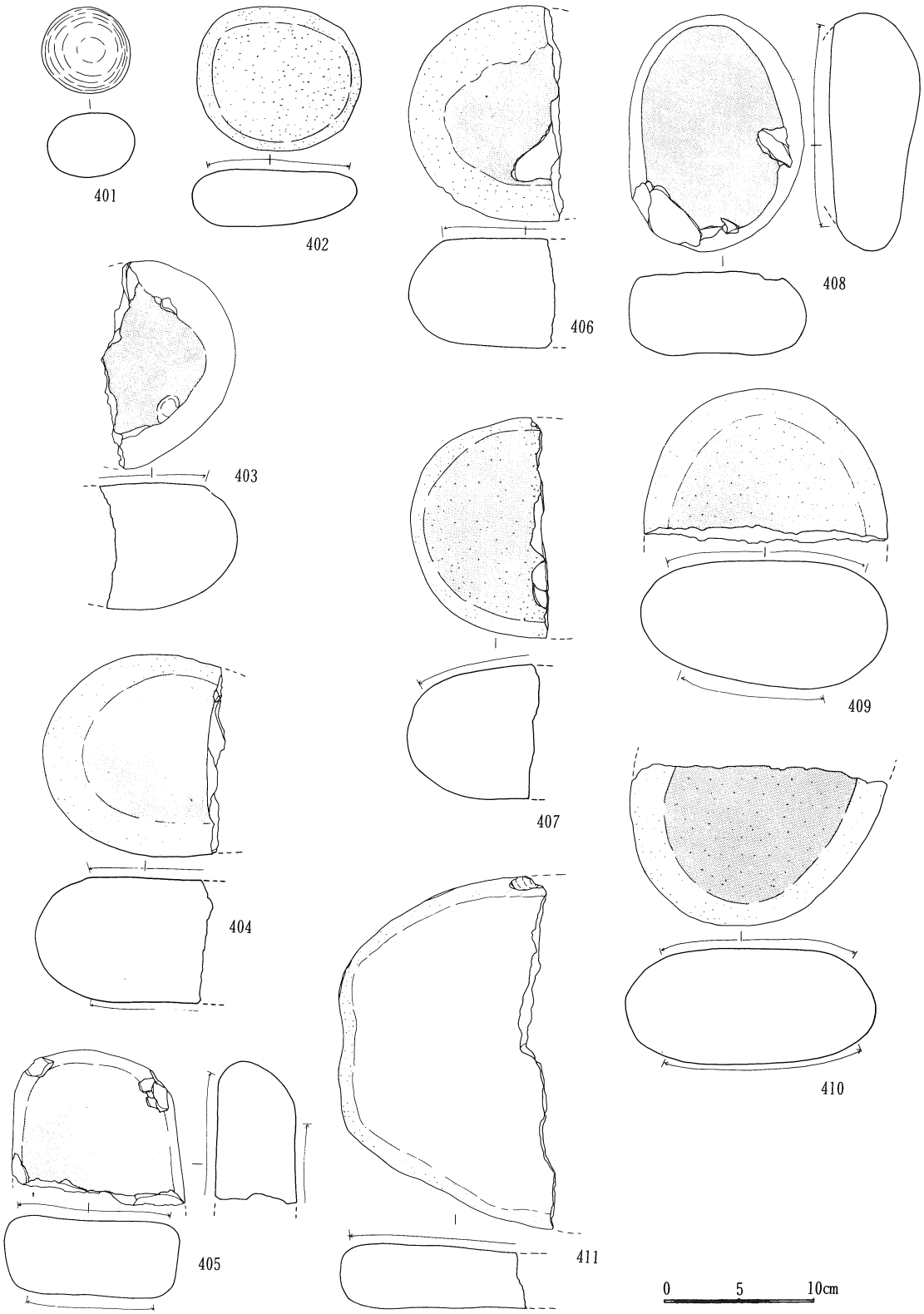
第159図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土砥石（その２）

砥石（第158図・第159図）

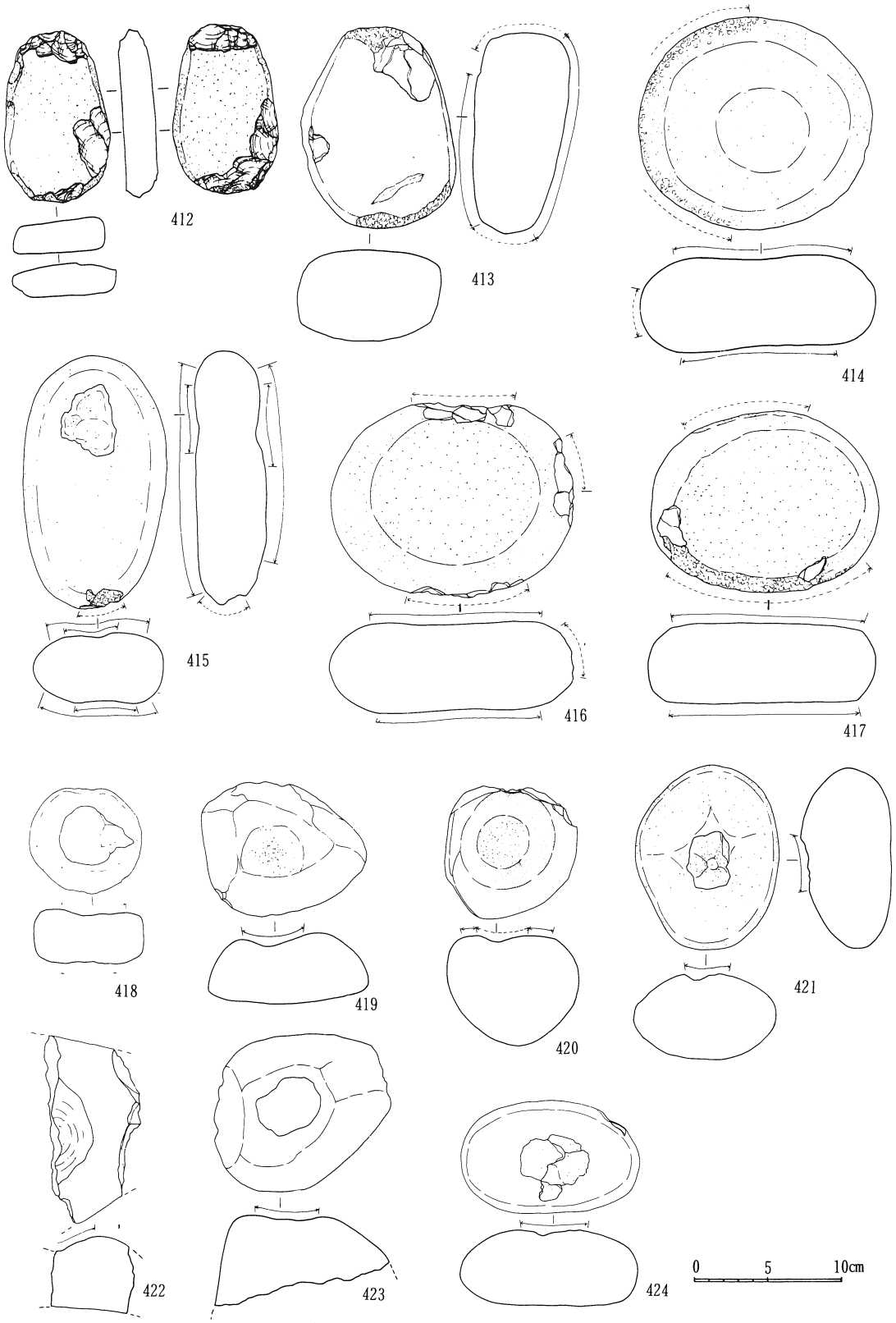
386～391は安山岩や軽石を利用した刃砥石で392～400の断面の厚い砥石には砂岩を利用している。

磨石・敲石・凹石（第160図～第162図）

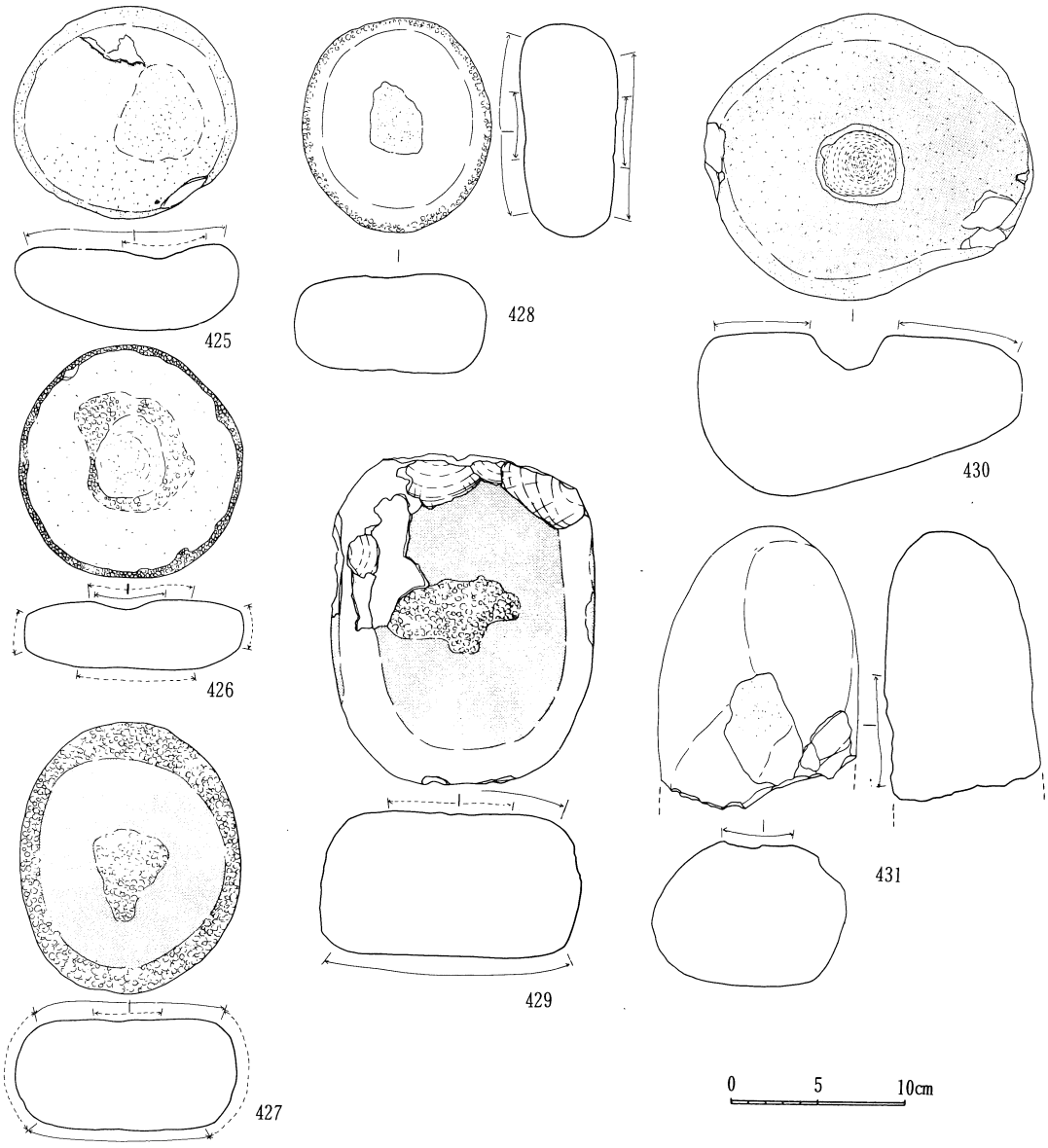
安山岩の円礫を利用したもので、縁辺部を敲石とするなど共用したものが多い。



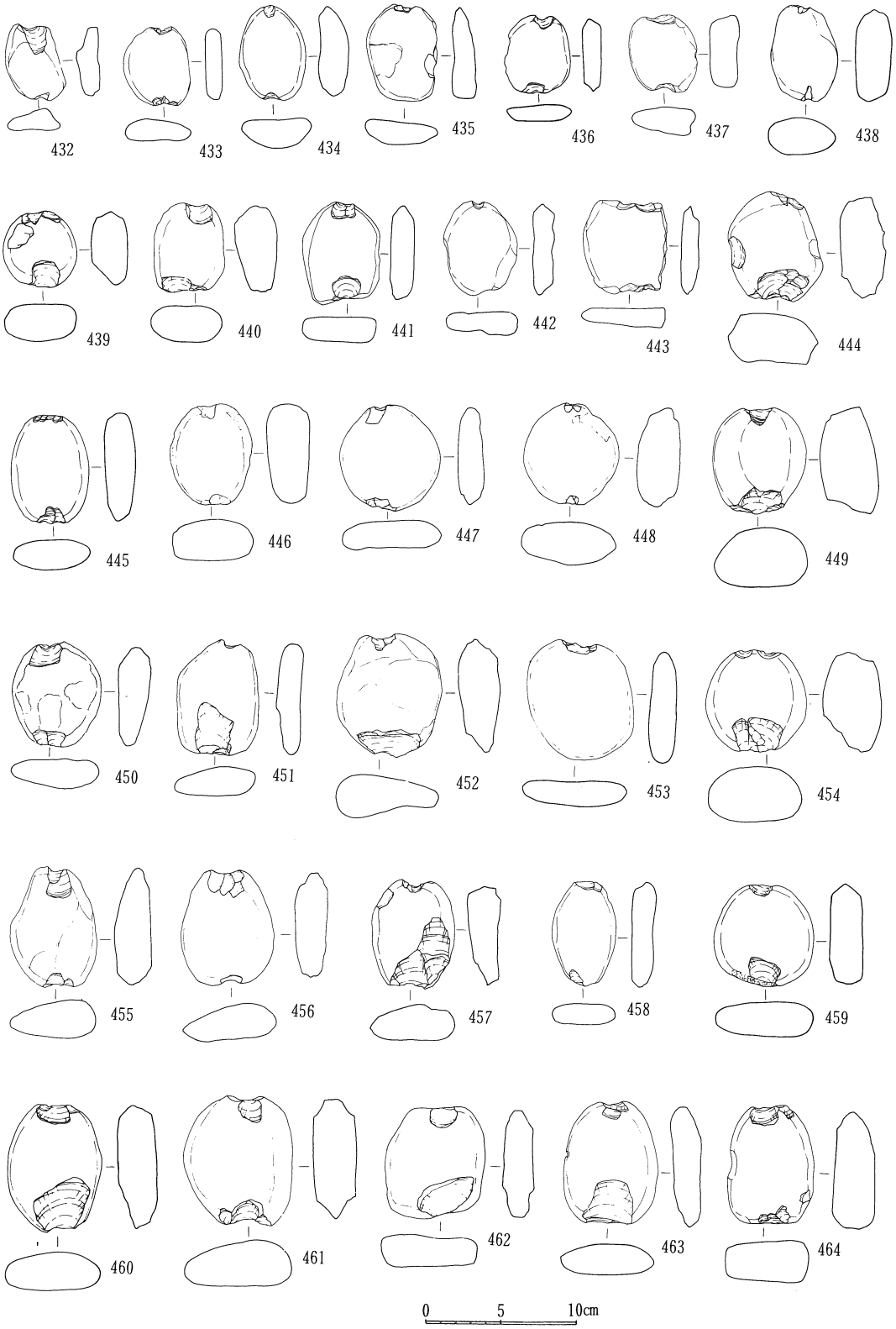
第160図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土磨石



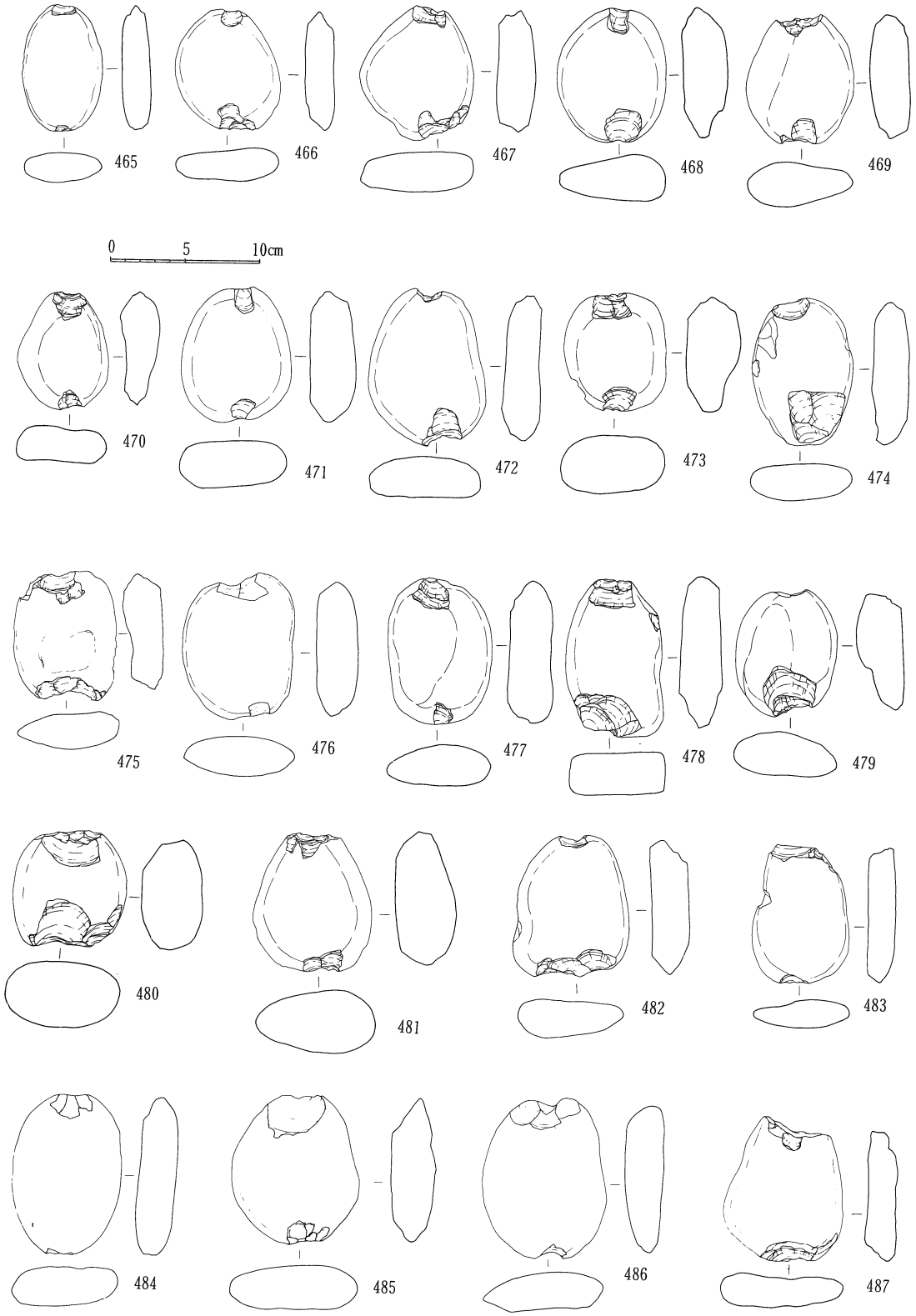
第161図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土敲石・凹石



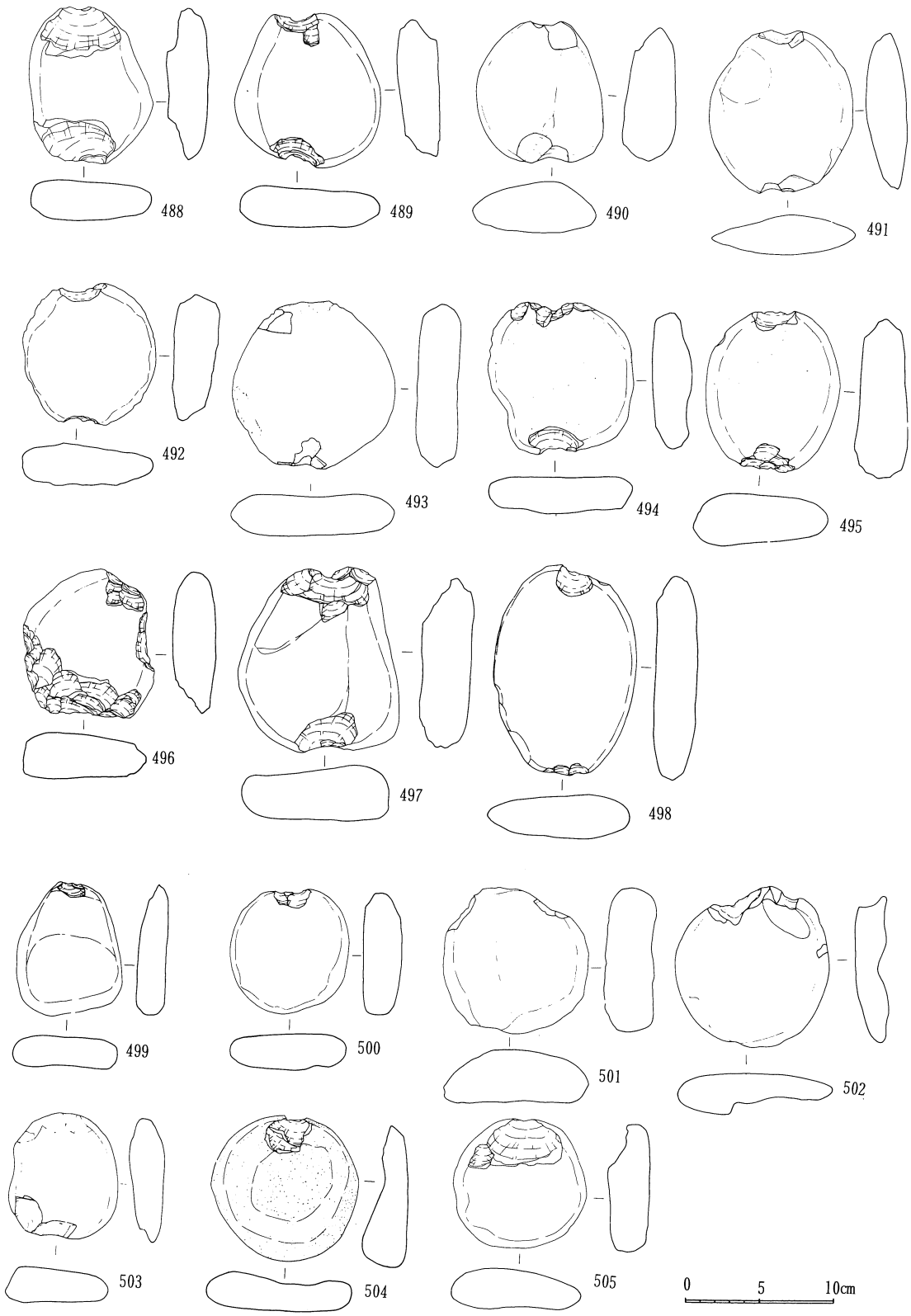
第162図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土磨石・敲石・凹石



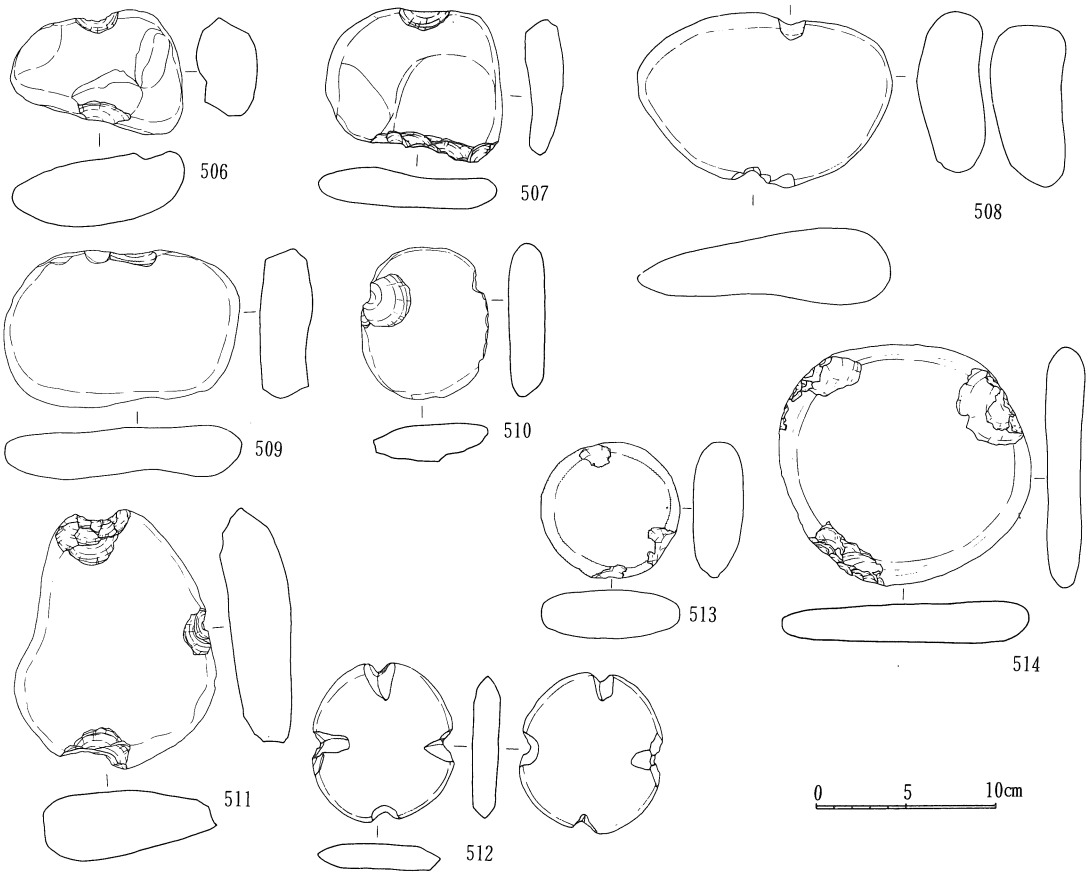
第163図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土礫石錘（その１）



第164図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土礫石錘（その２）



第165図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土石錘（その３）



第166図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土石錘（その４）

礫石錘（第163図～第166図）

83点が出土している。分布状況は他の石器と同様、C・D・E・F・G －Ⅳ・Ⅴの範囲に分布する。形態は長軸の両端を打ち欠いたもの、片端だけをあるいは三ヵ所を打ち欠くものや短軸の両端を打ち欠くものなどがある。また、表裏面が摩滅するものもある。

№512は四方に切り目を入れた希少な例であろう。

重量別分布状況は第５表のとおりであり、その大部分が20ｇ～100ｇ内、100ｇ以上250ｇ以下にも３割程度分布する。この分布状況を県内の河川に隣接し、礫石錘を出土する縄文時代後期・晩期遺跡と比較してみると、いわゆる大型の河川に隣接して所在する三光村佐知遺跡・挾間町北原遺跡・犬飼町下野遺跡と小河川に隣接する安心院町飯田二反田遺跡・大野町光昌寺遺跡の両方の特徴を有していることが判る。つまり、大河川沿いの遺跡からは大小様々な形態と重量の礫石錘が出土するのに比べ、小河川は100ｇ以下に集中する傾向が認められることである。この両方の特徴を持つ要因として、遺跡が海に近いことや、近接して流れる中規模河川である伊呂波川に対応した結果によるものであることが考えられる。

註１・「佐知遺跡」1989　大分県文化財調査報告書第81輯　大分県教育委員会

註２・「北原遺跡」1994　挾間町教育委員会

註３・「下野遺跡」1994　犬飼町教育委員会

註４・「飯田二反田遺跡」1989　大分県教育委員会

註５・「大野地区遺跡群発掘調査概報Ⅰ」1991　大野町教育委員会

Q	P	O	N	M	L	K	J	I	H	G	F	E	D	C	B	A	
																	Ⅲ
										2	8	5	4	9		1	Ⅳ
								1	15	8	17	4					Ⅴ
																	Ⅵ

第167図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土石錘出土分布状況

重　量(g)	個数
0～ 20	7
20～ 40	11
40～ 60	14
60～ 80	14
80～100	15
100～120	8
120～140	5
140～200	5
200～250	4
総　数	83

表５　石錘重量分布

No.	重量	石　材	備　　考	No.	重量	石　材	備　　考	No.	重量	石　材	備　　考
1	11	安山岩		29	52	安山岩		57	92	安山岩	
2	13	〃	一部切り目	30	95	〃		58	106	〃	
3	25	〃		31	64	〃		59	127	〃	土杭９
4	20	〃		32	44	〃		60	110	〃	
5	11	〃		33	84	〃		61	85	〃	軽石
6	22	〃		34	48	〃		62	169	〃	側縁部敲打
7	29	〃	切り目	35	52	〃		63	137	〃	
8	24	〃		36	85	〃		64	159	〃	
9	34	〃		37	90	〃		65	122	〃	
10	37	〃		38	74	〃		66	241	〃	
11	13	〃		39	52	〃	土坑４	67	152	〃	
12	18	〃		40	99	〃		68	66	〃	
13	57	〃	抉入部摩滅	41	94	〃		69	77	〃	
14	31	〃	溝６	42	110	〃	溝６	70	182	〃	抉入部敲打
15	55	〃	側縁部敲打	43	75	〃	溝１	71	101	〃	
16	42	〃		44	69	〃		72	77	〃	
17	60	〃		45	80	〃		73	117	〃	
18	73	〃		46	93	〃		74	87	〃	溝６
19	40	〃	全面研磨	47	127	〃		75	92	〃	短軸に抉入
20	38	〃		48	68	〃		76	79	〃	上面抉入摩滅
21	61	〃		49	102	〃		77	247	〃	短軸に抉入
22	43	〃	溝６	50	132	〃		78	165	〃	短軸に抉入
23	67	〃		51	83	〃		79	47	〃	短軸に抉入
24	44	〃		52	45	〃	溝６	80	223	〃	
25	47	〃		53	94	〃		81	91	〃	全面研磨
26	39	〃		54	118	〃		82	205	〃	裏面若干研磨
27	19	〃	溝６	55	100	〃		83	35	〃	抉入切目４
28	62	〃	一部敲打	56	74	〃					

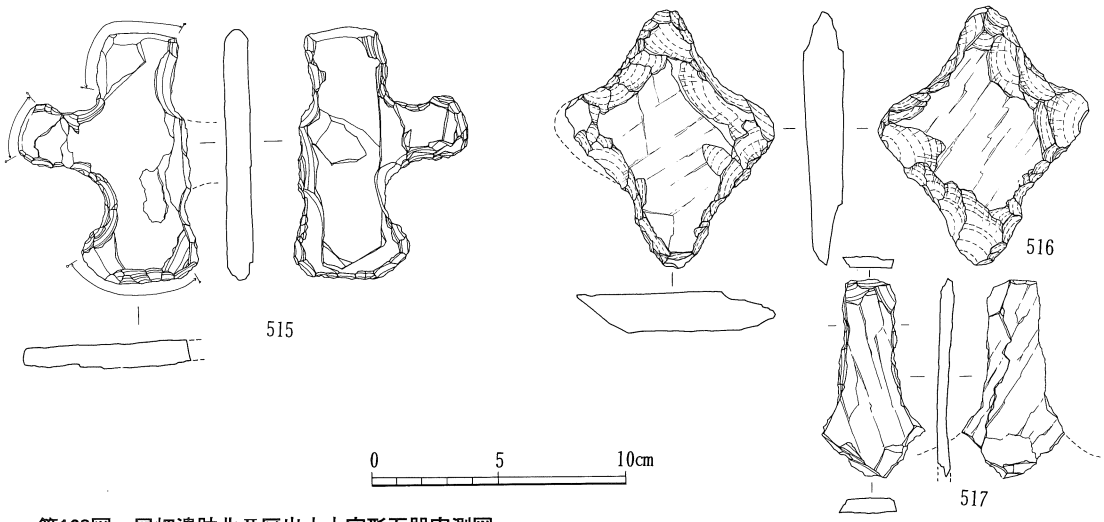
表６　尾畑遺跡北Ⅱ区出土石錘観察表　（単位：ｇ）

十字形石器（第168図）

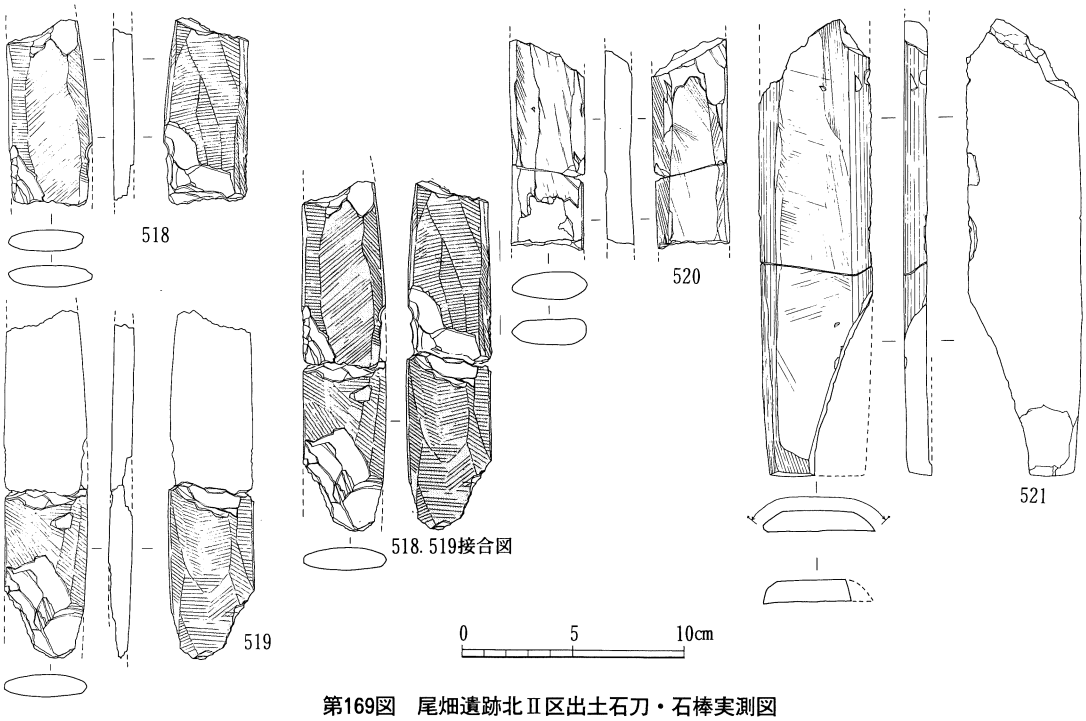
３点が出土しており、一部分欠損しており、完形品はない。

石刀・石棒状石器（第169図）

結晶片岩製で全面研磨により断面楕円形の棒状に作られている。518、519は接合資料であり、接合状況から見ると平面が僅かに湾曲しており石刀と考えられる。№520は前者と同様に仕上げられているが直線的である。また、521は研磨により刃部や基部が精巧に作られており、片面は剥落しているが石刀と考えられる。



第168図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土十字形石器実測図



第169図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土石刀・石棒実測図

玉類（第170図1～16）

遺跡からは16点が出土している。この中で№.2は表採、4・5・10は溝覆土からの出土で、大部分はF－Ⅳ区・G－Ⅴ区に集中している。濃い薄いの差はあるが緑色のヒスイを材料としており、勾玉の扁平な特徴から見て、縄文時代後期後葉～晩期の所産と考えられる。

県内では緒方町の大石遺跡や竹田市石井入口遺跡、荻町桜山遺跡といった大野川流域あるいは挾間町北原遺跡の大分川流域の縄文時代後・晩期遺跡で類例を見ることができる。ただ、№.6の大型の菅玉については、新しい時代の可能性が強い。

註1・「大石遺跡」別府大学付属博物館図録　1986　別府大学

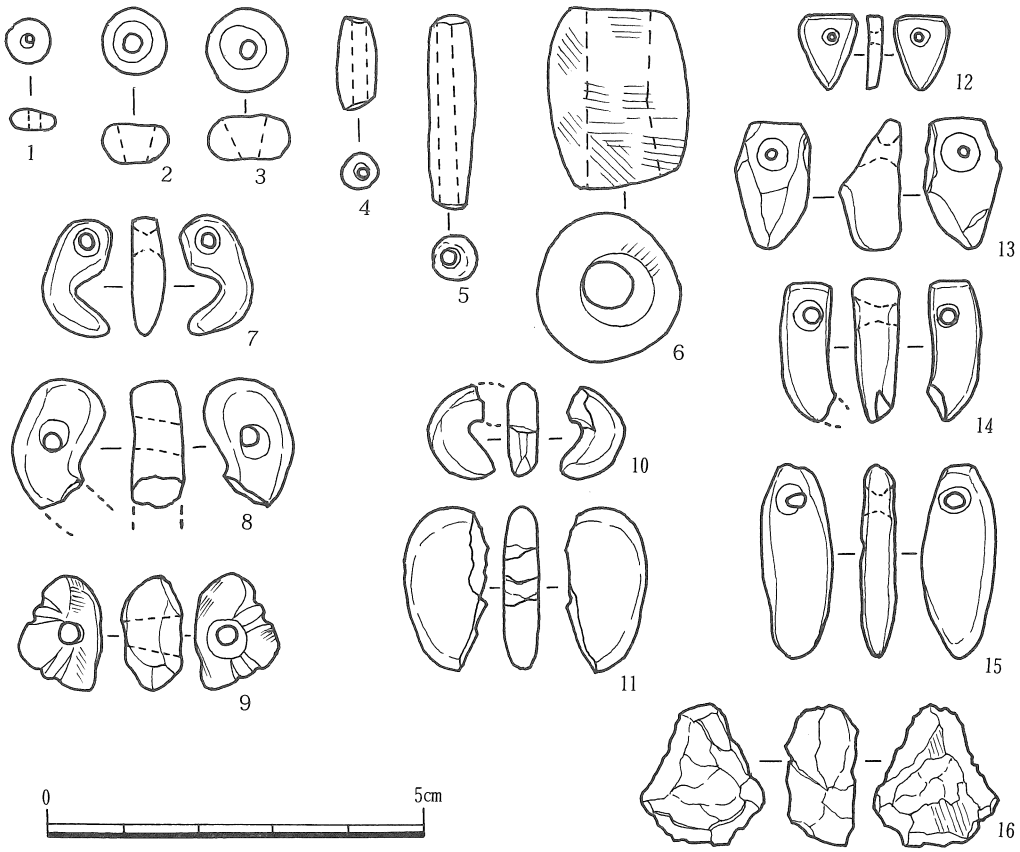
註2・「菅生台地と周辺の遺跡XV」－石井入口遺跡－1992　竹田市教育委員会

註3・「縄文晩期農耕の起源に関する研究」－荻町桜山遺跡－1971　別府大学考古学研究報告2

註4・「北原遺跡」1994　挾間町教育委員会

№.	玉　類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	石　材	備　考
1	小　玉	0.6	0.6	0.3	翠　翡	片側穿孔
2	小　玉	0.9	0.9	0.5	〃	片側穿孔・表採
3	小　玉	1.1	1.1	0.6	〃	片側穿孔
4	菅　玉	1.2	0.5	0.4	〃	両側穿孔
5	菅　玉	2.5	0.6	0.6	〃	両側穿孔
6	菅　玉	2.4	1.9	1.9	〃	両側穿孔
7	勾　玉	1.5	0.7	0.4	〃	両側穿孔
8	勾　玉	(1.7)	0.9	0.7	〃	両側穿孔・一部欠損
9	勾　玉	1.5	1.1	0.8	〃	完形品・茶色
10	勾　玉	(1.2)	0.6	0.4	翠　翡	一部欠損
11	勾　玉	(2.2)	(1.1)	0.5	〃	垂玉？・一部欠損
12	垂　玉	0.8	1.0	0.2	〃	両側穿孔
13	垂　玉	1.7	1.0	0.8	〃	両側穿孔
14	垂　玉	(1.8)	0.7	0.6	〃	勾玉？・一部欠損
15	垂　玉	2.6	1.0	0.5	〃	両側穿孔
	原　石	1.8	1.6	1.0	〃	

表7　尾畑遺跡北Ⅱ区出土玉類観察表



第170図　尾畑遺跡北Ⅱ区出土玉類実測図

No.	器　種	縦長	横長	厚さ	重量	石　材	No.	器　種	縦長	横長	厚さ	重量	石　材
1	打製石鏃	1.6	1.4	0.3		姫島黒曜石	47	打製石鏃	2.6	1.55	0.5	1.5	姫島黒曜石
2	〃	1.65	1.7	0.3		〃	48	〃	2.3	1.55	0.4	1.2	〃
3	〃	1.7	1.3	0.3		〃	49	〃	2.2	1.55	0.45	0.9	〃
4	〃	1.8	1.45	0.25		〃	50	〃	2.35	1.65	0.5		〃
5	〃	1.7	1.4	0.3		〃	51	〃	2.5	1.3	0.4	1.2	〃
6	〃	1.7	1.8	0.2			52	〃	2.4	2.1	0.5	1.1	〃
7	〃	1.85	2.0	0.35	0.8	〃	53	〃	2.1	1.25	0.3	1.0	〃
8	〃	2.25	2.2	0.55		〃	54	〃	2.6	1.7	0.25	2.2	〃
9	〃	1.5	1.3	0.25		〃	55	〃	2.25	1.35	0.35	0.8	サヌカイト
10	〃	1.2	1.1	0.4	0.5	〃	56	〃	2.3	1.1	0.3	0.8	姫島黒曜石
11	〃	1.9	1.6	0.3	0.5	〃	57	〃	2.2	1.8	0.4	1.1	〃
12	〃	1.85	1.9	0.4		〃	58	〃	2.5	1.4	0.4	1.2	〃
13	〃	1.8	1.4	0.3	0.6	サヌカイト	59	〃	2.25	1.2	0.35	1.0	〃
14	〃	1.7	1.4	0.3		姫島黒曜石	60	〃	2.2	1.2	0.5		〃
15	〃	1.9	1.65	0.3		〃	61	〃	2.2	1.2	0.3	0.7	〃
16	〃	1.7	1.35	0.4		〃	62	〃	1.5	1.1	0.5		〃
17	〃	1.7	0.9	0.4	0.5	〃	63	〃	1.9	1.1	0.2		〃
18	〃	1.3	1.45	0.3	0.6	〃	64	〃	2.2	1.5	1.3	0.5	姫島黒曜石
19	〃	2.1	1.4	0.3	0.7	サヌカイト	65	〃	2.3	1.4	0.25		〃
20	〃	1.9	1.3	0.3	0.7	姫島黒曜石	66	〃	3.0	1.4	0.4	0.8	〃
21	〃	2.1	1.25	0.4	0.6	〃	67	〃	2.5	1.5	0.4		〃
22	〃	2.0	1.4	0.4		〃	68	〃	2.4	1.4	0.3	0.7	姫島黒曜石
23	〃	2.6	1.95	0.55	2.6	〃	69	〃	2.0	1.4	0.4		〃
24	〃	1.3	1.2	0.3		〃	70	〃	2.0	1.3	0.3		〃
25	〃	1.95	1.3	0.2		サヌカイト	71	〃	1.8	1.4	0.7	0.7	姫島黒曜石
26	〃	1.5	1.4	0.3		姫島黒曜石	72	〃	3.1	1.35	0.35	0.9	〃
27	〃	2.1	1.4	0.35		〃	73	〃	2.0	1.3	0.35	0.7	〃
28	〃	1.7	1.45	0.25	0.5	〃	74	〃	2.2	1.2	0.25	0.8	〃
29	〃	2.2	1.2	0.3		〃	75	〃	2.2	1.6	0.6		〃
30	〃	2.2	1.3	0.35	0.9	〃	76	〃	2.2	1.5	0.45	1.2	〃
31	〃	1.6	1.35	0.4	0.6	〃	77	〃	2.55	1.85	0.4		結晶片岩
32	〃	1.8	1.4	0.45	0.9	サヌカイト	78	〃	2.4	1.8	0.35		姫島黒曜石
33	〃	2.2	1.65	0.3	1.0	姫島黒曜石	79	〃	2.5	2.0	0.4	0.8	〃
34	〃	1.85	1.2	0.3		〃	80	〃	2.0	1.6	0.25		〃
35	〃	1.4	1.1	0.3	0.5	黒曜石？	81	〃	1.9	1.4	0.35	0.9	〃
36	〃	1.5	1.3	0.3		姫島黒曜石	82	〃	1.7	1.6	0.2	0.7	〃
37	〃	1.9	1.3	0.3	0.6	黒曜石	83	〃	2.7	1.8	0.7	2.6	〃
38	〃	1.8	1.3	0.3	0.9	姫島黒曜石	84	〃	2.25	1.7	0.7	2.1	〃
39	〃	2.0	1.55	0.25		〃	85	〃	2.9	1.6	0.5	2.2	〃
40	〃	2.1	1.65	0.5	1.3	〃	86	〃	2.4	1.75	0.45	1.6	〃
41	〃	2.2	1.35	0.3		〃	87	〃	1.6	1.8	0.5	1.3	〃
42	〃	1.9	1.4	0.45		〃	88	〃	2.9	2.0	0.35	1.4	〃
43	〃	1.8	1.2	0.4	0.8	〃	89	〃	1.8	1.1	0.25	0.6	〃
44	〃	2.2	22.5	0.7		〃	90	〃	2.25	1.15	0.5	1.0	〃
45	〃	2.4	1.4	0.4	1.3	〃	91	〃	2.25	1.3	0.25	0.7	サヌカイト
46	〃	2.3	1.55	0.5	1.5	〃	92	〃	1.7	1.2	0.4	1.1	〃

表8　尾畑遺跡北Ⅱ区出土石器観察表 (1)　（単位cm・g）

No.	器　種	縦長	横長	厚さ	重量	石　材
93	打製石鏃	1.85	1.7	0.25	0.8	姫島黒曜石
94	〃	1.8	1.4	0.4	0.9	〃
95	〃	1.9	1.5	0.4	0.9	〃
96	〃	1.7	1.3	0.5	1.1	〃
97	〃	2.4	1.6	0.6	2.4	〃
98	〃	2.0	1.4	0.3	1.2	〃
99	〃	2.1	1.4	0.4		〃
100	〃	2.2	1.5	0.45	1.2	〃
101	〃	3.2	1.45	0.3		〃
102	〃	2.4	1.3	0.3		〃
103	〃	2.5	1.3	0.6	1.3	〃
105	〃	2.3	1.3	0.4		〃
106	〃	2.5	1.5	0.3		サヌカイト
107	〃	2.8	1.8	0.35		姫島黒曜石
108	〃	2.6	1.55	0.25	1.0	〃
109	〃	2.9	1.45	0.2		〃
110	〃	3.2	1.3	0.35	1.1	〃
111	〃	2.65	1.3	0.7		〃
112	〃	2.4	1.4	0.4		〃
113	〃	2.9	1.6	0.3	1.5	姫島黒曜石
114	〃	2.0	1.1	0.3	0.3	安山岩
115	〃	2.15	1.4	0.35		姫島黒曜石
116	〃	2.4	1.2	0.4		〃
117	〃	2.65	1.7	0.25		〃
118	〃	2.0	1.85	0.4		〃
119	〃	3.2	1.4	0.35		〃
120	〃	2.2	1.6	0.4		〃
121	〃	3.2	1.8	0.3	1.3	〃
122	〃	3.3	1.1	0.3	1.3	〃
123	〃	2.0	0.8	0.3	0.5	〃
124	〃	1.8	1.4	0.35		〃
125	〃	2.1	1.7	0.4	1.0	〃
126	〃	2.05	1.7	0.5	1.2	〃
127	〃	2.4	1.7	0.35	1.0	〃
128	〃	2.7	1.8	0.25		〃
129	〃	2.4	1.25	0.6	1.7	〃
130	〃	2.4	1.5	0.3	1.2	〃
131	〃	2.7	1.4	0.25		腰岳黒曜石
132	〃	2.4	1.95	0.45		姫島黒曜石
133	〃	3.4	1.65	0.5		〃
134	〃	3.05	1.5	0.45		〃
135	〃	3.35	1.5	0.4		〃
136	〃	3.25	1.5	0.35	1.9	〃
137	〃	4.2	1.35	0.4		〃
138	〃	2.35	1.45	0.5	1.4	〃
139	〃		1.55	0.4	1.4	サヌカイト

No.	器　種	縦長	横長	厚さ	重量	石　材
140	打製石鏃	2.35	1.7	0.45	1.4	姫島黒曜石
141	〃	2.0	1.7	0.7	1.9	〃
142	〃	1.9	1.5	0.2	0.8	サヌカイト
143	〃	2.4	1.6	0.7	1.9	姫島黒曜石
144	〃	1.95	1.7	0.35	1.1	〃
145	〃	2.25	1.2	0.4		〃
146	〃	2.2	1.3	0.5	1.6	〃
147	〃	2.5	1.4	0.4	1.5	〃
148	尖頭状石器	2.5	2.1	0.45	2.0	〃
149	〃	2.4	1.7	0.9	3.5	〃
150	〃	2.5	1.45	0.4	1.3	〃
151	〃	2.6	1.6	0.4	1.8	〃
152	〃	2.4	1.6	0.45	1.3	〃
153	〃	2.15	1.7	0.6	1.8	〃
154	〃	2.4	1.6	0.3	1.1	サヌカイト
155	〃	2.4	2.0	0.35	2.3	姫島黒曜石
156	〃	2.3	1.4	0.7	2.0	〃
157	〃	2.4	1.8	0.6	1.8	〃
158	〃	2.6	1.9	0.7	2.8	〃
159	〃	2.85	1.95	0.45	1.8	〃
160	〃	2.6	2.1	0.5		〃
161	〃	2.4	1.9	0.5	1.5	姫島黒曜石
162	〃	2.3	1.7	0.7	2.4	〃
163	〃	2.6	1.9	0.7	3.7	〃
164	〃	2.7	1.8	0.4	1.9	〃
165	〃	2.5	1.6	0.4	2.1	〃
166	〃	2.6	1.65	0.5	2.2	〃
167	〃	2.35	1.3	0.6	1.5	〃
168	〃	2.55	1.9	0.45	2.7	〃
169	〃	2.75	1.9	0.85	3.2	〃
170	〃	2.6	2.1	0.7	2.6	〃
171	〃	2.85	1.8	0.7	3.9	〃
172	〃	2.65	1.85	0.6	3.0	〃
173	〃	3.0	2.25	0.9	3.7	〃
174	〃	2.4	1.8	0.4	1.9	〃
175	〃	2.8	1.8	0.9	4.0	〃
176	〃	2.7	1.9	0.8	3.6	〃
177	〃	3.1	2.3	0.7	4.6	〃
178	〃	3.2	2.1	1.2	7.2	〃
179	〃	3.5	2.3	0.7	5.8	〃
180	〃	3.85	2.9	1.05	8.1	〃
181	〃	2.8	1.3	0.6	2.1	〃
182	〃	2.75	1.4	0.4	1.4	〃
183	〃	3.7	1.8	0.95	4.5	〃
184	〃	3.65	2.2	0.6	4.8	サヌカイト
185	〃	3.9	2.1	0.95	6.7	姫島黒曜石

尾畑遺跡北Ⅱ区出土石器観察表 (2)　　（単位cm・g）

No.	器　種	縦長	横長	厚さ	重量	石　材	No.	器　種	縦長	横長	厚さ	重量	石　材
186	円形掻器	2.3	1.8	0.65	2.2	姫島黒曜石	232	石　核	5.7	3.5	2.2	10.7	姫島黒曜石
187	〃	2.65	2.0	0.7	3.0	〃	233	〃	5.4	5.0	2.3	50.6	〃
188	〃	2.9	2.0	0.85	3.6	〃	234	〃	5.3	6.8	1.1	29.5	〃
189	〃	2.9	1.9	0.6	3.7	サヌカイト	235	〃	1.9	3.0	2.9	13.5	〃
190	〃	2.7	1.85	0.6	3.7	姫島黒曜石	236	〃	5.0	3.6	2.3	40.5	〃
191	〃	2.5	1.7	0.4	1.6	〃	237	〃	8.1	4.6	1.9	66.7	〃
192	〃	2.9	1.95	0.6	4.0	〃	238	〃	5.2	5.7	2.7	40.9	〃
193	〃	2.35	1.8	0.6	3.8	〃	239	〃	4.5	6.8	4.7	85.1	〃
194	〃	3.0	1.9	0.8	4.4	〃	240	〃	5.2	9.2	2.1	105.4	〃
195	〃	2.45	2.5	0.75	4.3	〃	241	〃	4.2	7.1	4.3	152.6	〃
196	〃	2.5	2.6	0.6	4.1	〃	242	〃	6.0	8.6	2.5	91.6	〃
197	石　錐	2.0	1.2	0.3	0.7	〃	243	磨製石斧	5.4	2.35	1.2	26.8	結晶片岩
198	〃	2.1	1.3	0.5	1.2	〃	244	〃	7.1	2.9	1.0	41.0	蛇紋岩
199	〃	2.4	1.8	0.6	2.9	〃	245	〃	8.9	3.7	1.5	84.1	砂　岩
200	〃	2.7	2.4	1.0	5.0	〃	246	〃	10.5	4.8	1.6	110.7	結晶片岩
201	〃	3.1	1.4	0.3	2.1	〃	247	〃	8.65	3.45	1.25	57.6	蛇紋岩
202	〃	3.4	3.1	0.9	9.0	〃	248	〃	9.95	4.3	1.6	105.0	〃
203	異形石器	0.95	4.8	0.8	3.5	〃	249	〃	11.3	4.4	1.7	125.1	結晶片岩
204	〃	0.6	3.1	0.35	0.9	サヌカイト	250	〃	10.0	3.3	1.5	73.1	輝石安山岩
205	〃	0.7	4.2	0.7	2.6	姫島黒曜石	251	〃	13.4	4.2	2.25	185.8	結晶片岩
206	〃	0.5	2.5	0.4	1.2	〃	252	〃	13.6	4.7	1.2	111.5	〃
207	〃	0.95	3.5	0.6	2.2	〃	253	〃	11.2	5.0	1.5	117.4	〃
208	〃	0.85	4.55	0.6	2.6	〃	254	〃	12.6	4.4	2.1	198.9	〃
209	〃	1.0	3.6	0.6	1.6	〃	255	〃	10.5	5.3	1.3	119.4	〃
210	掻　器	8.8	2.6	0.8	14.3	サヌカイト	256	〃 ?	11.6	7.0	1.2		〃
211	〃	3.8	1.7	0.4	4.5	淡黒色黒曜石	257	〃 ?	9.6	8.25	1.3	182.5	〃
212	〃	5.8	2.5	0.7	9.4	サヌカイト	258	〃	9.4	4.8	2.2	151.8	〃
213	〃	4.2	5.3	0.75	17.3	〃	259	〃	10.3	3.95	2.0	141.0	蛇紋岩
214	〃	4.15	6.1	0.6	13.5	〃	260	〃	12.1	4.65	2.5	220.2	〃
215	〃	4.1	7.45	1.1	33.5	〃	261	〃	12.0	3.8	2.6	177.3	輝石安山岩
216	〃	9.3	5.5	0.8	41.7	〃	262	〃	12.3	6.3	2.9	326.4	結晶片岩
217	石　匙	8.4	3.4	0.9	28.9	〃	263	〃	13.5	5.5	3.3	383.9	蛇紋岩
218	掻　器	9.8	0.8	1.0	27.3	〃	264	〃	12.5	5.1	2.7	313.3	輝石安山岩
219	〃	13.0	8.8	1.7	191.4	〃　?	265	〃	12.75	4.65	2.9	248.8	結晶片岩
220	二次加工	5.5	3.1	0.9	10.6	姫島黒曜石	266	〃	15.7	5.15	2.85	428.1	〃
221	〃	3.8	4.1	0.8	36.9	〃	267	〃	16.1	4.2	2.5	288.3	〃
222	〃	4.9	4.1	1.1	21.3	〃	268	〃	13.8	4.45	2.6	274.9	〃
223	〃	4.5	4.1	1.1	16.3	〃	269	〃	12.3	3.8	3.05	228.3	輝石安山岩
224	〃	3.7	8.0	1.5	25.8	〃	270	〃	16.1	6.7	3.0	430.9	結晶片岩
225	〃	5.2	5.1	1.6	21.1	〃	271	磨製石斧	13.0	5.1	3.7	407.6	〃
226	〃	5.9	6.6	1.5	47.7	〃	272	〃	11.5	6.3	4.5	534.5	蛇紋岩
227	〃	4.7	5.8	2.1	43.0	〃	273	〃	12.8	5.6	3.25	365.5	結晶片岩
228	掻　器	8.5	7.0	3.3	143.3	〃	274	〃	12.8	6.75	5.35	782.4	ヒン岩
229	剥　片	8.7	2.8	2.1	43.4	〃	275	扁平石斧	7.75	5.4	1.5	60.8	〃
230	石　核	3.0	3.2	2.5	16.6	〃	276	〃	8.3	4.95	1.1	70.9	結晶片岩
231	〃	2.1	5.6	3.6	25.7	〃	277	〃	11.45	6.6	1.2	127.4	〃

尾畑遺跡北Ⅱ区出土石器観察表 (3)　　（単位cm・g）

No.	器　種	縦長	横長	厚さ	重量	石　材	No.	器　種	縦長	横長	厚さ	重量	石　材
278	扁平石斧	13.2	5.2	1.95	191.5	結晶片岩	324	扁平石斧	11.25	3.1	0.9	154.0	結晶片岩
279	〃	13.0	6.75	1.75	170.1	ヒン岩	325	〃	11.95	3.0	1.6	49.1	〃
280	〃	12.15	5.35	1.75	189.5	結晶片岩	326	〃	11.85	3.6	0.8	121.1	〃
281	〃	13.8	6.45	1.2	199.9	〃	327	〃	13.0	3.0	0.6	71.7	〃
282	〃	11.1	4.3	1.0	96.5	〃	328	〃	9.65	3.9	1.0	43.9	ヒン岩
283	〃	13.6	5.7	1.4	150.2	〃	329	〃	9.5	3.85	0.9	61.1	結晶片岩
284	〃	10.8	6.9	1.45	176.8	ヒン岩	330	〃	10.55	2.8	1.35	60.7	〃
285	〃	12.4	6.1	0.9	124.0	〃	331	〃	13.9	3.7	0.9	63.1	〃
286	〃	12.1	7.6	1.3	127.9	結晶片岩	332	〃	12.35	4.0	0.8	70.4	安山岩
287	〃	11.9	6.55	1.4	163.0	〃	333	〃	9.45	7.5	1.3	69.3	ヒン岩
288	〃	14.3	7.1	1.7	214.1	〃	334	〃	7.6	8.25	1.8	98.6	〃
289	〃	13.5	7.15	1.25	150.0	ヒン岩	335	〃	8.75	11.15	2.4	133.9	〃
290	〃	13.6	6.6	1.4	166.9	結晶片岩	336	〃	12.85	5.25	1.95	304.0	結晶片岩
291	〃	12.6	6.5	1.62	154.0	〃	337	〃	14.6	7.15	2.7	186.4	〃
292	〃	13.4	7.9	1.25	176.8	〃	338	〃	14.2	7.35	2.7	298.2	ヒン岩
293	〃	15.25	8.35	1.3	181.5	〃	339	〃	13.8	8.1	1.8	428.6	〃
294	〃	10.6	5.9	1.9	104.1	ヒン岩	340	〃	14.6	8.85	1.75	333.0	〃
295	〃	9.7	5.7	0.7	68.9	結晶片岩	341	〃	14.5	8.3	2.1	314.2	〃
296	〃	11.65	7.2	1.3	158.9	〃	342	〃	14.25	6.2	1.1	393.2	結晶片岩
297	〃	14.15	7.2	2.1	295.3	ヒン岩	343	〃	15.2	7.7	1.6	108.0	〃
298	〃	12.0	3.8	0.95	58.7	結晶片岩	344	〃	18.1	9.8	1.5	272.2	〃
299	〃	12.0	4.5	1.7	136.7	〃	345	〃	14.5	13.3	0.8	292.3	溶結凝灰岩
300	〃	13.5	4.65	1.65	159.5	〃	346	〃	11.5	11.1	1.5	150.4	〃
301	〃	10.7	4.4	1.6	140.7	〃	347	〃	10.4	11.55	1.4		安山岩
302	〃	12.5	4.4	1.0	91.2	〃	348	円形石器	6.4	5.8	1.1	151.2	ヒン岩
303	〃	13.3	4.8	1.55	168.7	〃	349	〃	5.25	5.25	1.10	49.3	結晶片岩
304	〃	11.0	4.5	1.0	73.1	〃	350	〃	5.5	5.4	1.0	50.6	〃
305	〃	12.6	5.4	1.4	170.6	〃	351	〃	5.9	6.2	0.9		〃
306	〃	7.4	5.05	0.9	57.0	〃	352	〃	7.1	6.8	0.9	38.5	〃
307	〃	9.2	6.8	1.5	151.4	ヒン岩	353	〃	7.8	7.4	0.95	79.8	〃
308	〃	11.2	4.9	1.5	123.8	結晶片岩	354	〃	6.75	7.55	1.1	83.1	〃
309	〃	11.4	6.95	1.5	165.4	〃	355	〃	9.2	6.6	1.2	79.5	〃
310	〃	12.25	7.7	1.85	220.5	〃	356	〃	8.7	6.8	0.9	140.2	〃
311	〃	13.5	8.0	1.75	301.2	〃	357	〃	6.8	5.95	1.65	84.4	ヒン岩
312	〃	12.9	7.7	1.4	164.9	〃	358	〃	8.2	5.9	1.35	92.7	結晶片岩
313	〃	13.95	6.9	1.2	168.8	ヒン岩	359	〃	7.0	5.5	1.2	91.6	〃
314	〃	12.9	7.8	1.5	193.8	〃	360	〃	6.8	6.15	1.2	79.4	〃
315	〃	12.15	6.7	1.15	150.2	結晶片岩	361	〃	7.0	7.55	1.0	101.7	〃
316	〃	13.75	7.1	1.8	241.3	ヒン岩	362	〃	7.0	7.50	1.15	92.2	ヒン岩
317	〃	16.1	8.3	2.45	412.9	結晶片岩	363	〃	7.25	7.5	1.5	75.7	結晶片岩
318	〃	13.4	6.7	1.4	177.2	ヒン岩	364	〃	7.6	8.0	0.9	118.2	ヒン岩
319	〃	14.8	8.15	1.35	259.5	結晶片岩	365	〃	10.35	8.3	1.1	88.1	結晶片岩
320	〃	11.75	5.25	1.65	103.8	〃	366	〃	9.8	7.75	1.55	127.4	ヒン岩
321	〃	15.3	7.0	1.4	294.1	ヒン岩	367	〃	10.6	10.7	1.95	145.2	〃
322	〃	16.1	6.65	1.6	197.0	結晶片岩	368	〃	7.25	6.4	1.1	93.7	結晶片岩
323	〃	14.8	5.6	1.3	154.0	〃	369	〃	8.3	8.55	0.9	110.8	〃

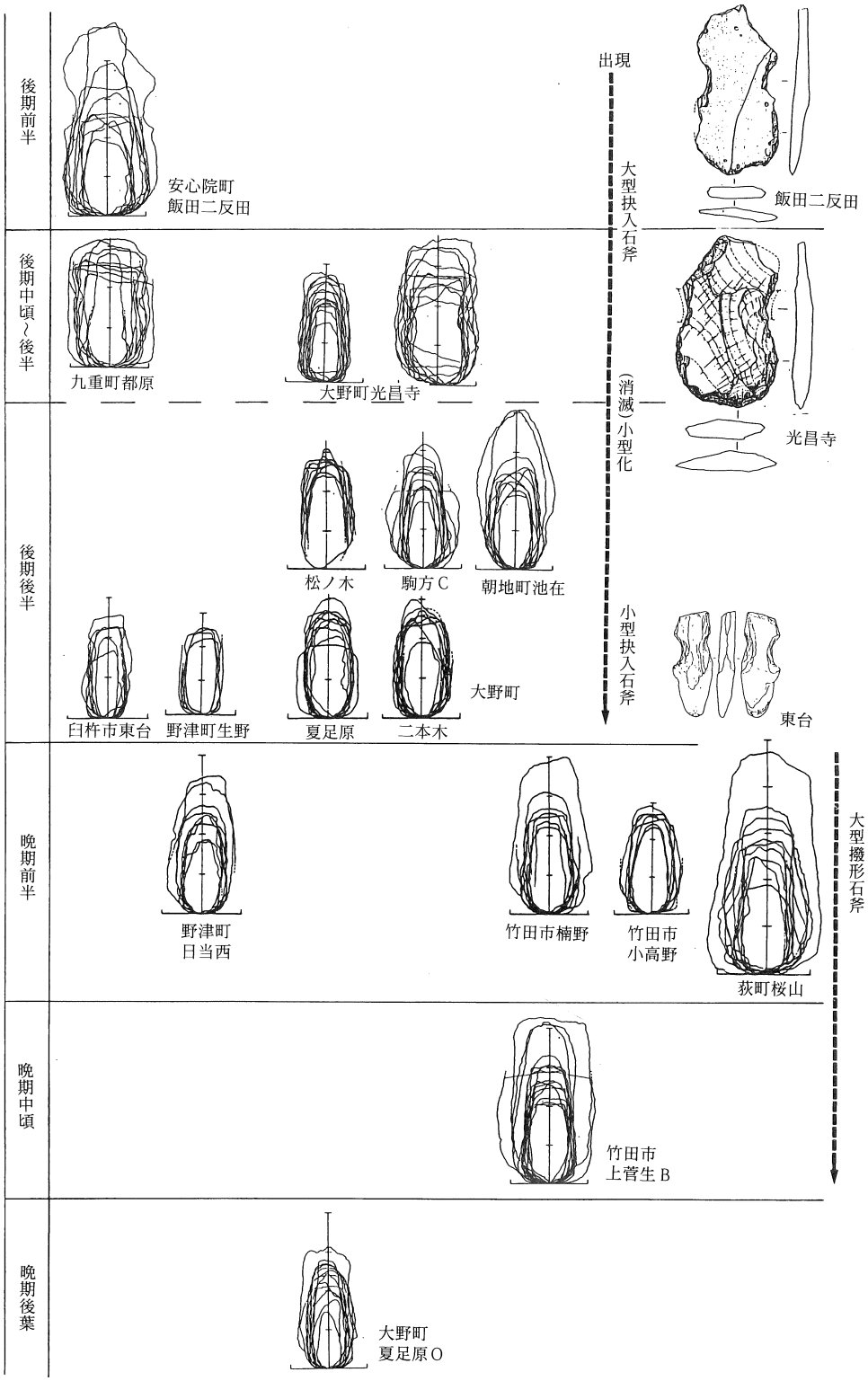
尾畑遺跡北Ⅱ区出土石器観察表 (4)　　（単位cm・g）

No.	器　種	縦長	横長	厚さ	重量	石　材	No.	器　種	縦長	横長	厚さ	重量	石　材
370	円形石器	9.90	7.70	1.4	110.8	ヒン岩	416	磨石敲打石	9.3	11.85	4.35	769.8	安山岩
371	〃	9.50	9.05	1.4	158.3	結晶片岩	417	〃	8.7	10.9	3.85	582.4	〃
372	〃	7.9	6.5	1.3	207.6	〃	418	凹　石	5.1	5.3	2.6	107.0	〃
373	〃	10.0	10.3	1.2	131.6	ヒン岩	419	〃	6.5	7.8	3.3	204.9	〃
374	〃	10.95	9.7	1.75	167.0	〃	420	〃	5.3	6.35	?	290.7	〃
375	〃	8.95	10.45	1.65	192.3	溶結凝灰岩	421	〃	8.7	6.9	4.1	310.5	〃
376	〃	7.85	9.75	1.9	181.8	ヒン岩	422	〃	9.1	4.0	3.5	161.9	〃
377	〃	7.8	10.0	1.4	206.0	〃	423	〃	7.5	8.5	4.4	289.6	〃
378	〃	7.9	9.45	1.2		〃	424	〃	5.5	8.6	3.6	214.9	〃
379	〃	8.6	10.8	1.15	116.1	〃	425	〃	9.15	8.6	3.1	309.0	〃
380	〃	5.7	13.0	1.0	161.2	安山岩	426	〃	9.45	8.95	2.85	333.4	〃
381	〃	9.75	8.9	2.5	125.2	ヒン岩	427	〃	11.0	9.0	4.5	745.8	〃
382	〃	8.65	10.9	2.5	303.7	安山岩	428	〃	8.55	7.8	4.0	427.4	〃
383	大型 〃	17.05	16.75	3.95	263.5	〃	429	〃	13.4	10.6	5.85	1250	〃
384	〃	9.3	18.6	2.4	1600	〃	430	〃	13.15	11.3	6.6	1000	〃
385	〃	18.1	14.4	2.8	513.3	火山灰質　〃	431	〃	10.9	7.9	5.8	632.7	〃
386	砥　石	10.45	8.65	2.4	1300	安山岩	432	礫石錘	3.2	2.5	1.05	11.0	〃
387	〃	5.4	7.0	5.3	296.1	〃	433	〃	3.35	3.1	1.0	13.0	〃
388	〃	5.0	3.5	3.05	327.5	軽　石	434	〃	4.2	3.35	1.3	25.0	〃
389	〃	5.9	5.3	4.0	64.4	〃	435	〃	4.25	3.4	1.1	20.0	〃
390	〃	8.3	5.05	3.75		〃	436	〃	3.7	4.1	0.8	11.0	〃
391	〃	21.8	14.8	13.0	113.8	安山岩	437	〃	3.35	3.0	1.35	22.0	〃
392	〃	8.1	5.45	3.0	3000	砂　岩	438	〃	4.3	3.15	1.7	29.0	〃
393	〃	7.1	5.3	4.6	269.1	〃	439	〃	3.45	3.4	1.75	24.0	〃
394	〃	4.95	2.4	1.3		?	440	〃	4.05	3.4	1.65	34.0	〃
395	〃	8.6	4.9	1.1	34.9	サヌカイト	441	〃	4.4	3.55	1.2	37.0	〃
396	〃	10.2	6.45	1.0	83.4	〃	442	〃	4.3	3.35	1.15	13.0	〃
397	〃	10.65	3.35	3.2	132.1	安山岩	443	〃	4.15	4.0	1.0	18.0	〃
398	〃	11.5	6.15	2.3	276.0	砂　岩	444	〃	4.75	4.2	2.2	58.2	〃
399	〃	13.3	8.5	2.3	194.1	〃	445	〃	5.1	3.6	1.45	31.0	〃
400	〃	17.1	6.8	4.0		安山岩	446	〃	4.7	3.8	1.95	55.0	〃
401	磨　石	4.1	4.2	3.0	912.9	〃	447	〃	4.5	4.65	1.3	42.0	〃
402	〃	6.8	7.8	2.7	70.3	〃	448	〃	4.65	4.5	2.05	60.0	〃
403	〃	9.9	6.6	6.0	202.3	〃	449	〃	6.05	4.4	2.75	73.0	〃
404	〃	9.6	8.3	5.9	450.4	〃	450	〃	4.7	4.2	1.45	40.0	〃
405	〃	6.6	8.35	3.7	815.3	〃	451	〃	5.25	3.8	1.4	38.0	〃
406	〃	10.2	7.0	5.2	373.7	〃	452	〃	5.3	4.85	2.1	61.0	〃
407	〃	10.4	6.1	6.4	611.3	溶結凝灰岩	453	〃	5.2	4.9	1.2	43.0	〃
408	〃	11.2	8.4	3.8	579.2	安山岩	454	〃	4.7	4.4	2.6	67.0	〃
409	〃	7.25	11.7	6.05	515.9	〃	455	〃	5.5	4.05	1.8	44.0	〃
410	〃	7.5	11.95	5.5	791.1	〃	456	〃	4.9	4.45	1.6	47.0	〃
411	〃	16.7	8.9	3.05	689.7	〃	457	〃	4.65	4.0	1.7	39.0	〃
412	敲打石？	8.2	5.1	1.5		〃	458	〃	4.9	3.0	1.0	19.0	〃
413	磨石敲打石	9.7	7.0	4.4	518.0	石　英	459	〃	4.75	4.65	1.65	62.0	〃
414	〃	11.4	10.2	4.55	806.0	安山岩	460	〃	5.8	4.5	1.8	52.0	〃
415	磨凹敲石	12.2	6.3	3.4	455.7	〃	461	〃	5.7	5.15	2.2	95.0	〃

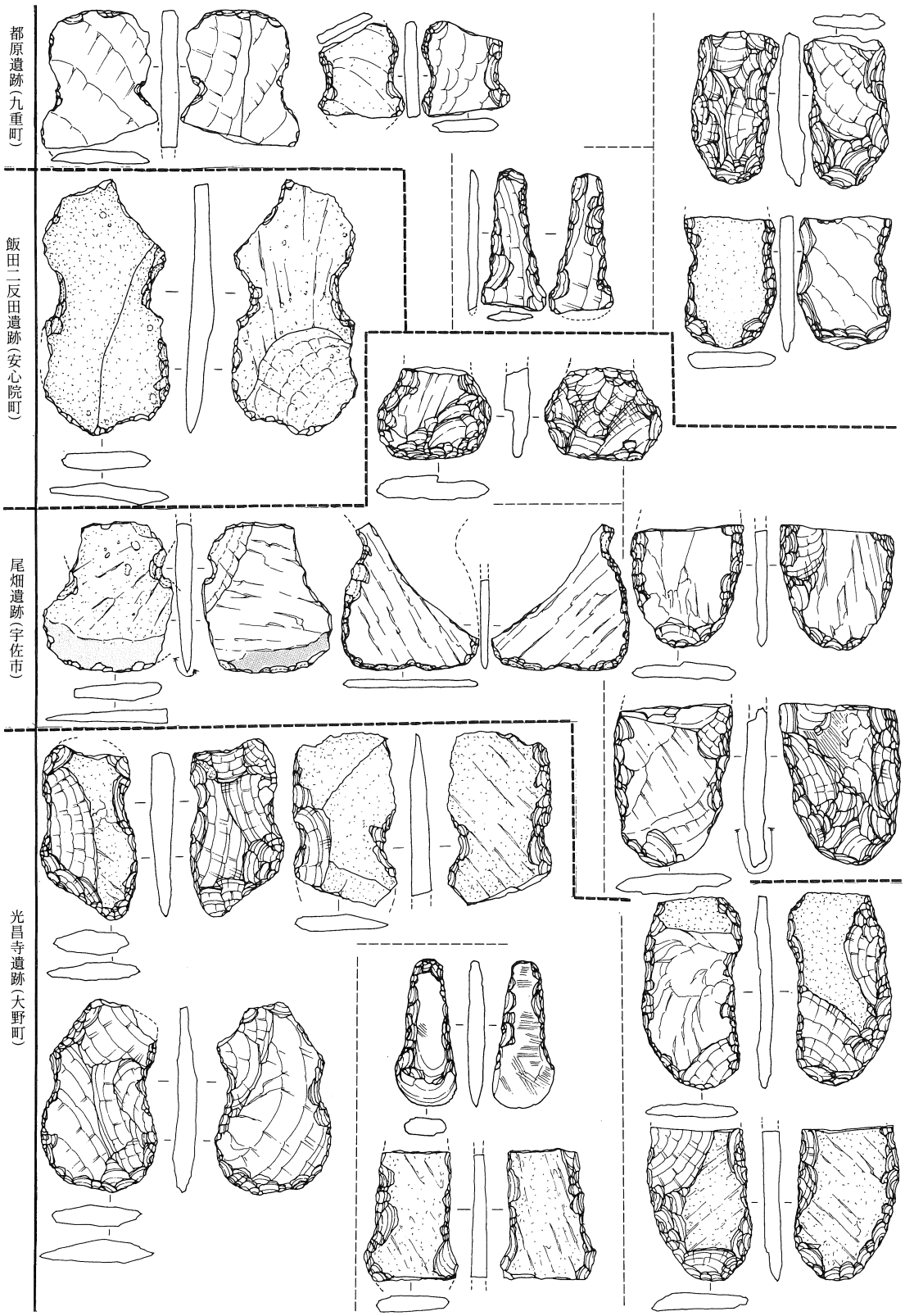
尾畑遺跡北Ⅱ区出土石器観察表 (5)　　（単位cm・g）

No.	器　種	縦長	横長	厚さ	重量	石　材	No.	器　種	縦長	横長	厚さ	重量	石　材
462	礫石錘	5.0	4.5	1.55	64.0	安山岩	492	礫石錘	6.1	6.25	2.0	85.0	安山岩
463	〃	5.65	4.45	1.45	44.0	〃	493	〃	7.8	7.8	1.9	169.0	〃
464	〃	5.45	3.9	2.0	84.0	〃	494	〃	6.56	6.9	1.75	136.4	〃
465	〃	5.9	3.7	1.4	48.0	〃	495	〃	7.65	9.45	2.6	159.0	〃
466	〃	5.55	4.95	1.6	52.0	〃	496	〃	6.8	5.9	2.2	122.0	〃
467	〃	5.75	5.4	1.85	85.0	〃	497	〃	8.15	7.1	2.15	241.0	〃
468	〃	6.15	5.05	2.2	90.0	〃	498	〃	9.75	6.8	2.1	152.0	〃
469	〃	5.85	5.0	2.15	74.0	〃	499	〃	6.3	5.05	1.5	66.0	〃
470	〃	5.35	4.35	1.65	52.0	〃	500	〃	5.8	5.65	1.75	77.0	〃
471	〃	6.15	5.1	2.2	99.0	〃	501	〃	6.85	7.0	2.4	182.0	〃
472	〃	6.85	5.3	1.9	94.0	〃	502	〃	7.0	7.4	2.0	502.0	〃
473	〃	4.45	5.0	2.8	110.0	〃	503	〃	5.9	5.0	1.75	77.0	〃
474	〃	6.75	4.85	1.7	78.0	〃	504	〃	6.8	7.0	1.7	117.0	〃
475	〃	5.5	4.9	1.7	69.0	〃	505	〃	6.1	6.2	1.95	89.0	〃
476	〃	6.35	5.35	1.9	86.0	〃	506	〃	3.9	7.0	2.6	92.0	〃
477	〃	6.75	5.0	1.95	93.0	〃	507	〃	5.3	7.05	1.45	79.0	〃
478	〃	7.5	4.6	2.0	127.0	〃	508	〃	6.4	10.05	3.02	247.0	〃
479	〃	5.5	4.95	2.1	68.0	〃	509	〃	6.2	9.4	2.05	165.0	〃
480	〃	5.15	5.4	3.1	102.0	〃	510	〃	6.0	4.6	1.45	47.0	〃
481	〃	6.35	5.7	3.0	132.0	〃	511	〃	9.3	6.85	2.65	223.0	〃
482	〃	6.4	5.0	1.8	83.0	〃	512	切目石錘	5.65	4.9	1.0	35.0	ヒン岩
483	〃	6.4	4.55	1.3	45.0	〃	513	〃	5.35	5.5	1.95	91.5	砂　岩
484	〃	7.5	5.0	1.9	94.0	〃	514	〃	9.5	9.95	1.5	205.5	安山岩
485	〃	6.8	6.1	2.1	118.0	〃	515	十字形石器	9.9	6.7	1.0	69.6	?
486	〃	6.95	5.7	1.7	100.0	〃	516	〃	10.1	8.3	1.5	102.3	溶結凝灰岩
487	〃	6.2	5.9	1.6	74.0	〃	517	〃	7.8	4.0	0.6	18.1	結晶片岩
488	〃	7.25	5.8	1.9	92.0	〃	518	石　刀	8.3	3.7	1.0	47.2	〃
489	〃	6.5	6.7	1.9	106.0	〃	519	〃	7.9	3.8	1.0	38.8	〃
490	〃	6.4	5.95	2.4	127.0	〃	520	〃	9.2	3.3	1.2	67.6	〃
491	〃	7.5	6.85	1.9	116.0	〃	521	〃	23.0	4.2	0.9	151.9	領家結晶片岩

尾畑遺跡北Ⅱ区出土石器観察表 (6)　　（単位cm・g）



第171図　県内縄文時代後・晩期扁平打製石斧変遷図



第172図　縄文時代後期前葉～中葉に特徴的な石斧類

奈良時代の遺構と遺物（第72図、第173図、第174図）

この時期の遺構としては、河岸段丘に沿って掘られた3条の溝がある。溝1は溝4を切って構築されている。溝はすべて南東から北西に向かって緩く傾斜しており、起点を南Ⅰ区付近にもつ水路と思われる。

溝1は長さ90m、幅0.9〜2.5mで、深さは0.9mの規模をもつ。溝の横断面は逆台形の深い形状を呈する。溝内の堆積土を観察すると、a－a′位置で上から1層茶黒褐色土層、2層混1層、砂質暗黄褐色土層、3層混1層・灰褐色土、暗茶褐色土層、4層混灰褐色土、黒茶褐色土層、5層混砂質黄褐色土、黒黄褐色土層、6層混砂質黄褐色土、灰褐色土層、7層混砂質黄褐色土若干、灰褐色粘質土層、8層黒色土若干、灰褐色粘質土層、9層茶黒褐色砂質土層、10層黄褐色砂質土層となっている。1〜6層は周辺に形成されていた縄文時代の包含層が流入して堆積したものである。下層の7・8層は還元層となっており、冠水状態であったことを示している。

溝2は調査区南辺から北西15mほどが残っていた。幅は0.6m〜0.7mと細い。

溝3は調査区南辺から溝1・2と並行して北西へ伸び、47mほどが残っていた。幅1m〜3mで、深さは0.9mの規模をもつ。溝の横断面をみると、上半部は緩い傾斜をもつが、底面に近い部分は矩形を呈している。

溝4は溝1に切られているが、この中央付近から東に偏して35mほど伸び、その先は不鮮明となる。幅は1m〜1.5mで、深さは0.9mほどである。溝の横断面は逆台形を呈す。溝内堆積土は溝1と同様に上半部に流入土がみられ、底面に近い部分では堆積土が還元されており冠水状態であったことが確認できる。この上面からは8世紀後半代の須恵器2点が出土しており、溝の時期を確定できた。

その他の遺構（第175図）

土坑4基がある。土坑には弥生土器の細片が若干出土しているものもあり、時期は不明確ながら弥生前期頃が考えられる。

土坑1は調査区北部の溝1に接して位置する。平面形は円形を呈す。規模は径1m〜1.1m、確認面からの深さ0.15mである。

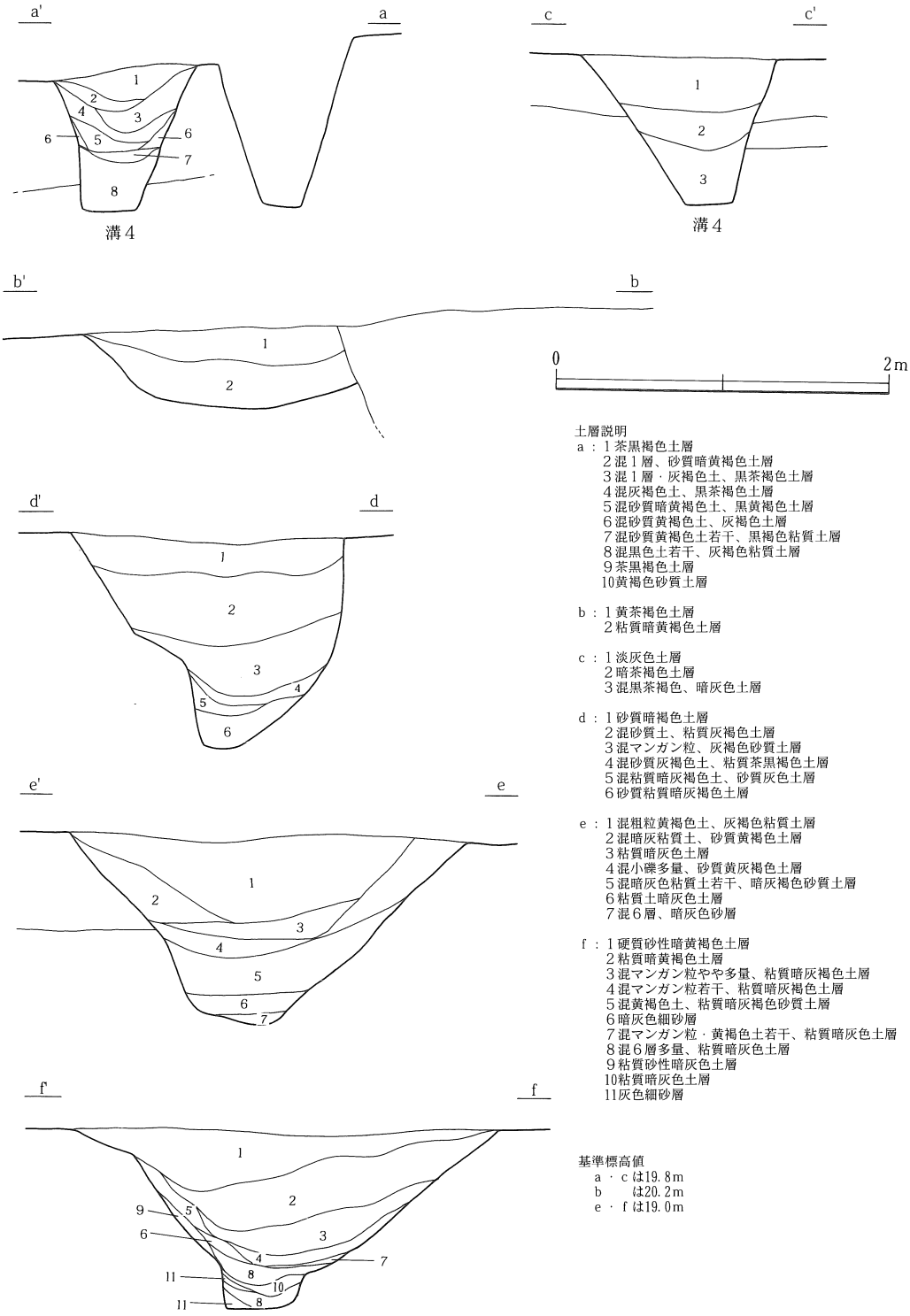
土坑2は土坑1の東側に位置し北半部を溝1に切られている。径1mほどの円形土坑と考えられる。確認面からの深さは0.25mである。

土坑3は土坑1の北10mに位置する。偏楕円形の平面形をもち、規模は径1.2m〜0.7m、確認面からの深さ0.1mである。

土坑4は調査区東部の中央に位置する。不整円形の平面形をもち、規模は径2m〜1.5m、確認面からの深さ0.6mである。

出土遺物（第181図7・8）

溝4から出土した須恵器の高台付坏2点がある。7は直線的に伸びる体部をもち、体部下端



土層説明

a：1茶黒褐色土層
　2混1層、砂質暗黄褐色土層
　3混1層・灰褐色土、黒茶褐色土層
　4混灰褐色土、黒茶褐色土層
　5混砂質暗黄褐色土、黒黄褐色土層
　6混砂質黄褐色土、灰褐色土層
　7混砂質黄褐色土若干、黒褐色粘質土層
　8混黒色土若干、灰褐色粘質土層
　9茶黒褐色土層
　10黄褐色砂質土層

b：1黄茶褐色土層
　2粘質暗黄褐色土層

c：1淡灰色土層
　2暗茶褐色土層
　3混黒茶褐色、暗灰色土層

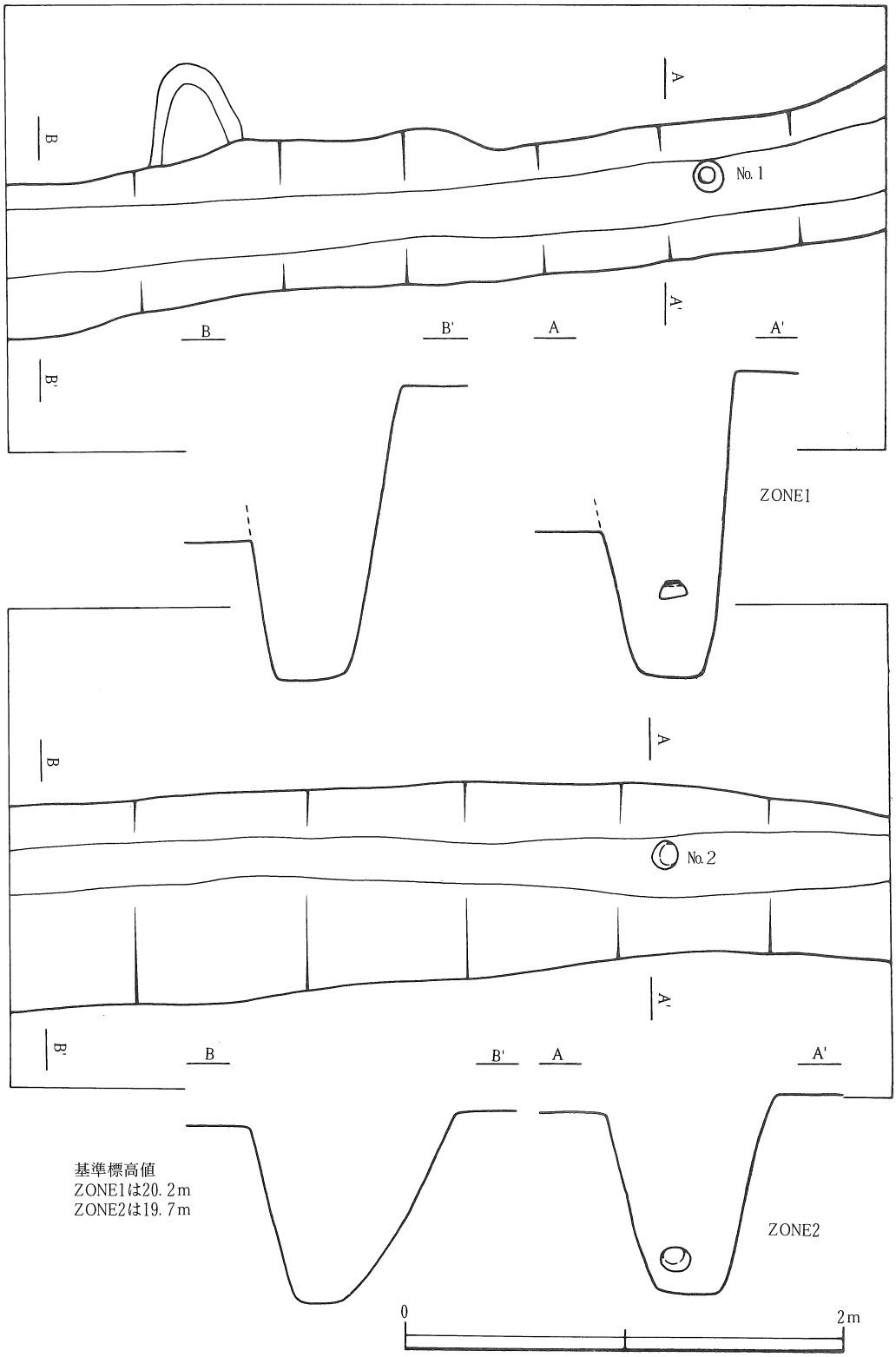
d：1砂質暗褐色土層
　2混砂質土、粘質灰褐色土層
　3混マンガン粒、灰褐色砂質土層
　4混砂質灰褐色土、粘質茶黒褐色土層
　5混粘質暗灰褐色土、砂質灰色土層
　6砂質粘質暗灰褐色土層

e：1混粗粒黄褐色土、灰褐色粘質土層
　2混暗灰粘質土、砂質黄褐色土層
　3粘質暗灰色土層
　4混小礫多量、砂質黄灰褐色土層
　5混暗灰色粘質土若干、暗灰褐色砂質土層
　6粘質土暗灰色土層
　7混6層、暗灰色砂層

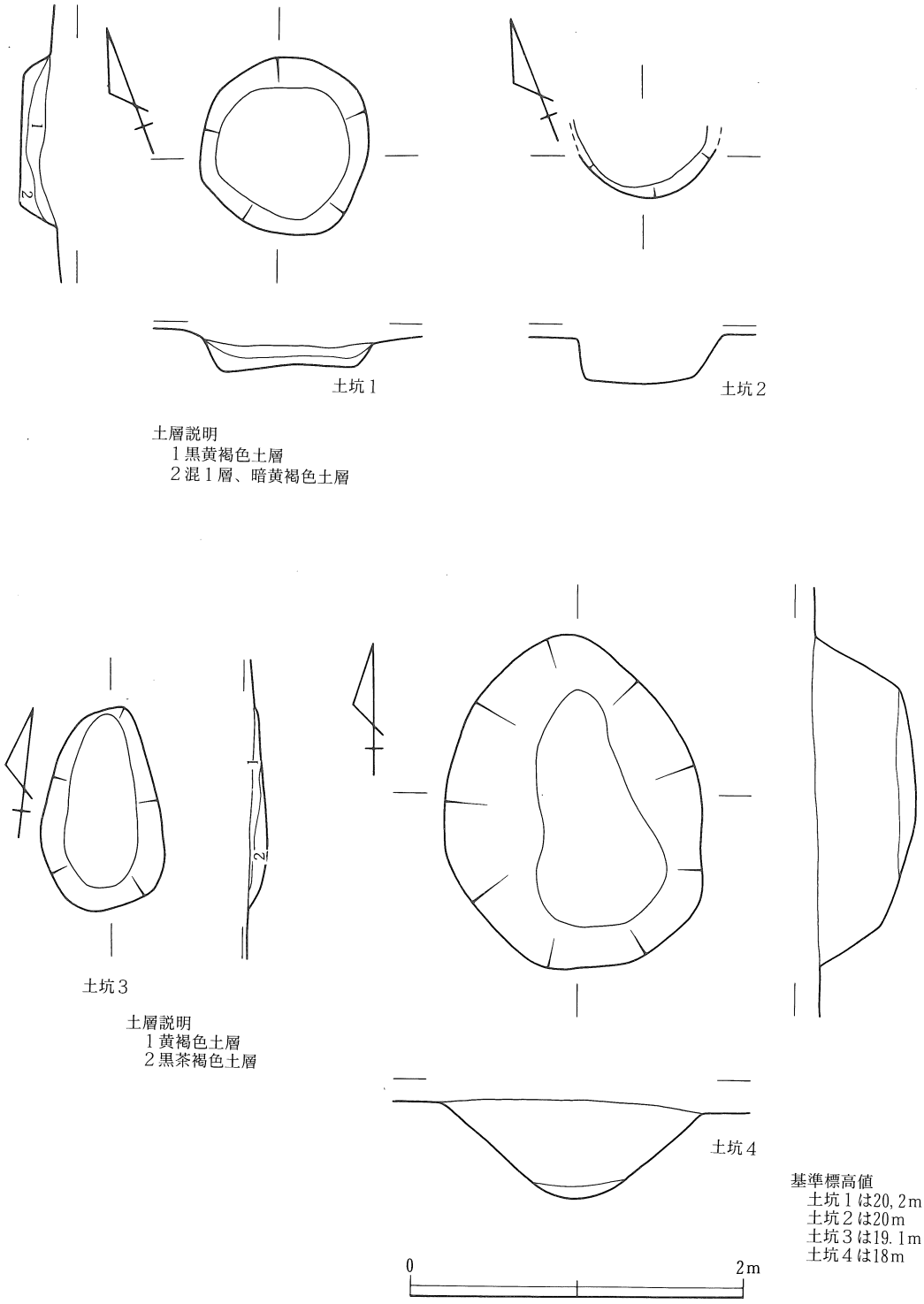
f：1硬質砂性暗黄褐色土層
　2粘質暗黄褐色土層
　3混マンガン粒やや多量、粘質暗灰褐色土層
　4混マンガン粒若干、粘質暗灰褐色土層
　5混黄褐色土、粘質暗灰褐色砂質土層
　6暗灰色細砂層
　7混マンガン粒・黄褐色土若干、粘質暗灰色土層
　8混6層多量、粘質暗灰色土層
　9粘質砂性暗灰色土層
　10粘質暗灰色土層
　11灰色細砂層

基準標高値
　a・cは19.8m
　b　　は20.2m
　e・fは19.0m

第173図　尾畑遺跡北Ⅱ区溝土層断面図



第174図　尾畑遺跡北Ⅱ区溝４遺物出土状態実測図



第175図　尾畑遺跡北Ⅱ区土坑実測図

に丸みを帯びた低い高台が付く。器面調整は横ナデで行われ、底部は回転ヘラ切り後、ナデ、内面に一方向のナデが施されている。口径12.4㎝、器高４㎝の大きさである。胎土には角閃石・石英など含む。焼成は良好で灰褐色を呈する。８は体部から直線的に伸び、口縁部で短く外反する。高台は台形をなし、外端で接地する。調整は７と同様に横ナデ、底部の回転ヘラ切り、ナデがみられる。大きさは口径13㎝、器高4.6㎝である。胎土に角閃石を含み、焼成は良好で暗灰色～黒灰色を呈する。

6　北Ⅲ区の調査（第176図～第183図）

この地区は北Ⅱ区の北西に連接する範囲であり、さらに北西の横山遺跡南地区とも連続する位置関係にある。調査区の結果、弥生時代の遺構では前期の土坑８基、溝６条を検出した。

土坑（第177、178図）

調査区西半部に分布し、西部に１・４・６、やや北部に２・３・５、中央部に７・８と３つの纏まりがみられる。

土坑１は歪な長方形を呈す。長さ1.9ｍ、幅１ｍ、深さ0.15ｍの規模である。土坑内の遺物は弥生前期の土器片が若干出土している。

土坑２は不整円形で長径1.4ｍ、短径１ｍ、深さ0.3ｍの規模である。

土坑３は溝５に中央部を切られているが、隅丸方形を呈する。長さ2.3ｍ、幅1.8ｍ、深さ0.25ｍの規模である。土坑内から器形の明確な弥生前期の土器が出土した。

土坑４は楕円形を呈し、長径2.1ｍ、短径1.1ｍ、深さ0.1ｍの規模である。

土坑５は溝６に中央部を切られた不整形の土坑である。長さ2.2ｍ、幅0.5ｍであるが、深さは0.05ｍほどしか残っていなかった。土坑内からは弥生前期の土器が多く出土した。

土坑６は不整円形を呈し、長さ1.6ｍ、幅１ｍ、深さは0.14ｍほどであった。

土坑７は丸みを帯びた方形を呈し、長さ２ｍ、幅1.6ｍ、深さは0.2ｍほどであった。

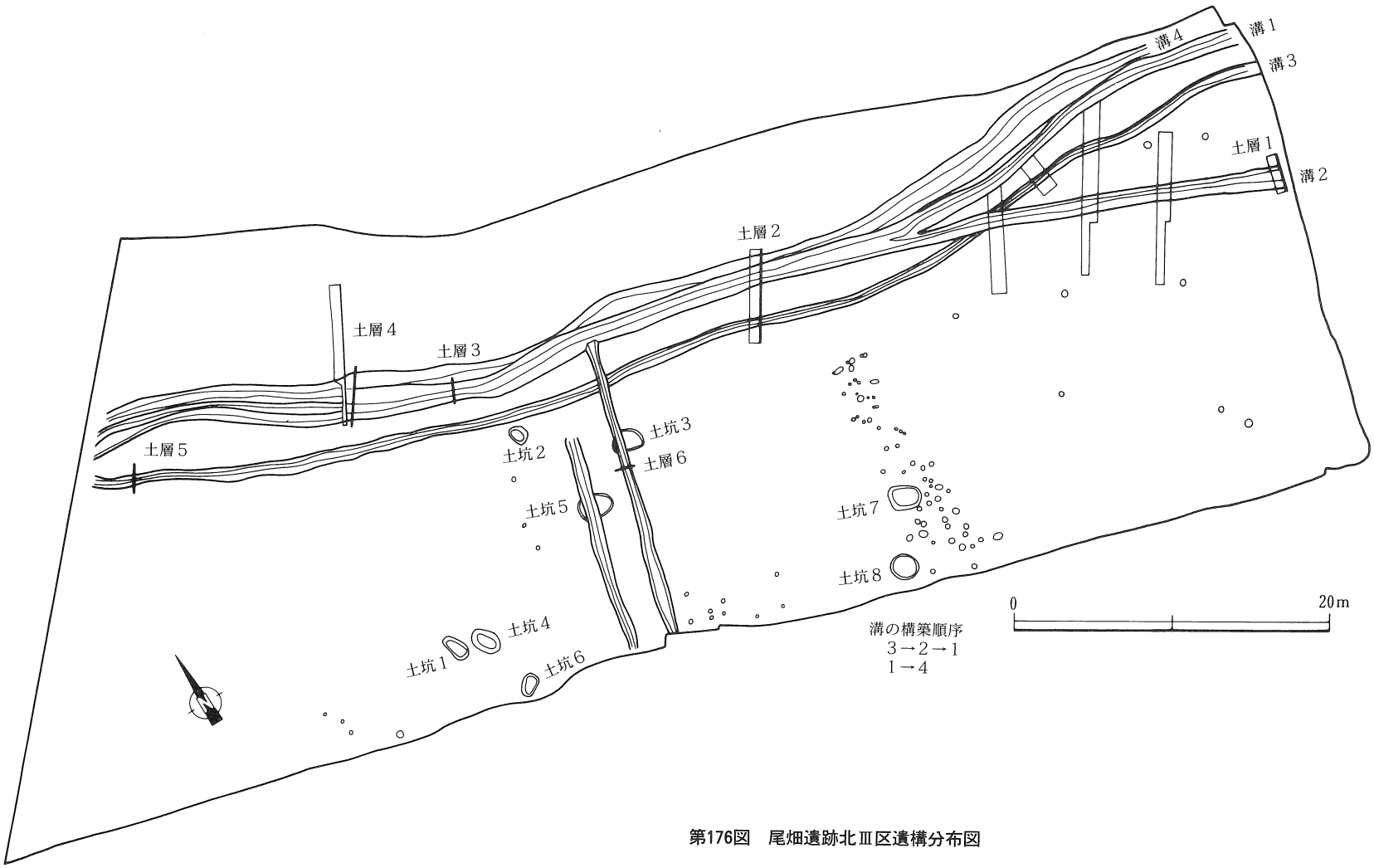
土坑８は径1.5ｍ～1.7ｍの円形を呈し、深さは0.17ｍであった。

土坑１・３・５からは弥生前期の土器が出土している。他の土坑については時期を決定するに足りる遺物はないが、少量出土した土器細片をみるとほぼ同時期のものと考えられる。

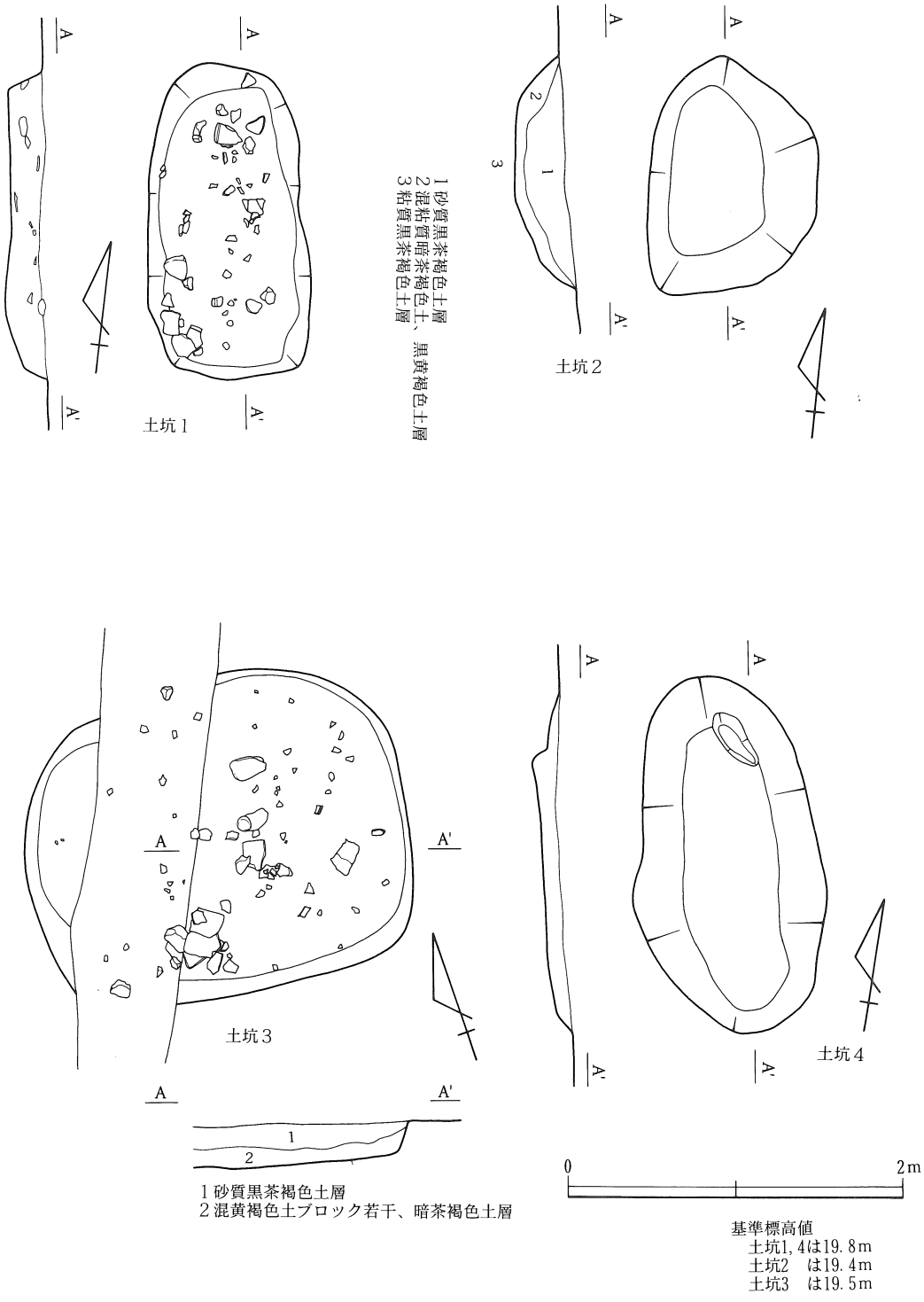
溝（第179図、第180図）

北Ⅱ区から伸びる溝６条を検出した。これらのうち４条の溝は本調査区の東端から西端まで確認でき、さらに北西方向へ伊呂波川に沿って延長するものと考えられる。

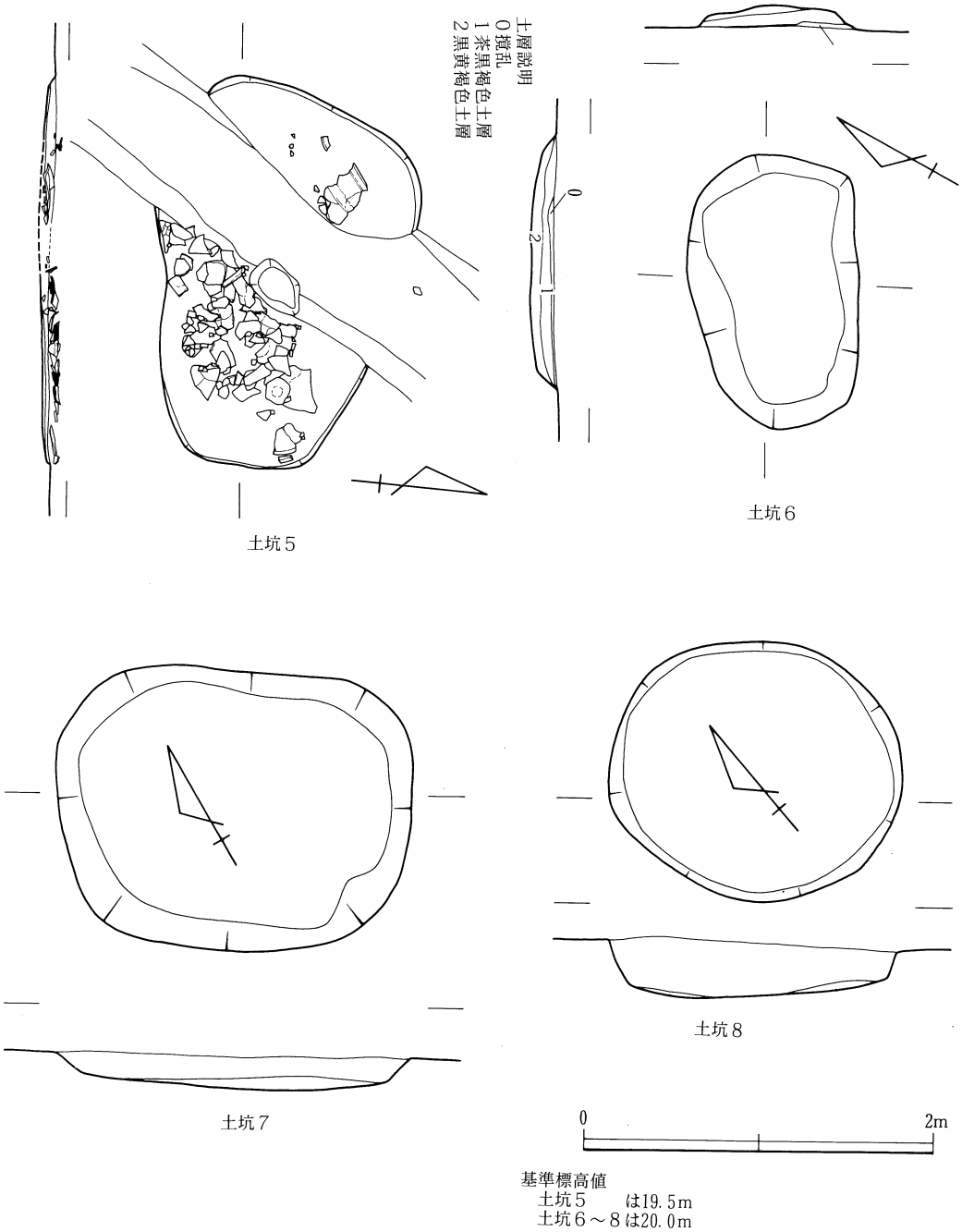
溝１は長さ75ｍを確認した。並行して伸びる横２・４を切っている。幅は1.2ｍ～２ｍで、深さは１ｍほどである。上半部は緩やかに立ち上がるが底面は狭くなる。溝内の堆積土は最下層に還元土がみられた。



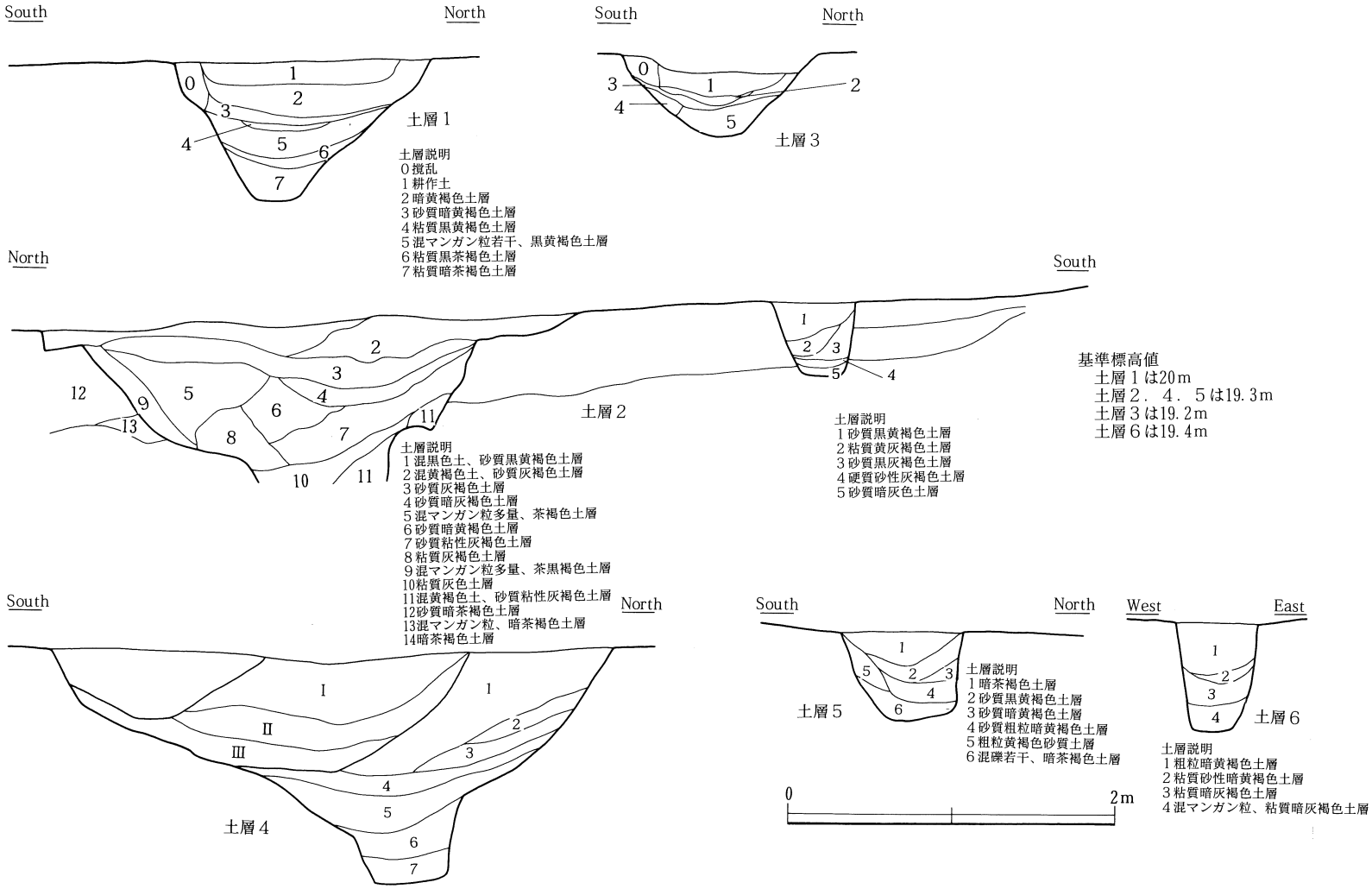
第176図　尾畑遺跡北Ⅲ区遺構分布図



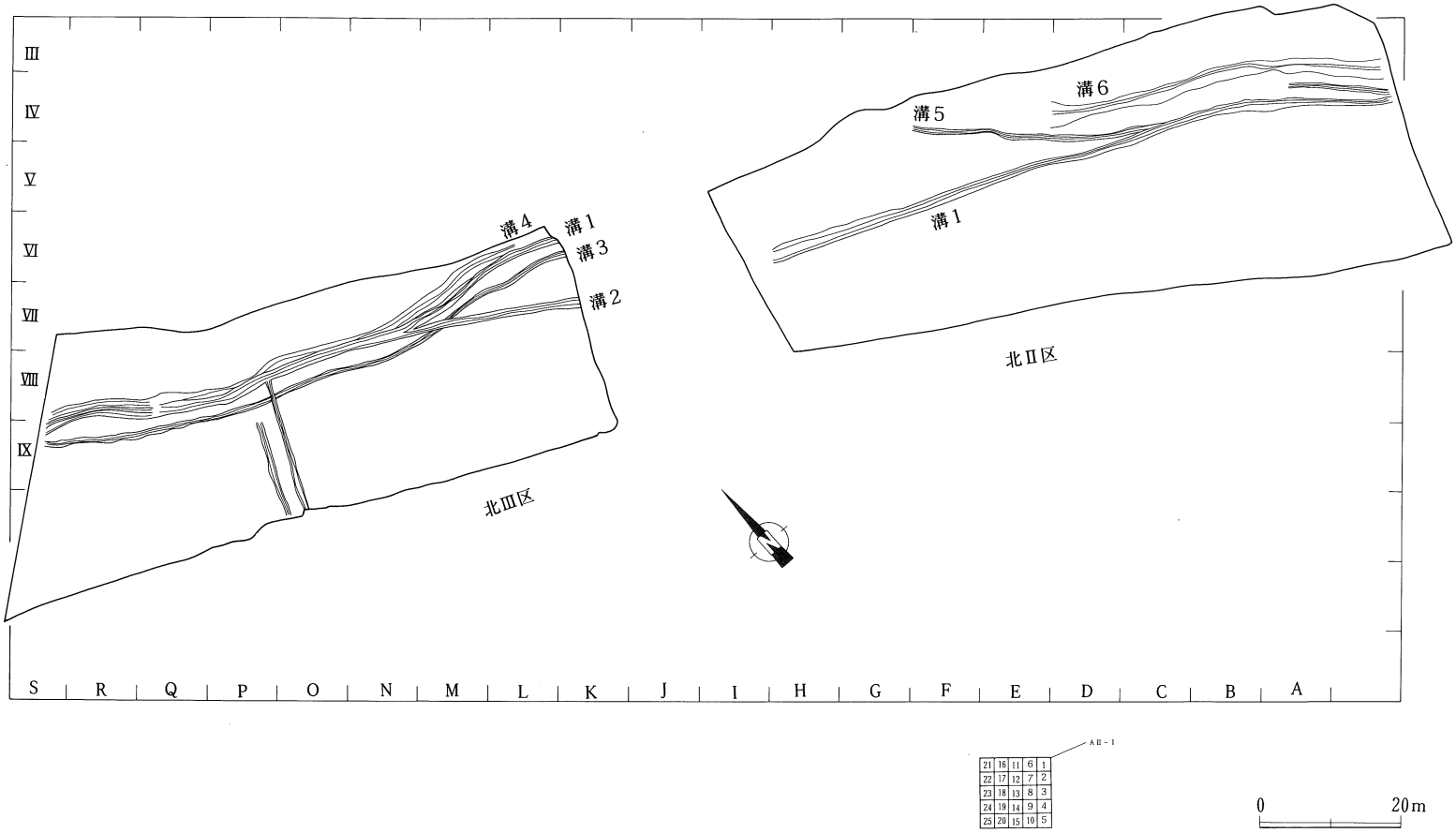
第177図　尾畑遺跡北Ⅲ区土坑実測図(1)



第178図　尾畑遺跡北Ⅲ区土坑実測図(2)



第179図　尾畑遺跡北Ⅲ区溝土層断面図



第180図　尾畑遺跡北Ⅲ区溝相関図

層に還元土がみられた。

溝２は調査区東辺から北西25ｍで溝１に切られており、その延長はこれと重なるため不明である。幅は0.8ｍ～１ｍ、深さは東端の**土層１**の位置でみると0.5ｍほどあり、覆土は下半部が還元層となっている。

溝３は東端部では溝１・２の間に位置するが途中で溝２と溝５に切られている。長さは80ｍである。幅は0.6ｍ～１ｍで、深さは0.45ｍと浅い。溝の横断面は矩形を呈している。この溝の中央部で出土した８世紀後半の須恵器高台付坏２点は溝の時期を示している。

溝４は調査区の中では最も北に設置された溝である。確認長72ｍ、幅は２ｍ前後であるが、溝の南壁の大半は重複する溝１に切られている。**土層４**の位置で溝の横断面を観察すると、深さは1.4ｍほどである。壁の立ち上がりは上半部は緩やかであるが、底面付近では断面形が矩形となる。

溝５は調査区中央部に位置する溝であり、溝１に連接する。長さは溝１との連接点から調査区南辺までの19ｍを確認した。幅は0.5ｍ～１ｍであり、深さは0.3ｍ～0.7ｍである。**土層６**の位置でみると、断面形は高い逆台形状を呈する。底面は北に向かって傾斜する。

溝１～４はすべて北西に向かって緩やかな傾斜をもつ。北Ⅱ区の溝との関係は北Ⅱ区溝１と北Ⅲ区溝２は連続すると考えられるが、北Ⅱ区溝４は北Ⅲ区の溝１・３・４のいずれかと連続する可能性があるものの明確ではない。北Ⅱ、Ⅲ区では複数の溝がほぼ同一の場所に設けられているが、このことは導水など機能に規制された位置が確保され、結果的に溝が重複する形で示されたものと理解できる。また溝５は溝３を切って構築されており、溝１に合流する排水路と考えられる。

出土遺物

溝３出土須恵器（第181図９・10）

高台付坏２点が出土した。９は体部が直線的に立ち上がり、口縁部で短く外反する。高台はやや外傾して付く。器面の調整は横ナデで、底部は回転ヘラ切り後、ナデが施されている。口径12.4cm、4.5cmの大きさである。胎土・焼成共に良好であり、色調は灰褐色する。10は体部がやや丸みを帯びて立ち上がる。高台はやや長めで、下端が肥厚気味である。調整は９と同様に体部の横ナデ、底部回転ヘラ切り後のナデが観察できる。口径12.5cm、4.8cmの大きさである。胎土には細砂を含み、焼成は良好であり暗灰色を呈する。

土坑出土遺物（第181図11～13、第182図、第183図）

土坑１から出土した遺物については３点を図示した（第13図11～13）。

11は甕の口縁部～胴上半部破片である。口縁部はやや直立し直下に突帯が巡る。内外面に斜方向のハケ目調整後、ナデで平滑に仕上げている。胎土に角閃石・長石を多く含み、焼成は良好で明赤褐色を呈す。12は甕の口縁部～胴上半部破片である。口縁部はやや内湾し、直下に突

帯が巡る。復元口径27.8cmである。調整は口縁部に横方向のナデ、胴部は外面に斜・縦方向のハケ目調整後、ナデで平滑に仕上げている。突帯下には横方向のハケ目調整、ナデがみられる。内面はナデ調整である。胎土に角閃石・長石を含み、焼成は良好で赤褐色を呈す。13は底部破片である。底径8.2cmで器厚は厚く、平底をなす。器面は摩滅が著しく調整不明である。胎土に角閃石・長石を含み、焼成は良好で赤褐色を呈す。

土坑3から出土した遺物については7点を図示した（第182図）

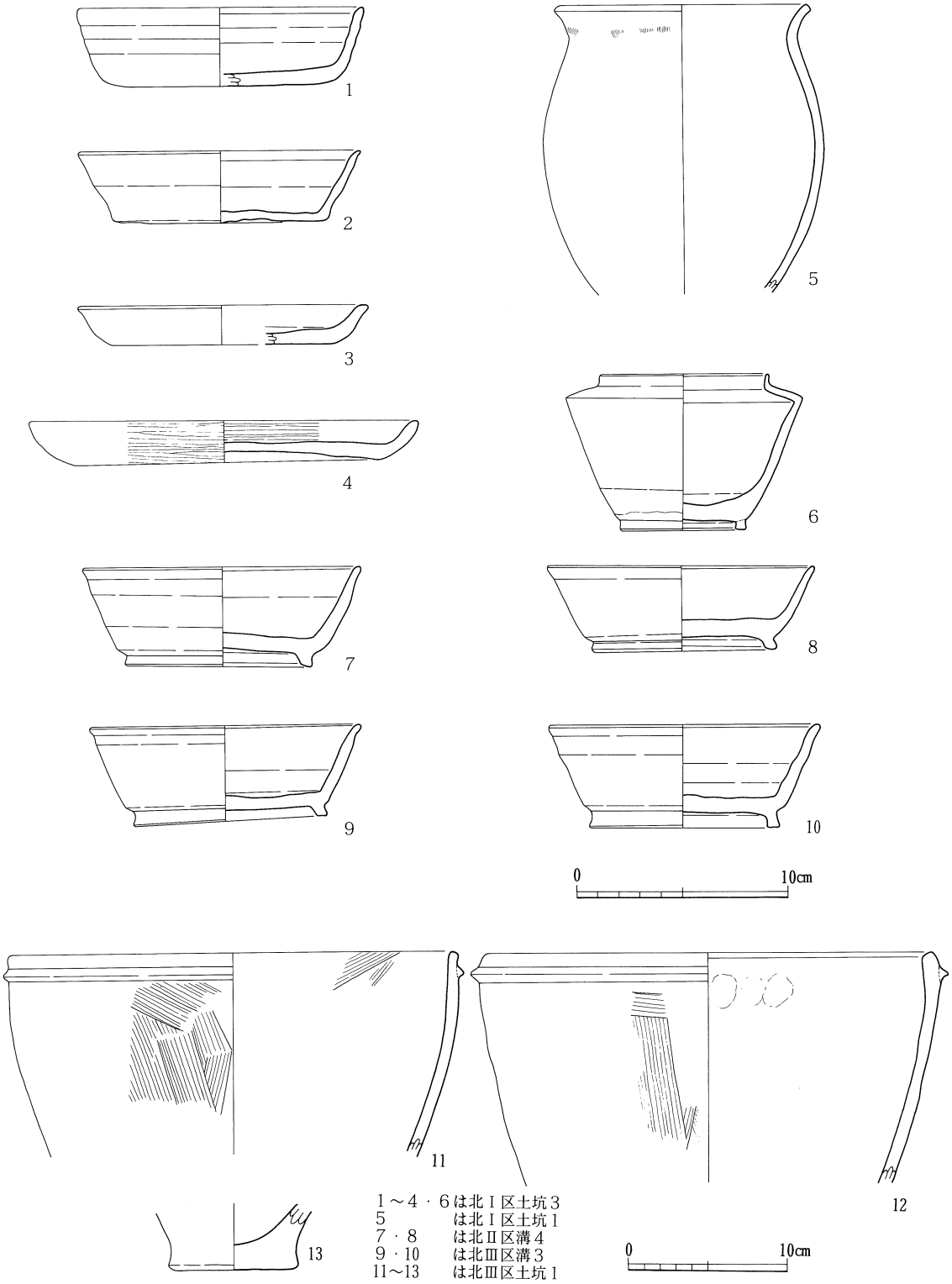
1～4は6は甕である。1は口縁部がやや外傾し、屈曲部に突帯が巡る。口縁端部外縁と突帯に刻目が付く。2は直立気味の口縁部をもち、直下に刻目突帯が巡る。3は口縁端部がやや窪む平坦面をなす。突帯は口縁部下に巡る。4は口縁端部がやや窪む平坦面をなす。突帯は口縁部下に巡る。1～4の調整は器面が摩滅し明確でないが、口縁部に横方向のナデ、胴部外面に、縦方向のハケ目調整、ナデを施している。6は底部破片で、平底をなす。外面に縦方向のハケ目調整が残る。胎土に角閃石・長石を含み、焼成は良好で黄褐色を呈す。

5・7は壺の破片である。5は肩部と頸上部に突帯が巡る。7は底部で平底をなす。胴部は大きく広がるものと思われる。器面の調整は明確でないが、5はヘラミガキの痕跡が窺える。胎土に角閃石・長石などを含み、焼成は良好で黄褐色を呈す。

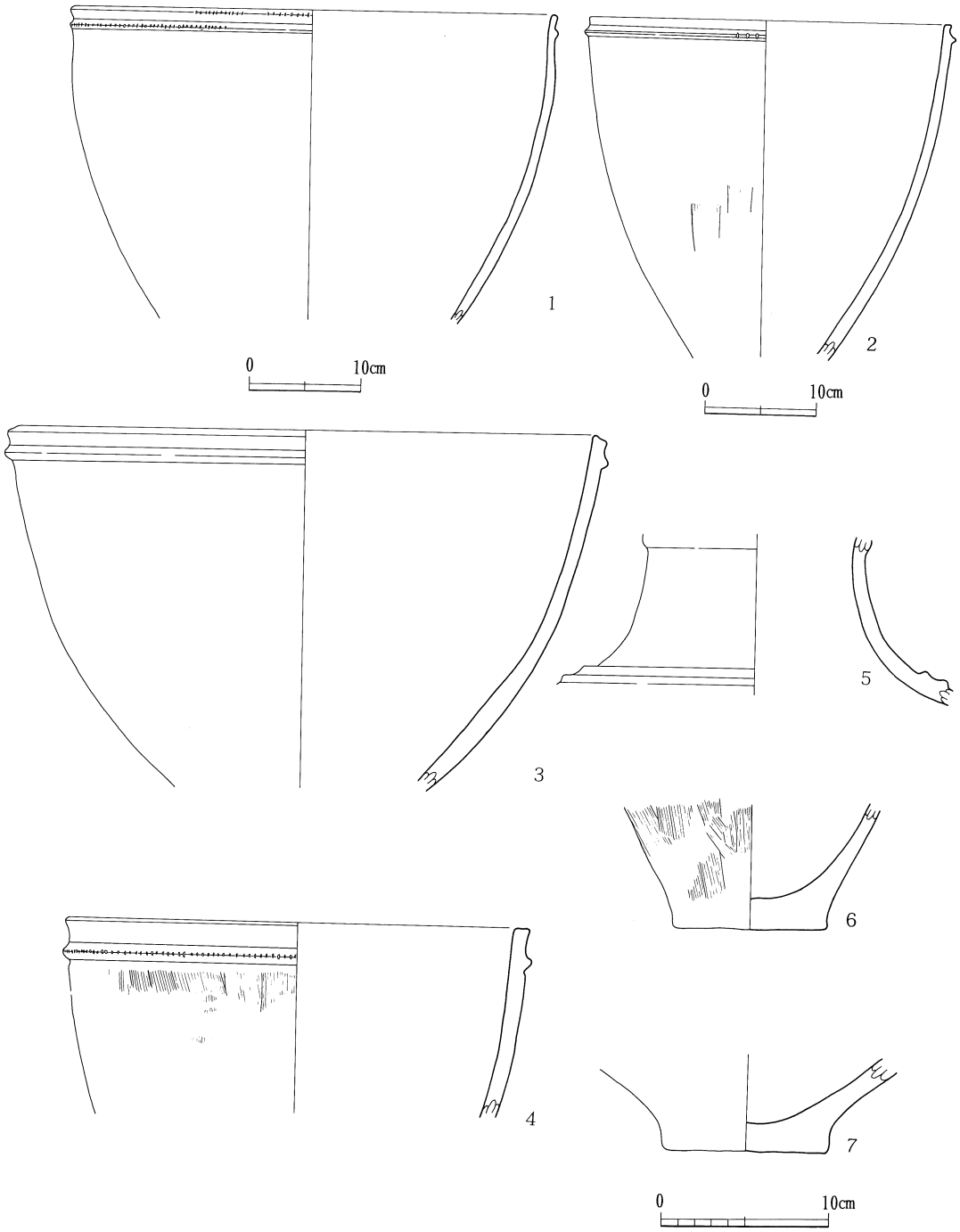
土坑5から出土した遺物については7点を図示した（第15図）。

1・2・6・7は壺の破片である。1は口縁部が緩く外反し、肩部と頸部に突帯が巡る。口縁部両端に刻目が確認できるが、突帯では器面の摩滅のため不明である。調整は不鮮明であり、僅かに縦方向のハケ目調整が残る。2は頸上部に段が付く。肩部は張ると思われる。6は頸部が細まり口縁部との境で段が付く。7は底部で平底をなす。壺は胎土に角閃石・長石などを多く含む。焼成は良好であり、色調は黄褐色を基調とする。3～5は甕の口縁部～胴上半部の破片である。3は口縁部がやや外傾し、屈曲部に突帯が巡る。口縁端部外縁と突帯に刻目が付く。4は口縁端部が平坦で、直下に刻目突帯が巡る。5は口縁端部がやや肥厚する。突帯は口縁部下に巡る。3～5の調整は器面が摩滅し明確でないが、口縁部に横方向のナデ、胴部外面に、縦方向のハケ目調整、ナデを施している。胎土・焼成・色調については共通しており、角閃石を多く含む胎土は焼成が良好であり、色調は黄褐色を基調とする。

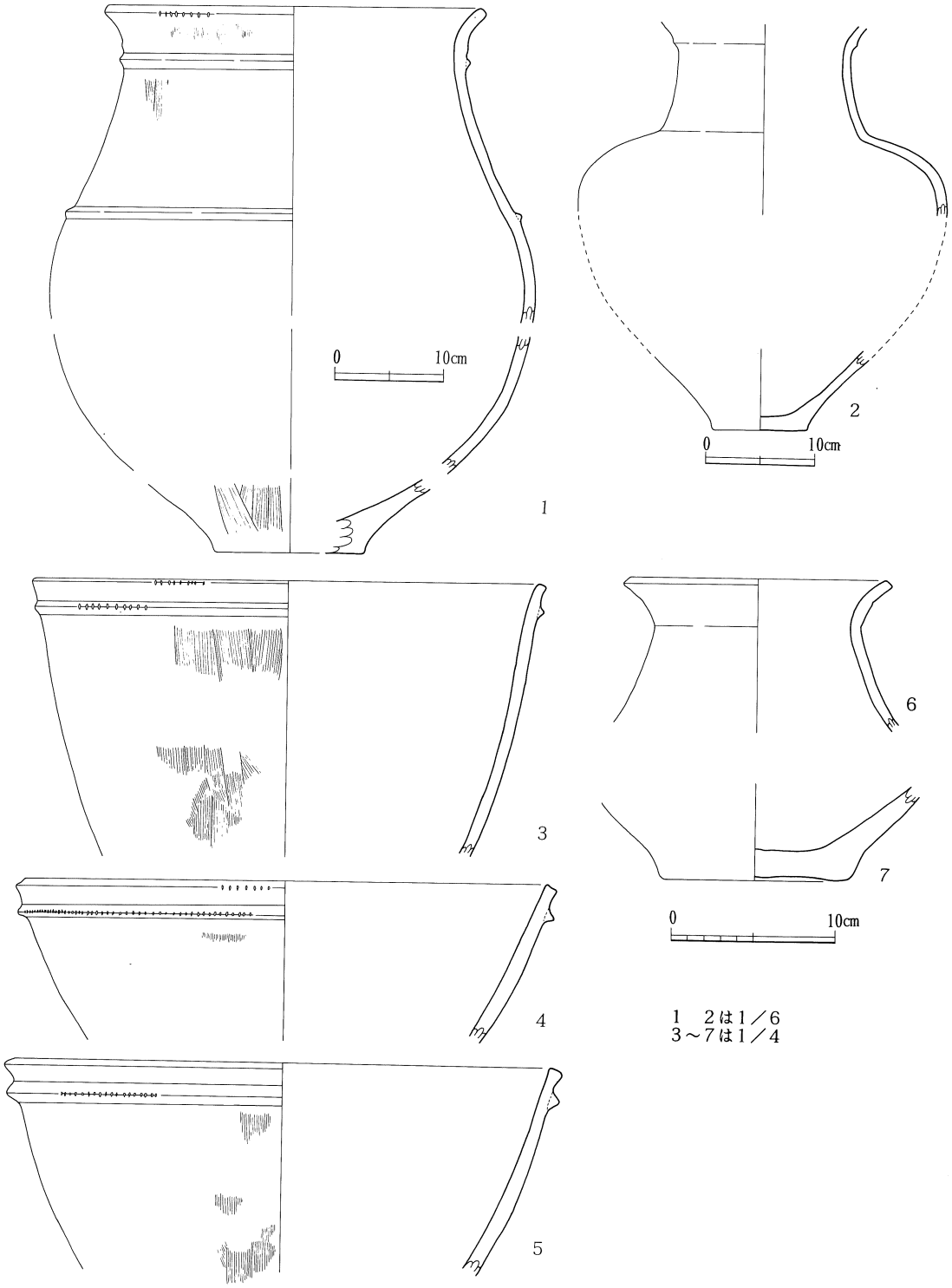
土坑から出土した土器はほぼ弥生時代前期後半の時期を示すものである。



第181図　尾畑遺跡北Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ区出土遺物実測図（弥生～奈良）



第182図　尾畑遺跡北Ⅲ区土坑３出土遺物実測図



第183図　尾畑遺跡北Ⅲ区土坑5出土遺物実測図

表9　尾畑遺跡出土須恵器観察表

（単位：cm）

図版番号	器種	口径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	残存度	出土地	備考
46－5	坏	13.6	横ナデ 底部回転ヘラ削り	白色細砂・角閃石 長石。不良。淡灰色	2／3	南Ⅰ区6号竪 流れ込み	
46－6	坏	14	横ナデ	白色細砂・角閃石 長石。不良。灰褐色	1／1	南Ⅰ区6号竪 流れ込み	
46－7	蓋	18.2	横ナデ・天井部回転 ヘラ削り後、ナデ	白色細砂・石英 長石。不良。暗灰色	1／2	南Ⅰ区6号竪 流れ込み	
46－8	高台付坏	13 5.1	横ナデ	白色細砂・石英 良好。明灰色	小破片	南Ⅰ区6号竪 流れ込み	
46－9	鉢	11.7 5.3	横ナデ	角閃石・長石。 良好。黒灰色。	1／2	南Ⅰ区6号竪 流れ込み	
63－1	蓋	14.8 1.5	横ナデ・天井部回転 ヘラ削り後、ナデ	白色細砂・石英 長石。良好・灰色	1／4	南Ⅰ区GⅦ	焼き歪み
63－2	蓋	14.8 2.4	横ナデ・天井部回転 ヘラ削り後、つまみ付近ナデ	石英・長石 良好。青灰色	ほぼ完形	表採	
63－3	蓋	14.8 2.4	横ナデ・天井部回転 ヘラ削り後、ナデ	細砂。不良 一部半還元。灰褐色	1／2	南Ⅰ区GⅦ9	
63－4	蓋	16.8 3.1	横ナデ・天井部回転 ヘラ削り後、ナデ	角閃石・石英。不良 淡灰褐色	1／3	南Ⅰ区GⅦ	
63－5	蓋	12.8 2.4	横ナデ・天井部回転 ヘラ削り後、ナデ	角閃石。不良 淡灰褐色	1／4	南Ⅰ区GⅦ	
63－6	蓋	16.5 2.9	横ナデ・天井部回転 ヘラ削り後、ナデ	白色細砂・角閃石 長石。不良。茶褐色	完形	南Ⅰ区EⅦ14	
63－7	蓋	12.8 2.8	横ナデ・天井部回転 ヘラ削り後、ナデ	白色細砂。良好 良好。暗灰褐色	1／2	南Ⅰ区HⅦ5	
63－8	蓋	14.5 2.2	横ナデ 自然釉	角閃石。不良 暗灰褐色	完形	南Ⅰ区NⅦ4	焼き歪み
63－9	蓋	15.2 2.1	横ナデ・天井部回転 ヘラ削り後、つまみ付近ナデ	白色細砂・角閃石 長石。良好。灰褐色	1／4	南Ⅰ区GⅦ20	焼き歪み
63－10	蓋	17.6 2.0	横ナデ・天井部回転 ヘラ削り後、ナデ	白色細砂。やや不良 淡灰褐色	2／3	南Ⅰ区GⅦ4	
63－11	蓋	12.8	横ナデ・天井部回転 ヘラ削り後、ナデ	白色細砂。良好 淡灰褐色	1／4	南Ⅰ区GⅦ3	
63－12	蓋	16.3	横ナデ・天井部回転 ヘラ削り後、ナデ	白色細砂。良好 暗灰色	1／4	南Ⅰ区GⅦ8	
63－13	蓋	16.5	横ナデ・天井部回転 ヘラ削り後、ナデ	角閃石・石英 良好。暗灰色	1／4	南Ⅰ区GⅦ8	
63－14	蓋	15.2	横ナデ・天井部回転 ヘラ削り後、ナデ	石英。通有 灰褐色	1／3	南Ⅰ区GⅦ18	

図版番号	器種	口径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	残存度	出　土　地	備　考
63－15	蓋	16.7	横ナデ・天井部回転 ヘラ削り後、	白色細砂・角閃石。 やや不良。灰色	1／3	南Ⅰ区GⅦ10	
63－16	蓋	16.8	横ナデ・天井部回転 ヘラ削り後、丁寧なナデ	白色細砂・角閃石A 良好。青灰色	1／4	南Ⅰ区GⅦ23	
63－17	蓋	14.0 2.5	横ナデ・天井部回転 ヘラ削り後、丁寧なナデ	細砂・角閃石A 通有。青灰色	1／3	南Ⅰ区GⅦ	
63－18	蓋	18.5 2.5	横ナデ・天井部回転 ヘラ削り後、ナデ	角閃石。やや不良 淡灰色	1／5	南Ⅰ区GⅦ3	
63－19	蓋	18.5 2.5	横ナデ・天井部回転 ヘア削り後、ナデ	角閃石。通有 明灰色	1／4	南Ⅰ区HⅦ25	
63－20	蓋	14.4	横ナデ・天井部回転 ヘラ削り後、ナデ	角閃石。石英 やや不良。淡灰色	1／5	南Ⅰ区表採	
63－21	蓋	14.9	自然釉の為、不明 ヘラ削り後、ナデ	角閃石。良好 やや不良。淡灰色	1／4	南Ⅰ区EⅦ13	
63－22	蓋	15.4	横ナデ・天井部回転 ヘラ削り後、ナデ	角閃石。石英。良好 良好。黒灰色	1／3	南Ⅰ区ピット	
63－23	蓋	17.2	横ナデ・天井部回転 ヘラ削り後、ナデ	角閃石・長石。 やや不良。淡灰褐色	1／5	南Ⅰ区GⅦ	
63－24	蓋	15.2	横ナデ・天井部回転 ヘラ削り後、ナデ	角閃石。不良 明灰褐色	1／5	南Ⅰ区HⅦ17	
63－25	蓋	15.0	横ナデ・天井部回転 ヘラ削り後、ナデ	角閃石。不良 淡灰褐色	1／4	南Ⅰ区EⅦ24	
63－26	蓋	14.0	横ナデ・天井部回転 ヘラ削り後、ナデ	角閃石。石英。良好 黒灰色	1／4	南Ⅰ区表採	
63－27	蓋	11.4	自然釉の為、不明 ヘラ削り後、ナデ	白色細砂・角閃石 不良。茶灰色	1／2	南Ⅰ区HⅦ19	
64－ 1	高台付坏	9.9 3.0	横ナデ	白色細砂・角閃石 通有。灰色	1／3	南Ⅰ区表採	
64－ 2	高台付坏	9.8 4.9	横ナデ、底部回転 ヘラ切り後ナデ	角閃石。通有 灰褐色	1／2	南Ⅰ区HⅦ25	
64－ 3	高台付坏	11.1 4.3	横ナデ、底部回転 ヘラ切り後ナデ	角閃石。通有 明灰色	ほぼ完形	南Ⅰ区表採	
64－ 4	高台付坏	13.0 4.2	横ナデ、底部回転 ヘラ切り後ナデ	角閃石。やや不良 明灰色	1／2	南Ⅰ区EⅦ9	
64－ 5	高台付坏	12.0 4.7	横ナデ、底部回転 ヘラ切り後ナデ	白色細砂・角閃石。 不良。茶褐色	1／5	南Ⅰ区HⅦ9	
64－ 6	高台付坏	13.1 4.7	横ナデ、底部回転 ヘラ切り後ナデ	白色細砂。不良 茶褐色	1／3	南Ⅰ区FⅦ5・6	
64－ 7	高台付坏	12.5 4.1	横ナデ、底部回転 ヘラ切り後ナデ	白色細砂。通有 灰褐色	1／3	南Ⅰ区GⅦ19	

図版番号	器種	口径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	残存度	出土地	備考
64－8	高台付坏	13.3 4.3	横ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ	角閃石。良好 明灰色	1／6	南Ⅰ区表採	
64－9	高台付坏	13.6 4.3	横ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ	角閃石。良好 暗灰色	2／3	南Ⅰ区FⅦ21	
64－10	高台付坏	14.4 4.3	横ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ	白色細砂。通有 明灰色	1／5	南Ⅰ区GⅦ16	
64－11	高台付坏	14.4 4.6	横ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ	角閃石・長石。 良好。灰色	1／5	南Ⅰ区GⅦ16	
64－12	高台付坏	14.7 4.2	横ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ	白色細砂。良好 淡灰色	1／4	南Ⅰ区FⅦ16	
64－13	高台付坏	13.6 5.5	横ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ	白色細砂。不良 半還元。暗茶褐色	1／3	南Ⅰ区GⅦ	
64－14	坏	11.9 (4.6)	横ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ	白色細砂・角閃石 通有。灰褐色	1／3	南Ⅰ区EⅦ12	
64－15	坏	12.3 (3.7)	横ナデ、底部不詳	角閃石・長石 通有。灰色	1／5	南Ⅰ区EⅦ8	
64－16	坏	12.4 (2.9)	横ナデ、底部不詳	白色細砂。不良 淡灰色	1／3	南Ⅰ区EⅦ19	
64－17	坏	13.0 (4.3)	横ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ	角閃石。不良 淡茶褐色	1／3	南Ⅰ区EⅦ24	
64－18	坏	13.1 4.2	横ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ	角閃石。不良 淡灰褐色	1／5	南Ⅰ区GⅦ3	
64－19	坏	13.2 (4.0)	横ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ	角閃石。不良 淡灰色	1／4	南Ⅰ区GⅦ9	
64－20	坏	13.4 3.4	横ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ	白色細砂・角閃石 不良。淡灰褐色	3／4	南Ⅰ区EⅦ25	
65－1	坏	13.8 (3.8)	横ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ	赤色砂粒・角閃石 不良。淡灰褐色	1／5	南Ⅰ区EⅦ25	
65－2	坏	13.8 (3.6)	横ナデ・ロクロ痕顕著、底部回転ヘラ切り後ナデ	角閃石。良好 暗灰色	1／3	南Ⅰ区表採	
65－3	坏	14.3 (3.6)	横ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ	角閃石・長石 不良。淡白灰色	2／3	南Ⅰ区表採	
65－4	坏	13.9 4.4	横ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ	角閃石。不良 淡灰褐色	1／2	南Ⅰ区GⅦ10	
65－5	坏	14.2 4.2	横ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ	白色細砂・角閃石 不良。灰色	1／3	南Ⅰ区EⅦ	
65－6	坏	14.0 4.0	横ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ	角閃石。不良 淡灰色	1／4	南Ⅰ区EⅦ14	

図版番号	器種	口径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	残存度	出土地	備考
65－7	坏	14.2 4.4	不詳、底部回転 ヘラ切り後ナデ	角閃石・長石 不良。灰色	1／3	南Ⅰ区GⅦ3・4	
65－8	坏	14.0 4.5	横ナデ、底部回転 ヘラ切り後ナデ	角閃石。やや不良 灰褐色	1／5	南Ⅰ区GⅦ3	
65－9	埦	17.4 6.3	横ナデ、底部回転 ヘラ切り後ナデ	細砂。良好 自然釉、灰色	1／2	南Ⅰ区表採	
65－10	埦	13.0 5.6	横ナデ、底部ナデ	白色細砂。通有 自然釉、暗灰色	1／5	南Ⅰ区EⅦ5	
65－11	埦	14.5 5.1	横ナデ、底部ナデ	白色細砂。通有 暗灰色	1／5	南Ⅰ区EⅦ5	
65－12	埦	15.3 5.9	横ナデ、底部ナデ	白色細砂。通有 暗灰色	1／3	南Ⅰ区EⅦ14	
65－13	埦	17.2 6.1	横ナデ、底部ナデ	白色細砂・角閃石 通有。暗灰色	1／2	南Ⅰ区EⅦ13	
65－14	埦	18.2 6.1	横ナデ、底部ナデ	白色細砂。不良 淡茶褐色	2／3	南Ⅰ区表採	
65－15	Ⅲ	13.0 (1.8)	横ナデ、底部ナデ	白色細砂・通有 暗灰色	1／4	南Ⅰ区EⅦ13	
65－16	Ⅲ	13.2 2.4	横ナデ、底部回転 ヘラ切り後ナデ	白色細砂。通有 暗灰色	1／2	南Ⅰ区DⅦ23	
65－17	Ⅲ	13.8 (2.1)	横ナデ、底部回転 ヘラ切り後ナデ	白色細砂・角閃石 通有。明灰色	1／4	南Ⅰ区NⅥ	
65－18	Ⅲ	13.9 (2.2)	横ナデ、底部回転 ヘラ切り後ナデ	白色細砂・角閃石 不良。淡灰褐色	1／4	南Ⅰ区EⅦ19	
65－19	Ⅲ	14.2 (2.3)	横ナデ、底部回転 ヘラ切り後ナデ	白色細砂。通有 灰褐色	1／4	南Ⅰ区GⅦ20	
65－20	Ⅲ	15.2 (2.0)	横ナデ、底部回転 ヘラ切り後ナデ	白色細砂。不良 茶褐色	1／3	南Ⅰ区GⅦ20	
65－21	Ⅲ	15.5 (2.5)	横ナデ、底部回転 ヘラ切り後ナデ	砂粒微量。良好 灰色	1／3	南Ⅰ区表採	
181－6	小型 短頸壺	7.7 7.3	横ナデ ヘラ切り後ナデ	細砂・黒色粒・雲母 角閃石。良好。灰褐色	口縁大半 欠失	北Ⅰ区土坑3	
181－7	高台 付坏	12.4 4.0	横ナデ、底部回転 ヘラ切り後ナデ	石英・角閃石 良好。灰褐色	口縁一部 欠失	北Ⅱ区溝4	
181－8	高台 付坏	13.0 4.6	横ナデ、底部回転 ヘラ切り後ナデ	白色細砂・角閃石 良好。黒灰色	完形	北Ⅱ区溝4	
181－9	高台 付坏	12.4 4.5	横ナデ、底部回転 ヘラ切り後ナデ	白色細砂、自然釉 良好。灰褐色	ほぼ完形	北Ⅲ区溝3	
181－10	高台 付坏	12.5 4.8	横ナデ、底部回転 ヘラ切り後ナデ	細砂。通有 暗灰褐色	口縁1/2 欠失	北Ⅲ区溝3	

表10 尾畑遺跡出土土師器観察表

（単位：cm）

図版番号	器種	口径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	残存度	出土地	備考
46－3	皿	18.0	内外面ミガキ	白色細砂・角閃石 良好。赤褐色	小破片	南Ⅰ区6号竪 流れ込み	
46－4	坏	12.8	摩滅の為不詳	白色細砂・角閃石 長石。良好。赤褐色	小破片	南Ⅰ区6号竪 流れ込み	
66－1	蓋	12.7 3.1	器面の荒れ顕著 調整不詳	白色細砂・角閃石 通有。赤橙色	口縁大半 欠失	南Ⅰ区HⅦ7	
66－2	蓋	13.9 2.5	天井部回転ヘラ 削り後、ナデ	白色細砂・角閃石 通有。赤橙色	1／4	南Ⅰ区HⅦ	
66－3	蓋	15.3 2.7	天井部回転ヘラ 削り後、ナデ	白色細砂・角閃石 通有。赤橙色	1／2	南Ⅰ区GⅦ16	
66－4	蓋	15.3 2.7	内外面にミガキ	白色細砂・角閃石 不良。赤橙色	1／2	南Ⅰ区GⅦ3・4	
66－5	蓋	18.6 3.1	器面の荒れ顕著 調整不詳	白色細砂・角閃石 不良。淡赤橙色	2／3	南Ⅰ区GⅦ22	
66－6	蓋	14.6	内外面にミガキ天井部回転ヘラ削り後、つまみ周辺ナデ	角閃石。良好 良好。明褐色	つまみを 欠失	南Ⅰ区土坑	
66－7	蓋	15.5	器面の荒れ顕著 調整不詳	白色細砂・角閃石 不良。淡赤橙色	1／3	南Ⅰ区KⅦ4	
66－8	蓋	13.8	一部にミガキを残す	白色細砂・角閃石 黒曜石。通有。赤橙色	1／4	南Ⅰ区GⅦ	
66－9	蓋	(13.8)	器面の荒れ顕著 調整不詳	石英・角閃石 通有。赤褐色	1／5	南Ⅰ区EⅦ8	
66－10	高台 付坏	11.3 3.4	器面の荒れ顕著 調整不詳	白色細砂・角閃石 脆弱・不良。赤橙色	2／3	南Ⅰ区G9	
66－11	高台 付坏	12.4 4.5	器面の荒れ顕著 調整不詳	白色細砂・角閃石 脆弱・不良。黄橙色	1／5	南Ⅰ区EⅦ8	
66－12	高台 付坏	13.5 4.9	器面の荒れ顕著 調整不詳	白色細砂・角閃石 通有。赤橙色	2／3	南Ⅰ区GⅦ3	
66－13	高台 付坏	14.0 4.2	器面の荒れ顕著 調整不詳	白色細砂・角閃石 石英。通有。赤褐色	1／2	南Ⅰ区GⅦ8	
66－14	高台 付坏	14.2 3.8	ロクロ整形痕	石英・角閃石 通有。黄褐色	2／3	南Ⅰ区表採	
66－15	坏	13.4 3.5	底部回転ヘラ切り痕 調整不詳	石英・角閃石 通有。黄褐色	1／2	南Ⅰ区EⅦ	
66－16	坏	13.3 4.2	底部回転ヘラ切り痕 調整不詳	長石・角閃石・赤色粒 良好。明褐色	1／4	南Ⅰ区	
66－17	坏	13.6 4.0	底部回転ヘラ切り痕 調整不詳	石英・角閃石 良好。明赤褐色	口縁4/5 欠失	南Ⅰ区	

図版番号	器種	口径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	残存度	出土地	備考
66－18	坏	13.3 4.3	ナデ調整 器面の荒れ顕著	石英・角閃石 良好。明赤褐色	1／4	南Ⅰ区	
66－19	坏	13.4 4.2	底部回転ヘラ切り後 ナデ	細砂・角閃石 良好。赤褐色	口縁一部 欠失	南Ⅰ区	
66－20	坏	14.0 4.4	底部回転ヘラ切り後 ナデ	石英・角閃石 通有。淡赤褐色	口縁大半 欠失	南Ⅰ区GⅦ3	
66－21	坏	14.2 3.7	底部回転ヘラ切り後 ナデ・調整不詳	石英・角閃石 通有。淡赤褐色	1／2	南Ⅰ区GⅦ3	
66－22	坏	14.8 3.3	内外面にヘラミガキ	石英・角閃石 通有。赤橙色	1／4	南Ⅰ区GⅦ8・9	
67－ 1	坏	14.9 4.5	調整不詳	石英・長石・角閃石 通有。淡赤褐色	1／4	南Ⅰ区GⅦ3	
67－ 2	坏	14.7 3.5	底部回転ヘラ切り後 ナデ	石英・角閃石 通有。赤褐色	1／3	南Ⅰ区GⅦ4	
67－ 3	坏	15.3 4.0	ヘラミガキが残る ナデ	石英・角閃石 通有。淡赤褐色	1／5	南Ⅰ区HⅦ	
67－ 4	坏	14.0 4.0	底部回転ヘラ切り後 ナデ	石英・角閃石 良好。黄褐色	1／4	南Ⅰ区ピット	
67－ 5	坏	14.0 3.0	ヘラナデ	白色細砂・石英 角閃石。良好。赤褐色	口縁1/2 欠失	南Ⅰ区KⅦ4	
67－ 6	坏	17.4 5.0	底部回転ヘラ切り後 ナデ・ヘラミガキ	石英・角閃石 良好。赤橙色	口縁大半 欠失	南Ⅰ区表採	
67－ 7	Ⅲ	11.9 2.5	ナデ痕	石英・角閃石 通有。赤橙色	口縁大半 欠失	南Ⅰ区GⅦ	
67－ 8	Ⅲ	12.4 2.6	内外面にヘラミガキ	白色細砂・角閃石 通有。赤橙色	1／5	南Ⅰ区GⅦ16	
67－ 9	Ⅲ	16.7 3.1	内外面にヘラミガキ	石英・長石・角閃石 良好。赤褐色	1／5	南Ⅰ区	
67－10	Ⅲ	18.0 3.2	器面の荒れ顕著 調整不詳	白色細砂・角閃石 通有。暗赤褐色	1／6	南Ⅰ区HⅦ21	
67－11	Ⅲ	18.5 2.1	底部回転ヘラ切り後 ナデ・ヘラミガキ	雲母・角閃石 良好。黄褐色	1／3	南Ⅰ区FⅦ	
67－12	Ⅲ	19.2 1.9	底部回転ヘラ切り後 ナデ・ヘラミガキ	石英・長石・角閃石 良好。赤褐色	ほぼ完形	南Ⅰ区	
67－13	盤	19.6 4.4	器面の荒れ顕著 調整不詳	長石・角閃石 良好。黒褐色	1／4	南Ⅰ区FⅦ19	
67－14	鉢	18.0 5.3	器面の荒れ顕著 調整不詳	石英・角閃石 良好。赤褐色	破片	南Ⅰ区GⅦ	
67－15	鉢 (片口)	21.2 5.3	器面の荒れ顕著 調整不詳	白色細砂・長石 角閃石。良好。赤褐色	1／4	南Ⅰ区GⅦ3	

図版番号	器種	口径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	残存度	出　土　地	備　考
67－16	高坏		横ナデ	石英・角閃石 良好。赤褐色	脚部～ 坏底部	南Ⅰ区	
67－17	小形 埦	7.8 4.2	内外面ナデ、底部 ヘラ切り	石英・角閃石 良好。赤褐色	口縁部～ 体部破片	南Ⅰ区HⅦ	
67－18	製塩 土器		内外面指オサエ 内面布痕	砂粒多量	1／4	南Ⅰ区	
67－19	小形 甕	14.4 16.8	ナデ調整	石英・長石・角閃石 通有。淡赤褐色	1／2	南Ⅰ区JⅦ15	被熱・ 煤付着
181－1	坏	13.0 4.7	横ナデ後、ヘラミガキ 底部回転ヘラ切り	赤色粒・長石 角閃石。良好。赤褐色	1／2	北Ⅰ区土坑3	
181－2	坏	13.2 3.4	横ナデ後、底部回転 ヘラ切り	細砂・角閃石 良好。赤褐色	完形	北Ⅰ区土坑3	
181－3	皿	13.7 1.8	調整不詳 ヘラ切り	赤色粒・長石・角閃石 良好。淡茶褐色	1／3	北Ⅰ区土坑3	
181－4	皿	18.2 2.0	内面回転ヘラミガキ 外面ヘラミガキ	石英・角閃石 良好。赤褐色	完形	北Ⅰ区土坑3	
181－5	甕	16.0	外面縦方向ハケ目 外面ヘラミガキ	長石・石英・角閃石 良好。暗黄褐色	1／3	北Ⅰ区土坑1	

第５章　まとめ

１　尾畑遺跡の掘立柱建物群について

建物について若干の分析を試みるにあたり、次のことをあらかじめ断わっておきたい。まず、建物の群区分は主軸方位をもとに行ったが、ほとんどの建物が北１度～８度西の範囲内で、１度刻みの振れ方を示し、明確な傾向を把握することが困難であった。したがって、建物群の構成は建て替えの明確な建物２・４を基準にして設定した。

建物の時期については柱穴出土の遺物がないため、整地層（遺物包含層）の出土遺物の示す時期幅で考えざるを得なかった。しかも整地層が形成された時期については柱穴覆土と明瞭な差がないため、建物との前後関係は不明確である。結果的には、調査区西半部の建物のほとんどが整地層除去後に検出されたものである。

建物群の構成

主軸方位を基準にして大きく４つの建物群を確認した。

Ⅰ群は建物３、12、16、20の４棟であり、南北60ｍ、東西50ｍの範囲に配置される。総柱の倉庫はないが、建物16は平面形態指数（註１）からみて倉庫の可能性がある。建物規模は建物３が建物群中最大面積の60㎡であり、主屋と考えられる。建物12、20はそれぞれの面積が43㎡、39.4㎡と大型である。調査区内ではやや散在的な建物配置となっている。

Ⅱ群は建物８、17、19、21の４棟が南北50ｍ、東西50ｍの範囲内に構成されている。建物17、19、21の３棟は東西、南北に約10ｍの間隔で配される。建物８は他の３棟と北西32ｍに離れて位置する。屋は建物８・21であり、建物８（35.9㎡）が建物21（25.4㎡）に比べ、規模の上で優位である。倉は建物17、19であり、南北に並んで設けられている。倉についてみると、建物17は10.9㎡と平均的な面積であるが、建物19は40.9㎡の大型の規模をもつ。建物配置は建物17、19、21の３棟がまとまりをもつものである。

Ⅲ群は建物１、２、４ａ、７で調査区北西部にまとまる。建物２（55㎡）、４ａ（57㎡）は南北に並ぶ大型の屋である。倉は建物１の総柱建物であるが、側柱のみ確認された建物７も平面形からみて倉庫であろう。建物配置は建物２と建物４ａは東柱列の柱筋が一致し、建物２の東柱列は建物１の束柱と柱筋の延長上に位置する。それぞれの建物は３ｍ～６ｍの間隔でまとまりをなし、この範囲に限定すれば屋２棟と倉２棟の組み合せを示す。

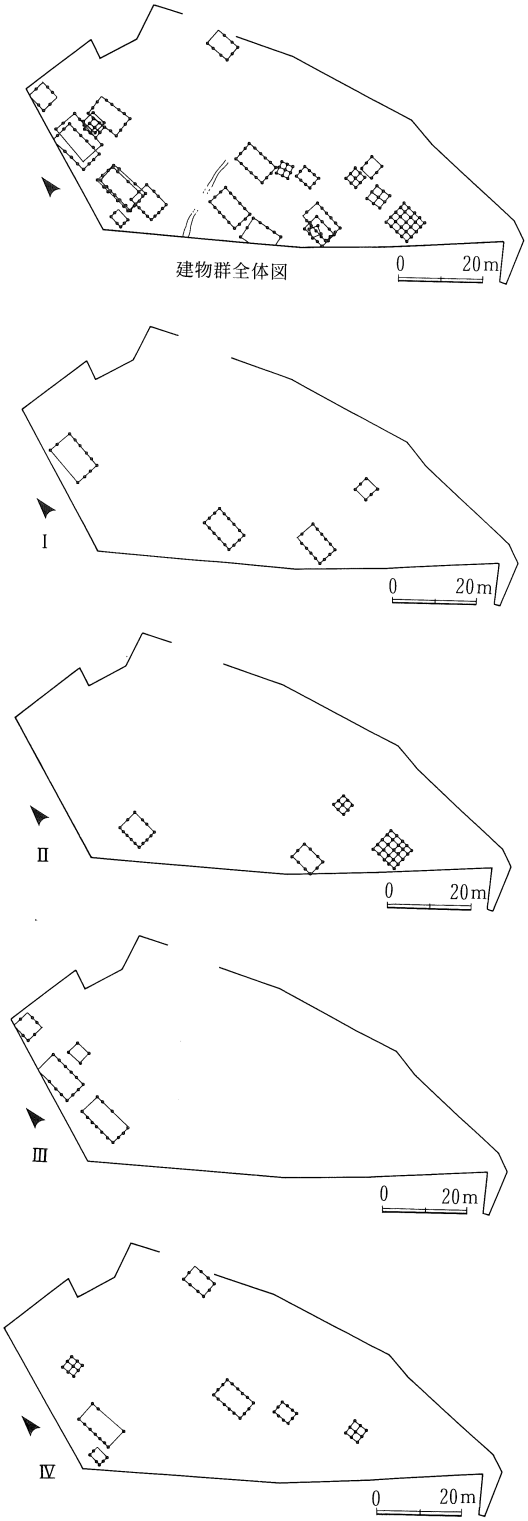
Ⅳ群　建物４ｂ、６、９、10、11、15、18の７棟で構成される。屋は（建物４ｂ、９、10、11、15）の５棟、倉は（建物６、18）２棟となっている。北部の建物はⅢ群建物の建て替えが顕著であった。つまり建物４ｂは建物４ａの建て替えであるが、一部柱穴の共有は同一空間の

連続的な使用を示すものであろう。さらに倉においても建物７→建物６への建て替えが窺える。ここでは建物４ｂを主屋として倉１棟、小型建物１棟が付属する状況がみられる。南部では比較的大規模な建物11（43㎡）を主屋として、これに小規模な屋である建物15（14.7㎡）と倉の建物18が付設する１群が考えられる。建物10は至近地に建物がなく独立した配置となっている。また位置的には段丘縁際の居住範囲東限にあたる。

Ⅰ群～Ⅳ群以外の建物として建物５・13・14・23の５棟がある。主軸方位が他の建物と一致しないため群としてとらえられなかった。

建物配置を屋と倉（註２）の位置関係からみると、屋は50㎡を越える大規模な建物（２～４）が北西に集中し、倉も至近地に付属するなどこの範囲が現状では集落の中心部にあたるものと想定できる。南部の屋は40㎡台以下の比較的小規模なものであり、散在的な配置を示している。僅かに痕跡を残す溝を境に南・北の建物群は明確な格差があるものといえる。倉は建物６・７以外は調査区の南半部にその大半が位置する。建物17・18・19は必ずしも同一時期の存在を示すものではないが、一見並倉風の配置となっている。ここでみられる倉の集中範囲は地形的には有効に利用できる東・南限であり、建物配置に機能性が反映されたことが考えられる。いずれにしてもこの集落内の建物変遷や内容は調査区外となる西部地域の実態が明らかになるまで評価することが難しい。

以上のように建物の集合をⅠ群～Ⅳ群と大まかな群としてとらえたが、その根拠は建物４ａ・ｂの建て替えに伴う主軸の西へのずれである。

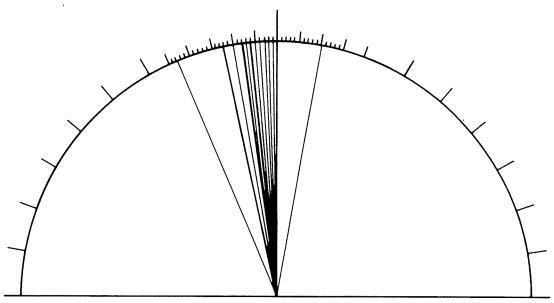


第184図　尾畑遺跡南Ⅰ区掘立柱建物群変遷図

表11　尾畑遺跡南Ⅰ区掘立柱建物一覧表

遺構番号	棟方向	規模	桁行	梁行	面積	種別	平面形態指数	方位
1	(南北)	3×2	4,8	4,7	22,6	総柱倉	98	北5西
2	南北	5×3	10	5,5	55	屋	55	北6西
3	南北	5×3	10	6	60	屋	60	北1西
4a	南北	6×3	10,6	5,4	57	屋	51	北5西
4b	南北	6×3	10,2	5,2	53	屋	51	北6西
5	南北	5×3	8,9	5	44,5	屋	56	北12西
6	南北	2×2	3,4	3,4	11,6	総柱倉	100	北7西
7	南北	(2×2)	3,6	3,1	11,2	(倉)	86	北5西
8	南北	(5×4)	6,9	5,2	35,9	屋	75	北5西
9	南北	(3×2)	3,4	2,6	8,8	屋	76	北8西
10	南北	3×2	6,3	4,2	26,5	屋	67	北7西
11	南北	5×3	8,6	5	43	屋	58	北6西
12	南北	5×3	8,6	5	43	屋	58	北3西
13	(南北)	4×2	8	5,8	46,4	屋	72	北12西
14	南北	2×2	3	3	9	総柱倉	100	北23西
15	南北	3×2	4,6	3,2	14,7	屋	70	北8西
16	南北	2×2	3,8	3,5	13,3	屋	92	北2西
17	南北	2×2	3,4	3,2	10,9	総柱倉	94	北4西
18	南北	2×2	3,8	3,7	14,1	総柱倉	97	北4西
19	南北	4×4	6,6	6,2	40,9	総柱倉	94	北4西
20	南北	5×3	8,2	4,8	39,4	屋	59	北3西
21	南北	3×2	5,9	4,3	25,4	屋	73	北4西
22	南北	1×1	2,2	2,2	4,8	総柱倉	100	北10東

＊面積は柱筋を基準に想定した平面形から算出した。測定値は柱心寸法とする。
＊平面形態指数は梁行／×100



第185図　尾畑遺跡南Ⅰ区掘立柱建物主軸方位図

このことから建物の主軸は時期の下降に伴い西へ偏る傾向を想定した。これを敷衍してさきの群を設定したものである。主軸方位の変化が小幅であったことは集落の形成が短期間に展開していることを物語っており、建物群の変遷が漸移的であった可能性を想定できる。

建物の時期については出土遺物から8世紀中〜後半代におさまるものである。

尾畑遺跡建物群の性格

官衙的な性格を示す要素として大型建物の存在（註3）、和同開寳、焼塩壺の出土、水利の管理機能を具備し、官道沿に位置することなどを指摘できる。

このうち水利に関しては、北区の範囲で検出した溝が伊呂波川の蛇行点となる南区の南端を起点として取水され、川に添って北西に導水されたものであろう。その末端は調査区外となるが、恐らく笠松遺跡の方向へ伸びその一帯の水田に供給されたと考えられる。溝は3〜5条が切り合っており、その設定位置に厳密な規制が窺われる。水路の維持・管理はこの遺跡がもつ主要な役割であり、水田経営の主要な灌漑施設の管理機能を担っていたことを示している。

また、官道「宇佐大路」を軸にこの遺跡の性格を考えると、尾畑遺跡北西端（北Ⅲ区）の約100m下流に伊呂波川の「渡し」があったと推定されている(註4)。またこの場は宇佐宮へ至る経路のうち宇佐の中心部に入る地点にあたり、勅使の祓の場との想定がなされている（註5）。いずれにしても尾畑遺跡が官道沿に位置し、しかも伊呂波川を渡る古代の境界をなす重要な儀礼の場の至近地に立地することは何らかの公的な役割を帯びたものと考えられる。

一方、建物の内容は、その構成に規格性がやや稀薄であり、廂付き建物や柵・溝など区画施設、井戸・土坑を欠如しており、出土遺物に墨書土器、陶器、硯、帯飾りがみられない、といった点は一般的な「官衙」の認定基準（註6）を満たしていない。県内の他の事例（註7）との比較においても、必ずしも官衙的な要素を完備したものとはいえない。

したがって、尾畑遺跡の建物群は公的機能を一部備えた、郷（註8）を単位とする有力層の集落と想定される。また集落の存続が短期間であることは、当時の水田開発・経営に伴う村落

の動態を反映しているものであろう（註９）。

註１　松村恵司「古代稲倉をめぐる諸問題」『文化財論叢』1993年

２　広瀬和雄「畿内の古代集落」『国立歴史民俗博物館経協報告第22集』1989年

３　「古代官衙とその周辺」『古文化談叢』第26集、九州古文化研究会、1991年

４　渋谷忠章「六節久々姥古墳・尾畑遺跡と官道」『宇佐大路』大分県文化財調査報告第八七輯、大分県教育委員会、平成３年３月31日

５　飯沼賢司三節「宇佐への道・中世」『宇佐大路』大分県文化財調査報告第八七輯、大分県教育委員会、平成３年３月31日

６　山中敏史・佐藤興治「一役所遺跡の判定基準－」『古代の役所』 1985年

７　安岐町久末京徳遺跡（後藤一重ほか『久末京徳遺跡』安岐町教育委員会、1991年）、日田市小迫辻原遺跡間（『小迫辻原遺跡』日田市教育委員会、1993年）、日出町会下遺跡（栗田勝弘「会下遺跡」『大分空港道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』1991年）

８　厳密は範囲は確定できないが豊前国宇佐郡葛原郷、高家郷、広山郷のいずれかに該当する。（河野房男古代史『宇佐市史』上巻、宇佐市史刊行会、1075年）

９　舟尾好正「口分田班給の実態に関する初歩的考察」『古代史論集』中、直木孝次郎先生古希記念会、1988年）